
ドラゴンマスター

カナリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンマスター

【Nコード】

N5271D

【作者名】

カナリィ

【あらすじ】

ドラゴンマスターを目指すコアは、一匹の白竜と出会った。幻の白竜が誓う時、真のマスターが現れる。白竜の伝説が、今再びペーシを開く。

登場人物

何千年という時を超え、我は出会った。我が求める、真のドラゴンマスターに。

+ コア・サーノット+

たまたま試験に合格し、マスターズスクールに通う、十五歳の少女。しかしクラスは最低ランクの『クラスD』で、成績はいつも下の下。そんな彼女は、伝説のドラゴンマスターを目指している。

+ ルキア+

長い間、森の奥深くで眠っていた幻の白竜と謳われるドラゴン。

+ セルス・オリーバス+

マスターズスクール1年生で、十五歳にして『クラスS』の特待生の少年。

+ アル+

黒い肌、赤い眼を持つセルスのドラゴン。

+ リラ・クイーン+

マスターズスクール『クラスA』に通う、十七歳の少女。

コアのお姉さんの存在で、セルスやロイとも友達。

+ ロイ・ハンゼル+

マスターズスクール『クラスA』の優等生で、コアとセルスと同年。

+ リース・シュトレゼ +

高等マスターの資格を持ち、マスターズスクールの教師をしている。

+ クレズ +

Sクラスのコアの友達で、セルスのファン。

+ ハイドン・アリクソン +

クリユスの双子の弟で、総予省の省長官している。省長官の中で、最も若い。

+ カルティエ・メルクス +

ハイドンとグレーナとクリユスの幼なじみで、クリユスと一緒に医者をしている。

+ クリユス・アリクソン +

ハイドンの双子の兄。グレーナとカルティエの幼なじみで、フェウスとも知り合い。

今はカルティエと一緒に医師であり、院長として働いている。

+ グレーナ・サーノット +

若くして亡くなった、カルティエ、ハイドン、クリユスの幼なじみ。

+ フェウス・サーノット +

元は凄腕のドラゴンマスター。しかし、世界から姿を消していて、行方不明とされている。

+ ファルス +

ハイドンの下で働くドラゴンマスター。

+ ライク +

ファルスと同じくハイドンの下で働く魔術師。

+ ルアー・バツシュ+

魔術師の男。『G25』。コアとジェラスと共に東の村バンセルに配属される。陽気な性格。

+ ジェラス・クオーネット+

魔術師の男。『K14』。コアとルアー共に東の村バンセルに配属される。全身真っ黒の服装。

+ ブレイズ・コード+

魔術師の男。ジェラスと幼なじみで、結構仲がいい。トレスと共に南の村シュランに配属される。

+ トレス・グリムレナ+

魔術師の女。ブレイズと共に南の村シュランに配属される。男勝りな性格。

第1話 : コア

明るい声や哀しそうな声が響く今日のマスターズスクールは、いつもよりもずつと賑わいを見せていた。

色それぞれの鮮やかなマントが玄関ホールに集い、たくさんの声はしゃいでいる。

春先のこの時期には、とても大きなイベントがある。それが今日行われる、クラスAの昇降発表である。

「ほら、急いで。」

「待ってよ、リラ。」

そんな賑わう音の中をリラが少し甲高い声を上げ、青のマントを揺らして、わざわざコアのいるクラスまで迎えに来ていた。

リラの長い髪が廊下を吹きぬける風に揺れながら、その心の中の期待を表わすように流れていた。

リラが羽織っているマントは青色、その色はクラスによって分けられたもので、青はクラスBを表わす。

「コアとリラじゃないか。」

あまり進まないその足を精一杯動かして、先を行くリラについていく。

そんな私とリラに陽気に声をかけてきたのは、赤のマントを羽織るクラスAのロイだった。

ロイは努力家で、クラスAの中でも成績は常に上位を保っていた。

そんなロイはもう何度も何度もクラスS、

つまりはトップクラスへの昇格試験を受けてきたが、今まで一度も受かった事は無かった。

「どうだった？クラスS？」

リラは心配そうというよりは、面白半分にロイを見た。

ロイはいつもリラをないがしろにしている、リラはそんなロイに敵対心を燃やしていた。

「クラスAに残留だったよ。」

残念そうにそう言ったロイを見て、リラはやっぱりね、と頷いている。

そう言ったものの、クラスSに昇格する人なんてめったにいない。クラスAに残留することだって、十五歳の一年生にしてみればたいしたものだ。

「まあ、セルスぐらいよね。一年生でクラスSに入ったのなんて。」

尊敬するような声でそう言ったのはリラだった。頑固で負けず嫌いなリラでさえ認めてしまう人、それがセルス。

彼は天才マスターだと言われていて、先輩方からも絶大な人気を誇る、優秀なドラゴンマスターの卵だった。

「さあ、もしかしたらマントが変わっているかもね。」

そんな完璧なセルスに敵対心を抱いているロイが、そんなことを言った時ロイの後ろで声がした。

「リラとコア。成績はもう見たのか？」

落ち着いていて、優しく、でも威厳があるようなその声に私の体

が勝手に反応する。

リラがその男を思い浮かべるまでに、私は名前を呼んで抱きついた。

「セルス〜。」

「重い。」

私が抱きつくセルスは白いマントでコアを包んでそう言った。

そんなセルスを睨み付けて、ロイは嫌味を吐いた。

「何だ、セルスじゃないか。君はどうだったの？もしかして、その白いマントが赤く染まるんじゃない？」

その嫌味たっぷりの言葉をリラは聞き逃さなかった。

「いや、残念。先輩方には悪いけど、今回もクラスSでは首席だったから。当分の間はまだ白だと思うけど。」

「あら、さすがセルスね。」

「流石セルス〜！」

そう。彼はこの学園のトップクラスに一年生で昇格し、そのクラスで一度もトップの座を譲った事が無いのだ。

そんなセルスを私とリラが誉めると、ロイはそっぽを向いてどこかへ行ってしまった。

そんなロイの小さな背中を見ながら、リラは気持ちよさそうに笑っている。

セルスは張り付いていた私を引き剥がすと、遠くの方にある掲示板を見ながら言った。

「それより、掲示は見たのか？」

ハツ、と頭の中で完全に忘れていたその言葉が戻ってきた。そうだった。私達は昇格発表を見るためにこのホールまで足を運んだのだ。

「まだだった！いつてくる。」

その言葉に私は急いで掲示板に走る。

人ごみに私の通る道を遮られながらも、私は懸命に掲示板へと駆けた。

セルスの隣でリラが小さな笑いをこぼし、セルスが不思議そうにリラを見た。

「何。」

「ごめんなさい、何でもないわ。・・・いつになるかなって。」

「・・・。リラは見に行かなくていいのか？」

セルスが視線を前に戻して呟く。セルスの言葉にリラは淡々と答えた。

「ええ、さつき見たらクラスAだったわ。」

「よかったな。」

「ありがとう。」

リラは嬉しそうに笑ったがセルスは分かっていた。

誰におめでとうと言われるよりも、リラはコアに言われるのが一番嬉しいのだと。

「リラー！ー！！！」

遠くから人ごみを分けて緑のマントが走ってくる。その勢いのまま

リラに飛びつく。

「どうかしたのっ?」

「クラスA!!!おめでとうっ!!!」

「ありがとう。」

報告よりも先に出たのは、リラの祝い。ほら、この笑顔。そう思いながら、セルスもつられて笑った。

リラは飛びつく私をそつと放すと目を見て聞いた。

「で?コアはどうだったの?」

バツと張り出されていた掲示板を思い出すと、クラスAの中にリラの名前があったことと、

自分の名前がクラスCにはなかったことが思い出された。

「えへへ〜・・・。」

「まさか、クラスB!?!」

リラは嬉しそうに抱きしめて、また私の目を見た。

違う、あの目は違う。セルスがそう思い、言葉をかける。

「もしかしてお前・・・降格か?」

セルスが恐る恐る私を見た。やっぱりセルスは私の隠し事なんて、簡単に分かってしまうんだ。

誤魔化すような笑顔に、2人は少しの間ぼかんとしていた。

「え・・・へへ〜。」

「何をしたんだ!?!?CからDに降格なんて滅多な事がなきゃないだ

る!？」

ぽかん、としていたセルスがリラよりも先に意識を振るい立たせ私を問い詰める。

ようやくリラも頭を回転させ、手を口に当てると横にいる私を見て呟いた。

「もしかして……。」

「……嘘だろ?…試験中に試験官に怒鳴りこんだのって、まさか……?」

リラとセルスの言葉の先は『コア?』と予想できた。

「だ……だって!あの老いばれ試験官何て言ったと思う?!」

私が声を上げた瞬間、はあく、とリラとセルスが長いため息をついた。

それからリラが焦るように言って、私の口は勝手に閉じた。

「どうするつもり!?クラスDの者は今度の試験で合格しなきゃ退学よ!？」

「……。」

続いてセルスは冷たい口調を和らげて言う。

「で、その試験官は何て言ったんだ?」

どれだけ怒られても、たとえ退学になったとしても、私は今でもその言葉を取り消したりはしない。

あの言葉だけは、今でも絶対に許せない。降格することが分かって

いて、その言葉を言ったのだ。
むしろもつと怒鳴っておけばよかったとさえ思える。

「・・・『ドラゴンなんて、唯の道具だ』って。」

私にとってそれ以上の屈辱なんて無かった。

私がドラゴンマスターを目指す理由も、目的も、全て否定する事になる言葉だった。

今のこの世界じゃ、そう考えている人ばかりだろう。でも、私は違うと思う。

だからどうしても許す事はできなかった。

「だって、ドラゴンは人が操る道具じゃないだよ!?!?!? だから。」

「・・・何を言ったの?」

リラが心配そうに聞く。

「『あんたみたいなの、ドラゴンマスターなんて言わない。』・・・って。」

試験官に逆らう事は、試験を不合格を意味する。それを分かっているも、黙っていられない。

それが、コアだ。セルスは心のどこかで、そう納得していた。

「はあ。まあ・・・」

「コアが怒るのも無理ないけど。」

「セルス、リラ。」

「今度の試験、死ぬ気でやれ。手伝える事はしてやるから。」

リラにも自分にも、他の誰も持っていないものをコアは堂々と背負っている。セルスにはそう思えてならなかった。

セルスにとつて落ちこぼれだと言われるコアの、そういう所は嫌いになれない部分だった。

いや、むしろそういう所に惹かれていたのかもしれない。誰もが持つことができないものを、コアはもう手に入れているのだから。

「今度の試験が楽しみだねえ、リユーク。」

その様子を部屋の窓から見下ろして、写真にうつるドラゴンに語りかけるように老婆が静かに笑った。

第2話　：コア

私はここ3日間、ろくにご飯を食べてなかった。

そんな私の周りには、日を隠すくらい高い木ばかり。地面にはうつそうと生い茂る草。風は流れも何も感じない。

私一人でここへ来たのは間違いだったのかもしれないと少し後悔していた。セルスやリラやロイには黙ってここへ来たのだ。

家を出てからもう何日もこの森をずっと歩いている。もしかしたらセルスたちは心配しているかもしれない。

「あと4日・・・」

あの老いばれ試験官の所為で、今私はこんな所にいる。

『ドラゴンは唯の道具でしかないのだよ、君。』
あの言葉は思い出しただけでも腹が立つ。今のこの世界ではほとんどの人がそう思っているのかもしれない。

だけど、私にはその理由がどうにも納得できないのだ。

この世界は間違っている。誰かがそう認めさせなければ、ドラゴンマスターは皆いつまでも、真のマスターではなくなってしまう。

マスターとドラゴンの間にあるのは、主従関係。私にはそれが全く理解しがたいものだった。

だから私はそんなものに縛られない、ドラゴンマスターになろうと思った。

そう、おじいちゃんとエルクーナのように。そして、そう意気込む私がどうしてこんな森の奥深くにいるか、その答えはいたって簡単。

追試。

「老いばれ試験官のばかあー！」

そう大声で叫ぶと、遠くでギヤーとかバサバサツとか、生き物が飛んだり鳴いたりしている音がする。それが何とも不気味でしかたない。あの老いぼれ試験官の所為で私は今こんな所にいるんだ。

あの試験官が私をクラスDへ落とさせた所為で私は1人こんな所で彷徨っている。

もう嫌だそう何度も思った。引き返そうと思えば、いつだって引き返せる。

けど私はセルスやリラと頑張ると約束した。何よりも、私はドラゴンマスターになりたい。

「待っていて、私のドラゴン！」

これはクラスS〜Dまで全ての生徒に出された課題だった。その内容は、竜と契約を結び、共に空を飛ぶ事。

そしてこの課題、クラスDの生徒にとっては試験になる。

もし、竜と契約できなかつたり、空を飛ぶ事ができなかつたりすると、その時は問答無用の退学となる。

だからクラスDの生徒は皆、卵や子供を買ったと聞いた。で、どうしてその『クラスD』の私がかにいるかというところ。

『ドラゴンを探しに来た』というのが最も正しい答え。

「お腹すいた・・・疲れた・・・。」

卵を買えばよかった、子供を育てればよかった、それが退学せずに済む最も安全な方法だと分かっている。

でも私が目指すのは唯のドラゴンマスターじゃない。その感情がどうしてもドラゴンを買う事を許しはしなかった。

あの日からしばらくして、私は小さな声に気づいた。

私を呼んでいるような、待っているような、その声を辿ってこの森の中でその声の主を探していた。幼い頃の記憶が、不意に声となつて耳の奥に響く。

『声が聞えるまで待つてみるのもいいかもしれんな。』
大好きなおじいちゃんその言葉に、私は知らず知らずのうちにこの森で、ドラゴンを探していた。

私を呼ぶ声が少しずつ、少しずつだけど大きくなって、その声を頼りに、何日も森を歩いた。

食べ物が尽きて、飲み物を調達して、何日も、何日も。

そして試験まで後4日まで迫った今日、私は未だドラゴンとは出会えていない。

それでも、私は探し続ける。私になりたいものは、伝説のドラゴンマスターだから。

「ぎゃー！」

私は何かに躓き急にバランスを失って、体が重力のままに下へと滑り落ちていく

。周りの景色がグルグルと何度か回転し、体のあちこちを地面にこすりつけながら止まることなく落下していく。

（ガサツ）滑り落ちた坂の下からは空を見上げても全く何も見えな
い。私は静かにそこに生える草をかき分け、息を整えて立ち上がった。

その時、今まで曖昧だった私を呼ぶその声が急にはっきりと耳に響いてきた。ああ、この声だ。

目を閉じて、耳を澄ますとその草の奥からシンと優しく響いてくる。高くて綺麗で澄んでいて、それはまるで、おとぎ話の白竜のような声。

私はきつとこの声の竜と出会う。そして、恋に落ちるように物語を始めるんだ。

私はそう興奮しながらその場をゆっくりと声の方へとくだった。大きな草を除けて一歩踏み出す。
その先に見えたのは、想像よりはるかに大きな茶色の物体だった。

第3話　：ルキア

この世界は変わった。昔のように風は香らないし、色はすさんでいる。

何よりも、マスターに一寸の光も感じない。

だから私はここでこうして眠っている。マスターなんかいららない。

私は誰にも誓いはしない。私は誰にも従いはしない。

私はそうやって世界から目を閉じて、永い眠りについていた。

ほんの小さな声だった。まるで消えてしまいそうなほどに小さな、幼い少女の声だった。

「……ドラ……ゴン？」

しかし運命の神ラストイは、私とたった一人の少女とを出会わせた。小さく小さく森の中に響いたその幼い声に私は、閉じていた目を静かに開いて世界を映した。

「あなたが、私を呼んでいたの？」

私の目の前には小さな少女が一人で立っていた。それ以外の景色は前に目を開けた時と何ら変わりはない。

鬱葱と生い茂る木々や草花、風の通らない崖の下で、私は動かずに眠り続けていた。

『……誰です？』

薄暗がりの中、古い土の匂いと温かな陽だまりの匂いがした。

「コア、私の名前はコア。」

丸い眼があまりにも綺麗で、私は吸い込まれそうな気持ちになった。永い眠りから覚めて初めに目にしたものが、こんなに幼い少女だなんて。そんな私の考えを無視してその少女は私に聞いた。しかしその問いは、ばかばかしい質問だった。

『私に名前があるとでも？』

契約をしていないドラゴンには、名前なんて物はない。契約を交わし初めてドラゴンは主から名を与えられる。

それがドラゴン契約だ。誰とも契約を交わしていない私が名前なんてあるわけない。

それは今だけでなく、これからもずっと私に名前なんてない。

私が目を覚ますといつも男や女が立っていて、私に誓わせようとする。白竜だと騒ぎ立て、マスターとの契約をさせようとする。

今だってそうだ、この少女はドラゴンマスターを目指す者の目。

「ないの？」

『契約していないドラゴンに、名前なんてあるわけないでしょう。』
「そっか。」

木々が日の光や風さえ妨げるほどに茂るこの森に、少女が笑うと暖かな光と、フワリと春の風が吹き込んだ気がした。その風に一瞬、気を抜いていたときだ。

「じゃあ、つけてあげる。ん〜つとねえ・・・ルキアなんてどう？」

何を言い出すのかと思えば、この少女はいきなりとんでもない事を言ってきた。

『……ドラゴンに名をつけられるのは、契約してマスターとなった者だけですよ。』

「そうだったっけ？でも、今だけはルキアって呼ぶね！」

私はその言葉に全く理解できなかった。

『貴女、マスターでしょう……？』

「え、うん。一応、その試験を受けているの！」

その予想は確信へと変わった。その瞬間に私の心は一気に曇った。マスターなんて嫌い、自分勝手に、私達の事をおもちゃと勘違いして。

だから私はどんなマスターとも誓う気なんかなく、ここに来るマスターは丁寧に追い返して、また一人で静かに眠りについた。

名前を呼ばれても、目をあけなければいい、眠り続けていたらいい。そう分かっているけど私は目を開いてしまう。

「ルキアって、何か願いがあるの？」

アホっぽい顔を向けて少女がそう聞いてくる。どうして私は目を開けるのだろうか。名前を呼ばれても眠り続けなければならないのに。

マスターを見るたび嫌になる。それでも、私はこの世界に何かを求めているから目を覚ます。

『ドラゴンマスターの貴女には、与えられないものです。』

「それ、何？」

『……マスターが我々から奪うものですよ。』

私の母とそのマスターは、伝説と謳うたわれるドラゴンマスターズだっ

た。

母の白い背にマスターは嬉しそうに乗って、2人は空を高く飛ぶ。綺麗な空を、それは美しく、気高く。

そのマスターは、今のマスターたちとは全く違っていた。

母を一番に思い、主従関係を求めず、ただ幸せを求めて母の背に乗り世界を飛んでいた。私は求めていたのだ、きっと。

あの2人のように、真の絆と、矛盾している自由を。

「四日後ね、試験があるの。それに合格できなかったら私はゴンマスターにはなれなくなる。

絶対に与えてあげる。ルキアが願うもの、与えてあげる。だからもし、与える事ができたらね。私と契約してくれませんか？」

少女は真っ直ぐに私を見るとそういった。貴女には見つけれない。他の誰にも、見つけることなんかできない。

信じる心が欲しい。何かを、誰かを信じてみたい。

それを、貴女に与えられるはずなんかない。ドラゴンマスターを指すものに、与えられるわけない。

『いいわ、コア。』

それは小さな約束だった。眼を開いたとき、私の目の前に立っていたドラゴンマスターを指す少女との、小さな小さな約束。

私は彼女のそんな言葉にゆっくりと微笑んで頷いた。でも私はその約束が果たされることなんて、頭の端にもなかった。

私の願いはドラゴンマスターの目をする貴女に、見つけられるわけなんかない。そんな私の心の中の声は少女に届くことはなかった。

第4話 : コア

声私を呼んだ。その声の主は、茶色をしたドラゴンだった。そのドラゴンの眼はとても綺麗な青をしていて、その声はまるで天使の囁きのように澄んでいるの。

けど、そのドラゴンはどこか満たされないような顔をしていた。何かを求めている、もう諦めかけているようなそんな顔。

私がそれを与えたら、契約してくれる？と聞けば頷いてはくれたけど、その目は絶対に契約しないという目を隠しきれずにいた。

「私ね、どうしてもドラゴンマスターになりたいの。」

そのドラゴンの顔の前に座って目を見る。綺麗な青い目がゆっくりと私を見てくれている。

「おじいちゃんが、ドラゴンマスターだったの。すごい素敵でね、カッコイイの。ドラゴンと仲良くて、強くて。世界中を飛び回って

ルキアは、何も言わずに目を閉じる。土ほこりをかぶった肌に手を触れそうになり、私は急いで引つ込めて言った。

きつとまだ彼女は触れられたくはないはずだから。彼女はどこか冷たい。

人を信じきる事をしないで、いつだって傷つけられないために羽を閉じている。

「困っている人を助けた事とか、戦争を終わらせた事もあるの！」

だけど彼女が本当に冷たいかと言うと、それは違うと思う。

自分が傷つかないために、冷たくしているだけで、本当はとても優しい目をしているの。

私の話だって、聞いていないような風で、ちゃんと聞いていてくれる。

「私の憧れ。・・・でも、もしかしたらもう無理なのかも知れないんだけど。」

ルキアに話しながら、私は自分に言い聞かせるように言った。分かってた。あの試験が、どれほど大きかった。

クラスBへ行ける、大切な試験だったって。試験官やマスターたちに逆らう事は、無礼になり失格になるってことも。

「でも、これでよかったの。」

それでも後悔はしていない。もしもあそこで黙っていたら、私は一生私の目指す『伝説のドラゴンマスター』にはなれなかったと思うから。

「ドラゴンと私達、何が違うのかな。」

おじいちゃんを見ていたとき、よく思った。ただ、2人でいるだけで世界はあぁも輝くのだと。

あの眼は私にたくさん事を語ってくれた。その全てが私を魅了してやまない。

だけど先輩とか、先生とか、ドラゴンマスターを見てみると悲しくなる。

「どうしてマスターがいてドラゴンがいるだけで、

ドラゴンはマスターの召使みだいになって、マスターは自分を偉い

「と思いこんでしまっただろう。」

おじいちゃん達の間には、そんな面倒くさいものなんて何もなかったのに。

2人はいつも楽しそうで、喧嘩して、怒って、笑って。私はそんなドラゴンマスターに憧れていた。

私が奪ったその二人の未来を、私は背負いたい。そんな思いもあった。

「変だよな。」

私の声だけが小さく森に響いた。ドラゴンマスターがそんな風に思う事は、おかしいと言われる。

だけど、どうしてもそう思わずにはいられないの。ドラゴンは私達と何にも変わらない。

『ドラゴンなんて唯の道具でしかないのだよ、君。』

そんなの全然分らない。分りたいとも思わない。息をして、世界に希望を抱いて、優しさも、苦しみも知りながら生きている。

大切な人を守ろうとして傷ついて、大切な人を想って暖かくなる。ドラゴンは私と一緒になのに。何も違いはしないのに。

「ルキアは、マスターが嫌いなんですよ？」

眠ったようなルキアに語りかけてみる。返事なんか、もちろんない。初めてルキアに会ったとき、彼女の眼は多くの闇を抱えているように見えた。その瞬間に分かったの。

ルキアの眼をこんな風にしたのだって、ドラゴンマスターなんだから。

だけどそれと同時に彼女の眼にはほんの少しだけ、ほんの少しだけだけど小さな輝きが見えた。

私はその輝きをもっと大きな光に変えてあげたい。

「私もマスターなんて嫌い。」

だからこそ、諦める気にはならなかった。

彼女がドラゴンマスターをどれだけ嫌っていたとしても、私は伝説のドラゴンマスターを知っているから。そのことを彼女に教えてあげたい。

ルキアに闇を与えたのがドラゴンマスターなら、私は彼女に光を与えられるドラゴンマスターになりたい。

優しい風に、睡魔が襲ってくる。こんなに傍にいるのに、何も分らないルキアの願い。

ドラゴンマスターが奪うものなんて、多すぎて。でも、ルキアの冷たい目がいつか。優しくなるのなら、私は探すから。

ずっと、探し続けるから。私は彼女に光を与えられるような、ドラゴンマスターになるから。2人と……ルキアのために。

第5話　：ルキア

空を飛んで思いをはせて、どこまでも途切れることなく続くこの空に。

『ずっと昔、そんな目をしたマスターがいた気がする。』

まだ幼い私と母の前に現れて言った。

『俺を呼んだのはお前か？』と。

彼女の目は、彼にとても似ている気がする。明るくて、喜びや悲しみを知っていて、それでいてどこか深みがある目。

母は死ぬときに言った。『何を引き換えにしても、彼に出会えてよかった。』と。

母は何度も傷つき、何度も空を飛べなくなった。白く美しいその翼を赤く染める事も、黒く汚す事もあった。

けど最後の最後まで、この空に彼との思いをはせていた。

だから私はきつと眼を開き続けてきたんだろう。たとえこの世界がどれほど濁ろうとも、私を呼ぶその一声に世界を映す。

そうしてもしかしたら、私は最高のドラゴンマスターと出会えるんじゃないかという期待を描いて。

“あなたが、私を呼んでいたの？”

私は心のどこかで求めていたの、私の主を。そんな私の目の前に現れたのは、幼い子供だった。

けど彼女の眼はずつと真つ直ぐでしっかりしていて、深みがあった。そんな彼女は私にかつてに《ルキア》という名前を付けた。

それからずっと、彼女は私に色んな話をした。優しくてしっかりし

ている、友達がいること。

いつでもおしゃぎまわって、よく怪我をする事。とても素敵な男性がいて、その人のことを大好きだと言う事

。その目はとても幸せそうで、どこか切ない。『凄く大切な人なの。』なんてね、と彼女の軽い笑顔がとても温かな風を生むように。

くだらない事ばかりだけど、聞きたいと思ってしまう。彼女が楽しそうに話すからなのか、それがとても楽しい事に思える。

その話を聞かたびに、頭の中でその様子が浮かび上がる。そのたびに思った。彼女と過ごす、毎日が飽きないだろうと。

きっと世界は輝きに満ちているに違いないと。

星が空を瞬く。もう何年もあの空を飛んでいない。

「綺麗な星だね。おじいちゃんが、言ったた。」

今日は、おじいさんの話？そんなふうにも目を閉じる。彼女はおじいさんの事を本当に好きで、とても尊敬している。

そして彼女はそれをおじいさんを目指していると同時に何かを抱えていた。

「ドラゴンは、星が好きなんだよ。平和を願う者達だから。」

私は星になりたいなんて思わない、だけど。彼女がここに来てから、私にとって世界はまるで未知との遭遇で。

見えない可能性を秘めているように思えて、世界は不思議と輝いて見える。

美しいと思えるものがあり続けて欲しいと思うように、彼女にも存在して欲しい。

『星・・・私も好きです。』

聞えただろうか心配になるくらい、小さな声が自分の喉から流れ
ていく。すると彼女は嬉しそうにこつちを見て微笑んだ。

「だけど、ルキアは星になりたいわけじゃないんでしょ？」

夜の風を透かして、彼女の声は真っ直ぐと私に届く。空に輝きを与
える星たちは、とても美しいと思う。

けど、私は美しくなくてもいい。ここで私ができる事があるなら、
美しくなくてもいい。

「私も別に、星になりたいわけじゃないの。」

彼女の言葉は空気を響いて、冷たい風に乗り聞こえた。ゆっくり眼
を開くと彼女は空を見上げていた。

その横顔に私は思わず魅せられていた。その後彼女はゆっくりと地
面を見るといきなり立ち上がり私を見た。

「待ってて。私ここで出来る事、精一杯頑張るから。」

そう言うと彼女は闇が張る木々の間を走って行った。何時間たって
も彼女は帰ってこなかった。

どう足掻いても、無理なのに。貴女には与えられない。私の願うも
のは矛盾しているから。

そう思いながらゆっくり。ゆっくり。私は静かに一人で目を閉じた。

第6話　：ルキア

夜はいつ明けたのか、ほのかに眩しかった。

今まで朝が来ても暗くてあまり気づくことなんてなかったのに、そう思っただ顔を上げると、そこには綺麗に晴れ上がった空が覗いていた。

私はこの森のこの場所で始めてこんな綺麗な空を仰いでいた。きっと彼女が枝を切り落としたのだろう。

光はさんと降り注いでくる。昨日の夜、結局彼女は帰ってこなかった。その夜、私は夢を見ていた。

そこには母がいた。自分と同じ色をする彼女は、とても幸せそうに生きているのかと疑った。

《ルキア・・・いい名じゃない。》

夢の中の母が優しく笑う。もう何十年も見ていなかったその笑顔に、私は言葉を失いかけた。

『・・・私の名前じゃないのよ。』

顔をそらして答える。そんな私に夢の中の母は優しく微笑んできた。

《その美しい白い翼と肌が汚れているわ。》

少し呆れて笑ったのが分かった。

『・・・ずっとここにいるもの。』

《何が怖い？・・・マスターの何が怖い？》

そう、貴女にとっては全然怖くないかもしれない。彼はとても素晴らしいマスターだったから。

けどね、あれから世界はどんどん変わっていったの。この世界に私が背に乗せられるようなマスターなんていない。

ずっと、そう思いながらこの場所で眠り続けていた私に、母は少し悲しい目をして、それから嬉しそうに笑って言った。

《空は気持ちいい、見ているよりずっと。》

それから一言、《飛んで。》とだけ言って彼女は姿を消した。

目を開けるとそこには光が注がれて、空があつて、夜が明けていた。そして私の傍らには、何も羽織らずにボロボロになったコアが、土や草、小さな枝を体中にまもって眠っている。

ふと最後の言葉思い出し、昔よく母が言っていたのを思い返す。

《空は気持ちいい、見ているよりずっと。》

私は空を飛ばないけれど、母は飛んでいた。

そして絶対言うの。《そう思うようになったのは、マスターに出会ってからなのよ。》と。

森の奥のこの場所で眠っていた私の前に少女が現れたあの日から、4日。彼女はたくさんのお物与えてくれた。

楽しいという感情に、愛しいという感情。大好きの意味や、辛いという意味。そのたくさんのお話から彼女はマスターに向いてないと思っただ。

そして、彼女が目指すものはただのマスターじゃないという事を知った。

《四日後ね、試験があるの。それに合格できなかったら私はゴンマスターにはなれなくなる。》

絶対に与えてあげる。ルキアが願うもの、与えてあげる。だからもし、与える事ができたらね。私と契約してくれませんか?》

彼女がそう言った時、私は絶対に与えられるはずないという確信があった。

あの時は、こんな気持ちになるなんて、思っただけでなかった。

『 コア。 』

あの日から四日。心の中でざわめく思いに、私は始めて彼女の名前を口にしました。

『 コア。 』

「ふああっ!?!」

私の声に勢いよく眼を覚ます彼女が、私に驚いた顔を見せた。貴女が目指すのは、おじいさんでしょうか?

伝説のドラゴンマスターになるんじゃないの? コアの心の中にある何か真っ直ぐな信念のようなものが、私にどれほど輝きを与えてくれたか。

貴女は私に輝きを与えてくれた唯一のマスターなのに。

『 今日、試験でしょう?』

「・・・知ってるよ。」

何があっても、ドラゴンマスターになる。そう彼女の眼は私に語っていた。それなのに、今彼女はボロボロになってここにいる。

今日は、マスターになれるかなれないかの大切な試験の日なのに。

「何も、与えられなかった・・・。」

『え？』

初めて聞くような弱弱しい声に私はうろたえる。彼女の真つ直ぐだった目が地面に向けられ、彼女は力なくそう言った。

「ルキアの願いも分からないし、何一つ与える事もできなかった。」

その眼は私を見ることもなく、じっと地面を眺めている。彼女は私にたくさん与えてくれたのに。

おじいさんの話や、星の話、大好きな人の話、たくさんのお出来事。

朝日や、仰ぐことが出来る空。

その全てが私には、他のどのマスターとも違う、特別な輝きばかりだった。

「だから・・・いい。」

何がいいのか、私には分からない。そんなに簡単に諦められることじゃないことくらい、私にだって分かる。

諦めることなんか出来ないはずの夢を、そんな簡単に《いい》なんて言わないで。

「ねえ、ルキア言ったよね。《ドラゴンマスターが奪うもの》って。《ドラゴンマスターの貴女には与えられない》って。」

下を向いていた眼は、きつと輝きを失ってしまったんだ。そう、私がかの中で少しの悲しみと諦めを覚えたとき、彼女はその眼を私に向けた。

「だから、いいの。」

彼女のその眼は、光なんか失うことなく数日前の彼女の目よりもずっと輝いていた。

その真つ直ぐな信念を映し出す目に、私の心臓は鼓動の音を訴えた。

「ねえ、ドラゴンマスターじゃなければ、与えられる？」

もう、何だっついていい。そんなふうに思った。

貴女が《星になりたいわけじゃない》と言ったのは、星には与えられないものを、与えられたらそれでいいと思ったからでしょう？

『マスターになるんでしょう。』

揺らぐ私の心を射るように、捕らえて放さない彼女の眼。その目は確かにマスターの眼をしている。

「マスターになるならその時は、ドラゴンはルキアじゃないと嫌なの。」

私は貴女なら、この背中に乗せて空を飛んでもいいかもしれない。

『私が願うのは、自由と真の絆です。』

「自由なんて願うものじゃない。真の絆なんて・・・気づけばそこにある物なんだよ?」

違う。《いいかもしれない》んじゃない。母は私に、何を言いたかったのか。

どんな気持ちを抱いていたのか。今、ようやく少しだけ分かった気がした。

私は彼女とこの空を飛びたい。

『 神風の元に聖火の誓いを灯す

』

冷たい風が森を駆け抜けて、葉を躍らせて走ってくる。

『 汝を我が主とする。

マスターコアに絶対の忠誠を誓う。

』

喜びと、幸福をもたらす神風の元で。ボロボロで、マヌケ面をして立っている少女の足元に私は頭を下げる。彼女の目にある優しさと、強さを信じて。

「 楚に名を与えん。神風のもとに・・・ルキアと命名する。

我が名はコア

ドラゴンルキアの主なり。」

(ドクン) 大きな鼓動が1つ。熱く、熱く、胸を焦がす。風の匂いがする。

空を渡って、森や海や街を駆け抜けてきた暖かな風の匂い。彼女の心の中には、確かに真っ直ぐな信念がある。

契約したこの心にそんな想いが伝わってくるようだった。そのとき、私は思った。

これが伝説のドラゴンマスターの心なのだ。

そして私はこれからずっとこの心と共に空を飛ぶのだ。

第7話

「やはり、あの子はきませんね。」

「ドラゴンの登録もまだ済んでいませんし。」

「・・・仕方ないですね。今回、彼女だけです・・・退学。」

試験会場はざわついていた。何十人の審査員と何百人の生徒がドラゴンと共に集まる。

そのざわつきの中で、幾人かの教師達は一枚の紙を見ながら話していた。

「ドラゴンマスターには、向いていませんよ、彼女。成績も悪いし、実践訓練もほとんどできませんでしたし。」

「それに試験官への暴言付きですからね。」

マスターズスクールの先生達が観客席で口々に言った。

「あら、そうかしら。・・・彼女は、郡を抜くマスターになるわ。」

その声たちが一段落した時、その教師達の一段上の客席に座る女がそう呟いたとき、風の流れが変わった。

その瞬間、ざわつく音はピタリと止み、風の音だけが舞う。

(バサッ) その場にいた何百人新しいマスター達の目に映ったのは、その風を生み出し舞い降りる、幻の白竜と、その背に乗る小さく幼いドラゴンマスターの姿だった。

「先生！」

その少女が白竜の背中から飛び降りると、枯れた声を上げながら、少女はボロボロの姿で元気に走ってくる。

「まだっ、間に合いますかっ!？」

「ええ。ぎりぎりね。」

マスター・リースが笑って答えると、コアは安堵の息を漏らした。その姿にリースは微笑んで、土埃を掃って、言った。

「なんて美しいドラゴンかしら。彼女が、貴女のパートナー？」

リースの《パートナー?》という言葉にコアは嬉しそうに笑って答えた。

「はい。」

「そう。素敵ね。」

「はい!」

コアはここに来るまでルキアの背に乗っていた。その背から森が下を滑っていくのを見て、遮るものがない空を感じて、雨にぬれながら来た。

雨がコアとルキアを濡らした時、コアはルキアの体から泥が落ちていくのを感じて、ゆっくりと真の美しい白い肌に驚きの声を上げた。そして思った。まるで、あの時おじいちゃんと一緒に空を舞っていた、あの白いドラゴンのように、美しいと。

「間に合ったよ。ありがとう、ルキア。」

『それは良かったです。』

優しい声を放ち青く澄んだ目が、コアを映す。

その姿はすっかり白竜で、森の置く深くで眠っていたあの茶色の肌が急に白のペンキで塗り上げられたように、浮き立つほど美しかった。

「コアー!!」

黙り込む人ごみの中から、大声でコアの名を呼び、セルスが走ってきた。

「セルス〜!」

何日ぶりかに見るそのセルスの姿にコアは、また格好良くなった気がする。と思いながら抱きついた。

(ぎゅっ) いつもなら自分が抱きしめるだけで、《重い》と避けるセルスの手がそっとコアの背に回ると、コアは驚いて声を上げた。

「せ、セルツ・・・?」

きつく抱きしめてくるセルスの胸から顔を上げてコアが名前を呼ぶいつもなら、重いつか、苦しいといつて引き剥がされるのに。そう疑問に思いながらも、セルスの胸にもう一度顔を埋めた。

「彼が、素敵な男の子ですか?」

ルキアがその隣で静かにきいた。ルキアの眼に映るのは、コアよりも背が高く、

顔が整っていて、コアよりもずっと明るい髪の色をした少年が、コアをギュッと強く抱きしめている景色だった。

その少年に抱きしめられているコアの顔がなんとも幸せそうで、ル

キアはその瞬間にコアの想う人が分かってしまった。
そして分かりきっている答えをコアはまた嬉しそうに答える。

「うんっ！」

「コア……。」

その言葉に少年は一瞬愛おしそうな目をコアに向けると、
自分に抱きついてはなれないコアを一気に引き剥がして、誰もが一歩引くほどの大声を上げた。

「何が素敵な男の子、だ！ふざけるな、このバカ！手伝うと言ったのに、何をしていた！？どうして、一人で……。」

急に怒鳴ったセルスの声にコアはギョツと目を閉じ、耳を小さな手で塞いだ。それから恐る恐るセルスを見つめて、耳から手を放した。その説教の意味をコアはしっかりと分かっていた。セルスは自分を心配してくれていたのだと知っていたコアは、ぺこりと頭を下げた。

「ごめんなさい。」

その姿にセルスはまだツンと意地を張って、聞き入らないような様子を見せている。その様子を見てコアは頭を上げると、小さく笑って言った。

「一人でしなきゃ意味ないことだったから。手伝ってもらうわけにはいかなかったの。」

セルスだって、本当は分かっていた。それは決して今回に限ったことではなかったからだ。

いつだってコアは勝手に動いて、セルスは彼女のいなくなった部屋

に足を踏み入れ、
抜け殻になったその部屋で、また彼女が戻ってくるまで心配し続け
て待っていないければならないのかと諦めのため息を漏らしてきた。

「……はあ。いつもの言い訳どおりだな。まあ、無事だからいい。」

セルスはそう言うと、白いマントを風にさらされ、土まみれのコア
の肌に覆いかぶせた。

「リラも、心配していた。」
「うん。」

返事をするコアの隣にいる白いドラゴンを見上げて、セルスが言っ
た。

「立派なドラゴンだな。」

伝説の白竜。この世で最も気高い生き物だったと言われ、幻の白竜
と謳われる生き物。

セルスはその姿にそれ以外の言葉が思いつかず、その心のままにそ
ういった。

「でしょ?」

嬉しげなコアの声に、セルスは小さく頷いた。すると上から綺麗な
声が二人に響いた。

『ありがとう。』

真っ白で、汚れを知らないその翼は、それはそれは綺麗な風を生むのだろうとセルスは心を躍らせた。

この世界にはもう白竜はいないと言われていた。

一匹の白竜がこの世界から姿を消したあの日から、この世界には白竜は滅びてしまったと知れ渡っていた。

そしてコアはその白竜とマスターを見て、ドラゴンマスターを目指していた。

それはセルスだけでなく、リラもロイも知っているほどの意志で、その彼女が目指すものは唯のドラゴンマスターでないことも彼らは知っていた。

だからその幻の白竜に、セルスもリラもロイも他の人間ほど驚くことはなく、

それはごく自然なこと、まるで決まっていたことかのように受け入れていた。

彼女なら、幻の白竜さえも、契約させてしまえそうなそんな気がしていた。

そしてその予感はまだ、結果へと姿を変えたただでしかなかったのだ。

第8話　：コア

あれから数日がたったころ、緑のマントから黒のマントに変わったコアが廊下を歩く度に、コアに向かって小さな声が囁かれた。

「伝説のマスターが、クラスDだなんて。」

そう学校中で噂されるようになり、コアは幻の白竜の主で、伝説のドラゴンマスターだと言われていた。

《幻の白竜が誓う時、真のマスターが現れ、白竜の伝説が今再びページを開く。》

昔から密かに伝わるその言葉を、ドラゴンマスターの中で誰も知らない者はいなかった。

「また誰かが言った。気にしちゃだめだよ、コア。」

ロイがその言葉を軽蔑するかのようにそう言ってコアを励ますと、なんとも呑気な声が明るい返事を返す。その言葉にリラは軽く笑った。

「え？何が？」

「それより、次は実習訓練なの！」

「へえ。」

「頑張つてね。」

「うん。ありがと、リラ！」

そういつて3人は長い螺旋階段の踊り場で手を振って別れた。

実習訓練とは、担当の先生に2〜3人の生徒が着いて行うもので、屋外での魔法を使った実習訓練だった。

この間の試験でほとんどの生徒がドラゴンと契約を結び、正式にマスターになった。

そして今日からはそんな若いマスター達にドラゴンとの実施訓練授業が行われることになっていた。

「あつ！」

その実施訓練の事を考えていたコアが急に声を上げた。

彼女の視界には、四階の渡り廊下の端に、白いマントが揺れたのが映った。間違いない。コアの頭がそういう。

コアは自分のその目を疑うことなく大声を上げて廊下を走っていった。

「セルスーーーー！！」

そしてその声に一瞬振り返った少年のしっかりとした体に抱きつく。

「重い。」

その少年はコアの眼に間違いはなく、セルスであった。セルスはいつもと同じ風にコアに言葉を返す。

そんなセルスに抱きついたままコアは、へにやあと笑って見せた。

「えへへ。セルス、今日も大好き。」

彼の表情は全く変わらないまま、冷たい目が下の方向へ向きなおしてしまふ。その態度にコアは体を離してジッとセルスを見て言った。

「ぶー。」

そう小さく声を出したコアは、頬をいっぱい膨らませてその悲し

みやら怒りやらを表わそうとしている。
そんなものに何の興味をも示さず、セルスはコアの顔を見て笑いをこらえていた。

「あ、コア。今度・・・」

セルスがそう言った時、廊下の窓の外に広がる景色がコアの眼に映り、コアはハツと思い出したという顔をした。

「そだ、セルス。私、次実習だから、もう行くね！！」

どうしたら振り向いてもらえるか。コアがセルスの事を考えているときは、たいていそんな事だった。

一学年の女子だけでなく学校中の女子が恋焦がれる相手、それが一年生にしてクラスSの首席、つまりは学校のトップに立つセルスであった。

容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群、性格に多少の問題があれど、それを他人には見せないというガードの固さが女子に多大な人気を得ている秘密とも言われている。

そんな彼に会う度コアは、どうすればセルスが振り向いてくれるのかと考え続けていた。

そして、その度出てくる答えは、《頭が良くなり、クラスを上げて、セルスと同じクラスで頑張る事》だった。

ただ、コアにとってセルスの存在は、他の女子とは少し違った。そしてそれは、セルスにとっても同じだった。

セルスと話している場所から急いで駆け下り、コアは外へ出て走っていくと、

大きな魔法樹の根元に、たった一人の優しそうな女の人が立っていた。コアはその人の目の前まで来ると勢いよくお辞儀をした。

そんなコアに老婆というよりは若く見える年を取った女の人が微笑んで言った。

「私はリース・シュトレーズです。マスター・リースと呼んでくれたら嬉しいわ。」

空からは春の太陽の光が、その木により力を与えるかのように降り注いでいた。

その木の下には小さな木陰が出来ていて、草は生き生きと深緑の色を輝かせている。

そんな屋外スペースの端のほうには点々と人らしき点が動いているのが見えて、コアはまた思い出すように声を上げた。

「あの！どうして、私1人なんですか？」

普通の実習訓練は2・3人でやるものではなかっただろうか。

コアはクラスCの時に受けていた授業の事も思い出しながら、失礼のないようにそう言った。

私は1時間早く来てしまったのだろうか。コアの頭の中ではそんな事ばかりがグルグル回る。

「クラスDで、私の目に映ったのが貴女だけだからよ。」

そんなコアにマスター・リースは微笑んだままそう言った。その言葉にコアはエ？と一瞬と惑ってから、にっこりと笑った。

「ああ、そうか。この人、私が白竜のルキアを連れてきたら。私はすごいと思うてるんだ。」コアは静かに心の中で納得した。

「それじゃあ、コールから。できる？」

そんなコアにマスター・リースが言ったのはドラゴンマスターの基本中の基本だった。

コールとは、遠くにいる自分のドラゴンを自分のもとへと呼ぶ基礎魔法のこと。これは動作も何もなくて、ただ手を振るだけの魔法だった。

コアもそれくらいは教科書でも習っていたし、何度もシミュレーションという、

まだドラゴンを持たない生徒に教える授業でも何度も行っていた。本当にただ、手を空に掲げて、そこから名前を呼んで振り下ろす。

それだけのことだった。魔力の大小の問題さえ関係ないその魔法をコアは確かに知っている。

「・・・」

心の中で呼ぶように。すぐ傍にいるドラゴンに伝えるように。

授業中にコアに教えていた先生が何度もそう言っていたのを思い出して、コアはそこで急に止めた。

静かにその様子を見ていたマスター・リースは、急に魔力を飛ばすだけの瞬間になって、止めてしまったコアに驚いた顔を見せた。

その顔をジッと覗き込んでいたコアは、小さな声で言った。

「それってできなくちゃダメですか？」

その小さな声は魔法樹の葉を揺らす風にかき消されることなく、小さいながらに真っ直ぐとマスター・リースの耳へと届いて行った。

第9話　：セルス

「まさか・・・一時間コールだけに使ったのか!？」

目の前で平然と笑うコアに向かって言った。

「え、うん。」

当たり前、というふうに見えるコア。

コアを教えているマスター・リースと言えば、学校で3本の指に入る腕利きのマスター。

白竜を操るコアにはびったりだと思っていたのに。

そんな思いでソファアに座りこちらを見てくるコアの眼をみた。

「で。どうしてお前は俺の寮にいる？」

「セルスに報告」

5日間、たった5日間だった。

コアが家からいなくなったと聞いて、自分の大会そっこのけで探した。

手伝ってやるといったのに、コアは何も言わずに俺の傍からいなくなった。

で、いきなり帰ってきたと思うと

連れてきたのは幻の白竜で、にこやかにごめんと謝る。

「でてけ!!!」

どれだけ心配したと思っている？

お前は知らないんだ・・・俺にとって、お前は他の女と、違うっ

て事。

「いやあ〜!!」

「何しに来たっ?!!」

「……………会えなかった4日分の充電?」

5日だ。と無言で睨みつける。

「好きだから、来ちゃダメなのっ?!!」

そういう問題か?

「セルスの意地悪」

意地悪で結構。

だいたい、男の部屋に女1人で来るないつも言っているはずなのに。

……まあ、コアだから仕方ない。

そう思いながら、きつとそれを許す理由があるから追い出せないんだ。

“今日も大好き”

彼女が俺にくれた言葉。

あれは別に、無視したわけじゃない。

きつと顔を見ていると、よからぬことをしそうになるから。

「もう帰れ。」

「やあ〜。」

本気なのか。冗談なのか。

全くつかめない。昔からずっとそうだった。

気づけば傍から離れて、全く分からない場所に迷い込んでるし。気づけば何でも一人でしようとして、凄い事をやらかす。

「・・・帰ってコールの練習してる。」

いつか、探しても見つからないくらい遠くに行ってしまう気がする。だから、どうか。ここにいて欲しいと、素直にいえたらいいのに。

「はあ〜い。」

おとなしく、俺の隣で座ってくれているだけで充分なのに。彼女は椅子から立つと、部屋の扉を静かに引いて振り向きながら言った。

「また来るね!」

来なくていい。

「来るな!」

俺が、行くから。

いつもいつも逃げられてばかりで。

俺が捕まえるんじゃないで、いつも捕まえられるばかりで。

「ぶー、ケチっ!」

いつか、捕まえられる? まるでドラゴンのように自由な君を。

第10話　：リース

「・・・嫌だと思ふ理由は何？」

彼女の顔を見て、私は不思議に思い尋ねる。

呼ぶ。そんな単純な魔法に、1時間掛けても、2時間掛けてもあの高い空からは何も飛んで来ない。

唯手をかざして、旋律を描くように振り下ろし、名前を呼ぶだけの魔法。

それは技術の問題の前に、彼女に呼ぶ気がないからだと分かってるから不思議でたまらない。

「・・・ルキアが嫌い？」

小さくうな垂れている少女に新たな問いかけをすると、彼女は勢いよく顔を上げる。

「大好きデスよ!!!」

何の迷いもないその言葉。

「じゃあ、ルキアを操る自信がないとか・・・かしら？」

「違います!!!」

この目はこんなにも真っ直ぐなのに。

ますます分からなくなり、心にポツと浮かんだ質問を投げかける。

「じゃあ・・・、命令するのが嫌？」

「・・・」

黙り込んで、少女はコクンと小さく頷く。

それは今じゃ考えられない、感情。

ドラゴンはマスターに任せ、マスターはドラゴンを操る。

それが常識のなかで、彼女の目が目指そうとしているのはそんなものじゃない。

「どうしてですか・・・？どうして、マスターは命令するのですか？」

その目は私に真剣に疑問を投げかけてくる。

「コールを命令にするかどうかは、コアちゃん次第。」

「私が・・・？」

コアちゃんの真っ白で綺麗な感情に私は自分に問い始めた。いつからだろう。

私の声に従え、と思い始めたのは。

「いい？コアちゃんが“聞け”というのと。

“お願い”というのは、全く違うの。でも、二つともコールなの。」

コアちゃんがにっこりと笑った。

その時、風が遠くからかけてくる音がした。

その手は翳かざされても、風の音がする。

「ま・・・さか・・・。」

「ヒュウ」

『・・・そんなこと、願わなくても。来てと呼べばいいのに。』

遠くから白いドラゴンが飛んできて、コアちゃんに話しかけている。声を上げずに、手を振らずに・・・ドラゴンを心で呼んだ。

「来てくれてありがとう!!」

白竜に向けられた笑顔は、とても幸せそうなものだった。

『はつきり聞えるまでに、少し時間がかかるみたいですね。』

はつきり聞えないのは唯まだ、安定していないから。

もしも、安定したら？そう考えると恐ろしいほど凄い、ドラゴンマスターになるかもしれないと思った。

「素敵。」

無意識のうちに口から漏れたその言葉に、何の驚きもなかった。

リユークと契約したあの日が、あの日の気持ちが鮮明に蘇るような気持ちになった。

「・・・心に留めておいて。貴女は忘れてはいけない。

全てのものを形や在り方に捕らわれない、貴女の目でいて。」

「ふえ?・・・はい。」

初めて見たときに、その目に感じたの。

貴方はきつと、高く舞い上がっていく。
あの空に

第11話　：リラ

「コールできるようになったの!」

鐘が遠くで響き、平和を示すような空が一面に広がるお昼時。嬉しそうにコアはそういった。

「そう、よかったわね。」

彼女が嬉しければ、不思議と私も嬉しくなって思わず笑っている。

「バサッ」

「何?これ?」

手元から滑り落ちて、地面に散らばった私の教科書をコアが拾い集めながら

その開いていた高度の呪文ページを見ていた。

「教科書よ?クラスAの・・・」

無言でその文字を指で追いながら、まるで解読しているような仕草を見せるコアに私は不思議に思って聞いた。

「どうかした?」

まだ黙ってその指を動かしているコアに、教科書を片手に収めて覗き込んだ。

「これ、この前やったよっ！」

ようやくその可愛い顔を上げて、また嬉しそうな顔を見せながら彼女は言った。

そのページはAでも上位メンバーが習う魔法。

Bから昇格したばかりの私にはできない上級魔法。

「……え？それ……できたの？」

「うん。ちよつと複雑だったけど。」

ちよつとじゃない。セルスがそういうのなら分かる。唯、その台詞を放ったのは紛れもなく目の前の少女。

「他に……これとかは？」

おそる、おそるといふ風に隣のページの複雑な魔法を指さして聞いてみる。

心のどこかで私は、何か震える感情があるのを感じていた。

「あ、うん。こっちのが簡単だった！」

才能。

そんなもの、ドラゴンマスターにはない。

セルスは私なんかより努力して、あの場所に立っている。

才能なんか、ドラゴンマスターには関係ないはずなのに。

「すごいわ。」

そんな言葉でしか伝えられないことがもどかしい。

例えるのなら、朝の来ないバルメステ国に朝日が訪れるような。

あの国でうんと伸びをして、一日を始めるような・・・そんな感じ。

これが、白竜に選ばれた真のマスター。

「??？」

「セルスにも、勝るかもしれない！世界一のマスターになれるかも！」

いつもはそんなに張り出す事もない声を張り出して、喉が震える。

誰も敵いはしない、最高のドラゴンマスターになれるかもしれない。

「・・・あ、そいえば！！私、セルスと約束してたんだ！！・・・

ごめん、もう行くね！」

スツと私の目から逃れるようにコアが笑いながらそういった。

その顔は笑っているというよりも、何かを誤魔化しているだけのような。

「え、あ、うん。」

答えるだけの声を出すと、彼女はそのまま私の傍から駆けて行った。その風のように走っていく彼女の背中に、私は何か切なさを感じた。ねえ、もしかして。貴女が目指すのは、そんなに小さなものじゃないの？

そんな問いかけを自分の心の中で、背中に語りかける。

彼女が目指すのは、もっと誰もが願ってもいないようなことなのかも知れない。

漠然とそう思った私の上を、空はさっきと同じように穏やかに広がっているだけだった。

第12話 : コア

朝から何かがずれているような、そんな気持ちを感じていた。

マスター・リースが見せてくれた古くて、埃をかぶるその本を開くと私には読むことなんか出来そうもない文字が、ありのように並んで列を帯びていた。

「あら、興味ある？」

マスター・リースが教えてくれる魔術は、どこか華やかで私は好きだった。

おじいちゃんという言葉を思い出すたび、その感情の大きさが増す。

“魔術は幸せを与えるためだけに、存在している。”

「はいっ！」

私の返事にリース先生がそのページに、シワシワのその手をかざして何かを唱えていた。

その瞬間、唯列を作り止っていた文字達がいつせいに動き出す。

所々しか読めなかった文字が、頭の中に住み着くようにグルグルと回る。

「・・・っ？」

「少し辛いかしら・・・？平気？」

頭が一瞬グラツとして、それからもとの広い中庭の景色に戻る。

「平気です・・・。」

そういうと先生は笑ってその本を閉じた。

「世界一のドラゴンマスターになるなら、これくらいは頑張ってみて。」

それまで心の中に感じていた、何かが絡まっているような感情がすっと解けた気がした。

“世界一”

その言葉を聞いたのは、少し前だった。

その時からずっと、心の中に小さな違和感が生まれていた。

「そ……か。」

全てが解けたような感覚に、私は口から理解の言葉を零した。

「どうかした？」

「いいえっ！」

先生の言葉に首を横に振る。

ルキアはそんな私にどこか気づいていたようで、私のことを心配してくれていた。

それからその呪文を唱えながら、私は手を地面の上から何かを描き出すように動かす。

ドラゴンは主を持ってからは、主が得た呪文が持つ力を使い、成長するといわれている。

そのためか、私が呪文を唱えるたびリズムを合わせるように風に羽をバタつかせていた。

お昼、目の前に散らばったその教科書の端にそれと同じ呪文が見えて座りこむ。

指で文字を追うと、頭の中でまたありの列が激しく運動を始めるような感覚が襲う。

そのこと自体は、とても嬉しくて、授業で成功した事をリラに報告した。

空を背景にリラはいつもより大きな声で、その目を輝かせて私に言った。

「セルスにも、勝るかもしれない！世界一のマスターになれるかも！」

ずっと、心の中で絡まり続けていた感情がより大きく絡まったような気がした。

“世界一”
そう言われるのは、ルキアがいるから。

ルキアがいなければ、私なんて何も出来ない落ちこぼれ。

だから、そう言われることに喜びを感じることがどうしてもできなかった。

大好きなリラがあんなにも嬉しそうなのに、私は喜ぶ事ができなかった。

私はきつと、世界一になりたいわけじゃないんだ。

そう思ったとき、スルスルと絡まりは解けて授業中に感じた感情が再び生まれる。

魔術は幸せを与えるためだけに存在するもので。

私はそれを使って、世界一になりたいわけじゃない。

そんな固定観念が、外からの声に反応してどこか壁のようなものを

作り始めいたんだ。

リラ逃げるように去ったのは、そんな壁が作ったものだろう。だけど、私にも分からない。

世界一になれなくていいのなら、私は何になりたいのだろう。

“最高のドラゴンマスター”

その名をもつ、ドラゴンマスターになりたい。

そう思っていた私は、少しずつ何かはずれていくような気持ちを感じたんだ。

“世界一” 〃 “最高”

そんな方程式は、私の中ではどうやら成り立たないらしい。

頭の中で歩いていたあり達が、さまざまな場所へ散っていく。

この手に掴んだものを、この手から逃すように。

第13話　：コア

“世界一のマスターになれるかも”

そんな言葉が頭の中に響いて、離れない。

「何？どうかしたのか？」

「え？」

お昼を過ぎた頃、私は学校の屋上で色取り取りの葉が生い茂る

魔法樹まほうじゆの下で座って本を読んでいるセルスを見つけ、

セルスの隣にそっと腰を下ろして、精気を放つ幹に背中を預けていた。

セルスは横で本を読んでいて、私の気配に気づいたそぶりも見せなかったのに、

私が黙り込んでいると、本を閉じてこっちを覗きながらそう聞いてきた。

「私・・・変かな。」

“世界一のマスターになれるかも”　リラが嬉しそうにそう言った。

だから私も嬉しくなった。けど、どこか心の奥に悲しい感情が疼いている。

「何を今更。」

「・・・セルスは世界一になりたいの？」

皆が目指すのは、コンテストで一位になること？

“セルスにも、勝るかもしれない！”

誰かに勝つ事？

「いや、別に。．．．目指すものはない。自分がいけるところまで行けたら、それでいい。」

魔法樹から伝わるその木の鼓動と、セルスの言葉がどこか心地よくてきつと目を閉じれば幸せを描きながら、眠れそうな気がした。

「学校でたら、軍隊に入るの？」

「まあ、できれば。」

セルスは学校一の天才マスター。きつと卒業してもどこにでもいける。

軍隊に入れば、戦争を終わらせることだってできる。ただど私は．．．そんな凄い事をしたからマスターになったんじゃない。

「お前は？」

本を開きながら、私から眼をそらして彼は言った。

「．．．．．．．．．．」

答えられない、自分がいる。

マスターを目指したのは世界一になりたいわけでも、誰かに勝るためでも、凄いことをするためでもない。

じゃあどうしてマスターになった？

その答えはあまりにも幼いかもしれない、でも私は。

おじいちゃんみたいになりたかった。

ただ、楽しそうに笑っていた二人のように。

「ちょっと散歩にでも行くか？」

「え？」

また本を閉じて、セルスはいきなりその場に立つと空に手を上げた。

「来てくれ！」

その瞬間に風の流れと、匂いが変わる。

ザワザワと木がその風に揺れると、遠くから凄まじい速さで黒い竜が来た。

「俺のドラゴンのアルだ。」

紹介された黒竜はその赤く輝く目をセルスに注いでいた。

『何だ、急に。』

セルスは答える事もなさそうに、私はとりあえず声を上げる。

「こ、こんにちはっ！……」

大きくて、艶があつて。赤い目がこっちをにらみつけて怖い。けど、その目はどこか優しく、綺麗な瞳の奥に吸い込まれるような気がした。

「・・・お前も呼べ。散歩だ。」
「ふえっ!?!」

そう言いながらセルスはもうアルの上に乗っている。

・
・

来て。

心の中で小さく呟いた。

「呼ばないのか？もう、コールできたんだろ？」

屋上を吹き抜けていく風の流れが変わった。

遠くから駆けて来る風の匂いが伝えてくれる。

『跳んで』

その言葉と一緒に、心の中に傍にある壁から下に飛ぶイメージが浮かぶ。

その映像はまるでテレビで見ているようなビジョンで、私の心に映し出す。

もう既に空を飛んでいるアルとセルスを見上げて、それからそつと下を見た。

下の道を歩いている人はまるで、米粒のような大きさ。

「・・・えいつ!」

「なっ、コア!?!」

いきなり屋上から飛び降りた私にセルスが驚きの声を上げる。

その瞬間

ヒュウ”

真っ白のドラゴンが風よりも早く私の下に滑り込んで、私を背に乗せて空を舞った。

「ル、ルキアッ！」

『上手にできましたね。』

あの場所から足を離す時、少し恐怖を感じた。

けど、平気だと思った。

信じていたから、不安なんかなくなって私は空へ飛び込んだ。

やっぱり、迎えに来てくれた。

そんな思いで心がいつぱいになる。

「コアッ！！何してんだ！！危ないだろ！」

そんな私に、アルに乗って後ろから追いかけて来たセルスが怒りながら言った。

「えへへ〜」

「っていつか、いつ呼んだんだ？手も振らずに……」

心が繋がってるから。

だから手を振って、わざわざ旋律を作らなくても届くの。

「……お前は、軍隊に入る気なんかないんだろ？」

皆が言った。最高の軍隊に入れるとか、世界一になれるとか。

「うっん。」

小さい頃から、私のなりたいものも、目指すものも、唯一つだけ。それは世界を救うような凄い事じゃないかもしれない。だけど、思うの。

「そんなものより、もっと上を目指してるんだろ？」

私が目指すのは、世界を救うことだけじゃなくて、上に行く事でもない。

世界を救うよりももっとすぐくて、上に行くよりももっと難しい。

他の誰も変わりは出来ないような、世界でたった一人のたった一組の“伝説のドラゴンマスター”になりたいの。

全てを分かりきったかのように放たれた彼の言葉に、私の心は揺れた。

「うん。」

目指すものは、おじいちゃんにも負けないような伝説のドラゴンマスターだから。

そう、心の中で思いを固めた私に、空の風は温かく吹き付けた。

「なら、上がって来い。」

真っ青の空を白竜と黒竜は並んで舞う。

セルスが隣で真っ直ぐ前を向いて、頬を染めながら言った。

「え？」

「せめて、俺が居る場所くらいには来い。」

誰もが夢見る、貴方がいる場所。

頂点への最短ルートと呼ばれる、貴方の通る道。

「頑張る。」

セルスがすぐ隣で飛んでいるのに、どこか遠くに感じた。その姿はあまりにも綺麗で、魅入ってしまう。

こんな風に空を飛べるのなら、貴方の隣で頑張りたい。

“上”と呼ばれるその場所で。

第14話　：リース

白いドラゴンが、朝の白い空を駆けて私の目の前に舞い降りた。

「あら、ルキア？」

その瞳は何を語るでもなく、ただ幸せそうだった。

「せんせえっ！」

その背中から小さな声が上がリ、ちらりと白いマントが見えると今度はドラゴンではなく、少女が舞い降りてきた。

「ああ、コアちゃんだったのね。」

彼女の頬は赤く染まり、その目はぱっちりと開かれて世界を映している。

「私っ、クラスSに行きたいデス!!!」

昨日の曇っていた表情はどこかへ消えて、その顔は今朝の空のように晴れきっている。

例えるのなら、秋空の雲ひとつない大空のように。

「え？」

そんな彼女が嬉しそうに言った言葉が、私には理解できなかった。その言葉と、その顔が私の中でまるで一致しない。

「私、クラスSに行きたいです。」

興奮しきっていた声を精一杯抑えるように、彼女は落ち着いてそういった。

「・・・クラス、S・・・？」

唯呟くだけのように、声を漏らした私に彼女は短く返事をした。

「はい。」

もう、意志は決まっているのが分かる。

しかし私は何も言えずに、黙っているだけだった。

クラスSへの試験は難しく、クラスAの生徒でもほとんど受かりはしない。

それなのに、クラスDの彼女が今度の試験でクラスSの試験を受けるだなんて。

きっと彼女以外の誰もが驚くに違いない。

「確かに貴女は凄いわ。白竜であるルキアの主だもの。」

伝説のドラゴンマスターになるかもしれない。

私だって確かにそう思う。

「でも・・・。きっと、クラスSは無理だと思うわ。」

今までにクラスA以外からクラスSへ進級したものはいない。

私がそういうと、彼女は大きく息を吸ってそれからルキアを見るとまた私を見た。

「ルキアが白いから、私は凄いですか？」

彼女をクラスSに行かせたいとは思わない。

「伝説の白竜だもの。」

行かせたくない理由は、彼女の眼だ。

何人もの生徒を教えているが、クラスSの生徒も、クラスAの生徒もこんな目をしてない。

真っ直ぐで、純粹で、この世界の放つ光を映すその瞳はクラスSには向いてない。

ゆっくりとした朝風が、その湿りをそつと乗せたまま彼女と私の間を流れる。

「・・・ルキアは唯白い色をしているだけの、普通のドラゴンです。」

その風が一瞬強く、私に打ち付けたかと思うくらいの衝撃だった。

「ルキアは普通のドラゴンでしょう？」

早く走れるわけでもないし、魔法が使えるわけでもない。

辛い事があれば涙を流すし、嬉しければ笑う。・・・矢で打たれたら死んでしまう。」

白竜だって伝説だと言われているだけで本当は唯のドラゴンだったのかもしれない。

「ルキアが白い色をしているだけで、私が凄いわけじゃないです。」

彼女は普通のドラゴンライダーで、自分のドラゴンが伝説の白竜だということを知り、自慢しているわけでもなく、恥じているわけでもない。そう思ったとき、彼女の顔がスツとその緊張を解くように笑っていた。

「それにね、先生。」

その笑顔は唯の少女にしか見えない。

趣味はオシャレや買い物で、兄弟と喧嘩したり、好きな人と過ごしたりしている。

そんな唯の15歳の少女にしか見えないのに。

「私の“限界”を決めるのは、決められるのは、私だけですよ。」

そんな風に笑って、誰もが思いもしないようなことを簡単に言うてのけてしまう。

誰が私の限界を決める？・・・そう、私にとってそれは答えのない質問だった。

「私はまだ、無理だ何て思ってます。」

太陽はゆっくりと昇り始め、この世界の全てを平等に照らしている。風はどこから生まれるわけでもなく、この世界を吹き通す。

この景色はいつも変わらず、ここにあって、私は毎日のように見ている。

彼女に出会う前まではそうだった。

彼女と出会い、彼女の言葉は私に魔法をかけた。

いや、もしかしたら・・・世界の作られた常識に魔法をかけられていた私に

魔法を解く呪文の言葉を発していただけなのかもしれない。

太陽は彼女だけを真っ直ぐに、彼女のような人を励ますように照らしていて

風は彼女から生み出され、彼女のような人が風を吹かせる。

そして、この景色は唯一度も同じであった事はなくいつも変わっているのかもしれない。

世界はいつから、こんなにも広くなったのだろう。

「分かったわ。クラスS頑張りましょう。」

私は彼女が見ている世界に、今少しだけ足を踏み入れたような気がした。

その世界は私の立っている世界とは全く違って、何十倍も広大で、輝きに満ちていた。

その世界に足を踏み入れて、私は知った。

世界は彼女がいるだけで、こんなにも広がるのだと言う事を。

第15話　：ロイ

「あつ、ロイ!!!」

人ごみの中から誰かの呼ぶ声が聞えて、俺は足を止めた。

「・・・コア?」

「やっぱりロイも受けるんだよねっ、クラスSのテスト。」

広い講堂にごった返す人は皆、クラスSへの昇降テストを受ける者。今日は試験内容を聞きに、ここに集まったのだ。

そんなこの場所に、コアがいる分けないと俺は目を何度も瞬きさせる。

けれど景色から彼女が消える事はなく、笑いながらこっちを見ている。

“ロイも・・・”・・・も?

「まさか、コアも受けるの!?!」

「まさかって・・・失礼なっ。うん、このテストでクラスSを目指してるの。」

俺はこの学校に入学して、今回で6度目のクラスSのテスト。それを今回初めての彼女が、受かるわけがない。

「まあ、いい経験にはなるよね。」

「あははっ、ロイも冗談が言えたんだねえっ!」

彼女が堂々とそういうのを見て、俺は少し笑いそうになった。

俺が本気だとも気づかずになんかそうだった彼女はどうやら自身があるよ
うだった。

「本気だよ？・・・もしかしてコア、受かるつもりだったり・・・
するの？」

「当たり前だよっ！！」

希望者のほとんどはクラスAか、B。時々クラスCの者が希望する
事もあるが。

きつとクラスDからの希望者は、コアが初めてに違いない。

「落ちるつもりで受ける人なんか、いないよっ！！」

それもそうだ。

それならわざわざ受けなくても、練習を掴む方が賢い。
なら、彼女は本当にこの試験に受かるつもりなのだろう。

「そうか・・・。本気なんだね。なら、お互い頑張ろう。」

「うん。私、ロイには負けない！」

意気込む彼女に、俺は何も言えなかった。

彼女はそんな俺に笑いながら、それじゃ頑張ろうね。と手を振りな
がら走って行った。

それから周りの人数が少しずつ減り、俺も静かにそこを後にした。

外へ出ると、風がいつもよりも冷たい気がして体を強張らせる。
試験内容を聞いた限りは、今回は行けるかもしれないと思えた。
帰って練習だな。

そんな風に思い、練習メニューを考えながら手をかざした。

「来い。」

どんよりとした曇り空の端から、薄い青色をした竜が姿を見せる。俺はメニユーを作り終え、目の前まで飛んできたエルク（ドラゴン）の背に乗る。

『今度の試験は、頑張りましょっつ。』

「ああ。」

時々思う。

俺がエルクを選んでいなければ、白竜に選ばれることが出来たかも知れないのに。と

どうして卵を買って、育てようと思ったのだらう。

もしかしたら、俺が伝説のドラゴンマスターになれていたのかも知れないのに。

探し続けていれば、ルキアに出会い、俺が伝説の白竜を従わすことができたのに。

ふとエルクの背中から目を放して、ふわりと浮かぶ空の向こうを眺めた。

どんよりとしたこの空の下に、真っ白の竜が飛んでいるのが見えた。彼女のドラゴンを見るたびに思うんだ。

どうして俺じゃなく、コアなんだ？・・・と。

『筆記もあるんですよね？』

「ああ」

『実技、頑張りましょー！』

「ああ」

誰もが憧れるであろう、幻の白竜が存在し、伝説だと謳うたわれていた話は今

コアの手によって、新たなページを描こうとしている。それを俺はただ、横で見ていることしかできないのだ。

「・・・くそっ」

優雅に舞う白竜から、またエルクの背中に目を落とす。

俺のそんな言葉は前から吹きつけてくる風にかき消され、エルクには届いていない。

伝説を描く事ができたなら、どれほど幸せだろう。

そんな風に思いながら、俺は静かにエルクの背に収まっていた。

第16話 : セルス

昨日、講堂を少し覗いた時、俺の眼が移したのはロイとたった1人の少女だった。

「悪い、ちょっとロイ呼んでくれないか？」

クラスAの前に立っている男にそういうと、そいつは俺の背中の白いマントを見てから、ロイを呼びに行った。

「何？何か用？」

その教室の中から出てきたロイはどこか不機嫌で、喧嘩を売るような言葉を投げってくる。

「ここじゃあれだから、場所移動したい。」

「・・・いいよ、別に。」

分かっていたことだ。

こいつが俺の事を嫌いだったことも、その理由も。

廊下を移動しながら屋上をゆっくりと目指す俺の後ろから、彼がついてくる。

こんな風に2人で歩く事も、話をする事も初めてな気がする。

それくらい、ロイは俺を嫌っているし、俺も仲良くなんてことする気もない。

だからこそ、怖かった。

そっと屋上の鍵を外し、段差をまたいで屋上に立つ。

後ろを見るとロイも屋上へ立ち、その扉に鍵をかけていた。

「で？何？」

彼がどうしてこんなにも俺を嫌うのか。

それは唯、俺がクラスSだからではない。

きっと俺にわかるように、彼にもわかるんだ。

俺が彼女を・・・コアを好きだという事が。

「昨日、講堂にコアと一緒にいた？」

「それが？」

やっぱり。あの少女は間違いなく、コア。

「コアも受けるのか、クラスSの試験。」

「そうみたいだね。」

あの講堂で、2人の姿を見たとき、胸に何かが疼いた。

2人で立っている場所を、見たくはなかった。

俺があの場合に立つことは、できないと分かっているから。

「で、それが何？あいつは俺のだから言う気？」

いつだって傍にいた。

だけど、それがいつまでもそうだとは限らない。

今だって、クラスは全く違う。傍にいる時間だって少ししかない。

「そんなつもりはない。別に、俺のでもないし。」

そう、彼女はいつだって自由そのものだったから。でも、捕まえようと思わなくても、傍にいてくれた。そう、思っていた。

「へえ、そう。」

だから、唯2人が並んでいるだけでこんなにも焦っている自分に驚いた。

もしもそれが2人にとって当たり前なら、俺の隣はもう誰もいない。いつだって俺の隣にいてくれたのは、あいつだったのに。

「俺とコアと一緒にいるのを見ただけで、それ？ そんな風になるくらいなら、捕まえておけば？」

ロイの言葉はもつともだと思う。だけど、俺には出来なかった。

「あいつは上を目指してる。」

そう促したのは俺だ。

「クラスSに入って、トップをとる。あいつは本気だ。」

俺だってそうなって欲しいと思ってる。

けど知ってるんだ。それが何を意味するのか。

「けど、それは・・・俺からずっと遠くへ離れていくってことなんだ。」

白竜と契約を結んだという事は、伝説のドラゴンマスターになれる

素質があるってこと。
俺なんかより、ずっとずっと上を飛んでいくマスターになれるってことだ。

「だから、捕まえておけばって言ってるのに。俺は、捕まえようと思っよ?」

ロイが俺に言った。

ロイの感情が今言葉となって、放たれる。

分かっていた事実が、心の中にしっかりと存在し始める。

「お前が俺よりも頭がいいとか、成績がいいとか、強いとか。そんなのに負けない。」

コアは俺が頭がいいから傍に居るのだろうか。

成績がいいから、強いから、傍にいてくれるのだろうか。

俺は少なくとも、彼女に出会ってからそうではないと思っていた。

彼女だけはきつと、そんなものを失くした俺でも傍にいてくれると思ってた。

そんな彼女が好きだった。

「お前は捕まえられるかもしれない。

だけど、俺はあいつを捕まえる気にはなれないんだ。」

上へ行けといったのは俺だ。その俺が、彼女に傍にいて欲しいという気持ちだけで

彼女を捕まえ、この地にくくりつけてしまうようなそんな事はできない。

彼女は空を飛べる力を持っているのに、その羽をくくりつけてしまっうなんて。

「どっして？」

ロイが不思議そうに聞いてくる。

「俺は、いつだって自由なあいつが好きなんだ。」

あんな風に空を飛べたなら、あんな風に頑張ると言えたなら、世界は少しでも輝いて見えるのだろうか。

きっと今のままでは無理なんだ。

だけど、彼女を捕らえたら・・・きつとどれだけ頑張っても、彼女の見ている世界は俺には見えないだろうと思うから。

「あいつが見ている世界を、見てみたいんだ。」

輝きに満ちていて、止め処なく動き、生命は息をする。

「バカみたい。俺は、捕まえに行く。」

例え、あいつをこの場所に留まらせる事になっても。」

ロイの感情は知っていた。

きつとロイも俺の気持ちを知っている。

だからこそ、彼女には自由でいて欲しい。

自由でいて、・・・戻ってくる時は俺の隣がいい。そんな我が儘が通ると思えない。

それでも、俺はその夢を抱かずにはいられないんだ。

第17話　：コア

もう試験まで、1週間しかない。

私は学校の休み時間も、家に帰ってから、一生懸命練習をした。

そのうち何度かはルキアと、本番想定練習もした。

試験内容は一時間で、30分の規定魔法を見せる。

その後続けて残りの30分をフリーとして、自分の力を試験官に見せる。

もう試験まで、一週間しかない。何度考えても行きつくのはそんな言葉。

『・・・そんなに焦らなくても大丈夫ですよ。』

ルキアの優しい声が、夕焼けの風と一緒に私を包む。

ルキアには何となく、私が焦っているのが分かるのだと思う。

「ありがとつ。だけど、まだ・・・決まらないの。」

もう一週間しかないというのに、フリーで使う魔法が1つも思い浮かばない。

『・・・セルスさんに聞いてみては？』

「だめだよ。セルスには迷惑かけられない。」

『それではリラさんとか。』

「・・・私は、私1人で頑張りたいのっ！」

私は少し強い口調で、ルキアにそう言ってしまった。時間の無さに私は少し苛立ってしまった。

「ごめんっ、ルキア！！ルキアに当たるなんて・・・私・・・」
『コア。私は、貴女が好きですよ。精一杯で、頑張ってるのも知っていますし。』

私を言い聞かせるように、ルキアの眼は私をそっと覗き込んでいた。夕焼けでその蒼い目が少し赤く染まっている。

『魔法なんてできなくても、私は貴女が好きですよ。』
「ありがとう。」

ルキアがそんな風に言ってくれるのは、とっても嬉しい。ただ、今の私にはそんな言葉さえ、唯の甘えにしか聞えない。

『散歩に行きませんか？』

それを読み取ったのか、ルキアはそっとその白い羽を風に遊ばせ、私に聞いた。

「・・・行く。」
『よかった。』

あまりに綺麗なルキアに触れたくて、私はそっとその背に乗る。フワッと地から足を放して、ルキアが空へゆっくりと近づいていく。夕焼けに焦がれた大空は、ピンク色の雲が転々と広がっている。

「綺麗だねっ！」
『はい。』

ぬるい風が頬を掠めていく。会話が消えて、風の吹く音しかない。世界はこんなにもゆっくりと動いているのに、私はあんなにも急い

でたんだろっ。

確かに、早くセルスの近くに行きたい。

だけど、そう思ってる所為で私は、大切な気持ちを忘れかけてたかも知れない。

『コアは・・・』

静かだった空気に置かれたような言葉が聞えた。

『コアは、私が何色をしていても、契約してくれましたか？』

それは、私が考えもしなかった言葉だった。

「えっ!？」

『もし、私が黒色をしていても、契約してくれましたか？』

その声はとても切なそうで、ルキアからは悲しいような感情が伝わってくる。

どうしてそんな事を考える必要があるの？

私は、コアの色を気にした事なんてない。

「あたりまえだよ?」

何ていったら、ルキアは安心する？

ルキアは何色でも、ルキアでしょ？

「私が、ルキアの色で契約したと思ってたの?ずっと、ずっとこんなに不安を感じてたの?」

私が、ルキアを苦しめてたの?

『コアの所為でこんな事を思ってるんじゃないです。でも、私は白い色をしていると理由で、何人もの人間に契約を求められました。』

ルキアは優しいんだよね、人一倍。

私が苦しんでいたから、散歩をしようと言ってくれて。

こんな風に悩んでいるのだって、隠して。

私はルキアと約束したんだ。・・・自由と、真の絆を与えるって。

自由はともかく、私は真の絆を与えられてるのかな。

こんな風にルキアに気を使わせて、ルキアを苦しめて。

「ルキアは真の絆が欲しいって言ったよね。」

『はい。』

「例えばそれって、白竜だから得られなかったものなの？」

『え？』

「私は、ルキアが今までそれを本気で望んでなかったから、得られなかったんだと思うの。」

白竜だとか関係ない。私はどんな色をしたドラゴンでも良かったんだもん。

そのドラゴンを私を呼ぶドラゴンなら、私を必要とするドラゴンなら、例え白でなくても。

「白竜だから、得られなかったんじゃないんだよ。」

『そうかもしれませんが。』

「この世界に、白竜だから無理だとか、白竜じゃないから無理だとかないんだよ、きつと。」

白竜だから選んだとか、白竜じゃないから選ばなかったとか、そんなの無いの。

ルキアが私の名前を呼んでたから、ルキアにはルキアしかないものがあって

私にはそれがとても素敵に思えた。だから選んだんだよ？」

だからルキアは何も心配になることなんてない。

『ふふっ。同じです。』

「え？」

『私も、貴女だから契約した。』

貴女にしかない物があって、それに惹かれたから契約したんです。』

夕日はどんどんと暗い夜に染められて、時間は過ぎていく。

『貴女にしか出来ない事、それが貴女のよさですよ。』

魔法なんて本当はどうでもいい。凄い魔法じゃなくても、強い魔法じゃなくても。

それが私にしか見せられない魔法なら。

「ありがとっ！！明日からもう特訓するっ！！！！」

『決まってよかったですね。』

ルキアが気にする必要なんか本当はないのに。

だって、ルキアと契約するまでルキアが白色だなんて、知らなかっただもん。

私はそんな事を思いながら、フツとその背中の上で笑った。

第18話　：リース

「今回の昇降試験はかなり移動しますね。」

教官室で教師の1人が、何枚かの希望者名簿に眼を通しながらそう言った。

ドラゴンを持つことによって、一年生は

実技を得意とする生徒と実技を苦手とする生徒に分かれる。

何人かの教師がその言葉に賛同するように意見する。

そのとき、その会話の間をすり抜けて一言誰かが言った。

「クラスDにいる・・・コアでしたっけ？どうなるんでしょうね。」

「ああ、あの白竜使いの。」

教師の間で話題の白竜使いのコアちゃんは、クラスSも可能なほどの能力がある。

試験一週間前になり、ようやく自由競技で使う魔法を決めたみたいだった。

「彼女、クラスCの希望者の中にはいないみたいですよ。」

その数枚の紙の上にコアちゃんの名前がないクラスCの試験官は呟くように言った。

「クラスBにも。私てつきりCだとばかり・・・」

「え？僕はBだと・・・、それじゃAですかね。」

クラスBもAにもその名はない。

ある日突然彼女は言った。

“私、クラスSに行きたいです！！”

上を目指そうとしなかった彼女が自らそう言って来た。前に一度、上級魔法をしたことがある。しかし彼女はそうとは知らずに操った。

ルキアは上に行く事を望んでいる、でも彼女は違った。何が彼女を変えたのかは分からない。でも

「クラスSよ。」

クラスSの希望用紙に書かせた。クラスSの試験内容を練習した。

「え？」

彼女は空を飛ばうとしている。

「クラスDの子が・・・あははっ、何の冗談ですかっ。」

「本当ですよ、何言ってるんですか。」

教師達は皆笑った。初めに、私がありえないと思ったように。しかし今はその笑いに、笑ってしまいそうになる。

「次クラスSの試験ですよ。ほら、いつてらっしゃい。」

驚いたり笑ったりしている教師達はその言葉に顔を強張らせた。

その教師たちのうちのクラスSの試験官を追い出した。

コアちゃんの描く魔法は、並みのマスターじゃ描けない。

誰が見ても分かるくらい、凄いの。

第19話　：ロイ

君は知っているだろうか。

今この場所で君の姿に魅入っているものが思っていることを。

「行くよ!!!」

それは後半のフリー種目の始まりの合図だった。

その声と共に空を飛んでいたコアが地上へ飛び降り、ドラゴンはまた空を飛ぶ。

その行動にそこにいる誰もが驚きの声を上げた。

大抵の生徒はドラゴンに乗ったまま、続けるのだが、彼女は地上に降りたのだ。

「初めまして、こんにちわ。」

彼女の声が一瞬にして、そのざわついた声たちを抑えた。

誰もが驚き、俺ですら驚きの声を上げる。

試験は公開試験なだけであり、決して会場などではない。

見るのも自由、見ないのも自由。ただ、彼女の試験を見に来る人は多い。

「これからお見せするのは、極々簡単な魔法です。」

試験中に、今までこんな事をした奴が言った奴がいただろうか。

地上でそんな風に笑いながら、こんなことを言って、試験は大丈夫なのだろうか。

「でも、私は難しい魔法だけが素晴らしい魔法だとは思えません。どうか、楽しんで下さい。幸せの魔法を、貴方にお見せします。」

誰もがその言葉に驚き、おもわず笑いを零す。

「ルキア、頑張るよ！」

『はい。』

しん、静まる会場と化したこの場所で、彼女はどんな魔法を見せるのだろうか。

その場に座り込んでいた人は立ち、空を見上げ、今か今かと待ち望むような顔をする。

「フライ」

少女が言葉を発すると、そこにいる人は え？ という顔をしてみせる。

フライという魔法は、自己魔法の基本中の基本で、きっとこの学園にいる限りそれくらいはできて普通だと言われるような魔法。

どうしてそんな魔法を？と思う気持ちをこらえ、彼女だけを見ている。

すると彼女はパツと魔法をやめ、空から落下し始める。

その光景に誰もが驚きと心配の声を上げる。

その瞬間、真っ白の色をした天使の羽のような何か少女を空へと引き戻す。

そう、彼女のドラゴンだ。

「すごい！」

「カッコイイ！」

ポツリ、ポツリ、そんな言葉が耳に入ってくる。

しかし彼女は感動する間も与えず、その大空に手をかざし叫んだ。

「ウォーター！」

つまりは水の魔法。これだって元素魔法の1つで、初歩魔法。

彼女は本当にクラスSに上がるつもりがあるのだろうか、そんな疑問に駆られる。

そんな風に思っている俺のうえには大量の水の玉が浮いている、というより落ちてくる。

地面にいる人はとっさに自己魔法をかけその自ら逃れる。

しかし、水が降ってくる事は無かった。

「春に舞う雪の華です。」

天から降ってくるその声と、真っ白の華の形をした雪。

彼女の撒いた水は、ドラゴンの口から出てくる冷気により急激に冷やされ

コアはその雪の形を瞬時に花に変えたのだ。

「ライト」

一段階難しくはなったものの、以前簡易魔法に過ぎないその魔法をかける。

すると太陽とコアの撒いた光が、

その雪の華をキラキラと輝かせ、まるで宝石のように見せた。

「フレイム・エミッション！」

ふわふわと舞い降りるその花の宝石を、火よりも強い炎が一気に焦がすように渦巻く。

すると跡形も無く消えはて、そこに残るのは湿った空気。

「魔法がどれほど優れていても、七色の幸せを描く魔法はありません。」

呪文ではない言葉が空から降りてくる。

その言葉に、ここにいる全員が耳を傾け、試験官でさえ点数をつけるのも忘れ魅入っている。

「どんなに難しい魔法を描けたとしても、それで幸せになれるとは限りません。」

それなら人は何故、魔法を操るのでしょうか。私は幸せを与えられたらそれでいいんです。」

クラスSの試験を見に来た人々は今、その言葉に何を感じたのか。

きつと皆、同じことを思っているに違いない。その言葉に、温かな思いを抱く。

「サン・アンド・レイン！」

太陽の光がその魔法の輪をすり抜け、より一層強く照らす。

そこに小さな水のシャワーが降り注ぎ、空には七色の虹が描かれる。その虹に地上の者はただ綺麗だ、とかそんな言葉を漏らすだけ。

この世界に虹を直接作る魔法はない。それを、こんな風に作るなん

て。

「ルキア。」

彼女が真つ白のドラゴンの名を呟く。

その響きにドラゴンは空から離れ、彼女を乗せたまま地上スレスレまで降りてきた。

そして、その口から優しい風の吐息と吐き、熱気を飛ばした。すると、空に描かれていた七色の橋は見る見ると丸い円になったのだ。

そう、考えればこれも簡単な魔法を使った屋気楼^{しききう}。

「七色の幸せが、円を描くように永遠と続く事を願って。」

気づけば時間はすっかり終わりに近づいている。

時が止まっていたかのように感じるほど、その魔法たちに魅せられていた。

たった幾つかの基本魔法が、こんなにも心を動かし、魅入らせる。

「終わりですっ！ありがとうございます！！」

地上に立っている少女がそう言うと、全ての糸が切れたようにドツと歓声が上がリ、ここにいる全ての手から拍手が送られる。君は知っているだろうか。

今この場所で君の姿に魅入っているものが思っていることを。

魔法はこんなにも幸せを与えてくれるものだ

第20話　：セルス

「クラスSの試験で、クラスDのあの白竜使いが試験中だつて！」

「すごいらしいよっ！！」

「見に行こうっ！」

試験を受けないもの達が集まる大広間に、そんな声が飛び交いすぐに多くの人間が外へと飛び出して行った。

「あらセルス。あなたは見に行かないの？愛しの彼女の試験。」

リラが鼻で笑いながら近づいてきた。

「彼女じゃない。それに・・・見る必要なんかないだろ。」

「あら、どうして？」

「受かる事なんて、目に見えてる。」

暖炉の傍で分厚い本を開いて、難しい呪文に目を通す。

その横にリラが静かに腰を下ろした。

使われていない暖炉は、より冷たく感じさせる。

「私、少し無神経な事言ってしまったかも知れない。」

沈黙を破って、ぼそりとリラが呟く。

“私・・・変かな。”

そういえば、少し変なこと言ってたな。

「コアか・・・。」

「・・・世界一のマスターになれるかも、って。」

難題呪文を楽々とこなしたのよ？だから私・・・」

あいつが目指すのは、上じゃない。誰かの頂点でもない。そんなあいつはきつと、リラの言葉に何かを抱いただけ。

「別に、そんな事。コアがいつまでも気にしてると思つのか？」

気のみ気のままのあいつが、留まっているわけがない。じつとなんてしてられないんだ。

すぐに飛び立とうとして、駆け出そうとして。

「・・・そうよね。」

「ああ。」

きつと気づいた時にはもう、捕まえられないくらい遠くを飛んでいるんだ。

「さっど。」

「あら、見に行くの？」

「いや。もう試験も終わりだろう？あいつを迎えに行くだけだ。」

だからせめて、傍にいられるうちは傍に居たい。

翼をもちで、地上に縛り付けられるならどんなに楽だろう。

“俺は、捕まえに行く。例え、あいつをこの場所に留まらせる事になるとしても。”

ロイのそんな言葉が頭から離れない。

俺にはそれが出来ないのだから、飛ぶしかないんだ。

「愛しい彼女の元へ？」

「・・・彼女じゃない。」

俺が追いかけて続ければいい。
彼女には飛んでいて欲しい。だから、俺は飛ぶ。

「あ、待って!!」

「・・・何。」

俺の背中に声が掛かり、足がゆっくりと止まる。
振り向くと、リラが心配そうな顔をしてこっちを見ている。

「・・・セルス、コントゼフィール学院から推薦、来たんでしょ？」

コントゼフィール学院は、世界でトップを争うほどの凄い学校。
2週間前、その学校から俺に推薦書が届いた。

世界の伝説を作ってきたマスターが直に教えてくれるあの学校は
世界一を目指す俺にとっては、この上ないチャンスだった。

「ああ。」

けど俺はその封筒を机の上に置いたまま、まだ目を通していない。

「どうするつもりなの?・・・行くの?」

「・・・」

「そのこと、コアは?」

今のあいつでは、俺と一緒に留学は不可能。
そつとその封筒に触れると、そんな考えが頭を回った。
それから一度も触っていない。

「知らない。」

言える分けない。

上がって来いと言った俺がここからいなくなれば
あいつはきつと、上がる事をやめてしまう。

「言っていないの・・・？」

こんなチャンス、もう二度とないかもしれない。

けど、今あいつから離れると・・・もう二度と捕まえられない。

「・・・あいつには、言わないでいてくれ。」

俺は願いを叶えたい。

努力して、早くの上がって行きたいという願い。

もう1つは何があっても、叶わないと知っても、きつと一生抱き続
ける願い。

「俺が、自分で言う。」

二つはまるで矛盾していて、どこかで繋がっている。

そう、まるで彼女と俺のように。

何も言わないリラをその場に残して、ゆっくりと彼女のいる場所へ
歩いていく。

傍にいたい。そんな願いが消える事なんて無いんだ。

たとえ空を飛べなくても、唯。

君の傍に

第21話 : コア

「今日は俺の家に来てもいいけど？」

そう言つて、頑張つたお祝いに、セルスが家に呼んでくれた。
セルスの家のソファ―に顔をうずめる。

「・・・セルスの匂い・・・」

暖かくて、優しくて。空みたいな匂い。

「追い出さず、変態。」

「やだあ！」

セルスのしつかりした腕が私の腕を掴んでいる。
いつもならここで終わるのに、セルスはその手をゆっくり
私の小さい手に重ねて、そのまま隣に座った。

「なあ」

ドキドキと心臓が音をたてて五月蠅い。

「お前、俺が居なくなったらどうする？」

ドクンッ”

ドキドキとは違う、また別の脈が心臓を鳴らす。

「な、何？いきなり」

「別に。」

深い意味はない、とセルスはそっぽを向いた。

「……なあ、どうする？」

「……どうするって……」

この手を放す時が来るって意味？そんな風に覗いても見かえしてはくれない。

遠くにいつちやうのは嫌だ。会えないのなんか絶対嫌だ。

毎日会って、毎日笑って、毎日怒って。いつだってすぐ傍にいてくれたのに。

「遠くに行っちゃうの？」

「別に、そーいう意味じゃ……」

傍にいて。ここにいて。離れないで。放さないで。

そんな言葉が頭の中をグルグルと回る。

「……仕方ないよ。」

思ってもないような言葉が私の口から零れていった。

「永遠と傍にいられる……訳じゃないし。」

セルスに好きな人ができたら、離れなくちゃならない。

セルスが目指す場所に行くなら、さよならしなくちゃならない。」

いつまでも、頼り続けてばかりじゃダメ。

心の中でそんな思いが口から流れ出る。

離れないとか、ついて行くとか。そんな甘い事は言ってもらえない。

「お前……」

大好きなセルス。いつだって、私から逃れていく。

「大好きだもん、大好きだから……」

「俺、お前が分からない。」

怒るように静かに、呆れるように悲しく、彼が放った言葉が深く胸に突き刺さる。

「え？」

「お前の大好きなんて、どうせ忘れられる程度なんだろ。」

どうせ……忘れられる？どうしてそんな風に言われなくちゃいけないの？

貴方に何が分かるの？……大好きって気持ちから、いつも逃げる貴方に！

こんなにすぐ傍にいて、この手が触れ合っているにも、貴方にこの気持ちは伝わらない？

「セルスには分かんないよっ！！」

喉の奥から怒りまかせに言葉が出て行く。

その勢いで彼の手を放して、パツとそのソファから立ち上がる。

「ああ、分からない。」

そんな私に、突き離すような言葉を座って下を向いたまま、セルスが言った。

「どうしてそうやって、すぐに手を放すのっ!?!
どうして面倒くさくなったら、諦めようとするの!?!」

私はただ真っ直ぐ届けようとしたでしょ? 貴方にはそんな事も、届きはしなかった?

そんな気持ちで射るように見ていた彼の眼が、私を見上げて言った。

「それはお前だろっ!?!」

シンと静まる空気が、私の頭を冷やしていく。

「毎日大好きだとか言いながら、結局どこに行ってもいいんだろ。
その程度の気持ちで、大好きなんか言うな。」

その程度だなんて、勝手に決め付けないでよ。

悲しみのような怒りがそっと目から溢れ出ていく。

大好きだから……。どこに行っても想ってる自信があるから……。

ちゅっ

離れていた手が握られ、強く引き寄せられたかと思うとソファーに背を預けて押し倒される。

そして静かに、ゆっくりと、優しく、彼の唇が私の唇をそっと塞いだ。

「……っ!?!」

「……大好きってのは、何が何でも放したくないって気持ちなんだよ。」

お前のは、大好きだなんて言えない。」

追い続けて、捕まえたくて。どうしたら貴方を捕まえられるかばかり考えて。
こんなにも溢れ出して止まらない感情を、どうしたら貴方に伝えられる？

握られていた手が、彼の握っていた感覚が、私を締付けるように思わせる。

「……どうして捨てようとするの？」

私の呟いた言葉に彼が驚いたような顔を見せる。

「どうして、諦めようとするのっ?! どうして……逃げてるのは、セルスの方だよっ!」

押し倒されたソファーから、セルスを押し返して玄関まで走った。涙が零れる。前が滲む。光の分散が、まるで夜景のように世界を舞う。

「……セルスなんか、どこにでもいつちやえ!」

パンツ”

外の風が冷たく刺すように私の頬をかすめて行った。

涙が乾いては潤い、乾いては潤った。

傍にいて欲しいだなんて、言えないよ。逃げる貴方を捕まえるのに、精一杯だったの。

この気持ちを否定しないで。誰にも負けたりしないくらい、大好きなの。

どこにも行かないで?ここにいて?この手を放さないで。

貴方にこの気持ちで、筒抜けになってしまえばいいのに。

第22話　：セルス

『世界の大きさ、知ってる？』

あの時の言葉が静かな部屋に響き渡るように、こだましたような気がした。

彼女が泣きながらこの部屋と飛び出て行った後、俺はため息をつきながら

ソファーに寝転び、目を閉じた。

『世界って広いよね！どれくらい大きいか知ってる？』

幼い君が瞼の裏でくつきりと笑っている。

その言葉に幼い俺は、この世界の表面積を答えたんだ。

そしたらコアはその小さな手をいっぱいに広げて言ったんだよな。

『それって、これよりも大きいの？』

その頃から勉強に励んでいた俺の世界をひっくり返した言葉。

思い出しただけで笑いそうになり、俺はふうと深呼吸をした。

さっきまであんなに明るかった部屋が、まるで電気が切れかけているように暗い。

コアがいなくて、この世界は光を失ったように暗くなってしまった。

そんな事を考えながら彼女が出て行ったドアから外に出る。

ふわりと風が吹くと、空から大きな鳥のような生き物が降りてきた。

「・・・ア・・・ル？」

『よう。・・・ちよっと出かけないか？』

そう言えばアルも出会った時、コアと同じような目をしていた。

「ああ。」

“世界ってそんなに広いのか？”

彼の言葉もまた、俺の心の中に残っている。

ゆっくりとその背に乗ると、黒い翼がかぜを動かし、夜へと舞っていく。

『こつも荒れてると、遠くにいてもそれが分かる。』

アルが呆れたような声を出して言った。

「・・・そうか？」

『コアと喧嘩か。』

「喧嘩・・・かな。」

分かっていた、彼女が俺をどれだけ想ってくれているのか。

その気持ちに嘘なんか無いってことも。彼女も俺も、唯、想い合っていただけ。

それに、彼女の言葉が持つ意味だって気づいてたんだ。

“・・・仕方ないよ。”

その言葉が決して本心じゃないって事だって。

「アルは・・・上に行きたいか？」

彼女は俺のためにそう言った事だって。

けど、その言葉が俺をどれほど悲しみに突き落としたか。

春が終わわりかけて、夏の匂いを運んでくるこの風に、すこし悲しみ

を感じた。

『はっ。いきなり何を言うかと思えば。俺は何にもいらねえよ。あー．．．でも、食い物食えて、寝れたらそれでいい。』

そんな無欲で、バカみたいな答えに思わず笑った。

どこから流れてくるのか、分かりもしない風に逆らいながら空を飛んでいく。

「俺は上に行きたい。」

どこまで行けば、“上”だというのが分からないが、この風に逆らうように、どこまでも上がれる限り上へ行きたい。そんな風に目を閉じて風を浴びながら言うと、アルは軽く笑って言った。

『だろーな。』

その言葉が心地よく感じる。

「一秒でも早くトップに立ちたい。頂点へ行きたい。」

『だから努力してんだろ。』

「ああ．．．。」

努力と呼ぶのかどうかはどうでもいい。

ただ、自分出来る精一杯をしている。それは．．．上へ上がるため、だったのに。

『コン．．．何とかって学校はどうすんだ？』

今、その延長線上で待っているものに足が竦すくんでいる。
どこからともなく吹いてくる風に向かう事よりも、その先に待つて
いるものに恐れて。

コントゼフィール学院に行けば、思い描いていた未来は確実に叶う
だろう。

世界一の夢への最短ルートなのだから。

「……どうするかな……」

それなのに、悩んでいる俺がいる。悩ませているものがある。

「コア……」

呟つぶいてしまえば、その気持ちは唯真っ直ぐに心を示すのに。

あの目が俺を放しはしない。俺はあの目を見た時から捕らわれたま
ま。

『あのお嬢ちゃんは、何か……不思議な力を持つてんな。』

「ああ、そうだな。」

『お前は、本気で欲しいもんを諦めねえだろ。』

今の俺が本気で欲しいものは何だ。

道の先で待つている世界一か。これから捕まえられなくなってしま
う彼女か。

世界一を選ぶのなら、彼女は自由に空を昇っていくのだろう。

けど、彼女を選べば、彼女は俺を放したりはしない。彼女は俺の傍
にいろだろう。

世界一が欲しいわけじゃない。けど、彼女を捕らえるようにして傍
にいたくはない。

「・・・コアの所へ、連れて行ってくれ。」

二つの願いは互いに、まるで矛盾していて、どこかで繋がっている。
そう、まるで君と俺のように

なあ、そうだろう？

だからこそ、願わずにはいられないんだ。それが例え、叶わないと知っていても。

第23話　：コア

「君がコアちゃんかな？」

薄暗がりの中、私の部屋の前に立っていた知らない男の人が、私を見て微笑んだ。

「？」

頭がいつぱいだった。セルスはもしもの話をしたけど、もしもじゃなくて。

それは私にとって、とても辛いもので。

差し出された小さな紙には、その人の名前が書かれていた。

私はとりあえず部屋に上げ、そっと暖かい紅茶を入れた。

ふと息をつくとき、その人は一枚の紙を机の上において話を始めた。その内容はほとんど覚えてない。最後の言葉だけが、私の耳に入る。

「推選者の中には、同じ学校のセルスという生徒もいますよ。」

知りませんか、と男の人は軽く笑う。

「・・・本当ですか？？」

「え？」

「本当に、セルスがつ！？」

「・・・え、ええ。知り合いましたか。」

もしもの話はこの話だったんだ。私の中で明らかになった事実がじんわりと広がる。

セルスにとってこんなにもいい話なのに、私と比べてくれたんだ。

そんな思いで、心がまたいっぱいになる。

「私っ、行かなきゃならないところあるんで、失礼しますっ!!」

「え、あ・・コアさん!このお話しは?」

「。。」

振り返ってその答えだけを告げて、急いで外へ出る。

私なんかと比べてくれるだけで、充分に嬉しかった。それなのに私、最低な事言ってしまった。

彼がどれほど悩んで、その話を私にしてくれたのかも知らずに。

早く、セルスに謝って・・・言わなきゃ。

大きな扉をくぐって、道を走って敷地の外へ出たとき。

風の流れが変わった。

「コアっ!」

上から降って来たのは、黒い竜とセルスの声。

「セルスッ!」

その声に返事をするのと同時に、アルが着地して、その背中からセルスが降りてくる。

「言いたい事があるんだ。」

「セルスねっ、コントゼフィール学院に推選されたんだね。」

セルスの言葉を遮って、風に向かって言葉を放つ。

暗い道に、立つセルスが眩しくて仕方ない。

「な、んで知ってるんだ?」

そうやって甘えてたら、きつと手に入れても嬉しくなんかない。
もしかしたら、遠ざかって、一生手に入らないような気がするの。」

私が目指すものは、私が努力しなきゃ得られないものだと思う。
ルキアがいるから入れたなんて、ルキアに失礼だよ。

「じゃあ・・・」

濁るようなその目を見せて、彼は言葉の続きを言おうとする。

「駄目だよ？セルスは行くの。」

その先の言葉は聞きたくない。私には聞けない。

それはセルスの優しさかもしれないけど、私はそれを受け取るわけにはいかない。

「セルスが大好きだから、私はそれを許す事はできない。

もしも、私がセルスのためにそんな風にしたらどう思う？」

「それは・・・」

「それを優しさだって受け取れる？・・・違うよね。だから、いい。

セルスは、行くの。行かなきゃならないの。」

こんな所で、私の所為で立ち止まってなんかいてほしくない。

遠くから吹いてくる風に逆らいながら、もっと遠くで飛んでいて欲しい。

私は、頑張つて、少しでも高く飛べるようになりたいから。

「頑張つて？私、すぐに行くから。」

行きたいけど、傍に居たいけど。少しでも強がりを見せてね？

「それがお前の、大好きか。」

「うん。」

「・・・俺はお前みたいな奴、待ってるほど優しくないけど。」

ここにいて欲しい。一緒に歩いて行きたい。

でも、私が好きになったのはいつだって今できる精一杯をしている貴方だから。

「すぐに来い。・・・ちゃんと、想ってやるから。」

「うん！」

遠くても、辛くても、苦しくても。頑張って、隣に立つよ。

・・・うん、いつか、それ以上に。

「ま、俺に彼女が出来ていたら・・・」

「やだあぁっ！！！」

抱きつけば、手を握れば、もう二度と放さなくてすむように。

第24話　：リラ

「本当に行かなくて良かったの？」

草原に立ち、空の端を飛んでいくセルスを見ているコアは悲しげな目をしていた。

知ってるの。コアがどれほどセルスを好きだったか。だからこそ、コアが自分で残ると決めた事が不思議でたまらない。

「・・・うん、いいの。」

遠くを飛んでいく黒い竜を見ながら、コアが答える。

「泣きそうな顔してるわ。」

「うん・・・泣けそう・・・。」

悲しそうな笑顔を向けて彼女はそういった。

「どうして、ついていかなかったの？」

絶対に付いて行くと思った。

あんなにもセルスが好きなコアが、自らセルスがいない場所に立つ分けないうって思ってたのに。

「“付いて行く”んじゃ駄目なの。私が、私の足で行かなきゃ行けない場所だから。」

悲しそうな笑顔が消えて、私に向けられた目は真剣そのもの。

「コアが目指すのは・・・」
「伝説のドラゴンマスターだよ。」

それはまるで夢のような話。

世界中の誰もが知っている、あの伝説のドラゴンマスターの名を継ぐなんて。

心のどこかでそう思っていたのに、彼女ならできそうな気がして心がドキドキする。

白竜を従えて、甘えたりしないで、ただ真っ直ぐに夢を夢にしてない彼女だから。

「なれるわ、きっと。」

「私もそう思うの。」

なりたいたいじゃなく、なる。彼女はそう言った。

心地よく吹いていた風は、まるで全てを分かりきったように草原を滑っていく。

その言葉はいつか、誰かに語り継がれるのだろうか。

そして、その誰もが私と同じ気持ちになるのだろうか。

「私、今度・・・アルファルベータ学院の試験、受けようと思うんだ。」

突然、彼女が前を向いていった。

太陽が暖かく彼女と私を照らしていた。太陽に照らされている彼女は私に眩しく見えた。

「アル・・・ファルベータって、あの!？」

コントゼフィール学院と張り合うほどの高等マスターズスクール。

「うん。」

「あの試験がどれほど難しいか知ってるの？
きつとセルスでも、3回以上は受けなくちゃならない。合格者は、
3人いればいいほうなのよ!？」

過去五年で合格者は10人。受験者は一度に何万人。
ほとんどの生徒は、教師によるスカウトだ。
そのため、受験者が受からないときさえある。

「・・・知ってるよ、私なんかじゃ受からない事くらい。」
「なら・・・!」

どうしてそんなことするの、と問いかけようとすると私の言葉を塞いで
彼女はゆっくりと小さな手を太陽と風に精一杯伸ばして言った。

「それでも、頑張らなくちゃ。
私、思うの。もっと、もっと、って手を伸ばすから、先があるんじ
やないかって。」

暖かな風が、止まった。
時の流れが止まってしまったかのように、その景色に魅せられる。

「もしも、この手を伸ばす事を止めちゃったら、もうその先はない
と思うの。」

止まった風が、また柔らかく私とコアの間を吹きぬけていく。
ただここに立っているだけの私と、空を飛ばうとしている彼女の間
をゆっくりと。

「でもね、手を伸ばし続ける限り・・・先があると思うの。」

その笑顔が、強さなのだと思った。

信念が、真っ直ぐに・・・どうしてこんなにも強い心を持つてるんだろうか。

私が探し続けるものを、どうしてこんなにも容易く持っているのだろうか。

「だから、怖くない。何度落ちても、何度でも受ける。」

風の流れが変わり、空の端から白いドラゴンが飛んでくる。

その色はまるで、コアの心を表わすように美しく。

朝空に唯一つ、ひらりと軽く花びらのように舞いながら、目の前に下りてくる。

「ルキア」

その白竜に近寄り、笑いかける彼女が。

私の目に一瞬、伝説の白いマントが風に揺れたように見えた。

彼女はどこまでも飛んでいくんだろう、ふいにそう思った。

どこまでも、どこまでも、彼女は限界なんか知らず、風のようにどこまでも。

それは答えが無いからじゃなく、唯、答えのない夢を叶えるために。

そう思うと、静かに照らす太陽の光は、まるで彼女だけを照らしているようだった。

第25話　：コア

「ねえ、おじいちゃん。」

「どうした？」

「どうして、ドラゴンを使って戦うの？」

そこは草原に小さな木が立っていて、戦争なんかがある世界とはかけ離れた別世界のような所。

「どうして、人は戦うの？」

どうして、ドラゴンと一緒に戦うんじゃなくて、“ドラゴンを使う”って言うの？」「

赤い林檎の色をしたワンピースを風が靡^{なび}かせて、少女は問う。

老人と小さな少女と、それから白いドラゴンは彷徨う風を浴びている。

その少女の質問に、おじいさんはドラゴンを右手で撫でて答えた。

「真のドラゴンマスターじゃないからじゃよ。」

「しん・・・の？」

「真のドラゴンマスターなら、共に戦うもんじゃから。」

「なら、おじいちゃんは・・・しんのドラゴンマスターじゃないの？」

おじいさんの答えに、少女の疑問は一層広がったようだ。

「さあ、わからん。エルクーナに聞いてみんとなあ。」

その大きな疑問におじいさんは笑ってドラゴンの目を覗いた。

『それを、私に聞きますか……。』
「エルクーナっ。私のおじいちゃんは、真のドラゴンマスターだよ
ねっ?」

少女もまた、同じような目をしてドラゴンを覗き込む。

『そうですよ。この人こそ、私という白竜が選んだ世界一のドラゴ
ンマスターですよ。』

そんな少女の眼に笑いかけ、白竜は優しい声を出していった。
そうエルクーナが答えると、少女は目の輝きを増して笑った。

「あれ?でも・・・おじいちゃんは戦ってないよ?」

その笑顔がすつと流れて、また疑問の顔。

「戦う事が、ドラゴンマスターではないからの。
エルクーナを傷つけずにすむなら、ドラゴンマスターなんぞ興味も
ないのお。」

白いひげが少しだけ持ち上がって、少女を見た。

少女はそのひげを見て、笑った。

(おじいちゃんのおひげは、エルクーナとおそろいの色だあ。)

「おじいちゃんは、エルクーナが大好きなんだねっ!」

また、笑顔を向ける少女に優しい風が吹く。

「当たり前じゃよ。」

『よくもまあ、そんなことを。』
「はっはっ。」

2人は少女には分からない話をしていたが、それが何だかとても幸せそうでした。

少女はそんな2人を見て笑っていた。

「なあ、コア。」

「なあに、おじいちゃん。」

そんな少女の名前を呼んだおじいさんに、少女は聞き返す。

「ドラゴンが声を持っている理由を知っているかい？」

「ドラゴンが？」

「いや、むしろもじゃ。」

「ドラゴンと、私達が声を持つてる理由？」

「そうじゃ。」

少女は難しい顔をして、考え始めた。

(笑つため?・泣くため?・お話するため?
ん……………)

「分からない。なあに？」

「呼ぶんじゃよ。」

おじいさんはまっすぐと空に目を向けていった。

「よ……………ぶっ。」

「声が聞えるんじゃ、わしを呼ぶ声が。」

「えっ？」

「わしも、エルクーナを呼んで。エルクーナもわしを呼ぶんじゃ。」

だから声はあるんじゃよ、と空に笑うおじいさん。

「そつか。じゃあ、呼ばないドラゴンは、私と契約はできないの？」

「どうじゃろつな。けど、声が聞えるまで待つてみるのもいいかもしれんな。」

おじいさんは何か遠くを見るように、少女に言った。

その時間は小川のように優しく不規則に流れていく。

『さあ、そろそろ帰りましょう。お母さんが待つてます。』

「ままがつ？うんっ！！」

そこは、風が優しく吹き抜けていく草原に木が一本だけ立っている世界の原点のような所。

「ん・・・」

鳥のさえずりが、窓の向こうから聞える。

ベッドに眠っていた少女は、目を開けて、あの日よりも少し色の濃い世界を目に映す。

「・・・夢？」

誰もいない部屋に、ただ一言呟いてベッドを離れる。

「コアー！」

「わ！もうこんな時間！！」

ドアの向こうの声に時計を見て、服を着替え始める。

「やっぱりね。新年度最初の日に、寝坊なんて。」

分かりきったようにため息をだして、リラが言った。

「わわっ！ごめんなさいっ！」

白くまっさらのマントを羽織って、リラの傍に走り寄った。

「何か、いいことでもあったの？」

リラは私の顔をみてそういった。

「うんっ！！私がここに立った原点の夢をみたの。」
「そう。」

リラは少し嬉しそうな顔をした。

私は、あの日からずっと・・・耳を澄まして、声を探していた。
ずっと、ずっとドラゴンマスターになることを夢にしてきた。
今、目指すものは・・・伝説のドラゴンマスターの名を継ぐ事。

『コア、行きましよう。』

この白い色を放つ、ルキアと一緒に。

第26話　：クレズ

伝説の白竜遣いだから？・・・だから皆は、彼は彼女に目を向けるの？

＊＊

「残念だったなあ、クレズ！」

全然残念そうには見えないその顔を精一杯睨みつけてやった。そう、昨日の学園放送で私は知らされた・・・大好きな彼がコントゼフィール学院に推選され、ここを出て行ってしまうことを。

「フレイズには関係ないでしょ！」

「関係ないかなあ？お前、知ってる？」

私の気持ちを知ってるフレイズは、私に笑顔を見せながら耳打ちした。

そしてその言葉が、私が隠していた感情をむき出しにさせる。

「う・・・そ・・・」

「まじだよ。見ていた奴もいるし。」

ま、何せセルスは俺等よりもずっと若くしてこのクラスに入った天才だからさ。」

人が目を離さないのも分かるけど、と彼は机の上に腰を下ろしながら深々と頷いた。

「だからもう、諦める。」

その言葉は耳に届くか届かないかの場所で止まった。信じられなかった、彼が耳元で私に話したその物語としか言えないような話が。

「嘘・・・」

「だから、本当だって。セルスはあの白竜遣いの少女に一途で、必死なんだ！

・・・セルスは彼女に言ったんだよ。

“ すぐに来い。・・・ちゃん、ちゃんと、想ってやるから。” って。」

試験官だって、コントゼフィール学院の教師だって、セルスだって・・・。

きっと彼女が白竜遣いだから、興味を持ってるだけ。

何の努力もしないで、ここに入ってくるなんて・・・。

そう考えると体がかつてにその場から動き出し、フレイズの呼ぶ声さえ無視して歩いた。

私がどれだけ苦勞して彼のいるクラスSに入って、どれだけ彼を想っていたか。

「どっ・・・して?」

ずっと彼だけを想って、ずっと成績だって彼の次に良かった。

それなのに、どうして何もしていない少女が、彼に想われ、皆に認められるのか分からない。

心は何だか、今日の空のように荒^すみ、厚い雲によって覆われていた。

「あら、クレズさん。」

「本当だわ。」

そんな心に追い討ちを掛けるように、甲高い声が私の足を止めた。

「残念ねえ、セルスさんがいなくなつて。」

「本当に。」

「あれほど想つていらつしやつたのに。」

そんな事を次々に言いながら私を見てくる。

「まあ、その想いが届くとは思っていませんでしたけど。」

こいつらだって、フレイズと一緒に、私を馬鹿にするの。

セルスを想うなんて、無謀な事だった。

セルスはいつだって人と関わる事をしなかった。

クラスSのどんなに強い人でも、どんなに可愛い子でも、綺麗な子でも。

人と関わる事に、興味は無いつて感じだった。

「お可愛そつに。」

口から出てくる言葉と一緒に、彼女等の心の中の笑い声が聞えた気がした。

どうして、あの子なの？どうして、私じゃないの？

そう思ったとき、廊下の曲がり角から小さな少女が現れ、大声を上げた。

「想いが届かないなんか、誰が決めたのっ?!」

「は?」

女達はその声のほうを見て、驚きの言葉を漏らした。

「セルスは頑張ったから、コントゼフィール学院に推選された。だから、頑張ればその気持ちは届くに決まってるもん!!」

どこかで見たことのあるその顔を、思いだした。

「・・・コア・・・ちゃん？」

そう、彼が唯一笑顔を向けて話しかける、想い人。

彼に選ばれた貴方に何が分かるの？

「私、知ってるよ？セルスがよく話してくれるもん。“クレズは頑張り屋なんだ”って！」

だから私もセルスにそう言って貰えるくらい、頑張りたいてって思ったんだもん！」

そんな事を聞かされて、貴方は私も頑張ろうって思ったの？

そのとき、さつきとは違う思いが心の中に浮かぶ。

伝説の白竜遣いだから？・・・だから皆は、彼は彼女に目を向けるの？

「五月蠅い子ね!!」

スツ、と女の手が上がり、その手から光が漏れ始める。

「危ないっ!!」

私が叫んだとき、その手から放たれた魔法の光が横からの何倍も強い魔法によって

コアちゃんの目の前で吹き飛んで行った。
その方向からは温かな風が吹き、開け放たれた窓には
白のマントにコントゼフィール学院の紋章が入った制服を着る、男
が手を翳^{かざ}して立っていた。

「セ・・ルス？」

「やあ、コア。今日は編入手続きでこっちに来てただけど・・・」

少女にしか向けられない笑顔。

やっぱり何も届きはしないんじゃないか。

「お嬢さん方、俺の大事な彼女を傷つけようとするなんて、失礼じやないか？」

「セルスさん・・・っ！」

その言葉を聞くと、女達は謝る事も無く走って行った。

「・・・お前な、いい加減にしろっていつも言ってるだろ!？」

さっきまで優しく撫でるような声だった彼の声が、いつきに怒りを増して少女に怒鳴った。

「うっ・・だつて！クレズさんはいつも頑張ってるんでしょっ!？
頑張ってる人があんな風に言われるの・・嫌だったんだもん・・・
!」

負けず劣らず、少女も声を張り上げる。

「ふふっ」

私はその2人を見て、思わず笑ってしまった。

「え？」

「クレズ・・・？」

2人がそれを見て、驚いているのが分かって私は言葉を付け足した。

「ごめんっ・・・、でも・・・可笑しくてっ。」

人に興味を持たない彼が、たった一人の少女には必死で。

フレイズが言っていた通り、彼は少女に一途で。

だけどそれは、少女が白竜遣いだからじゃない。

「クレズ・・・悪い。こいつを頼む。」

遠くへ行っちゃう貴方は、彼女が大切に。

その彼女が白竜遣いじゃなくても、きつと彼はそう言ったんだらう。

「ええ。・・・よろしくね、コアちゃん。」

「うんっ！！」

“ 想いが届かないなんか、誰が決めたのっ？！”

“ 頑張ってる人があんな風に言われるの・・・嫌だったんだもん・・・！”

彼女のくれた言葉が、そつと頬をなでていく風のように心の中を吹いている。

そんな彼女だから、きつと誰もが好きになるんだらう。

彼が想う彼女が、私も大好きになった。

第27話　：コア

セルスを好き。この気持ちは、リラやロイヤクレズを好きだって思うのとは違うのかな？

ふと、セルスを見てそう思った。

「編入手続き終わるまで、こっちにいるの？」

「え、ああ、そのつもりだけど。」

違う制服を着て、当たり前のように私の隣に立ってるセルスが言った。

クレズは、セルスのことを好きだ。そう、思った。

そのとき、心の中でモヤモヤと何かが動いた。

「おはよう、コアちゃん。．．セルス！」

「おはよう。」

セルスがクレズに言葉を交わすと、胸が少し痛んだ。

私は唯にっこりと笑顔を作ることしか出来ず、セルスの横に立つクレズの笑顔を見ると

何故だかとても悲しくなった。

「あ．．えと．．．私、実技訓練だから!!」

「あ、コア!!」

セルスの声に足を止めて振り返る。

「今日．．」

その振り返った先にセルスの隣にクレズがいる景色があつて私は思わずセルスの眼を反らした。

「ごめん、もう行くね。」

こんな気持ちになりたくない。誰かの事を嫌に思うなんて、最悪だ。私はそんな思いで精一杯足を急がせ、その場所を、セルスから離れた。

『どうかしました?』

今日はマスター・リースの屋外授業で、私はセルスと外で先生を待っていた。

「・・・何もないよ?」

『そうですか? 私にはセルスさん関係で何かあったように思えますが?』

ズバリと言い当てられて、私は彼女の優しく笑う青い眼を覗いた。それから小さく笑って、口を開いた。

「隠せないなあ。・・・セルスは、たくさんの人に好きって言われてるでしょ?」

私・・・クレズのこと嫌いじゃないけど・・・もやもやするの。」

自分でも、嫌だなんて思うの。

『そうですか・・・あ、リースさんがいらっしやいましたよ。』

「本当だっ! 先生っ!」

遠くから歩いてくる優しげな先生に、大きく手を振る。
先生はそれに返すように手を振って、昼の太陽の眩しさに眼を細めている。

「お久しぶりですねえ、コアちゃん。」

「はいっ!!」

「いつ見ても綺麗なドラゴン。」

『ありがとうございます。』

「ふふっ、立派だね。」

先生が笑うとこの辺いったいに春が来たみたく暖かくなる。
そんな先生のドラゴンは、きっと幸せに違いない。

「そういえば、先生のドラゴンさんはどんなドラゴンさんなんですか?」

「私の?」

きよんとした顔で先生が見てくる。私はコクンと頷いて、首を傾げてみる。

「・・・綺麗というよりも、ドラゴンには珍しく弱弱しいドラゴンだったわ。」

先生の笑う顔が大好きだった。けど、今笑っている先生はどこか切なげで。

まるで冬の中に居るような笑顔だった。その言葉の一部に違和感を感じて聞き返す。

「“だった”・・・?」

「私にはもうドラゴンがないのよ。」

リース先生はそこに座りながら、ドラゴンとの契約について話し始めた。

「ドラゴンがいない教師は私くらいね。」

でも教師の6・7割はドラゴンを亡くしているの。」

「え?」

「知ってるでしょう?ドラゴンは死んでも、マスターは死なない。」

そう、それはドラゴン契約の中に記されている事。

ドラゴンが死んでしまっても、契約しているマスターが死ぬ事はない。でも、

マスターが死んでしまうと、契約しているドラゴンは死んでしまう。

「他の先生は、新しいドラゴンと契約するのよ。」

「じゃあ、先生は?」

「……契約するように言われているわ。やはりこうして実習のときには不便だからね。」

先生は柔らかに笑って、少し熱く感じる風に流れる髪を押さえた。

「他の先生方にも言われるのよ。“ドラゴンなんてどれも変わらない”って。」

その言葉は、きつと幾度も先生を苦しめているに違いない。

もしもルキアがいなくなったら、私だって絶対に二度とドラゴン契約なんかしない。

私がそう考えていると先生はため息をつきながら、言葉を続けて言った。

「だから、ドラゴン契約しようと思ってるの……。」
「いつまでも、彼に縛り付けられているようじゃ駄目よね。」

先生は忘れたくなくて、契約しないんだ。何が正解で、何が間違いなんか、私には分からない。

「けど、思うの。不便だから、周りに言われて傷つくのが嫌だからって契約するのは、違う気がする。」

「それは、間違いだと思います。」

隣で横たえていた首を上げて、ルキアがこっちを見る。

「え？」

先生の小さな声が聞えて、私は言い返すように言った。

「私だって、ルキアがいなくなったら絶対にドラゴンマスターなんかやめます。」

『……コア。』

「どうして……マスターがいなくなれば、ドラゴンも死んでしまっただけなの？」

「ドラゴンが死んでも、マスターは生きていられるのか分からない。」

「もしもルキアがいなくなったら、私は生きてなんかいたくない。」

「生きているんじゃないかって、唯生かされていると思うかもしれない。」

「契約令も間違ってるけど、先生も間違ってます。」

先生はドラゴンに縛られているんじゃないかって、抱えているんじゃないんですか？」

大切な思い出として、覚えていようとする事が縛られているという事なの？

忘れたくないから、新しいドラゴンと契約を結ばないのは間違い？

「大切な思い出を、忘れたくないんでしょ？」

「コアちゃん。」

「それなのに、新しいドラゴンと契約するなんて。不便だからって、忘れたいからってそんなの違う！！」

先生も・・・あの試験官と同じなの？」

先生は違うと思った。他の先生達とは違って、ドラゴンの事凄く優しいめで見えるから。

先生は、ドラゴンマスターなんだって。

「罵声を吐いたのは、やっぱりコアちゃんだったのね。」

ドラゴンは道具でも、玩具でも、僕でもない。私達はドラゴンと一緒に空を飛ぶ。

私達こそ、ドラゴンがいなければ何も出来やしないのに。

「忘れちゃ駄目なんです。覚えておかなくちゃ。」

でも、ドラゴンと新しく契約する事も・・・間違いじゃないと思うんです。

もし、先生を待ってるドラゴンがいるのなら、先生は・・・進まなくちゃならない。」

新しい出会いを、塞ぎこんでちゃ駄目だと思う。ドラゴンに抱く感情は、どこか恋に似ているの。

もしもセルスがいなくなっただからって、私が他の人を好きにならな

いと限らない。

だけど、絶対にセルスを好きだと思っただ感情は忘れない。

誰よりも彼を好きだったこの時間を、忘れようとは思わない。

ルキアをこんなにも大切に思っている時間を。私はこの先何があっても忘れはしない。

「本当に・・・あなたは彼にそっくりね。」

「・・・？」

「伝説のドラゴンマスターに。」

先生はそれだけ言うと、静かにその場に立ち上がって言った。

「今日の授業はここまでです。・・・あなたに教える事は何にもなかったわね。」

そんな事ない。優しく笑いかけてくる先生を見ながら思った。

「ありがとうございます。」

「明日は一時間目だから、遅刻しないようにね。」

「あ、はい。」

先生は、教えてくれたよ。セルスに抱く感情も、仕方ない事。

だからってこのままじゃ駄目なんだよね。

今、このときを大切にしなくちゃいけない。

大切な人がいる、大切な人のことで悩めるこの時を精一杯生きなくちゃいけない。

『・・・セルスさんの所へ行きますか？』

「うん！」

今は好きだと言えなくても、それでもこの気持ちはきっと彼だけへの感情だと気づいたから。
そのことを彼に伝えたい、ずっと抱いていたこの気持ちを。

第28話　：リース

目を閉じれば鮮やかに彩られたあの世界が思い出せる。

『待つてよっ、リース！！』

「本当にお間抜けさんね、リユークは。」

ドラゴンとは普通りりしく、綺麗で気高い生き物だといわれる。けど、彼は全く違ってた。

『待つてっばっ！！』

おっとりしていて、マヌケで、可愛い。

黒い羽を精一杯開いて、後ろから付いてくる。まるで、弟のようなドラゴンだった。

「リユークは、弱弱しいわ。」

『強くなるよっ！！』

「期待してる。」

“強くなる！！”　そう言う彼の眼がとても好きだった。

強くなかならなくていい。ただ、こんな風に笑えていたらそれで。

彼は充分美しく、凛々しく、気高かった。

私は優秀者で、人から恨まれたりすることもあった。

その優秀者のドラゴンが、リユークだから特にだ。

けど、その度彼は凛々しい顔をして、悔しがっていた。

私はどうでもよかったのに、彼だけは怒ってた。

“僕の所為で、リースがそんな風に言われるのは嫌だ”　って。

彼がいなくなったその日だってそうだった。
本当は、弱かったのはきつと私のほうなの。
彼に私が必要なんじゃない。

私に彼が必要だった。

「リユーク！！戻ってきてっ！！」

湖の上に羽を広げてこっちを見る彼。
嫌な予感がしてた。

私の妹が溺れて、水が怖くて飛び込めずにいた私の代わりに
私なんかよりもずっと水が嫌いだったリユークは最後に私に笑って
言った。

『僕は強くなれなくてもいいんだ。けど、大切な君を悲しませたく
はない。』

それから、高く助走をつけるために空に舞い上がり水に飛び込む瞬
間に言った。

『戻ってきたら、僕を誉めてね！』

妹は息をしたまま岸に流れ着き、リユークの名前を呼びながら泣い
ていた。

「リユークは!？」
「リユ・・クツ」

何もいえなかった。彼女が助かってよかった。
本当にそう思った。

けど・・・リユークはいくら待っても上がってくる事はな
くて。

私の手に記されたドラゴンマスターの印は・・・熱く焦げるような
痛みを与えて消えた。

『戻ってきたら、僕を誉めてね!』

戻ってこなかったら？

アナタはいつもそうだった。

弱弱しいくせに、私が弱くなると強くなって。

本当に弱かったのも、必要としていたのも。

アナタじゃなくて 私だったんだ。

“先生は・・・進まなくちゃならない。”

捕らわれてるままじゃ駄目。

そう思ってた私に、逃げるんじゃなく受け止めて進めと彼女はいつ
た。

“お前は、進まなくちゃならないんだ。”

彼と同じ眼をしてた。

伝説のドラゴンマスターと呼ばれた白竜遣いの彼と。

その目を見たときに思ったの。

彼女はきっと、伝説のドラゴンマスターに違いないって。

第29話　：セルス

反らされた眼に思った。

進むたび、こうして大事なものを失ってしまうのだろうか。

『そんなにショックだったのか？コアに目、そらされたの。』

アルの言葉にハッと目を覚ますように現実世界の風を浴びる。
それからゆっくり濁った言葉をアルの質問に返す。

「別に、そういうわけじゃ。」

『　　なくないだろ？』

そんな俺の言葉を遮って、分かったように真っ直ぐアルは言った。
中途半端な気持ちで、あっちへは行けない。そんな事、分かっていた。
けど、進むためにあいつを失うくらいなら、いらないと思ってしま
う。

「俺は・・・」

向こうで中途半端でも、コアへの気持ちだけは真っ直ぐでいたい。
アルには俺のそんな気持ちがあったんだ。

『コアは分かってるんじゃないか？だから、お前からはなれた。』

初めて会った時には感じることもなかった感情の大きさに、戸惑っ
ているのはいつも俺。

あいつは最初から全てを分かっていて、計算なんかしてないはずな

のにスムーズに事が運ぶ。

「それが・・・たまらなく、嫌なんだよ。」

「お前のことを思って、引いてんだぞ？」

「それが嫌なんだ。」

進むたび、何かを失う事くらい分かった。だけど、俺にとってここが限界なのかもしれない。

おれはコアがいる場所から、俺は離れる事はできないんだ。

けど俺はコアも大切で、アルも同じくらい大切だから・・・こんなにも揺らいでいる。

そっと夕焼けに焦がされ暖かくなった風が、静かに流れていく。その風に黒い翼をばたつかせ、幸せそうに伸びをするアル。

「アルは、上へ行きたいとは思わないのか。」

契約を結んだとき、心の中に伝わってきた思いは・・・俺よりもずっと真っ直ぐに上へ目指す思いだった。

『くどいな、お前も。』

赤く鋭い目が俺を優しく見てくる。

この目を見たとき、この声を聞いたとき、ずっと俺を呼んでいた誰かがこいつだと分かった。

「お前の心の中は・・・ずっと上に行きたがってた。」

『だったら？』

契約した主の周りや考えを無視しろってか。』

ふぎげんな、と赤く染め上げられた空を見上げてアルは笑う。

『そんな事して、手に入れたいわけじゃねえ。
お前は・・・伝説の白竜を知ってるか？何十年も前、空を飛び交う
白竜を。』

世間で幻と呼ばれた白竜。

昔に1人の男が白竜を操り世界中を飛びまわり、世界を平和へと導
いたといわれている。

コアが目指している白竜の伝説。

「知ってる・・・けど」

『俺は白くもねえし、目は青じゃなく赤だろ？でも懂れてた。あんな
風に空を飛びてえって。』

焦がれる想い、俺だって同じ。あいつが空を飛ぶ姿に、一瞬にして
心を焦がれた。

空を舞って、笑って、まるで・・・風のように。

「セルスッ！！」

あんな風に飛ぶことが出来たら、どれほど幸せだろうって。

「・・・コアア？」

赤く焦がされた空からの声に顔を上げと、俺の目に天使が映った。
真っ白の天使のように軽く、ルキアが地におりその背から神のよう
な少女が舞い降りる。

「セルスッ。よかった、まだここにいた。」

初めて会った時、他の誰よりも心のなかに入り込んできた。

その時は唯夢が一つしかなくて、それ以外はどうでもよかったのに。
良かったはずなのに。

「コア。」

今は、コアしかいららないと思えてしまう。

「クレズ・・・と・・・その。」

捨てるなんて、考えられない。捨てるのなら、もう一つの夢だろう。

「いらない。好きだとか、嫌いだとか。」

「・・・そか。あ、あのねっ。」

「世界一も。」

きよとんと見てくる彼女を夕日が照らして、その横を音もない風が通っていく。

「あのねっ・・・私は全部欲しいの。」

その回答に俺は意味も分からず首を傾げる。

「伝説のドラゴンマスターになりたいし、ルキアに幸せを与えたい。
全部捨てたくなんかない。もちろん、セルスも。」

全てを捨てたら、楽なのかもしれない。それはずっと思っていた事。
ただ、全てを抱えたまま進もうとするから大変なだけ。

「だからっ・・・私は諦めないよ。全部、手に入れてみせる。」

「俺は・・・」

コアしか知らない。そんな風には言えない。
確かにコアを失うくらいなら何もいらぬ。
けど、コアがここにいるのなら他の何も諦めはしない。

「私、頑張るからっ！クレズにセルス取られても、諦めない！」

“セルスはセルスだから、行きたいところに行けばいいの。私がそこに行くからねっ。”

あの日、君がくれた言葉を俺がどれほど大切に覚えているか、お前は知らないだろ？

全てを包み込むようなその目を向けて、あの日の君もそう言って俺を焦がした。

「・・・俺はお前がいるなら、全てを掴んでみせる。けどそれまでは。」

「分かってるよ。セルスがどれだけ本気かって。」

私の事、どうでもいって思ってるわけじゃないってことも。」

強気だった目に、急に涙が溢れ出して。俺は思わず彼女を抱きしめそうになる。

「私・・・どこに・・・セルスがいても、好きだよ。」

いつだって真っ直ぐで嘘を知らない彼女の言葉。

「だか・・・っら、全部手に入れたら私を隣に立たせてください。」

彼女の真っ白なマントが風に揺れて、それはウエディングドレスのように彼女を包み込んでいる。

「セルスが全部・・・手に入れて、これ以上欲しいものないって思ったとき、私を隣に立たせて？」

そんなの永遠に無理かもしれない。俺が一番欲しいものは、コアだから。

だけどそれ以外を全て手に入れて、それからその全てを捨ててでも君を迎えに行くから。

「俺は・・・ここに誓う。全てを手に入れたら、お前を迎えに来る。」
何もいらぬ、コア以外。この気持ちなくなる事なんて絶対にな
い。

ゆっくりと手を伸ばすとコアは首を振って、目の端を濡らして笑った。

「やだよ?・・・私待ってないんかいから。迎えに行くからね
?」

その顔に、俺は思わず笑って彼女を引き寄せた。
ウエディングドレスをまとって、未来の花嫁が笑う。

その上に広がる空に、たった2匹の白と黒の竜が舞う。この約束から、全てをはじめ。

彼女の物語の一部になる、この約束を守るために。
物語の最後には、約束を果たせていられるように。俺はその風に誓った。

全てを手に入れることを。

第30話　：コア

「コアは初めてだよね？実施訓練で国家総堂に行くの。」

あの約束の日からもう3ヶ月がたとうとしてた。

「実・・・施・・・訓・・・練？」

先輩であるクレズの言葉に私は首を傾げる。するとクレズは笑っていた目を開くと、私に聞き返した。

「知らないのっ!？」

私がコクンと首を上下に揺らすと、彼女は嘘!と驚きながら私の腕を引っ張っていった。

痛いくらいに強く引っ張っていかれた場所は、大きな広場の真っ白な大きな紙の前。

「ほら、ここに張り出してるでしょ!？」

わたしは総交省。コアは・・・・・・・・・・・・・・・・え・・・？」

その大きな真っ白の紙に、クラスSとAの生徒の名前と部署がかかれている。

私はぼーっとその紙を見てみると、私よりも先に私の名前を見つけたクレズの声に驚いた。

「どうかしたの??？」

「・・・嘘・・・・・・・・。。。」

私の名前を見つけたような彼女に、どこ？と私は彼女の目線が捕らえる場所を精一杯探した。

「あ、あつた！・・・総予省？？」

ただ読み上げるだけの私の言葉にクレズが驚く目を向ける。

「何？」

私がどうしたのかと聞くと、クレズはその空いて塞がらないような口をようやく動かしていった。

「総予省っていったら、他の部署なんかと比べらんないくらい大変なのー！」

へー、と私は少し驚いてみせると、クレズは「へー、じゃない！」と少し怒る。

「毎年、朝から晩まで休む暇なんか与えてくれないのー！体だけならまだしも、脳みそまで動きっぱなし！」

その売り文句のような話し方に私は思わず笑ってしまふ。

話しには聞いたことがあるから、何となく何をする所かくらいは知ってる。

クレズの行く、総交省は総ての外交を受け持つ部署。

そして私の部署は、この国の総ての予算管理を任されている部署。

「笑い事じゃないわー！去年、私のクラスから総予省に優秀な男子が行ったけど・・・」

ちよつと文字を打ち間違えて、退学したのー！小さなミスが大きな

事故を巻き起こす。

それくらい重大な責任を必要としている上に、能力、体力まで必要とするのよ!？」

勢いよく話すクレズの熱弁で、内容は良くわからなかったがとても大変だという事は少し分かった。

「でもね、楽しそうだよねっ!」

セルスはよく言ってたもん。他の人より努力すればするほど、力がつく。

他の人より動けば動くほど、経験すればするほど、成長できるってそんな事を思いながら笑う私を、彼女しばらく見つめてそれからため息について笑った。

「・・・コアにはきつと、何言っても無駄なんだろうなあ。」

もうっ、と呆れた声をだして彼女は笑う。

「私、精一杯やるから平気だよ!」

その笑顔につられて笑うように、私も笑う。楽しみで仕方ないの。少しでもセルスに近づける?そんな思いでいっぱいなのは、弾みに弾んでいた。

あの約束を一秒でも果たしたいの。待っててもいい。でも、待っていてられるくらいの力がほしいの。すぐ隣で、彼が全てを手に入れるのを見ていたい。

だから早く成長したい。

少しでも早く、彼の隣に立てるように。

第31話　：コア

「すまないが、私は子供を信賴するほど甘ったれた仕事をしているわけではない。」

私の事をガキだといって、見下ろしてくる長身の男。

彼の名前はハイドン省長官。

総予省の長官で、私が配属されたこの部署で最も偉いお方である。

「あつ！！私の名前はコアです。」

訴えるように二度目の自己紹介をして、彼を見上げた。

すると彼はその冷たい目を細めて、まるで輕蔑するように私を見ていった。

「君、考えて分からないか？傍にいる人間に話しかけるのに、そんな大声を張り上げる必要がどこにある？」

嫌味たつぷりの言葉に私は、下唇をかみ締めて小さく謝った。

「すみません……。」

全く、と投げ捨てるように言葉を放つと彼はため息をついて、言葉を続けた。

「これが白竜の選んだ伝説のドラゴンマスターか？」

資料が大量に積まれたその部屋は、何人かの人私達の存在を無関係に走り回っている。

クレスが言っていた事は本当だったようで、それ以上かもしれない。

「仕事は与えてやらん。」

” 去年の奴が失敗したから今年はもつと厳しいだろうなあ。もしかしたら、仕事なんか与えてくれないかも。”
” そうロイが言ってた通りだ。”

「でもっ！」

食い下がるまいと私も精一杯に食いつく。

私の眼から反らされていた目が、鬱陶しいというように私を見て言った。

「白竜の眼も、落ちたもんだな。」

あまり大きくもないその声が、私の心の中にグサリと突っ込んできた。

黙り込む私に彼はまたため息をついて、完全に見下した声を出した。

「こんな子供に割く時間はないんだよ。」

その瞬間、ルキア契約を交わしたあの森がパツと脳裏に浮かびあがり、あの日吹いた強い風が、私の心の中にもう一度吹いたような気がした。

「待つてくださいー！！」

背中を見せて、1・2歩離れて歩く彼を呼び止めた。

「なんだ」

こっちを見ることもなく、言葉だけが背中から投げ捨てられる。

「……今の言葉は、撤回してください。」

逆らっちゃ駄目、言い返しちゃ駄目。心の中で小さな反対がうごめく。

その反対を押し切って、私の口からは言葉が出て行く。

「は？」

その言葉に彼が振り返り、その冷たい目が私を映す。

「今の言葉、撤回してください。」

「……貴様、私が誰かと知っての言葉か？それは。」

あの試験のときと同じだ。“ドラゴンなんて唯の道具にすぎないんだよ、君。”

白いひげをいじりながら、私を軽蔑するかのように見てくるあの目に私は感情を抑えられなかった。

「知ってます。でも、ハイドン省長官もドラゴンマスターですよねっ？」

それなのにそんな事を言うのなら、私は貴方がマスターだとは思いません。」

地位が関係あるのだろうか。能力や、技術がドラゴンマスターの力に関係するのだろうか。

「先ほどの“白竜の眼も、落ちたもんだな。”って言葉、撤回してください。」

たった一度のその言葉が、心のどこか深くにこびりついている。

初めて来たこの場所で、こんなふう言い返すことがどれほど大きなことかちゃんと知ってる。

「私が上司だと知っての言葉だというのか。」

「はい。」

たとえこの先に繋がらないとしても、ここで私の夢が途絶えてしまったとしても。私は絶対に後悔しない。

でも、ここで折れてしまったら私はこれから先夢が叶ったとしても、欲しいものを手に入れたとしても、絶対に後悔する。

「ははっ。」

緊張していたその空気を一気に乱すように、ハイドン省長官が笑い声を上げた。

「お前のドラゴンはさぞ幸せだろうな。悪い、撤回しておくよ。お前のドラゴンは良き主を選んだ。」

冷たい目はまだ、冷たい目をしたままだった。だけど、どこかあの試験官とは違う。

「ありがとうございます!!!……あのっ!」

「ああ、仕事は与えんからな。」

きりつとした顔に戻ると、彼はそのまま忙しくどこかへ行ってしまった。

この場所は違う。あの試験官のような人はいないんだ。そう思うと資料室のように薄汚いこの場所にいる事がとても幸せに感じる。

仕事はくれない。それが何の苦悩になるのだろうか。

ハイドン省長官の目は、仕事をしろと言っているような気がした。仕事なんか、与えられなくてもあるんだ。

星じゃなくてもできること、星には出来ない事があるから。

私は星になんかなれなくてもいい。

「はいっ。」

去っていく彼の背中に、私の返事が届いたかどうかは分からない。

私は今ここで出来る事を、精一杯する。

そうだよ、ルキア、セルス。

心でそう問いかけると、風が一瞬強く吹いて資料が部屋に舞い散る。それがルキアとセルスが返事をくれたように感じた。

第32話　：ファルス

総予省　そこは地獄だと呼ばれる部署。

そんなこの部署に今年も新客が訪れる、その新客は今世界中で注目されている白竜の主ということだった。

現在、朝の8時を回ったばかり。

他のどの部署も明りを灯さないこの時間に、総予省だけは忙しく働いている。

そしてこの総予省を仕切っている、我等がリーダーと呼ぶ総予省長官ハイドン氏の機嫌は最悪なようだった。

「おい、ファルス！！」

彼はそのイラつきが分かるほどの口調で

「ぼーっと周りを観察しながら書類をまとめている私に、その手で“来い”と命じた。」

「・・・はい。」

渋る思いでその書類が山のように積み上げられている机に近寄りながら

頭の中で、これから彼が発する言葉を想像する。

彼にこうして呼ばれるときは、必ずしも八つ当たりをくらうのだ。そんなことを考えながら、目の前まで行き、何でしょうか、と問う。

「今している作業を後15分、いや10分で仕上げる。」

やはり、こうなる事は分かっていた。

去年も彼はこんな風に機嫌が悪かったが、今年ほどではなかった。

「お前には立公館の予算削減資料の作成と、第六課の拡大見積もり予算、それからあの棚の整理と、書在庫の整理を昼までに全て終わらせてもらうんだ。」

たらたらするな、と言言葉をその後につけ足すとその目は行け、といった。

最悪だ、今日の機嫌は今までにないくらい最悪だ。

議員から民間人までが使用可能な、この国最大の図書館となる立公館の予算は

議員の中でもかなり優秀なりレイクが見積もったものだ。

そんなものをもう一度見積もりなおし、削減するなんてどれだけ骨の折れることか。

第六課の部署拡大なんて、考えられないほど削減する場所が多すぎてこれも手間がかかる。

その上“あの棚”と指差された棚は古く、

ゆづに２メートルはある棚に収まりきらないほど詰められた資料を片付けて

最後には予算書がゴミ山のように放置されたあの書在庫を掃除するなんて。

もう、あの人は鬼でしかない。

「ファルスも大変だな……。」

忙しく駆けて行く人の中から、足を止めてその様子を見ていたライクが苦笑いを見せて言った。

「そう思うなら手伝ってよ。はあ、あの人は鬼だ。」

「勘弁してくれ。こっちもこっちで、さっき仕事をそりゃ大量に下さったんだ……」

ははは、と笑う口元に泣きそうな目。

いつもだって十二分に忙しいこの部署は、この日はそれ以上に忙しくなる。

あの人の機嫌が今日という日に一番悪くなる。それもこれも、全て新客の所為。

去年、ここに来た少年は学校でとても優秀だと言われていたが、予算書の桁が1つずつズレるという小さなミスをし、そのミスによりこの部署の者は減給と残業を与えられた。

それが今年に響き、彼の機嫌が去年よりも悪い理由。

そしてさっき彼が俺に与えた仕事は全て、その新客がこなす今日のメニューだった。

「それじゃ、頑張れよ！」

「・・・ライクも。」

考えるだけで世界への絶望と、明日は来るのかという不安が襲ってくる。

その不安から逃れる方法はひとつ、仕事をこなす事のみ。そこは地獄。

そして今日、この地獄の場所にたった一人の少女がやってくる。

その少女は何日持つのか、そんなことを頭の端に思い浮かべながら首を振った。

今日もてばいい方だ。

そんな事をきつとこの場所にいる何人かは考えた事だろう。

第33話　：ファルス

ちょうど時計が10時を指していたころだろう。

他の部署もそろそろと行動し始め、ようやく国家総堂のほとんどが活動を始めた。

俺はクラッシュ（俺のドラゴン）で『第六課製作本部』から総予省へ戻った所だった。

空の旅は生憎、曇り時々雨という天候により快適だとは言えなかったが、

ハイドン省長官の傍にいるよりはそれはそれは快適だった。

「あ の つ ！ ！ 私 の 名 前 は コ ア で す 。

大量の資料を抱えて廊下を歩き、もうすぐ総予省に着く、という場所です。そんな可愛らしい女の子の声が聞えてきた。

その瞬間に、さっき軽くしてきた頭が一気に重みを増し、ため息を漏らした。

「もう・・・来たのか。」

俺は一人で足を止め、ボソリと呟いた。

今までにないほどに機嫌の悪いハイドン省長官相手に、新客はどう戦うのだろうか。

そんなことを考えるだけで、頭痛までしてきた。

しかし荷物が重たく手がしびれてきた事も助けて、俺はその重たくなった足を何とか動かしながら部署に入った。

「君、考えて分からないのか？傍にいる人間に話しかけるのに、そんな大声を張り上げる必要がどこにある？」

機嫌は最悪を見せていた。

その光景に誰もが忙しいからではなく、恐れから足を動かし魅入ったりしていないのが分かった。

「すみません……。」

少しシヨボくれた少女の背中は、何だか可愛らしかった。

シヨートヘアの髪は、いかにも女の子らしくて心が華やぐ。

彼女が今噂の

「これが白竜の選んだ伝説のドラゴンマスターか？」

伝説のドラゴンマスターと呼ばれる少女。

身長からするとまだまだ幼く、俺と10歳は違っていそうな声をしていた。

「仕事は与えてやらん。」

キリツとしていて、それは例えるなら氷柱ついでのような声と言葉と目をしていた。

きつと去年の新客が失態をおかしている所為で、ハイドン省長官は厳しくなっているのだろう。

そんなことは少女だって分かっているはずだ。

俺はしばらく突っ立っていて、その沈黙の間に我に返り、自分の机の上に資料をドサツと一気に下ろした。

それからペラペラと資料をめくりながら、その神経の全てを2人に向ける。

「でもっ!」

必死な声が、彼を呼び止める。その声に足を止めて振り返った彼は突き放すように言った。

「白竜の眼も、落ちたもんだな。」

俺は無意識のうちにその資料をグシャッと握っていた。

彼はいつだって冷血で、人使いが荒い、変わり者だと皆から言われていた。

だけど、本当は優しい心を持ち合わせ、人の限界を見通して仕事を与える、まさにリーダーにピッタリな人だと思う。

きっとそう思っているのは、俺だけではないだろう。

そんな彼が放った言葉はドラゴンを侮辱する言葉で、ドラゴンマスターなら、

ドラゴンを思うマスターなら、誰もが激怒するであろう言葉だった。俺も、あまりのその言葉の酷さにその手を握り締めてしまったのである。

少女は何も言わず、ただ黙り込んでいる。その様子はまるで去年の少年とかぶって仕方ない。

彼は去年も新客に、同じような言葉を浴びせていた。

彼は黙り込んでいる彼女を見て彼はため息をつく、また一言呟いた。

「こんな子供に割く時間はないんだよ。」

その瞬間に、手に握られていた怒りに似た感情がフツと消えてなくなった。

その代わりに心の中には、何か温かなものがゆっくりと広がる。

去年の少年はドラゴンのことをそう言われて、同じように黙り込ん

でいた。

その上、出した結論の言葉は、そこにいる全ての者を凍りつかせるような最悪な言葉だった。

そつと耳の奥で響いた。

“ドラゴンとは契約しなおせるんで、もっといい奴がいたら契約しなおしますよおっ!!”

ふぎけるな。・・・そこにいた誰もがそう叫びそうになったことだろう。

ドラゴンは一生に一度しか契約できない生き物。そして主を失うと死ぬという契約を結ぶのだ。

つまり契約しなおすという事は、そのドラゴンを殺すという事。

その言葉を聞いてから、彼はより一層新客を嫌うようになり、ここにいる少女のように扱ってきたのだ。

ここに来る新客は皆、その少年と同じような者ばかりだった。世界は廃^{すた}っている。

そして、この少女だって同じ。たとえば、ドラゴンが白竜であろうと、マスターに違いなんてない。

ハイドン省長官はそれを試している、いや、確認しているだけなのだ。

そしてこの少女だって

そう思ったとき、静かだった2

人の間に新たな言葉が飛んだ。

「待ってください!!」

さっきの言葉よりも強く、彼の背中へ呼び止めた。

「なんだ」

彼は振り向く事もなく、そんな言葉だけを返す。彼も俺もここに
いる人は皆諦めていたんだ。

この世界に生み出される新たなマスターが、ドラゴンを想えるマ
スターであるということ。

「・・・今の言葉は、撤回してください。」

小さな声は、ざわついたその部屋を響き渡り、
俺達が抱くその諦めという感情に『コン”コン”』と音を鳴らして
ノックした。

「は？」

彼は振り返り、俺の心の言葉を発した。

「今の言葉、撤回してください。」

曲がる事もなく、真っ直ぐに。それはこの少女の言葉かと疑いたく
なるような物言이었다。

「・・・貴様、私が誰かと知っての言葉か？それは。」

ハイドン省長官はまた試すような事を言ったが、少女は全く気づい
ていない。

どんな返事を返すのか。
心がドキドキして、湧き出てくる喜びと興味で興奮しているのが自
分でも分かる。

「知ってます。でも、ハイドン省長官もドラゴンマスターですよ
ね？」

それなのにそんな事を言うのなら、私は貴方がマスターだとは思いません。」

その言葉に俺の口元は自然と緩み、笑いが零れそうなのを必死で抑えていた。

彼女は俺に休む間も与えずに言葉を付け足す。

「先ほどの“白竜の眼も、落ちたもんだな。”って言葉、撤回してください。」

強くて、ゆるぎない、それは彼女の信念だった。

省長官である彼に逆らう事が、どれほど恐ろしい事か。

ここに来る事を禁止されるだけでなく、もちろん退学も含まれる。彼女はそれを知っている上で、その言葉を放っているのである。

「私が上司だと知っての言葉だというのが。」

「はい。」

何を捨ててでも、どうなっても、マスターにはドラゴンが一番大事だと想う気持ちが必要なのだ。

俺ならどうしただろうか。

そう考えると少し心が震えた。・・・あんな風にいえるだろうか。

たとえ省長官であつても、クラッシュのことをあんなふうに言われるのは許せない。

しかし、こんなにも真っ直ぐに逆らう事ができるだろうか。

その答えはあまりにも難しい。

言い応えしなくても、黙っていればいい。俺なら黙っているだろう。答えは……………“俺には、言えない。”

「ははっ。」

緊張していたその空気を一気に乱すように、ハイドン省長官が笑い声を上げた。

「お前のドラゴンはさぞ幸せだろうな。すまない、撤回しておくよ。お前のドラゴンは良き主を選んだ。」

彼のその言葉と、笑顔に、俺は驚いて言葉も出ない。

ただ口を小さく開けて、その様子を目に写し、それが夢でないことを確かめる方法を探しているだけ。

あの省長官が笑っている。部署の中が驚きに静まり返った。

この子が白竜が選んだ、伝説のドラゴンマスター。

一度は耳にした事がある、あの有名な伝説のマスターを継ぐべきマスター。

心の中には何とも例えようがない、そんな感情が入り混じっていた。

そんなこの場所に窓から温かな風が吹き込んでくる。

俺は思った。世界はまだ、廃ってはいないようだ、と。

第34話　：コア

「君が新客のコアちゃん？」

忙しく走り回っている人の間を、少し違う時間をまといながら男の人が歩いて来た。

その人はキリツとした顔立ちで、笑った顔は優しい感じのお兄さんのような人だった。

その声には私はとりあえず声を上げた。

「え、あ、はいっ!!」

「初めまして。僕はこの部署で働いている、ファルス。」

そういうと爽やかな風を吹き散らし、その手をスツと私に伸ばしてくる。

私は急いで手を伸ばして返事の声を上げた。

「私の名前はコアですっ！よろしくお願ひしますっ!!」

握ったその手は少し冷たくて、その体からは外の香りがした。

「驚いたよ！彼にあんな事言わせるなんて、さすが伝説のマスターだね！」

「いえっ・・・」

「よかったよ、君がちゃんとしたマスターで。」

その優しい笑顔に思わず心が温かくなる。

“ちゃんとしたマスターで”と言う言葉が何故だか強調されているような気がして一瞬置く。

それから私はその間を埋めるべく、質問をした。

「あ、あのっ！私、何すればいいですか？というより、私に何が出来ますかっ？」

握り合っていた手をゆっくりと放しながら、私の問いかけに彼は答えた。

「そうだなあ。それじゃあ、その本棚の整理を頼もうかな。」

あれ大変なんだあ、とぼやきながら彼が指差したものはかなり使い込んでいるのがすぐに分かるほど汚くてボロボロで、所々穴が開いている大きな棚だった。

「あの棚の書類を・・・私が？」

「できないかな・・・？まあ仕方ないよね。新人だもん。それじゃあ他には・・・」

私は何のためにここに来たのだろう。どうしてここに来たのだろう。きっと私がここに来た理由があるんだ。私はきっと、この場所で何かをして、何かを得るんだ。

「あのっ！！」

「ん？」

「私、します。本棚の整理！！」

驚いているファルスさんは、その手をそっと私の頭に乗せて笑って言った。

「きっと大変だよ？あと3時間もすればハイドン省長官は戻ってくる

る。

その時には全て片しておかなきゃならない。君には無理だよ。」

ああ、分かった。

私は心の中で絡まっていた糸が、すつと解けた気がした。

「ファルスさんは、セルスに似てるんだっ。」

心の中で呟いたはずの言葉は口から零れて、目の前のファルスさんを驚かせた。

「え？セルス??」

「え、あ！えつと、友達です！それで、私の大好きな人っ。」

私を見てくれている優しい目とか、心配してくれてる言葉だとか。どこことなく、セルスに似ているからこんなに暖かいんだ。

「そう。」

「彼が私を今この場所に立たせてくれてるんです。だから、私はここに来た限り何かしなくちゃいけない。

それが難しいとか、大変だとか関係なく。だから、私頑張ります！」

不思議そうな顔をしていたファルスさんは、また優しく笑いながら「そう」と言っ

私をゆつくりと本棚の前に連れて行ってくれた。

「この本棚には今までの予算見積書と、今後の見積書、予定書、希望書が全部ごちゃ混ぜになってる。

これを3時間以内に整理して、分離し、処分するものはしなければ

ならないし。

出来上がった見積書はどの棚に移動するのか、表示板もつけなきゃならない。

それだけじゃなく、出てきた予定書と希望書は各担当者に配布し、期限をしるすんだ。」

大きな棚の前に、ファルスさんは一気にそういうと、ため息を漏らした。

「やっぱり無理だよ。君はまだここに来たばかりで、どれが使わない見積書でどれがまだ触っていない物なのかも分からない。

それを分けるのだから一苦労だろうし、その上それを誰がどの担当かも分からないのに、配布しなくちゃならない。

表示板だって女の子には無理だと思う。」

ため息のあとの言葉から出てきたのは、私に反対する言葉。

「だけど、それじゃあ私に出来る事なんて何一つないって言ってるみたいだった。」

「あの、それじゃあ私に出来る事、何も無いんじゃないですか？」

「え？」

「だって、こここの仕事でも本棚の整理は雑用係で。」

その雑用すら、私に出来ないなら、何が出来るっていうんですか。」

ここに来て、何も出来ないからお茶だし？

そんななら、いない方がずっといい。ああ、だから省長官は私に仕事はないって言ったのか。」

「そうかもしれない・・・けど」

「私、やりますよ。本棚の整理くらい、やって見せますよ!」

あの時、悔しかった。今だって、すごく悔しい気持ちがあるが心の中をいっばいにしてる。

ファルスさんは私を心配して言ってくれてる。

だけど、それは私がどれだけ無能であるかを示してるんだもん。

私はセルスと約束した、早く隣に立つからって。

だからこそ、こんな所で雑用もできないんじゃないじゃ、一生掛かってても、セルスに近づくことさえ出来ないもん。

「お願いしますっ。」

「.....」

ファルスさんは顔を渋めながら、仕方なくというように頷いた。

それから自分は忙しくて手伝えない事を言って、頑張れと喋りつづけた。

私の前に立ち上がるのは、3時間という時間と、それからたった

一つの大きく古びた本棚。

たったそれだけ。

それくらいで、無理だ何て言われてられない。

もしかしたら、これから先は誰かを傷つけなくちゃ行けないかもしれない。

その時、傷つけないでいいように、今私は頑張らなきゃいけないの。

彼との約束を守るために。

第35話　：　ハイドン

「何笑ってるんですか。」

部下の1人が私のほうを見ながら、恐る恐るといつぶつに聞いてきた。

「・・・笑っていたか？」

「はい・・・。」

そうか、とだけ呟いて口を堅くする。

“今の言葉、撤回してください。”

まさか、あんなに真っ直ぐで強い信念を抱くマスターだとは思わなかった。

きっと去年と同じで、マスターだなんて呼べるわけのない奴だと思っていた。

それなのに、そこに立っているのは揺ぎ無い信念をその目に見せるマスターだった。

「だから、何がおかしいんですか。」

「・・・また笑っていたか？」

「はい・・・。何がそんなにおかしいのですか？」

「いや、マスターズスクールからの見習いがあるだろう？」

あいつは中々おもしろい。

「あ。また意地悪な質問をしたんでしょう？」

意地悪といえば、意地悪かもしれない。

上司である俺にそんな風に言われれば、誰だって逆らえはしないのだから。

「いや、したか。」

「え？」

「なんでもない。それより、見習いにも出来るような仕事あるか？」

心の中で思った。流石白竜が選んだ者なだけある、と。正直、あんなに幼い少女があんな風に逆らうなんて思いもしなかった。

それにあの目はきつと、俺に逆らうという事がどれほど危険かという事も知っていた。

「えっ!？」

「何だ？」

「い、いえ。・・・その・・・省長官が自ら見習いにお仕事を与えるなんて・・・」

「で、あるのか？」

仕事をしたいと訴えていた目。あの目に答えてやりたいと思う自分がいる。

「いえ・・・、今日省長官がファルスに与えた仕事が全て見習いの方でしたから。」

そうだった、と心の中で思い返す。我ながらアホらしい感情を抱いているのは分かっている。

しかし、あの目はきつと世界を動かすようになる。そんな気がして仕方ないんだ。

「なら、仕事を作れ。」

「は？」

「見習いに出来る仕事を、探して来い。無ければ作れ。」

あの目をここで出来るだけ伸ばしてやりたい。

俺に出来る精一杯で、たくさんの事を経験させて、成長させたい。

「そんな・・・冗談きついですよ。見習いに出来る仕事なんて元々うちには・・・」

「ファルスは全てを終えていると思うか？」

「え？ええ。多分。」

ファルスもすっかりした奴だ。ドラゴン思いで、やれと言った事は必ずこなしてくる。

「でも、少し今回はきついかもかもしれません。」

「だろうな。」

「あ、そうだ！！ファルスに与えていた本棚整理と書在庫の整理を見習いに与えればいいんですよ！」

ひらめいた！というふうに、そう言いながら総予省への扉を開け私を通した。

「残念だが、それは叶わないようだ。」

「はい？」

部屋の端の古い本棚が置いてある場所を横目に見て、私が呟くとまたケな声が返ってくる。

「もう、片付けは終わっているようだな。」

出て行く前までは各棚にびっしりと詰め込まれるようにして置かれていた書類が全て綺麗に収まっている。

「・・・本当ですね・・・。流石ファルス・・・仕事が早い。」
「いや、ファルスではないな、あれは。」

その本棚の下に小さな少女が一人立っていて、その少女は何やら呪文を唱えている。

「あれは・・・見習い・・・?!」
「そのようだ。」

驚いた。仕事を与えなければ、きっとずっと座り込んでいると思っていたのに。

ドアの前に立つ私に駆け寄ってきたライクは嬉しそうな顔をしている。

「お帰りなさい、省長官!」
「ただいま。どうかしたのか?」
「聞いてください!あの子、びっくりしますよ!」

その声は興奮しきっていて、落ち着けないというふうだった。

「何だ?」
「あの汚かった本棚1時間半で片付けて、それから各担当者に期限を記した予定書と希望書を配布したんです!!」
その上、この部署のデスクに座って仕事をしている全員にお茶を配って、床まで掃除したんですよ!」

そう言われれば床は綺麗だし、何だか皆ニコニコしている。

「・・・で、あれは今何をしているんだ？」

「ああ、あれですか？あれは自動で書類を分けて、各棚にその書類を片付ける魔法を棚にかけているそうです。」

開いた口がふさがらないような気持ちだった。

学歴書には、まだ15歳と書かれていて、あの学校で最下位のクラスだったと記されていたのに。

「誰がどの担当者など、どうして知っている？」

そんな事を教えた覚えはないし、それを知らなければ、予定書も希望書も配る事なんかできない。

「それは、わざわざ中央塔の登録欄にある部署所属者名簿を借りて調べてみたいですよ。」

ここから10分も離れた中央図書館まで。誉めるといふより、凄いかそんなもんじゃなく、もう呆れるような気分だった。

そんな気持ちで呪文を唱えている少女の小さな背中を見つめる。

たった15にしかならない少女が、何も知らないこの場所で、自ら仕事を見つけたのだ。

「凄い・・・」

「だろっ!？」

俺はまだ何も言わず、彼女の背中を見ているだけだった。

「あ、終わったみたいです。」

その少女から放たれた光が、少しずつ弱くなり、やがて空気に混ざるように消えた。

「あの年にして、これほどの呪を……。」

彼女はその魔法を試しているようで、何枚かの書類を本棚の前に差し出しその手を放した。

するとその書類は重力に逆らい、ヒラヒラと別々の棚に自ら戻っていくように片付けられる。

「凄いですよ、彼女!!」

「だろっ?!」

何も言わないんじゃない、何も言えない。

「ライク、未記入の見積書5件、急いで用意しろ。」

「はい!!」

ようやく口に出た言葉は、こんなくだらない命令で。

最初、彼女がここに立ったのを見た時は、2カ月間もこんな小娘の子守をしなければならぬのかと思った。

それが今では、たった2カ月で何をしてやれるだろうかと考えている自分がいる。

自ら成長する事を望み、その可能性を自ら広げる。あんな小さな少女に、私がしてやれる事はあるのだろうか。

「いや、10件。10件だ。」

「えっ?・・・あ、はいっ。」

伝説のドラゴンマスターへの道を、手伝う事ができるのだろうか。

第36話　：コア

「ふはあ〜」

春もすっかり過ぎ去り、今年の夏はどうやら少し涼しいようです。大きなため息に似た声を漏らして、テラスに出ると、コンクリートの冷たさが裸足には気持ちよくその感覚に、ようやく短い休憩が入ったことを実感する。

「どうした。もう嫌になったか。」

少し笑いながらその低い声がテラスにいる私の背筋をピンと伸ばさせた。

「省長官っ!」

「今日ももちろん徹夜だ。女にはキツイだろうが・・・」

煙草を吸いながら、諦めたようなその口調に体が自然と元気になる。一瞬の強い風に、煙草から出る煙が揺らぐ。

「何言ってるんですか。・・・嫌になる?そんな事、ないです。」

本棚の整理を終えた私に渡された仕事は、どれも総予省で働いている人と同じもので、同じ量。

仕事を与えないと言っていた省長官が、与えてくれた仕事はどれも大変なものばかりだけど

「楽しいんです、とつても!!時間が滝みたいに流れていって。

ああ、生きてるなって。今出来る事を精一杯できてるなあって思え

るんです。」

少しずつ、少しずつかもしれないけど確実に、セルスに近づけてるような気がするから。

「お前、おもしろいな。滝か。この奴等は地獄だって言うのに。滝か。」

「滝ですっ！だけど、その間に小川みたいな時間があつて。その時間が頑張れ！！って自分を応援できる時間なんです。」

このテラスで立っているこの時間が、小川のようにゆっくりで。夏の涼しい風を運んで、夜の星をこんなにも見せてくれる時間。

「滝があるから、小川はあるんですよっ！その事も、ここに来て得られた事の1つですっ。」

学校で流れる時間はいつだって鐘の音で一定に区切られていて。こんな風に時計を見ないで過ごすことなんかなくて、時間は時計。そんな常識がここでは全く通用しない。時間は流れ。流れは常に一定だとは限らない。

「やっぱり、白竜が選んだだけあるな。お前、学校出たらここに来ないか？」

煙草の火を魔法でジュツと消して、その吸殻をそつと白バラに変えて彼は言った。

「ははっ。本気ですか？それ。」

その白バラを差し出しながら、彼は真剣な顔をしてこっちを見た。

「本気だ、と言っただら？」

射るように見てくるその目は、今日の夜みたく真っ黒で吸い込まれそうだった。

「ここは私なんか、必要としてません。

それに私はもつと広い世界を見て、たくさんの事を経験して、私にしか出来ない事をやりたいんです。」

「総予省を蹴るなんて、エリート街道を蹴るようなもんだぞ？」

「あははっ。エリートですか。省長官は、そんなことを思っただけに來たわけじゃないんですね。」

だから、私はここにはいられない。

ここにいるのは、国を支えたい、民を救いたい、そんな思いを抱いて本気で來た人ばかり。

そんな所に私が簡単に足を踏み入れちゃいけないって思うの。

「昔、上に行くのと約束した奴がいたんだ。だから俺はここに来ただけだ。」

そつとテラスに揺れるカーテンを手で避けて、ハイドン省長官は中へ片足を入れて言った。

「そいつが悲しまないですむように、ここで俺にできることをする。それだけだ。」

「・・・私も約束した人がいるんです。ずっとずっと遠くを飛んでるんですけど、すぐに追いつくって。」

最近、とても忙しい所為なのか。約束を交わしたあの日が酷く遠い

昔の事に思える。

「休憩終わりだ、・・・朝までには仕上げるぞ。」
「はい。」

省長官の後を追って、資料まみれの部屋の中に入る。

今日の前にある事しかできないけど、しないよりもずっといい。

この資料まみれの部屋で、朝まで徹夜して、ルキアと一緒に空飛んで、それで伝説のマスターになれるわけじゃないけど。

私は確かに今を生きて、何かを得てる。そう思える今がとても楽しいの。

貴方の約束を少しずつでも、縮めているような気がして、とても幸せなの。

第37話　：コア

実施訓練にここに来た日から、早くも一ヶ月がたった。

ファルスさんとライクさんとも仲良くなり、仕事もある程度はできるようになった。

「おい、コア。」

「はいっ？」

初めは忙しくて、死にそうだと唯足掻きながら仕事をするだけだった。

それが今では、時間を感じとり、休憩だつてとれるようになった。

「今日は・・・でかける。ついて来い。」

振り返れば、振り返るほど、残り一ヶ月と言うのか悲しく感じて仕方ない。

ゆっくりと広い廊下をズンズン歩いていく、ハイドン省長官の背中もどこか愛おしい。

「省長官のドラゴン、初めて見ますっ。」

空に手を上げた彼の眼は、少し嬉しそうで、どこか寂しそうだっただ少しすると、彼の元へドラゴンが降りてきた。

それは綺麗なドラゴンで、まるで宝石のようなエメラルドグリーン
の翼が空の色と良くあう。

省長官の悲しみの目は、このドラゴンの事ではない。ふと、そんな
風を感じた。

「私も、お前のドラゴンを生で見るのは初めてだ。」

早く呼んでくれ、と彼は静かに言った。

心の中で名前を呼ぶと、空の端のほうから駆けて来る風がルキアの匂いを運んできた。

だんだんと大きくなっていくルキアの姿に、省長官はじつと魅入っている。

「ルキア。」

『コア。・・・お久しぶりです。』

ここ最近デスクについて、仕事をしている私はほとんどルキアと会っていなかった。

そつとその白い肌に手を触れて、久しぶりの感触を確かめる。

「・・・綺麗だ。」

ボソリと、風にかき消されてしまいそうなほどの声が耳に響く。

『本当に。こんなにも美しいドラゴンがこの世にいたとは。』

「これが、伝説の白竜か。」

省長官のドラゴンと省長官が心を奪われたように、声を漏らしてそう言った。

汚れを嫌い、ただ主のみに忠誠を誓う竜。そんなふうに誰もが羨んだ白竜。

だけど私には省長官のドラゴンだって、とてもこの世の者とは思えないほど美しく見えた。

「ルキアは唯のドラゴンです。・・・唯、色が白だけのドラゴン

です。」

私は訴えるように言った。

「悲しかったら泣くし、楽しかったら笑う、精一杯生きていて、心臓が止まれば死んでしまう。普通のドラゴンなんです。」

そう言うと、省長官は少し呆れたようなため息を漏らしてその手を私の頭に置いて言った。

「ああ、そうだな。」

その言葉はまるで魔法のように、私の戸惑う心を全て受け止めてくれた。

全てを知り、全てを理解し、そして全てを信じているような。

「お前と同じような事を言う奴がいたよ。」

「え？」

「さあ、行くぞ。急げ。」

聞き返す私に返事の言葉はなく、彼はドラゴンの背に乗ると一気に空へと舞い上がった。

その後をルキアが急いで追っていく。

私と同じようなことを言う人は、きっと彼の大切な人なんだろう。

私は何故だかそんな風に思った。彼の眼が映していた悲しみはきつとその人のことなんだと。

上がり始めたばかりの太陽に向かって、唯ひたすらに前を飛んでいく彼の背中が何故だかとても暖かく見えた。

第38話　：コア

「こんにちは。」

紺色のワンピースに真っ白の短いマントを羽織る女性が、優しく笑いかけてくれた。

降り立った場所はまるで想像もしていなかった、真っ白な病院だった。

「カルティエ。」

そう名前を呼んだのは、ハイドン省長官だった。

彼は地へ降り立つやいなや、その女性の元へと足を急がせて近づいた。

「今度のガールフレンドはかなり年下さんね。」

少しの風にゆっくりと揺らぐ金色の髪の毛は、まるで彼をあざ笑うかのように流れていた。

いつもは冷淡で、私情を持ち込まないで、まるで分からない人だったけど

カルティエと呼ぶその女性に向ける横顔を見ると、

何だか彼が人間である事を思い出すような気持ちになった。

「本当に、君はいつもそんなことばかり・・・」

「あら、違った？」

無邪気に笑う彼女と反対に、彼はその頬を軽く引きつらせた。

それを見ると、嬉しいからなのか、可笑しいからなのか思わず笑い

そうになる。

「こいつは今実施訓練でうちの部署に来てる見習いのコアだ。」

そう紹介されて、笑いの発作を抑えるのに苦労していた私は、さつと姿勢を正した。

「はじめまして、コアちゃん。まだこんなに若いのに、すごいわっ。」

「そんなっ。」

優しい声がまるで春をもう一度振り返らせるように言った。

その暖かい笑顔につられるように、息を抜いて笑った。

何だかルキアもそつと癒されるように、柔らかな芝生に頭をもたげた。

「案外使える奴だ。」

「まあ、それが女の子に対する言葉？もうすこし、クリユスを見習うべきだわ、全く。」

「こいつは女である前にマスターだ。」

「またそんな言い訳！マスターでもない私の事だって、女の子扱いしたこと無いくせに。」

2人はとても仲がよさげに言い合っている。

その姿はまるで、自分とセルスが時を経た姿と被っていた。

そう思うと、その光景はどこか暖かく、そして寂しい気持ちを与えた。

「それは別だ。」

そういう彼の顔は、やっぱり初めて見るような顔で、それは彼女にしか向けられない物だと分かる。

こんなにも愛されているのに、彼女は全く気づかないふうに笑うだけ。

それでも省長官はその思いを隠そうとはせず、真っ直ぐに話している。

「クリユスはとっても優しいのに。それに比べてハイドンは・・・」

「・・・またクリユスか。」

クリユスと呼ばれる誰かの名前があがると、省長官は目に見えるほど悲しそうな顔をした。

「誰ですか・・・？」

ようやく心の声を言葉にすると、2人はいつせいに私を見て、声をそろえて同時に言った。

「俺の双子の兄だ。」「彼の双子の兄よ。」

「省長官には双子のお兄さんがいたんですかっ!？」

彼はまったくプライベートな事を話さないため、そんなことすらも初耳だ。

そんな風に驚いている私に、彼女は楽しそうに笑っていった。

「ハイドンとは真逆だねっ。とても優しくて、とても親切で、とても紳士的なもの。」

「で、お前はそんなあいつに片思い、と。」

「そうなのよねー。中々届かないのよっ。」

なんてね、と彼女は笑ったが本当に笑っているわけでもなく省長官の引きつった笑顔にどこか重なるものを覚えさせる。

「それじゃ。お前、この後暇だろ？そいつにここ案内してくれ。」

「暇じゃないけど、いいわよ。」「アちゃん、可愛いし！」

「じゃあ、頼んだ。俺は院長と会ってくるから。」

さっきまで見せていたその顔を何か仮面で固めるように、隠して彼は仕事のときのあの冷やかな目に戻った。

ゆっくりと並木道を歩いて大きな玄関へ向かう彼の背中が小さくなった時

私の隣でその姿をまるで目に焼き付けるように見ていた彼女がボソリと呟いた。

「片思い・・・か。」

散り忘れた桜の花びらがひらりとその言葉と一緒に舞った。

「・・・カルティエさんは、省長官が好きなんですね。」

そして省長官もまた、アナタの事を愛している。

「あら、バレちゃった？」

可愛らしく舌先を出す彼女は、頬を染めて恋する乙女だった。

「どうしてハイドンには伝わらないんだろうね・・・。本当に、中々届きやしない。」

「クリユスさんの事とか、その・・・“彼女”とか、笑って言うからじゃないですか？」

今さつき会った人に、どうしてそんなことが言えてしまうのか。自分でも驚いて、急いで謝った。すると彼女はまた、その笑顔を向けて言った。

「そう言わないと、隠せないもの。」

人はきつとこの感情だけは、コントロールしきれないんだろう。

あんなにも伝えたいと思う気持ちがあるのに、そのどこかでは隠そうとする気持ちがある。

予測も出来なければ、対策も立てようがなくて。あの省長官さえもあんな顔にさせてしまえる
この世界でたった一つ、唯一の感情なのだろう。

「あんな俺様で、わがままで、勝手なのに。あんな奴のどこがいいのやら。」

私に向けてか、それとも自分の心の中に向けてか。彼女は唯呟いた。

「彼には心に決めた人がいるのよね。何となく分かるの。時々見せる顔が、そう訴えてくるんだあ……。」

悲しいね、とまた作られた笑顔を向けられる。

だけど何も言わないでおこう。彼女がそう思うのなら、私は何にも言わない。

彼が誰を思っているのかも。彼が訴えている相手は紛れもなく貴方1人だということも。

「でも、諦める気にはなれないから……困っちゃう。」

そついうと彼女はそのスグ傍のベンチに腰を掛け、その隣のスペースをトントンと手で叩いて私を呼んだ。
緑の葉っぱが作り出す木陰は、焦がされた肌を冷たく冷やすように、ソヨソヨと流れていく風に、音をつけて笑っていた。

第39話　：カルティエ

「ここ、今ではこんなに大きいけど、昔は平屋の一軒だったの。」

隣で座っている少女に私はそういった。

目を閉じれば、思い出そうとしなくても浮かび上がるあの日。

「どうして、どうして人は人をこの手一つでは助けられないのかしら。」

「え？」

「昔、コアちゃんにそっくりな子がいたわ。私もクリユスもハイドンも彼女が大好きだった。」

野原を駆け回る鳥のように、自由に綺麗で、私達と同じ人間だとは思えないほど美しかった。

「けど、彼女は死んでしまった。」

天使のように、幸せそうに笑いながら、いとも簡単に私達の目の前から飛び立って行ってしまった。

「そのとき、私は医者になろうと思ったの。何も出来ない、その悔しさをもう二度と味あいたくなかったから。」

「そうなんですか・・・。」

全ての人を救いたかった。もう二度と、あんな思いをしなくなかった。

それから私は医者になって、たくさんの人を助けようとここに来た。

「ここは医者のない村と呼ばれてたの。」

「え？」

「病院もなくて、医者もいなかった。だから、私とクリユスはこの場所に病院を立てた。」

その時は救えると信じていたの。私の手で、たくさんの人を救えると。

「だけど、昔は今と違って、国からの資金援助は全くと言っていいほどなかった。」

私にはこの人を救えるだけの器材を買うお金もなかった。それなのに、ここにいる人は皆、医者に見離された重体者ばかり。」

苦しくて、苦しくて、私はもがく事さえ出来なかった。

誰かが助けてくれと手を伸ばすのに、私はその手を掴む事さえできなかった。

「どうして国は資金援助をしなかったんですか！？」

「・・・予算の枠に医療と言う文字は無かったの。」

あの時の国は、医療に何の興味も抱いていなかった。

医療にお金を掛ける事は、ただお金をどぶに捨てているような物だと考えていた。

「え！？でも、今は・・・」

「そうね、今は予算の大部分を医療関係が占めているわ。」

そうしてくれたのは・・・ハイドンだった。

「ハイドンがどうして総予省長官なんてしてるか、知ってる？」

私の問いかけに彼女は首を小さく振って、不思議そうに見てくる。

「彼はたった8年で、あの場所まで上り詰めたの。」

総予省以外の省長官は皆50歳以上なのに、彼が省長官に着いたのは彼が28の時だった。」

あの若さにして、あの場所に立つのはかなり大変なことだった。

あの頃はまだ幹部でしかなかった彼が、あの若さであの場所に上り詰めた。

「それは国を変えるためだったの。この国の国民を、医者を助けるためだった。」

“もう嫌・・・ッ・・・”

土砂降りの雨の中、崖から落ちてしまった少年を助けに行ったのに、私の手には何一つできることが出来なかった。痛い痛いと言った少年の手を握り、大丈夫としかいえなかった。

“このどろどろが医者なの・・・っ！私は・・・医者なんかになっても何も出来てない・・・っ！”

救いを求める手に何一つしてやれることはない。

“・・・辞めたりするな。俺が、俺がこの国を変えるから。”

土砂降りの雨の中から、彼の声だけが響いてきた。

その五月蠅い雨の音も全てを無音に変えて、彼の声だけが私に響いた。

「まだ20歳だった彼が私達に言ったの。

“この国をお前等医者が全力を尽くして、助けられる国にしてやる。だから、辞めるな！”って。」

それから彼からの連絡は何1つ来なくなった。

そして8年がたった時、テレビに映し出された予算会の一番上の机に彼が立っていた。

「それから8年後の予算会、彼はテレビと議員の前で叫んだの。

“この国を医療の最先端に立たせて見せます。そのために今年の予算はその4割を医療関係費に当てる事とします！”ってね。」

もちろん、議員の9割……つまりは総予省以外の全ての部署が反対だった。

それでも彼はその意志を曲げることなく、その予算を国に提出した。国王は彼の提案に何も言わずにそれを受け取った。

「知りませんでした……。」

「彼はその話をしたがないの。」

それからまるで、この世界は180度変わった。

医者数は1年で何十倍も増え、僻地医療はどんどん進んだ。

この病院にも器材が無料配布され、医者が何人も赴任し、医療も世界の最先端まで駆け上がった。いった。

「それから4年間で、彼はここまで世界を変えたの。

今、私の手はたくさんの人を救うことが出来る。」

あの土砂降りの雨の中で彼は私に言ったの。

“俺が上に立って、世界を変えてやる。”

その言葉が、私を今までここに立たせてくれていた。あの言葉がなかったら、私も患者も生きる希望を捨てていたに違いない。

「・・・省長官が言ったのは、カルティエさんの事だったんですね。」

「え？」

「省長官が少しだけ教えてくれたんです。昔、約束した人がいるんだって。」

その人がもう悲しまないですむように、ここで出来る事をするんだって。」

彼がそんな事を思ってくれていたなんて、知らなかった。

彼があの場合まで上り詰めたのは、私のため？

もう、私が悲しまないためだけに・・・あんなにも努力してあの場合にたつたの？

「ハイドン省長官は、本当にカルティエさんの事を大切に想ってると思います。」

彼は知らないのよ。私がどれほど想っているのか。

クリュスがどれほど優しくても、紳士でも、私の中で貴方に勝る人はいないってこと。

「私もとても大切に想ってるわ。」

「そうだと思います。」

コアちゃんがつこりと笑うと、夏の風が強く吹き付けてきた。

「約束は守られたんですよねっ?」

ふと少女の問いかけに、思い出した。

「そうね。」

「なら、どうして隠す必要があるんですか? もう、約束は果たされて、隠す必要も何も無いのに……。」

「もう……彼にこの気持ちを伝えてもいいの……?」

彼を想って隠してきたこの気持ちを、彼に伝えることが出来るの?

「はいっ。」

にっこり笑って頷く彼女の声で、魔法にかけられたように抑えていた感情が溢れ始める。

「カルティエ。」

「……ハイドン!」

「もう帰るから、クリュスと仲良くな。」

知らなかった。貴方がそんな悲しそうな目しながら笑ってたなんて。

「ねえ……、今の一番の夢何?」

私の問いかけに彼の顔が急に固まって、私達に風が吹いてくる。

「夢? そんなの……。」

約束は果たしたでしょ? この国の医療は今、世界でトップに立って

る。

もう彼女のように何もできないで死なせてしまう事もない。あの少年のように、伸ばされた手を掴めない事も無い。

「今度は私がアンタを幸せにすることが、私の夢なの。」

もうアンタがあんな悲しそうな目をして笑わないですむように。木々と葉が揺れて、傾き始めた太陽が全てを暖かく照らしていた。彼の黒いマントも風に揺れながら、太陽に照らされていた。

「ははっ。」

「え？・・ハイドンっ!？」

「おい、コア。帰るぞ。」

ワケがわからないまま、彼はコアちゃんにそんな言葉を掛けると、翼を広げるドラゴンの背中に飛び乗った。

「ルキア、行こっ？省長官、先に行ってます。」

「ああ。」

真っ白の竜が空へと舞い上がる。その姿に見惚れている私に彼が言った。

「次に来た時は指輪を用意しておく。」

その言葉に、地上に立つ私は思わず笑ってしまった。あなたはいつだって幸せを与えてくれるんだ。

彼や、コアちゃん、ドラゴンマスターと呼ばれる人は皆そうなのかな。

彼が私に幸せを与えるように、いとも簡単にこの国に幸せを与えて

くれる者達なのかもしれない。

第40話　：　ハイドン

フワリと世界を撫でていく風が、何故だか心を温かくした。そんな草原にゆっくりとドラゴンは足を下ろし、その後ろでもう一匹のドラゴンが地に足を下ろした。

「ここ、どこですか？」

少女が“ここ”と言った場所は、世界を繋ぐ青い海が良く見える草原で、そこには幾つかの白い墓がある。

その白い花がポツポツと咲いているような景色には不釣り合いな木が大きく生命を示して立っていた。

「ここは生けるべき生命の最後の場所と呼ばれている楽園、テパングリユス。」

「え？ここが!？」

テパングリユスはたくさんの神話や、伝説にも出てきて、この世界では幻だといわれ、また現実に存在する楽園。生けるべき生命とは、神が愛したままこの地を離れた命のことである。

いわば、死ぬ事が望まれる事の無かった死者の最後の場所。

「その様子だと、ここに来るのは初めてか？」

「・・・初めて・・・だと思います、多分。」

「何だ、その曖昧な返事は。」

「よく、分かりません。来たことはないはずなのに・・・何だかとても懐かしいんです。」

彼女は少し悲しそうな目をした。その後ろで白竜がその場に相応しく空を飛んだ。

「ここに眠っているんだ。この、テパングリユスに。」

「・・・誰がですか？」

「君にそっくりな・・・そうまさに生き写しのような彼女・・・グレーナが。」

もう何年も昔の話だ。そんな昔の話が、未だに心を締付けてやまない。

それほど俺やカルティエ、クリユスにとって大きな存在だった。

「グレーナ・・・さん？」

「彼女が亡くなったのは14年前だ。」

まだ俺等が16の頃、彼女は体の事を隠したまま俺等の前から消えた。

それから2年後、急に戻ってきたかと思うと彼女は自分の病気について俺らに話した。

そのときの顔は今でも消えずに、くつきりと覚えている。

この世界に何の未練もないかのように、優しく温かく穏やかで、そう、まさに天使のような笑顔だった。

「俺等が18のとき、彼女は眠るようにして死んだ。」

そしてこのテパングリユスの風が、彼女を呼び、彼女はテパングリユスの元に眠ることになった。

俺達はそのことをどこか予感していたのか、驚きもしなかった。

それが当然の事のように、彼女はこの地に温かく迎えられた。

「その時、俺等には何一つしてやれなかったという後悔が残った。」
「それでカルティエさんとクリユスさんは医者になるかと決めたんですよねっ？」

真つ直ぐとした目も、その温かな笑顔もどこか彼女を思わせる。
そんな少女の顔をじっと見ていた俺は、首を傾げる彼女に急いで返事を返した。

「そっだ……。」

全ては彼女から始まった。
俺があの場合に立とうと思ったのだって、彼女の死から医者を目指したカルティエが悲しまないようにと思ったから。
もしも彼女が俺等と出会っていなければ、全ては始まりもしなかったんだ。

「彼女は、俺に言ったんだ。」

そつと白い布団のなかで、彼女は笑いながら言った。
それはまるで天使の囁きで、俺にとっては奇跡の出来事のように思えた。

「どうして黙っていた!!！」

「そんなに怒らないでっ、ねっ？」

「怒るっ!!！当たり前だろうっ!!！？何も言わずに2年間も連絡1つしないで、

それで急に戻ってきたかと思っただら体の事をずっと黙ってたなんて!!！」

どれほど心配したと思っっているんだ。そんな思いをぶつけた。彼女は俺のそんな怒りを何も言わずに唯優しく受け入れるように笑った。

「ごめんなさい。心配かけることは分かっていたわ。それでも、いえなかった。」

「2年間も、どこで何してたのかくらい・・・」

「ごめん、それも言えないの。」

「どうしてだっ!」

「ねえ、ハイドン。時間を元に戻すことなんて誰にも出来ないわ。」

彼女はとても温かな目を俺に向けて、そのベッドから見つめてきた。その目は2年前に見た彼女の眼とは少し違っていて、俺とは違う世界を見ているようだった。

「でもね、だからこそ今と言う時間を、ここに存在する全てを大切に思えるの。」

「たった2年で、彼女の眼はずいぶん変わっていた。たくさんのお得たような目をしていたんだ。」

「私も、そのグレーナさんに会ってみたかったです。」

俺は一瞬強い風に目を閉じ、それからその少女を見た。

その瞬間幻のように、その背に天使になった彼女が、グレーナがはかなく笑いながら立っているのが見えた。

「.....!!」

「どうしたんですか？そんな驚いた顔して・・・？」
「い・・・ついや。・・・なんでもない。」

その瞬間に、俺はその全てを悟った気がした。
彼女の微笑みも、あの目の優しさも、彼女が見ていたものを、今日の前に見ているような、そんな気がした。

「いつか、その真実と出会える日がくる。」
「え？」

不思議そうにこつちを覗き込む少女に、俺は軽く首を振って、何でもない。と呟いた。
たった2年で、彼女が見つけたものを、俺はこれからカルティエと見つけていくんだ。
二度と戻れぬ時に生きる俺達の、今と言う時間を、ここにある全て
のものを大切だと思える何かを。

第41話　：コア

ここに来たのは凄く最近のように思える。

それなのに、もうここに来る事はないんだと、理解しなければならぬ日がもう今日という日までやって来てしまった。

「本当に早かったな。」

「お世話になりました。」

「本当だ。」

笑いながらそんな冗談を言う彼、ハイドン省長官の横には幸せそうに微笑むカルティエさんがいた。

「元気でね、コアちゃん！」

「はいっ！」

「またいつでも遊びに来てね。」

「はい、絶対！」

初めてここに来た時は、彼の眼に足が竦みそうになった。それでもセルスとの約束が私を支えて、今ここまで立たせてくれている。

「お前が約束した男……。」

不意にハイドン省長官が私から眼をそらしながらそういった。

「……また、連れて来い。」

「お父さんみたいな事を言わないでよ、ハイドン！」

「そういうわけじゃない!!！」

「ハイドン省長官、いつか必ずお目にかかります。」
「そうか。」

ゆっくりと吹くその風が、まるでその時間を名残惜しいという事を言葉にせずとも伝えていようだった。

2人は黙り込み、私の口から言葉が発せられる事はなくなった。

「・・・元気でね。」
「はい。」

優しい顔がまるで、お母さんと呼ばれるようなものに見えて私は涙ぐんだ。

「早く行け。」

最初から最後まで、冷たい目をしたハイドン省長官の優しい言葉にその涙は勢いを増して目から溢れた。

「は・・・つい。」

久しぶりに羽織った学園の白いマントが、まるで羽のように軽い。私は涙をそつと手で払いながら、ルキアがまつ中庭を歩いていった。

「おいつ、コアー!!」

低いその声に私は静かに振り返った。

「これを受け取れ!」

リーチ（届く）の魔法がかけられた何かが、私めがけて投げられた。

空中を飛んでくるその“何か”はキラキラと太陽の光を反射しながら私の手の中におさまった。

「それはグレーナがいつも身に付けていたものだ。お前にやる。」

それは金のネックレスだった。そこには3つの指輪があり、真ん中の指輪はまだ新しく綺麗だった。

その真ん中の一際小さな指輪には、二つには無い文字が書かれていた。

『 You are our world core . 』

私達の世界の中心は貴女。

「いいんですかっ!？」

遠くにいる彼に届いたかどうかは分からないが、彼はにっこりと笑いながら頷いた。

それから何か言葉を私に投げかけた。

「それは から に送られた 。

「・・・え？」

「もう行け!!」

その言葉に私は首をかしげながら、そっとルキアの背に乗った。風の音がする。この世界全てを掛けてきた、あの日の風が。

「行こう、ルキア。」

『はい。』

ルキアはその白い羽をフワリと動かして、いとも簡単にこの場所か

ら足を浮かせた。

その様子を下で見っていた二人は、まるでお父さんとお母さんのように優しく見守ってくれているようだった。

「私のお父さんとお母さんも、2人みたいだったのかな・・・？」

私の独り言はすぐ傍にいるルキアにさえ届かないほど小さくて、強く吹き荒れていたその風に流されていった。

お父さんのようなハイドン省長官。お母さんのようなカルティエさん。

ここで出会った人達、ここで学んだ全てを、私は絶対に忘れたりはしない。

そんな風に思うと、空吹く風はどこかその心の誓いを聞いてくれているような気がした。

第42話　：セルス

「おい、セルス！」

赤いシートの上をようやく歩きなれた俺に、今日は誰かが声を掛けてきた。

もう何日も1人で歩く廊下を、初めて誰かと並んで歩く事になる。

「誰？」

「俺だよ、知らないか？」

「ごめん、どこかで会った事あるっけ……？」

振り返った俺の目の前に立つ、やたらと体の大きな男はニマツと笑うと、初対面だ。と言った。

「なら、知ってるわけがないだろう……？」

「本当に知らないか……。いや、俺は3年のパテユグって言うんだ。」

「俺はセルス……って言わなくても知ってるのか。」

俺は軽いため息をついて、上から降りてくる視線にあわせて首を上げる。

「おめーはかなり有名だからなっ……！」

「俺が？」

ここに来て間もない俺は、この学校の広さに中々なじむ事が出来な
いでいるくらいなのに。

何せこの学校は全てが大きく、ドラゴンを連れて歩いても余裕があ

るくらい縦横にかなりの広さを持っているのだ。
マスターズスクールの規模がどれほど小さい物かを思い知らされるばかりである。

「ああ！おめーはその若さでこの学校にいるんだ。それはスゲー事なんだぞ！」

凄いと言われることには慣れてしまった。

何人の人に、どんな人に、凄いと言われても、俺には分からない。
結局人を助ける事も、自分1人で行動することすら出来ないのだから。

「フェウスって言う天才マスター以来だかなあ！！」

「フェウス？」

どこかで聞いた事のあるような、いや、ないような。

そんな名前を聞いて、意識も無くそんな質問をすると彼は驚いた顔をした。

「知らねーのかっ！？あのフェウスを！！」

「いまいち・・・」

「そーか・・・そりゃ俺のこと知らないはずだ。」

フェウスって言うマスターは、20年くらい前ここにお前よりも1つ年上で入ってきたんだ。」

そう言われて、頭に浮かんだのは中央等の大きなガラス張りのケース。

「そうか、思い出した！！その名前、ガラスケースで見つけたんだ！！」

「そつだ、そつだ。中央等のガラスケースの中に、幾つものメダルや賞状、記念碑とかが飾られてるだろ？」

そしてその傍らには、ドラゴンの爪のかけらが置かれていた。

「そりゃー、すげー人だつたんだとよ！」

ズンズンとまるで自分の事のように、誇らしげに歩いていく大男に急いでついてく。

「で、お前はフェウス以来初の若かりしドラゴンマスターってわけだ。」

「へえ」

その返事に自分でも、彼の言葉に何の興味も無いのが分かった。もちろん、彼がそれに気づかないはずはなく、俺に勢いよく突っかかってきた。

「おめー、興味ねーのかよっ！！」

正直言うと、全く無い。それが俺の答えだった。

ここに立っているので精一杯の俺が、たかが若くしてここに来たというだけで

あのガラスケースの中に入っているメダル達の持ち主と、同じ場所に立てているわけが無いのだ。

「俺は・・・全然凄くなんてない。」

それは謙遜とかではなく、事実そうなのだ。

そつという俺の顔を見て、彼はもう突っかかるのを辞めたのか、落ち

着いた声を俺に聞かせた。

「勿体ねーなあー。」

彼は高い高い天井を仰ぎながらそんな言葉を俺に漏らした。
勿体ない？そんな風に俺は心の中で呟いた。

「・・・え？」

「フェウスだって、お前と全く同じだったんだろーに。」

何が言いたいのか、全く理解できなくて聞き返す俺に、彼は今度ははっきりと俺を見てそういった。

「え？」

「この広さに慣れなくて、うろろろしたり、その年の生徒会長を知らなかったり。」

この赤いシートをただ一人で、テクテクと歩いて成長したんだぞ。」

考えても見れば、そうだろう。

始めてこんなどこかい場所に連れてこられて、一人きりで全てを知っていくのだから。

「だから勿体ねーなーと思っただんだ。」

彼がそういった意味が、今ようやく分かった。

俺には彼のようになる、いや、それ以上になれる可能性があるという意味だったのだ。

「今の俺じゃ・・・到底無理ってことか。」

「“今のお前”じゃなあ。」

ここに立っていることに必死だとか、俺が決め付けただけ。もっと先を求めて、手を伸ばせば、その“必死”はいとも簡単に崩れてしまうのだろうか。

「えつと、パテユグ？」

「ん？」

「それで君は、生徒会長だったりするのか？」

俺は考えていた事を彼に言うと、彼はまたニマツと笑ってみせる。

「正解だ!!」

必死だなんて言葉は、終わった後に気づくんだ。今、この時にそんなことは分からない。

分からなくなるくらいに、手を伸ばし続けて、その先を求め続けてそれが必死ってことだから。

フェウスというその人も、俺と同じだった。いや、皆同じだったんだ。

ここから頑張れるのかどうか、先へと進む、あのガラスケースの中に入れるかどうかなんだ。

「これから、よろしくなっ！」

「いちらじぞ。」

例え今がどれほど愚かであろうと、劣っていようと、俺にはここから進む力がある。

伸ばされたゴツゴツした手に、俺は手を重ねた。

“これから”を信じて。

第43話　：セルス

「セルス、今日は病院見学でしょう？」

眼鏡をかけ、背の高いマティスが俺のほうを見ながらそう言った。マティスより少し背は低い、そこらの男に負けているわけではないので、あくまで横を見ながら返事をする。

「ああ、あの医者のない村だった場所にある総合病院だ。」

「良く知ってるわね。」

真紅の綺麗な長い髪の毛はクルリと緩く巻いていて、その髪の毛がフワリと女性の匂いを漂わせる。

背の高いマティスの横からヒョコっとプレンティが笑いかけてそういった。

「プレンティ、貴女はどうしていつも急に出て来るんです。」

「あら、いいじゃない。それとも何か隠したい話をするつもりだった？」

ツンとしたプレンティの冗談が、マティスの言葉を丸め込む。

そんな2人のじゃれあいを眺めていると思わず笑いが零れ、その瞬間2人は同時にこつちを睨みつけてきた。

俺は急いでキリツとした顔を作っていた。

「プレンティもマティスも、病院だろ？」

「はい。」

「ええ。」

それから2人はセルスから視線をそらすと、真つ直ぐと前を見た。真つ赤な絨毯が敷かれた大きな廊下をゆっくりと歩く。

2人は5つも年上だが、同じ1学年の中でセルスを覗いて一番若い2人だった。

「俺は元々医者になるためにここに来たんですから。」

「そうだったわね。ドラゴンマスターの医者ならドラゴンの治療から人間の治療、訪問治療だってできるものね。」

「そういうプレンティはどうして、病院？」

見学先は自由に選べる選択性で、病院を選んだのはたったの10人程度だった。

「私？私は・・・特に理由はないけど。セルスはっ？」

「俺はその病院のクリュスって人に会いたいんだ。」

「誰です、その・・・クリュスさんて。」

「あの病院の院長をしている人で、32歳の天才医師と呼ばれている人だ。」

俺がそういうと2人は驚いた顔を向けたまま、こつちをみている。

俺はそんな2人にその人のすごさを話して聞かせた。

「32と言う若さで、あんなに大きな総合病院の院長をしていて、ボランティアに活発な人だ。」

まだ会ったことは無いが、会って聞きたいことがたくさんある。」

「そう。そんなに凄い人がいるのね。」

「知りませんでした。」

2人が知らないのも無理は無い。彼は決して人前に出てくる人ではなく、裏の医師会長と呼ばれている人だから。

そんな彼に会って聞きたいことはたくさんある。
どうしてその若さでそこまで上り詰めたのか。どうして表に出てこ
ないのか。

この世界をこれからどんな風に変えていきたいのか。

「出発は12時だろ？」

俺がまだ10時をさしている時計を眺めながらそういうと、マティ
スが軽く頷いた。

早く会って、話がしたい。そんな思いで、心が時間が過ぎるのを待
ち望んでいた。

それに……話したいことは、そんなことだけじゃないんだ。

赤い絨毯を永遠と歩きながら、パテユグが聞かせてくれた話を思い
出していた。

「こんなに大量のメダルを取っていた人だぜ？」

「すごいな。」

「感動するだろ？」

「……ああ。」

何百個とまるで金のドラゴンのつろこのように並べられたメダルに
ため息がもれる。

そんな俺の隣で、ガラスケースに背中を預けてパテユグがいった。

「この人は今、行方不明らしい。話しによると自ら姿を消したと
か……」

「……え？」

「何十人のマスターが彼に一目会いたいと探し回っているらしいが、

「この世界のどこにもいないらしい。」
「それって……死んだってことか？」

その言葉に俺も急いでガラスケースから眼をそらして、パテユグを見つめた。

いきなり大声をあげた事で、喉の奥に何か痛い感じが伝わってくる。

「いや、そうじゃない。」
「え？」

「彼のドラゴンを見た者が何人もいるんだ。」

「似ているドラゴンじゃないのか？」

「いや事実、主の名がその牙に刻まれていたらしいんだ。」

それはある程度の力を持つマスターに許された永久呪文で、死ぬまでドラゴンとの契約を打ち切る事はしないと誓った証として刻まれるものだ。

「ドラゴンが生きているのだから、その主である彼が死んでいるはずがない。」

ドラゴン契約はこの世界の何よりも強い契約魔法だ。

それが破られた事なんて、何に置いても一度も無いんだかな。」

主が息絶えた瞬間を持って、ドラゴンの心臓は音をとめ、動くのをやめる。

それがドラゴン契約の原則ともいえる、最も重大な契約である。だから、彼のドラゴンが生きている限り、彼も死んではないということになるのだ。

「じゃあ……」

「フェウスにはたった一人だけ、大親友がいたのを知ってっか？」

「え？」

「たった一人だけ、全てを許していた友がいたんだと。」

その名はクリュス。

「クリュス……」

伝説を作り上げようとしていた男が信じ、全てを与えた友……それがクリュスだった。

男はクリュスよりも2つ年上で、将来は全てを手に入れるマスターになれていたらしい。

彼に会いたい。彼がどこにいるのかわからなくても、彼について話を聞きたい。

「何か言いましたか？」

不意にマティスが俺のほうを見てきた。

「いや、なんでもない。」

全てを掴む事が許される場所にいた彼が、どうして姿を消したのか。パテユグの話聞いてからそればかりが頭の中を巡っていた。

その理由はきつと、とても重要な意味をもつ。そんな気がしてならないから。

知りたいんだ、その男の描いた全てを。

第44話　：セルス

目の前に聳え立つ真っ白な建物を、ジッと魅入っている2人の隣で俺は唯院長室を思い浮かべていた。

「すごく大きいわ。」

「そうですね。医者のない村だったとはまるで想像がつかない。」

箒に乗るたくさん魔法使いと魔術師たちが空を縦横無尽に飛び交い、地上にもたくさん人が歩いている。

とても大きなこの病院に集う人はたくさんいるようだった。

「いらっしやい、コントゼフィール学院の生徒さんよね？」

金色の綺麗な髪を風に遊ばせながら、笑ってそういった女性は俺達にそっと近づいてきた。

「はい。」

「貴女は？」

マティスとプレンティが交互の声を上げるとその女性は一層笑顔を見せて答えた。

「私はカルティエ。ここで副院長をしているの。」

「はじめまして、カルティエさん。私の名前はプレンティです。」

「僕はマティスと言います。で、こいつがセルスです。」

2人が礼儀正しく挨拶したかと思うと、マティスが俺を指差しながら俺の名前を教えた。

俺はその言葉に気づいて急いで合わせるように頭を下げた。

「はじめまして、プレんティさん、マティス君、セルス君。」

微笑む彼女にマティスがポーっとなっっているのが見ているだけで分かった。

俺はその横顔にクスリと笑い、そっとな彼女に目を移した。

「プレんティさんは福祉の方で、マティス君は外科よね？」

それでセルス君は……どこの希望かしら？」

その時フツとこっちを見られて、俺はその目をサツとそらしてしまつた。

2・3枚の紙をめくっている彼女の右の腕には赤いブレスレットがしてあつた。

それを見つけて、俺はまた笑いながらマティスとカルティエさんを見てしまつた。

「何ですか……？」

マティスが俺の視線に気づいて首をかしげている。

まだ右腕に輝く赤い宝石は見えていないようだ。俺は必死に笑いをこらえて平常を装いながら言った。

「カルティエさん、ご結婚なさってるんですね。」

「え？ああ、コレ？」

彼女が“コレ”と言ってかざした右腕にある赤いブレスレットはついにマティスの眼に映つた。

女性が右腕に赤いブレスレットをしているという事は、既に結婚し

ているという証なのである。

それと同じに、男性は左腕に青いブレスレットをして既婚であることを示す。

「カルティエさん、婚約されてるんですかっ!？」

その目に映る赤い宝石に、マティスが驚いた顔をしながら声を上げた。

その声に彼女は幸せそうな顔を覗かせる。

「少し前にね。ある少女が背中を押してくれて。」

「おめでとっございますっ!?!」

やはり女だからだろうか、プレンティは自分の事のように喜びながらそういった。

その横でおもしろいほどに落ち込んでいるマティスには気づいていないようだ。

「ありがとう。」

「お相手はどなたなんですっ??」

女というのは他人の恋にこんなに興味を持てるから凄い。

いや、俺だって今すぐ隣で落ち込むマティスの恋には大いに興味がある。

それまで聞き流すように聞いていたその言葉にピタリと止まった。

「知ってるかしら?今総予省の省長官をしている……」

「えっ!?!まさか、ハイドン省長官さん!?!」

驚くような声がマティスから上がる。

その言葉に俺も驚きの眼を向けて、カルティエさんを見つめた。

「ええ。」

「本当につ？ 凄いですよ！！ 今度は是非お会いしたい！！」

さつきまでの失恋空気はどこへやら、マティスはいつもとは全く違い興奮しきっていた。

とはいえ俺も、この心臓の音を大きくして興味を表わしていた。

ハイドン省長官という男もまた、かなりの若さで政治に足を踏み入っていた。

まだ幼い俺でさえ、あのテレビに映った彼の凜とした姿はまだ焼きつくように残っている。

「あら？ それを聞いたら彼も喜ぶわ。よかつたら今度の結婚式、出席してもらえる??」

「いいんですか??」

「ええ、もちろん！ 貴方達の都合がよければいいんだけど・・・」

「平気です！！ 全然暇です！！ はい！！」

もう、何キャラなのかさっぱり分からなくなったマティスの姿にプレんティは黙り込んだまま魅入っている。

「そう、それじゃあまた詳細を郵送するわ。」

「ありがとうございますっ！」

「いえいえ。・・・あ、それで?? 話が飛んじやったけど、セルス君はどこに行きたい？」

そういえば、この話に夢中になりすぎて忘れていたがそう言われて俺は頭を急いで回転させたが、何も思い浮かばずそのままを答えた。

「院長に会えませんか。」

ここに何をしに来たのか。その答えはきつとこの2人とは全く違う。俺がここに来たのは、彼自身への質問と……あの男の事を聞くため。

「え??？」

「クリユス院長に会わせてはもらえませんか。」

俺の言葉にカルティエさんもマティスもプレんティも驚いた顔をしている。

「どうして彼に会いたいの?」

「お聞きしたい事があつて。」

「それは彼じゃないと答えられない事?」

「彼に関する事なので。」

笑っていた顔が、明るさを失い眉間にしわを寄せている。

俺はただその表情を見つめて立っていた。

彼女の目が一瞬こちらを見て、すぐに反らされた。

「……分かったわ。聞いてみるから、少しここで待っていてくれる?」

その後、彼女はそれくらい顔を少しずつ笑顔に変えながら俺を見た。

「本当ですか?!?ありがとうございます!!」

「彼が拒否したら残念だけど……」

「はいっ!ありがとうございます!」

「それじゃあ、マティス君とプレんティさんについて来て。」

2人は少し不思議そうな目を俺に向けたまま短く返事をして彼女の後ろをテクテクとついていった。

その2人の背中を見送った後、俺はすぐ傍にあった小さな二人用のベンチに腰掛けた。

通り抜けていく風が、葉の香りを漂わせて爽やかというに相應しい風を作り出していった。

すぐ傍にある木が俺に木陰を与えて、俺は熱った頬を冷やされたよ
うな気持ちになり、目を閉じた。

静かにただ、走り抜けていく風に葉が小さく笑い声を上げて揺れていた。

第45話　：クリユス

あの日もそうだった、私が彼に初めて出会った日もこんなふうだった。

「君がセルス君かな？」

木陰が作られたベンチの上に何かを期待するような表情を見せて座っている少年に声を掛ける。

彼が着ているコントゼフィール学院の紋章が描かれた白いマントが一層彼を思わせた。

「はい。」

「初めまして、僕は・・・知ってるか。クリユスだ。」

しっかりと返事をしてこっちを痛いくらいに見つめてくる彼に笑いかけると、彼も静かに笑った。

そよそよと夏を匂わせて風が吹く。

「セルスです。」

「思っていたより若いなあ。いくつ？」

キリツとした顔はその若さを隠しきれずにそこにあっただ。

頭の中で無造作に思い描かれていた少年は、もっと少年から抜けきっているような感じで

彼の外見とは全く違うが、彼自身とは少しばかり似ているような気もした。

「15です。」

「15で、コントゼフィールを？」

「はい、一応。」

彼は16の時にコントゼフィールに入学した。

その彼よりも幼くしてあの学園に入学するとはよほどの力の持ち主なのだろう。

「残念ながら1時間くらいしか取ってあげる事ができなくてね。すまないが話を聞かせてほしい。」

「お忙しいのにすいません。それじゃあ……」

立ったまま話し出しそうな勢いの彼に、そっとベンチへ腰掛けるよう促して

自分もゆっくりとその隣へと腰を下ろした。

「……今、一番聞きたいことを聞いてもいいですか。」

「どつぞつ？」

黒い目その目が射る様に私を見てきたので、笑顔を見せて頷いた。

その黒い目はまるで彼を思わせてならない。

黒くて真っ直ぐな短髪に、人を吸い込んでしまいそうなほど深い黒い目。

「フェウスさんと言う方をご存知ですか？」

それは唐突に、そのままの形で投げかけられた質問だった。

彼はその質問の答えをもちろん知っていて、これからの質問のための確認に言葉を使っただけ。

それを知っている彼にわざわざ嘘をつく必要もなく、私は頷いた。

「ああ、知っているよ。」

そう、目の前にいる少年はまるであの日のフェウスにそっくりだった。

外見が似ているというのも少しある、がそれ以上に心のどこかが似ていた。

「フェウスさんとは・・・会わせてもらえませんか？」

全てを知りたいと望んでいるその目が、私を放しはしない。

幼い少年は少年ではなく、俺さえも見透かしてすでに世界へ飛び立つと羽をばたつかせている。

「知らないかな？彼は今、行方不明・・・」

「貴方なら、ご存知だと思ひまして。」

「私が？どうして？」

「彼が唯一心を許していた友だとお聞きしていたので。」

「ははっ。まあ、確かに彼は友達づきあいあまりよくはなかったからね。」

そんな目の前の少年を見ていると思ひ出す。そんな少年が恋を知った、その瞬間を。

全ての運命が始まりの音を告げた、あの時を。

「どこにいますのかご存知ないですか？」

まるで確かめるだけの質問に、俺は首を横に振ることをためらっていた。

知らない・・・わけじゃないからだ。

ただ、それを教える事はできない。彼はある目的でそこにいるから。

彼が自らその場所から飛び立つ事をしない限り、私でさえ会う事はできない。

「・・・すまない。彼の居場所を知らないと言えば嘘になるが、そこを教えるわけにはいかないんだ。」

「え!？」

「彼はある目的を持ってそこにいる。彼自身が自らそこを発たない限り、私にさえ会うことはできない。」

少年は私の言葉に少し考えて、目を開けた。

「そうですね。」

その言葉で、彼が私の言葉の全てを事実として受け取ったことが分かった。

その少年はその後、その場所を聞くわけでも、その目的を問うわけでもなく、私を見つめた。

「ある少年と少女の話をしようか。」

長い沈黙が続いた後、ふと頭に浮かんだ言葉が、外へと漏れた。

「え?」

「私の知り合いの話だ。まあ、長い独り言だと思ってくれたらいい。聞くも、聞かないも君の勝手だよ。」

まるで老人になったかのような気分が私を襲って、その空気全てが私に年を与えたようだった。

彼は私のそんな言葉に小さな疑問をあげながらも答えた。

「聞かせてください。」

長い独り言は、会話を了解されて、考えてもいなかったことが口からすべり落ちていく。

「その少年と私が出会ったのは、私が13で彼が15のときだった。」

その場所には何もなくて、それでも私は彼と彼のドラゴンが空を舞う姿だけを映していた。

その場所に唯一咲いている花を必死で魅入るような、そんな気持ちだった。

目を閉じると、声が聞えるよ。君には聞えるかな？

あの冷たい目をしていた君が、これから生涯を掛けて愛する事になる少女と出会ったあの日の声たちが。

第46話　：クリユス

君がかけた魔法は、今だ解けなくて。

私は待っているんだ、いつか誰かがこの魔法を解いてくれる日を。

「父さんが言っていた。自分が無知だから、世界はいつまでも小さいままなんだ。」と

ドラゴンについて調べていた私は、2歳年上の15歳の少年に出会った。

彼はドラゴンマスターをしていて、ハイドンやカルティエ、グレーナとは少し違っていた。

そんな彼と仲良くなり、ドラゴンについて語り合ったりもした。

気が強くて、真っ直ぐで、正義感が強いところなんかはハイドンにとてもよく似ていたが

彼は厳しく冷たく、そのときの私には少し怖い気持ちを持たせる友だった。

そんな彼と世界の大きさについての話をしていた時、彼が私にそういった。

「自分が無知だから、世界はいつまでも小さいまま」??」

「そうだ。」

「それって逆じゃないの?」

自分がたくさん知っているから、世界は小さく感じるんだ。そのときの私はそう思っていた。

そんな私の言葉に彼は小さく横に首を振る。

「何かを知るということは、その世界を見ることになる。」

「そしたら世界は小さくなるんじゃないの？」

「まあ、聞け。その世界はただそこにあるんじゃないくて、そこからさらに広がってるんだ。」

足元に広がる土の上に彼は魔法で絵を描いて、私に見せた。

小さな円を中心に、それに少しだけ接している大きな円が幾つも取り巻く。

「こんな感じに。で、何かを知ったらここの接する部分からその大きな円を見れるんだ。」

“ここの”・・・と指差されたその場所は、中心の小さな円に接している本の一部。

それから彼は、ここも、ここも同じように接している部分を指さした。

「これがどういうことか分かるか？」

「わからない。」

小さな質問の答えもわからず、首をふる。

「何かを知るということは、その全部を知ることではなく、その接する部分に立ったというだけ。」

またそこから何かを知って言って、その世界を知り尽くさない限りはその新しく見えた世界は未知のままなんだ。」

その言葉にまだ分からずに首を傾げると、彼は笑いながらいった。

「何かを知ることとは、新しい世界の一部を見ることだ。」

俺等が何かを知る分だけ、世界は大きくなるんだよ。

だから世界が小さい奴は何も知らない、つまりは無知なんだ。」

簡略化されたその言葉を何度も何度も頭の中にめぐらせた。
するとゆっくりとその意味が理解され始め、しばらくたって私はしつかりとその意味を理解した。

「わかった！！そうかあつ、そういうことなんだね！」

「俺はもっと大きな世界で生きたい。だから、ドラゴンマスターになる。」

父さんみたいに伝説をもてるくらいのドラゴンマスターにな。」

その目は輝いていた。私が知っていた他の誰よりも。

* *

「それから私は彼とその少女を引き合わせたんだ。」

「少女？」

天使のように美しく、まるで神に愛されたまま生まれてきた少女。

「その子はとても可愛らしくて、神様の愛娘とも呼ばれていたよ。」

「その子と、彼は恋に落ちたんですか？」

「ああ、そうだよ。2人は恋に落ちた。私自身もそうなるだろうと思っていた。だから2人を引き合わせたんだ。」

あの2人は出会ったその瞬間に何かに糸を繋ぎ合わされたように、恋に落ちた。

それまでどこか冷たいような目をしていた彼はガラリと優しい目になった。

彼の言う、恋を知って新しい世界を見つけたような感じだった。

「けど、運命の神は全てを知っていてその出会いを与えた。」

「全て・・・？」

「彼女は病気だったんだ。しかもそれは、治せる病気じゃなかった。」

それを知ったのは、彼女と彼が私達の前から姿を消す少し前。

2人は私に会いに来て、少しの話を聞かせた。

「そして彼女のお腹には小さな命が宿っていることも、彼が世界のトップを争う学園に入学する事も聞きいた。」

その夜はやけに静かで、風さえも吹いていなくて空には雲も何も無く、空に星が散っているだけだった。

窓から見えるその景色と、2人が刻々と聞かせるその話には私は静かに目を閉じた。

「それから2人はこの世界から消えると言った。」

「え?!死ぬってことですか!??」

「そうじゃない・・・姿を隠すと言っただ。」

驚いたセルス君の顔が落ち着くように安心を見せた。

「彼と彼女は私にだけそれを告げると、その夜、空を飛んでいってしまった。」

それから彼らは何の連絡もよこさず、2年が過ぎた春。

彼女は突然、私とハイドンとカルティエの前に姿を見せた。

もう、二度と見られないと思っていて彼女の笑顔が目まで私達に向けられていた。

カルティエとハイドンは病気を隠していた事と急に姿を消した事で彼女を攻めたが、彼女は唯優しく笑うだけだった。

「誰もいなくなった病室で、彼女は私に言った。」

真っ白の布団を羽織り、ベッドに腰を預けて座っていた彼女の笑顔。窓から流れてくるまだ少し冷たい風と遊びながら、楽しそうに揺れる白いカーテン。全てが瞼の裏でくつきりと思い出される。

「女の子だったわ。」始まりはそんな言葉だった。」

その言葉が意味するものは、生まれた赤ちゃんのこと。

そして彼女の優しげな目が、2年前とは少し違っている事にも気づいた。

「それから、彼女は言った。

“ありがとうを言いたくて、戻ってきたの。貴方がいなきゃ、彼には出会えなかった。あの子も生まれなかった。”と。」

その目はすっかり母親で、もうすぐ死んでしまうというのに生き生きした目をしていた。

私はその目に、ただ驚いた。

「私は彼女に尋ねた。“後悔はしてないのか、しないのか”と。」

その言葉に彼女は少し笑って、小さく首を振った。それから今までに見たことのないくらい幸せそうな顔を見せていった。

「彼女の答えは簡単だった。

“後悔なんてするはずないわ、今、こんなにも幸せなんだもの。”
彼女は笑いながら私にそういったんだ。」

これが子を持つ親の眼なんだ。強くて、真つ直ぐで、幸せそう
死さえも恐れずに、全てを受け入れているようなそんな目だった。
けど、それから彼女は少し悲しそうな目を私に向けて呟くように言
った。

「唯、心残りはあるの。・・・あの子の成長を見届けられないこ
とが、一番残念で。」

と、彼女は悲しそうな目を見せて言った。そしてその願いを“私の
変わりに、お願いね。”と私に託したんだ。」

彼女は笑った。笑うというよりも、悲しいのに笑顔を作っているよ
うだった。

“あの子は彼の父が引き取って育ててくれると言って下さったわ。”

彼が育てるのだとばかり思っていた私に、その言葉は驚きを与えた。

“それじゃ、彼は!?”

私の質問に、彼女は私を見つめて答える。

“あの子のために、世界を飛ぶって約束した。だから、彼は誰にも
知られる事なく生きるって。”

「彼のその言葉は、あまりにも身勝手な言葉だと思ったよ。けど彼
女は笑って言った。

“彼が言ったの。『いつか出会うんだ』って、あの子と。まるで『
俺と君が出会ったように。』って。”

その時の笑顔を見て思ったんだ。

君は全ての人にたくさんの魔法をかけて、それを解くことなく眠る

んだって。

「そして彼女はテパングリユスの地に眠った。

そして私とカルティエは医者を目指して、ハイドンは私達のために上を目指した。」

ハイドンとカルティエは知らない。

グレーナがその2年間で、大好きな人との間に子供を授かり、育てていた事も。

そして、彼女が私達にかけた魔法を解くことができる少女が、今も存在しているという事も。

「この話は、あの2人にもしていないんだ。」

「どうして?」
「彼女が話さなかったという事は、黙っていてほしい事なんだ、きつと。」

だから、その話はしてない。今後、するつもりもない。」

いわば、墓場まで隠し通すつもりだった事。

そんな事を黙っていたと知れたら、きつと2人は怒るだろう。そしてその子を無理にまで探し出して、会いに行くのだと思う。

「きつと彼女は信じていたんだよ。

運命の神と、彼の“いつかこの子と出会う。まるで俺と君が出会ったように。”という言葉を。」

彼女は何も言わなかった。それは、彼の言葉を信じてみたかったから。

そして彼と彼女を引き合わせた運命の神を、信じていたから。だから私も信じようと思ったのだ。

まだ見ぬ、彼と彼女の愛する娘と出会えるという運命を、そして。
彼女がかけた魔法を、その少女が解いてくれるという未来を。

第47話　：コア

燃える紅の炎は留まる所を知らず、空へと大きく伸びていく。白いドラゴンが静かに目の前を飛び立つと、迷いもなく唯一直線に炎へと向かう。

それはまるで向かうその先に、宝があるかのように。

「待つてっ……エルクーナ！」

呼び止めても無駄。

彼女は振り返ることもなく、止まる事もなく、その白い羽を大きく揺らして離れていく。

赤く赤く燃え盛る炎の中へと。

「ぼーっとして、どうかした？」

窓の外に広がる夕焼け空を眺める私に、リラが心配そうに聞いてきた。

真っ赤で、忘れられなくて、あの炎の先にあっただのは……

「なんでもないよ。」

「そう？」

「ちよっと……昔の事を思い出してたの。」

それは幸せな日々を一瞬にして失った時間。

傍にいた大切な人を救うこともできず、失ってしまった日。

「そついえばおじい様の命日、明日だったかしら。」
「そう。」

大好きだったおじいちゃんは、10年前の明日、いなくなった。

お父さんもお母さんも私を迎えに来るって言うてくれたおじいちゃんは、私の目の前からいなくなってしまった。

当たり前のように目を覚ませば、おじいちゃんが『おはよう』と笑ってこない世界が待ってる。

当たり前のように目を閉じてても、『おやすみ』を言っておでこにキスをしてくれるおじいちゃんはいない。

「おじいちゃんのようになりたかった。その姿を、おじいちゃんに見せてあげたかった。」

「コア………。おじい様はエンプティの地に眠っていらっしやるのよね？」

この世の墓場と呼ばれるエンプティ。

本当ならテパングリユスに眠るはずだった。しかし、おじいちゃん是谁かと『血の約束』をしていて

その約束を果たす事ができずま眠ってしまったため、エンプティに迎えられたのだ。

「うん。だから明日、会いに行くつもり。」

あれからずっと一人で生きてきた。

この世界に私に『おはよう』と『おやすみ』を言うてくれる人なんか誰もいない。

「コア、貴女はひとりじゃないわ。」

「ありがとう。」

そう。だけど私は1人じゃない。
空のどこかを自由に飛んでるルキアだっている。こんなに傍にはり
ラもいる。

この世界のどこかでセルスだって頑張ってる。

“ 貴女は伝説のドラゴンマスターですよ。 ”

「リラ、大好きだからね。」

「何？急に。」

「んーん、なんでもない。だけど、大好きだから！」

「ありがとう、私もよ、コア。」

冷たい言葉が風を吹かせているようだった。

ねえ、全てを忘れたままでいられたらどんなに楽だったかな。

思い出したいと願っていた過去が、時間が過ぎるたびに蘇り、
私に悲しみを与える。

“ これは逃れられない運命なのです！！ ”

逃れられない運命を与えられて。私はゆっくりとこの時間を失う。

ようやく手に入れた幸せな時間を、夢がじわじわと壊していく。

これが私の願った事？これが私の夢見た世界？

「ずっと、大好きだから。」

ゆっくりゆっくり流れているようで、まるで滝のように早く進んで
いく時間を幸せの隣で感じていた。

全てを失って、与えられた運命という試練へと立ち向かうそのとき

まで。

どうか、今だけは、この幸せを感じていてもいいですか？

第48話　：セルス*コア

「コア？」

空を飛んでいると、不意に彼女の声が聞えた気がした。

『何だ？どうかしたか？』

驚いたようにアルが俺に問いかけてくる。

「今、コアが俺を呼ばなかったか？」

『いや、聞えなかったが。』

俺の耳には確かに聞えたんだ。それはそれは切なそうに、俺の名を呼ぶコアの声だ。

「……………アル。マスターズスクールへ飛んでくれ！」

『何だよ急に。』

「嫌な気がするんだ。急いでくれ！」

その声を合図にアルが急旋回してもと来た道に戻っていく。

“私……っセルスがどこにいても、好きだよ”

そんな声がまた耳の奥で響く。あの日、彼女が俺にくれた言葉。

空を何よりも早く駆けていくドラゴンよりも、もっともっとと急かされる心。

もしもこの世に運命の神ラスティが本当に存在するのなら、俺と彼女を出会わせて。

今会わないといけないんだ。そんな気持ちがあるに伝わるのかアルも伝わったようで、より一層速さを増して空を切った。

＊＊

「ねえ、おじいちゃん。」

先生からの言葉はどうしても引つかかるの。

確かに伝説になりたい。だからって背伸びをする必要はないと思う。

「私は・・・」

リース先生は反対したが、他の先生が賛成して私は実習現場へと行く事になった。

この年では異例だといわれていた。だけど、ルキアは白竜だから、私は伝説のマスターだという事で決定されてしまった。

実習現場とは、戦争が今もなお続いている所。学校を離れて、私はそこで全てを学ぶらしい。

「その前に、会いたい人がたくさんいたの。

ちょうど今日がおじいちゃんの命日だよかった。」

戦地で学ぶ事はたくさんある。もちろん、学校で学ぶよりも短期間で蜜が濃い事を学べる。

そんなことくらい、私にだって分かる。

だけど、その代価として払うものが危険だなんて。

「次は・・・もう来られないかもしれない。」

会いたい人がたくさんいた。伝えておきたいことがたくさんあった。私にはあまりにも大きなことに思えて仕方ないの。

「リラでしょ。ロイでしょ。それと、クレズ。おじいちゃんに……セルス。」

約束したのに。ごめんって誤りたかった。

もう戻ってくる事はできない。そんな風に思うのはおかしいと思う。だけど、怖い。怖くないなんて言えないよ。

『あたりまえですよ。』

この世の墓場と呼ばれるエンプティには似合わないほど美しいルキアの声。

あの日、私の前からいなくなったエルクーナよりもずっと、美しく思える。

「セルスに会いたい。行きたくない。ここでいたい。怖い……もう二度とここには来られないって思うと。リラの声も聞けなくて、ロイやクレズとも笑えなくて。

ハイドン省長官とカルティエさんの結婚式にもいけない。

何より……セルスにもう二度と会えないなんて。笑えないなんて。一緒に空を飛べないなんて……!!」

私は弱い。

『コア……』

「私は弱い。こんなにも、弱くて……臆病で……。」

誰かがいなければ、笑う事も出来ない。誰かがいなければ、強くもなれない。

「なんて……ちっぽけな人間……。」

『あたりまえですよ。』
「だけどっ・・・っ！私が目指すのは・・・伝説のマスターなのに・・・」

好きだから。会いたい、最後かもしれないから、会いたい。
こんなにも臆病者が、伝説のマスターなんかになれるわけない。

『伝説のマスターだって、きっと同じですよ。』
「え？」

『人間とは不思議な生き物だと思います。特に、ドラゴンマスターは。』

真つ白の彼女の羽が、墓場の風を柔らかに変える。

『1人でいれば何も出来ない、ちっぽけで弱い生き物なのに。
大切な人が出来るだけで、大切な人がいるだけで、考えられないほど強くなる。』

「でも・・・」
『私があなたの傍にいます。・・・私じゃああなたの“大切な人”にはなれませんか？』

そんな分けない。ルキアがここにいてくれるだけで、今にも崩れそうな体はしつかり足を立てている。
零れだしそうな涙は、かろつじて目の端にしがみついて留まっている。

私ってこんなにも強いんだって、思わせてくれる。

「大好き、ルキア。」

こんな言葉でしか伝えられないのがもどかしいよ。

『私ですよ、コア。……あなたは運命の神ラスティを信じますか。』

「え？」

『昔この地におられたという、運命の神ラスティを信じますか？』

緑の草も、白い花も何もない。通っていく風さえも、死を思わせる唯土ばかりが広がるその場所でルキアが言った。

運命の神ラスティは、皆に平等に運命を運んでくるといわれる伝説の神様。

「どうだろ……。」

『運命の神を信じて下さい。我々ドラゴンに彼女を疑うものはいません。』

「ドラゴンは神を信じぬく生き物だからね。」

『いいえ、それは違いますよ。』

ドラゴンの属性は神族。その昔は神にのみ使えた清き生き物だと記されている。

そんなドラゴンは今でも神を疑う事はなく、ただひたすらに信じている。

そう思っていた私におかしな答えを投げってきたルキアに私は首を傾げた。

『ドラゴンが信じぬいているのは主です。』

「……え？」

『主が神などいないと仰るのなら、神は存在しないと信じます。』

「ルキア……。」

『貴女が右へ進めと言って、神が左へ行けと仰っても。』

私は右へ進みましょう。神よりもドラゴンが信じるのは主なのです。

『ルキアはそんな必要ないんだよ？神を信じてもいいんだよ？』

私はルキアに約束したものだ。自由と真の絆を与えるって。たとえ未来がどうなるうとも、私はその約束だけは破らない。

『私が運命の神を信じるのは、貴女に出会えたからですよ。それに、それは無理強いされてではありませんよ、コア。私は自ら貴女に従う。』

蒼い目が、優しく撫でるように私を見つめてくる。

真っ白の肌に良く映える青は海よりも明るく、空よりも深い。

「ありがとう、ルキア。」

『いいえ。．．．ほら、運命の神が貴女に幸運を運んでくる音がしますよ。』

ルキアがその美しい目で空を仰いだとき、頭の上から何かが羽ばたく音がした。

水色の空に転々と白い雲。その空から舞い降りてくる運命の神の贈り物は黒い翼を広げる。

「ルキア．．．」

『はい？』

「運命の神は．．．、いるんだね。」

『はい。』

会いたかった。会いたくて、会いたくて、会いたくて。

ただ笑顔が見たかった。声が聞きたかった。たとえそれが最後になるうとも。

「
セル
ス

」

第49話　：セルス

空の端を羽ばたくドラゴンの翼の音に負けなくらい、真っ直ぐにその声は俺の耳まで響いてきた。

「セルス

」

ゆっくりと風の抵抗を浴びながら地へと降りるアル。

彼女の声が空を渡って俺に響いてきたんだ。君が俺を呼ぶ声だった。

「やっと会えた。・・・コア。」

「セルス。」

「呼んだんだろ？」

「セルス・・・っ。」

「聞えたよ、お前の声。」

「セル・・・ッス・・・ッ！！！！」

ドンツと強い衝撃が俺の正面から襲った。

その衝撃は暖かく柔らかく、幸せの香りを運んだ。

「お前、さっきから俺の名前しか呼んでない。」

「セ・・・ルっ・・・」

俺の腕の中でコアの声が押しつぶれながら、俺の名を呼んでいる。彼女は腕の中で涙を、大粒の涙を流していた。

「もっと、声聞かせてよ。」

「セルスっ、セルスッ・・・セル・・・っ」

名前しか呼ばない彼女の唇をそつと塞ぎ、強く抱きしめた。
ここは世界の墓場と呼ばれたエンブティ。彼女の祖父はこの地に眠っているという。

「今日、命日だったな。」

「……」

「爺さん怒るぞ。墓の前でなんか泣いちゃ。」

「……」

「何？俺がいなくてそんな寂しかったのか？そんな、俺が死んで会えねーみたいなの……」

言いかけた言葉に彼女はようやくその泣きはらした顔を上げてこつちを見た。

そして、名前しか呟かなかつたその声がようやく言葉を発した。

「逆……だよ。」

全く意味が理解できず、俺は驚きの眼を見せた。
すると彼女はまた目にたくさんの涙を溜めながらその言葉を補う説明をしはじめた。

「逆なの……。セルスが死んで会えないんじゃない。」

私が……。私が死んで、会えなくなるの……。っ！！」

その言葉を聞いても、全く理解なんか出来なくて。ただ、彼女の涙に手を伸ばした。

「は？お前が死ぬ……？」

「……。私、今度アカンサスの地に実戦訓練に行くの。」

「実戦訓練……。て。アカンサスは今戦争の真っ只中だろ！？」

「……」

「お前はまだ15歳なのに！」

「……」

「そんなわけない……!!」

ありえない、その言葉が一番似合いそうな気がした。

途方にくれるというよりも、絶望をその目に映してしまったような気分だった。

アカンサスの地では未だ、ベーレ家とバデス家の争いが絶えず、幼い子供から年寄りまでが巻き添えを食らっている。

そんな場所に派遣されるのは、戦争に慣れきったドラゴンマスターや、兵士のみ。

どうして15にしかない学生、しかも女である彼女がそんな所へ行くのだろうか。

「なんかの間違いじゃ……?」

「……間違いじゃないの。」

「そんなこと、あるわけない。あんな所で実戦訓練なんか、死ぬのと同じ……っ!!」

「……」

“逆なの……。セルスが死んで会えないんじゃない。

私が……。私が死んで、会えなくなるの……。っ!!”

さっき、コアがそういった言葉の意味が今ようやく理解できた。

「辞めればいいだろ?!断るんだ!!」

「無理だよ。私は、行くなって決めた。」

「死に行くつもりか!？」

「そうだと……言ったら?」

その目からは涙が消えて、何か強い信念のようなものが見えた。しかしその信念とやらの所為で、もう二度とコアに会えないのなら、なんと少しでも留めなければならぬ。

「ばかかっ!?! お前が行ったくらいで戦争は終わるわけじゃないっ
!?!」

「分かつてる。」

「分かつてない!! お前はっ……!!」

「ごめんなさい、セルス。」

「お前は俺と……つ約束しただろ!?!」

俺が全てを手に入れて、これ以上ほしいと思うものがなくなったら、隣に立つんだろう?

俺はだから我慢したんだ。君の傍を離れる事を。

全て手に入れ、そしてそれを全て捨てても手に入れたい君を迎えに行くんだと決めていたのに。

「ごめんなさい、セルス。私、セルスが大好きだけど……」

「結局、お前にとって俺なんかどうでもいい存在でしかないんだろ
!?!」

どんどん遠のいていく。君は俺よりもずっとずっと後ろを飛んでい
たはずなのに。
その距離は上へと伸びて、君は俺なんかよりもずっと上を飛んでい
る。

「……セルスのバカっ!」

ドンツと強く押し返すと、コアはそのまま草原を駆け下りていって
しまった。

たった一人この場所に残された俺は、何も出来ずにただ膝を突いてしまった。

どンドンコアが遠くなる。俺なんかよりずっとずっと世界に近い場所を飛んでいる。飛ぼうとしている。

それなのに俺はただ、嫌だと駄々をこねて彼女の足を食い止めようとするだけ。

『セルスさん、コアは怖がっています。』

真っ白な羽を広げ、ルキアが俺に言葉を投げた。

『コアも怖いといっていました。もう二度と会えなくなるのが怖いと。』

「ならどうしてやめない!？」

『それが逃れられない運命だと言ったら?』

「え?」

『コアはアルファルベータ学院の試験を受けるつもりなんです。』

「アルファルベータ……ってあの!？」

『はい。そのために、学校から提示された課題が今回の実践訓練なんです。』

俺には何一つ言ってくれてない。あの試験が難しいために、課題も難しいだろう。

しかし、それは命を並べるほどの価値があるものなのだろうか。

「命よりも……そんなに受けたいのか……?」

『いいえ。彼女は伝説のドラゴンマスターになることを目指して、そして次期に超えてしまおうでしょう。』

「……それが?」

『そのために、逃れられない道なのです。いずれ世界を背負う少女』

になる。私には分かりません。

その彼女が、命をかけることを知らずに伝説を得られると思いますか。」

「それは……」

「分かってくれてほしいのです。コアは、いずれ全てを背負うのです。争いだって何度でも経験する事。」

大切なものをかけて争う事を自ら逃げずに学ぼうとしているのです。」

分かるべきなんだ。けど、分かりたくなんてない。

彼女がこの世界から消えてしまったら、俺はきつと全てを失う。

手に入れる理由なんて失い、ただ生きていくことさえ辞めてしまうのではないだろうか。

「俺から……コアを……奪わないでくれ。」

「セルスさん……。」

「セルス。お前は間違ってるよ。」

アルが急に口を挟んできた。

「お前があいつから離れようとしても、あいつはお前を思って引き止めなかった。」

それなのに、お前は今、あいつをこの場所に引きとめようとしているんだ。」

「引き止めなければ、死ぬだら!?!」

「セルスさん。私は彼女と契約を結んだ身です。だから、私は命を掛けても彼女を守ります。」

私が死んでも彼女は生きていられる。しかし、その逆は違います。」

青い瞳がじつとこっちを見てくる。

『約束します。必ず、生きてコアを連れて帰りますから。だから、コアを追ってください。』

真っ白のドラゴンはその青く染まる目を、コアが走っていったほうへ向けた。

そうだ。俺が離れるときは、俺が決めたときは、彼女は頑張れと背中を押してくれたのに。

俺は今、ロイと同じ事をしているんだ。

「行ってくる。」

信じるよルキア、君を。コアが信じた君を、俺は信じる。

だからどうか、彼女を連れて帰って。それが彼女をここに縛らないための唯一の条件だ。

俺から、この世界から、彼女を奪わないで。

風に乗って君を追いかけていく。君に言わなきゃならないことがある。

君があの日、俺の背を押してくれたように、今度は俺が君の背を押す番だ。

彼女が信じた者を信じて、君に言うよ。

空を目指せと。

第50話　：コア

戻ってくる確信なんてない。

確かに生きている未来なんて保障されてない。それでも……

「コア！」

「……セルス。」

何も無い草原、ここは世界の墓場エンブティ。

もしかしたら、約束を果たせない私はここに眠るのかもしれない。

セルスの声も聞けなくて、空も飛べなくて、ただこの地に眠るだけなのかも知れない。

セルスがいつもよりずっと強く抱きしめてくれる。

その温度が伝わって、優しい気持ちにしてくれる。

「セルス、ごめんね。」

「どうしてお前が謝るんだよ。」

こうしてセルスが抱きしめてくれている腕を払うと決めたのは、私だから。

「あの日、お前は俺に“いつてらっしゃい”と言った。

それはな、“おかえり”の場所も用意しておくことだろ？」

「あの時は……作れるつもりだったの。」

「じゃあ、今度は俺が言っただけよ。……行って来い。」

セルスが“行って来い”と言った瞬間、空をかけていく風が強く強く吹き抜けて行った。

私が待っていたのはこの言葉かもしれない。

「おかえり”の場所くらい作ってやるから。」

私はまた、あなたの腕の中に戻れるの？

“おかえり”と言ってくれる人がいる場所に、帰ってこられるの？

「1年も・・・だよ？」

「たった1年で根を上げんのか？俺は5年でも、10年でも・・・100年でも。待っていてやるけど？」

5年後も、10年後も、100年後も。

貴方の未来には、当たり前のように私が存在してるんだね。

「ルキアが言ってた。“いずれ世界を背負う少女になる”って。伝説の白竜がそう言ってたんだ。」

自分の大事なドラゴンを疑ったりはしないだろ？」

「・・・私は、私はセルスの言葉だって疑ったりしない。」

貴方がくれた言葉は、いつだって嘘なんか1つもなかったものね。いつだって真実を語ってくれて、誤魔化したりしなくて。

嫌な事、嫌だって。辛い事、辛いつて伝えてくれた。

「なら、ルキアと俺を信じる。それで、帰ってこい。」

この気持ち、どうすれば伝わるのかな？

「全部欲しいって言ったのはお前だから、お前は行け。それで・・・俺は待っていてなんかやらないからな。迎えに行つてやる。」

覚えててくれたんだね、あの日私が貴方に言った言葉。

「セルス・・・好きっ・・・！」
「知ってる。」

絶対死んだりしない。私は、全てを手に入れてセルスの隣に立ちたいから。

伝説のドラゴンマスターになりたいから。

「でも、また聞かせろよ。」

戻ってくる確信なんて確かにない。
生きている未来なんて保障されてない。

それでも

私は行こうと思ったの。

“おかえり”の場所があるんだから。好きな人が行けと言ってくるんだから。

全てを手に入れると言った。セルスを迎えに行くと言った。頑張ると言った。

きつかけなんて小さなこと。それがどれだけ大変な事でも、そんな小さなことで進めるの。

その想いが、きつと私をもう一度この場所に立たせてくれる。

ずっとずっと高くを飛んで、この地に舞い降りるの。私が目指す者となつて。

第51話　：コア

『もうすぐですよ、コア。』

背中で眠る私にルキアが優しい声をかけた。

その声に起こされて、学校を出てから3日目の朝を迎えた。

「ルキア、平気？無理してない？」

『私はドラゴンですから。ほんの少し眠ったので、心配ないですよ。』

「そ？向こうに着いたらすぐに休ませてあげるから。」

『気にしないで下さい。』

もう6時間近く空を飛んでいるルキアの声は、少しの疲れを感じさせていた。

その白く美しい羽も、薄汚れながら山を渡り、海を越え、空を飛び続けて疲れ果てている。

もしも私が彼女を選びさえしなければ、彼女の羽は美しく白いままだったのに。

そう考え始めると、彼女が求める真の絆も自由も与えてあげられない自分の無力さが嫌になった。

「絶対、休ませてあげるから。」

風に流されるほどの小さな声は、ルキアの耳には届かなかった。

空の端に見えていた大陸は、この世界で最も早いと言われるドラゴンにより、すぐにその姿を露とした。

「何……………こ……………ね。」

そこに吹き荒れる風は、砂埃だけを篩い立たせて通っていく。木も草も、川も、建物も、何も無いその場所をただ悲しげに通っていくのは風だけ。

『ここが、あのアカンサスです。』

「嘘……だつて……こんな……」

幾つでも生まれてきそうな言葉が、視覚から得られる映像によってどんどん消えてなくなっていく。

目の前に広がるのは、草原が枯れ果てた景色のみ。

「下に、降りよう。」

『え？』

「一度、降りよう？」

風に流されてしまいそうな言葉を拾って、ルキアがだんだんとその地上へと舞い降りる。

緑も何も無いその場所は、近づくほどその実態を知らせた。

「……人が……死んで……る？」

『コア。』

空を飛んでいたときには、石や岩ほどにしか見えなかった物が、この地に下りたとき人の死骸であることに気づいてしまった。

ポツリポツリとしか呟けない私の視界を隠すように、真っ白の疲れきった羽が私を覆う。

「これが……私の……生きてきたのと同じ世界……？」

『コア……。』

「嘘……だつて……」

病院もない。人の死骸がそこら中に石つころのように横たわっている。

その場にはたくさん人の血が流れ、吹き荒れる風を感じるものなど誰もいない。

そう思うと開いている眼から、ポタリと涙が落ちた。

『行きましょう、コア。』

真っ白の世界のなかで、ルキアの声が響いてくる。

私は唯、何も言えずに私の視界から離れた羽の向こうにもう一度見えた世界を眺めていた。

ルキアの尻尾がゆっくりと私を背に乗せ、その白い羽は急かされるように羽ばたいた。

「どうして……こ……んな……」

『これが戦争が作り出す世界。』

「ルキア……知ってたの……?」

『2度ほど見に来た事があります。でも……その時よりも、酷くなっています。』

また目に映るのは綺麗な空と、真っ白な雲が幾つかだけとなった。

「私……怖いつて逃げた。」

『仕方ないですよ。アナタはまだ、ほんの15歳の子供です。』

「だけど……」

何もない世界にあるのは幾つもの、死んでしまった人達の姿だけ。

「だけど、私は逃げちゃ駄目なの。15年間、こんな事になってるなんて一度も知らなかった。」

同じ世界で生きる人が、どんな苦しみを知って、死と隣り合わせになりながら生きているのか。

そんな事も知らずに、伝説のドラゴンマスターになりたいと言っていた自分が恥ずかしくてたまらない。

出来ることなんかなかったも、幼かったとしても、私は知っているべきだった。

苦しむ人がいる事を知らなかったのは、仕方のないことだといひ訳なんて出来ない。

「知らないのは、知らない振りしてきたのと同じなの……。」

知ろうともしてなかった。

同じ世界で生きている人が、どんな苦しみを抱えているのか。知ろうもしないのは、知らない振りしてたのと同じなの。

「私は逃げちゃ駄目なの。怖いなんて、言ってられない。」

ここに来てそれが分かった。

セルスともう二度と会えないと思ったときの悲しみを、彼らはずっと抱えて生きてる。

大切な人がいなくなる事の悲しさを抱えて、もう二度と会えなくなる辛さを感じながら生きてる。

「私にしか出来ない事なんてなくていい。そんなのいらない。」

だって……私に出来る全ての事を、私は……しなくちゃならない。」

『私も、あなたの力の中に加えて下さい。』

零れた涙が通った頬を、夏にしては冷たすぎる風が掠めていった。
それはまるで、これから起こる事の悲しみや辛さを教えているかの
ようだった。

第52話　：セルス

「で、休暇は有意義に過ごせたのか？」

真つ赤な絨毯を歩き終えて、広い広い中庭に出るとパテユグはそんな事を聞いてきた。

その言葉にフツと蘇るのは、コアの悲しそうな顔。それをかき消すように言葉を返す。

「・・・ああ、まあ。パテユグは？」

「俺か？俺は生徒会の仕事に追われて休暇どころじゃ・・・」

パテユグは軽く笑ってそういいながら、空をおもむろに見上げて言葉を閉ざした。

その様子に、俺は首をかしげて彼が見上げる方向にあるものを見た。それは、大人よりも少し若いドラゴンが空を駆けるように飛んで来る様子。

「・・・生徒じゃねーな・・・」

「あの制服・・・マスターズスクール？」

「お前の前の学校か。」

ジツとそのドラゴンの行く道を眺めていると、ズンズンこっちに向かってきているのが分かった。

「お前の・・・知り合いじゃねーのか？」

「俺の？・・・まさか。」

真つ赤なマントがそのドラゴンの合間から覗いている。

「セルス!!!」

空中20メートル近いその場所から、俺を呼ぶ声がした。

「まさか・・・リラ?」

するとドラゴンはそこから急降下し、俺とパテユグの目の前にドスンと着地した。

そのドラゴンの背から、真っ赤なマントを羽織ったリラが早足で俺に向かってくる。

その顔は怒っているようで、どこか悲しいような顔をしている。

そんな彼女が俺の目の前まで来ると、急に俺の胸ぐらをつかんで大声を上げた。

「どうして!!!どうして、教えてくれなかったの!!!」

彼女の急に起こしたわけの分からない行動に、パテユグは理解できず驚いた眼をして俺等を見ている。

しかし、彼女のその言葉で俺にはその行動の意味が分かった。

「・・・悪い。」

「どうしてっ・・・ど・・・して・・・止めてくれなか・・・ったの!?!」

「悪かった。」

「謝らないでっ!!!謝るなら・・・どうしてコアを止めなかったのよ!!!」

ドンドンと手加減なしに俺の胸を叩いているリラの眼から、涙が零れ始めた。

俺はリラが泣いているのを、その時初めて見た。

「ごめん。」

「謝らないでって言うてるのになっ！……どうして！……ど……して……！？」

それでも彼女は叩くのをやめずに、俺に拳を振り上げてくる。

骨でも折れてしまっくらい痛かった。

しかし、俺はその手を掴む事も、振り払う事も、押し返す事もできなかった。

胸に感じるこの痛みは、リラが感じている痛みよりもずっとずっと小さな痛みでしかないような気がしたから。

「ごめん……」

「アンタなんか嫌いよっ！知ってたんでしょっ！？……どうして……どうしてコアを止め……て……っ」

ようやく殴る気力を失ったのか、彼女の拳は俺の胸に押し付けられたまま、彼女は泣き喚いて、その場に座り込んだ。

幸い今日はまだ休暇中の学生が多いため、こっちの校舎には俺とパテュグの2人しかいなかった。

しかし、パテュグは俺とリラの様子を見てまだ驚いたまま立っていた。

「セルス……なんか……っ。」

「悪かった。」

「最……低よ……っ！！！！コアを……返してよっ！！」

俺は唯謝る事しかできなかった。

泣崩れた彼女の震える肩をそっと支えて、その場に立たせてパテュ

グと一緒にすぐ近くにあるテーブルに腰掛けた。

「どうなってんだ？」

俺の隣の椅子に座って、向居の椅子に座って涙を拭っているリラをチラチラと見ながらパテユグは聞いてきた。

「後で説明する。」

「ああ、是非そうしてくれ。」

パテユグはそれだけ言うと、その席を立って少し遠くの場所であつた。

それを見て、俺はリラの姿に視線を戻した。

「ごめん、リラ。」

「謝らないでつてば……。」

「でも。」

「説明して！……どうしてコアをアカンサスに行くの……許したのか。」

貴方が知らないわけないでしょう！？あそこが今、どんな状況下に置かれているか……。」

リラの眼が涙によって赤く腫れている。

こんなに心を乱したりリラを初めて見た俺は、コアの存在がリラにとつてどれほど大切なものであるかを知った。

「あいつが行きたいと言ったから、許した。」

ただ、それだけ。

「どうして許すの！？あの子がどうなっても……いって……いうの!？」

「初めは反対した。許したりしなかった。けど……」

コアは言ったんだ“私は、行ってくつて決めた。”と。

その目を見たときにはもう、とどめる事など出来ないとわかってしまった。

「俺はあいつをここに繋ぎとめたくはないんだ。

いつも、あいつは俺の背を押して空を飛ばせてくれたのに。

俺は、コアが空を飛ばそうとする時こんなふうに反対して、その羽をこの地に繋ぐ事しか出来ないのかと思った。」

いつてらっしやいをくれた彼女に、俺は行くなとしかいえず。

ロイには空を飛ばせてやりたいんだと言ったのに、

俺がしようとしていたのはロイと同じで、彼女をこの地に縛り付けることだけ。

「でも……っ！そうしなければ彼女は……コアは……もう二度と……戻ってこないかも知れないのに!!」

俺だつて怖かった。けど、それ以上にそれを一番恐れていたのはコアなんだ。

それでも彼女は行くと言った。

「それを一番恐れているはずコアが、自分から行きたいと言ったんだ。」

「……」

それを行くなとは、とてもじゃないが言えなかった。

「結局、あんたはコアの事なんかどうでもいいのよ!!」

リラの眼に再び涙が溢れて零れていく。そのリラが発した言葉はどこか、自分の言葉と重なるような気がした。

“結局、お前にとって俺なんかどうでもいい存在でしかないんだろ!?”

「そうかもしれないな。」

「・・・え?」

ルキアが必ず守ると言ったその言葉を信じて、送り出すなんて。本当はコアの事をどうでもいいと思っているのかもしれない。

「でも。」

真っ直ぐにぶつかつたんだ。傷つく事を、傷つけられる事を恐れずに偽ることなくぶつかり合った。

それはコアの事を確かに、大切だと思っていたから。

「それであいつが自分の選んだ道を行けるのなら、俺はどう思われなくてもいいんだ。

あいつが欲しているのは、居場所じゃなくて、『おかえり』と言ってくれる場所だから。」

周りのクレズやロイ、リラに、何を言われても。最低だと、あいつを想っていないと罵られても。

それで彼女をここに縛り付けないで済むのなら、これが俺の想い方なんだと言い張ってやる。

「・・・セルス・・・」

「ルキアが言ってた。絶対守るから、と。自分が死んでもコアは平気だけど、その逆は違うんだ、と。」

「ドラゴンが・・・」

「あいつらには絆がある。絆のあるドラゴンマスターズには、運命の神も微笑む。」

「・・・何それ、キザな台詞ね・・・」

「ははっ。まあ、待っていてやれよ。」

彼女が必要とするのは、自分を引き止めてくれる手ではなく、帰って来たときに抱きしめてくれる手なんだ。

彼女は高く高く空を飛ぶドラゴンマスターだから。

お帰りの場所だけを、作っていてやればいい。

「本当に、セルスなんか大嫌いだわ。」

ようやく涙を止めて、リラが笑いながら言った。

彼女の机に置かれていたコアからの手紙の最後には、こう書かれていたらしい。

『 わがままでごめんね。けど、私が帰ってきたら“おかえり”って言って笑って欲しいです。』

第53話　：コア

真っ白な場所、そこがこれから私の立つ場所なのだと思います知らされた。

総予省よりもずっと何も無い場所には、総予省よりもずっとずつとしなければならぬ事がたくさんあることに気づいていた。

「お前の番号は、D137だ。」

たくさんの人が集められた場所で渡された白い札には、『D137』と書かれていた。

周りにいる人は全て大人の男の人ばかりなのに、まるで自分だけが浮いているような気分だった。

そんなことを考えていると、官庁のような男は大声で番号と配属場所を言い始めて、

あっという間に『D137』の配属場所を伝えられた。

「・・・D137は、東部にあるパンセル。D138は・・・」

広く乾いた地に集められているのは、ドラゴンマスターから、魔術師から、軍兵まで。

その理由はさまざま。ただ、確かに力があるものばかり。

「解散！」

官庁の声にビクツと体を揺らすと、周りの人達はばらばらに動いていった。

しばらくその場で立ち尽くしていると、ドンと何かがぶつかった。

「あ、わりい！！平気か？」

顔を上げると、真っ黒のマントを羽織った男の人がこっちを見下ろしていた。

その低い声には似合わない綺麗な顔が、ジッとこっちを見て笑った。

「お前がD137だなっ？」

「え？・・・あ、はい。」

とつさに返事をする、その男の人は私の頭に手を置いてにっこりと笑う。

「俺の名はルアー、番号はG25。」

「私は」

ザワザワと話し声をする中でのいきなりの挨拶に答えようとすると、ルアーさんはその言葉の後を私の変わりに付け足した。

「ドラゴンマスター、コア。D137だろ？」

「はい！でも、どうして??」

見たこともないような彼の顔をジッと眺めても、誰かも思い出せないのに、彼は私の事を知っている。

そのことに驚いて首を傾げると、彼はより一層笑いながら言った。

「これでも高等魔術師の端くれやってんだ。伝説のドラゴンが空を飛んだって事くらい知ってるさ！」

「あ・・・ルキア。」

「ルキアってのか？本物はまだ見たことないんだがな、それはそれは綺麗だと有名だな。」

有名なのは、白竜であるルキア。
その姿は見るものを魅了する、身の毛もよだつ美しさと謳われている。

今ではその羽も、白い肌も、疲れきって休んでいる。

「お前さんも有名だなあ。あの総予省で大活躍だったって。ファルスを知ってるか??俺はあいつと幼なじみなんだ。」

「ファルスさんと!?!」

「やっぱり知り合いか。あいつが凄く凄くってうるさかった。」

ファルスさんの幼なじみさんと会えるなんて、少し嬉しかった。
どこか、世界は狭いなと思わせられる。

「で、コアもバンセルだろ?」

「も・っってことは、ルアーさんも!?!」

「ルアーでいい。俺もだ。」

よろしくな、と笑う顔はまるでお兄さんという印象を与えてくれる。
少しずつ、人がこの場所を離れ始めるともう一人、男の人がこっち
に向かって歩いてきた。

「お?なんだ??」

「………G25、D137か。」

「はい。」

「俺はK14」

「名前は?」

「………」

真っ黒な髪のに、真っ黒な目、それに真っ黒なマントの男の人は

私達を見ているだけで、
名前を名乗る気はないようだった。

「・・・K14つーことは、同じバンセルだな。」

「そうなんですか?」

「敬語もやめろつて。」

「え、でも・・・うん!」

「・・・」

ルアーよりも背の高いその人は、なにも言わないままこつちを見てくる。

その目に、少しの恐怖を感じるとルアーが横から明るい声を上げた。

「まあ!よろしくつーことで!!仲良くしてくれよ!!」

「同じ配属だからつ、お互い頑張ろう!」

その声に乗しても、その人はピクリとも表情を変えない。
しかし、その声はとても綺麗で心を魅了した。

「思ったより、幼いな。」

「えっ!?!」

それは私に向けられた言葉だった。

その後、彼の黒い瞳はルアーを見て空を見た。

「い、行くか!!」

「は・・・うんっ!」

「・・・」

妙な空気から始まった、これから共に戦う仲間との出会い。

ルアーの金色の明るい髪と真っ黒な髪をした男の人が目の前で立ってこっちを見ていた。

「どうかしたの？」

風の匂いが心地いい夏の香りを漂わせた。

真っ青な空から注がれる夏の太陽は、じりじりと身を焦がしている。

「白竜」

黒い男の人が呟く。

「ルキア？」

「白竜呼ばねーのか？俺も多分この男も魔術師だから、箒に乗っていくけど。」

そういうとルアーと黒い男の人はその手に古びた箒を出した。

東のバンセルまでは、確か空を飛んでも丸1日はかかるくらいの距離だったことを思い出して、空を見上げた。

こんなかんかん照りの中を、またルキアに運んでもらうなんて、そんなこと出来るはずもない。

「・・・先、行つてて！」

夜になれば少しは涼しくなるだろうと思うと、それまでは歩こうと思った。

夜になって、ルキアの気分がよければお願いしてみようと思ったのだ。

あの白い羽が、もとの輝きを取り戻してから、空を飛べばいい。

「まさか、歩くつもりかっ!?!」
「・・・」

2人が驚いた顔をしてこつちを見た。

その身長から、2人とも30cm近く差のある私を見下ろしてくる。

「え?あ、うん。」

「おいおい、無理だつて!!」
「・・・」

ルアーが私の視線まで腰を下げて、覗き込むと聞いてきた。

「喧嘩でもしてんのか。」

優しげで真剣そのものの彼のその目に、私は思わず笑ってしまった。

「あははっ。違うよ?ここに来るまでずっと空を飛んでたし、こんなに暑い中を飛ばせたくないの。」

「は?お前、ドラゴンマスターだろ?」

「命令すればいい」

黒い目が見下ろしながら、言ったその言葉に体がピクリと揺れた。

“命令”をする気なんてない。

私達を縛るのは主従関係じゃない。この世界のドラゴンマスターのほとんどは、主従関係を持っている。

私が欲しいのはそんなものじゃない。彼女に与えたいのは、そんなものじゃない。

私達はそんな物に縛られるんじゃない、絆で結ばれていたいから。

「・・・ドラゴンは、マスターの召使じゃない。」

それだけは知っていて欲しいの。

たとえ魔術師で、ドラゴンマスターのこと何も知らなくても。

「ドラゴンは意思を持ってマスターの傍にいるの!」

それだけは知っていて欲しいの。間違えないで。

私達マスターは、ドラゴンを仕えさせる者だと言われてるけど、本当はそうじゃない。

ドラゴンと共にいる者、それが、マスターのあるべき姿だと思う。

「白竜が空を飛ぶときに、伝説のマスターは現れるって伝説があるけど。」

大昔にそう言われてた。その言い伝えと同じように、私のおじいちゃんも伝説のドラゴンマスターになった。

私は最近になって少しだけ思い始めたの。伝説よりもルキアのほうが大切だから、

彼女を従わせなければならぬくらいなら伝説の定義なんて私が変えるって。

「伝説のマスター。幼いわりに、強い目をしている。」

認めたように呟かれたその言葉に、思わず口元が緩んでしまう。

そういわれるのは、嫌じゃない。私が目指すのは伝説のドラゴンマスターだから。

「よしっ、歩くか!!お前も歩くだろ?」

「ああ」

2人の眼も、芯を持って強い目をしていた。

その目を見ていると、私も頑張らなくちゃと思うくらい。

金色と黒色の髪が私よりもずっと空に近い場所で風に揺らされている。

背の高さはデコボコ、個性もばらばら、それなのにどこか心地いいのは、この夏の風のせいだけではない気がした。

第54話　：ルアー

夕日は紅く空を染めはじめ、地平線のかなたにその身を沈ませ始めていた。

時計が示す時間は意味を持たず、視覚に与えられた感覚がその時間を狂わせる。

「あゝつかれたあ・・・」

そう声を上げた俺は、途方もない道のりを何時間か歩き続けて、足がそろそろ疲れ始めていた。

昼の熱がようやくその地から放たれるように、冷え始める。

土と乾いた草が敷かれているその場所を歩き続けて、足の裏はもうポロポロだ。

大人の男である俺の足が疲れているのに、こんな小さな少女が疲れてないわけがない。

黒の男でさえ、ふとした瞬間に遠くを見ている黒い目が疲れを見せていた。

「夕日が綺麗〜!!!」

疲れた、と呟く俺の隣。

そう大声を上げたのは、身長もずっと小さく、体も2回りは小さい少女だった。

「ねっ？ねっ??」

「え。ああ。綺麗・・・か。」

その名はコア、幻の白竜と契約した伝説のドラゴンマスターである

少女。

その知らせを聞いたのは、彼女と出会う少し前だった。アカンサスに旅立つその前日に、その話を聞かせてくれた。まあ、思った以上に幼かったが。

「綺麗と感じる人間は、恵まれている。」

隣の俺よりも少し背の高い黒の男は珍しく口を開いてそう言った。今まで黙り続けていたこの男の、小さな声にコアが嬉しそうに反応して見せた。

「黒さんは感じないのっ？」

「黒さんっ!？」

コアは名を名乗らない黒の男を、“黒さん”と呼んだ。男はしばらく黙ってコアを見て、静かに呟いた。

「・・・感じない、もう何も。」

「暗い、暗い・・・暗いわ!!もっと明るく振舞えよ!コアみたいにさあ!!」

「あはは〜!!ルアーは明るいねーっ。」

笑ってこつちを見上げる少女は、黒の男の暗さをかき消すほど明るい。

足の疲れがその笑顔で簡単に忘れてしまえるような、そんな笑顔を久しぶりに見た気がした。

「あ、コア!日が沈むぞ!!」

こつちを見ているコアに急いで声をかける。

地平線に沈んでいた太陽が、闇に染められ始めた空から逃げるように消えていく。

太陽は沈むその時、白い光が一瞬強く光って姿を消す。

「あ、ホワイトホープ！初めて見た！！」

その光を人々は、白い光が願いを照らすという意味でホワイトホープと呼んだ。

ホワイトホープは、立った一瞬この世界に存在を示そうとする太陽の輝きのように思えて仕方ない。

そんなホワイトホープに、コアはしばし感動の声を上げていた。

「夜が来るな……」

「だんだん寒くなってきたね。」

闇が世界を占め始めた時、太陽が沈んだ地平線の向こうから、白い光の残像がこっちに向かってやってきた。

近づいてくる、光の残像……真っ白で、光をまとったような生き物。

「アレ……なんだ？」

「んんん？」

「……？」

3人の目は遠くから空を渡ってくるその白い生き物に釘付けになっていた。

風の匂いが変わった。

「ルキアだ！！」

コアが一際大きく明るい声を上げた。

「……え？」

彼女がルキアと呼ぶ、それはあの幻の白竜。
だんだんと近づいてくると、その幻の姿を露にした。

「……あ……それが……」

言葉なんかでなかった。

口を開いたまま、真上で羽を広げて舞っているドラゴンに魅入ってしまう。

白く、気高い、幻と呼ばれたドラゴンが今日の前で地上に降り立つうとしていく。

「……白竜」

黒の男も口をあけて小さく呟くと、その姿に魅入っている。
風の匂いが変わり、感動を与えて、ドラゴンは俺達の前に立っている幼い少女に舞い降りた。
闇を裂いて、ドラゴンが地に降り立つと、澄んだ声が空気を揺らして響いた。

『コア』

青い目、白い肌、澄んだ声。そのどれも、この世のものだとは思えないほど美しい。

「ルキア。来てくれたんだねっ、嬉しい！」

『さぞお疲れでしょう。』

「ルキアはもう平気？寝れた？」

『はい。いつから歩いていたのですか？』

少女は俺達に言った。“こんなに暑い中を飛ばせたくないの。”

“こんなに暑い”と言った昼を、自分は歩いてても、白竜には休んでいて欲しいと。

「夕方くらいだよ。」

白竜に向ける少女の笑顔が、一瞬とても大人びて見えた。

その白い肌を少女の赤く焼けた肌が優しく撫でている。

『・・・暑い中、すいませんでした。』

「え？」

ドラゴンは悲しそうな目をコアに向けてそう言った。

『こんなにも焼けて・・・。足もボロボロじゃないですか。』

「ルキアが心配する事じゃないよ？」

少女がついた嘘も、ドラゴンには通じなかった。

ドラゴンマスターズは、常に主従関係で縛られている物だと思っていた。

そんな俺の考えを根本から覆した、少女の言葉。

“・・・ドラゴンは、マスターの召使じゃない。”

あの時は、よく分からなかったその言葉の意味を、今ようやく理解できた気がした。

少女は暑い太陽の下でも、長い長い道の中でも、唯の一言もそ

の辛さを述べたりしなかった。
疲れたと嘆く俺の隣で、日に焼けていたその腕の痛みも、足の疲れも、一言も零さずにいた。

“ドラゴンは意思を持ってマスターの傍にいるの！”

少女の言葉が耳の奥でこだまする。

白竜はこの少女と契約を交わし、伝説のマスターを迎えた。

それはきつと偶然なんかじゃなく、必然だったんだ。

こんな少女だからこそ、白竜は契約を結び、一生の時間を少女にゆだねた。

『大切なマスターを心配しないドラゴンなんて、いませんよ。』

ルキアの見せるその眼は、まるでわが子を思う親のように優しく穏やかだった。

自分を一番に思ってくれる。自分の決断に弱音を吐かない。

そんな主を選び、契約し、仕えるルキアの眼は確かに伝説のマスターを映していると思った。

「ありがとう。」

思ったより、ずっと幼かった少女は俺なんかよりもずっとずっと芯を持つマスターだった。

伝説のドラゴンマスターを、今この目で眺めている。

そんな風に考えると、何かこれからとんでもない事でも起こるようなそんな気がした。

第55話　：ルアー

俺が見てきたもの全てが、その場所1つで覆された。
生きてきた時間がどれだけ幸せで、暖かいものなのかを思い知らされた。

「ここが、東の村バンセル・・・？」

「まさか・・・、こんなだとは・・・」

「・・・」

その村の入り口に立つ俺達3人の眼に映ったのは、焼き払われた家や、ボロボロになって歩く人々。

焼かれた家屋の断片に背中を預けて眠っているのか、死んじまったのか分からない人々。

ぼーっとその村を眺めていると、隣に立っていたコアが急に走り出した。

「お、おい！コア！？」

呼び止めても、この声が彼女を止める事はなく、コアは走って1人の少女に近づいた。

「お嬢ちゃんっ！！」

コアが呼び止めると、その小さくボロボロになった足を止めて、コアの方を向く少女の顔はまだ幼く

8歳になるかならないかくらいの子で、細い腕をコアに向けて、警戒の眼を見せた。

「・・・誰？何しに来たの？・・・敵？」

たった8歳くらいの子が、コアを敵だと警戒している。

その背に背負うまだ息をし始めて間もない赤子を守るように、コアを睨みつけて。

その少女の背にあわせてコアは暑い地に膝を折ると、自分の靴を脱ぎ始めた。

「これ、履いて？」

暑い熱い風が顔に吹きつけてきた。

コアはその地面に裸足を与え、彼女の目の前の少女に靴を手渡している。

コアは少女に靴を無理矢理持たせると、今度は羽織っていた真っ白で美しいマントを脱ぎ始めた。

「え・・・いいの？お姉ちゃんはっ？」

少女はその細い腕をゆっくりと下ろして、驚いた顔をコアに見せて聞いた。

マントを脱いだコアの半袖から覗く腕は、あまりに細くて白くて、直接日光を浴びるとヒリヒリと痛みそうだった。

「私は平気。ほら、早く靴を履いて？これも、羽織って。じゃないと赤ちゃんが日焼けしちゃう、ね？」

コアはそういうと、まだ悲しげで涙を浮かべて立っている少女と背中の中の赤子にその白いマントを羽織らせて言った。

少女は靴を履くために、腰を下ろした。その瞬間、乾いた土に涙を落として小さく呟いた。

「あ……り……がとおつ……。」

小さくて、俺や黒の男には聞えるか聞えないかくらいの震えた声。その声にコアはその小さな手を優しく、少女の頭に乗せた。

それから何を思ったか、コアは身に着けていた全てを脱ぎ捨てワンピース一枚とペンダント1つだけになると

その少女にその服やカバンや、持ち物全てを渡して言った。

「これを他の子供達にも配って欲しいの。」

真っ白のワンピースが夏の暑い風と光に揺れている。

「それから、あそこの広場に呼び集めて？お昼の時間だもんね。お昼にしよう？。」

何もないその場所で、たった一人ワンピースの少女が何かを作り始める音がした。

少女はコアの言葉にその場から走っていく。

するとそれまで背を向けていたコアが、こつちを振り返って笑った。

「お前……！馬鹿じゃねーのか！？そんな格好になって！！日焼けして、肌が赤くはれ上がるぞ！？」

真っ白な細い腕は、まさに女である事を告げていた。

まだ幼い少女の日焼けを知らない腕は、夏の風にさらされている。

その少女は俺等に近寄りながら、笑っていった。

「日焼けくらい、平気だよ……！」

「お前……、あのマントは必要なものだろ！？あんな高価なもの……」

「
全てを捨てて、自分はたった一つのペンダントとワンピースだけで俺よりもずっと幼いはずの少女の行動に、俺も黒の男も驚いていた。そんな俺等に、コアは明るい声で言った。」

「私はあの真っ白のローブが欲しくて、テストを頑張ったわけじゃない。」

あんなのあってもなくても、私はマスターだからね。

私が羽織るよりも、本当に必要とする人が羽織るためにあるほうがいい、でしょ?」

にっこりと笑ってコアは言った。

乾いた土の上に裸足で立ち、彼女はこれからこの世界を変えていくために。

全てを捨てて、純白のドレスをまとい、その細い首から美しい金のペンダントを吊り下げて。

「さあ、手伝って?子供達のためにお昼を集めなくちゃ!」

もうすぐ昼を過ぎようとしていた。

コアはそういうと、晴れ渡る青い空を静かに見上げた。

風向きが変わり、涼しい風が頬をかすめて、村を吹きぬけていく。

「ルキア」

真っ白なドラゴンに、真っ白な裸足の天使が駆け寄った。

『どうしたんですか!?その姿・・・』

「重たいから、いらぬもの全部あげたの。このほうが、ルキアも

軽くていいでしょ？」

『貴女は……自分の体を大事にしてください。』

「ありがとう、ルキア。」

そういうとコアはこっちに目を向けて、行こう！と声を上げた。

唯その様子を呆然と眺めていた俺の隣で、黒の男が真っ黒なマントを脱いで、コアに近づいた。

ルキアの背に乗ろうとしていたコアの背に、その黒いマントをかぶせた。

「黒さん、貸してくれるのっ!？」

「……ずっと被っている。」

「ありがとうっ!！」

純白のワンピースと、真っ黒で大きなマントを羽織って少女はドラゴンにまたがると空へと近づいた。

空はその少女とドラゴンを喜んで迎えて、風を躍らせていた。

「おい。」

「ん？」

そんな空を見上げていると黒の男が声をかけてくる。

彼女が変えていくのは、この国だけじゃなく、俺やこの男。

彼女と出会う全ての人に、その幸せを分け与えて彼女は全てを変えていく。

「行くぞ」

「あ、ああ!！」

筈にまたがると、少しだけ、世界が広がったようなそんな気がした。

第56話 ・ジエラス

夜は闇を従えて、静かに世界を包み込んでいた。その空には、太陽の光は届かない宇宙が広がり、幾千もの星々が地上を優しく見守っていた。

「綺麗だね、空。」

2日前に出会った少女コア、その名は魔術師でも知らない者はいないほど有名。

一見普通の少女で、まるで街で友達と買い物をして楽しんでいてもおかしくないような気にさせる。

サラサラと夜風に揺れる髪も、白いワンピースも、全てが少女に映えていた。

「まるでルキアと出会った頃の夜空みたい。ここには空を遮るものは何もないけど。」

それは幸運なことなのか、それとも不運な事なのか。

何もないこの場所には、確かに夜空を隠す物は何一つなく、空はどこまでも広がっている。

「あ。ルアー、もう寝ちゃってる。」

シンと静かな夜に、その少女の声は明るく響く。

白いワンピースと、俺の与えた黒いマントが唯一彼女を少し冷たい夜風から守っている。

その夜風についた焼けた匂いや、死臭から彼女を守っている。

「黒さんは、星好き？」

俺のことを“黒さん”などと変わった名前を勝手に付けたのは、彼女が初めてだった。

その言葉に少し戸惑いながらも、小さく頷いて見せると思ったとおりの笑顔がこつちを見る。

月の白い光だけが地上を照らしていたが、少女の笑った顔はまるで太陽に照らされているように明るく

冷たい土からは、まるで真昼の野原に咲く花の甘ったるい匂いでもしてきそうである。

「そっかあ！！綺麗だもんねっ。」

私、ルキアとまだ契約してなかった頃ね、森で星を見ながらルキアと話をしたの。」

幻と謳われる白竜の主である事を、すぐに忘れさせる少女の事がまだ信用できなかった。

仲間なんて必要なかったのに。

一目見ただけで、何故だか足が彼らに近づいてしまった。

「ドラゴンは星が好きなの。平和を願うものだから。」

知ってた？と少女は楽しげに首をかしげた。

白い首筋に風に流された髪が絡みついて、そのうなじをスッポリと隠した。

それから長い沈黙が襲う。その間俺はずっと考えていた。

結局は他のドラゴンマスターと同じで、ドラゴンを縛り付けているくせに

自分はそんな事はしていないと言い張っているだけに思えてならなかった。

「綺麗な星。」

確かに俺やあの男には出来ないことを、こいつは簡単にやってのけたかもしれない。

確かに自分を犠牲にしてまで、白竜のことを思って弱音も吐かず歩いていたかもしれない。

それでも、時々嫌になるんだ。

本当は彼女を信じたいのかもしれない。人間と言う生き物を信じたいのかもしれない。

それなのに、そうできないで疑っている自分がいるんだから。

「白竜を遣う者だから、そう言ってるのか。」

「え？どういうこと??？」

「伝説を目指しているから、白竜を思うようなことを言うのか。」

答えの言葉は決まっていた。『違う!』大反論して大声を上げるに違いないと決め込んでいた。

夜風が強く吹き付けると、少女はまた静かに空を見上げて短い沈黙を作った。

「……うん、そう。」

思ってもみなかった言葉。

俺の嫌味を認めて、それでも尚空を見上げて凜とした横顔を見せて答えた。

「私は伝説のマスターを目指してるよ。だけど、ルキアを思っるのは白竜だからじゃない。」

「……」

闇を照らす月は太陽よりもほのかに世界に光を与えている。
星はまるで拾い忘れた宝石のように、無造作に空に落とされている
ように輝く。

「ルキアはただのドラゴンなの。ルキアは、星が好きだけどね。
私と一緒に、星になれなくても今ここでできる事をできたらそれで
いいと思える、素敵なドラゴンなの。」

「今ここでできる事」

「そつ。私に今できる事は、ルキアを大切に思う事。人を大切に思
う事。」

たくさんの人を笑顔にする事。努力する事。諦めない事。
どれもね、とても簡単な事なんだよ。でもね、とっても大事な事な
の。」

俺が出会ったのは、幼い幼い少女のはずだった。

「黒さんは何が出来る？私なんかよりずっとずっとたくさん
の事、できるんだよね？すつごく尊敬するっ！！」

白竜を思う事が、今の自分にできる事と言うこいつは、他のドラゴ
ンマスターとは少し違うような気がした。
それはあまりにも楽しい笑顔のせいなのか。今までに見てきたマ
スターよりも幼いからだろうか。

「私はルキアの時間を奪ってしまったから。」

私はルキアが失った時間以上にたくさん幸せを与えてあげるの。」

（結局は他のドラゴンマスターと同じで、ドラゴンを縛り付けてい
るくせに

自分はそんな事はしていないと言いつ張っているだけ)

そう思っていた俺は、少女のその言葉でハッと闇に目を見開いた。

「ルキアはルキアの一生を私にくれた。私はその一生をルキアを想うのに使いたい。」

何人ものドラゴンマスターと出会ってきた。

そのたびに、そのマスターに従うドラゴンが可愛そうに見えて仕方なかった。

どんな綺麗事を並べた所で、ドラゴンを縛り付けている事に変わりはないと思っていた。

「だから私、伝説を目指してるの。おじいちゃんみたいになりたいのもあるけどね。」

ルキアを伝説のマスターに使える白竜にしてあげたいの。

今は無理でも、いつかはたくさんできる事があって全てをこなせるような、黒さんみたいになりたいの。」

俺は何も出来ない。自分の靴を脱ぐ事も、重いマントを脱ぐ事も。

今手にある全てを手放してしまう事も。コアがしたこと、俺は唯の一つもできやしない。

「・・・ジェラス」

なら、今の俺にできる事は何か。

彼女のように、綺麗事だと思われていても、否定する事もせず唯自分にできる事をした。

それが何であれ、自分にできる事だからと、全てを捨てても、自分を傷つけてでも、俺にできる事をしたい。

そんな今の俺にできる事は、この少女を信じる事だ。

「ジエ・・ラス？」

“黒さん”と呼ばれるのも悪くない。けど、信じた奴には名前くらい教えられるだろう？

それが今の俺にもできる事だと思っただ。

「俺の名だ。・・・コア。」

コアは今はまだ幼い少女。

しかし彼女ははずれ世界を背負うほど大きくなる少女なんだ。

そう思うと夜風は心地よく、まるで闇を切り裂いて走ってくるかのように吹いた。

その空には幾千もの星々が、唯拾い忘れた宝石が落とされているように輝いていた。

その空を白いドラゴンが駆けてくると、コアは優しく笑って言った。

「ルキアのために伝説を目指してるっていうのは・・・ルキアには秘密にしてね！」

スースーと寝息を立てて眠っているこのルアーという男の事も、何だか信じられるような気がした。

俺が出会ったのは幼い幼い、やがて伝説を背負う少女だった。

第57話 : コア

『 You are our world core . 』

私達の世界の中心は貴女。

“私達” そう記されているこの指輪は、朝の光を反射して金の光を放っていた。

朝風は夜にまして冷たい。

「ふああ・・・。・・・お。コア。」

「おはよう、ルアー。」

「ああ、早いな。」

その朝焼けの中、目を覚ましたのはルアーだった。

私は明け方近くに薄っすらと一度目を覚ましたが、

私の頭の上でジッと座っているジェラスを見て安心してもう一度眠ってしまった。

「なんだあ？こいつ、まだ寝てんのか？」

こいつ、とルアーが指差すのはきつと夜中ずっと起きて、私達を守ってくれていたであろうジェラスだった。

彼でもこんなに気持ちよさそうに眠るのだと思うと、私は思わずその寝顔に微笑んでしまった。

その瞬間、あの怖い声が私の微笑みに言葉を突き刺した。

「人の寝顔を見て笑うのか、お前は。」

そういうとジェラスはムクツと体を起こしてこっちを見た。

その目からは軽い怒りが見え隠れしている。

「えっと、そのっ！可愛いなあって！」

何のフオローにもならない私の言葉に、ジェラスはそっぽを向いていしまった。

折角昨日名前を教えてくれて、私の名前も呼んでくれたというのに、何だか悲しくなった。

黒いローブは寝る前は畳んで置いておいたのに、いつの間にか私にかぶせられている。

その正体はきつと、ジェラス以外何者でもない。

「ジェラスっ！」

思い切つて名前を呼ぶ。それまで眩しそうに朝日を眺めていた彼の黒い眼が私を映した。

そのことがほんの少しの事なのに、とても嬉しく感じられて仕方なかった。

「何だ。」

そっけなくて、怖くて、ぶっきらぼうなのに。とても優しい。

「ありがとうっ！」

私が笑ってお礼を言うと、彼は何のことだかさっぱり、という顔を見せた。

そんな私達を見ていたルアーが急に声を上げた。

「恋愛禁止だからな！！」

いきなりのその言葉に私は思わず、マヌケ面を二人の前にさらしてしまった。

いや、いつもさらしているのかもしれないが、もっと酷いの。

「あはははっ！おかしっ！もうむ・りっっ！ははっっ！恋愛！？」
「フッ」

その言葉に耐え切れずジェラスでさえ笑い声を上げると、ルアーはポカンとした顔を見せている。

恋愛感情は微塵もない私達にそんな事をいう、ルアーが考えられなかった。

確かにジェラスは好きだけど。それはルアーとも同じであって。

私は恋愛感情として、2人を見たことなんてない。

私がそんな感情を抱くのは、たった一人だけだもん。

「ジェラスってお前の名前だろっ！？そんな親しげな所見て、恋愛じゃねーとは言えねーだろ！？」

「ルアーって、おバカさんなんだねえっ！！」

「どこまでも、そうだな。」

「う、るせえ！！」

賑やかな声が朝日と共にバンセルに響いた。

何も無いこの町に、静かな朝は何度も何度もやってきては、過ぎ去っていく。

その間、民は皆苦しんでその時をしのぐしか出来ない。

そんな場所に私達はやって来て、朝を迎えている。

全てを平等に照らすオレンジに近い黄色の太陽の光は、私達に力を与えてくれている。

まだ誰も目覚めていない朝を、私達は静かに堪能していた。

その時

ダァンッ”

物凄い音が静かな朝を一瞬にして壊して行った。

ドスン、と一度地は揺れて、小刻みに震える。その振動に、私達は急いで立ち上がりその音の方向を見た。

土ほこりと、黒い炎が黙々と立ち上っている。

「何あれ!？」

私のその声に2人とも顔を動かすことなく答えた。

「この匂い、火薬。」

「大砲かなんかか!？」

するとまだ薄い赤の色をした空から、大きな玉が2つ降ってくる。

そのうちの1つは炎をまとい、2つは同時に地上を目指していた。

町がまだ完全に壊れていない場所を目指して、二つの玉は生き物のように飛んでいく。

「ルキアっ!!」

2人はその光景から眼をそらすことができず、ただ呆然とその様子を目を見開いて焼き付けているようだった。

けど、私達がここに来たのは、歴史を正しく記すためでも、後世に語り継ぐためでもない。

私達はここを守るためにきたのだ。唯見ているだけなんて、嫌なんだ。

『何です、アレ』

「敵が攻めてきたのっ！！急いで！止めに行く！！」

飛んできたルキアに私は飛び乗って、ルキアの上でバランスをとった。

冷たい朝の風が黒いローブを強くなびかせている。

ルキアは猛スピードで二つの玉まで飛んでいく。早く、早く。そんな思いがルキアからも伝わってくる。

「おいつ！」

「コア！！」

二つの声が後ろから、聞えるか聞こえないかの距離から届いてくる。私はその声に一度振り返って、すぐに前を見た。そんな私にルアーとジェラスは最大限のスピードで追いついてきた。

「はええっ！！」

ドラゴンはこの世で最も早く飛べる生き物であることを、彼らは知らないのだと思う。

私が乗っているから、これでもかなり速度を落としているのに、彼らはルキアの尻尾を追うので必死だ。

そんな2人は私に大声をかけた。

「あんなのに突っ込んだら、お前死ぬぞ！？」

「無茶だ、あの大きさは！！」

その大砲は少し離れたこの場所から見ても、相当大きいもので、直径20メートルはありそうなほどだった。

ルキアが飛んでも中々近づけないその大砲に、私はそんな事を1つ

も思わなかった。

ルキアにはあそこまで運んでもらって、私は空中で魔法をかけるつもりでいたし、他に手はなかった。

私の魔法が通じるか、そんなことはもうどうだってよかったんだ。

「じゃあ・・・じゃあ放っておけていうの!？」

そんな事したら、この町は完全に焼け野原になる。

まだ静かに眠っているかもしれない子供達や、動けずにいる人々が、ここで血を流すことになる。

私達はそんなことがないように、ここに来たんでしょ?!

「大きいだとか、そんなの関係ない!!私は守りたいの!!」

ようやく魔法が掛かる距離まで入った。それでもここから魔法をかけても意味のないくらい小さな物にしかない。

ルキアはどんと近づいていく。残り30メートルと切ったとき、私はルキアから足を浮かせた。

「ルキア、上が上がって!」

その私の言葉に、彼女はすぐさま従い真上へ上がっていく。

炎に包まれて地上を焼き野原にしようとする大砲に、私は落下しながらも両手をかざした。

時間はない。心の中で、必死にルキアとの繋がりを探した。

お願い、どうか間に合って。

『コア!』

ルキアの声が心に響く。見つけた!

『ルキア!大きな大きな冷気を吐いて!!』

『分かりました。』

空気の抵抗で体が少しだけ安定する。その瞬間にあの玉の炎だけでも消さない。

そんな思いで両手を必死に構え続ける。流れてくる強い風に折れないよう必死に大砲を定めていた。

「ルキアっ!!」

声に出して彼女の名前を呼ぶと、心が一瞬共鳴したかのように奮えた。

その瞬間、上空に舞う白いルキアから大砲を包み込むほどの冷気が放出された。それが最高のタイミングだった。

「水の精霊、我に全ての力を!!ウォーターっ!!」

私を浮かせる風からは、水の精霊が分け与えてくれる力を感じて魔法を描いた。

すると、届くわけのない距離にある大砲目掛けて考えられないほどの水流で水柱が真っ直ぐに伸びて行った。

その瞬間、ルキアと繋がった心で思った。『いける!』

その言葉は確かに確信へと代わり、大砲はジュウツと大きな音を立てて空中で炎を消した。

しかし、そのスピードは衰えず地上を目指している。

「地を目掛けし物が、風の神により空に留まるように!!!!」

落下していく中でその2つを一気に止める力は残されてはいなかった。

それでも私に出来ることはまだあった。

そう考えると、ジェラスが大砲を空に浮かせている間に私は地に向

けていた背を空に向けた。

「全精霊に力を借りたい！！この地に宿る精霊達よ！我に今再びこの地を守る力を！バブル・ホール！！」

黒いロープの紐が解けて空を舞っていった。

一気に重くなつた体は、スピードを上げて地上へ近づく。

それでも私の頭の中は時間との戦いだけだった。足りるか、足りないか。

今さっきの術で町全体を覆い始めたシャボン玉のようなドームは、ゆっくりと町全体を囲っている。

「コアっ！！」

地上が目の前に迫ってきた瞬間、真っ白羽が私を優しく包み込むようにして空へと舞い戻した。

暖かく、優しく、心地いいその場所は目を開けずとも分かった。

「ありがとう、ルキア。」

『本当に、コアはいつも無茶ばかり。』

ルキアの背に座り、下の町を急いで覗きこんだ。

すると空中で留まる1つの大砲に対して、もう1つの大砲はあと少しだけで完成するドームに触れる直前だった。

「やあっ！！」

ギョツと目を閉じ、その場面から眼をそらした瞬間。

ルキアが軌道を変えた。するとさっきまで飛んでいたところを、あの黒い玉が物凄いスピードで空に向かって飛んで行ったのだ。

何が起こったのか全く理解できない私の元に、ルアーとジェラスが近づいてくる。

その距離からして、2人の魔法ではないようだった。

「すつげえ!!」

「凄い魔力だ。」

2人も驚いた顔をして町を見下ろした。

そこにあるのは未完成のバリアを張り損ねているドームと、その上空に小さく浮いている1頭のドラゴンだった。

そのドラゴンの色は紺に近い、夜明けに似た色をしている。

その背には、灰色に薄汚れたボロボロの布を羽織った人が立っている。

「あれって・・・ドラゴンマスター？」

「本当だな!!ドラゴン連れてるしな!」

「あの男が、あの魔法を・・・」

ジェラスの言葉で、ようやくそのマスターが男であることがわかりゆっくりと近づいた。

あの20メートル近くある大きな大砲を、あの人はたった一瞬で空の向こうへと跳ね返してしまった。

その脅威の魔力に今近づいているのだと思うと、とても心臓が高鳴った。

「白竜」

口を開いてその男の人は呟いた。

それは驚くでも、見惚れているでもなく、ただそのモノを眺めているような。

その髪の毛は長く、所々に白髪が混じっているが、どこか若く見えて、その眼は何かを必死で求めているようだった。

「あのっ、ありがとうございます!」

「マスターは君か?」

紺のドラゴンはしっかりとした体格で、程よく鍛えられていた。そのドラゴンに並ぶと、ぼやけていた顔がくつきりと見えた。

「はい。」

「君のような少女が。」

その言葉は馬鹿にしているふうには感じられず、どこか懐かしさを見せる目を私に向けてくれていた。

優しい目だとしか思えなかった。そんなその男の人はにっこりと笑うとルキアの頬に触れた。

「美しいドラゴンだな。まさかもう一度見られようとは。これも運命の神のおかげかな。」

「運命の神・・・ですか?」

「ああ。私の名はフェウスだ。」

「私は」

「君達は名乗らなくていい。いや、名乗ってはいけない。

私は時々この村に来て世話を焼いている、ただの老いぼれのなりそこないだからな。」

でもっ、と言いかけた私の口からは、何故かそれ以上の言葉が出てこなかった。

どうしてもだか分からないが、どうしてもその先の言葉は出てこなかった。

「それじゃあ、『D137』と呼んでください。」

「俺は『G25』！で、こっちの黒いのが」

「『K14』」

「分かったよ。」

優しく笑う彼の顔がどうしても、心を焦がすような気持ちにした。

その微笑の奥にあるものが、誰かに似ているようなそんな気がしてならないのだ。

深く暖かくて、たくさんのものを抱えて。

ルキアたちは短く会話をして空から降りて行った。私はその間もずっと考えていた。

地上に足を下ろしても、空を見上げて。

耳に入ってくる彼の声が私を不思議と縛り付けるように、聞き入らせて。

誰なのかと聞いたところで、答えは変わらない。

なら何なのだろうか。この、心の中でたぎる炎の片隅のような熱さは。

この熱を冷ますことができるのは、ただそこに存在する時間と、生ぬるい夏の風だけであった。

第58話　：フェウス

置いてきた時を、私は今日の前で眺めて生きているような気分だった。

真つ白な白竜が空から舞い降りてくるその瞬間、全ての時は動き出していた事を感じたのだ。

「フェウスさん？」

「・・・ん？」

乾いた土の上を裸足で歩く少女は私を見上げていた。

白竜遣いであるというのに、彼女が身につけているのは指輪の通った金のネックレスと、真つ白なワンピース、

それとその横で不機嫌そうに歩いている黒い男からのもらい物である黒いローブだけ。

その白く細い腕は初めて日に触れて、赤く焼けている。

その上を優雅に飛んでいる白竜でさえ、土ぼこりにその本来の美しさをなくしていた。

「白竜、見た事あるんですか？」

少女は嬉しそうな顔をしてそう聞いてきた。

幼い少女は、あの時大砲に自ら身を投げ飛び込んだドラゴンマスターとは別人のようだ。

平和を望んで、地で神に祈っているのがお似合いというような少女なのに。

「ああ、あるよ。」

彼女は どうして空を飛ばうと思ったのだろうか。
白竜は どうして、彼女のドラゴンになりたいと思ったのだろうか。
その気持ちは全く分からないわけではなかった。
私の上を白竜と嬉しそうに飛んでいる紺のドラゴンも、私と契約し、
得たいものがあつたように、
彼女のドラゴンも何か欲しいものがあつたのだろう。そしてそれを
与えられるのが彼女だけだと知つたから契約した。

「・・・どうでしたか？」

「どうとは？」

「その白竜とマスターはどんな人でしたか。」

もうあれから10年以上もたっている。

それでも鮮明に思い出せるほど、くつきりと白いドラゴンと老いぼ
れのマスターが私の憧れだったから。

その白竜は平和が欲しいといっていた。そしてそれを与えられるの
が、その男だけなのだ と確信したから契約したと。

ドラゴンとはそういうものなのだ。自分を呼ぶ声を放つ人間が、自
分の求める物を持っていると知っている。

そしてその男もまた、白竜の求める物を与え、また、自分の望む物
を得た。

「憧れてたよ。今でも一番、憧れるドラゴンマスターズだ。」

それはドラゴンマスターである限り、目指す最高峰といえるだろう。
私は今でも追い続けているのかもしれない、と思う時がある。

それでも傍にはレインがいて、私だけを思っていてくれるから、私
は迷わず私に出来ることをしてこれた。

「そうですね。」

私の声を聞いて、少女は私に小さく笑った。それはそれは嬉しそうに。

「君は……」

置いてきた時間が、動いていた事にいつか気づくときが来る。

あの日、五月蠅いほどに泣いていたあの子が、流れ続けた時を知らせてくれる。

「え？」

「いや、なんでもない。」

一瞬の風に想いが駆けた。その笑顔がまるで私の愛した彼女に似ていたから。

もしかしたら、今吹いた風は運命の神が運んできた風かもしれないと思った。

「フェウスさんは、どうしてこの村を回っているんですか。」

「この村には少し、思い出があるんだ。でも、回っているのはここだけじゃなく、この周辺アカンサスの村全てだけだね。」

「そうなんですか。他の村はここよりもっと酷いんですか？」

「いや、ここと変わりない。けど酷いのに変わりはないな。」

「……、そうですね。早く戦争を終わらせなきゃ。」

もう5年も続いているこの戦争を終わらせるには、それ相応の力が必要になる。

私に出来るのは村を守る事で精一杯だった。私たった一人では守りきる事ができず、幾つもの村が滅びた。

訪れた先に村があることが、今ではとても幸せに思えてならない。

その村にいた人々がただ、苦しいながらも生きていて、未来に平和を望み続けている事が幸せだった。

「終わると思うかい？」

強い意志を灯したその目は、両親譲りなんだろうか。

誰から教わるでもなく、空を目指し、高く高くと飛ばうとする目。

「違いますよ。・・・終わらせるんです。」

そのために来た、彼女はそう付け足した。

流れる事のない強い意志は、自らここへ来たことを教えてくれた。

こんなに幼い少女が、こんな荒れ狂う土地へ自ら足を踏み込ませた。

「白竜がつくわけだ。」

こんな少女だから、白竜は声を上げて名を呼び、少女は白竜を呼び続けた。

あの人に似ている目をしている。厳しくて、意地悪で、でもとても優しく強い白竜遣いだった彼に。

「違いますよ。」

フワリと少女はその目を柔らかくして、また笑顔を見せた。

風が吹いてくる。熱くて乾いたその風に髪の毛を揺らして、少女は言った。

「ルキアは普通のドラゴンです。唯、色が白だけのドラゴンです。」

空を舞う白いドラゴンをそう言った名も知らない少女。どうしてこんなに私の胸を締め付けてくるのだろうか。あの日、彼女が言った言葉が少女と共に空気を震わせて響いた。

“私には唯のドラゴンにしか見えないわ。とつても綺麗な白い色をした、唯のドラゴンだもの。”

「フェルスさんのドラゴンと何も変わらないです。」
“フェルスのドラゴンと何も変わらないわ。”

昔、彼女がまだ私の前で笑っていた頃、そう言っていた。同じなんだと、ただ色が白というだけで、何も変わりはないと彼女は言った。

そのことを忘れかけていた私に、まるであの日の君がそう囁いてくれているような気がした。

「……………そ…うか。」
「はいっ。」

もしも彼女の、彼女と私の娘が生きていたのなら、この少女のように微笑んでくれるのだろうか。

もしかしたら自分を捨てた父親など、死んでしまえばいいと恨んでいるのかもしれない。

二度と会いたくないなどないと、思っているかもしれない。そうなる事なんて分かっていたんだ。それでも私は信じようと思っ

た。
彼女と出会った日に吹いた風を運んできた運命の神が、もう一度風を連れて私の前に現れ、愛する娘と出会わせてくれると。そう信じたいと思ったから、時を置いてきたんだ。

「素敵なマスターを選んだな。君のドラゴンは。」
「ありがとうございますっ！！」

いつか出会えるだろうか。

この少女のように、優しく強い目を持ち、美しい心をもった愛する彼女との娘に。

全てはその子が中心となり、私達の世界は動いていたあの一時がもう一度、流れ出す時が来るのだろうか。

その時まではこちらで、この少女達と自分にできる事をしていよう。
運命の神はもうすぐそこまで、来ているようなそんな気がするから。

第59話　：コア

熱い太陽が空の真上を通り過ぎ、少しずつ傾き始めた昼。

子供達を広場に集めてお昼を作って、村の皆に配り終えた頃、崩れた家屋の瓦礫がれきに腰を下ろしたジェラスが、空を仰いで2匹のドラゴンを見ているフェウスさんに声をかけた。

「貴方はいつからここに。」

さすがに熱いのか、ジェラスは腕を捲り上げている。

ジェラスの質問は、私も気になっていたことだった。

「もう、10年以上になる。」

「そんなにっ!？」

「ああ。あの頃から地方では多少の争いごとにはあったが、その頃はここも栄えていたよ。」

今ではもうその影さえも思わせないこの村が、10年前にはどのような姿で賑わいを見せていたのか。目を閉じても到底想像もつかない。

「それがここ5年で・・・、たった5年だ。中心都市ほどに栄えていたこの村が、たったの5年でまるで何もなかったかのように痩せ細り、消えかけている。」

フェウスさんの黒い瞳は、どこか遠くを懐かしむように眺めているようだった。

その先には何が建っていたのだろうか。ここには何があり、誰がい

て、何を話していたのだろうか。

賑やかで、人の笑い声が耐えないようなこの村は、
今や子供の泣き声と飢えや怪我に苦しむ人の呻き声うめが響いているだ
け。

そうさせたのは、紛れもなく戦争だった。

「人間とは脆い、人間の築くものはもっと脆い。」

フェウスさんの言葉には、何の間違いもなかった。

人間とはたった一本の矢で、たった一度の魔法で、ドラゴンの炎た
ったひと吹きで、いとも簡単に死んでしまう。

そんな人間が築くものは、人間の手によって、もっと簡単に壊れて
しまう。

「それを憐れいものなのだとさえ言えば終わりだが、憐れくするものが人間の
醜い心なら、それは唯の破壊に過ぎない。」

「それが・・・戦争の力、ですよね。」

「ああ。この戦争について少し、話をしようか。」

フェウスさんがさういうと、しばらくそこに立って聞いていたルア
ーも熱い地面に腰を下ろして、彼を見た。

フェウスさんの口が開いたのは、それから少し風が吹いた後だった。

「この戦争を起こしているのは、アカンサスの中で今最も力を持つ
2つの貴族、ベーレ家とバデス家だ。

5年前、先の王クオンズがお亡くなりになり、王家の血は途絶えた
と言われた。

そこで次の王となるのは自分だと名乗りを上げたのがその2家。

昔から仲が悪く、争いごとくも耐えないその2家はついに対立し、こ
の戦争を引き起こして、王座を狙っている。」

たった一つの椅子のために、こんなに人が苦しんで。

それで何が王だ。それで何が国のトップに立つのを望む者だ。

人はいつだって簡単に人を傷つけてしまえる。だからこそ人の上に立ち先頭にたつものは、

常に下の者、後ろの者のためにここに立つのだと思い続けなければならぬのに。

「酷い……。そんなの、誰も望んでない。こんな戦争を起こす王なんて、誰も望んでなんていない!!」

私の声だけが哀しくその場に響く。

王座なんてくだらない物の所為で、幼い少女が赤子を背負い、この熱い地を裸足で歩いて食べ物を探している。

誰がそんな事を考えてやるのだろうか。争う事で生まれた王なんて、何の意味もないのに。

その時、遠くから何かたくさんの馬の足音が聞えてくる。

村の広場に座っていた私達はその足音に静かに立ち上がり、その音が聞こえて来る方を見た。

「何？」

「敵か。」

「いや、違う。」

ルアーとジェラスが遠くからやって来る馬の姿を、目を細めて見ながら言った。

ゆらゆらと塵気楼のように揺れるその馬達は、ざっと数えただけでも20頭は超える。

そんな集団がゆっくりとこっちに向かってくるのを、ルキアは空から見ていたのか、急に地上へ足を下ろして、

私を守るように囲んでその方向を見ていた。

「あれは、ハデス家の旗だ。」

小さく風に揺れている旗のようなものに、フェウスさんがそう言った。

ハデス家の旗を携えて、だんだんと近づいてくる馬の集団はその姿をはっきりと見せた。

約5メートルという場所に着いた時、馬の足は何度か足踏みをして止まった。

後ろのほうの馬が小さく鳴いているのも聞える。

「お前達が昨日のドラゴンマスターと、魔術師達か。」

先頭に立ち、手綱を器用に操りながら茶色の馬にまたがる一人の男がそう言った。

その斜め後ろに着いている馬に乗る男の左手には緑の布地に金の刺繍で枠取りされ、

その中心部には羽を広げる鳥が描かれた逆三角形の旗を持っている。

「・・・ハデス家の人。」

これがあの戦争を起こしている人の下で働く人。

そんな風に私が男を見ると、男は私を守っているルキアを見て馬を下りた。

それから私の方に向かって、一步一步近づいてくる。

『寄るでない。』

いつもの優しい声とは全く違う、低く唸るようなルキアの声が男の

足を止めさせた。

ルキアの青く澄んだ目が、男を一秒たりとも見逃さないように、ジツと睨みつけている。

それでも男は一步と踏み出すと、ルキアは大きな尻尾を地に叩きつけた。

その行動に男はもうそこから動く気配を見せずに、その場に跪いた。

『私の主に何のようです。』

依然冷たいルキアの声が、男に降りかかる。

「幻の白竜を従えし者、そなたはあの伝説のドラゴンマスターであろう?」

男の声にパツと馬達を見ると、先ほどまで馬に乗っていた兵士達が馬からおり、その場に跪いている。

そして馬だけが小さく揺れたり、首を振ったりしている。

「違います。」

私がそう言うと、男はこっちを見てもう一度頭を下げた。

そのまま地面を見たまま男は、私に言った。

「そなたは伝説のドラゴンマスターでおられる。どうか、我々に力を貸してもらえんか。」

男がそう言った時、ルキアが白い羽を飛ばたかせ、風が起る。

その風に舞い上がる砂から男達は目顔を覆った。

その行動からルキアは怒りを露にしている事がわかる。

そう、私の心を感じとったかのように同じ怒りを覚えていた。

「お断りします。」

「何故!？」

“何故” そんな理由が必要なのか。

人を傷つける事に、苦しめる事に、殺す事に参加しろと言うのか。誰がそんな事に喜んで参加する者がいる。

「報酬がいくらならいい。いくらほしいのだ。ん？」

腐っている。汚れきっている。

お金に縛られて生きる人間ばかりだと思っ込んでいるのだろうか。誰がお金を詰まれて人を殺す道具になんてなるか。

「最低。」

『下がれ、汚らわしき者ども。』

「なっ!! もしやそなたら、すでにベーレの輩と組んでおるのか!」

『これ以上近寄るでない。』

「・・・っ! ならば相手が誰であろうと、叩ききってやるわ!!」

急にその場を立つと馬にまたがり、その男は大きく腕を振りかざした。

その合図にそれまで座り込んでいた兵士達は、腰に携えた剣を片手に馬にまたがった。

「ルキアっ!」

「レイン!」

私の声が続いて、フェウスさんが紺のドラゴンの名を呼び、同時に

ドラゴンにまたがった。

ルキアはすぐに地から離れ、空高くへと上っていく。

その少し下を、紺のドラゴンが飛んでいる。

そのドラゴンの姿を確認すると、地上から2つの声が上がった。

「人の手にあるものが、地の神により、全て地へと還るように！」

「人に操られし者が、夜の神により、優しく眠りにつくように！」

地上を見下ろすと、馬の群れに手をかざしているルアーとジェラスがいた。

ジェラスの掛けた魔法により、男達が握っていた剣はあっという間に砂になり、男達の手の中から地へと落ちて行き、

ルアーの魔法により、男達が乗る馬はその場に倒れこむと、そのまま眠りについてしまった。

「すごい。」

『さすが高等魔術師ですね。』

「中々の腕前だな。」

『真に。』

空を浮かぶ私達はその様子に、圧倒されていた。

しかし地上にいる男達は、もうそれどころではない、という顔つきで逃げるように去って行った。

第60話　：フェウス

『白竜を従えし者、歴史を変える者なり。』

その言葉を昔、幼い頃に聞いた事があつた。

父の前に跪き、国王直下のマスターになつて欲しいと男が言った。

父は堂々と首を横に振ると、その男の前に座り込み、言った。

“私は伝説のマスターなどではないですから。”

しかし父は確かに、その国の歴史を大きく翻すような事をしたマスターだつたのだ。

「フェウスさん？」

「ん、どうした？」

「あのつ。えつと、白竜の伝説・知ってますか？」

そして父が断つた事により、その大きな権威と地位を欲しがる事のない、

白竜の選びしマスターこそ、真のマスターであると謳われるようになった。

「ああ、知ってるよ。その昔から言い伝えられていた事を、たった一人の男が確かな伝説へと変えたんだ。」

「聞かせてもらえませんか？」

兵士達が去つた後、残された馬を村の民に分け与え、暮れていく太陽を眺めながら過ごす時間には、
ちよつどいいくらいの話である。

私が憧れたあの父の伝説を継ぐ者には、誰かが話しておいてやってほしい事で、

それを話すなら、私がかつて出たい役だつた。

「ああ、構わないよ。」

そういうと少女は優しくというより、少し厳しい顔をして見せた。その表情に私は少しの疑問を感じたが、伝説を早く知って欲しいという思いに負けて、すぐに消えた。

「伝説の彼は、どんな野生の竜でも操る事ができた、マスターだったんだ。」

森と出会う恐ろしい野性の竜を、いとも簡単に操る事ができた父の背は、いつでも楽しげで、その背を見ているだけで、早く自分もマスターになりたいと思ったものだ。

全ての竜に愛され、全ての竜を愛していたといっても過言ではない。

「けど、彼は決してドラゴンと契約を結ぶ事はしなかった。

彼はずっと、ずっと探していたんだ。自分の名前を呼び続けている声を。」

「ドラゴンの・・・声。」

彼は俺に言った。ドラゴンの声は、主の名を呼ぶためにあるのだと。そして、自分の声もそうでありたい、と。それももう昔の事だ。

伝説のマスターはこの世界から永遠に姿を消し、今ではもう伝説と化した。

あの広い背中を追い求め、思い描き続けて来た私は、今少しでも近づけているのだろうか。

「そう、声。ドラゴンが何故、声を持つか知っているかい？」

「知ってます。」

はつきりとそう答えた少女に私は驚いて目を見開いた。

「主を呼ぶためですよね。」

「・・・ああ、そうだよ。いや、まさか、答えられるとは思ってなかったよ。」

「えへへっ。」

伝説を継ぐ者、それがこの少女だというのか。

『白竜を従えし者、歴史を変える者なり。』

あの言葉は確かに当たっているのかもしれない。

しかし白竜遣いは必ず言うんだ。『白竜ではなく、ただのドラゴンだ。』と。

ただ、そう、白い色をしたドラゴンでしかないのだと。

「君もあのドラゴンに呼ばれたのかい？」

「はい。とっても、とっても綺麗な声だったんですよっ？すごく澄んでいて、その声が私の名前を呼ぶんです。」

「私もだ。彼、レインが私を呼ぶ声に不思議と吸い寄せられた気分だったなあ。」

「同じですねっ！だったらフェウスさんは、その伝説のマスターを継ぐ者ですよ！」

バサバサツと強い風に彼女の羽織る黒いマントが揺れた。

私が求め続けているものを、もうすでに、持っているというのだろうか。

その言葉は、愛した彼女がくれた言葉と同じように思えた。

「伝説を継ぐ者は・・・」

「白竜と契約した者だけだとは限りませんよ。どんなドラゴンも伝

説を作る力を持つてるんですよ？」

「伝説を作る力・・・？」

「はいっ。」

にっこりと笑う少女の上を、白いドラゴンが舞う。

青い瞳に、白い肌、その隣に紺の美しいドラゴンも舞っている。

そうか。ただ、白い色をしたドラゴンなんだ。

今、初めて彼女達が言ったその言葉の意味がわかった気がした。

「そうか・・・そうなんだ。」

「フェウスさん？」

彼女のドラゴンは唯白い色をしたドラゴンで、私のドラゴンも唯紺色をしたドラゴンなんだ。

何も変わらない。そう、その色が持つ意味なんて最初から何もなかったんだ。

その意味を持たない白い色に、人は伝説を謳った。

そして伝説を描く者は白竜遣いであると、思い込んでいたんだ。

「君が・・・・・・、君が白竜のマスターでよかった。」

もしかしたら、彼に預けた愛しいわが子が、もしかしたら白竜遣いの名を継ぐかと思っていた。

そんな奇跡のような可能性を微かながらに信じていた。

けど、たとえその願いが叶わなくとも、それでもその名を継いだのがこの子で、他には誰も継げなかったんだ。

継いだのが、この子でよかった。この子以外に誰一人として、継げるものなんて誰もいないんだ。

「まだまだです。伝説を継いで、その伝説を越す事が私の夢ですか

ら。」

「そうか。」

「ぐらぐら〜ってしてた心が、フェウスさんの言葉で、ビシッ！！と決まりました！！！」

ビシッ、という音を強調して、彼女は笑った。

覗き込むようにして、こっちを見て笑う彼女は、後もう少し時がたてば、それはそれはグレーナのように美しく気高い女になるのだろう。

「私、この戦争を終わらせませす。もう、決めました。」

それからその顔は真っ直ぐ前を見て、暮れ終わった太陽の端を見る姿が凜として私の目に映る。

その横顔は、すっきりしたというような顔で、太陽の微かな光でさえ、美しい照明として彼女だけを照らしていた。

短い髪も風にゆれ、通っていくその風が、どうにも愛おしく思わせる。

「大好きな人は、私に無理だと言いました。けど、私、ここに来てからずっとずっと迷ってたんです。

ただジツと終わるまで、こんな小さな事をして、それで私は満足なのかって。

だけど、そう。ルキアのパートナーとして恥じないマスターでありたい。」

白竜遣いは言うんだ。『ドラゴンは召使じゃない。』と。

真のマスターはドラゴンと主従関係を築かない。そんなものはいらないんだ。

ただ、一緒にいたいだけ。相手を思っていたいだけ。それは縛られ

るのではなく、繋がれる絆でありたいと。

「2人には明日言おうと思います。けど、その前にフェウスさんに一番に言っておきたいんで、言います。」
「何だい？」

空が闇に染まり始め、ドラゴンがそつと地へと舞い降りた瞬間。フワリと優しい風が彼女の方から吹いてきた。その風に流れる髪を押さえる彼女の幼い手。
その風に黒いローブも揺れている。

「私、ベーレ家とハデス家を王座争いから手を引かせに行きます。」
「……え？」

「この村の人に聞きました。王家の血を継ぐ者が、南にいるかもしれないって。」

その人に会って、王座を納めてもらえるようにお問い合わせ。その人を絶対に王座につかせて、この国をもう二度と戦争の起こらない平和な国にします。」

「……え……それは……本気なのかい……？」
「はいっ。もう決めました。」

絶対に2家と争うことになると思いますし、王家の血を継ぐものがあるかどうか分からない。
もしいたとしても、断られるかもしれない。だけど。」

その目は揺ぎ無い、信念を強く抱く目だった。

「……それでも君は行くんだね。」
「はい。それで……お願いがあるんです。」

どこまでも高く高く飛ぼうとする、大きな翼をもち、強い風を操る

者。

君は白竜を従いし者。『白竜を従えし者、歴史を変える者なり。』

「私にできる事なら、なんなりと。」

「村を・・町を・・人を、守ってください。」

最年少でコントゼフィールに入学した頃は、自分にできる事なんて何もないのだと思っていた。

あの広く大きな廊下や教室に、自分の小ささを感じて。

その頃だった。最愛のグレーナに新たな命が宿り、私は知った。

自分にできる事なんて考えている時間なんてない、そんな時間があるのなら少しでも進む努力をすればいい。

何をすればいいのか分からない時は、とりあえず進めばいい。そう思った。

この少女もきつと、今そう悩んでいたんだろう。

自分にできる事なんて何もないのだと、悩み続けて、迷い続けて、ようやく進む決意を抱いた。

「任せておけ。今ようやく、探し求めていた私にできる事を見つけられた気がする。」

「フェウスさん・・・。」

納得するまで今はただ、進み続けようとするればいい。

グレーナも私にそういつてくれた。小さな命を宿す彼女は、自分にできる事を既に見つけていて、

それを確かにこなしていたんだ。だから彼女はテパングリユスの地で眠った。

「なあ、『D137』。」

「え・・あ、はい。何ですか？」

もう太陽の欠片もない空に、星が瞬き始める。
世界から姿を消したあの日も、こんな夜だった。
愛する彼女に誓ったんだ。生まれたわが子のために、空を飛ぶと。
そしていつかわが子に出会う事ができたら、この世界に戻って来る
と。

「私の愛した人の話を少し、聞いてはくれないか。」

その我が子には、君の話を聞かせてやるつもりだったんだ。
その前にほんの少しだけ、この少女に話してもいいかい？
君と私との、短い時間に描いた温かな幸せを。

第61話　：フェウス

広く広く広がる野原には、黄色の小さな花が一面に咲いていた。それはまるで絨毯と言っても、過言でないほど敷き詰められていた。その中で私は空を見上げて横になった。顔の横に花が揺れている。その花を揺らしているのは遠くから吹いてくる風。

「おーい、フェウス。どこだ？」

その風が吹くほうから、明るい声がした。その声にとりあえず返事をして、手を上げた。

「こっちだ。」

「あ、いたいた！おいで、グレーナ。」

野原を駆けてくるいつもの足音は、今日、違う音をしていた。その音に体を持ち上げて、ガラリと空から変わった世界を確認して、足音の方へ振り返った。

「フェウス！」

「・・・何だ、クリユス。客人在るならそう言えよ。」

名前を呼んで駆け寄ってくるフェウスの後ろから、ゆっくりと歩いてくるのは、黄色の花が似合う綺麗な女の子だった。

私はその姿に急いで立ち上がり、体につく草を払って彼女を見た。

「初めまして。」

初めての言葉は、その言葉だった。
何の変哲もない、普通の出会い。しかし、私の心は何故だか高鳴っていた。

「この子はグレーナ、俺の幼なじみ。」

「はじめ・まして・・・。」

「フェウスさん、ですよねっ。」

彼女は俺の顔を見て、俺の名を呼んだ。

人に恋する瞬間とは、こんなものなのかと思った。

クリユスの連れてきた少女は、美しい長髪に、綺麗な目をしていて、こっちを見てくるその眼は

強く真を持つ、揺ぎ無い心を表わした目をしていた。

それから私達は2人で会うようになり、たくさんの話をした。

そんなある時、彼女は私の父に会いに来た。

その父の傍らには、いつでも立った一匹のドラゴンがいた。

「綺麗なドラゴンね。」

「ああ、あの幻の白竜だからな。」

そう、そのドラゴンは幻と語り継がれた白竜。

父はそのドラゴンに出会うまで、ドラゴンとは一度たりとも契約しなかった。

自分を呼ぶ者と契約したかったんだ、とそう言った。

そして白竜は父を呼び、父は契約を結んだ。

私も私を呼ぶ者、紺のドラゴン、レインと契約を交わした。

「白色のドラゴンは、こんな風なんだね。」

「ああ。」

「お父様は伝説のマスターよね。素敵だわ。」

「白竜のマスターは、伝説のマスターだと言われているからな。」

レインの事は好きだったが、白い色ではない彼と伝説を作る事なんて不可能だと、全てを諦めていた。

父のようなマスターになれるはずなんてないのだと、ずっと諦めていた。

そんな私に彼女は言った。

「でも、フェルスのドラゴンと何も変わらないわ。」

その瞬間に風が吹いた。

彼女を好きで好きでたまらない。そんな感情があふれ出す。

「私と、結婚してくれないか。」

その言葉は、思いもしないほどスルリと滑るようになってきた。

「すまない。いきなり・・・こんなこと・・・」

「フェウス。」

一生を掛けて、守りたい。そう思った。

彼女の病気のことも知っていた。もう、先が永くはない事も。

それでも、その全ての時間を君を思っていたい。

君がこの世界から・・・いなくなってしまうても、私は愛し続けるのだらう。

君の言葉を思い続けて、君のいない世界を生き続けるのだらう。

けど、その時までではせめて、君の傍にいたいんだ。

「私と結婚してくれる？」

その日は空が曇っていて、秋と言う季節により咲いている花はなく、風も少し冷たかった。

しかし私にとつてそれは、雲の合間から差す光と、紅に染まり散る葉と、熱い頬を冷ます風となり

きっと生きていく中で、一番と言っていていいほどの最高の日だった。

「喜んで。」

私からのプロポーズ、君の返事のプロポーズ。

私達にはその言葉だけで充分だった。

神の祝福も、風の祈りも、そう、他には何もいらなかった。

その日からたった一年。彼女はお腹に小さな小さな命が宿った。

世界から姿を消したままの私と彼女には、女の子が生まれた。

彼女に似て強い眼と綺麗な髪をもち、ほんの少し私に似ている子だった。

「私ね、分かるの。きっと来年のこの日には、この子を抱いていない。」

「……グレーナ……。そんな事はない。君はきっと」

「フェウス。ねえ、聞いて。私は本当にいなくなる。」

「そうすれば貴方一人でこの子を育てなければならなくなるわ。」

君がいなくなる事なんて、考えたくない。そんな感情を必死に押しさえ込んだ。

一番辛いのはきっと彼女の方で、私はそんな彼女を支えたかった。

「けど、そうすれば貴方はきっと、空を飛ばなくなってしまう。」

「そんなの嫌だわ。初めて言うけどね、私は貴方の空を飛ぶ姿を見た」

時恋に落ちたの。

クリュスと一緒に空を飛ぶ貴方を見た時、その姿に恋をした。だから、貴方にはずっとずっと……空を飛んでいて欲しいの。」

子育てくらい、どうにでもなる。

大きくなっていく我が娘に、いつか聞かせてやるんだ。君の話を。そう思っていた私に、彼女はそんな話をした。

「私が恋した貴方の姿を、なくさないでほしい。」

上を目指す事なんて簡単に辞めてしまえる。

ただレインと老後生活を送るように、愛しい君との子供と私とレインと、空にいる君とで暮らせばいい。

私の考えを伝えると彼女は、優しく笑って首を横にふった。

「お願いよ、フェウス。貴方は空を飛んで？」

その目はいつだって、真っ直ぐだった。

きっとそれは私が一番知っていること。彼女が言い始めたら決して他人の言葉に揺らぐ事はなく、貫く。

そんな彼女の強さに惹かれたんだ。

「貴方のお父様なら、この子を一番に愛してたくさん事を教えてくれる。」

私はクリュス達のところに戻るわ。それで貴方も世界に戻るの。トップを目指して？」

「……最後まで、傍に……いさせてほしい。」

「やめてよ、フェウス。そんなの私が耐え切れなくなっちゃう。」

「それでもっ……!!!」

「クリュス達に伝えたいことがたくさんあるの。私がいなくなった

2年を埋めてから眠りたい。」

優しく穏やかな目が遠くを見る。

「なら、私もついていく。最後の最後まで、君の傍にいたい・
んだ。」

「ああ、フェウス。私もよ。私も・眠るその最後は・貴方の顔
を見て、その景色を最後にして眠りたい。」
「なら!！」

彼女の眼にはたくさんの涙が浮かんでいた。

それでも彼女は笑って首を横に振る。それからその細く小さな手を
私の頬に伸ばして言った。

「この子と、私のために、世界を飛ぶと約束して？」

「・・・もう・・・、トップなんかいららないんだ。君さえ、君とこの
子さえいてくれたらそれで・・・」

「じゃあね、フェウス。私とこの子のために、空を飛んで？
世界に戻らなくてもいい。ただ、空を飛んでその姿を私に見せてい
て。」

君はきつとこの世の楽園、テパングリユスの地に眠るんだ。

そして、そこから空を眺めるんだろう。晴れやかな空を。

「・・・分かった。・・・約束するよ。私は空を飛び続ける。君とこ
の子のために。けど、二度と世界には戻らない。」

娘の前にも二度と姿を見せない。それが条件だった。

娘を捨てると言うことになる自分が、どの面下げて娘に会えばいい
のか。

そんな事を考えるだけで、嫌になる。

だから、私は二度と娘の前に自分から姿を現したりはしない。

「そんなのっ。．．この子が可愛そうだわ。」

「いや、私から会いに行かないだけだ。きつとこの子は会いに来る。それが私を探してか、そうでないかは知らない。けど。」

覚えているかい？君と出会ったあの日に吹いていた、温かな風を。小さな黄色の花を揺らして、君のほうから吹いていたあの風を。あれは運命の神が通って行った風だったんだ。

運命の神は、君と出会わせてくれた。私は忘れない。あの日の風を。

「いつか出会うんだ、この子と。まるで俺と君が出会ったように。」

だからその日までは、会わない。

きつと風が吹いて、運命の神はこの子を俺の下へと運んでくれる。そう。君を俺の下へと運んでくれたあの日のように。

「．．．フェウス。」

「これは、君が持っていて。離れても、寂しくないように。」

白く小さな手をとって、その上に2つの指輪を置いた。

1つはとても大きく、もう1つはとても小さい。

「これは、俺の指輪。そしてこれは、この子の指輪だ。」

「いつ．．．こんな．．．初めて見たわよ？」

「ははっ。秘密で作っていたんだ。俺の指輪には、文字を彫った。きつと君も気に入るよ。ほら、これと君のも全部チェーンに通して、首に下げていてくれ。」

彼女はとても幸せそうに涙を流して、私に抱きついた。それから私達はその場所から別れて、自らの道に戻ったんだ。

グレーナが眠ることになる、その日。神の声が教えてくれたんだ。だから私はその日、レインの背にまたがり、彼女の眠る病院へと掛けて行った。

右の塔の3階に彼女の部屋があり、私は窓から静かに忍び込んだ。

「誰・・・!?」

暗い夜に星は瞬き、満月の光だけがその部屋を照らしていた。長い間聞いていなかった彼女の声が、震えながらに私の耳に響いた。

「グレー・・・ーナ。」

「・・・フェウス・・・なの？そんな、嘘つ。私・・・神様が・・・今日貴方が会いに来るって・・・本当に!？」

「グレーナ、久しぶりだな。少し痩せてしまったな。」

白い頬は少しやつれてはいたが、それでもやっぱり美しく。病気だと言うのに彼女のその目はやっぱり、まっすぐに私を見ていた。

そんな彼女を照らす月の光が、彼女の涙を浮かび上がらせる。

「会いたかった・・・ずっと・・・会いたくて・・・」

「私もだ。」

少し冷たい頬に触れると、本物のグレーナだと思った。

「おやすみを言いに来てくれたの?」

そうだよ。君にお別れを言いに来たんだ。

「それもある。」

「他にも・・・あるの?」

君が言ったんだろう。“私も・・・眠るその最後は・・・貴方の顔を見て、その景色を最後にして眠りたい”と。
だからここに來たんだよ。

「いや。それより、指輪の文字、分かったかい?」

「・・・ええ、驚いた。私も同じ事を考えてたの。」

『 You are our world core . . . 』

あの子は私達にとって、世界の中心だもの。どうしてこれをあの子に持たせなかつたの?」

「その答え、知りたい?」

「ううん、分かった気がする。きっと・・・またこう言うんでしょ?

“運命の神を信じてるから。”って。」

そう、正解だ。

「君と出会えたように、きっとこの指輪もあの子と出会う。」

「そうね。今なら私もそう思える。」

少し静かになつた部屋に、2人でただそつと存在していた。

「ねえ、フェウス。」

その声には静かに彼女のベッドの隣へと近づいて、顔を見た。

「何?」

「愛しているわ……。ずつ……と。ねえ……おや……すみなさい。」

ツウと一筋の涙が彼女の目じりから流れた。

「……グレーナ……?」

もう、彼女の声はしなかった。

「愛している。」

君が目を閉じるその瞬間に君の瞳に映ったのは、私だった。

それが、とてもとても……嬉しかったのに、私の目からは涙が溢れて止まらなかった。

君がこの世界から消えたあの日も、君と出会ったあの日も、そしてあの子が生まれたあの日も。

全てを忘れる事はない。そしていつの日か、私の前に現れた愛しい娘に聞かせてやるんだ。

君と私がどれほど愛し合って、あの子を思っていたか、と。

第62話　：コア

私は小さい頃からおじいちゃんに育てられた。

両親はいない。でも、平気。不思議だけれど、きつと2人は私を愛していたのだと、そう確信していた。

きつと私を愛してくれていて、ずっと私を見てくれる。

私がそう言うとおじいちゃんは決まって言った。

“きつと神様がそう、教えてくれてるんだろっなあ。” って。

「すまない、つい、長話になってしまった。」

伝説の白竜を父に持つフェウスさんには、今はテパングリユスに眠る愛しい人と、その子供がいた。

その愛している人の名前は、グレーナ。

その名前をどこかで聞いた事がある。そんな風に頭の中を探していると、声が聞えてきた。

“ここに眠っているんだ。この、テパングリユスに。”

それは懐かしい、ハイドン省長官の声。そう、彼が言ったんだ。

“君にそっくりな・・・そうまさに生き写しのような彼女・・・グレーナが。”

ハイドン省長官の大切な友達であるグレーナさんも、病気で・・・。

「・・・どうかしたのか？そんな顔をして。」

ヒュウ”と風が暖かく吹いた。

ハイドン省長官にはクリュスという双子のお兄さんがいて、カルテイエさんとハイドン省長官とそのクリュスさんには、幼なじみがいた。

その人の名前が、グレーナさん。

「・・・私・・・」

ハイドン省長官は、お別れの日私に1つのネックレスをくれた。グレーナさんがいつも着けていたという、3つの指輪が通る、綺麗な金のネックレス。

そのネックレスが今、首もとでキュウツと熱くなった。

「わた・・・し・・・」

そのネックレスの中の一番大きな指輪には、確かに文字が彫られていた。

『 You are our world core . 』

私達の世界の中心は貴女。

全てはその瞬間に繋がった。

「お・・・父・・・さん。」

強い風が一瞬、目の前の男の人と私の間を掛けて行った。運命の神が通って行った、そんな気がした。

「え？」

「指輪・・・これ・・・。」

そつと手を後ろに回して、首に繫いだネックレスを外した。立った一本のチェーンに、3つの大きさがバラバラな指輪が通っている。

「これ・・・グレーナさんのお友達が下さったんです。グレーナさんが、いつも身に付けていたものだって。」

そつとそれを渡すと、彼の大きな手がそのネックレスに通った指輪の中の一番大きな指輪を覗いた。

優しい目がジツとその指輪を見終わると、バツと私のほうを驚いた目をして見た。

風は絶えず吹き続けていた。

「私の祖父は・・・白竜遣いなんです。・・・伝説のマスターと呼ばれた人。」

ルキアと出会った日、ほのかに吹いた風は、運命の神がもたらしたものだ。

そして、フェウスさんと出会ったあの朝に吹いていた、涼しい風も運命の神が吹かせたもの。

私の眼は急に熱くなり、じわりと何かが溢れて流れて行った。

「君・・・名前は？・・・名前を覚えてくれないか。」

グレーナさんはハイドン省長官達の前から2年間姿を消していた。

「私の名前は」

その2年で彼女は少し変わったと、ハイドン省長官は言っていた。彼女はその2年間で、愛する人と結婚し、子供を産んだ。

「 コア 」

おじいちゃんが教えてくれた。私の名前には『中心』という意味がこめられていると。

「・・・私達の世界の中心は・・・・・・君だったんだ。」

指輪に彫られた意味をはじめて知ったとき、私はきつと何かを感じたんだ。

運命の神がこれを私に持たせて、まだ見ぬ父に会うように。

もしも私がクラスSに入っていなければ、あの実施訓練もなかった。あの実施訓練で総予省へと配属されなければ、ハイドン省長官に出会う事はなかった。

ハイドン省長官に出会えなければ、このネックレスを貰う事も、グレーナさんの話を聞くこともなかった。

「お父さん・・・」

もしもセルスがいなければ、私はクラスSなんて入ってなかった、入れてなかった。

もしもセルスに出会っていなければ、私はお父さんに会うことも、お母さんの話を聞くこともなかったんだ。

そう思うと、今吹くこの風は、神がくれた贈り物に思えてしかたなかった。

涙は止まることなく溢れていく。

おじいちゃんが言ったとおり、お父さんもお母さんも愛してくれている事を、神様は教えてくれてたんだ。

「まさか、そんな……。こんな事があるなんて……。」「
運命の神様は……。お父さんとお母さんをこんな風に、引き合わせ
たの？」

長い時が今動き出したような気がした。

「ああ……。そうだ。そうだとも、我が愛しい……。愛しい娘よ。」「

お父さんはそういうと、そっと私を宝物を触るように抱きしめた。
大きな腕の中にすっぽりと収まる。お母さんはもう少し大きかった
のかな？
髪の毛はもつと長かった？肌ももつと白くて、私みたいに筋肉なん
てなかったのかな。

「運命の神は確かにいる。君が私に出会ったように。グレーナが私
に出会ったように。」

私の目指した幻の白竜のマスターである父を継いだのが、私の娘の
君であるように。

私は心のどこかで願っていたんだ。自分の娘が、父の後を継いでい
るんじゃないかと。

そして白竜に乗って、いつか私の目の前に現れるんじゃないかと、
願っていた。」「

そう、そして私は白竜に乗って、父である貴方の前に舞い降りた。

「どうして……。君だと思わなかったんだろっか。
グレーナにそっくりなその強い目と綺麗な髪で、分かったはずなの
に。」「

それはきつと、グレーナさん・・・お母さんのいたずらだったのか
もしれない。

何故だか私はそう思った。

「お母さんの・・・意地悪だったのかもしれない。」

「え？」

「必ず出会えると信じてたから。」

お父さんがお母さんの話を私にして、私は何も知らないままそれを
聞いて、お父さんを憎まずにすむように。」

もしもお父さんだと知ってその話を聞いていたら、私は少し疑った
のかもしれない。

けど、お父さんも知らずに話し、私も知らずに聞いた。

私が疑わなかったために、お母さんがそうしてくれたのかもしれない。

「グレーナらしい。」

私はこの人と、この人の愛した人に愛されて生まれた。

その後おじいちゃんに預けられたとしても、私は何も悲しくなんて
ないよ。

私は確かにお父さんとお母さんに愛されて、おじいちゃんにも愛さ
れて育ったんだ。

そしてお父さんが憧れたように、私もおじいちゃんのようになりた
くて、マスターを目指した。

マスターを目指して、学校へ入り、私は自分を呼ぶ声を探してルキ
アと出会った。

「私も、運命の神様を信じてたのかもしれない。」

ふとハイドン省長官の声が聞えた。

お母さんが眠る、テパングリユスの地で彼が言った
“いつか、その真実と出会える日がくる。”という言葉が。

もしかしたら、彼は知っていたのかもしれない。
私がグレーナさんの子供だと。彼の言った真実とは、きっとこのこ
とだったんだ。

「コア。」

初めて名前を呼ばれて、体が小さく揺れた。

「私も決めたよ。世界に戻ろうと思う。」

世界から姿を消していたというお父さんの私を見る目は、とても強
くて、真っ直ぐで、どこかセルスに似ていた。

私の目はお母さんに似ていると、お父さんは言ったけど、お母さん
が私の目を見ればきっと、

お父さんに似ているというんだらうなあ。

私はそんなふうに思いながら、にっこりと笑って見せた。

「うん。」

世界のトップを目指していたその目は、紺のドラゴンと共に伝説を
作る。

「出来ればコア、君について行って助けてやりたいのだが。」

「私は平気。だから、この村や他の村を守って。」

「ああ、任せておけ。その代わり、君1人じゃ不安だ。あの2人は
必ず連れて行ってくれ。」

それと・・・これが終わったら、必ず一緒にグレーナに会いに行こ

う。」

お母さんはきつとお父さんの空を飛んで、遠くを真っ直ぐみるこの強い目が好きだったんだ。

私もそうなように。セルスのあの遠くを見据えて空を飛ぶあの姿に恋するように。

お母さんは私に似て、趣味が悪いんだなあ。

私はそう考えると、頭の中でセルスとお父さんを並べ比べて笑いそうになった。

「うん。」

そのときは、セルスも一緒に。

私の大切な、大好きな人ですって紹介したいから。

約束しよう？

全てが終わるとき、私達は確かに幸せな時間をもう一度作り始める
と。

第63話　：コア

「ねえ、ルキア。」

久しぶりに飛んだ空は、朝焼けに薄っすらとピンクに染まっている。風は心地よく、私達を通り越して行く。

『何です？』

皆が眠っているこの朝の空を、私達だけが独り占めしているような気分になる。

広い広いこの空が、まるで私達だけの世界。

「ルキアは契約するときに、自由と真の絆を欲しがったよね。」

『はい。』

「いつもいつも思うの。私、ちゃんと与えられてる？」

『もう、進む道を見つけたんですね。』

ルキアは私の考えを見透かして、優しくそういった。

私はもう決めただけど、ルキアが私について来る義務なんかない。

その上私は彼女に命令するつもりはないし、彼女には自由を与える
と約束した。

たとえルキアが嫌だと言っても、私はここを出て1人で次期王を探
しに行く。

「・・・」

『ねえ、コア。貴女にとって、私に与える自由とは何？』

「それは・・・ルキアの意思を強制しないこと。ルキアの時間を
制限しないこと。」

『それなら・・・それなら、私は私の意志で貴女の傍にいるんです。貴女が決めた道が、私の望む道ですよ。』

全てを見透かして、貴女はいつだってそういう。

その言葉に思い知るの。私がどれだけ幼く小さく、弱い生き物なのか。

「ルキアはここに残ってもいいんだよ。ルキアは向こうに戻ってもいいんだよ？」

空を飛んでいても・・・いいんだよ？」

これから進む道はきつと、辛く険しい道なのだから。

貴女を連れて行きたくないの。きつとその白い肌は今よりずっと傷つくから。

そんな事になるくらいなら、ルキアにはここに残って欲しい。

ルキアには向こうに戻って欲しい。こんな風に穏やかな空を飛び続けていて欲しいの。

『本気でそんな事を？』

「え？」

『ここに残って、何をするんですか。向こうに戻って、貴女の帰りを待ち続けると？』

貴女を背に乗せずこの空を飛び続けるといいますか？』

貴女は森の奥深くで、その白い肌を土まみれにするほどその地から動かずに眠っていた。

そこに私が訪れて、ルキアは眼を開いた。

「私と出会いさえしなければ、ルキアはそんなにボロボロにならずに済んだのに・・・！」

自分でも身勝手な事を言っているのは分かってる。ただどね、新しい世界を知るほど、私はちっぽけになっていくの。

『運命の神ラスティを、コアは信じますか？』

あの時はまだ信じきる事はなかった。

だけど、お父さんと出会った時に思った。運命の神ラスティは本当にいるのだと。

「うん。」

『私とコアが出会ったのも、運命の神が出会わせたんですよ。』

私にとって、ルキアは特別なの。

大切に、大好きで、傷つけさせたくない。

『私は貴女の選んだ道を共に飛びたいんです。それを貴女に駄目だと強制することはできない、そうでしょう？』

「ルキア・・・」

貴女はいつだってそう言っつて、私について来てくれる。

あの森の奥で眠っているほうが、ルキアにとっては幸せだったはずなのに。

ただ目を閉じて、傷つくことなく、風を感じて眠っていられたのに。

『貴女についていくもいかなないも私の自由ですよ。だから、私は私の意志で貴女について行く。』

「ありがとう・・・ルキア。」

私はルキアがいなければ、何も出来ない弱い人間。
新しい世界を見るたびにちっぽけになる私に、力を貸してくれるルキア。

ルキアがいてくれるだけで、私は少しでも強くなれる気がする。

「王家の血を継ぐ者が南にいるって聞いたの。私はその人を見つけ
て王位につかせたい。」

一刻も早く、この国に平和を取り戻したいと思う。」

私はここにただ、送り込まれただけ。

だけど私はたくさんの人と出会ったでしょう？

ルアーにジェラス、フェウスさんやこの村の人々。

その出会いにはたくさんの意味があると知った。私がここに来たの
にもきつと、意味がある。

だから私は自分の出来ることを探して、ここに来た意味を見つける。

「さすが、我が主ですね。」

「主じゃなくて、パートナーだよ。私、ルキアのパートナーとして
恥じないマスターになりたい。」

「今でも充分ですよ。」

今はまだちっぽけな人間でしかないの。

「ルキアがいなければ、何もできないから」ルキアを欲している。
だけどね、そうじゃなくて。

ルキアがいなくても大丈夫だけど、「ルキアがいれば出来ないこと
なんてない。」

だから、ルキアに傍にいて欲しい。そう言えるマスターになりたい。

「・・・こんなマスターですが、ついて来てもらえますか。」

この空をどこまでも一緒に飛んでくれますか。
傷ついても、苦しくても、どれだけ遠い道のりでも、ルキアと空を
飛んで行きたい。

『もちろんです。』

朝の太陽がだんだんと昇り始め、薄いピンクだった空はだんだんと
青へと変わっていく。

うるこ雲は白く、空は青く、道は長く。この景色をずっと見ていた
い。

ルキアの背に乗って、この暖かな場所から、この景色を見た事をず
っと忘れない。

こうやって進み続けたい。忘れたくない景色を、思い出して、
振り返りながらも、私がここにいる意味を見つげるために進み続け
たい。

ルキアと一緒に。

第64話　ルキア

「ねえ、ルキア。」

久しぶりに背中にコアのいる、空はととても綺麗だった。そんな空を飛んでいると、コアが私の名前を呼んだ。

『何です？』

この声が何度も私を欲してくれて、その度に私はここに、コアの傍に存在する事を許されている気がして嬉しくて仕方なかった。

「ルキアは契約するときに、自由と真の絆を欲しがったよね。」

コアに出会うまで、こんな気持ちになるなんて思わなかった。

『はい。』

「いつもいつも思うの。私、ちゃんと与えられてる？」

何となく気づいてはいた。コアはもう、進む道を見つけて進むとしてるって。

だけど彼女は優しいから、私の事を考えてくれたんでしょう？
いつだって自分の事より、私の事を考えて、あの日の約束を守ろうとしてくれる。

『もう、進む道を見つけたんですね。』

「……」

あの日に約束してくれた。貴女は私に自由と真の絆を与えてくれるって。

マスターなんか信じてなかった私を、信じさせてくれたのは貴女だった。

“ルキアは唯のドラゴンです。・・・唯、色が白だけのドラゴンです。”

ハイドンさんの前で、コアがそう言ってくれた時思ったの。

ああ、コアがマスターでよかったって。

『ねえ、コア。貴女にとって、私に与える自由とは何？』

そんな貴女はいつだって私に命令なんかしなくて、いつも『お願い』だった。

そんなに気を使わなくていいのに、って思うくらいに、彼女は私に命令をしない。

ドラゴンに命令をしないマスターはきつと彼女くらいだろう。

それはきつと、私が自由を欲したから。

だけどコアは間違ってる。

私はいつだってコアのために、コアの傍にいるんじゃないのに。

私は私がコアの傍にいたいから、傍にいるのに。

「それは・・・ルキアの意思を強制しないこと。ルキアの間を制限しないこと。」

そうね、貴女はいつもそう。

いつだって私の意志を尊重して、考えて、自由だという。

『それなら・・・それなら、私は私の意志で貴女の傍にいます。貴女が決めた道が、私の望む道ですよ。』

貴女は知らないのよ、私がどうして貴女の傍にいるのか。

「ルキアはここに残ってもいいんだよ。ルキアは向こうに戻ってもいいんだよ？」
空を飛んでいても・・・いいんだよ？」

それは決して貴女に私が必要だからなんかじゃなく、私に貴女が必要だから。

『本気でそんな事を？』

「え？」

貴女が背にいない空は、こんなに綺麗じゃない。

貴女を初めて背に乗せて空を飛んだとき、母が言ったことが分かったの。

それなのに貴女は私が必要ないと、今更私を突き放すの。

私は貴女がいなければ、幻の白竜と化してしまう。

私は貴女がいるから、コアをマスターとして持つドラゴン・ルキアでいられる。

『ここに残って、何をするんですか。』

貴女のいないこの場所に残るなんて、何の意味もない。

『向こうに戻って、貴女の帰りを待ち続けると？』

傷つく貴女を守る事もできず、ただ遠いあの場所で帰りを待ってられない。

『貴女を背に乗せずこの空を飛び続けろというんですか？』

貴女が背にいない空なんて、二度と飛びたいなんて思わないの。空を飛ぶことの喜びを教えてくれたのは、貴女でしょう？

「私と出会いさえしなければ、ルキアはそんなにボロボロにならずに済んだのに・・・！」

そう、コアの心のどこかでずっと悔やむ心があった。

それは私と契約を結んだ事。けど、それは決して私に不満があるからじゃない。

なんて優しいマスターで、何て優しい少女なんだろう。

私が自分と出会う事で傷ついていると、悩み続けていたなんて。

『運命の神ラスティを、コアは信じますか？』

あの日、私が貴女と出会えたのは運命の神のおかげだと思う。

神は決して意味のない出会いにはもたらさない。

土まみれで、白くもない私の前に現れて貴女は言った。

“・・・あなたが、私を呼んでたの？”

きっと私は心のどこかでコアを、真のマスターを呼んでいた。その声を運命の神はちゃんと彼女に届けてくれた。

「うん。」

『私とコアが出会ったのも、運命の神が出会わせたんですよ。』

母は死ぬ前に私に言った。

“何を引き換えにしても、彼に出会えてよかった。”

マスターなんて、きつと最悪な生き物なのだと思いつけていた。

母は何度も傷つき、何度も空を飛べなくなった。白く美しいその翼

を赤く染める事も、黒く汚す事もあった。

「・・・」

それでも最後の最後まで、あの空に彼との思いをはせていた。今なら、その気持ちが痛いほどに分かる。

どれだけ傷ついても、苦しい思いをしても、この白い翼が赤く黒く染まっても、私は空を飛びたい。

この背にコアを乗せて。

『私は貴女の選んだ道を共に飛びたいんです。それを貴女に駄目だと強制することはできない、そうでしょうか？』

「ルキア・・・」

私が死ぬとき、私はきつと空を見て言うに違いない。

“何を引き換えにしても、コアに出会えてよかった。”と。そう思えるようになったのは、コアと出会ったから。

『貴女についていくもいかないも私の自由ですよね。だから、私の意志で貴女について行く。』

「ありがとう・・・ルキア。」

傍にいたい。私が私であるために。貴女が『ルキア』与えてくれた名を、呼ばれ続けるために。

「王家の血を継ぐ者が南にいるって聞いたの。私はその人を見つけて王位につかせたい。」

一刻も早く、この国に平和を取り戻したいと思う。」

貴女に怖い物はない、だから私は何も怖くない。

『さすが、我が主ですね。』

「主じゃなくて、パートナーだよ。私、ルキアのパートナーとして
恥じないマスターになりたい。」

初めて出会った時から、貴女は私にそういつてくれた。貴方のくれたあの言葉を忘れない。

“マスターになるならその時は、ドラゴンはルキアじゃないと嫌なの。”

逃れられないほど強く射るように私を見たあの目は、今でも真っ直ぐ私を見てくれている。

『今でも充分ですよ。』

この人と、空を飛びたい。

あの日、私はそう思った。その気持ちは今もずっと変わらず、強くなっている。

「・・・こんなマスターですが、ついて来てもらえますか。」

もう自由も何もいらさない。私がずっと欲していたものは、今、充分すぎるほど手の中に。

絆は気づけばそこにある。そうでしょう？

『もちろんです。』

貴女が私のマスターでよかった。貴女のドラゴンになれてよかった。貴女を背に乗せて、こんな空を飛べる事が今とても幸せなんですよ。

朝焼けの空は広く広がっていて、うろこ雲が静かに漂っている。
そして道はどこまでも長く長く続いている。
そんな空を、貴女といつまでも飛んでいきたいの。

お母さん？私は空を飛んだよ。この背にマスターを乗せて。
どれだけ傷ついても、それでも飛ぶ事を諦めたくない。
コアの隣で、飛び続けたいと思うの。これからもずっと。

第65話　：ルアー

「それじゃあ、行くな。」

「ああ、気をつけて。」

ここに来てからもう3週間が経とうとしていた。

その日の朝、俺達は彼女の口によって驚くべき事を聞かされた。

“王家の血を継ぐ者が南にいるかもしれないんだって。

私ね、その人を訪ねようと思う。それで、その人を王座につかせるために、戦おうと思うの。”

その傍らには、白いドラゴンがもちろん自分も決意は同じだ、と言う目をしてこっちを見ていた。

「フェウスさん。俺の名前は、ジェラスです。」

隣でジェラスが名を名乗った。

驚いたのもう1つ。この男の人、フェウスさんがコアのお父さんだったのだ。

「ジェラス君・・・いい名だな。どうかコアをよろしく頼む。」

「はい。」

コアはまだ15歳なのに、母はなくなり、父の行方も知らなかったなんて、俺には考えられなかった。

俺には父も母も弟さえもいて、一応貴族の端くれだったため、金に困ることもなく高等魔術師になれた。

それはコアに比べたら、何と楽な生活だろうと自分でも思えてしまっただけだ。

「君の名前は？」

フェウスさんが俺を見て言った。

俺は急いで背をピシッと伸ばして、返事をする。

「ル、ルアーです!!」

「ルルア・君？」

「いえ、ルアーです。」

「ああ、ルアー君。綺麗な響きだな。君も、あの子を守ってくれ。」

「はい。」

15の少女は自分で王家の血筋にある者を求めて、南へ行くと決めた。

初めて会う父に笑顔を向けて、自らその父の元を離れようとする。

それがどれだけ辛い事なのか、考えれば分からないわけではない。

この世界にたった一人の親なのに、自ら離れていく道に進むなんて

考えられないほど辛いだらう。

それでも彼女は自分で道を見つけて、進むと決めた。

「私はそんなに弱くないよ、ルキアがいるからね。」

その真つ直ぐな目に映るのは、愛する人で、恐怖や不安は一寸も見えない。

光を映し、揺らぐことなく世界を映すドラゴンマスターの眼だった。

「体に気をつけて。」

「お父さんも。」

「3人とも、無事で会おう。」

「「「はい。」」」

その言葉を最後に、コアは一番に地から足を離した。白いドラゴンの背に乗ると、まるで15だとは思えないほど凜々しい横顔が目映る。

その後が続いてジェラスが箒で空へと舞う。

俺も箒を出して後を追おうとすると、フェウスさんが俺の腕を掴んだ。

「ルアー君、これをあの子に渡してやってくれ。」

そう言っただけで俺の手に何かを握らせる。

その手を開いてそれが何かを確認すると、フェウスさんは言った。

「こんな事を頼むのは間違っていると百も承知だ。しかし、聴いて欲しい。

ルアー君。どうかあの子を助けてやってくれ。私は傍にいてやることができない。だからどうか・・・」

どんな理由であれ、この人はコアを捨てて空を選んだ人だ。

そんな人が今さら、コアを助けてくれなどと言う権限はない。

もしも、コアのあの顔を見ていなければ俺はきっとそう言ったに違いない。

彼女の顔を見た瞬間に、思ったんだ。

コアは離れていてもこの人を父と思い、愛されていると感じ、愛しているのだと。

だからこの人はきっと本当にコアのことを愛していたんだと、俺は思った。

「分かりました。必ず、助けます。守ります。そう、約束します。」
「・・・ありがとう。」

コアの目はきつとこの人譲りだ。コアの母さんを見た事はないが、きつとそう。

真っ直ぐで揺るがない、強い意志を持つマスターの眼。

「置いていかれるんで、もう行きますねっ！」

「ああ。・・・気をつけて。」

「はい。」

それはいつもとなんら変わらない、日が暑く照りつける昼下がり。

俺は2人を追って空を飛んだ。俺を待っていた二人は、俺を見ると優しく微笑んだ。

ジェラスは睨みつけてきたが。

その横でコアは可愛い笑顔を向けてくる。この笑顔を見ていると、ただの子供にしか思えないのに。

その背に背負うものは重く大きなものだったんだと思った。

父も母もないのに、それさえ感じさせないほど明るく笑う彼女は俺の年下だとは思えない。

「コア！」

「何っ？」

「これ、預かってきた。」

「え？」

風の合間を通り抜けて、俺の声に彼女が反応するとドラゴンの背から手を伸ばしてきた。

その手にそつと手渡されたネックレスを握らせる。

金のネックレスには、指輪が3つ。ワンピースと一緒に身に着けていたネックレスだった。

「それ何なんだ？」

「え？これ？これね、私の宝物。」
「へえ〜。」

俺の質問に笑って答えるコアを見て、横からジェラスが声を上げた。

「3つの指輪には意味があるのか。」

暗いその声にも彼女は優しく微笑んで、1つずつ指輪を見ながら答えた。

「この一番小さいのが私の指輪。この中くらいのがお母さん。この一番大きなのがお父さん。」

お父さんの指輪の内側にはね、文字が彫ってあるの。」

「文字？」

「『 You are our world core . 』」

その笑顔は夏の太陽さえ跳ね返すほどに、輝いていて俺は思わず目を閉じそうになった。

彼女と出会ってから俺は少しだけ、ほんの少しだけ前とは変わった気がする。

どうでもいいとか、親なんか糞くらいだとか、こんな世界に興味はないとか、そんな風に思っていたことが
少しだけ変わった気がする。

「『 私達の世界の中心は貴女。』って意味なの。」

その指輪を愛おしそうに見つめるその目は、15歳の少女よりもずっと幼い少女の眼だった。

さっきの凜々しい横顔も、フワリと和らぐ子供に見える。

そう、出会ったのがコアだったから。

俺が出会ったのがコアだったから、俺はほんの少し変わったんだ。

「伝説の・・・マスター・・・か。」

貴族の中で生きてきた俺にとっては、コアとの出会いはとてつもなく大きなものだった。

そしてそれはきっと、ジェラスにとっても同じなんだろう。

「何か言った？」

「いや、何も。」

そう？と微笑む少女は、白竜をその小さな手で優しくなでた。

白竜はその手に気持ちよさそうな声を上げる。

幻の白竜が、コアと誓った理由がわかる気がする。

ドラゴンは何千年も生きることが出来るが、主を持つとその主の寿命と同じかそれ以下にしか生きられなくなる。

それは俺でも知っているくらい有名なドラゴン契約の中の1つで、主が死ぬときドラゴンは死ぬという契約。

しかしマスターはドラゴンが死んでも、死ぬ事はない。

それは俺にとって見れば別に普通なのだが、きっと彼女達にとっては違うんだろう、と思う。

「ドラゴンマスターになればよかった。」

それは自然に零れるように出た言葉だった。

コアを見ていると、そう思ってしまう。ドラゴンマスターを目指せばよかったと。

俺がともに空を飛ぶのは無機物な筈。しかし、彼女は息をして言葉を伝えて、共に笑うドラゴンと空を飛ぶ。

それがとても幸せそうに見えてならないんだ。

「俺もそう思う。」

そう言ったのは隣で相変わらぬの仏頂面をしたジェラスだった。しかしその眼は確かに2人を羨むような目だった。

ドラゴンは、自分の寿命を削ってまでマスターと契約を結ぶ。その理由は全く分からない。何千年と生きられるのに、人間のたった少しの寿命に合わせて死ぬんだから。それを分かっていて契約するほど、得たいものなのだろうか。

「まあ、そうじゃないドラゴンもいるんだろうけど。」

「ん？何の事だ？」

俺の独り言にジェラスが不思議そうに聞いてくる。遠くを飛ぶコア達には、俺達の声は聞えない。

「いや、なんでもない。」

卵で買われたドラゴンは、有無を言わさず契約することになる。それも1つの運命だといえ、運命なのだろうけど。もしもドラゴンマスターになれば、俺は俺だけのドラゴンと契約したい。

コアとあの白竜のようだ。

第66話　：コア

「南って言うても、広いだろ？どの村にいるんだ？」

空を飛んで3時間、鬱蒼と木が生い茂る森でルキアを休ませていると、ルアーが聞いてきた。

私はあの村の長老だった人に聞いた。
もしかしたら、王家の血を継ぐ者がいるのかもしれない。

「本当ですかっ!？」

「いや、事実かどうかは私も知らぬ。」

たった小さな光が一瞬、見えた気がした。

「その方に王座についてもらえれば・・・この争いは終わりますか!？」

「・・・あなた、よそ者じゃろう?」

「え?あ・・・はい。派遣されてきました。」

この人達にとって、私やルアーはジェラスはよそ者でしかない。
逃げようと思えば逃げられるし、戻る場所は別にある。
ここに置いていって後悔する物はないかもしれない。

「なら、なして・・・そんな嬉しげな顔をする。」

その質問は私にとって愚問だった。

「私ができることが、あるかもしれないからです。」

「・・・おぬしにできる事、とな。」

「これでもドラゴンマスターの端くれなんですよ？貴女はもう足に怪我をして動けない。」

「けど、私は動ける。歩く事も、空を飛ぶ事もできる。だから、私が代わりに王を迎えに行きます。」

たった一瞬見えた光は、今にも消えそうなほど弱弱しかった、でもそれは確かに光だったから。
私が追う光はあったのだ。

「あんたなら、少しはましな王になれそうじゃの。」

「えっ！？あははっ、面白い事いいますねっ。私が王だなんて。」

きつとこの国を救う事なんかできない。それどころか、もつと酷い戦争が起こってしまう。

王につくのは、王の血を継ぐ者だからこそ、この争いは終わるんです。」

誰も反対することのできない、王家の血筋にある者だから、この戦争を終わらせられる。

有無を言わず、『私が王だ。』そう言うだけで、2家はおとなしくなる。

そうできるのは、王家の血筋にある者のみ。

「南の、南のどの村にその方は？」

「シユランじゃよ。小さな村でな。わしも一度だけ訪れた事がある。春と秋には収穫祭があつてな、小さい村にたくさんの方が集まる。

それはそれは賑やかな村だった。」

「シユラン・・・」

「だが、おぬし・・・ドラゴンマスターだと言うとつたの。」

「え？」

長老が賑やかだった、というその村も今ではきつと貧しい人が幾人か残る痩せ細った村に違いない。
きつとこのように、人々は苦しみ病んでいる。

「あの村、今はどうか知らぬが、ドラゴンをここぞとばかりに嫌う者たちでな。

活気があった昔は、ドラゴンマスターはドラゴンを連れていくことなんぞ、到底できんかった。

それももう、昔の事じゃがな。」

ドラゴンを嫌う村・・・？

そんな事があるなんて、私は驚いて思わず黙り込んでしまった。

長老はそんな私に優しく笑いかけると、その痩せ細ってシワシワになった手を私の頭に乗せた。

「わしは好きじゃよ、ドラゴン。おぬしのドラゴンは、あの白い奴だろう？」

「・・・はい。」

「綺麗じゃあないか。自信をお持ち。・・・この国が平和になったら、空を飛ぶ姿を見せておくれ。」

シワがたくさんあるその顔の中の、ほんの小さなその目が優しく微笑んだ。

その土まみれの手がとても愛おしく感じられた。

「はい！」

「南の村・・・シュラン。」

「初めて聞くな。」

私の言葉にルアーは簡単に返事を返した。

ルキアは気持ちよさそうに、小さな川から流れ落ちてくる水で出来た滝に体を寄せている。

こんなにも綺麗なドラゴンを、嫌う人がいるなんて。それは今でも悲しい。

「シュランといえば・・・赤竜に滅ぼされかけたとか、何とか。」

ぼそつとそう呟いたのはジェラスだった。

「えっ！？ そうなの？・・・その話、聞きたい。」

「お前、知っていたのか。あの村が・・・」

「ドラゴンを嫌っていること？・・・長老がお話ししてくれたの。」

それでも、私はやっぱり迎えに行かなくちゃならない。そう思った。だからルキアにも聞いたんだ。ついて来なくてもいいんだよって。ルキアはもちろん首を横に振って、傍にいと云ってくれたけど。

「それでも・・・まあ、それはいい。お前が決めた事だ。」

「うん。あの、それで・・・その赤竜の話、聞きたいの。」

「ああ。これも50年以上昔の事だ。あのシュランの村に、1人のドラゴンマスターと赤いドラゴンが現れた。

そして赤竜は炎を吐いて村を滅ぼそうとした。しかし喜々としてその村は救われた、何者かの手によって。

それ以来、あの村の者は皆竜を恐れ、ドラゴンを嫌い、ドラゴンマ

スターでさえも、軽蔑したとか。」

なんて酷いことだろう。そんなことをするために、ドラゴンと空を飛ぶなんて。

そんなことのために、ドラゴンはマスターと契約したはずじゃないのに。

きっとドラゴンは、心を痛めていたに違いない。

「最低だよ……、そんなの。」

私が小さく呟くと、水滴がついた白い肌が近くに寄ってきた。

『どうかしたんですか?』

その声には思わず涙の溜まる目を、パツと見せてしまった。その目にルキアは驚いたのか、声を上げる。

『コア?……どうかしたの?』

こんなに優しいドラゴンに、人に痛みを与えさせるなんて。

ドラゴンは優しく穏やかで平和を好む生き物。

争いごとは嫌いだし、本当は汚れた血を見るだけで弱ってしまうほどに純粋な生き物なのに。

「何でもないの。」

でも、結局私も同じなんだ。

戦いになることを分かっていて、ルキアを連れて行くのだから。

ルキアは私を守るために、自分や、他の人が傷つくことを恐れないだろう。

この間のように、私を庇うように敵から守って攻撃だつて恐れずにするんだろっ。

けど、私はそんな事のためにルキアと一緒にいたくないのに。

「私はルキアを・・・人と戦うための道具だと・・・思ってるのかな・・・？」

小さく零れ出た言葉にルアーとジェラスは驚きの声を隠す事はできずに声を漏らし、その表情も驚いていた。

私だつて同じじゃないのか、そんな疑問が心の中で何度も浮かぶ。救いたいのだと言う言い訳をして、結局はルキアに人を傷つけさせる。

それが私に出来ることのなの？

『バカですね、コアは。』

立った一言呆れたような声が聞えた。ルアーとジェラスはルキアを驚いた顔で見ている。

私はその言葉にちつとも驚かなかつた。ルキアなら、そんな事をいつて優しく笑つてくれるような気がしていたから。

『分かっているんでしょう？貴女が何を言っても思つても、私はついていくと。』

「・・・ルキア。」

そう、心の中では分かっていた。こんな私だと知つて尚、ルキアは私の傍にいてくれる。

こんなに無力で、幼くて、馬鹿な私の傍にいたいと言ってくれる。

『貴女がそんな人じゃないくらい、私は知ってます。貴女は私の事

を道具だなんて思っていない。』

「・・・」

ルキアはそう自信満々に言い切った。根拠もないのに、どこからその自信は湧いてくるのか、すごく不思議だ。その目には一寸の不安さえも見えない。

『ルアーさんとジェラスさんは、コアが本当に私を道具だと思っていると、お考えですか？』

一瞬驚いた顔をしていた2人は、同時に軽く笑った。それからジェラスはルキアを見て、続けた。

「まさか。」

その言葉にルアーは2・3首を横に振ってこっちに笑顔を向ける。

「そんな事を考えてんのかって、驚いただけだ。」

ねえ、どうして誰も疑わないの。私は醜い人間なのに。

あの赤竜のマスターと何も変わりはないのに。

『私は貴女が望むのなら、貴女の剣にでも盾にでもなりましょう。だけど貴女は私を私として欲してくれる。貴女が私を欲するのは剣や盾が欲しいからじゃない。』

そうでしょう？とルキアはその白い頬を私の頬に軽く寄せた。

ざらざらとしたその肌が、私から離れると青い透き通った目が私を見つめる。

そうだよ。私はルキアに傍にいて欲しい。大切なパートナーとして。

「ルキア・・・」

『けどもしも貴女が私を道具だと思っけていても、それはそれでいいんですよ。』

「え？」

『貴女は私に空を飛ぶ幸せを教えてくれた。だから貴女の道具としてでも、私は貴女の傍にいたいと思っけています。』

空を教えてくれた貴女の力になれるのなら、道具でもいい。』

私は貴女を傷つける者なのに。貴女はそれでも傍にいてくれるというの？

私が出会った貴女は空を知らなかったんじゃない、知ろうとしていなかっただけ。

空なんて、私が教えたわけじゃない。

ルキアが私に教えてくれたことじゃない。

「空を教えたのは私じゃない。貴女が私に空を教えてくれた。」

『いいえ、貴女です。確かに貴女に空を教えたのは私です。』

けど、空を飛ぶ幸せを教えてくれたのは、コア、貴女ですよ。』

あの日、雨にぬれた貴女はその体から土を落とす、白竜の姿を見せた。

その白竜は私にとって、唯のドラゴンでしかなくて、私は驚く事もなくその背に乗っていた。

雨にぬれた体を乾かすように風が吹きぬけていって、私は初めて空を知った。

あの時、ルキアは何を思っけていたのかな。

『もう行きましよう。』

「私、ルキアの盾になれるように・・・頑張るから。ルキアの剣に

なつて盾になつて・・・貴女の役に立てるように。」
『・・・今でも充分です。何度も言いましたよ。』

優しい目が青くこちらを覗く。

その様子をルアーとジェラスもそつと眺めていた。

私は何て幸せなんだろう。今まで幾度となく感じてきたその感情が、涙になつて溢れそうだった。

もう、大丈夫。

“わしは好きじゃよ、ドラゴン。” “綺麗じゃあないか。自身をお持ち。”

そんな言葉がもう一度、優しく耳の奥で響いた。

もう、大丈夫。そう思えた。

どれだけ嫌いだと言われても、どれだけ憎む目を向けられても、私は胸を張つていう。

ドラゴンはとても美しい生き物だ、と。

ルキアがそうであるように、ドラゴンは優しく美しい生き物なのだ、と。

第67話　：コア

「見えてきた。あれだぜ、きっと。」

「南の村シユラン。」

2人は先頭をきって空を飛んでいた。

その後をゆっくりと飛ぶルキアの頭の方に小さな家屋が見えた。

「家があるっ。」

「本当だな！」

「バンセルほど酷くはない、か。」

家屋の欠片しかないバンセルに比べると、少しは家が建っていて、畑も耕されている。

ここに、次期王となる人がいるのだろうか。

「降りよう、ルキア。」

少し自分の声が震えたのを感じた。

その声にルキアは気づいたのか、小さく呻鳴き声を発した。

『平気ですよ、心配しないで。』

「うん。」

胸を張って、ドラゴンは優しい生き物だといえる。

ルキアは特に、優しく穏やかで美しいのだと。けれどやっぱり不安は耐えない。

もしもルキアが傷つけば、私は何もせずにそれを見てはられない。

「つと。」

「ここか。」

「大きいね。」

その地に下りると村の門らしき場所に、2・3人人が集まった。

その中の茶色の髪をポニーテールにまとめて結っている凛々しい女の人がこつちを見ると近づいてきた。

その女の人にルアーとジェラスは警戒心を向ける。

「あんだ、ドラゴンマスターだろ？」

綺麗な顔には似合わない、男っぽい口調で彼女は言った。

その言葉に2人は警戒を解いて、不思議そうに見ていた。

私は何故だか不思議とこの人を警戒することなく、自分の領域に受け入れている。

「はい。」

この村の人は、ドラゴンとマスターを嫌う。彼女もそうなのだろうか。

そう疑ったとき、彼女はそっと私の傍に来て言った。

「なら早くこの村から離れた方がいい。」

強い目が私にそう訴える。

その目から逃れる事ができず、私は唯見つめ返していた。

「どういふことだ。」

そんな私達の間でジェラスの声が遮る。

その声に女の人はジェラスを睨みつけるようにして言った。

「言葉の通りさ。あんた達は魔術師だね。けど、この子はドラゴンマスターだ。」

知らないなら教えてやるよ。この村では「

「ドラゴンとマスターは嫌われている、……ですよね？」

私の言葉に女の人はバツと驚いた顔をして振り返った。

綺麗な茶色の髪が風にゆれ、日に照らされている。

「なんだ、知っているんじゃないか。……なら、早く立ち去れ。」

「貴女はこの人？」

「いや、私はここに配属された魔術師だ。番号は『T681』。」

あの収集のときに来ていた人だと知り、私達は一気にため息をついた。

ルキアの鋭い目も少し和らいで、その尾をしなやかに揺らした。

「私の名前はコアです。番号は『D137』。」

私がそう名乗ると女の人はもっと驚いた顔をして、目を大きく開いた。

「お前みたいな子供がか！？まさか！そんなわけない。しかも女なのに。」

自分も女である事を忘れていたかのようなその発言に、心が少し妬けたような気がして言い返す。

「むっ。私、これでもドラゴンマスターなんですよ。」

「見れば分かる。お前の目はマスターの眼だからな。ならあの白竜はやはりお前のか？」

「はい。ルキアって言います。」

マスターの眼だ、と言った彼女は『ほお』と呟いてルキアを見た。その目はゆつくりとルキアを見つめている。

「やはり……幻と言われるだけある。いやあ、死ぬ前に白竜が見られて嬉しい限りだ。」

ははっ、と笑うその笑顔がとても輝いて見えた。たった少しのその言葉で、私はこの女の人が大好きになった。

「しかし、早く立ち去れ。」

その笑顔はすぐにキリッと、厳しい顔に戻る。

その時、彼女の後ろのほうから黒い服を着た小さな少年が現れた。

「まあ、まあ、トレス。村の人間に見つからなければ平気なんじゃない？」

そちらさんは、別に僕達のことをどうこうするつもりもないみたいだしさ。」

「ブレイズ！！」

私と身長の変わらないくらいの男の子は私を見て、にっこりと微笑むと女の人に向かってそういった。

女の方は彼の声に急いで振り向き、ブレイズと呼ぶ。

「……ブレイズ。」

すると私の少し後ろから低い声その名を復呼した。

その声に私が振り返ると、黒い服を着たジェラスの声だと分かる。

「お前、ジェラス?!」

「やはりお前か、ブレイズ。」

「何でこんな所に!？」

ブレイズと呼ばれる少年は嬉しそうに笑いながら、ジェラスに駆け寄っていく。

ジェラスはその冷たい目を少しだけ暖かくして、口元を緩めた。

それは一般的に微笑むという行動にとれるもので、そんなものを見た私とルアーはポカン鳥になっている。

「そうか、お前は南に派遣されたんだつたな。」

「そういうジェラスは確か東のバンセルだろ!? 何たってこんな所にいるんだよ!」

黒い服を着た2人が話しているだけで、悪の組織を感じさせる。

そんな2人を唯呆然と眺めている私達と違い、あの女の人は勢いよく声を上げた。

「おい、ブレイズ!! その男は誰だ?」

「ああ、こいつは俺の故郷の馴染み友だ。幼なじみのな?」

「・・・的なの?」 じゃなく、幼なじみ。腐れ縁だ。」

「あっ、ひでえ!! 俺は腐れ縁じゃなく、運命で繋がった相手だと思ってるのに。」

「“運命”・・・気持ち悪い事を言うな、このチビ術師が。」

「なっ!! これでも成長してんだよ! 何だよ、自分がちよっとデカイからって。」

「ちよっとじゃなく、かなり、だが?」

初めて見るそのジェラスの張り合う姿に、私は思わず声を出して笑ってしまった。

その横でルアーも大声を上げて、お腹を抱えながら笑っていた。

その様子にジェラスは少し頬を赤らめて、咳払いをしてその少年をにらみつけた。

それがまたおかしくてしばらく笑い声は止まらなかった。

「あははっ・・・も・無理い！！」

「あーっ腹いてえっ！！」

「・・・・・・・・・・。」

そう、一度ジェラスもこんな風と一緒に大笑いした事があるのを思い出した。

あんな冷たそうな顔をしている彼も、やっぱり人間である事をふと失礼ながらに思った。

「はあく、笑ったあ。」

「ああ・・・腹いて・・・。」

「笑いすぎだ。」

「で、話戻していいか。」

ようやく笑い声が収まった頃、女の人は言葉を発した。

その言葉に私達は急いで口をつぐんで、顔を引き締めた。

「ブレイズ、この男は誰だ。」

「ああ、だからこいつは俺の幼なじみの魔術師、ジェラスだ。」

「そっちは。」

「こっちは、俺と一緒にここに配属された魔術師トレス。」

「そっちの2人は何だ？」

3人の紹介が終わると私のほうをあの鋭い目が見る。
その目にルアーは答えた。

「俺はコアとジェラスと一緒に東の村バンセルに配属された魔術師ルアー。」

一通りの自己紹介が終わると、トレスさんが仕切りなおすように言った。

「コア、お前は帰れ。」

冷たく私だけに届けられたその言葉に体が凍るように冷たくなった。

「おい、トレス。」

「ここはドラゴンマスターを受け入れたりしない。お前は帰るんだ。自分の持ち場を離れて、それでもお前はマスターか。」

そう。私は自分のすべき事から逃れて、こんな所にいる。

あの場所を父に預けてここに来る事が意味する事なんて、分かっていた。

「私はただじつと自分の場所を守るためだけに、ここに来たんじゃない。」

私の言葉は真っ直ぐに、トレスさんに届いただろうか。

この気持ちごと届けばいいのに。言葉とはなんて厄介なものなんだろう。

「軍長さんも、言ってたじゃない。この国を救ってくれて。」

私は・・・、私はただじつとこの戦争が終わるのを待っているだけなんてできない。」

「偉そうに。じゃあ、お前等が配属された村は誰が守る！
無力な民をほったらかして、その何がこの国を救うだ！！」

確かに、トレスさんの言っていることは当たっている。

無力な民のために配属された私達、魔術師やドラゴンマスターが民を見捨てるなんてもつてのほか。

だけど私は、見捨てたわけじゃない。

無力な民のためにできることは、守る事だけじゃないとそう思った。

「ドラゴンマスターが1人・・・守ってくれています。」

「配属者たった一人で何ができる！？」

「配属者ではなくて、ずっとこの地で1人で守り続けていた・・・」

私の父だ、と言おうとすると別の方向から声が漏れた。

「まさか、紺碧のドラゴンを従えるマスターかっ？」

そう嬉しそうな声を上げたのは、ブレイズさんだった。

その言葉に私がコクンと頷くと、彼はもっと嬉しそうな顔をして見せた。

「15年前、世界から消えた、コントゼフィールの天才マスターかもしれない、と言われている人だよ！！」

トレス、知らないのか！？」

「私は魔術師だ、マスターには何の興味もない。」

「なあ、その人の名前、何ていうんだ！？」

その目からは希望が満ちた目を見せている。

彼は魔術師なのに、そんなにもドラゴンマスターに興味を抱いていた。

それはとても珍しい事で、ルアーやジェラス、トレスさんもそうであるように、たいていの魔術師はマスターに全く興味がない。

そのためその知識もとても薄く、ドラゴン契約の内容も全くと言っていいほど知らないのだろう。

そしてまた、彼も魔術師な筈なのに、目の輝きはまるで憧れのマスターを指す者の目をしている。

「フェウス。」

そう、私はお父さんの事を何も知らないんだと思い知った。

「やっぱり！！！！世界一の場所を捨てて姿を消したマスターなんだ！コア、お前なら知っているだろ！？」

マスターなんだから、知らない筈がない。そう言いたげに彼は私の目を見る。

しかし、私の答えはノーだ。

魔術師の彼が知っている父のことを、マスターでなおかつ娘である私が何も知らない。

「ごめん、知らない。」

「何でだよ！？この地では紺碧のマスターとかって呼ばれてんだ！そのドラゴンの牙には、主のフェウスという名が刻まれてるんだ！」

それでも興奮は収まらないのか、彼は言い続ける。

その牙にある主の名は、死ぬまでドラゴンとの契約を打ち切る事はないと誓った証として刻まれるものだ。

その言葉に私も驚いた。ドラゴンの牙にその主の名が刻まれている

ということは、

そのマスターは永久呪文を扱えるくらいの高等マスターだからだ。高等マスターなんてこの世界には滅多にいない。きっと学校ではリース先生くらいであろう。

「それがどうした。」

「トレス、それが意味するのはそこらの高等魔術師を50人くらい集めても、全く歯が立たないっつーことだよ！」

「・・・高等魔術師50人!？」

トレスさんもその言葉にようやく驚きを見せた。

「高等魔術師50人つつたら・・・魔術師委員会の奴等だって張り合えるかどうかわからないくらいだぞ!？」

「そうだよ!そんなマスターがこの地の村を同時に守る事くらい余裕だよ。」

お父さんはそんなに凄い人だとは知らずに、ここに来た事が少しだけ恥ずかしかった。

いや、恥ずかしいというよりは悔しかった。

お父さんの事を何も知らないまま、こんな所にきてしまった私はもつとお父さんとたくさん話をする事もできたのに。

それを選ばず、私は王家の血を継ぐものを探す事を選んだ。

「私達はこの村に、王家の血を継ぐ者がいるというのを聞いて迎えに来たんです。」

ただ今すべき事は、悔やむ事じゃない。そう思うと私の口から勝手にそんな言葉が漏れた。

私が今すべき事は一刻も早く王家の人を見つけて、その人を王座に

就かせる事。

そしてこの国を平和にして、お父さんと一緒に、お母さんに会いに行くこと。

もう悔やんでいられる時間なんてないんだ。

トレスさんに駄目だと言われても、帰れと言われても、それでも私は進まなくちゃならない。

それは私が選んだ道だから。

今悔やんでちゃだめなの。悔やむのなら、明日にしよう。

明日になったら明後日に、明後日になったらその次に、そうしていつか悔やむ事さえ忘れる日が来る事を。

それまで私は、今できる自分の選んだ道を進み続けよう。

第68話　：トレス

『私達はここの村に、王家の血を継ぐ者がいるというのを聞いて迎えに来たんです。』

その幼い少女の目はあまりにも真っ直ぐすぎて、私はその目から逃れる事ができなかった。

「迎えに？」

ブレイズが私の代わりにとも言つかのように、彼女に問う。

その言葉に彼女は一度頷いて、はっきりと答えた。

「事実かどうかもわからないけど、もしかしたらここに王家の血筋にある者がいるかもしれない。」

「こんな村に？」

こんな痩せ細った村に、次期王になれる王座に座る権利のあるものなんているはずがない。

もしいたとしても、どうやってそれを見つけるんだ。

『王の子供は誰ですか』と徴集して聞くのか。そこで誰が『はい』と名乗り出る。

そんな奴きつと、1人としていないだろう。

「村がどんな状況であれ、関係ないの。この村にいるかもしれない。」

もしも見つけられたとして、その王家の者が王座に付く事を望むだろうか。

今や王座は唯の争いに掛けられた懸賞のようなもの。そんなものに、

危険を冒してまで座りたがるだろうか。

その答えは否だ。

「この村でその王家の者を探すつもりなんだ？」

「うん。」

いくら真っ直ぐで、いくら強い目をしているといえど、そんな可能性もない未来のためにここまで来たなんて、理解できない。

民を見捨ててないとしても、自分の持ち場から離れたという事は責任放棄とも言えかねない行為である。

そんな人間がこのアカンサスを救うために、王座に王家の者をつかせるなんて、寝言にしか聞えない。

「2人はそれに賛成したんだな？」

「まあね。」

「ああ。」

甘い魔術師たち。その甘い考えでどれだけの人が苦しむかも知らないで。

「帰れ。」

「トレス……。」

そして何よりも一番甘いのは、あの幼い少女の考えだ。

それを許すものよりも、そう考え進むものはいつだって甘い。

もつと苦しい事も厳しい事もあるのに、自分の行動が生む最悪の事態を考えもせず進むとする。

そして罪を償うだの、一生後悔して生きるだのぬかして、結局はた

だ悲惨な歴史として残るだけ。

「この村はお前たちを必要としていない。」

私がそういうと、ブレイズはもう私を止めることさえやめてしまった。

この村はこれ以上何も必要としていない。必要としないだけならまだいい。

この村は村人全員が私達派遣者まで、拒否するような目を向けてくるのだ。

それがドラゴンマスターなら、もっと酷い目にあうだろう。

「・・・トレスさんはとっても優しい人なんですね。」

私の言葉に帰ってきたのは、全く意味の分からないものだった。にっこりと笑ってそういうのは、やっぱり幼い少女。

その言葉に私は啞然として、何も言えないまま彼女を見た。すると彼女はそんな私に続けて言った。

「私は無責任で幼くてちっぽけで、とっても未熟なマスターです。だけど、私にもできることがあるんです。

歩けない人の代わりに歩いて平和を探し、力のない人の代わりに持つ力全てを使って平和にする。

この国の人は誰も、平和が来るのを待つてはいない。もう、待ち続けられるほどの力は残ってないの。

だから、私達は平和を作ってほしいと願う人のために、戦う。」

優しい目をしていた彼女の眼は、誰よりも強く私を見た。

こんな目を、私は今まで初めて見た気がする。この眼は知ってるんだ。

自分が責任放棄をしているという事も、もっと苦しく厳しいこともあるという事も、最悪の事態さえ。彼女はそれを知っていてもなお、進むと決めた。そんな目をしている。

“ドラゴンとマスターは嫌われている、……ですよね？”

傷つくことを恐れない、あの目はまるでそんな目だ。

傷ついても傷ついても進む事を諦めないで、避けられても嫌われても好きだといいい続ける、

そんなあの目が私は苦手なんだ。

「トレスさんは優しくすぎます。私、そこまで傷つきやすくって脆い女の子」じゃないですよ。」

優しいという意味はやっぱり分からない。

それでも彼女は自分は平気だと私に言うから、私はほんの少しだけ安心した。

「……知らないからな。どんな酷い事されても、助けてなんかやらないからな。」

「ありがとうございます！！」

どうしてお礼を言われるのか、全く理解できない。

同じ女だが、ここまで女と言う生き物を理解できなかったのは初めてだ。

女はたいいてい傷つくことを恐れ、それでも自分は欲しいもの手に入れたいと願う。

自分は何の努力もせず、傷つくことなく、それを手に入れたいと望む。

それが普通の女で、こいつは幼いがそんな事を全く考えさせない。幼ければ幼いほど、女とはそういうものだと思っていたのに、この子は違う。

「それじゃあ、俺等も手伝おう！なっ、トレス！」

理解しがたい事ばかりだ。

女なのに、子供なのに、全くそんな様子を見せないで。

そのうえ、私に向かって『優しい』などと言う。そんな事、初めて言われた。

全く読めない奴だった。理解する事も、どんな奴か読むことも、全く出来ない。

「知らん！手伝ったりしないからな。」

「トレスさん、私コアっていうんです。仲良くしてください。」

そんなことばかり考える私には、女友達なんてものはたったの一度もできたためしがない。

気が合わないのだ。もともと男勝りな性格が手伝って、どうにも女という生き物とは気が合わない。

「……コア……」

この子ならもしかしたら、女友達とかいうものになれるかもしれない。

そんな考えが一瞬浮かんですぐに消えた。

「名前だけは覚えていてやる。」

思ってもいないようなことが、口から出てきた。

本当はもつと笑って頷きたいのに、本当は優しくしたいのに。いつもそう考えながら口から勝手に気もない言葉が零れていく。女とは面倒な生き物で、嘘をよくつく。

正直とかそんなものと無縁な生き物だからか、そのままを言う人間がどうも嫌いらしい。

そんな女達と私が仲良く出来るはずがないのだ。

思ったことをそのまま言ってしまったたり、酷い子と言ってしまう私はいつも嫌われ者。

「いや・・・えつと・・・」

少し努力しても必ずぼろが出て、結局は1人になる。

なら、努力なんかしなくてもいいじゃないか。そう、自分でも思っているんだ。

それでも心のどこかで、何かを求めている。自分に足りない、その何かを探して努力する。

「嬉しいですつ。」

フワリと優しい優しい風が吹いた。

暖かくて、気持ちよくて、夏の昼なのに妙に涼しい風が、彼女の言葉に乗せて私に吹いてきた。

「え・・・?」

「うわー、珍しい子だな!このトレスに!」

なんて心地いいんだろう。

まるでシルクの布が頬を滑って、私を包むような感覚だった。

「私の名前はコア。貴女の名前はトレス。まずはそこから始めまし

よっ！」

伝説のドラゴンマスターだと言うことを、忘れていた。

傍らには少女に優しい眼差しを向ける白竜がいる。

もしも私がドラゴンなら、私は彼女に契約を誓っただろうか。

私が求める何かを、諦め続けながらも、心のどこかで捜し求めた何かを与えてくれる、この少女に。

第69話　：セルス

「おい！！セルス！！」

赤い絨毯が敷かれた広く大きな廊下いっばいに俺の名を呼ぶ声が響いた。

その声には俺は足を止め、俺の隣を歩くマティスとプレンティが続いて止まった。

「パテユグ。」

そんな俺達に駆け寄ってくるのは、大きな体格をした男、パテユグだった。

パテユグは俺の傍まで来ると、一刻も早く息を整えようとして、肩を大きく上下させてこっちを見ていた。

そんなパテユグの右手には、何か紙のようなものがぎゅっと握られている。

「あら、生徒会長さんじゃない。」

「おや、本当だ。今は生徒総会の準備で忙しいとお聞きしましたけど。」

プレンティの言葉に続けて、マティスが続けた。

その言葉にパテユグは二人に目を移して、にっこりと微笑むとようやく口を開いた。

「よお、お2人さん！仲がいいねえ！暇なら準備を手伝ってくれよ。」

その言葉に2人の顔がいつきに凍りつくのが分かった。
プレンティは急いで作った笑顔を見せて、パテユグに言う。

「遠慮するわ、お誘いありがとう。」

「・・・仲良くなんかないですけど。」

「それで？俺になんか用があつたんじゃ・・・？」

俺をそっちのけで2人と話をするパテユグの眼が、俺の声を聞いて
急いでこっちをみると、

その右手にもたれていた紙を俺の前一面に大きく広げると、言った。

「戻ってきたんだ！あの人、フェウスが！！」

その紙の一面には、若々しい男とドラゴンが白黒の写真で載せられ
ている。

もうずっと昔の写真だろうか、着ている服もどこか昔っぽい。

しかしその眼は遠くの空を真っ直ぐ見る強いマスターの眼だった。

「フェウス・・・あの世界のトップに立てるはずだった・・・？」

「ああ！！あのアカンサスの地で、ずっと村々を守っていたんだよ
！」

パツと退けられた紙の向こうには、それはそれは嬉しそうなパテユ
グの顔が見えた。

それから彼は自分の持っている紙に目を写すと、声を上げてその文
字を読んで聞かせた。

「『世界一の座を捨てた男、フェウス・サーノットが今世界に戻っ
てきた。』

その存在を確認したのは、彼が世界から姿を消したあの日から15

年近くたった、今日。

彼が姿を消した理由もついに明らかになった。

愛した人との子供を育てるために姿を消し、その子供に会うまであのアカンサスに身を隠してしようとしたのだ。」

だとさ！子供もいたなんて、初めて知った。もしかしたら、ここに戻ってくるかもしれないな！」

魔法新聞とはどこからそんな情報を得ているのか分からないが、嘘は一つもかかれない。

その新聞に記された文に、俺は頭の中でクルクルと回転させた。

「『アカンサス』」

それは唯の偶然かもしれない。そんな考えが頭を一瞬巡る。

それは唯のぐうぜんかもしれない。でも、もしかしたら……。そう思ったとき、中庭から吹き込む風にドラゴンの風を感じた。

「セルス！」

また俺の名を呼ぶ声がして、俺はその中庭に目を移す。

オレンジ色をした子供よりもすこし大きなドラゴンとエメラルドのドラゴンが中庭に足を下ろす。

オレンジのドラゴンの背からチラリと白いマントが見えて、俺は目を見開いた。

「あのお嬢ちゃん、こないだの……」

「リラ！……ロイ！」

「セルス！！私、クラスSへ入ったのよ。」

白いマントを羽織ったリラが笑って走ってくる。

その後ろからエメラルドのドラゴンの背を降りる白いマントがもう一人。

「おめでとう、リラ。コアがそれを聞いたら喜ぶだろうな。」
「だからコアに会いに行くのよ！」

そうだ、コア。彼女はあのアカンサスにいる。それが偶然か、必然か、彼女はフェウスさんのいるあの場所にいる。
戦争が起こり、何もできないで苦しんでいる民のために。

「どういうことだ!？」

「だから、僕とリラはコアの所に、アカンサスに行こうと思っているんだ。」

そう言ったのは、リラの後ろから歩いてくるロイ。ロイもまた、白いマントを羽織っている。

その2人の目は真っ直ぐに俺を映していた。

「アカンサスに・・・か。」

「ああ。」

「そう。もうただ待っているだけが、私にできる事じゃないでしょう?」

「向こうでコアを・・・探すのか。」

あの広い土地で、ただ白竜に乗る少女ひとりを探す。

それはとても危険で、大変で、意味のないことに思えた。

その時、となりでパテュグが口を挟んだ。

「お前も行って来いよ。」

俺がコアのことをずっと心配していたのを、パテユグは誰よりも知っていた。
アルに頼める時は、せめてアカンサスの現在状況を仕入れてもらい、その死者の中にドラゴンマスターが
若い少女のドラゴンマスターがいないことを願って過ごしている夜を。

「フェウスにも会いたかったんだろ？ちよっどいい機会じゃねーか。」

「パテユグ……」

「コアって、前に言ってた大切な子？」

「あんな楽しそうに話すくらい、その子のこと好きなんでしょう？」

パテユグに続けてマティスとプレンティが言った。

その微笑に、俺はただため息をつくだけ。

「セルスも行かない？」

ドクンとその言葉に心臓が大きく鳴った。

もうずっと見ていない彼女の姿をこの目に映したい、そう何度も願った。

毎日のように見ていたコアの笑顔が、心の中に焼きついて、俺はそれを思い出すことしか出来ない。

あの日はこうなる事なんて考えもしなかった。

彼女と出会ったあの日、俺はただこの少女に巻き込まれていく気がしていただけで。

自分から彼女を渦巻く面倒な事に突っ込む気にはなれなかった筈なのに。

「お前、何に悩んでんだ？」

パテユグの言葉にハッと気づく。
今すぐにも飛んで行きたいはずなのに、俺はどうしてこんなに悩んでいるんだ。
きつとアルもいいと言ってくれ。この場所に未練があるわけでもない。
まして、この命が惜しいだなんて思わない。
彼女のために使おうと決めたこの命だから、何も恐れはしない。
なら、どうして、俺は躊躇っているのだろうか。

「俺も行きますよ、セルス。」

そんな俺にそう言ったのは、いつも冷静に判断を下し、全く誤算を起こさない男マティスだった。
自分の損得以外でほとんど動かない彼が、自ら俺についてくるというた。

「な、なんであんたが行くのよ！」

「そう寂しがらないで下さいよ、プレンティ。」

いきなり付いてくるというマティスに、プレンティが怒りを見せて言った。その言葉に彼は優しく対応する。

その何だかわけの分からない状況に、俺とパテユグやリラ達はその2人をじつと見つめた。

2人はその視線も気にすることなく、二人の世界を描いている。
気が強い筈のプレンティの眼からはうっすらと涙が伺える。その涙に冷たい筈の男の眼が暖かく微笑む。

「私がついて行けないこと知って言ってるの!？」

「まあ、そうかもしれないね。」

わけの分からない状態のまま、ポカンとその2人を見ている俺の隣から声が出た。

「ちょ・・・お前等本当に・・・!?」

「パテユグさんはご冗談でああいう事を仰っていたのですか？」

パテユグはきつと、冗談で2人は仲がいいと冷やかしていただけだろう。

実際俺でさえ驚いてしまった。驚いている場合でない事も分かっていたが、驚かすにはいられない。

いつも喧嘩ばかりしていたふたりが、恋仲だったとは全く知らなかったのだ。

「プレんティがいなくなるなら、こんな所にいる意味もないですね。」

初めに言ったでしょう？俺は元々、医者になるためにここに来た、と。」

そういう彼の目は、優しくこっちを見ていた。

マティスは医学科のマスターの中でも、学年トップの頭脳の持ち主で、

8年かけて修学すべき事をたった3年で全て終えたという証明書も持っている。

それでも尚、この学校に通っていたのは他でもないプレんティのためだったのだ。

「嫌よ！そんなのだったら私は・・・」

「貴女はここを離れて、あの病院でカルティエさんの下について看護学を学ぶのでしょうか？」

「……でも！」

「セルスが躊躇っている理由はきつと、自分がその大切な人の足手まといにならないか、と言うことでしょう。」

彼の声は俺の心の奥深くに隠れている感情を、見透かすように言った。

その言葉で俺は俺自身が躊躇っている真の理由に気づいた。

コアの力になんてなれるのだろうか、それが恐れていた事だった。役に立たないだけならいい。しかし、彼女の世話になんてなってしまうなら、行かない方がいいに決まっている。

コアはいつだって自分が傷ついても、誰かを助けようとする奴だから。

「だから俺が行くんですよ。セルスが役に立たない分、俺が役に立つならセルスが行っても問題ないでしょう？」

マティスはそう自信満々に言った。

俺の分まで役に立つから、アカンサスへ行けと言ってくれている。

「学んでください、プレンティ。そしていつか、2人で病院を建てましょう。」

「……バカ・マティス。」

自分の無力さにいつだって気づかされ、そんな自分を支えてくれる人の大切さにいつも心が痛む。

自分は支えてもらえるほどの人間でも何でもないのに。

あのコアが俺を好きだという理由なんて、今でも全く分からない。

そう言えばきつと、全員が言うんだ。今のままでいい、と。

「俺は生徒総会があるから行けねーが、お前の公欠届けくらいは出

しといてやるから。」

「セルス！マティスをヨロシク頼むわ。連れて帰ってきてね。」

「ああ。」

「自分の身も自分で守れないような人間は、人を助ける医者になんかなれませんよ。まったく、心配性な彼女だ。」

マティスは今までに見せた事のないくらい、幸せそうに微笑んだ。自分にできる事を、今、したいから。

「リラ、俺も行くから。」

「ええ。ロイも私も、それにセルスのお友達さんも一緒なのよ？平気だわ、きつと。」

「ああ。」

ロイとリラが笑ってドラゴンに乗った。その時空から黒と浅葱色をした青っぱいドラゴンが舞い降りてきた。

「アル」

「ロスカ」

黒いアルの隣を舞う綺麗なドラゴンは、まるでマティスのように悠然とした浅葱色のドラゴンだった。

そのドラゴンに向かってマティスは『ロスカ』と読んだ。

「綺麗なドラゴンだな。」

「本当、すごく綺麗だわ。」

「ありがとう、セルス。リラさん。」

マティスがリラに微笑むと、マティスの向こうからマティスに声が突き刺さる。

「浮気禁止だからっ!！」

マティスはそのプレんティの言葉に、軽く笑って遠くの彼女に大きな声で言った。

「しませんよ。」

すると彼女はフワリと笑って、その真紅の髪を揺らした。

そんなプレんティから視線をドラゴンに戻して、今度は隣にいる俺にさえ聞えないほど小さな声で言った。

「プレんティ以外を想えるはずない。」

冷静な彼がそういう甘い言葉を言うなんて、よほどプレんティの事が好きと見える。

いつからだとか、そんなことはどうでもよかった。

マティスのその眼は優しく、頬はほんのりと色づいて、彼女を好きだと示していたから。

「行きましょう、セルス。貴方の愛する方の下へ。」

そういうとマティスはそのドラゴンの背中に勢いよく飛び乗った。

それからドラゴンはすぐに地を離れ、空で待つロイとリラの下へと飛んでいく。

しかし俺はマティスのその言葉に気づいてしまった。

「あいつ・・・っ!！」

マティスは本当は、ただコアを見てみたいだけなんだと気づいてし

まった。

あんな偉そうな事を言いながら、本当は俺のために行くのではなく、俺が話して聞かせるコアを見てみたいだけ。そう言われれば楽に思い出せるほど、あいつは言っていたのに。

“セルスがそんなに想うその子に会ってみたいですね。”と。

「ただあいつを見たいだけだろーが!」

俺はそう叫んで、アルの背にまたがる。

会ってみたいというマティスの言葉に、どうしてか。と問うと彼は決まって言った。

“女子に全く興味を持たない貴方が、唯一溺愛するほどの少女が本当に存在するのか興味がありますから。”

あいつが白竜遣いだとは言っていないため、マティスはコアを、俺の妄想の中の女だと思っ込んでいるらしい。

そしてきつと俺はさっきのマティスのような顔をして、コアの前に立ち、その横でマティスにそれを冷やかされるんだ。

それでも会いに行く。冷やかされても構わない。

それくらい俺が溺愛する彼女の笑顔をこの目に映すために。

第70話　：コア

アカンサスの南と東を領土とするハデス家の頭首は女で、北と西を領土とするベーレ家の頭首は男。

その二つの貴族は事あるごとに言い争っていた。

それはまだ王が存在したときもそうであったように、今でも争いあっている。

「本当に、結構大きいんだね。」

その村の中を案内してもらっていると、幾つかの家屋や、少しのお店さえ見える。

そんな村を歩いていると、村の人からジロジロと視線を向けられた。

「バンセルはそんなに小さいのか。」

「ん〜・小さいというよりは、大きいけど何も無いって言う方が正しいかな。」

全部焼けはらわれてた。・・・小さい子は裸足で赤ちゃん背負って、食べ物・・・探してたの。」

そんな景色を見たのは生まれて初めてだった。

悲しくて苦しくて、いたたまれないほど辛かった。その感情が気づけば私が持つ全てを渡していた。

何か1つでも彼らにできることはないだろうか、そんな感情だけが私を動かして。

「そうか・・・。けど、これからはこっちを狙ってくるだろうな。」

もうそういう情報は入って来てはいるんだ。東がつぶれたから今度は南だ、と。」

「・・・許せない。」

「まあ、今私にはここを守る事しかできないから、お前は頑張れ。」
な？と優しい目を向けてトレスは言った。そのトレスの言葉に病んでいた心が小さく動く。

トレスは自分は厳しいと思っているだろう。トレスは確かに厳しい。だけど、とつても優しい厳しさで。まるでそれはおじいちゃんに似ている優しさで厳しさだった。

「ありがとう。」

私がそうお礼を言ったとき、村の人達が急に騒ぎ始めた。

「こんな近くを通るなんてっ!!」

「もしかしたらすぐそこで・・・!？」

「止めてくれ・・・っ!そんなの・・・ここもついにおしまいかよ!」

その声々に私とトレスはバツと村人の視線が移った先を見た。

そこを通るのは3列に並んだ槍を持ち軍服を着る兵士と、その後ろを馬にのり矢を持ち軍服を着る兵士、

その上を箒を乗る軍服を着た魔術師と、その後ろには色とりどりのドラゴンの背に乗るマスター達が長く連なっている。

「何・・・これ。」

村に来て間もない私は小さく呟くと、その横でトレスがそいつらを睨みつけるような目をして言った。

「ハデス家の軍だ。信じられない、こんな村の傍で・・・!ついて来てくれ!」

それまでゆっくりと歩いてきたトレスは急にもと来た道を走って戻り始めた。

私はその小さな声に反応して、その後ろを急いで追いかける。

先日私達の前に揺れた緑の布地に金の刺繍で粹取りされ、

その中心部には羽を広げる鳥が描かれた逆三角形の旗が先頭に大きく掲げられている。

「止めに行く!!」

彼女の背中を追いかける私に、声が聞えた。

なんて強い言葉だろう、私はその時ぎゅっと胸を締められた気分だった。

何を背負ってここにいるのだろうか。そう考えている私の前を走るトレスの1つにくぐられた髪が左右に揺れている。

金の綺麗な髪で、きつと髪を下ろすとそれは美しい女の人に見えるに違いない。

どこかの社交界にいてもおかしくないほど、綺麗だろう。

「ルキア！」

私が名前を呼ぶと、大きな空の端に白いドラゴンが映った。

村を出てしばらく走って私がルキアの背に飛び乗ると、トレスも箒に乗り空を舞った。

風が猛スピードで過ぎていく。それだけ早くルキアが飛んでいるのだ。

『何です、アレ。』

「ハデス家の軍だって。今から止めに行くの。」

『分かりました。』

ルキアはそれだけ言うと、長く長く続く列に沿って遠くに見える旗が進む先頭を目指した。

地上では空を仰いだ兵士達が数々の声を上げて、私達を見ている。その中には屋を構える者もいたが、ルキアのスピードについていけないわけはなく、すぐに降ろしている。

きっとこの間、軍の人達を追い返した事がしられているのだろう。

「本当に早いな、ドラゴンは。」

「私、先に行ってる！」

「ああ、頼む。」

箒では限度があることを知っているため、私は急いで軍の先頭を指した。

その視界の横から3人の魔術師がその先頭を目指しているのが見えた。

そのうちの2人は黒い服を着ている。その姿でそれがルアーとジェラスとブレイズであることが分かった。

3人は村の周りの警護をしていたが、きっとこの列を見つけて追いかけたのだろう。

「ルアー！ジェラス！！ブレイズ！」

私が名前をあげると、3人はこっちを見た。それからルアーが声を上げた。

「箒じゃ追いつけない！お前のドラゴンならすぐだろ！行ってくれ
！！！」

小さなその声には私は大きく頷いて見せて、空を高く舞った。

そこからもつとスピードを上げるルキアは、すぐに3人を抜いてだんだんと大きくなる旗の下へと向かった。

「ルキア、降りよう！」

『ええ。』

ようやくその大きな旗を超えて、軍の先頭を追い越して私達はその旗に正面から向き合って、
軍の人達に私の声が届くくらいの場所まで地上に近づいた。

「待って下さい！！！」

私は座っているままではルキアの体に隠れて見えないため、ルキアの背に立った。

その景色は見たこともないくらい高く、広く広がっている。

「貴様っ！！ベーレ家のものか！！！」

「違います！ここに派遣された者です。」

「そこをどけ！そこをどかぬというなら、伝説のマスターでも撃ち殺すぞ！！！」

どけと言われて、『はい、どうぞ。』なんて道を譲るマスターが、伝説のマスターなわけないだろう。

それを知っていて、どけと言つのならさっさと打てばいいのに。

「どきません！！！」

私の声に進んでいた軍が止まった。

ルキアは私の心に従って、ゆっくりと地上に足を下ろし、軍の前に立ちただかった。

最後尾まで何千という兵士が連なっている。その列はゆっくりと止まった。

「貴様・・・こんな子供が白竜遣いだと!? 戯言か。」

「ここを通すわけには行きません。今すぐお帰りを。」

ここで戦争を起こせば間違いなく、シュランの人達は巻き込まれ、あの村はバンセルのようになることが目に見えている。

そう考えるとたとえ死んだとしても、ここをどくわけには行かない。

「ふざけるな! ベーレの輩がもうじきやってくるのだ! 我々は皆を守るために戦っているのだ!」

その言葉に私はふと考えてしまった。私だって同じじゃないのか。皆を守りたいからと戦うことを決めて。この人と同じじゃないのか。そんな私に、この人達を止める権利は・・・あるのだろうか。

「どけっ!」

その時、シュツと何本かの矢が私目掛けて放たれた。

私はとっさに手をかざしたが間に合うことはなく、矢は速さを増して私を目指していた。

その矢がもう私に刺さるといふその瞬間、私の視界が真っ白になった。

ブスツと確かに何か刺さる鈍い音がする。

その音が二度、私の耳に鈍く響くとその白い視界がまた元に戻った。

「ルキアっっ! ! ! ! ! ! !」

そう、私を覆ったのはルキアの真っ白な翼だった。その翼には2本の矢が刺さって、そこから真っ赤な血が滲み出ている。

『コア、怪我は！？平気ですか！？』

自分の羽を私の盾にして、私を守って傷ついたルキアは私を心配そうに見ていた。

「・・・そんな・・・ルキア・・・怪我してるのに。」

『これ程度の傷は、一日もあれば完全に直ります。・・・良かった・・・、貴女は平気ですよね。』

ルキアは私の体を見てホッとため息をつくとき、スッと前を見た。私が戸惑ったから、ルキアは私を守って傷ついた。

「・・・だめ・・・ルキアが・・・」

自分なら守れるのだと思っていた。それなのに、私はいつだって守られてばかりだ。

ルキアの眼は傷ついてもなお、私を守ろうとしている。

「駄目ッ・・・ルキアが傷つく・・・！」

それだけは駄目・・・と私はルキアにしがみついた。するとルキアは厳しく優しい目をして私に言った。

『貴女は何をするためにここに来たのですか！私が傷つくことくらいで恐れないで下さい！』

私の・・・私の自慢のマスターなんですから！！』

私はあの人達と変わらない？あの人達と同じ？
目的は同じでも、それを得る方法はいくつもあるんだから。
戦う事だけが目的を果たせる方法じゃない。

「ごめん、ルキア。」

「わかったらそこをどかんか！！子供といえど容赦はせんぞ！」

体から神気が溢れるような気がした。

その瞬間にルキアに刺さっていた矢は焼かれたように空気中に溶けて消える。

翼にはその矢が刺さっていた傷跡さえない。

「ルキア、飛べる？」

『コア、貴女……。ええ、乗ってください。』

「もう迷わない。躊躇わない。私は戦わないで、王座に王を就かせる！！着いて来てくれる？」

『はい、どこまでも。』

ルキアはそういつと白い翼を羽ばたかせ、空に舞い戻る。

「初めからそうしていればいいもの。」

先頭に立つ男がそういつたとき、私とルキアはその男の連なる列と私達のあいだに手をかざして叫んだ。

「そこを通過する者は1人としてないように、バリケード！！！」

そう叫ぶと私とその軍の間の地面から青い光の壁が上空にいる私達の目の前まで伸びてきて止まった。

その青い光はゆっくりと横に広がると、まるで地上を二つに切ったように壁を作った。

「な、何をする!?!」

「ごきません。ここを通したりしません!?!」

私が戸惑い、躊躇う分だけ誰かが傷つく。そんな事はもう分かっていたつもりだった。

だけど、ルキアが傷ついたとき、それは私の所為だと改めて感じて怖くなった。

私が一瞬迷った所為で、彼女は私を庇うために血を流した。それがとても悔しかった。

「ごめん・・・ごめんね、ルキア。」

「気にしないで下さい。私が死んでも貴女は死なない。だけど、その逆は違います。」

貴女は私の命も背負っているんですから。私は貴女がいなくなると困るんですよ。」

「私だって!?!ルキアがいなくなったら・・・」

「悔いるくらいなら、その分だけ強くなってください。」

「ルキア・・・」

「命を2つ背負っているんです。私を犠牲にしても自分の命を守れるくらい強くなってください。」

どうすれば伝わるのかな。貴女がこんなに大切なもの。

頑張れと励まし、迷う私を導いて、いつだってこんな風に守ってくれる。

「ありがとう・・・。約束するよ。強くなる。」

『はい。』

軍はそんな私達が作った壁を無理矢理壊そうとしたが、それはビクともせず、しばらくそこに留まっていた。

私は意識を集中させてその壁を張り続け、その場から一步も動かずに夜を迎えた。

すると軍もようやく諦めて、もと来た道を引き返して行った。

ほぼ6時間ずっと遠方に渡るまで大きな魔法を使ったため、私がその魔法を終えた頃にはもうボロボロだった。

そんな私を背に乗せて、ルキアは優しく空を飛んでルアー達の所へ運んでくれた。

それからルアーたちと一緒に村のはなれにある小屋に向かっていた。その間中、もうほとんど動かすことも出来ない体で、私は柔らかな風を感じていた。

「ねえ、ルキア。」

そつと空を見上げると、白い満月が地上を照らしている。

『はい?』

「私だつて・・・ルキアがいなくなったら生きてなんかいられないよ。」

『はい。』

ふわふわと浮かんでいるだけのよう感じるほど、ルキアはゆっくりと空を飛んでいた。

私はその白い背に体を預けて、目を閉じて眠った。

第71話　：ブレイズ

「何であんな無茶するんだ!!」

目を覚ました少女にそう怒鳴ったのは、トレスだった。

昨日あんな大きな魔法をあの小さな体で起こした少女はそのまま眠ってしまった。

真上近くにあった太陽が暮れて、夜が来た頃、ようやく軍も諦めて返って言った。

その間約6時間に及び、少女はたった一人で大きな魔法で壁を作った。

「で・・・でもっ!」

「でもじゃない!! あんなことしたら、ぶっ倒れることくらい分かんなかったのか!!」

トレスはその間中ずっとコアの心配をしていた。

何だかんだ言いながら、トレスはいつも人の心配ばかりしている。

しかし怒鳴っているのは、それだけじゃなかった。心配していたことを伝えたいのではなく、本当は・・・

「・・・それとだ。それと・・・悪かった。私が・・・行けと言ったから。」

「え?」

そう、自分の発言を悔やんでいた。

先に言っただけで止めてくれと言った言葉の所為で、結果的にこういうことになったのだと自分を責めていたのだ。

トレスは全ての事において厳しい。人に対してもそうだが、それ以

上に自分にはもつと厳しい。

「私が行けなんて言わなければ・・・お前はこんなことにならなかったのだから・・・、本当に悪かった。」

小さな家の中でトレスの声とコアの声だけが響いている。

ルアーとジェラスは警護に出ている、俺はコアをトレスに任せてしばらく村へ行っていた。

そして帰ってくるとトレスの怒鳴り声が聞えて、入り口の前で立ち止まった。

「それはトレスの所為なんかじゃない。トレスは優しくすぎるんだよ、それなのに自分には厳しい。」

コアのそんな声に俺は思わずもっていた薬草を落としてしまった。軽い薬草は音を立てることなく地に落ちて、俺は静かにそれを拾って言葉の続きを聞いた。

「前から聞きたいと思っていた。私が・・・その・・・優しいとはなんだ。」

「え？優しいから優しいって言ってるんだよ。」

トレスに向かって優しいなどという女を俺は初めて見た。

こっちに来てからトレスと一緒にいたが、村の女達もあの男勝りな性格に、

『素敵』だとか『厳しい方なのね』などと言っていたが、優しいだなんて一言も言わなかった。

「私に“帰れ”って言ったときだってそう。私が傷つかないために追い返そうとしてくれた。」

“ 帰れ ”

コアがこの村を訪れた時、彼女は冷たくそういった。その言葉に俺は思わず話しを割って入ったが。

あの言葉にそんな意味があったなんて、全く知らなかった。

「 どうでもいいなら、そんな事言わないもんね。だけど、トレスは違った。トレス達でさえ冷たい目で見られているのに、ドラゴンマスターの私が入ったらもつと辛いんだろって考えてくれたんだよね? 」

コアの声はとても穏やかに響いた。

俺はその声に自分の耳を疑った。その声だけ聞いているとまるで立派なマスターを思い浮かべてしまうからだ。

その容姿は押さない14や15にしか見えないのに、心はずっと大人で、その言葉はまるで天使の囁きのようだ。

「 そ・・れは・・・別に。 」

「 だから私は言ったの。 “ 私、そこまで傷つきやすく脆い ” 女の子 ” じゃないですよ。 ” って。 」

だからトレスがそんなに自分を責める必要なんてないの。

心配したのよ!! って怒られるのはいいけど、私の所為でごめん。

なんて言われるのは嫌だよ、ねっ? 」

トレスにとつて、この女の子はきつととても大切な子になる。俺は何故だかそんな気がした。

トレスはいつもどこかで、喜びを共有できる友達を探しているようだった。

それはまだ出会って間もない俺でさえ気づくほど、彼女は密かに願っていたんだ。

「・・・今度からは気をつける。」

「私がね。」

「最悪の状況も考えるべきだった。」

「私がね。」

「無責任だった。」

「私がね。・・・もうっ、本当にトレスは厳しすぎるよ。」

もっと気を抜いて、笑って？トレスはそれくらいでちょうどいいと思うよ？」

トレスは出会った時からずっと、自分の行動により起こる被害や最悪の事態を想像しながら行動していた。

それは俺にとつてとても尊敬できる点で、今でも凄イと思っている。けどあいつは厳しすぎるんだ。女だからとか男だからとかじゃなく、あいつは自分に厳しかった。

「でも・・・っ」

「『トレスは自分が行けつて言ったから、軍は帰った』って思ってみたら？」

きつとの方がずっとずっと楽しいよ。自分がそう言ったから、人は救われたの。ね？これでどう？だめ？」

そんな陽気な言葉に、俺は思わず笑いそうになった。

トレスの気難しさを真っ向から気楽にしるなんていえる、あの子は変わってるな。

俺がそんな風に思ったとき、部屋の中から笑い声が聞えた。

「・・・ははっ！すごいなっ！コアはおもしろいっ。」

それは俺が初めて聞いたトレスの笑い声だった。

いつだってその場を楽しむこともなく、自分に甘さを許さない心を
持ち続けるトレスが笑っている。

「なあんだ、よかった。トレスもちゃんと笑えるんだね。」

「『自分のおかげで』かつ。これはいいなっ！ははっ。その方が楽
しいないんてっ・・・コアは凄い。」

「前向きは大事だよ？」

賑やかな声が聞えてくる。トレスにはきつと、コアが必要だ。

俺以上に、ルアーやジェラス以上にコアが必要だろう。

自分を許さないトレスを唯一笑顔に出来る、特別な存在なんだろう。
それはきつとこれからも変わらない。何があっても、きつとコアが
トレスの友達に変わりはないんだろう。

「ほら、薬草とって来たぞ。」

「ああ、おかえりブレイズ。」

「おかえりっ！！」

「コア、もう体は平気なのか？」

「うん。私、ルキアのところに行って来るね。」

俺が部屋に入るとにつこりと笑った少女がいた。

魔力も完璧とまではいかないが、少しは戻っているようだった。

そんなコアが出て行くと、トレスと2人きりになった。

その部屋は急に静まり返り、コアの存在の大きさを感じる。

「コアはお前にとって、いい友達になりそうだな。」

「なあ・・・、ブレイズ。」

「ん？」

「責任放棄だと怒ってもいい。この村の事を考えろと怒っても・・・
最低だと罵ってもいいぞ。」

「は？」

「私はいつと一緒に、王を探して王座に着かせたい。」

トレスがそう言ったとき、コアの開けて行った戸からフワリと温かな風が吹いた。

朝にしては遅い時間、昼にしては少し早いそんな時間を吹く風に、トレスの金の髪が揺れた。

きつとこいつの事だから、全てを考えた上でそういつているのだから。

「責任を放棄するのか。この村を見捨てるのか。最低だ。」

俺は意味なく小さく呟いた。その言葉にトレスは全く表情を変えずにこつちを見た。

誰に似たのか、その答えは簡単。その目はまるでコアのようだった。

「とか、言ってみたり。いいよ。俺がここを守るさ。」

「ブレイズ」

「さつき薬草を集めている時にさ、面白い話を聞いたんだ。

王には病弱な妃が1人と、側室が1人いたらしい。妃との間に子供はできなかつた。

しかし、側室との間には確かに1人の子を授かったらしい。」

山の奥にある小屋のような家に住んでいるお婆さんが話して聞かせてくれた。

そのお婆さんは先の王クオンスの直下で宮女をしていたらしい。

そのお婆さんは遠くを見ながら話した。

「もう昔のずいぶん昔の事だが、王は隣の国の姫と政略結婚させられたんだとさ。」

でも王は全くその姫を愛することはできなかった。しかし、王は出会ったんだ。後に側室と呼ばれる・・・愛する人を。

そして王とその側室との間には、王家の血を継ぐ子が宿った。その時宮女についていた人は、その相談を受けていたらしい。

そして宮女は言ったんだ。『その人とその子を遠くにやるしかない』と。

いくら王と云えど、妃との間に子がいないのに、側室との間に子がいるとすれば、問題になる。

だから、『側室の女性とその子をどこか遠くの村にやるのが、その2人を守ることじゃないのか。』って。」

王はその言葉に従い、側室の女と子供を遠くの古びた村にやった。

それでも生活に苦がないようにもしていたし、手紙のやり取りもあったとか。

「そんな・・・それは事実か。」

「ああ、事実だ。その相談を受けた宮女に直接聞いた。王家の血はまだ途絶えてない。」

俺はそれを聞いても何も出来ない。この村を守ることしか。

けど、この話をコアにはしてやらなければと思っていた。

「それはこの村に？」

「いや、そこまでは知らない。ただ王が言っていたそうだ。

『紫苑の花がたくさん咲く村で暮らしている』と。」

「『紫苑の花』・・・あんな小さな花が。」

紫苑の花を見たことがない俺には、トレスのその言葉が少しだけ不思議に思えた。

紫苑の花は、このアカンサスにしか咲かないと言われているはずな

のに。

そんな俺の疑問は遠くから俺の名を呼ぶコアの声にすぐに消えてしまった。

「ブレイズ、トレス！」

遠くからの声に気づいたトレスは、小さく俺に言った。

「ブレイズ、この村を頼む。」

「ああ。」

もしかしたらこいつは男なんじゃないか、と思わせるほど凜々しい横顔に俺は思わず惚れそうになった。

コアを見つめるその目が俺なんかよりもずっと、男らしくて、魅せられる。

そんな俺達に優しい風が吹いて、コアが走ってくる。

その後ろからそのコアの背を優しく眺めるジェラスとルアーがいる。

『白竜を従えし者、歴史を変える者なり。』

そんな言い伝えがスツと心を掠めた。

もしコアにそういったら、彼女はきつとこう言うんだろうな。

『白竜を従えし者じゃなくて、真のマスターが、歴史を変えるんだよ』と。

第72話　：コア

野原を駆けて、一秒でも早くルキアの姿を見たかった。

『コア』

彼女のこの声を聞きたくて、聞きたくて。

ルキアは私の名前を呼ぶと、その風に白く美しい翼を広げた。その羽には何の傷もなく、血のあとさえ見られない。

私はルキアが静かに座る野原の真ん中へ走っていく。だんだんと縮まる距離さえもどかしい。

「ルキアっ。」

『どうかしたんですか。』

あの時、私が躊躇ったために怪我をおった白い翼にようやく手が触れた。

その瞬間にあの時の景色がバツと目の前に浮かんで、私はぎゅっと目を閉じ白い翼に抱きついた。

その羽は温かく、とても気持ちがいい。

「ごめんね……、ルキア。」

何度謝っても、私は許されるはずない。私の所為で彼女は傷ついた、それが事実。

こんな事になるなんて思ってた、なんてい言訳はできない。もしも私がルキアと契約さえしなければ、彼女はあの森で安全に暮らしていたのに。

それは私がいつも思っていること。

『どうしてコアが謝るの。』

「私の所為で、ルキアはっ……」

『もう傷跡さえないでしょう？泣かないで、コア。』

泣かないで、と言われても涙が勝手に溢れてくる。どうしようもないくらい、涙が勝手に溢れて仕方ない。

ルキアはそんな私をなだめるようにそっと羽を揺らした。

“貴女は何をするためにここに来たのですか！私が傷つくことくらいで恐れないで下さい！”

私の……私の自慢のマスターなんですから！！”

ルキアはあの時の私にそう言ってくれた。けど、今でもルキアが傷つくことは怖くて仕方ない。

怖いんじゃない。嫌なんだ。ルキアが傷つくのは絶対に嫌なの。私はルキアと契約した主としての責任がある。

安全な場所からこんな所に連れてきた私は、ルキアを守らなくちゃならないはずなのに。

「私……っ」

『本当に、私の主は優しすぎるんですよ。』

優しすぎるのはルキアなの。ルキアは私を責めたてるべきなのに。そうやっていつだって私に優しく微笑んでくれる。

「ルキアが……傷つくのは、嫌なのっ。お願い……だから、私を庇ったりしないでっ……」

『それは無理ですよ。貴女が死んでしまえば私も死んでしまっ。』

「私……絶対に……死なないからっ！だから……っ」

私のために傷つくなんて、止めて欲しい。大切な人が私の所為で傷つくなんて、嫌なの。
私の涙はまだ溢れて止まらなかった。その頬を優しく撫でる白い羽は風に揺れていた。

『コアが私が傷つくのを嫌だと思うように、私も貴女が傷つくのは嫌なんですよ。』

その言葉にそつと顔を上げてルキアの青い目を見ると、そつと優しくこつちを見てくれていた。

私はルキアを傷つけるためにルキアに守ってもらったために、ルキアと契約したんじゃない。

ルキアが望む物を与えたかったの。一緒に空を飛びたかったの。ただ、それだけだった。

「・・・」

『・・・私と言う白竜を従えしマスターが、自分のドラゴン1頭さえ守れずにマスターなんていいませんよ!!!』

私を連れ出したのは貴女なんですから、しっかり守ってください!』

黙り込む私にルキアはそう怒鳴った。そう、本当はこの言葉がルキアの心であるべきなの。

私はその言葉にようやく涙を止めた。それを見るとルキアは私の頬に顔をそつと寄せた。

それから私の涙を舐めて、顔を離して言った。

『なんて、そう言えばよかったですか?』

そう言うルキアの顔は優しく笑っていた。

「ルキア・・・」

『こんな事思つてませんよ。けど、何だか怒つて欲しそうな目をしていたので。』

優しい風がようやく昼を迎えたこの野原に吹いてきた。

黄色の花がいつぱいに咲いてて、草が彩りをよくしている。

その中に真っ白のルキアと、白いワンピースの私がいて、この世界はゆっくりと回っている。

『1つ話をしましょうか。』

「え？」

『私の母は、とても素晴らしいマスターと契約しました。』

その2人はとっても素晴らしくて、主従関係に縛られる事なく自由でした。

私はマスターなんかと契約する気なんてなかったんです。でも、マスターが貴女のように現れるたび、目を開けて世界を見た。

それがどうしてだか分かりますか？・・・母のマスターのような、真のマスターを心のどこかで欲していたからです。』

黄色の花びらがふわふわと流れて行った。

それを幸せそうにルキアは見つめながらそういい始めた。

『私の母は死ぬ前に言ったんですよ。“何を引き換えにしても彼に出会えてよかった”と。』

母の白い羽は何度も傷ついて、何度も空を飛べなくなりました。けど、最後の最後まであの空に彼との思いをはせていた。』

その瞬間、白い羽が私をそっとその背に運んで、ゆっくりと羽ばたいた。

私はいきなりの事にとりあえず背中にしっかりつかまり、バランスを取った。

「ルツ、ルキア!？」

『コア。私は貴女と出会って初めて、母の気持ちが分かったんですよ。』

空へと向かうルキアが静かに呟いた。

昼を迎えたばかりの空は澄み渡り、暖かいというよりも少し熱い風が通っていく。

『貴女はあの暗い場所から私を明るくこの日の当たる世界に連れ出してくれた。』

この世界を与えてくれたんです。だから私は思っていますよ。何を引き換えにしても、貴女に出会えてよかった。』

ドラゴン契約の中で最も重要で有名なのは『時の契約』。

ドラゴンは元々何千年も生きられる生き物で、

そのドラゴンが人間と契約し主を持つとき、その主の寿命がドラゴンの寿命になる。

主の心臓が止まったとき、ドラゴンの心臓は止まる。それが『時の契約』。

もし主が契約を解けば、その時点でドラゴンは死んでしまう。それが『契約破棄の契約』。

どの契約においても、ドラゴンは主よりも不利で、代償をたくさん払って契約する。

できれば私はそんな結びたくない。けどドラゴン契約を結ばなければマスターにはなれない。

「私だって・・・」

ルキアと出会えて、ルキアと共に空を飛べるのなら、それくらい代償にしてもいい。

「ただ、私は何の代償も払わずルキアと共に空を飛べる。ドラゴンはそんなたくさんの代償を払ってまで、主と契約を結ぶ。」

「貴女のいない時間なんていらぬ。だから私は時の契約はドラゴンを思つた神が創つた物だと私は思ふんです。」

「コアのいない時をその先何千年と生きなければならぬ、それは私にとって生き地獄と同じです。」

「貴女を失つた時間なんて、必要ないんですよ。」

空を飛ぶ度に初めてルキアと空を飛んだときのことを思い出す。

「これからこうして空を飛ぶんだと思うと、それはそれは嬉しくて、私は雨に隠れて涙を流した。」

それはルキアに秘密だけど、それくらい嬉しかったの。

「私・・・強くなる。」

「はい。」

貴女を守るくらい強く。

「私は戦わないで、私のすべき事をする。・・・こんな私だけど、着いて来てくれる?」

「昨日も今日もこれからもずっとこの気持ちは変わりませんよ。もちろんです。」

それまではどれだけ愚かでも見捨てないで、傍で見ている。

「いつか必ず貴女を守るようなマスターになつて見せるから。」

そんな風にずっとずっとこの空を、ルキアの背に乗って飛んでいた

い。

『もう一つ、面白い話をしてあげましょうか。』

「えっ？まだあるの??」

ルキアはもう一つと言うので、私は驚いて声を上げた。

そんな私にルキアはええ、と返事をして地上へと降りた。

『矢が刺さったこの羽、今は傷跡さえ見えないでしょう?』

「うん。」

『いつ、直ったと思いますか?』

「え?今日の・朝くらい?」

ルキアが怪我した辺りから記憶が曖昧になっていて、実の所あんまり覚えていない。

あの後、私は無茶に魔法を使ったために完全に意識がなくなった。

唯覚えているのは、夜空に浮かぶ白い満月だけ。

『貴女が“着いて来てくれる?”と言った時ですよ。』

「ドラゴンの治癒力ってそんなに凄いなだね。」

私はそつとその羽に触れて、感心した。

そんな私にルキアはまた軽く笑って首を振った。

『貴女の神気が、矢を消して私の傷を一瞬で癒したんですよ。』

「……………え?」

『だから、たとえ貴女の所為で傷ついたとしても、貴女が癒してくれたんですから。』

全く覚えていないといっても過言ではない記憶を必死に辿る。

私は治癒魔法だってかけなかったはずなのに、私が治したなんて信じられない。

驚いている私にルキアは元気に羽を広げた。

『私が傷つく分、貴女が癒してくれるなら、私は貴女のために幾度でも盾になるわ。』

真っ白で、まるで神様からの声のように澄んでいる。

どうすれば伝わるのかなあ。こんなにも貴女が大好きだと言っ事。それとも、もう伝わってるのかな？

第73話　：トレス

野原に真っ白のワンピースをなびかせる少女と、真っ白の羽に風を浴びるドラゴンがいる。

その周りには一面に緑の草と黄色の花が咲いていて、それらも楽しそうに風に揺れている。

『私が傷つく分、貴女が癒してくれるなら、私は貴女のために幾度でも盾になるわ。』

白いドラゴンはそういった。それがとても、そう、とても羨ましく思えた。

「コア。」

「・・・ん？あ、トレス！」

私の声に気づくとその草花を分けて少女が走ってくる。暖かな太陽の下を、満面の笑みを向けて私のところに。

「どうかしたの？」

どうか、私を貴女の笑顔の下に置いて欲しい。

きっと貴女といると、何か違う世界が見られるような気がするから。

「・・・」

「??？」

「さ、やっぱり白いドラゴンは綺麗だな。」

そう中々素直になれずに、私は白いドラゴンを見て言った。

そんな私の言葉にコアはまたいっばいに笑ってこっちを見ると、言った。

「ありがとう！でも、ドラゴンは皆綺麗な生き物なんだよ？ルキアだけじゃないの。」

「そうなのか。」

「うん。・・・トレスってね、どこかルキアに似てる。」

「え？」

流れていく風に髪を押さえるコアは、急にそういった。その言葉に驚いて、私は小さく声を漏らした。

あの白いドラゴンに、幻の白竜と謳われるあのドラゴンに、私が似ているはずがない。

私には、あんなに誰かを信じる事も、思う事も、思われることもできない。

「初めて会った時のルキアに、すごく似てる。凄く綺麗な目をしているのに、どこか満たされていないような、そんな目。

何かを求めている、もう諦めかけているようなそんな顔。トレスって、どこかルキアに似てる。」

信じたい、この子を、コアを。

私の体が勝手に彼女の前に跪くと、彼女は驚いて私に声をかけた。

「トレス!？」

私が欲しい物、貴女なら与えてくれる気がする。それは予感ではなくなしかな未来で、私はきつと笑顔になれる。

どうかそれまで、私を傍にいさせてはくれないだろうか。

貴女の笑顔が注がれる、その場所にいさせてはくれないだろうか。

「私も一緒に連れて行ってくれ。」

「え？」

「王探しを、一緒に……」

「……トレス。ありがと！！うん、一緒に探そう？こちらこそ、お願いします。」

少女は嬉しそうな声を上げると、跪く私にぺこりとお辞儀をした。その時吹いた風が、小さく花々を揺らした。私が顔を上げると、やっぱりコアはにつこりと笑っていた。

彼女の周りにはたくさんの花々が揺れていて、それはまるで、楽園にいる天使のように見えた。

その景色を見た瞬間、私は彼女の見ている世界をほんの少し見られたような、そんな気がした。

「さっそく、探しに行こっか。もうじつとしていられる時間もないし。」

ね？と微笑む少女がそういった時、遠くの方で小さな声が響いた。花畑に注がれる風たちに乗って、その声は私達にそっと届いた。

「ドラゴンだ……」

「……ドラゴンがいる」

「……こんな村の近くに……ドラゴンがいる……！」

その声に私とコアはその声のする方を見た。

するとそこには、シュランの村の者と思われる大人たちが立っていた。

その目には白竜が映っていて、怒りに燃え上がるような顔をしていた。

そしてなにを思ったか、彼らは急に地面にある石を持つと白竜に向かって投げたのだ。

それを見た瞬間、それまで微笑んでいたコアの横顔が急に凜々しくなり、白竜の下へと走っていった。

「ルキアっ！」

『コア、来ては駄目！』

白竜はそう言う空へと飛びかけていた羽を止めた。そんな白竜に石があたりかけた時、コアは両手を白竜にかざして、大声で叫んだ。

「我の大切な者を守れ、バブルホール！！」

少女がそう叫ぶと、白竜の周りにはシャボン玉のような結界が出来た。

もう少しで当たりそうだった石は、その結界によって白竜の傍から跳ね返った。

「止めて！！」

ようやく白竜の前までたどり着いたコアが両手を広げて、大きなドラゴンを精一杯庇うように立ちはだかった。

すると村人は石を投げるのをやめ、その少女に魅入っていた。

「ルキアを、傷つけたら許さない！」

「お前が・・・マスターか！そいつの、マスターか！！」

「出て行け！来るな！！村の傍にくるんじゃないやねえ！！」

棘のついた言葉がいくつもコアに突き刺さるように飛んできた。

私はその場から一步も動く事ができずに、その様子を見ていること

しか出来なかった。

さっきまで私の傍にいたあの幼い少女は、絡みつく草花を払いのけながら一秒でも早くドラゴンの下へと走った。

その姿がまるで、そう、あの日の母とかぶって、私はギュッと足をその場に縛り付けられていた。

「どうして・・・？何も、ルキアは何もしてないのにつ！」

コアの声に村人達は、張り合うような大声を出して答えた。

「ドラゴンは災いのもとなんじゃ！ドラゴンなんぞこの世に必要な生き物じゃ！！！」

その言葉に、コアは唇を噛み締めて涙をこらえていた。

その姿があまりにも強くて、本当に私よりも幼いのかと疑いたくなる。

しばらく睨み合いが続くと、村人達は逃げるように走って行った。

村人達の姿が見えなくなると、コアはフワッと花畑の中に姿を消す私の縛り付けられていた足も、フワリと解けて、動けるようになった。

「コア！！！」

『コア・・・、平気ですか？』

白いドラゴンの下に座り込んで、背の高い花々にその姿を隠されたコアはその白いドラゴンにそっと背を預けて泣いていた。

白いワンピースの上に幾つもの涙が零れ落ちていくのを、私はただ離れた場所から眺めていることしかできなかった。

その涙はあまりにも綺麗で、全てを浄化しそうなほど清らかだった。あの人も、あんな風な涙を流していた。

「ルキアは……この世に必要なのっ……！絶対……絶対……必要だもん……。」

『コア、貴女は本当に泣き虫ですね。』

「やだよっ……何で？ルキアは……この世界に……いなくちゃ駄目なのに……！」

それをあやすようにドラゴンは優しくコアの頬に顔を擦り寄せた。結界が解かれたドラゴンは、綺麗な羽で小さな風を起こして、花々を揺らした。

『私は、他の誰に必要とされなくてもいいんです。たとえセルスさんに同じことを言われても、私はそれでも構わない。』

「セルスはそんな事言わないっ……！！！」

『ええ。でも、もし貴女の大切なセルスさんにそう言われても、私は構いません。』

ただ、コアがこうして泣いてくれるだけで私には充分すぎるほどですから。』

慰めるように白竜がそういうと、涙を拭いては流し、拭いては流ししながら、

コアはゆっくりとドラゴンの方へ向いて立ち上がった。

それからその涙が溜まって、赤く腫れている目をジッと睨みつけるようにドラゴンに向けて言った。

「駄目！……ルキアは気にしようとしてないだけで、……傷ついでないわけじゃない。」

だから、駄目。ルキアを傷つける人を私は許せないから。」

ドラゴンは一瞬驚いた顔をして、それから優しい笑顔をコアに向け

た。

その2人を取り囲む花が、まるで私を拒んでいるようだった。

『どうするんです？』

「そんなの決まってる。」

その強い目からは自然と涙が引いていて、コアは分かっているでしょ？
?といいながら白竜に微笑んでいた。

それからその小さな手をそっと白竜の頬に伸ばして、言った。

「ルキアを綺麗って言わせる!!」

その言葉に白竜と私は思わず笑い声を上げてしまった。

するとようやく私の存在に気づいたのか、コアが私のほづを見て言った。

「トレス。この村で、しばらく王を探そう?」

「・・・そのことだけど、王は・・・」

「?」

「王は『紫苑の花』がたくさん咲いている村にいるそうだ。」

「紫苑の・・・花?」

ここに咲くのは黄色の名もわからないような花だけど。

『紫苑の花』はとても凜としていて、脆いようで、強い紫の花。

「ここにはない。」

「じゃあ、後3日。3日だけ、私に頂戴?」

あの人もあの花が大好きだった。私も大好きで、今でもよく思い出す。

今の王座は紫の椅子だと聞いたことがある。それはまるで『紫苑の花』のように脆いようでした。しっかりとそこにある。

「3日で、ここの村の人達にルキアを綺麗って言わせて見せるから！」

「……分かった。」

あんなに酷く言われても、君は絶対に屈しない。この真っ直ぐな目はいつも、ずっと真っ直ぐだったんだろう。

どれほど酷いことを言われても、折れることなく、曲がることなく、貫き通してきた、そんな目だろうか？

私もそんな目になれるだろうか。君のように、あの人のように。

「トレス、大好き！！」

何気ないその言葉に、私はあまりに嬉しくて涙がほんの少しだけ目に溢れてきた。

ずっとずっと求め続けてきたものが、今ほんの少し、目の前に輝いた。たよな、そんな気がしたから。

第74話　：コア

もしも赤竜さえ現れなければ、ルキアは皆に綺麗だと言われていたのかも知れない。

たった一人のマスターが、赤い竜を操り、この村を焼き払おうとした。

たくさん命を無意味にも、途絶えさせようとした。ドラゴンをそんな事のために空を飛ばすなんて、最悪だ。

人間なんていつも勝手に、何よりも汚れたい生き物なのに。

神様はどうしてドラゴン契約を作ったの？私には分からない。

リラやセルスと一緒にいるために、契約なんて必要ないのに、どうしてルキアとは契約しなくちゃ一緒にいられないの？私達の同じで、生きているのに。心を持っているのに。

「長老さんって、貴女ですか。」

村に入って真っ直ぐ突き進む。その間に何度も何度も指を指されて、石を投げってくる子供だった。

彼らは何も悪くない。悪いのは彼らから平和を奪い、幸せを奪おうとしたマスターが悪いのだから。

「・・・お嬢さんかね、あのドラゴンの主とやらは。村のもんが噂しておる。」

ワンピース一枚だけしか着ていない裸足の少女が、白竜の主だ。村の人達はそう噂を立てていた。

裸足で歩くことも慣れてきた私の足は、もう傷だらけだ。だけど後悔はしていない。

足なんか綺麗でも、心は何も綺麗じゃない人だっていっぱいいる。

誰かのために役に立つなら、私の足なんか綺麗なんかじゃなくていい。その気持ちはこれからも変わらない。

「はい。」

私の声が古い家を静かに響いていった。響き返ってくる自分の声はどこか震えている。

本当は怖かったんだ。ここに一人でたどり着けるのか、不安で仕方なかった。

いつだってそう。ルキアを探しに森へ入った時だって、ここへ来る時だって、いつだって怖い。

トレスはそんな私と一緒に行くと言ってくれた。セルスだって、追試のとき、手伝ってやるといつてくれていた。

だけど、手伝ってもらうわけにも一緒に来てもらうわけにもいかない。

これはきつと、私が一人で解決しなくちゃいけないことだから。

いつだって不安で怖くてたまらないけど、私が選んだ道を後悔したくないから、私は逃げたくなんてなかった。

「まあ、おあがり。」

「・・・はい。」

お婆さんはにこりともせず、私を家の中に招き入れた。

その小さな目に、射るように見られながら私はゆっくりとその家へ上がる。

どんなに怖くても、ルキアが傷つくことより怖いことなんてない。

そう思うと心の中にドンと何か真っ直ぐした芯のようなものが私をスツと真っ直ぐにしてくれる。

「全く、度胸がある子が来たもんだ。迷惑極まりないね、本当に。」

「すみません。」

度胸なんかないの。本当は今にも泣いてしまいそうなの。私だって人間だから。知らない人にだって、嫌われてしまうのほども怖い。

化け物のように見られて、石を投げつけられて、怖くないわけなんかない。

「幾つだい？」

お婆さんはゆっくりゆっくりと2つのコップにお茶を淹れた。そのうちの1つを私に差し出しながら、小さく聞いた。

私はそのお茶を受け取って、その言葉にすぐに返事を返す。

「もうすぐ16になります。」

「ほんに。わしの孫と同じじゃの。」

「そうなんですか？」

「生きておれば、じゃがな。」

風の流れが止まったような、そんな気がした。

お婆さんの言葉が、私の言葉を喉の奥へと押し込ませた。

「あの子が5つのときじゃった。真つ赤なドラゴンが・・・空を飛んだ時、この村はほんの一瞬にして、滅びかけた。」

「・・・」

「赤い炎が、村中を囲ってな。草や木や生き物を焼き尽くし、魔法樹さえも枯れさせた。」

お婆さんは思い出すかのように話し始めた。魔法樹は大きな大きな木で、神気を放つ樹木。

それだけではない。神の欠片が宿っていて、その力はその木の周りの生命に輝きを与える力がある。
そんな魔法樹が枯れる事なんて、まずない。大きな魔法によって力を失う事で魔法樹は枯れる。
きつとこの村の魔法樹が枯れてしまったのは、そのマスターがその木から魔力を奪ったからだろう。

「その時、わしの孫は死んだんだ。炎の中で・一人・！」
「そんな・・・っ」

そう。そんな奴に子供やお年寄りなんて関係ない。
どんなにむごい事でも、やってのけてしまえる、そのマスターの所為で私やルキアは嫌われる。

だけどその人がどれほど酷いことをしたからと言って、ルキアが嫌われ傷つけられる理由なんて何一つない。

「そんなわしらに、ドラゴンを憎むなと言うのか！！！」

大声を上げたお婆さんのお茶はグラグラと揺れた。

「・・・はい。」

私はどうしてこの村の人がドラゴンを嫌うのか、知っていた。

だけど、もしもこの村の人がドラゴンを嫌っていることすら知らないマスターとドラゴンがここに来たら？

その人達はきつとわけも分からないままに、石をぶつけられて、化物のように見られて、それで黙っているわけがない。

その人達はここの人を恨み、憎むに違いない。それは人間だから、仕方のない事。

私だって、ルキアを傷つけられていたら、決して許すことなんてで

きない。

「人間とは醜い生き物です。」

自分が大切に思う誰かを傷つけられたら、その思いが大きい分だけ憎しみも大きくなる。

それは誰かを大切に思う愛情が存在する限り、絶えることのない感情で、仕方のないことなのかもしれない。ただ、それじゃいつまでたっても同じだよ。

「美しさを持つ分だけ、醜くだってなれてしまう。」

「お前に何が分かる!!!」

なら、貴女にルキアの何が分かりますか。

「もう・・・嫌なんです。」

一瞬、心の中で芽生えた怒りを必死に押し殺した。この人達は苦しんでいる。

そんな人に、私ができるのは自分の感情をぶつけることじゃない。

「・・・貴方達が傷つくんですよ・・・？傷ついて苦しむ貴方達が、これ以上傷つくことになるんですよ？」

そのどこが幸せなの？マスターを恨むことで、ドラゴンを憎むことで、その苦しさが晴れた事なんて一度もないでしょう？

なら、どうして貴方達は憎むの？苦しみを晴らすため？幸せになるため？

その憎しみや恨みで、たったの1つでもいいことはあった？

「貴方達が憎むことで、貴方達は傷つくだけなんです！」

貴方達だけじゃない。私やルキアが傷つくように、私やルキアを大切に想ってくれている人が傷つくの。

「その腕の傷も、その膝の傷も、村のもんじにやられたのか。」

「これは……」

体の幾つかの場所の擦り傷と切り傷からまだ赤い血が滲んでいる。その傷を見てお婆さんはそっと白い布を出してきて、私の傷を優しくなでた。

「こんなに幼いのに……なして、あんたの体は傷だらけなんじゃ。」

お婆さんの眼にはほんの一粒の涙が浮かんで零れて行った。

「大切なものを守るために、傷つかなきゃならないときもあるんです。」

「石ば、なげられたんじゃろ。靴は……？あんた、靴を持ってないかね。」

「あ……えっと……あげたんです。東の村にいる女の子に。」

その涙はとても綺麗で、優しいものだった。

こんなにも優しい人達にどうして苦しみを与えるの？私には赤竜のマスターが全く分からない。

ほんの一瞬でたくさんの命を奪って、恨みと憎しみを植えつけて、それで何が得られたっていうの？

「そうかい。だけん、こない綺麗な足をしとるのか。」

お婆さんはそういうと私に小さく笑ってくれた。それがとても嬉しくて仕方なかった。心臓がまるで恋を知ったときのように高鳴って、思わず笑顔になる。私の傷だらけで砂まみれの荒れた足を見て、お婆さんは綺麗だと言った。

「あんたのドラゴンも・・・さぞ綺麗なんじゃろうな。」

涙を止めたお婆さんの姿と、部屋の中がグニヤリと歪むと、私の目からはポタポタと涙が零れた。

私ならいえただろうか。もしも私がお婆さんと同じ立場なら、私はそんなことをいえただろうか。

大切な人を失って、殺した人間と同じ仕事をする者に、そんな事をいえただろうか。

私の涙は止まることなく流れて、私は漏れ出す声を必死にこらえているだけだった。

そんな私にお婆さんは静かに、部屋に澄み切るような声で言った。

「ほんに、綺麗に泣く子じゃの。」

シワシワの細い手が私の頭を撫でてくれた。

私がこの手に出来ることはあるのだろうか。醜くて、汚れた人間の私が、この綺麗な手に出来ることなんてあるのだろうか。

そう思った瞬間

ズドンッ”

鈍く大きな音が響き、地面が揺れて、家の天井から、土埃がサラサラと落ちてきた。

一瞬の出来事に驚いたのか、私の涙は止まった。

「な・・・に？」

「・・・この村も・・・ついに終わりかの。」

お婆さんは力なくそういうと、天井から降ってきた土埃が入ったお茶をもつてゆつくりと流しへと歩いていく。

お婆さんの大切なお孫さんは、この村で生まれて、この村で死んでしまった。

なら、この村はお孫さんの残した形見じゃないのだろうか。そんな村を守ることを諦めてしまっていていいのだろうか。

「守らなくちゃ・・・！諦めちゃ・・・駄目・・・」

違う、諦めずにはいられないんだ。トレスが言っていた。

“無力な民をほつたらかして、その何がこの国を救うだ！！”

そう、この村の人達は無力なんだ。全ての人が私達のように力を持つてるわけじゃない。

私はなんのためにここにいる？何のためにここに来た？

私は大切なものを守るように、教科書から学び、リース先生に教わってきたんだ。

そして私は、ここを守るために、ここにいます。

「お婆さん、私のドラゴンは、とっても綺麗で美しいんです。

こんな愚かな私について行くと、支えると言って言ってくれるんです。

私はルキアの、自慢のドラゴンマスターでありたい。だから、お孫さんが残した形見であるこの村を守ります。」

『力ある者は、力無き者のために存在せよ』おじいちゃんもそう教えてくれた。

ドラゴンマスターたる者、常にそれを忘れてはいけな
いと言っていた。
私は忘れてたりしない。赤い竜のマスターのようには、絶対になら
ない。

「待ってて。」

私は常に誰かのために存在していたい。
誰かを守るために、誰かを助けるために、誰かを支えるために、誰
かを笑顔にするために。
だから、この村を壊させやしない。私のいるこの場所で、人を殺さ
せやしない、絶対に。

第75話　：コア

心臓がドクンと大きく高鳴った。空は曇っていて、太陽の姿なんて欠片も見えない。

そんな空から、村の中央に白いドラゴンが降りてきたのが見えて、私は走った。

さっきの振動で、村の人のほとんどが家から外に出て辺りを見回していた。

鈍いあの音はきつと大きな大砲。それは予感ではなく、確信だった。東の村バンセルに放たれた大砲はきつと地面に落ちたら、さっきと同じような音を立てて地面をえぐるだろう。

「ルキア！」

『行くのでしよう？乗って。』

村の人はルキアを見て、騒ぎ始めた。子供を守るように抱きしめる親や、恐れるような目を向けてくる老人。

その目のどれもが、私達を恨み憎んでいるようだった。

「お嬢ちゃん。」

その中からたつた一つ、声が聞えた。

私はその声にルキアの体にかけていた体重をそつと地面へと移して、その声の方を見た。

そこに立っていたのは、やっぱりお婆さんだった。

「ちよ、長老！！何を！！」

「黙るのじゃ。」

私を呼ぶように名前を呼んだお婆さんに村の若い人が驚いた。するとお婆さんは怒りを見せるようにその人に言っ、私に一步ずつ近づいた。

私はそのお婆さんのほうに急いで駆け寄った。

「何ですか？」

「可愛い女子おんながそんな粗末な格好でいるなんて、どうかと思うがな？」

「え？」

「ほれ。せめて、これを履いていかなか。」

そう言っってお婆さんは私の足元にポンと2つの靴を置いた。

「・・・いいんですか？」

「伝説のマスターの靴になれるなら、この靴だっ、て喜ぶじゃろ。」
にっこりと笑うお婆さんは、そう言っ、た。

私の足元の靴はとても綺麗で、白い色をしていた。

「・・・ありがとございます。・・・絶対・・・絶対、この村を守りま
す。」

涙が溢れ出した私にお婆さんはそつと肩を叩いて頷いた。

村の人達は私達をジツと黙っ、て見ているだけで、何もしてくる事はなかつ、た。

「さあ、もう行かんかい。この村が滅んじまう・・・。」

「・・・っ、はいっ！」

土のついた腕に涙をこすり付けて、私は返事をした。お婆さんに背

を向けると、ルキアは今か今かと待っていた。

その白い背に走っていくと、ルキアは堂々と白い羽を羽ばたかせ、空へと舞った。

それから私をその尾に乗せると、空を翔るように飛んだ。

だんだんと小さくなる村からは、たくさんの不安な目が覗いていた。その目の中にはたったの1つも憎しみはない。

「ねえ、ルキア。」

「はい？」

「守ろうね、シュラン。大切な人ができたの。」

「ええ。」

優しいルキアの声を聞きながら地上の端を見ると、そこには黒い球状の物が地面に突き刺さっているのが見えた。

それだけではない。私の目には何千の兵士が地上を走り、魔術師とドラゴンマスターが空を飛んでくるのが映った。

そしてその先頭には、四角の赤い布に黒の刺繍で蛇が描かれる旗が揺れている。

田畑に炎を放って、村の傍はほとんどが火に覆われている。

そしてそこには逃げ遅れた子供が幾人か、村に向かって逃げているのが見えた。

親らしき村人は細い道を必死に子供の下へと駆けている。

「ルキア。」

「何ですか。」

「右！降ろして！！」

私はその親子が走っている方向を指差した。ルキアはそれを感じとり、体を傾けてその方向へ向かった。

必死で逃げてきた子供をようやく腕に抱きしめた母親が、また細い

道を逃がっている。

その一瞬、3本の矢がその2人にめがけて射られた。

この場所からじゃ、飛び込んでも間に合わない。私はそう頭の中で考えた。

私だけの命じゃない。ルキアの命も私は背負っている。

「バブルホール!!」

空からじゃどうしても不安定になるその魔法を親子に投げつけて、私は眉をひそめて願った。

3本の矢は魔法により加速する。その瞬間、2人に水色の薄い膜が張った。

その膜に驚く親子に3本の矢はかまわず襲った。しかし、私のかけた魔法がそれを許す事はない。

ようやくルキアが地上へと近づいて、私は地上に飛び降りた。白い靴が今まで私の足を傷つけていた砂達を防いで、私の足を守る。

「平気ですか!?!」

駆け寄ると2人から結界が消え、その場に浮いていた矢がポトポトと地面に落下した。

5つにもならないような男の子は、その恐怖に涙を浮かべて母親にすがり付いている。

母親はその恐怖に耐えながら、わが子を守るように抱え込む。

「ありがとう!!」

「……いえ。僕。お母さんの言う事聞くの、いい?」

「……うんっ……!」

この場所から村まではとても遠い。きつと子供連れてじゃまた襲わ

れる。

私は急いで頭の中を回転させた。空にはルアーやジェラス、トレスやブレイズが軍目指して猛スピードで飛んでいる。

あの4人にこの人達を頼む事はできない。私だって軍を止めに行かなくちゃならない。

その時、空からルキアがゆっくりと降りてきた。

『コア・・・？』

ジツとルキアを見る私にルキアが不思議そうな声を上げた。

炎の手がこっちまで伸びてくる。そのスピードは、ルアー達が空を駆けるスピードと変わらないほど早い。

迷っている暇なんてなかった。拒絶されても、守らなくてはならない。

「ルキア！この2人を背中に乗せられる？」

ドラゴンは主以外を背に乗せることを嫌う。それはきつと本能から来るもので、決してドラゴンは悪くない。

そして主がドラゴンの背に他人を乗せるということが意味するのは、ドラゴンへの冒瀆。

『貴女は・・・自分が何を言っているのか分かってるんですか・・・？』

「ごめん・・・、ルキア！でも・・・」

『私は・・・ドラゴンですよ！！』

ルキアは悪くない。ドラゴンは自分の背中に誇りを背負って空を飛ぶ。

そんなドラゴンに他の人間を背に乗せて飛ぶように頼むなんて、最低な事。

それは分かっている。だけど・

「お願い・・・ルキア。」

他の人を乗せても、貴女は清く美しいドラゴン。それは私が誰よりも分かってる。

だから、どうか助けて欲しいの。

『分かりました。急いでください、火がそこまで来ている。』

きっとルキアは私の心を読み取ってくれた。ドラゴンがそれを許すなんて、本当にありえない事なのに。

ルキアはその返事を聞いて私は2人のほうを見て言った。

「これから私のドラゴンが村までお送りします。・・・ちゃんと、お送りしますから。」

「・・・いやっ。・・・いやよ・・・ドラゴンなんて・・・！」

そう、貴方達にとってドラゴンは災いを持つもの。

「ルキアは私のドラゴンです。侮辱なんて許しません。・・・子供を抱えたまま走れないでしょう!？」

「・・・それは・・・」

『コア、前!!』

いきなり割り込んできたルキアの声に、私は急いで親子2人に背を向けて振り返った。

すると目の前から炎に包まれた矢が一本飛んできた。

「我等を守りたまえ、バリアー!!」

間一髪という所だろうか、矢はその寸前で魔法により止まった。
・・・ように見えただけだった。

「嘘！」

炎をなくした矢が私達を目掛けて飛んでくる。私の目の前で人を殺させやしない。

たくさん約束と、たくさん気持ちを抱えて、私はここに立っているんだから。

だけど、私が抱えるのは私の命だけじゃなく、私のドラゴンであるルキアの命も抱えている。

その命の重さをマスターは背負っているのかもしれない。魔法が効かない矢はそのまま私達を指している。

ブスッ”

『コアツ！？』

考えている時間なんてなかった。私はルキアの命を背負うこの命を捧げる事は出来ない。

ただこの2人を傷つけるわけにもいかない。お婆さんと約束した村を守ると。

一切被害は出したりしないで、守る。私はそう心に決めていた。

木々が焼ける音と、人の叫び声と、ドラゴンの鳴き声。幾つ物音が私の耳の中に響いていた。

その音を遮って私の耳に聞えたのは、悲しみをひめたルキアの私の名を呼ぶ声だけだった。

第76話　：コア

ブスッ”

鈍い音が体に響いて、それと同時に考えられないほどの痛みが右手を襲った。

一瞬意識が飛びそうになったのを、ギュッと目を閉じて堪える。

『コアッ！！』

私がしてきた約束は決して簡単なものじゃない。

そのたつた一つ一つに重く押し掛かる想いがある。村を守るという約束には、村の人全員を守るという想いが。

ルキアとの契約には、ルキアを守るという想いとルキアの求めるものを与えるという想いが。

その約束を私は、たつたの一つだって破るわけにはいかない。

そう思うと、私は自然に飛んでくる矢に向かって右手を伸ばしていた。

「・・・つつ・・・うつ・・・っ」

「矢がつ・・・矢がつ・・・手にっ！！」

「お姉ちゃんっ！？お・・・姉ちゃ・・・んっ！」

鈍い音と痛みは、私の右手に勢いよく突き刺さった。

右手に与えられた痛み大きさに、息がつまり左手は大きく震えていた。

ただどそれが私に出来る精一杯のことだった。他に手はなかった。

魔法も効かないその矢は、唯私の右手の中に突き刺さり止まることしかできなかった。

『コア!! どうしてっ・・・!?!?』

「思・・・い・・・つか・・・っ・・・な・・・くて・・・」

言葉が喉から出て行かない。息もまともに出来ない。

右手なら、ルキアの命には何の関係もない。この親子だつて守ることが出来る。

だからこれが唯一私に出来ることだった。その代償がどれほどの痛みであれ、命が消えることよりずっとましだった。

「・・・っ・・・っんっ!・・・はあ・・・はあ。」

いつ矢が飛んでくるか分からない。ルキアは空を飛んで私を守ろうとしている。

その姿を横目にして、ようやく突き刺さった矢が右手から抜けると、少しだけ痛みが和らいだ気がした。

真っ赤な血が突いた細い矢を左手に握り締め、喉から出る声を最大にして叫んだ。

「まっ・・・待って!! ルキア!」

その決して大きいとは言えない私の声に、ルキアの羽ばたいていた翼がゆっくりと降りた。

それを確認して、私は右手から流れてくる自分の血を一瞬見て、バツとその母親のに見せた。

「躊躇うと・・・その分だけ誰かが傷つくんです!!」

お願いです・・・お願いだから・・・生きて・・・生きて欲しいだけなの・・・っ。」

他には何もいらぬ。ただ生きてくれるのなら、伝説だって、強い魔力だって、私は何もいらぬ。だから、死なないでほしい。もう誰かが傷つくところは見たくない。私の所為で傷つくなんてもう嫌なの。

「・・・ごめんなさいっ！！ごめんな・・・さい！！お願いですっ・・・助けて。」

「・・・よかった。ルキアは優しいドラゴンだから、平気です。さあ、急いで！！」

右手の痛みはもう感じることもなくなってしまった。きつと麻痺しただろうけど、痛むよりずっとましだ。

私は周りを見ながら今にも飛び立ちそうなルキアの青い目を見た。

『どうしてそんな事を！？貴女の右手は・・・』

「私の右手は二つの命より大切？そんなわけないよね。」

ルキアだってちゃんと分かってるでしょ？この2人を村までお願いね、ルキア。」

2人が背に乗ると、ルキアは顔を歪ませて翼を広げた。

それはルキアがドラゴンだから仕方のない事。どれほど人間好きなドラゴンでも、自分が認める者以外を乗せるのは嫌う。

ルキアが私以外の人間を背に乗せることは、きつと他のドラゴンたちにとっては考えられない事。

『すぐに戻ります・・・っ！それまでお願いですから・・・無茶を、絶対に無茶をしないで下さい・・・！！』

「分かった。・・・ルキア？」

『はい。』

「大好き。」

ルキアはそつと微笑むとそのあたり一面に冷気を噴きかけ、炎を消して飛び去った。

ルキアがいないだけでこんなに不安でしかたないなんて、マスター失格だろう。

右手の痛みはないけれど、心にはポツカリと何かが空いたような気がした。

「焼け焦がす熱と炎を消し去れ、ウォーター！！」

目の前の視界を遮る炎に両手をかざして、震えながらも魔法を放つ。右手はその瞬間に痛みを取り戻して、体中にその痛みが走った。残った左手から、水は流れ出て行く。

しかしそんな弱い水に消しきれるほど、その炎たちは弱くはなかった。

ルキアが炎を晴らして行ってくれた小さな道を私は走って村に向かった。炎の最先端は、村の手前の野原を焼き払っている。

とりあえず、そこからは守らなければ、あの村には直接水が流れ込んでいくわけではない。

そんな村に炎が移るととんでもない事になる。

「水の精霊よ・・・っ、我に力を・・・！！」

走りながら左手を空にかざすと、だんだんと小さな精霊達が集まって来た。

しかしほとんどの精霊は弱りきっていて、とてもじゃないが私の力になれる精霊はいない。

精霊全ての力を借りても、私の右手にも及ばないだろう。

「それでも・・・ないよりはましか・・・っ・・・な。」

白い靴は地を蹴って、野原へと近づく。そしてようやく炎のない景色が目の前に広がった。

何日か前まではそこらじゅうに緑の草が生い茂り、黄色の花が温かな風に揺れていた。

その野原には、炎に焼かれた草や花が黒く焦げた煤すすのようになり、空を漂っている。

野原を包むのは熱い炎の熱気。そしてその景色の先には、村がある。

「駄目・・・だ。ここで、止めなくちゃ・・・。」

ようやく少しは集まった精霊達をゆっくりとその炎の方へと向けて、痛みを感じる右手を精一杯添えて叫んだ。

「精霊よ・・・水よ・・・滝の流れを・・・この炎に・・・与えて・・・キヤターラクト！」

右手には魔法の力がぐっと加わり、痛みが広がって赤い血が滴り落ちていく。

それでも構え続けると、両手の中から水が滝のように溢れて流れていく。

その野原一面に振り分けられたシャワーのように降り注ぎ、炎はゆっくりと力を失って、消えて行った。

「は・・・あ・・・。」

ようやく炎が消え、私はその場に倒れるように座り込んだ。

そんな私が小さくため息をついたとき、空を覆っていた低い雲から、ポツリポツリと水が落ちてきた。

水滴が一粒私の足に当たって、小さく弾かれた。その水滴が通った

後は土や煤すすが落ちている。

「・・・雨だ。」

空を見上げると、その言葉はあまりにも小さく私を虚しくさせた。空には私達のことなんかどうでもよくて、唯気分のようにコロコロ変わる。

たかが一国の王を決めるだけに、こんなに焼け野原にして、争うことなんかどうだっていいんだろう。

だけど、私にとってはそうじゃない。右手の痛みはどんどん体を覆っていくかのように広がる。

それでも逃げる事なんかできない。どうでもいいなんて、言えない。たとえ体の全部に大怪我を負っても、死なないと思う限り私は立ち向かい続けなければならない。

『コアー！！』

そんな空から一つの声が降ってきた。

ああ、まだいける。まだ立てる。まだ進める。

大粒の雨が私と野原とこの辺りを全て包み込んで降っている。そんな場所に真っ白のドラゴンが舞い降りた。

その肌についた土が雨に流れ落ちて、まるで真珠のように美しい光を放つ。

「ルキア」

ルキアの声が聞えただけで、ルキアが目の前にいるだけで、右手はすっかりと痛むのを止めた。

足の疲れも、魔力の反動も、全てが体から消え去った。

まだいける、まだ立てる、まだ進める。

ルキアが傍にいただけで、まるで無敵のように体が楽になって、今にでも走り出せそうなほど強くなれる。

不安も何もなかった。進む事も戦う事も、何も怖くなんかない。全てを守りきる自信だって湧いてくる。

「ああ・・・ルキアだ・・・」

『そうですよ、マスター・コア。』

ねえ、貴女はどうして私にそんなに力をくれるのかな。貴女がいなだけで、私は唯の人間になるのに。

貴女がいるだけで、まるで伝説のマスターにだって負けないほど強くなれるような気がするの。

それは魔法にかけられたように、心の中に風が吹き込んでくるの。

「行こうか、ルキア。・・・私はルキアがいるだけで、こんなにも強くなれる。」

『右手にそんな怪我を負って、何が強くなれるですか！！村に戻りましょう。村に戻って、村を守りましょう。』

雨に濡れるルキアはそう言って、私に優しく悲しそうな目を向けた。村にくる敵から守ればそれでいいわけじゃない。私はお父さんにバンスセルの人達を任せた。

その代わりに、王を見つけて、きっとこの国を平和にすると約束した。だから私はただ、守るだけじゃ駄目なの。

右手が血を流しても、左手が折れても、足が腫れても、私は進み続けなくちゃいけない。

「まだ、いけるよ。まだ、立てる。まだ、進める。だから・・・私

を背に乗せて？」

ルキアがいるから、私はまだ進むことができるの。約束を果たすことが出来る。

ルキアがいなければ、約束は一つだって守ることができなかった。

こんな弱い人間に、貴女は誓ってしまったの。

できる事なら謝りたい。こんな私に誓わせてしまって、ごめんと。ただど過ぎた時間を戻す事なんかできない。だから、今がとても大切なの。

「一緒に空を飛んで下さい。」

今、ルキアと空を飛びたい。

『……………私は、貴女と誓えて……………本当によかった。』

私は足を地面に立たせて、急いでルキアの下へと走った。

私なんかよりもずっと凄いマスターを迎えられたはずなのに、ルキアは一度だって後悔を見せなかった。

ドラゴンは嘘はつかない生き物だから、ルキアは本当にそう想ってくれてるんだろう。

なら、何も怖い事なんてない。ここにルキアがいてくれるだけで、私はもう何も怖くない。

「私もだよ。ルキアに呼ばれて……………ルキアと誓うことが出来て、本当によかった。」

伝えきれないほど、そう思うの。森の奥で貴女が私を呼んでくれて、その声が私に届いて、

貴女と誓えうことができ本当によかったと思うの。それは死ぬまで

変わらないよ、絶対。

「さあ、もう一回飛ばう？」

初めて共に空を飛び、雨に濡れたあの日のように。

第77話　：セルス

「南の雲行きが怪しいですね。」

「ああ、本当だ。こっちに来るかもしれないな。」

そうブツブツと話す俺とマティスの上にはからりと晴れ上がる空が覗いている。

どこまでも続いていそうな空の端には、曇った場所が見えた。

アカンサスに来てからもうすぐ一週間が経とうとしていた。

ようやく軍事部からコアの配属場所を聞くことができ、コアの居場所が分かった。

そして彼女がまだこの地で生きていることも。

「あ、あそこじゃない？」

「ああ、そうみたいだね。」

「あそこが東の村バンセル……。」

「資料に載っている写真より、ずっと何もありませんね。」

そう言うマティスの手にある資料に載っている写真は、

とても色鮮やかな家が立ち並び、村と言うより、大きい町のように映っている。

ゆっくりと空を飛んで、村全体を見て回る。地上に近づいても、家屋のほとんどは崩壊していて、

日照りに村の人々はしなびているようだった。

「降りるか。」

「そうだね。」

俺の意見にロイが賛成の声を上げて、ゆっくりと俺達はドラゴンを

地上へと降ろした。

乾いた土の上に足を下ろして、ゆっくりと歩く。アルはしばらく俺を見て静かに空に戻った。

熱い風ばかりが吹きぬけて、何かを羽織っていないと肌が真っ赤に焼けてしまいそうなほど熱い。

服の下では汗が流れて、滴り落ちてきている。しかし周りには水の精霊は影すらもなく、精霊自体存在していないようだった。

「こんな所に・・・コアが？」

「ねえ、あれ見て！」

不思議に思いながら歩いている俺の肩にリラが手を乗せて振り向かせた。

彼女の視線と指が指す方向に居るのは、期待したコアではなく、小さな女の子だった。

しかし、リラが指差したのは女の子ではない。端は茶色に染まっているが、

地面をこすりながら羽織られているのは、元は白かったコアのマントだ。

「コア!!！」

「コアっ!!！」

ロイとリラはその幼く小さなマントを羽織る少女に駆け寄っていく。

「コア・・・か？」

確かに背は小さいが、何もあそこまで小さかったわけじゃない。

もう何ヶ月も会っていない彼女だが、俺は好きな奴の背丈や顔立ちを忘れるほど非情ではない。

「え？あの子がコアちゃん!？」

俺の隣ではマティスが驚いた顔をしている。こいつが驚いた所を見るのは、初めてな気がした。

駆け出したリラとロイはがばつとその少女に抱きついた。その少女の目は丸く驚いている。

どう考えても、やっぱり彼女がコアだとは思えない。

「元気にしてたの!？怪我は？どうしたの？こんなに小さくなって
!!!」

「何があつたんだ!コア!!」

もうボケにしか感じられないが、2人はいたって本気のようなだ。

そんな2人のいきなりの攻撃に少女はまだ驚いて二人を見つめている。

「リラ、ロイ離してやれ。驚いてる。」

ゆっくりと歩く俺とマティスが少女の傍につくと、コアとは全く違
った。

そんなものは遠くから見ただけでも分かっていたが、少しの気体を
捨てきれずにいたのも事実だ。

「ごめんね、平気？」

俺がそう声を掛けると少女は我に返って、ぶんぶんと頭を大きく上
下に振った。

髪がサラサラしていて短くて色素が薄い所は、コアに似ていなくも
ない。

そう考える俺も、やっぱり馬鹿なのかもしれない。

「そのマント、どうしたの？」

俺の質問に少女はその白いマントをジッと見て、静かに答えた。

「知らないお姉ちゃんくれたの。この靴も。」

そう言った少女は自分のはいているブカブカの靴を俺に見せた。

何もかもがブカブカで、バランスは限りなく悪い。それでもこの日と熱い地からは充分に守ってくれる。

確かに彼女はここにいた。そう思った。

この白いマントはとても大切なものはずなのに、靴だってなければ困るはずなのに、

それでもあげてしまえるお姉ちゃん、なんてコアしかない。

「お姉ちゃんねっ、鞆の中も全部くれてね！村の人に配ってあげてっね！それでお昼も作ってくれて！」

皆凄く助かったの。お姉ちゃんがいる間は、食べ物心配しなくてすんだの！」

少女は急に目を輝かせてそう語った。そう語らせるのは、きっとコアだからだろう。

彼女は今、裸足なのだろうか。荷物もマントもあげて、彼女は日に照りつけられているのだろうか。

きっと彼女はどんなに、全てをあげてしまったんだろう。

真っ白な肌が赤く焼け腫れても、綺麗な足が熱い土に焼かれ、小さな砂に傷つけられてボロボロになったとしても。

彼女はそういう子だ。

「・・・おねえちゃんがいる間・・・ですか？」

ふいに俺達を眺めて立っていたマティスがそう小さく呟いた。

その言葉に俺もハッと気づいて少女を見た。すると少女は俺とマティスを交互に見て答えた。

「遠くに行っただって。おばばが言ってたよ。王様を見つければだって。」

王様を見つけたら、皆もつと笑えるんだって。

だからお姉ちゃんはね、凄く凄く綺麗な真つ白の大きな鳥に乗って行っただよ？」

真つ白な大きな鳥・・・きつと白竜のルキアに乗って、彼女は遠くへ飛んだんだ。

その理由が、王様を見つげるため？

俺は彼女がもうここにはいないという悲しみと、不安にかられた。

熱い風が吹くたびに、きつとコアもこの風を浴びているのだろうなと心を躍らせていたのに。

彼女はもうここにはいない。そんな失望感に襲われている俺にマティスがいった。

「王を探すという事は・・・この国の王家の血はまだ残っているということですよね。」

その王家の者を探すために、ココを離れた。でも・・・そのコアちゃんも誰も残さずにこの村を見捨てますかね？」

マティスは優しく微笑んで、同じように失望しているリラとロイに言った。

マティスがいたいのは、きつとコアの行き先を知る者が必ずいるということだ。

そしてその者はここにいるか、もしくは必ず戻ってくる。

「もう何日か待ってみようか。」

「そうね。きっと・・・行き先が分かるわ。」

ロイとリラにも希望の光が見えたようだ。

ただ何日もここに居たくはない。コアは王を探しに出たのだから、同じ場所ですっとしてゐるわけじゃない。

一日でも早くここを発たないと、コアはどんどん離れて行って、ついには居場所が分からなくなってしまう。

「リラとロイはここにいてくれ。」

「え？」

「セルス！？貴方はどうするの！？ここで待たないの？」

「俺は・・・とりあえず、探せるだけ探す。情報が入ったら連絡するから。」

ジツとなんてしてられない。一秒でも早くこの腕に、コアの存在を確かめたいんだ。

だから俺はこの村の遠くにある村々を探そうと思っていた。そんな俺にマティスが言った。

「なら、私も行きますよ。」

「え？」

「私は貴方についてきたんですから。」

その目は、一人では不安でしょう？と笑っていた。

「ああ。ありがとう。」

俺やリラやロイよりもずっと年上で、やっぱり時間と経験をつんで
いるだけある。

その優しさはとても暖かく、必ず俺の助けになる。プレんティが好
きだと思っ理由も分かる気がする。
決して変な意味ではないが。

「それじゃあ、行きますか。ロスカ。」

「ああ。アル！」

空に手をかざすと真っ黒の竜が目の前に嬉しそうに舞い降りた。
その横には青いドラゴンが降りる。

『コアを探しに行くんだろ？』

「ああ。」

『ここでじっとしているなんて、たいくつだったんだ。思う存分、
飛ばしてくれ。』

「助かる。」

きっとこの広い台地には幾つもの村があるだろう。そんな村を探し
回るなんて可能性の低い事で、
アルにはかなりの負担である事も理解していた。それでも俺はじっ
としていられなかった。

『私もだ。こんなに空を翔けることなんて滅多にないのだからな。』
「ええ、そうしましょう。」

ロスカも優しく微笑んでいる。命令ではなく願いを聞き入れるドラ
ゴンはとても美しい。

だから早くルキアをこの眼に映したい。白く輝くあの翼が空を舞う
姿を。

そしてその背に乗る、コアの姿を。

「コア」

名前を呼べばすぐそこで、何？と笑って飛びついてきそうなコアがいる気がした。

幾度も約束した事を、俺は果たせていない。

お帰りというつもりだったのに、待つと約束したのに、彼女の影を追ってこんな遠くまで来てしまったのだから。

ただ、それでもいい。約束を破つてでも果たしたい夢があった。

この手でそつとコアを抱きしめたいと、何度も何度も願って。

ごめんと謝る理由をつけて、君に会いに行こう。

この空の下を白いドラゴンと翔ける君に

。

第78話　：セルス

暗い雲が覆う南の空から、強い光が放たれた。

その白い光はまるで、夕焼け空から姿を消す一瞬に太陽が放つホワイトホープのようだった。

白い光が願いを照らすという意味でホワイトホープと呼ばれる、その光が見えるには、まだ時間が早かった。

空の真上には輝く太陽が見える。なら、あの光は何なのか。

「南のシュランという村を知っていますか。」

「え？」

「あの方角にあるのは、シュランという村だけ。」

しかも今の光・・・あれは魔術師のものではなく、ドラゴンマスターの出したものですよ。」

空を緩やかに浮いている俺の隣で、マティスが言った。

マティスは医者を目指しているため、魔術師が使う魔法とマスターが使う魔法の違いを知っている。

そのマティスがそういうのだから、確かにマスターの者なのだろう。しかし今、この地は戦争真っ只中。

貴族であるベール家とハデス家が王座をかけて争い合っているのだ。そんなこのアカンサスで、マスターの放つ魔法が見えたからと言っておかしくはない。

「じゃあ、今あそこは戦っているのかもな。」

「・・・セルス？」

俺の声は全くの興味を示さずに響いた。その言葉にマティスだって気づかないはずがない。

しかしどうしても、どうでもいいと思ってしまう。自分には関係ないと、遠ざけてしまう。

コアと出会って一緒にいて、少しは変わったかもしれないと思っていた。

でも、実際は何も変わりはない。

「貴族の気まぐれに巻き込まれる者は、いつだって不幸を背負って生きていくんだ。」

嫌な感情が心の中に広がっていく。黒くて重くて暗くてじめじめとしている感情が。

この感情を捨てるために、俺は何年もかかってここまで来たのに。

この感情から逃れるために、あの家を出たのに。どうしてまた、俺を苦しめる？

「セルス、私が言いたいのとは・・・あのシュランの村はドラゴンマスターを憎んでいると有名な村なんですよ。」

「・・・マスターを？」

マティスの言葉にすがりつくように、その感情を無視する。

そうすれば全てを忘れて、また笑えるのだ。あの頃の記憶を全て忘れて、唯ここに立っていることだけを考えられる。

コアに出会う前の俺の記憶なんて全て消えてしまえばいいのに。

コアと出会ったあの日に俺は俺として存在し始めたのだから。それ以前の記憶なんて何もいらぬ。

「10年くらい前のことです。赤い竜がシュランを滅ぼしかけた。水も流れないあの村に、火は脅威です。その村に赤い竜のマスターは炎をはらった。」

しかしそれを救ったのは今は亡き、先代の白竜遣いでした。」

先代の白竜遣いとは、コアの祖父であるアンペス・サーノット。

「しかしそれからと言うもの、村の者は憎むようにマスター達を嫌っているのです。

そんなあの村からマスターの放つ光が出るなんて、いくら戦争中だといえど変です。」

コアの祖父と会ったのは一度だけ。話したのはほんの1・2言だけ。しかしその言葉は今でも忘れることが出来ない言葉。

その言葉を思い返した瞬間、ブワツと風が南の湿った空気を連れて駆け抜けて行った。

これからどこへ向かう予定もないだろうその一瞬の風に、ほんの少しだけコアの声が聞えた気がした。

「・・・風が・・・」

運命の神は確かにいる。なら、もしかすると今の風が運命の神だったのかもしれない。

胸騒ぎがだんだんと大きくなっていく。あの白い光はもしかしたらコアのものかもしれない。

「シユランまで・・・どれくらいかかる!？」

「え?・・・えつと、ここからだ、約2時間くらいですかね。あの村に行くんですか。」

「コアがいるような、そんな気がするんだ。」

楽しくて明るくて輝いているような声が、一瞬の風にまぎれていたようなきがした。

ただ苦しく痛みを上げるような感情も紛れ込んでいるような。それ

は唯の思い込みなのかもしれない。
それでも、それでも俺は信じたい。コアと出会った日に吹いた風と同じように吹きぬけたあの風を。

「アル、2時間だけ・・・あと、2時間だけ平気か。」
『馬鹿いな。』

俺を背に乗せる黒い竜は、強がるようにそう言った。

『1時間で連れて行ってやる。』

アルはそういうと急にスピードを上げた。体に吹いてくる風が強くなった。

後ろから急いでマティスが追って来る。そんな事も気にせずアルは猛スピードで南を目指す。

暗い雲がほんの少しずつ近づいてくる。乾いた砂漠のようなこのアカンサスの血にも森のような物があるのが見えた。

鬱蒼と木が生い茂る、そんな森は蜃気楼のようにそこに存在していた。

その森を越えたとき、後ろから追いついて隣に並んだマティスが声を上げた。

「ちょ、セルス！本当に行くんですか！」

「ああ。」

「あそこはドラゴンを憎んでいる。そんな場所にドラゴンを連れて行くのですか！」

「ああ。」

「セルス、貴方はそれでもマスターですか！」

『マティス、こいつはマスターだ。俺はこいつを信頼してないわけではない。』

こいつはそれでも行くと判断したんだ。だから俺が被害を被ることなんてない。』

ドラゴンとはどこまでお人よしな生き物なのだろうか。

疑うことも知らずに、自分の傷も気にすることなく、ただ主を思つて空を飛ぶ。

アルだつてそれは同じだ。いくら元気だと言っても、疲れていないといえればそれは嘘になるはずなのに。

それでも半分の時間をつけるように、最大限の力を出して空を飛ぶのだから。

俺をここまで信じているのだから。

「お前は・・・俺が裏切つたらどうするつもりだよ。」

きつと苦しむのに、そう分かつていても疑うことなく信じ続けて。ドラゴンと言う生き物はどこまでもお人好しで、優しく、穏やかで、自己犠牲の激しい生き物なのだろう。

人間とはまるでかけ離れた、神の使いのような生き物を人間なんて生き物が従えてしまう。

この世界では、ドラゴンは人に使える生き物だと言うマスターのほう、断然多い。

けど思うんだ。人間なんかがこんなに清いドラゴンの上に立つ資格なんてない。目の前に現れる資格さえない。

『ふっ、やっぱり馬鹿だな、お前は。』

「パートナーに向かつて馬鹿とは酷い奴だ。」

『馬鹿だから、馬鹿なんだ。お前が俺を裏切ることと、俺がお前を信じることは全く関係ないことだ。』

だからお前が俺を裏切つても構いやしない。

裏切りだなんて感じる程度の信頼なんて、あいにくだが持ち合わせ

てないもんでね。』

皮肉の混じったその言葉に、俺は思わず、ほんの一瞬だけだが泣きそうになった。

俺が裏切っても、アルは決してそれを裏切りだとは思わない。その程度の信頼ではないのだと堂々と言った。

どこまでも信じていて、俺をまるで善意の塊みたいな綺麗な人間のように思わせる。

ドラゴンの優しさは、全てを包み込むほど大きなもので、こんな汚れた人間の俺にまで、溢れるほどに与えてくれる。

心が広くて優しく、人を信じて、誰も裏切ることはない。

「ドラゴンはどうしてそんなに・・・人を信じられる？」

『はぁ・・・、ほんつとくに馬鹿だな、お前。俺達ドラゴンが信じるのは人間じゃねーんだ。』

そう言ったアルの言葉に、心の中で小さな納得が生まれた。

アルが信じているのは、人間なんかじゃない。そう、神族のドラゴンはきつと神を信じているのだ。

だからきつとこんなにも優しく、暖かく、人間に微笑むことが出来るのだろう。

それなら納得できる気がした。アル達は人間を信じているのではなく、神を信じているのだろう。

「神を信じているから、そんなに・・・」

『それもはずれだ。俺達ドラゴンが信じるのは神でも人間でもねー。一生と言う時間をかけて誓った、我が主^{マスター}だけだ。』

心地いい風が体を包み込んで、それはまるで神気のように清らかだった。

汚れた血も持つ俺を、いつだって受け止めてくれるアルはまるで俺にとつての神だった。

「ドラゴンは、どうしてここまで美しいんですかね。」

青いドラゴンもアルの言葉に、微笑んでいる。

その背でマティスが、そっとその青い肌を撫でながら呟いた。

『お前の傍だけが、俺の目指すものに近づける可能性がある、唯一の場所なんだ。』

黒い肌に赤い眼をしたアルの目指すものは、何十年も前に世界中の空を駆けていた、伝説の白竜。

肌は白くもないし、目だって青ではなく赤だからアルは諦めていたと言った。

それでも諦めきれずにいたところで、俺と出会った。

湖の端に静かに眠るようにしてそこにいたドラゴンは、心の中で俺の名を呼んでいた。

黒くて、俺の足音に気づいてこっちを見るそのドラゴンの眼は赤く鋭かった。

「ならお前の目指すものを与えてやるよ、必ず。」

お前が憧れたのは、あの白い肌でも、青い目でもなく、幸せそうに空を飛ぶ白竜とマスターだろう？

白い肌は与えられない、青い目だって与えられない。けど、アルが真に望むものなら与えられるかもしれない。

『ああ、頼んだ。』

お前はいつだって俺を信じているのだろう？なら、俺はその気持ちに答えられるだけ答えたい。

俺が裏切ったとしても、決してそれを裏切りだなんて感じることはないほど俺を信じてくれるお前に。

俺が与えられるものなんて、ほんの小さなものなのかもしれない。

けど、お前はその小さなものが欲しくて俺を呼んだのだろう？

もんの小さなそれを与えられるのは、俺だけだと思ったから一生と言う時間を掛けて誓ったのだろう？

だから俺はどんなに小さなものでも、お前に与えてやれるだけ与えてやろうと思う。

俺の一生と言う時間を掛けて、お前が欲しいというものをお前に与えてやろうと思う。

お前が俺に一生の時間を掛けて誓ったように

。

第79話　：ブレイズ

雨がザアザアと音を立てて地面目掛けて走っていく。

その一粒一粒が箒に染みて、スピードと威力は確実に落ちていく。

「何してるんだよ、ハデス家は！！」

もうすぐそこまで迫っているベーレ家の軍に、ハデス家が気づいていないはずがない。

それならどうしてハデス家の軍は来ないのだろうか。

「知らない！！来たぞ！！」

雨の中をトレスの音が響いて、俺とルアーとジェラスは軍のほうから飛んでくる魔法弾を見つけた。

湿気た箒は不安定極まりない。そんな状態でも高等魔術師のプライドが弱音やいいわけはできない。

俺はここに民を守りに来た。力無き者を守るために高等魔術師になつたんだ。

目の前には緑やら黄色やら青やら、色とりどりの光の弾が雨など気にせず飛んでくる。

魔法弾には、当たった箇所を焼く力がある。その威力は小さいが、馬鹿には出来ない。

「人を焼き払う光が、作り手の元に戻るように！」

冷たい雨に体が冷えていく。冷たい両手を翳して飛んでくる光に命令魔法をかけた。

ルアー達も同じように追い返している。しかし、そんなこの場しの

ぎの魔法では、相手にならないだろう。
負けないためには、こちらからも攻めなければならぬ。しかし、
俺たちの中で一人たちとも攻める事を望む者はいない。
戦わずして勝つ、それが俺達の望む戦いだった。

「・・・つくそ！また来た！！」

今度は数が5つやそこらじゃない。視界に映る限りの魔法弾が飛んできた。

これでは追い返す魔法は掛けづらい。できる事は自分のみを守る魔法をかけるだけ。

「我の身を守るように！！」

「我が身を包み込み守るように！！」

凄い数の魔法弾はそれこそ雨のように俺達に降り注ぐ。こんな事で魔力を消耗しているわけにはいかないのに。

傍にいるトレスも必死でその魔法をかけて、ジェラス達も自分の身を守るので精一杯のようだった。

俺達がかけた結界魔法により、魔法弾は弾かれて下へと降りていく。その瞬間、魔法弾が消え、視界が晴れると、魔術師が空から矢を放とうとしているのが見えた。

「もう守り体制じゃ無理だ！！行くぞ！」

「分かった。でも・・・」

「傷つけない方法で行こう！」

「捕らえれば問題ないだろう。」

トレスに続いてルアーとジェラスがそう言って、俺は頷いて先頭をきる。

この辺り一面には水の精霊が充満していて、今にも溢れそうなほどの力がある。

「水の精霊よ、我に力を与えよ。・・・水流が滝のように全ての攻撃を防ぐように！！」

そう叫ぶと辺り一面にいた水の精霊は最大限の力を与えて、俺の目の前に大きな魔方陣を描いて滝のように水を出させた。

その勢いに俺の体は思わず後退していく。その水が飛んでくる矢を飲み込んで尚進み続けている。

その水が、矢を放とうとしている魔術師までたどり着いたとき、隣でトレスが大声を上げた。

「流れ出した水が温度を下げ、氷と化し、動きを制するように！！」

そのトレスの両手からは冷気が溢れ、俺の出した水はパキパキと白く凍り始めた。

氷に体を捉えられた魔術師はその場で身動きがとれずにいる。

その間に箒を最大限まで飛ばして、空に残る魔術師とドラゴンマスタを捕らえなければならぬ。

そう考える俺の後ろに、きつと同じことを思っているジェラスが着いてきた。

こいつは気が合うだけじゃなかった。まるで心が繋がったかのように感じさせる何かがあった。

そんなジェラスの顔を見て笑うと、ジェラスもかすかに笑った。

「水の精霊よ、滝の水流を流し、全ての者に水を与えるように。」

また冷たい手からは大量の水が溢れる、雨にぬれる魔術師とドラゴ

ンマスターは水なんてどうでも言いと思っているのか、
防御の魔法すら掛けようとしない。魔力消耗を防ぐためだろう。

「流れ出した水の水温が下がり、氷と化して、その動きを制するよ
うに。」

その魔法に水は氷となり、さっきと同じように魔術師やドラゴンの
体を固めて、動けなくした。
しかし、さっきと同じようにいくわけはなかった。

「氷よ鋭い剣となって、我等を阻む者を突き刺せ！」

「熱風により氷の温度が上がリ、水へと戻るように！」

魔術師達の次々の言葉に俺達は反応することが出来ず、四方八方か
ら飛んでくる氷の鋭い剣が体を切り刻む。
腕や足を掠るだけならまだよかったが、湿った筈の所為で避けきれ
ず小さな欠片がいくつか体に牙を立てた。

「っ・・・っ！」

「熱風！」

ジェラスは俺の小さな呻き声に反応して、動けずにいる俺の前を飛
んでくる氷の結晶に熱い風を当てつけた。

その瞬間にユラリと俺の前の視界は歪んで、蜃気楼のようになると、
氷たちを解かして消していた。

それから急いで俺は体に刺さった棘を抜き取る。その氷には血がつ
いて赤く染まっている。

「・・・っぐ・・・っ。」

もう一つ自分の声ではない呻き声が耳に入る。雨の音にかき消されてしまいそうなほど小さな声を上げたのは
俺を狙う氷に熱風を浴びせて、その間自分の防御をおろそかにした
ジェラスだった。

「おい！ジェラス！！」

ジェラスに刺さっているのは、小さな欠片ではなく、氷の断片そのものだった。

その痛みに耐えるようにジェラスは顔を歪ませて、自分の体に突き刺さる氷を勢いよく引き抜いた。

「・・・っうあゝ・・・っ、は・・・はあ・・・」

「ジェラス！・・・呪縛の魔法により、雨が渦になり、魔術師を捕らえるように！」

「そんな高等・・・魔術・・・」

今この魔法を使わなければ、もつと傷つく。たとえ消耗が大きいとしても、捕らえなければ攻撃され続けられる。

今のジェラスには、こんな消耗の激しい魔法を使うことは危険だ。なら、俺がするしかなかった。

俺の魔法によつて空から降る雨は渦を描いて、魔術師たちの視界を奪い、動きを止めた。

「降り注ぐ雨よ、刃となり、かの魔術師を刺せ！」

「防御の魔法により、我とジェラスの身が守られるように！」

「防御を逃れ彼らに降り注ぐように！」

「ぐっあっ・・・！」

「っうっ・・・」

大粒の雨が防御の壁を通り抜けると、剣となって体を真上から突き刺した。

氷よりも小さい者の、その痛みは確かに存在して体が悲鳴を上げる。筭を安定させる力も失い、体が重力に沿って落ちていく。

空と魔術師とドラゴンがどんどん遠ざかっていく。ジェラスの体もそのあとから俺に追いつくように落ちてくる。

あいつだけでも守らなければ、一瞬そんな想いが頭の端に思い浮かぶと両手が勝手にジェラスに翳された。

「浮遊の・・・魔・・・法により、ジェラスの体が・・・空中に留まるように！」

その言葉を言い終わると、手の前に魔方陣が浮かび上がり、バツと消えて、彼を透明に近い結界のような物が覆った。

それを見ると安心して体の力がフツと抜けた。痛みも何も感じなくなっただような気がした。

しかしその瞬間、真っ白の何かが俺の目の前を通って、俺の右手は強い衝撃を受けた。

その右手を見ると、しっかりと小さく幼い手に握られていた。

「・・・コ・・・ア？」

「死なないでっ・・・私の目の前で誰も死んで欲しくなんてない！」

雨に濡れ白く輝くドラゴンと、その少女は俺の手を握ったままゆっくり地上へ降り立った。

俺は力なく地面に足をついて、握られている右手を見た。

「お前っ！！この手・・・!?」

俺を握るその幼い少女の右手からは、真っ赤な血が止め処なく溢れ

ている。

そんな手で落下していく俺を引き止めるなんて、きっと考えられないほど痛い筈なのに。

少女はそんな痛みを隠すわけでもなく、俺に微笑むとゆっくりとドラゴンの背にまたがった。

「ルキアがいるから平気なの。」

その声を合図に白いドラゴンは俺の前から飛び立ち、また空高く昇って行った。

数え切れないほど残っている魔術師とマスターに向かって、たった一人の幼いドラゴンマスターが突っ込んで行った。

向こうの方では氷を解いた魔術師を相手にトレスとルアーが戦っている。

空中にはまだ、ジェラスが浮いている。

ゆっくりと時間が止まったように、魅せられた。

雨の中を白いドラゴンと白いワンピースを着る少女が空を舞った。

その瞬間、空に切れ目が生まれ明るく眩いほどの日の光がその二人に注がれた。

「白のドラゴン・・・」「伝説の・・・マスター」「あれが・・・」「幻の白竜・・・」

地上からは零れるような小さな声が生まれた。

地上で辺りを焼き払っていた兵士も、空で俺達を襲った魔術師もマスターもそのドラゴンマスターズに魅せられていた。

たった一瞬、ほんの一瞬だけだが、全ての者は戦うことをやめ、光を浴びて空に舞うその二人を見ていた。

『幻の白竜が誓う時、伝説のマスターが現れる。』

予言書に書かれている伝説を果たすたった一人の少女が現れた。

たった一人の少女と、たった一頭の白竜が空を舞う。

万人の時刻ときを止め、この世界を平和へと導くために。

第80話　：コア

ねえ、ルキア。

貴女はこうなることを、分かっていたのかな？

私はなんとなくだけど、少しだけだけど、こうなる事を知っていたような気がするよ。

「永遠捕縛のアレスト！」

雨が止んで雲の合間から光が差し込む。それは希望をかたどる絵のようで、未来を映す写真のように美しい。

空の天気はこの世界に関係なくコロコロと変わるけれど、本当はとても優しいのかもしれない。

炎を消すために雨が降り、私達に未来への希望を与えるために光差す。

「コア！！」

後ろから名前を呼ばれて振り返ると、髪の毛を降ろしたトレスがいた。

その横にはルアーも一緒だ。

トレス達と戦っていた魔術師は木の幹のようなものに絡まれて、動けなくなっている。

「2人とも・・・平気？」

しかし2人には小さな傷が幾つもついていた。そんな2人は私の言葉に優しく微笑んだ。

風が吹いた。

「平気だ。」

「ああ、なんとかな!」

進まなくちゃならない。これから何度も戦うのだ。その道を選んだのだから。

だけど私は心のどこかでこうなることが分かっていた気がする。

王を探そうとする前に、守るために戦って、守るために戦いながら進んでいかななくちゃならない。

だけど私は戦わずして勝つと決めたから。勝つんじゃない、負けないマスターになりたいの。

「それよりコアの手・・・!!」

「え?・・・なんだそれ!どうしたんだ!??」

2人は驚いた顔を少し歪ませて言った。右手は未だに血は止まるとなく流れている。

風に触れるたび、その痛みは確かに感じるが、もう気にしていない。

「平気だよ。」

私が笑ったとき、急に2人が前に向けて両手を翳した。

その先からはドラゴンが3頭マスターを乗せてやってきた。空を翔けてくるドラゴンのうち2頭は灰色で

その2頭に見え隠れしていたドラゴンがバツと高度を上げて、姿を見せた。

「赤竜・・・!??」

『赤い竜なんて珍しいですね。』

一度シユランを滅ぼしかけたドラゴンとマスター。きっとその時の赤竜に違いない。

「赤いの、私が行く！」

「コア！ちよっ・・・炎の魔法により、彼らの進行を阻むように！」

「風の魔法により、我等に近づく事のないように・・・コア！！気をつける！」

赤竜はただ、空の上にたたずんで、その二匹の戦いを眺めているようだった。

近づくと、その背に乗るマスターの姿が見えてきた。すると近づいていく私達に、急に炎を放った。

そのいきなりの攻撃に、ルキアはすばやく身をかわす。

「ほお・・・白竜遣いか、懐かしい。」

低い擦れた声が出た。その声の主は赤いドラゴンにまたがり、にんまりと微笑んでいる。

やっぱりこの人だ。シユランを滅ぼそうとして、白竜に阻止された赤竜の主。

許せなかった。無意味に人を殺そうとするマスターが、ドラゴンをそんな事のために飛ばせるなんて。

ドラゴンは生き物を殺す事をとて嫌う生き物なのに、殺すために飛ばすなんて。

「どっして！！」

私は思わず叫んだ。理解できなかった。いや、できなくてもよかった。

ただ、その理由を知りたかった。どんな理由でも、人を殺すのは最

悪だ。

けど、その理由がどうしてもしりたかった。どうして無力な者にドラゴンの炎を向けたのか。

「どうして・・・シユランを！」

あれからもう10年以上たっているのに、彼らを今尚苦しめるほどの悲劇を与えた男が目の前にいる。

その顔はおじいちゃんと同じくらいの年で、白髪が混じり、強く恐ろしいほどに睨んでくるその目の端にはしわがある。

きっとこの人を止めたのは、おじいちゃんだ。私が5つくらいの時、おじいちゃんは何日か家に帰ってこなかった。

その時、エルクーナに乗って、このアカンサスへ来ていたのだろう。

「理由なんてない、憂さ晴らしだ。」

下では大声で叫ぶ声や、剣の交わる音、魔法がかけられる音や、馬が走る音がする。

そんな下に比べて、上空はとても静かだった。これが空の聞いている音たちなのかもしれないと思った。

私達の世界とはまるで関係のない世界を、空はただ存在しているようだった。

「・・・最低・・・、貴方だけは許さない。」

「ふっ、あの白き使い手も同じことをいっとなわ。許しなど誰も扱いてはいない。」

一つ聞きたいが、お前と私との違いなどあるのか？私が許されなくて、お前は許さないという違いはどこにある。」

赤いドラゴンの上から、そのマスターは私に聞いた。その質問に、

私の声が詰まった。

私とこのマスターに違いがあるのだろうか。

それは幾度も感じたことだった。守るために戦うと言ったあの男の人と、私は違うのだろうか。

このマスターは今、軍に仕えているため、守るためと言われたら違うとは言い切れない。

なら私はどうなのか。私はこの人を許さないといえるマスターなのか。

「幼いな。行け、ハンソン！」

『・・・仰せのままに。』

考えている私達に、彼らは突っ込んできた。ルキアはその攻撃に急いで反応して避ける。

赤い竜が何度も私達に炎を吐いた。ルキアはそれに対抗するように、何度も冷気を吐く。

しかし、マスターもただ見ているだけではなかった。そのドラゴンに加勢して、ドラゴンが吐く炎に魔法弾を幾つも混ぜた。

ルキアが吐いた冷気により、炎は一切届くことはなかったが、炎の中に隠されて進んできた魔法弾はルキアの肌を掠った。

「ルキア！」

『平気ですよ、これくらい。』

魔法弾が掠った傷跡には、火傷のように黒く焦げて煙を小さく上げている。

白い肌はその部分だけ黒くなる。だけど私は未だに答えが出せなかった。

あの男と私のどこが違う？守るためだといいいながら、結局はこうし

て戦うためにルキアを飛ばせている。
あの男を傷つけるために、空を飛ばしているのと同じじゃないの
だろうか。

もういい、もうやめよう。そう言葉に出しそうだった。

『コア・貴女はまた……』

だけど私はもう躊躇ったりしないと思った。

「水よ我に従い、彼を捕らえよ！ウォーター！」

人を傷つけることが、人を守ることじゃない。誰かを傷つけなくて
は守れない時なんて、この世界にはないのだ。

誰も傷つけずに、人を守るなんて無理かもしれない。でも、無理で
もその方がずっといい。

私の出した水は重力に逆らって、凄い勢いで赤竜の炎も魔法弾も追
い払い、その体にたっぷりと染みだ。

するとルキアは今まで以上に冷気を一気に吹きかけて、私の水を一
瞬にして氷に変えた。

「私は貴女とは違う。誰かを傷つけないと、人を守る事はできない
なんて、誰が決めたの。」

私は誰も傷つけずに、守ってみせる。そのために、私がどれだけ傷
つくとしても。

だから、貴女とは違う。誰かを傷つけることと、守ることは違う。
自分の、誰かを傷つけないければ守れないという未熟さを言い訳にし
て、人を殺したりなんかしない。」

守るために戦う。その戦いの中で重要なのは勝つことではなく、負
けないこと。

それはきつととても大変な事で、勝つよりもずっとずっと難しいことなのだろう。
だけど、それでも逃げたりしない。ルキアが傍にいるのだから。何も怖くはない。

「馬鹿な。」

男がそういうと、2人を包んでいた氷は一気にバラバラに飛び散った。

その残骸から私を守るようにルキアが翼で盾を作る。

「あの男もそう言った。お前みたいに悩みはしなかったがな……。人なんて生き物はちっぼけだ。ちよつとつっただけでも死んでしまっただる。」

そんな生き物を敵にして、殺すことなく守るなんて不可能だ。」

全てが全てそうは行かないかもしれない。だけど、できるだけそうできるように努力する事はできる事で。

それは決して無駄なことなんかじゃないから。

「ちっぼけな生き物だから、守るの。ほんの少しの事で死んでしまえるから、大切にするの。」

そんな人間が敵だって、それは変わらない。相手がちっぼけなら、私はその分傷つけないで戦うことができる。」

けど、逆に赤竜のマスターのように強い人間だったら、そうはいかない。

どれだけ頑張っても自分の力最大限でようやく張り合える相手を、傷つけないようにする余裕なんて自分にはない。

だから、きつとこの先私は人を傷つけて進んでしまう。そしてその

度に後悔して、悲しみに涙を流す。

「最後だ。バリアント・ブレット！」

男はそういった。唯それだけだった。

私に向かって手をかざすと、大きな魔方陣をその両手の前に描いて光の魔法を作った。

その魔方陣の大きさからしても、私の結界では守りきることもなんか出来ない。

きつとルキアが避ける事だって不可能なほど大きな魔法弾だ。それを逃れる唯一の方法は、同じだけの魔法弾をぶつける。

「ビーミング・ブレット！」

私の小さな傷が幾つもついた左手と、真っ赤な血が乾いている肌の上をまだ赤い血が流れ続けている右手を重ねる。

その両手の前には彼と同じくらいの魔方陣が大きく広がった。

「コア！？」

ルキアの声が響いたとき、私の魔方陣と彼の魔方陣からは、

大きな光が放たれて、滝の水ように流れ出す白と赤の魔法の光が左右から交わった。

白い光が私の魔方陣から止め処なく溢れて、今にも全てを飲み込みそうなほどの力をぶつける。

向こうからは赤い光が私たち目掛けて全てを飲み込むほどの力で進んでくる。

たった一瞬気を抜けば、命なんてなくなる。

「……駄目……私は……負けられない。守ると決めたものが

ある。たくさんの約束もある。」

あの村を守ると約束した。この世界を平和にすると誓った。ただいまを言うために戻ると約束した、大切な人がいる。セルスに会うまでは、死ねない。

光は輝きを増して、進んでいく。

それはたった一瞬のことだった

全ての音が消えて、光だけが世界を暖かく包んだ。その光は赤ではなく、白の光だった。

第81話　：ルキア

雨が降って地面の炎は消えて、雨が止んで低く暗い雲の合間からは光が覗く。

そんなこの世界を強く輝く光の魔法が、全ての者に終わりを告げた。

「・・・終わっ・・・た・・・？」

「終わったのか・・・？」

人々はポツポツと呟いた。

あの真つ赤な血が流れる右手を翳して、彼女は白い光の魔法を放った。

その光は赤の光と混じりあい、その光を払いのけてこの世界を眩く照らした。

その光が消えて、世界が目の前に現れた時、その目の前の景色から赤のドラゴンと人間が地面に落ちていくのが見えた。

それを私の背中から見たコアは、ほとんど全ての力を使い果たしているはずなのに、まだ手をかざして小さく呟いた。

「風の神よ・・・精霊・・・よ。彼らをゆつくりと・・・地に下ろして・・・
ウインディー・・・」

その力ない言葉に、止めてと言ってしまいそうになった。

その残りわずかな魔力で魔法を発して、ドラゴンとそのマスターを優しく地へと降ろす。

するとコアは弱弱しい声で、降りてと私に囁いた。

その声にしたがって地面にゆつくりと降ろすと、コアはその小さな体を私の背中から下ろして、とぼとぼと歩いた。

彼女が歩いていく方向には、老人に近い赤竜のマスターと、その後

るには大きな赤竜がいる。

『コア……？』

私の声に振り返ることなく、少女はただゆっくりと静かなその場所を歩いていく。

コアの光でベーレ家の軍は力をなくして、唯その場に座り込んでいた。

そして空を飛ぶ魔術師やマスター達も力なく、一人で歩く少女を眺めている。

コアはその視線が集まる静かな場所を一步ずつ、ない力を精一杯に振り絞って歩いていた。

その足が赤竜のマスターの横を、スツと通り抜けて、まだ進んだ。

「……ごめんなさい。」

コアが小さくそう言って止まった場所は、赤いドラゴンの前だった。ドラゴンはコアの声に思い首を小さく動かして、その目にコアの姿を写した。

その赤いドラゴンの頬に小さな手が触れて、震えた声がもう一度はつきりと響いた。

「ごめんなさい。」

彼女の足元にポタリと何か水滴が落ちた。私に背を向けて立つコアがとても悲しそうな声を上げている。

その水滴は涙である事を誰もが気づいた。

「……貴方の大切な人を……傷つけた。」

赤竜は何も言わずにその少女を目に映していた。そのドラゴンにコアは小さく小さく呟いた。
その小さな小さな声でさえ、静かに響き渡るほど、あたりは静まり返っていた。

「こんなつもりじゃなかった・・・なんて言い訳はできない。
貴方の大切な人を傷つけて・・・こんなつもりじゃ・・・。」

こんなつもりじゃなかった、それはコアの心にある本心だと私は知っている。

彼女はただこの戦いを終わらせたくて、彼を捕らえたくて、人を守りたくて、光を放つただけ。

その光に負けてしまった彼等は、傷つき力を失った。

そしてもうすぐ、赤竜のマスターの命は途絶え、ドラゴンは静かに鼓動を止める。

「ごめんな・・・さ・・・いつ・・・！」

『コア・・・』

何も誤る事なんてない。コアはただ、大切な人を守りたくて、戦争を終わらせたくて、

ドラゴンにこれ以上人を傷つけさせたくなくて、光を放つただけ。
人の感情とはとても小さなものだが、時にとても大きな影響を与える。

たった幾つかの願いが、大きな思いを生めば、世界はその大きな思いによって大きく変えられていく。

「貴方のマスターを・・・傷つけてしまって・・・ごめんなさい。」

綺麗な赤い肌に、たくさんの傷を与えて、痛みを与えて、ごめんなさい・・・。」

何度も何度も謝りながら、少女は涙を流し続けている。そのコアの姿を赤いドラゴンは静かに見ていたが、コアがその場に座り込み、小さな手で顔を覆って泣き声を上げたとき、口を開いた。

『そなたは何も悪くはない。』

ベールとハデスはこの大きな土地を自分の物にしたかっただけ。

ここに争いに来たものは、手柄を上げたかっただけ、主の役に立ちたかっただけ、大切な人を守りたかっただけ。

私はコアを守りたかっただけで、コアも私や大切な人を守りたかっただけ。

傷つかないために、傷つけあってしまっただけ。

そんなたった幾つかの願いが、大きな思いを生んで、世界は動く。

「私はつ・・・」

『白竜が悲しそうな目で見ている。ドラゴンを哀しませるものではない。』

落ち着いた静かな声がコアに降り注ぐ。

そのドラゴンがチラリとこっちに目を向けた。その目はとても温かく、穏やかだった。

『白竜が選ぶマスターの眼は、とても綺麗だ。だから、その目を涙で曇らせないで、こっちを見てくれ。』

「・・・」

『いいか、白竜遣い。私はあの主と誓った事を間違いだとは思っていない。命の終わりが、どんなものであっても。』

我が主がこれ以上命を殺める事のないように。私はどこかこのような

る事を望んでいたのかもしれない。』

コアは泣くのを止めて、またそつとそのドラゴンの頬に手を当てた。それから震える声で言った。

「その望みを叶える方法なんて・・・たくさん・・・たくさんあったのに・・・つ。」

『けれど、そなたは何も悪くはない。私は彼に仕えて幸せだと思つた時もあった。もうずっと昔の事だが。』

それでも誓つた事を悔やみはしない。こうなつてよかつたんだ。』

誰もその光景に言葉を足さなかつた。

時間だけが音も立てずに過ぎていく。空は暖かく雲が開かれ、風が吹いている。

コアの小さな願いが、たくさんの人の小さな願いが、強い思いを生んで、世界は動いた。

かすかな風が空の雲を動かし、この地に光を舞い込むように。

赤竜はそれだけ言つと、首をもたげて静かに目を閉じた。その赤竜からコアはそつと手を放した。

その眼からはまた涙が溢れている。

『この世界を変えてくれないか。次目覚めて、もう一度彼と契約を誓つても、同じ事が二度と起こらない世界に。』

それが最後の言葉だった。赤竜はその言葉を最後に眠つた。

その体からは赤い魂が主である男の体にスツと溶け込んで、その男に赤い羽根を与えると一瞬にして消えてしまった。

何の音もないこの場所に風が優しく吹いた。コアの右手からはまだ止まることなく赤い血が地面へ落ちていく。

穏やかな顔で眠る主に沿うように、赤竜が眠っている。

ドサッ”

静かなこの場所に1つだけ、音がした。

『コアっ！！』

そう音を立てて倒れたのは、魔力を使い果たし、血をたくさん流したコアだった。

私は急いでコアの前に駆け寄った。その顔には涙のあとがいくつもついている。

こんなに小さな子が、この戦争を終わらせるために戦うのか。私はその頬にそつと顔を近づけた。

そしてこうやって涙を流して、世界を動かしていく。

たった小さな願いだけで、世界はここまで動かせてしまう。伝説のドラゴンマスターになる少女。

彼女の眼の奥にあるものは、いつだってドラゴンである私や赤竜を魅了してやまない。

それだけではなく、彼女の周りにいる人間の心さえも突き動かすほど強い心を持っている。

『世界に無関係で生きていくことなんて、無理なんですよ。』

きつと赤竜はそう言いたかったに違いない。コアは目覚めたらきつと、伝説なんていらないうたろう。

この世界に関わりたくはないと、涙を流して悔やむだろう。

そんな事にならないよう、赤竜は言った。“この世界を変えてくれないか。”と。

きつと伝えたかったんだ。生きていく限り、小さな願いを抱き、強い思いを抱えて、人間は愚かにも世界に関係するのだと。

だから、諦めてはならないんだ。赤竜のためにも、その小さな願いを捨ててはならない。

コアが目覚まし、この世界をその眼に映したら、初めにそう言う。

そう思ったとき、空の端から小さな音を立てて何かがかっちへ向かって飛んできた。

『まさか・・・』

ほんの小さな願いを諦めずに願いつけて、その強い思いを持ち続け、そうやって生きている人間は、いつか見つける。

願う事がもつ意味と、その素晴らしさと、そしてこの世界に生きていることを。

叶うか叶わないのかではなく、願いつけるか諦めるかで、得られるものは変わる。

そして叶っても、叶わなくても、世界は常に動き続け、その世界に關係して生き続けるのだと気づくんだ。

「コア

」

だから世界を飛び続けようと、彼女に微笑んであげよう。

彼女が映す世界には悲しみも苦しみも数え切れないほどあるけれど、この世界と關係し続ける事と、生き続ける事の素晴らしさを教えてあげよう。

第82話　：コア

夢を見ているような気がした。

真つ白なその場所で、私は大好きな人と何度も手を繋いで、何度も笑ってた。

そして今日は、私たった一人でその場所に立っていて、私の上に広がるのはルキアのいない空。

「ルキア？」

いつだって傍にいてくれたルキアがいない。

名前を呼んでも、心で来たと願っても、その旋律の届かないほど遠くにいるのが全く来てくれない。

どれほど遠くても、旋律が届かないときなんてなかったのに。ルキアは私の傍にいない。

「・・・セルス・・・」

ふと思い浮かんだのは、遠い海を渡った違う国にいるセルスの名前。もうずっと会っていない。毎日のように顔を合わせていたのに、毎日のように声を聞いていたのに、もうずっと聞いてない。

会いたいかと聞かれれば、即答する。会いたい。

「.....どこ?」

どうして私は一人なの? どうして誰もここにいないの?

会いたい人はたくさんいるのに、どうして私は一人でこんな所にいるの?

私は白い光で赤竜とそのマスターを、殺してしまった。

赤竜は眠る前に微笑んでくれた。他に方法はいくらでもあったはずなのに、私が未熟だったから、こんなことになった。もし私がつと強ければ、二人は笑いながら空を飛んでいられたかもしれないのに。

私は彼等から空を奪い、地を奪い、命を奪った。

「・・・私・・・」

これが伝説のマスターになる道なのだろうか。

「おじいちゃん・・・」

そうだ、ここはおじいちゃんによく来ていた場所だ。

でもおじいちゃんはとなりにいない。手も繋いでない、笑う声もない。

下を向いていた顔を、何かの音にバツと顔を上げた。

「・・・おじい・・・ちゃん・・・？」

『コア。』

幾度も呼んでくれた声、もう何年も前に途絶えてしまった声。

記憶の中で響き続けることしか出来なかった声が、耳に届いた。

『こんな所に迷い込んだのか。』

私は迷い込んだの？ここはおじいちゃんと一緒に散歩した場所じゃないの？

聞きたいことがたくさんあった。だけど言葉は何も出なくて、ずっと口をパクパクさせているだけ。

そんな私におじいちゃんはゆっくりと近づいて、微笑んだ。

会いたかった、声を聞きたかった、抱きしめて欲しかった、傍にいて欲しかった、また、手を繋いで歩きたかった。

「・・・お・・・じい」

『コア。大きくなったな。』

涙なんかもうずっと溢れていた。夢でも何でも良かった。でも、これは夢じゃない。

私はおじいちゃんのいる場所に來たんだ。

「会いたかった・・・っ」

ようやく出てきた言葉におじいちゃんはそっと手を伸ばして私の頭を撫でてくれた。

すっかりとしたその腕や、焼けた肌、傷ついた手に、強い目は老人なんて者を感じさせない。
お父さんに、そっくりだ。

「会いたくてツ・・・私・・・っ・・・」

言いたい事はたくさんある。大好きな人と別々の道を歩いたんだとか。

ルキアという白竜の綺麗なドラゴンと契約したんだとか、空を飛ぶのはとても気持ちいいよとか。

私幸せだったよって言いたかった。今も幸せだよって。

私は戦って、私は目指して、私は守りたい者を作って、人を傷つけてしまったと。

こんな私に伝説を継ぐことなんかできない。赤竜の言葉が心の中で響いてやまないの。

『大きくなつたのは、中身もじゃな。』

「え・・・?」

『お前の心の声は全部伝わってきとる。白竜のマスターになれて、よかつたな。ルキアというのか? いい名じゃ。』

自分で選んだ道だろう? 大好きな人について行かずに自分の目指すものを選んだのはいいことじゃよ。

わしは全部見ていた。コアの傍から離れてもずっと見ていたからな。』

私は大きくなつてなつてないの。まだ幼かつたあの頃の私のままで、ずっと誰かに守られて、誰かを傷つけることでしか大切な人を守ることが出来ない。

「私はツ・・・」

『わしはグレーナさんと約束したんじゃ。』

「お母さんと・・・?」

『この子をきつと、自分の道を突き進んで自分が目指したものを超えられるようにすると。』

「私が・・・選んだ道をも?」

『その約束を果たされたとき、わしはきつと彼女の隣に眠ることになる。』

お母さんの隣の場所は、この世の楽園と呼ばれる、テパングリユスおじいちゃんはまだその約束を果たせていないから、この世の終わりと呼ばれるエンプティに眠っている。

私が道の途中でこの道に進んだことを後悔して、伝説のマスターになるどころか、一人前のマスターにさえなれていないから。

「もしかしたら、一生・・・おじいちゃんはお母さんの隣にいけないかもしれない。」

『不安か。』

おじいちゃんは小さくそう言って私に微笑みかけていた。不安、そう、不安。これから彼等のように何人もの人を傷つけてまで進んでいける自信がない。

誰かを傷つけないければ得られないものなら、そんなものいらない。

「大切な人を傷つける人にも、大切に思う人がいる。

私は・私はその大切な人を守ろうとする人達を傷つけて、伝説を継ぎたいわけじゃない。」

『わしが永遠と地獄の行き場インプティに眠ることになってるか。』

「うん。・・・寂しいなら私が行くから。私がおじいちゃんの傍に行くから、

私に人を傷つけてまで自分の欲しい物を手に入れるだなんて言わないで。」

風もないこの場所で一人でいるのが寂しいのなら、

エルクーナもないこの場所で一人でいるのが嫌なら、私がここに来るから。

だから人を傷つけても、その人の大切な人を哀しませて、伝説のマスターになれたなんて言わないで。

そういうのなら、私は簡単に伝説なんて捨ててしまえる。

『エルクーナはいるんじゃないよ？ずっとわしの傍にいるんじゃない。だから寂しくはない。』

もしも今お前が、誰かを傷つけてでも伝説を継ぐと言ったなら、わしは無理だというつもりだった。

誰がこんなに育ててくれたのじゃ？わしのいなくなった世界で、お前がこんなに大きくなっていたなんて。』

そんなの一人じゃないよ。

「おじいちゃん、ルキアと、セルスと、リラとロイと……クレズに、ルアーにジェラス……、それとお父さん。」

「……あいつに会えたのか。」

「おじいちゃんにそっくりな眼だった。」

「運命の神は微笑みおったか。」

おじいちゃんはここで、出会うことを願っていたんでしよう？

だからきつと運命の神は私とお父さんを引き合わせてくれた。

ルキアとセルス達と私を引き合わせてくれた。誰かの小さな願いをかなえるために。

「コアが目指す伝説のマスターへの道は、これからこんなことばかりじゃぞ。仲間の誰かが命を落とすときだってある。

わしはそれでもその命を背負って償うことは、目指すものになることじゃと思ってきた。

悲しいことや苦しいことばかりの世界で、お前は人に何を与えられる？」

おじいちゃんはやっぱり、私の目指す人だ。

おじいちゃんはそんな事を考えながら、たくさん傷ついて、傷つけないようにして、エルクーナと空を飛んだ。

私はその背が思わせるものに、いつも惹かれていた。

「私が……与えられるもの……」

「お前を思うものに、お前が与えている物を、他のやつにも与える。そうすれば、悲しみだけの世界ではなくなる。」

大切な人が死んで悲しみを映す瞳に、お前がしてやれることをして

やるんじゃ。

だから諦めてはならない。空を飛び続ける。』

おじいちゃんは誰かを傷つけてしまったとき、そう思いながら進んできたんだね。

おじいちゃんも、きっと何度も悔やみ、何度も涙を流したんでしょ？

それでも進もうと思ったのは、待っている人がいるから。それと傍には、エルクーナがいたからでしょう？

『会えてよかった。いつまでもこうしていたいと思ってしまうな。』

私もいつまでもおじいちゃんとうこうしていたい。

傍にいて、笑いあつて、手を繋いで・・・家に帰ろうか、と歩いていた。

だけど、私はここにいないわけにはいかない。

ここは夢じゃなくて、きつとおじいちゃんの魂が作り出した場所。

私はそこに迷い込んだだけ。

ただどこにいても続ければ、きつと私の心臓は止まってしまう。そしてここから帰ることはできなくなる。

「私もだよ。だけど、ルキアが待ってる。ルキアの命を背負ってるから、私はここにいても続けることはできない。」

ルキアと空を飛ぶことを選んだ。戦うことを選んだ。だから、私は留まり続けるわけには行かない。

赤竜とあのマスターが生きていたこと、私は絶対に忘れない。

それがどんな生き方でも、絶対に忘れたりしない。彼らが存在したこの世界がどれだけ変わっても、絶対に。

『ああ、そう言うと思ったよ。ここに迷い込んでくることがもう二度とないようにな。』

「いつか必ず、お母さんの隣に眠らせてあげる。ちゃんと会いに行く、2人に。」

もう夢の終わりに近づいている。

私はそつとおじいちゃんの手に触れた。ギュツと握ると暖かい。

おじいちゃんの手は伝説のマスターの手で、私の憧れるものをもっている手。

空を飛び続け、幾度も傷つき、傷つけて、悔やんで、苦しんで、哀しんで、それでも進み続けていた手。

「おじいちゃん・大好き。」

『わしもじゃよ、コア。』

その言葉が最後だった。

プツリと音を立てて、その世界は私の目の前から消えた。

真っ暗な世界を漂って、私は目を閉じた。すると遠くから小さく私の名を呼ぶ声がした。

ルキアでも、トレスでも、ルアーやジェラス、ブレイズでもない声が私を呼ぶ。

「 コア 」

この声は私の大好きな人。

第83話　：コア

眼を開くとそこは古い家の天井が見える場所だった。明りが眩しくて、どこからか流れてくる風が心地いい。

「こ・・・こ・・・」

自分の声は何故だか擦れている。そんな私の声にすぐ傍で頭を私に預けていた1つの影が動いた。

バツと私のほうを向いてジッとこっちを見ている。目を細めながらその人影に眼を凝らせる。

するとゆっくりと明りになれた眼に、その人影が写り始めた。

「ああ・・・よかった、コア。」

その声が聞えた瞬間、人影はくつきりとセルスへと変わった。

私はまた幻覚でも見ているに違いない。そう思って静かに目を閉じた。

セルスに会いたいと思うばかり、彼の幻覚を見たのだろう。

しかし自分が作った幻覚の音が安らぎさえ与えてくれる。それほど温かな幻覚だった。

もう一度意識を集中させて眼を開く。するとそこには唇を噛み締めて私を見るセルスがいた。

「セ・・・ルス・・・なの？」

どうして消えないの？そんなに私は彼に会いたいの？

意識だつてもう、朦朧としているわけではないのに、こんなにも愛おしい幻覚があるのだろうか。

そう思ったとき、その姿がバツと視界から消えて、私の首に抱きついてきた。

しっかりした腕と、柔らかな髪と、温かな温度と、セルスの匂い。

「コア。」

もしもこれが夢だというのなら、どうか早く覚めてしまっ
て。そう思った。

これ以上この夢に滞在し続けたら、きつと目覚めたくなって、
きつと私は夢のセルスで我慢できてしまう。

だからどうか、早く覚めて。私を現実へと戻して、本物のセルスを
抱きしめさせて。

「夢・・・？」

「コア・・・コア・・・コア。」

何度も何度も名前を呼んで顔を上げた彼の眼には、薄っすらと涙さ
え伺える。

そつと手を伸ばすとその温かな頬に確かに触れられる。それからゆ
っくりと彼の眼の涙を手取る。

手の先はほとんど感覚がないが、なんとなく暖かった。

「セルス・・・なの？夢じゃなくて・・・本物なの？」

なら私は今までアカンサスへ行く夢を見ていたのかな。

アカンサスへ行って父に会って、大切な友達ができて、王を見つけ
る決意をして、戦って・・・あれは全部夢？

お父さんがどれほどお母さんを愛していたのか話してくれたもの、
全部夢？

私はただ私の家で眠っていたの？

「ああ、本物だ。・・・よかった・・・コア。」

どうして貴方がここにいるの？今までののが全て夢でない限り、あなたがここにいる理由なんてないはずなのに。

もしもこれが夢ならば、早く覚めると願うけど。

もしもアカンサスへ行ったこと全てが夢なら、夢に戻してほしい。

私はたくさんのものを知った。たくさんの事を学んだ。その学んだ全てをなくすくらいなら夢に戻りたい。

約束もたくさんしたから。その約束を果たさないわけには行かない。

「どうして・・・私・・・ずっと夢を見ていたの？」

「何の？」

「セルスと離れて・・・ルキアと一緒にアカンサスへ行くの。そこでお父さんに会って、お母さんの話を聞いて・・・。」

王を見つけて平和にすると約束もした。それで戦って・・・そう、私、赤竜とそのマスターを・・・。」

ゆっくりと口に出して語ると、急に手の感覚が戻ってきて、まるで夢から覚めたような気分になる。

右手からは小さな痛みがどんどん大きくなりながら伝わってくる。

その痛みにゆっくりと眼の前に右手を持つてくると白い包帯が綺麗に巻かれていた。

「夢・・・じゃなかったんだ。」

「ああ、夢なんかじゃない。お前はルキアとアカンサスへ来た。」

なら、なら貴方はどうしてここにいるの？貴方が幻覚なの？

「セルス・・・どうして・・・貴方は幻覚？」

「ただいまを言うつて約束したけど、無理だ。謝るから、許してとは言わないから、傍にいさせてほしい。」

「ここ、アカンサスだよ？ここ・・・アカンサス・・・なんだよ！？」
貴方はプーシヤのコントゼフィールで、世界のトップを目指しているんじゃないの？

どうしてそんな貴方がここにいるの？心の声は中々口からは出てこなかった。

ゆっくりとこつちを見て微笑む彼の笑顔を、ただ一秒でも多くこの眼に焼き付けておきたくて。

「ああ、知っている。会いに来たんだ、コアに。」

「セルス・・・」

ムクツと体を起こしても、目を閉じても彼は私の前から消えることはなかった。

これが夢かどうかなんてどうだっていい。彼がこんなに近くにいる。

「ここ、どこ？」

「シユランの長老の家。」

「ああ・・・本当だ。」

戦いの前にこここの屋根の下に座っていた。あの時からどれくらい時間が経ったのだろう。

周りはやけに静かで、風は小さな小窓から入ってきている。外は真っ暗で、夜のようだ。

まるで何もなかったかのようにこの空間は存在している。

「私・・・どれくらい寝てた？」

「3日。・・・もう3日間、一度も眼を開かないまま寝てた。」

「三日も。」

その間彼はずっと私の傍で、私が目を覚ますのを待っていてくれたんだ。

セルスの眼のしたには薄っすらと隈が見える。

何を言えばいいかな。ごめん？ありがとう？会いたかった？

頭の中で言いたい事が一気に押し寄せて、口小さく開いたり閉じたりしているだけ。

その頬を冷たい何かが伝うと、セルスはまた優しく笑ってその大きな手を私の頬に伸ばした。

「また泣くのか。」

「・・・大好き・・・セルス・・・大好き。」

たくさんのお出来事を説明したくて、その間もずっと会いたかったことをいいたくて、私が人を殺してしまった事も

ちゃんとたくさんいいたいのに、口から出るのは大好き、というありきたりな言葉だった。

そんな私の幼い言葉にセルスは唯頷いて私を見る。

「リラもロイも一緒だ。まだ行って欲しくないが・・・心配しているだろうから言う。」

ルキアが傍の野原ですっと眠っている。お前が瀕死状態だったから・ドラゴンにも影響が及んでいる。」

そっだ、ルキア。

私はおじいちゃんの場合にいるとき、きつと瀕死状態だったのだろう。

死の瀬戸際は、会いたい人のところへ連れて行ってくれるのだろうか。だったらお母さんにも会ってみたかった。

覚えてない母の顔を、一度でいいから見てもみたかった。だけど、私はルキアがいる。死ぬわけには行かない。

その気持ちがこっちに連れ戻したのだろう。

私はセルスの言葉に重たい体を布団から出して、ゆっくりとできるだけ早く玄関へ向かって走った。

走ったといつても、他の人に比べたらスローモーションで歩いているくらいの早さに違いない。

扉を開いたとき、重たい体にフワリと夜風が当たった。

「ルキア」

その夜風の通ってくる方には、月の光を浴びてその綺麗な白い肌を草の間に降ろしたルキアがいた。

寝ている間だけだったのに、もつと昔のことに思える。

彼女と共に空を飛んで、この夜を迎えるまでにまるで10年たったかのような気分。

『コア・・・っ！』

一歩一歩の腹に足を踏み入れて、チクチクと体を刺す草を分けながらルキアに近づいた。

魔力のない体には、この世界の大気は重すぎる。

「ごめんね、ルキア・・・。苦しかったでしょ・・・？」

『ええ。でも、痛みを分かち合えたみたいで嬉しかった。』

痛みが引いて、ゆっくりと呼吸が楽になると、ああコアももう平気なんだって心配しないで済んだから。』

「ルキア・・・」

月の光だけが半分焼け爛れてしまった野原を照らしていた。

もう花は一輪も残っていない。ルキアの体から少し離れた場所からは全て枯れた草花が広がっている。

広大と言えば確かに広大だった。遠くまで遮るものがなく見渡せる。風は何を揺らすでもなく通ってくる。音も何も無い静かな夜。

「おじいちゃんに会ったの。」

「そうですか。」

「私が無力な所為で、赤竜とマスターを殺してしまった。」

「あれは仕方ないことです。」

「私はそうは思わない。私が殺してしまった、尊い命。命がなくなることに仕方ないことなんてないよ。」

命がこの世界からなくなることが仕方ないなんて悲しい。

あんな方法で死んでしまうことが、仕方なかったことなんて、間違ってる。

もしも仕方ないという死に方なら、大切な人に見守られて寿命で眠ることだけだと思う。

「私は未熟だから・・・傷つけてしまった。殺して・・・しまった。

他に方法はたくさんあったかもしれないのに、最悪の方法で進んでしまった。」

心の中にはまだその時の景色がいつぱいに広がっている。

あの静かな空で、あの生塗る風を浴びて、他にも手段があったはずなのに、私は最悪の道を選んだ。

「赤竜が最後に言った言葉を覚えていますか。」

“この世界を変えてくれないか。次目覚めて、もう一度彼と契約を誓っても、同じ事が二度と起こらない世界に。”

「うん。」

『彼は伝えたかったんですよ。進むことを恐れないで欲しいと。どれだけ苦しんでも、世界を変えるために進んで欲しいと。』

ルキアはそういいながら白いその羽を夜風に遊ばせた。

この3日でまるで元通りになったかのように、美しい羽が月に照らされる。

そう、赤竜はそう望んでいるように、ルキアもまたそう望んでいるようだった。

ここで留まるのは嫌だと、まだ空を飛んでいたいという青い眼を見せてくれた。

「おじいちゃんも、飛び続けろと言った。ねえ、ルキア。」

『はい。』

もしもまた人を殺してしまったら、私はどうすればいいの？

これから二度と同じようなことがないなんて、言い切ることは出来ない。私はまだ未熟だから。

だけど、そうならないように努力はしたいと思う。精一杯、同じことが起こらないように。

それでもまた、人の命を奪ってしまったとき、私はどうすればいい？ そう考えると、不安で不安で仕方がない。ここで空を飛ぶことを止

めたら、命を奪うことはなくなる。

それなら空を飛ぶことに意味はあるのだろうか、考えてしまう。

誰かを傷つける可能性を持ちながら、空を飛ぶ理由なんてあるのだろうか。

「これから先、二度と誰かを傷つけないなんて言えない。」

『ええ。』

「なら、どうして空を飛ぶの。誰かを傷つけないと得られないものなら私はいらないよ?」

『誰も傷つけないのなら、誰とも関わらないですむ部屋で永遠と一人で過ごせばいい。』

空を飛ぶこともなく、風を感じることもない、たった一人の部屋で生きていけばいい。

けれど、もしも人を守りたいと思うのなら空を飛ぶことを選んで欲しい。

死ぬまでに、誰も傷つけずに生きる人なんて一人もいない。だけど、誰も守れずに死んでしまう人はいる。

誰かを傷つけて、誰も守れずに死ぬか。誰かを傷つけてでも、守り続けて死ぬか。

コアはどちらを選びますか。』

ルキアの眼が鋭く私を見た。

たとえたった一人で部屋に閉じこもり、一生を過ごしても誰かを傷つけてしまう。

約束した父を、セルスを、リラにロイを、平和にすると約束したお婆さんを。

そして誰も守ることなく一生を過ごしていく。

それは正しい選択？

「よかった。」

ため息が自然に漏れた。私のその言葉にルキアが驚いた目を向けた。私の心は決まっていた。貴女と空を飛び続けよう。

でも、ルキアはそうじゃないかもしれないと思った。だから聞いたの。

“どうして空を飛ぶの”と。その答えに貴女はちゃんと答えてくれた。

誰かを守るために空を飛びましょうと、そうルキアは言ってくれてる。

「私はもう決めてたの。傷ついても、傷つけても、それでもルキアと空を飛び続けようって。」

よかった。ルキアもそう思ってくれていたんだね。」

そしてルキアも私が飛びたくないと言わないか、不安だった。

私達はもう心に決めていたんだよね、一緒に空を飛び続けると。

「ええ。よかった。私は貴女に空を飛んでいて欲しかった。いいえ、一緒に空を飛んで欲しかった。」

そう約束したでしょう？私が着いて来てくれるかと聞いたんだよ。

そして貴女は頷いてくれた。だから私は誰かを傷つけてしまうことを恐れず空を飛ばうと思った。

できないと思って飛ばないより、もう誰も傷つけない事は出来ることだと思って飛びたい。

空を飛び続ける分だけ、可能性があるんだから。

第84話　：セルス

空を飛んで南の村シユランの村へ着いた時、村人は俺達に異常な目を向けた。

それは覚悟していたはずの眼ではなく、何か他の事に恐れているような眼だった。

そして俺の前に現れた老婆は言った。戦いがすぐそこまで迫ってきている、と。

そして教えてくれた、たった一匹の白竜に乗り、幼い少女がその戦いを止めるために空を飛んだことを。

そしてそこへ向かったとき、既に戦場は静まり返り彼女は体を重力のままに地面へと倒れた。

久しぶりに見た彼女の顔は、傷だらけで、ボロボロの寝顔だった。

「いいんですか、コアちゃん。折角会えたのに、ドラゴンとばかりいますけど。」

戸口から2人の様子を見ていた俺に、ゆっくりとそう声をかけたのはマティスだった。

行って欲しくはなかったけど、きっと行くだろうとわかっていた。

傍にいて欲しかったけど、彼女はきつと一目散にルキアを抱きしめに行くだろうと思っていた。

それでも、そんな彼女だから好きだったから、俺は行かせた。

「男の嫉妬はみつともないからな。」

「やけに聞き分けがいいですね。相手はドラゴンだからですか？」

嫉妬する相手がルキアだから、俺はこんなにあっさりと手を引けるのだろうか。

いや、違う。もしもルキアが心配している事を知りながらも、俺の傍に居るといふコアなら、俺は好きになんてなっていない。

「はは。俺はドラゴンに恋するあいつを好きなんだ。」

「・・・何ですか、それ。」

負け惜しみでしょう、とマティスが呟いたがもう口を閉じた。月明かりの野原で、白いドラゴンを愛する少女が笑っている。俺はそんな彼女を愛しているから。

負け惜しみでもかまわない、それでも俺はドラゴンに恋するあいつが好きなんだ。

「この国の王はとても綺麗な人でした。」

「は？」

戸口に吹く風よりも小さな声でマティスがそういった言葉に、俺は急いで聞き返す。

するとマティスが入り口にある石段に静かに腰をかけて二人を見ながら言った。

「とても綺麗な金糸雀のような髪で、眼は黒い闇を司るような色。

それは綺麗な王でしたよ。もしも王の血を継ぐ子供がいるのなら、さぞ綺麗な髪でしょうね。」

「・・・髪・・・か。」

「さっきブレイズから聞きましたが、この国の正妃の間に子はなく、そのかわり側室との間には確かに子供がいたそうですよ。」

マティスはそのことが書かれた紙を俺に渡した。

茶色い紙には、この国の最近の出来事や、王の肖像画、宮女の名前から王家に係る全ての事が書かれていた。

この3日で、マティスはこれだけの事を探すために空を飛び続けていた。

「王探し、か。」

「あの子、王じゃないのですか。」

「コアが？・・・あいつは違う。主の眼をするのはドラゴンの前だけだから。」

「そうですか。」

コアと初めて会った時から、ずっと彼女の中にある弱さに気づいていた。

彼女は強く、清らかで、真っ直ぐで、曲がることも、しおれることさえ知らない花のよう。

しかしその眼のおくには、小さな闇が隠れていることに気づいてしまった。

あの小さな体で、誰にも見えないように闇を抱えている眼だった。きっと触れようと思えば触れられた。それでも俺は触れなかった。

弱いんだ、あいつは。とても弱くて、脆い。もしも壊れてしまったら俺は元に戻す自信がない。

「ルキアが強く見せるんだ。」

彼女は確かに強くて、自分ひとりで何でもしてしまう。

ルキアを探しに行くのだって、ここに来るのだって全て自分で決めてしまうほど彼女は強い。

けど、俺にはその強さで弱さを隠そうとしているだけに見えた。

だから強がるなといいかけて、その言葉で彼女を傷つけそうで俺は黙り込む。

「そうでしょうか。私にはどうも、彼女は貴方の前だから強くして

いるようにしか思えません。

大好きな人の前では誰しも強くありたいと思うものですから。」

マティスは少し哀しそうな顔をして、そういった。

俺の足元を見るその眼は、ずっと遠くを見ているようだった。

こいつはプレんティの前で強がっただけで、本当は少し後悔しているのかもしれない。

けど、こっちに来る意志は確かにあった。だから弱音を吐いたりはいしない。

「そういうもんなのは分かってる。けど、見せて欲しいと思うから来たんだ。」

もう、逃げたくないと思った。彼女の傍にルキアが現れてから、彼女はもつと強くなった。

その強さに俺でさえ、彼女の弱さを見失うほどに、スッポリと彼女の弱さを隠してしまった。

もしこのまま隠し続けたら、いつあいつは疲れたといえる？ 苦しいといえる？

俺は触れたい。あいつがどうしてもあそこまで、人の存在にこだわるのか。

誰かがいなくなるのを、どうしてもあそこまで恐れるのか。命が目の前で途絶えてしまう事を苦しみ続けるのか。

どうしてもあそこまでして、誰かを助けたいと思えるのか。

「強くさせるのと、弱さをなくすのとは違う。ルキアはあいつを強くさせる。」

けど、それはあいつが無理に強くなってるだけで、結局あの日からあの眼の奥は何も変わってない。」

そう、何も。彼女に出会った、あの日。

あの日のまま、何も変わらない笑顔と、暗い闇を抱えた明るい光を映す眼がある。

もしも人が本当に強くなれるのだとしたら、

それは自分の弱さを認めて、それでも得たいものに向かっていける
ときだと思う。

隠して求めるのではなく、誰かに私は弱いのだと言いながらも諦め
ずに頑張るときだと思うんだ。

「風、気持ちいいな。」

「ええ、そうですね。2人ともとても楽しそうです。」

「ああ。」

遠くには白い羽を揺らすルキアの傍に、月明かりに照らされる少女
がいる。

今度彼女と2人になったら話そうか。

彼女の心の中にずっとあった小さな恐れについて。俺が触れること
を躊躇い続けた彼女の冷たい感情について。

そしていいたい。君はそれを知ってでも得たいものを得に行くか、
と。

きつと彼女は言うんだ。うん、と。

それは小さな声かもしれない。けどもしかしたら、当たり前だと
笑うかもしれない。

彼女は俺にとって未知の生き物だ。

何も分からない。全てが未知の生き物。

強そうなのに、泣き虫で。弱そうなのに、真っ直ぐで。

いつだって俺を魅了してやまない、唯一の存在。

第85話　：セルス

「私、コア。あなたの名前は？」

彼女と出会ったのは、もうずっと昔の事だ。

俺はまだ家に縛り付けられて、感情さえ捨ててしまっていた。

そんな俺の前に何のとりえもなさそうな、中級かまたは下級階級の少女が立っていた。

短い髪が風に揺れて、温かな匂いを俺に運ぶ。

「あなたの名前は？」

俺と同じくらいの少女。何も知らなさそうな馬鹿な顔をして立っている。

俺は家の外の雑木林を散歩中に彼女と出会った。秋の落ち葉を頭にいっぱいつけて、頬を染めながら聞いてくる少女。

俺はしばらく黙り続けているだけで、他にすることといったら彼女の眼を見ていたくらいだろうか。

澄んでいて真っ直ぐで強くて、けど俺は気づいた。俺と同じだと。

「触るな。」

俺についた葉を触ろうとしたその小さく白い手に俺は冷たく言った。それが俺の少女に発した初めての言葉。彼女と出会ったのは落ち葉が舞い散る秋の夕暮れ。

空いっぱいに赤い色が塗りたくられて、眼を背けてしまうほど眩い光が辺りを照らしながら空から消える。

その景色はとても暖かくて、冬の訪れを必死に隠しているようだった。

だから俺はその秋という季節が一番好きだった。

そんな秋と言う季節が過ぎ、冬が来て、春が過ぎて、夏が過ぎて、彼女とであって2度目の秋を迎えた頃、

俺や彼女の背はうんと伸びて、世界のたくさんを知り始めたころだった。

「セルス、毎日毎日遊んではかりいてはいけません。貴方はオリ―バスの次期頭首なんですよ。」

「はい、母様。」

「最近、町外れに住む娘と遊んでいると聞きましたが本当なの？」

遊んでいるというよりは、着いてこられているだけの気がした。

それでも目の前に立つ母様と俺以外の誰もいないその暗い部屋で、口答えをする気分にはなれずに頷いた。

その瞬間、パンツと乾いた音がして、俺の視界は右へと反れ、ジンと頬が熱くなった。

それは愛の温かさでもなんでもなく、ただ白く細い手が俺の頬を殴っただけであった。

「セルス！いいかげんになさい！あなたは自分の立場をわきまえるべきです。」

父を継ぎ立派な貴族の息子となるために、私がどれほど・・・。

それを町娘なんかには、壊されてたまるものですか！いいこと？もう二度とその娘と会うことは許しません！」

ジンジンと痛み始めた頬にそつと手を当てると、熱い熱を持つことに気づいた。

上から俺を見下ろしてくるその眼はまるで、炎を青くたぎらせているように輝いていた。

「……」
「わかったのなら、返事をなさい。」
「……」

はい。いつもなら言えたことだった。

たった二文字の簡単な言葉。ただいい子に頷いていれば、それでよかった。

「セルス！」

「……」

分かりました、母様。それだけで全ては丸く収まったはずなのに。何故だかその言葉だけは出なかった。

会いたいだなんて思うはずがないのに、頷くことは出来ずにそつとその部屋の扉に触れる。
ギィと小さく音を立てて扉を閉めると、母はそれ以上追って来ることはなかった。

「セルス〜!!」

思い扉を何度も開き、ようやく風の流れを感じられる外へと踏み出し歩き出した。

しばらく歩いた野原で横になっていた俺に、明るい声が響いてきた。

「……」

頬はまだ熱く、その声に返事をする気にもなれずに俺はそこに転がっていた。

草が風に揺れると足音さえ消し去るほど音を立てた。緑や茶色の草がゆらゆら揺れる。

風が止んだ時、ガサツと一際大きな音がすぐ傍まであの声の持ち主が近づいているのを知らせた。

「ここにいたんだね。」

草の向こうに少女の笑顔が見え、その後ろには夕焼けに染まり始めた薄いピンク色の空が広がっている。

雲はゆっくりと流れているだけで、そこには少女がいるだけ。

「ああ。」

声を漏らせば、その世界が壊れてしまいそうで小さく呟いた。その言葉に少女はそっと横になる俺の隣へと腰をかけた。

「・・・ねえ、セルス！」

俺を見ていた眼をそっと反らしてコアが空を見ながら名前を呼んだ。それからコアは俺の返事も聞かずに、言葉を続けた。

「世界の大きさ、知ってる？」

空を見ていると自分は何とちっぽけなんだろうと思ってしまう。世界はどこまでも広い。

俺はコアの問いに小さくコアの座る方へと顔をずらしてその顔を見た。

「世界って広いよね！どれくらい大きいかわかってる？」

どうしてそんな事を聞いてきたのかは全くわからない。そのため俺はせめてその答えだけでも答えたかった。

頭の中の知識の中から関係しているものを引っ張り出すように俺は言った。

「たしか直径約12000kmくらいだったっけ……」

半径は約6000kmで、球形のこの世界には幾つもの国がある。そしてその中でも俺達が住んでいるのはブーシャという大きくも小さくもない国。

しかし俺やコアの大きさに比べればとんでもなく大きな国だ。そんなこの地でコアに出会えた事は運命に匹敵するもの。

そう思ったとき少女はうんツと手を伸ばして、短い腕と小さな手を精一杯に広げて言った。

「それって、これよりも大きいのか？」

風が吹く。

空は赤く染まり、また秋の匂いがしていた。

「……は？」

「セルスの世界は大きいんだね!!」

俺はただあの家から離れて、自分の世界へ飛び込むのが怖かったんだ。

何も知らずに、何もせずに唯座っているだけで、あそこにいれば世界が出来ているから。

だけどそれは違う。あそこに座り続けて、ただ頷いて、はいとだけ言っていれば得られる世界は、俺の世界ではない。

俺以外が得られることのない世界ではなく、誰でも得られる世界。その世界はとて小さくて、俺を大きく感じさせてくれる。

だから俺はあの家で座り続けていた。そう、分かっていたからだ

頷いていい子であり続けた。

「私の世界はまだ、すっごく小さいの。」

そんな俺の前にたった一人の自分以外は得られない世界を持った少女が現れた。

その世界はとても小さなものだったのかもしれない。しかし俺には充分すぎるほど大きかった。

俺のすぐ傍で待っている世界は、とても小さくて俺を大きく見せてくれるから安心していったんだ。

俺はただ、その安心できる場所から進みだす事を恐れていただけ。

「どうすれば・・・俺の世界ができる・・・？」

「え？」

「俺は俺の世界が欲しい。他の誰も得ることの出来ない世界。」

「そんなの簡単だよ。今自分のしなくちゃならないことの中で、一番難しいことをするの。」

簡単なんだと言った。それは答えが簡単ただけであって、行動するのは難しい。

「ああ、そうか。」

それでもいいんだ。俺にとって小さな世界よりも、自分で広げられる世界を持つことが望みだったから。

俺達が住む世界はとてつもなく広い。その中で君に出会えた。

そして俺達が作る世界はとて小さいが、眩いほどの輝きと広がる力を持っている。

安全な場所で座っているほうが楽なのは分かっていた。けど、俺は望んだんだ。

たとえ危険でも苦しくても辛くても、俺は俺の作る世界を見たいと。

「セルスの世界は絶対広くて大きくなる。今よりも絶対に！」
「ああ。」

夕焼けの風が草を揺らす野原から俺は静かに立ち上がった。

歩きたびにガサガサと音を立てる草達を掻き分けて、ようやく自分の眼が映す俺の世界を見ていた。

赤い夕日は空を照らす。広く広がる空を優しく暖かく。吹く風は穏やかで少し冷たい。

もしも冬が訪れても、この野原が枯れても、夕日は二度と見れなくなったとしても、俺は選んだだろう。

自分の世界を創る道を。

「俺はここを出ます、母様。」

扉はもう重くない。世界は輝きに満ちていて、扉の向こうは希望にあふれていた。

その扉が開いたとき、部屋が暗くても何も恐れることはなかった。

すぐそばにあった世界が崩れても、もう怖くない。俺には俺の世界が待っているから。

「俺はここを出て、ドラゴンマスターを目指します。」

ずっと心のどこかで風をわたる日を夢見ていた。椅子に座っているのは退屈でしかたなかった。

もしも俺の生きる場所がここなら、俺はこれからさきも我慢して生きていかなければならないのだろうと思っていた。

けど、俺の生きる場所なんて俺自身でいくらでも変えられたんだ。

たった一人のマスターが、俺を魅了し続けていた。彼の見る世界を

見てみたいと思っていた。

「父さん、俺はあんたの創った世界なんか知らない。」

それが答えだった。彼女の聞いてきた問いへの唯一の答え。俺は俺の世界を得るために、今ようやく進み出せたんだ。

今の自分がしなくてはならないことの中で、一番難しい事をした。母様と父さんの猛反論を押し切って、俺は何も持たずに家を出た。そしてあの学園へ入学した。

親なしの子として俺は園長に世話をしてもらって、初めのうちは大変だった。

周りの生徒達も皆、俺に嫌悪の眼を向けていた。それでもたった一人、コアだけは違った。

「セルスの世界、いつか一緒に見てみたいな。」

温かな陽だまりがその声によって俺の世界に描かれる。

そこは一面花畑に変わり、曇りでも雨でもなく、いつも晴れ続けた。いた。

花は枯れることもなく、風は止むこともなく、日はかげることもなく、そこだけは樂園のように存在していた。

彼女がいるだけで、俺は何も怖くはなくなる。俺の世界は安心して広げられる。

だからあの言葉を忘れない。

『世界の大きさ、知ってる？』

『世界って広いよね！どれくらい大きいかわかってる？』

俺の全てを覆ったあの言葉を。

『それって、これよりも大きいの？』

あの時広げられた彼女の腕いっぱい大きさを。

その大きさよりもずっと小さかったか、もしくは存在さえしていなかった俺の世界を与えてくれた言葉。

今も尚俺の世界にその花畑は存在し続ける。

ちっぽけな俺にできることは、せめてその花が枯れないように水をやるだけ。

常に進み続ける彼女に翻弄されながら、俺はそれでも少しずつ、少女の眼の奥に隠れた闇を探していた。

そしてその闇に触れようか触れまいか、悩み続けて今ようやく手を伸ばした。

花畑を壊してしまうのかもしれない。しかしその思いはあの時と何も変わらない。

安全を失う怖さで座り続けていた、あの頃と。だから俺は手を伸ばすんだ。

今自分がしなければならぬことのなかで、一番難しいことをする。それが俺の世界の存在する術なのだろう？それは何においても変わらない。

君の闇に触れよう。その先に何があっても、俺は必ずその闇から君を助けるよ。

俺を闇から救い出してくれたあの日の君のように。

第86話　：コア

風が心地いい夜、野原でルキアの白い羽を見ていた。そつと流れてくる風に、ルキアは空を仰いで、それから静かに言った。

『コアを心配していたのは私だけじゃありませんよ。』

そう言ったルキアの青い目に映るのは、月明かりに照らされたセルスだった。

その姿を眼に映すだけで涙が出そうになって、必死で唇を噛み締める。

ゆっくりと歩いてくるセルスは優しく微笑んでいて、私の背から吹きぬけていく風に向かいながら近づいてくる。

バサツつとルキアが羽を広げて空へと舞った瞬間、唯一咲き残っていた花たちが大きく揺れる。

「コア。」

セルスの声が聞えるほど近づいたとき、その場に縛られていた足は急にほどかれたように走り出した。

こんなに優しい夜が今までに会ったのだらうかと、不思議に思うほど世界中の全てが優しさに溢れていた。

その優しさに抱かれる私は、とても欲深い人間で、何よりもセルスの優しい声に触れたかった。

「・・・セルスっ！」

ようやく喉から湿った声が出て、それと同時に彼の肌に触れた。

ぎゅっと抱きしめると温かな温度を感じる。大きな手が優しく頭を撫でてくれた。

この世界のどの優しさよりも、セルスの優しさが欲しかった。他には何もいらないうち思ってしまふほど。

「心配した。」

目を覚ましたとき、一番に私の目に映ったのが貴方でよかった。

それは私が今まで一番夢見たことだった。伝説のドラゴンマスターになるよりも、心の奥にある夢。

それなのに私はルキアの元へと走って、どれほど心配をかけたか分かっていてセルスから離れた。

それでも彼は怒りはしない。それは私の事はどうでもいいからじゃないって知ってる。

私の事を想っていてくれるのに、私の心を大事にして、いいよと言ってくれる。

「ごめんっ……っ、ごめん……ね……セルス。」

溢れ出す涙がセルスのローブに染みていく。

声は絶え絶えに、震えながらも零れていくように空気を伝わっている。

セルスは私をゆっくりと引き剥がすと、私を覗き込むようにして言った。

「何への謝罪だ。」

「……いっばいっ……心配させちゃったこと……っ、心配してくれてたのに……」

セルスから離れてルキアに走ったこと……っ……それから、それから……」

その目を見ることはできなくて、溢れてくる涙を拭うばかり。そんなことを聞かれても、答えはたくさんありすぎて次から次へと出てくる。

セルスにはいつも迷惑ばかりかけて、いつも助けてもらって、心配させて、私はセルスの隣に立てるような人間じゃない。

そう考えると、ゆっくりとセルスの手が私の手を除けて、頬を滑っていく涙を拭いた。

「俺が心配したくてしたんだ、お前が謝ることじゃない。それにお前がルキアの元へ走るのは悪い事か？」

俺はもしもお前がルキアの元へ行かないような奴なら、心配なんかしていない。

お前が何よりもドラゴンを思う奴だから、心配するんだ。」

馬鹿、と小さく笑う。

その言葉に目の前がバツと暗くかすんだ。

『行けっ、エルクーナ!』

あの日の声がする。

ドラゴンを一番に思う、あの低く大きな声が。

「一つ聞きたい事があるんだ。」

その瞬間、暗い闇を遮って優しい声が響いた。その声には私はハツと目の前のルキアを見た。

彼の顔は月明かりに照らされていて、とても優しくとても哀しげだった。

「何？」

「・・・今何を思った？」

セルスが気づいていることは分かっていた。私が誰にも見せることなく隠してきたものがあると彼は知っている。

だけどセルスはそのことに触れようとしたことは一度たりともなかった。

触れないように、触れないように、見ていないフリをして傍にいてくれた。

その彼が今、そのことに触れた。

「え？」

とぼけても無駄なのは分かっている。彼は知っている。

だけど私がそれを隠すから、知らないフリをしてくれていた。

「お前の中にずっとあるものだよ。何がそんなに怖い？何に怯えている？」

その眼はとてもおじいちゃんに似ていた。

その眼から逃れなくなってしまう。誰も責めないから、私は苦しかった。

誰かが責めてくれたなら、私はまだ楽だったのかもしれない。けれど幼い私を責める者は誰一人としていなかった。

本当は私はドラゴンマスターになる資格なんてなかった。それでもおじいちゃんという言葉が耳から離れなかったから。

『辛いときこそ、自分が一番できないことをしようとするんじゃない。すると世界はおのずと見える。』

その言葉に私はあの目を心の奥にある戸棚にしまいこんで、立ち上

がった。

じっとしているのも、諦めるのも止めて、進む事に決めた。

「・・・いいたくない。」

「分かっている、聞いているんだ。」

いつも以上に厳しい眼をしていた。

「やだ・・・」

触れないで、と願っていた事を貴方は知っていて触れようとする。

「教えて欲しいんだ。」

優しさが消えた顔に残るのは、怒りではなく、哀しみだった。

どうしてそんな哀しそうな顔をするのか、私には分かる。私が断る事も嫌がることも知っていても触れたいからだ。

「いや・・・思い出したくない・・・!」

触れないでと必死に訴え続けてきた事を、スツと気を抜いた瞬間に彼は手を伸ばしてきた。

私には防ぐ事もできない。きっと彼は諦めない。そのためにここへ来たのだから。

「もう逃げたくない。分かってくれ。俺はお前の抱えるものから逃げ続けてたんだ。けど、お前言ったよな？」

今自分のしなくちゃならないことの中で、一番難しいことをするんだって。

俺にとってそれは、お前の隠しているものから逃げない事なんだ。」

あの事さえなければ、私はとても強かったのかもしれない。
私は弱いんだと思う。あれを隠さずにはいられないほどちっぽけで
弱虫。

「だからお前が嫌だと言つても、泣いて喚いても、俺は諦めない。
今まで逃げ続けてきた事を後悔しているから、このままお前と一緒
にいたいから。」

何も知らないで傍にいてくれたら楽だったのに。
どうして触れようとするのだろうか。誰にも触れられることもなく、
私は隠し続けているつもりだった。
それが一番楽だって分かつてても、セルスは絶対に諦めない。

「聞いたら・・・離れちゃう・・・皆・・・離れて行っちゃ・・・」
だから隠し続けていたの。傍にいて欲しかったから、偽り続けてい
たの。

私がこの世界に存在する事を許して欲しくて、私は隠し続けること
を選んだ。
もしかしたら誰か一人でも、私が必要だといってくれる人が現れる
んじゃないかって思ってた。

「ふざけるな。」

悲しそうな顔をしていたセルスの顔は、怒りを露にしていた。

「その程度の思いで・・・ここに来たわけじゃない。誰もお前の傍
から離れやしない！絶対に！！」

何も怖がる事なんてない。俺は・・・お前の傍にいたいから聞きたい

んだ。」

大好きなセルスにさえ知られたくはないものがあった。

私は本当はドラゴンマスターになることも、ここに存在する事すら許されない。

それでも貴方は傍にいてくれる？抱きしめてくれる？必要としてくれる？

私が伝説のマスターを殺したのだと知っても

私に笑いかけてくれますか。

第87話　：コア

何も無い日だった。いつもどおり、おじいちゃんと2人で過ごしていた。

あれは10年も前のこと。その日の空も穏やかで、その日、何が起るのかなんて知らせてはくれなかった。

“私、おじいちゃんみたいなドラゴンマスターになるっ！”

“ははっ、頼もしいのお。”

大きな手が頭をぐつと優しく撫でた。

それはずつとずつと変わらないのだと思っていた。いつか2人で空を飛ぶのだと思い込んでいた。

高く高く広がるあの青い空を、私のドラゴンとおじいちゃんとエルクーナの4人で。

「何もない、普通の日だったの。いつもどおりの毎日でしかなかったのに・・・」

私はあの日全てを失い、立ち上がった。

目を閉じると今でも鮮明に思い出せる。あの日、目の前に広がっていた炎の海原とバチバチという音たち。

「コア・・・、平気だから、落ち着くんだ。」

「っ・・・っ・・・ふえっ・・・ん・・・う・・・」

「コア・・・」

涙をとどめようと目を閉じれば、私はあの日へ簡単に戻れてしまう。十年という月日なんて、なんの隔たりにも距離にもならない。私は

あの日から何も変わりはないのだから。
嗚咽を繰り返す私の震える肩を優しく力強い腕が抱えてくれた。

「コア」

名前を呼ぶセルスの声が、まるであの日のあの場所で聞いた救いの声のようにきこえた。

何もない日のはずだった。全てが当たり前のよう存在しているはずだった。

そんなあの日が、私を縛り付けて放さない。

おじいちゃんに憧れていた。だから伝説のマスターになりたいと思っただけ。

ただ、それだけじゃないのも本心だった。

「私はっ・・・2人を・・・おじいちゃ・・・んと、エル・・・クーナの未来を奪ったの・・・っ・・・！」

私が奪った二人の未来を私は背負わなければならなかったから。

心の奥に誰にも見せないように隠してきた気持ち。

私は伝説のマスターになっておじいちゃんを抜かなければならない。彼らの未来を奪った者として。

「んっ・・・おじいちゃ・・・？」

温かなベッドから目を覚まして、ゆっくりと小さな部屋を見渡した。どこからかバチバチという音がして、おじいちゃんの名前を呼んでも返事がない。

お昼を過ぎた頃、私は遊びつかれて昼寝をしていた。そして目覚め

ると部屋全体が暑苦しい熱気に包まれていた。

「おじいちゃん？・・・おじいちゃん！！おじいちゃん！！」

1つしかない扉を開けて、下へと降りる階段へ行こうとした瞬間、私の目には映ったのは真つ赤な炎の海だった。

荒れ狂う海はまるで夕日に染められたように赤く、燃えるというよりは波立っているという方が正しい気さえした。

「いやっ。」

バチバチという音はどんどん大きくなりながら、熱い熱を放ち、私のほうへと凄いスピードで走ってくる。

私は何も出来ずに、どんとんと近づいてくる炎から身を遠ざけた。赤い炎が全てを飲み込み、黒い煙が全てを隠していく。

「ごほっ・・・えほっ・・・おじっ・・・いつちゃ・・・」

口を大きく開いて空気を吸っても吸っても苦しくなるばかりで、天窓しかないその部屋に私は座り込んだ。

炎は部屋の入り口まで迫っている。私は怖くて怖くて仕方なかった。小さな天窓を見上げると、空の一角が見えた。

「おじ・・・ちゃ・・・」

くらくらと目の前が眩んだとき、バンツ！！と物凄い音に私は意識を保った。

足音がして、何かが倒れる音がする。それでもまだ足音は耐えずに近づいてくる。

「コア！！」

炎に焼かれた部屋の入り口から、一人の男の人が私の名前を呼んでぎゅっと抱きしめた。

その服は少し湿っているが、焦げ臭い匂いがする。しかしその奥からは、大好きなおじいちゃんの匂いがした。

「おじい・・ちゃ？」

「コアっ、無事か！？コア！！」

「おじいちゃんっ！！」

抱きしめ返すと、おじいちゃんの力強い手が優しく頭を撫でて、私の涙を拭いた。

それからそつと魔法陣を描いて私を抱き上げたまま小さな小窓へと浮いて、その窓から私を屋根へと出させた。

大きな手がいとも簡単に私を冷たい風の吹く屋根の上へと座らせた。

「おじいちゃん！？おじいちゃんは？どうするの！？」

バツと放された手をとても愛おしく思えて仕方なかった。

放したくなんてなかった。それが最後になるんじゃないか、そんな気持ちのどこかで湧き上がってくる。

その小さな小窓では、おじいちゃんの大きな体は通る事はできない。おじいちゃんは涙を流す私を見上げながら、優しく微笑んで言った。

「この老いぼれをかつこつけさせてくれんか、コア。」

おじいちゃんはいつだってかつこいいい。

私のそんな思いは口から言葉として現れることはなく、私は首を大きく横に振って涙を流す。

そんな私の頬に熱い手がそつと触れた。ごつごつしていて、大きくて暖かい。

「わしはコアを愛しておる。もちろん、お前の父も母も。だから逃げてはならん、絶対に。」

進む必要なんかないから、逃げたりはするな、いいな。コア、さあキスをしておくれ。」

最後なんかじゃない、私はそう思いながらもおじいちゃんの頬に静かにキスをした。

おやすみの前に、おじいちゃんが私にしてくれたように。

「エルクーナ、コアを頼む。」

『嫌よ！私はドラゴンよツ！主に仕える……っ、ドラゴンなの！！絶対に離れないわ！最後なら……っ、傍にいらさせてください……お願い。』

この願いだけでいいから……叶えて……。

「行けっ、エルクーナ！」

その言葉だけが哀しく響いた。ドラゴンは主の命令に逆らうことは出来ない。

それはその絆が深ければ、深いほどに。

エルクーナはその眼に涙を浮かべながら、私をそつと優しく背に乗せて屋根から足を放した。

『コア、私は……貴女のおじいさんに会えて幸せだったわ。』

「エルクーナ!？」

空を飛ぶ、初めての空は本当に穏やかで、遠くの方では夕日が沈みかけていた。

少し冷たい風が、熱に熱つた体を冷やすように掠めていく。

その中をエルクーナは私に優しく言った。最後だなんて、決めないで。ずっと傍にいてくれるんでしょ？

私はそう思いながらも、エルクーナの白い肌についた幾つもの傷跡をじっと眼に焼き付けていた。

『私は後悔なんかしていないわ。もう一度あの頃に戻っても、彼に出会ったためならなんだってする。』

コア。もしも本当に彼のようなマスターになりたいのなら、そのドラゴンにそう思わせてあげて。』

静かに下ろされたのは、草が強く揺れる野原だった。

その野原の遠く向こうにたたずむ家は、真っ赤に染まり、炎に全てを埋め尽くされていた。

私を降ろしたエルクーナは、私にその広い背を見せて、尾を勢いよく振ると、大きく翼を広げた。

今までのどんなエルクーナよりも美しく、気高く、気品に溢れている。

真っ白のドラゴンは、その美しさで人の時を止めてまで魅せる。

『私はあの人の傍で眠りたい。』

地上を離れたエルクーナが最後に小さく言ったその言葉が、妙に大きく私の耳の中でこだました。

エルクーナの背はすぐに小さくなって、真っ赤な炎につつまれる家へと何の躊躇いもなく突っ込んだ。

私は何も言えずにその光景をただ、草の合間から座り込んで眺めていることしか出来なかった。

「・・・」

それから5秒くらいしたころだろうか、木が折れる音とドラゴンの鳴き声が1つその辺り一帯に響き渡った。

「私が・・・っ、私が2人を・・・っ・・・」

誰も責めることはなかった。誰もが皆『仕方なかったのだ』と慰める。

誰かが責めてくれたらどれほど楽だっただろう。誰かが罵ってくれたならどれほど楽だったのだろう。

それから何日も、何日も私は思い続けた。おじいちゃんとエルクーナの命に値するような命じゃないのに。

私がいなくても困る人はいないけど、おじいちゃんがなくなったら世界中の人が困る。

私は・・・そんなおじいちゃんが命を張ってまで守る価値のある人間なんかじゃないのに。

「それは違う！」

そんな事は、誰もが私に言ったことだ。

誰もが皆、私の所為なんかじゃないと言った。それは私がいかにも幼かったから。

だけど考えれば分かるの。私はあの二人を殺した。おじいちゃんは何の価値もない私の命1つで死んでしまった。

世界は濁った。空だって、風さえ吹かなくなった。そんな時に、聞えてきたの。

『逃げたりはするな。』

それは大好きなおじいちゃん言葉だった。

「私は・・・2人の未来を奪ったの。」

その言葉に私は立ち上がった。ただ涙を流し続けるだけの日々からゆっくりと一歩踏み出した。

ドラゴンマスターになる。それが私に出来る唯一の事だから。そう思えた。

何の価値もない命から、たくさんの人を救える命になりたかった。おじいちゃんが私を助けた意味を見出すために。2人が背負うもの背負える位置まで行きたい。

おじいちゃんが持っていたもの全てを私が継ぎたい。だから私は伝説のドラゴンマスターになると決めた。

「存在を許して欲しかったの・・・。本当は、ここにもいいって言うて欲しかった。

だから伝説を継ぎたかったの。私は・・・私はとても弱い人間で・・・。マスターになんてなる資格のないのに。」

でもあの日、おじいちゃんの声が聞えたのはきつと必然だったんだ。私は逃げたくなくて、進み続けようと思った。進み続けて存在を許されるまで、頑張ろうと。

おじいちゃんたちが助けた命に恥じない人間になりたい。

そんな私はルキアと出会った。彼女は私の闇を優しく抱くように傍にいてくれた。

彼女の言った“貴女が死ねば、私も死ぬ”と言う言葉は、まるでここにいて欲しいと欲しくしてくれてるよう。

ここにいてもいいと、存在を許されているよう。

「ルキアが・・・私を強く・・・してくれた。」

「そうだと思っていた。けど、もういいんじゃないか？」

シンとセルスの声が響いた。

「もう充分だろ。お前が背負うべきものなんて何も無い。いつまで留まり続けているつもりだ。」

あの日から私は立ち上がり、進んできたんじゃないのだろうか。私は、ずっと進むことなく留まり続けていたの？

「進んでいるようで、お前はあの日からずっと留まり続けている。留まり続ける事は悪くない。けど、逃げたりするな。俺が傍に居るから。」

自分のために、自分の目指す道を自分の意志で進んでくれよ。」

私はいつまであの日に縛り付けられているんだろう。進み続けていたと思っていた私は、ただ逃げないですむようにその場で足踏みしていただけなんだ。

私はここにいってもいい？私はおじいちゃんの変わりになれるように、伝説を目指し続けたけど。

ねえ、もう私だけの伝説のマスターになってもいいの？

「お前として・・・存在してくれよ。俺が愛してるから・・・。」

私の闇を隠してくれるほど強くルキアは私に契約を与えてくれた。ドラゴン契約がほんの少しだけ、私の存在を唯一許してくれていたのかと思った。

けど、違ったよ。

こんなにも傍にいてくれたんだ。

私はここにいてもいいの？そう問う私に彼は言うの。
ここにいてくれて。

ねえ、こんなに幸せでいいのかなあ。おじいちゃんとエルクーナの
未来を奪った私がこんなに幸せで。
私は、ここにいたい。

「セルス・・・っ・・・」

強いルキアが大好きだった。私の弱ささえ強さに変えてくれる彼女
が大好き。

だけでももう止めるよ。私はもう強がったりしない。私は私の意志で
伝説へ目指す。

ルキアの力に頼りっぱなしで、強いふりして、そんなの進む事には
ならないでしょ？

2人を忘れることなく、心の中で想い続けている。だからもう背負
ったりしない。

2人以上に私はこの世界に幸せを与える。おじいちゃんはそれを願
っていたんでしょ？

「私・・・伝説のマスターに・・・なるよ。」

これは私が望む事。私というマスターが切に望み、一筋に目指すも
の。

私の意志で、つかみに行く未来。もう、誰の変わりもしない。おじ
いちゃんを超えるよ。

背負うんじゃない、エルクーナとおじいちゃんそれに赤竜とそのマ
スターの命を抱いて。

私は私の意志で進んでいくの。ルキアと一緒に、空を飛ぶの。

「ああ。」

瞼を閉じれば浮かび上がる、赤い炎の中から優しい声が聞えてくる。

《愛している》

誰かに言っただけで欲しかった。誰にも許される事のない命を持って生きてきたのだと思ってた。

だけど、見つけたよ。本当に、すぐ傍にいたの。

“俺が愛してるから・・・”

だから進むよ、もう留まっているわけには行かない。私は私の意志だけで伝説を目指して、必ず手に入れるから。

それまでもう少し、見ていてください。

第88話　：コア

「本当にもう平気なのか？」

青く晴れ上がった空のしたで羽をばさばさと震わせて、風を感じているルキアの背に乗った私にトレスが聞いた。からりと晴れた空を見上げると、すぐにでも風を浴びたくなった。重かった体も、まるで羽のように軽くなった。

「うん！」

「そうか。」

「元気だなあ、コアは。」

「その治癒力は脅威だ。」

ルアーとジェラスが軽く笑ってこっちを見た。

その世界は何だか眩しすぎて、目を背けてしまいそうになった。

「いこっか。」

「ああ。」

セルスが私の隣で小さく返事をした。

この場所を離れて、私達はこれから無謀とも呼べるほどの旅に出る。伝説を刻みに行くんだ。

今は心からそう思う事ができる。

私はおじいちゃんにも負けない、ドラゴンマスターになりたい。

それはおじいちゃんとエルクーナのためではなく、ルキアと私自身のために。

セルスの言葉はいつだって人に大きな力を与える。彼の言葉に私は

何度も救われた。

「紫苑の花の咲いている場所、トレスが知ってるんだよね。」

「え、ああ、まあ一応。」

「それじゃあトレス、行こう。一刻も早く王を探しに。」

ルキアの背に乗ると、まるで今までとは全く違う好奇心が心を巡っていた。

全ての行動に意味があり、未来があり、希望に満ち溢れているようだった。

立った一言で、人はここまで大きく変わってしまう生き物で、それは時にとっても怖い事だ。

「ああ。」

トレスの言葉を合図に、バツとルキアが羽を広げた。

それからゆっくりと上下に羽を揺らして、風を起こしながら地上を離れる。

地上から離れるその一瞬、体はすごく軽くなり重力を感じないほど軽くなる。

心の中に濁りきっていたものも全てを捨てて、私の身ひとつで空を目指しているように。

言葉つてのは本当に、魔法みたいにすごいものだ。

もしかしたら、魔法なんかよりもずっとすごいモノなのかもしれない。

「トレスはどうして紫苑の花が咲いている場所を知ってるの？」

「私か？言っただけだったな。私は一応アカンサス出身の魔術師だからな。」

「そうなの！？」

「ああ、ずっと昔だけだな。」

「そう。お父さんとお母さんは元気？」

「さあな。母は死んだよ。」

「そっか。その紫苑の花が咲く村に、金の髪をした男の子とかいなかっただの？」

「いたな。私よりすこし年上で、綺麗な金の髪だった。」

私はトレスのその言葉に、心が躍った。早くもその情報をえて、王を迎えられるような気がしたから。

ルキアの背から覗き込んだ場所に広がるのは、荒れ果てた土地。けれど、目を閉じればそこは緑でいっぱいになり、畑が一面に広がって、子供の楽しそうな声が聞えた。

もうすぐそばで、待っている未来。誰もが長く待ち望んだ未来が、私達のすぐ傍で待っている。

「あいつが王かもしれないだな。」

「そうだね。」

「母に見せてやりたい。この国が輝きに満ちる未来を。」

「お母さんのこと、大好きだったんだね。」

「ああ。この指輪も母がくれたんだ。」

ルキアの隣を筭で飛ぶトレスが右手を私に見せた。

その右手の薬指には金の指輪がはめられている。その輝きに私は綺麗だという感情を抱いた。

その感情があまりにも大きすぎて、私はその指輪にかけられている魔法にきづくことはなかった。

風に揺れるトレスの綺麗なブラウンの髪は、太陽を反射して少し赤く見える。

絹のように綺麗な髪が、1つに結われて揺れていた。

「綺麗だね!!」

「ああ、ありがとう。」

もしもあの時、あの指輪にかけられた魔法を見つけることが出来たなら未来はすぐに現れたのに。

もしかしたらその指輪の輝きは、見る者を魅了し、その魔法に気づかせる事がないのかもしれない。

それほど美しく輝く指輪を、トレスはとても大切にしているようだった。

綺麗だというと、彼女は小さくありがとう、と言って微笑んだ。

その笑顔はとても可愛いもので、いつもは凜々しいトレスの横顔が恋する女の子のように頬を染めていた。

ルキアが小さく声を出して、風が優しく吹いてきた。

未来は遠く、未来への扉はすぐ傍で私達を見ていたのかもしれない。

空はまるで平和を表わすように輝きに満ちていて、雲は白く空を見させている。

こんな空をおじいちゃんは飛んでいったんだ。

誰かのためじゃなく、自分の意志で空を飛ぶってとても気持ちいい。目指していたものに一步步近づくんじゃなく、目指したものを越える場所に一步步近づくんじゃなく、目指したものを越える。

「王を見つげよう。」

「ああ。」

「それでこの国を救おう。」

「ああ。」

自分のために飛んで、誰かのために飛ぶ。

そう思った瞬間に、空はそこにあるものではなく、どこまでも続く

ものになる。
だから空を飛んでいたいと思えるんだ。

目指すものは遠く、目指すものへの道はすぐ傍で見守ってくれていた。

私はずっとおじいちゃんとエルクーナを目指していた。

だけど、本当に目指していたのは真のマスター。他の誰にも変えられない、マスター。

その夢はこんなにもすぐ傍で、微笑んでいてくれたように。

きつと眩い未来は遠く、その未来への扉はすぐ傍で微笑んでいる。

鍵を探して、扉を開こう。それは途方のないことのように、本当はとても小さな事なんだから。

第89話　：トレス

森はまだ深く生い茂って、まるで私と共に息をしているようだった。その森を駆けて、細い道のような草の間をぬけると、そこには大きな気が一本あった。

「ヒストラス。」

「え？」

「あの森のことだ。」

深い森の奥に育ち続けていたその木は、まるで森で呼吸する者達に生命の力を与える者のようだった。

偉大で、誇り高きその木から森はヒストラスと名づけられたと聞いた事がある。

空から見るとその森は何だかちっぽけで、痩せ細っているような気がした。

「あそこに紫苑の花が咲いてるの？」

「いや、ここから少し行ったところだ。」

「森の中に村があるの？」

「ああ。小さいけどな。」

村の中で名を知らないものはいない。家族状況まで把握している。村内での隔たりなんてものはなく、皆が森と共存して生きていた。薪の材料になるのは影を作る細い木。

家は土で作られている者がほとんどで、木と木の間に小さく咲く花のようにして建っている。

「降りよう。ここからは歩くぞ。」

「うん。」

私が先頭に立ってゆっくりと森へ降り立つ。その後ろからドラゴンをつれて静かにコアが下りてくる。

ゆっくりと見上げると、木々に羽をぶつけないように、白竜は慎重に降りてきていた。

その向こうからは、ブレイズとルアーとジェラス、それにセルスとマティスという男も降りてくる。

それからゆっくりと森に足を下ろした。緑の草が所々に弱弱しく生えていて、地面はしつとりと迎えてくれた。

「地面が柔らかいのに・・・」

「トレス？どうかしたの？」

静か過ぎる森に、コアの声が響き渡る。

「地面が柔らかいだろう？」

「そうだね。」

「水は充分に行き渡っているのに、草花は枯れそうになってる。」

「ほんとだ。」

この森を抜けて、あの村から出たのはもうずっと昔の事。

久しぶりのこの森は、ずいぶんと痩せ細り、静かになっていた。

吹き抜けていた風も、今では掠りもしないのか、葉がこすれる音も無い。

「ヒストンの木・・・」

私はパツと頭に浮かんだ光景に、まるであの頃に戻ったかのように地面を蹴った。

軟らかな土は未だ私を優しく受け入れて、昔のまま迎え入れてくれる。

しかし私が翔けていくのを遮る草や、目にとまる綺麗な花は無く、ただ弱弱しく木にもたれかかる草が端にあるだけ。

「トレスっ!？」

コアの小さな驚いたような声が、私の背中を追ってくる。

私はその声に返事をする事も無く、いつも通っていた忘れるはずも無い小さな細道を力いっぱい翔けていく。

森の息が聞こえない。鳥の声も、風の走っていく音さえしない。

唯一私を迎えてくれたのは、地だけであった。その原因はこの道の先に存在しているはずだ。

「ヒストン！」

木々が開けたとき、その先に広がった景色に私は声を上げて、足を止めた。

荒い息だけが森に響く。その後ろからは小さな足音がしていた。

しかもう、私の耳には何の音も入り込む隙間は無かった。聞えるのは無駄に大きく響く自分の心臓の音だけ。

そんな私の目に映った景色は、哀しく眠りについた大木だった。

「そ・んな、まさか。」

荒い息がおとなしくなると同時に、鮮明にその状況が私の視覚から伝わってくる。

ここを出るその日はまだ、ぐんぐんと空まで伸びていたその大きな木が、今儚げに横たわり、私を見ている。

上から私を見下ろしていたはずのその木は、今、私を覗き込むよう

に見てくる。

「トレスってばっ！早い・・・よ・・・って、これ・・・魔法樹・・・？」

後から私を追ってきたコアの声に私は小さく頷いた。しかし、正確には魔法樹だったというべきなのだろう。

魔法樹は今、私とコアの目の前で、地面にばっさり倒れこむ、唯の倒木でしかない。

「ヒストンが・・・」

そしてこの木は、ただの魔法樹などではなかった。

「この木の名前？」

「この森を支える唯一精霊の眠れる木なんだ・・・。この木だけが森を生かしていた・・・。」

この木はこの森の母であり、私達の神だった。

水の流れを与え、木々に生命を送り、地に栄養を浸透させる。そんな重要な事を全てこの木が行っていた。

この木によって、森は砂漠のなかで堂々と存在していられたのだ。

共に呼吸をする鼓動は、この魔法樹により命を与えられた木々の喜び。生命の力の証だった。

この地に足を下ろしたとき、その地から伝わってくるのは何故か深い哀しみだった。

「死んだんだ・・・。この森の・・・全て・・・。」

そして私はここで、その意味を知った。

鼓動が聞えなくなったのは、私が大人になったからでも、私が長い

間この地を訪れなかったからでもなく、
ここを守り続けていたヒストンが、命を途絶えてしまったからだっ
た。

魔法樹には寿命なんて物はない。そんな魔法樹であるヒストンは命
を途絶えていた。

「どうして・・・。」

長いときを経て、ようやくこの地に戻ってきてみれば、どうして終
わりへと向かい始めているのだろう。

いつだってそうだ。ほんの少し私が離れている間に、大切な者は全
て消えうせていく。

離れるなどいいたいのだろうか、大切なら片時も離れずにいるとい
うのだろうか。

「魔法樹が倒れるなんて・・・。」

コアの言葉に私の膝は折れ、私は力なく柔らかな地面に座り込んだ。
魔法樹が倒れるということが意味するのは、この森の終わり。

終わりはいつも静かに、人知れずやって来て、その莫大な哀しみだ
けを残していく。

誰もそれを埋めてくれることなんてない。その悲しみを埋められる
ものなんて何一つない。

座り込んでいる私の隣で、コアはゆっくりとその倒木に近づいてそ
っと触れた。

「・・・トレス、この木・・・まだ生きたいって言ってる。」

倒木に触れたコアは、私に背を向けたままそう言って、ゆっくりと
木の幹を眺めた。

それから倒木から手を放して、ゆっくりと幹に触れる。

「この木・・・生きてるよ。」

コアの言葉は気休めではなく、優しい穏やかな声で呟かれた。

森の空気と土は優しく全てを包み込む。それは私の疑問点だった。木が死んだいま、本当ならば栄養をなくすはずの土が何故こんなにも温かく柔らかいのか。

それは不思議でたまらない事だったが、コアの手が包んだ者を見た瞬間にその謎は解けた。

「・・・芽・・・」

「そうだよ、トレス！この木は死んでない。まだ生きようとしてる。」

「でも・・・」

「この森はトレスにとっても大切なものなんですよ？」

なら、なくしちゃいけない。欲しいものも大切なものも、全部欲しいって思ってたになが悪いの？」

コアはゆっくりとその芽に水をかけ、木の幹に水をやった。

その水は唯の水ではなく、聖水のように澄んでいた。

「私は伝説のマスターになりたい。おじいちゃんを継ぐんじゃないけど、セルスとも一緒にいたい。ただ空を飛んでいるだけの時間だつて無くしたくない。」

今は王様を見つけて、この国を救いたいし。大切な人にずっと抱きしめていて欲しい。」

コアは悲しい顔をしたり、優しく笑ったりコロコロ表情を変えてそ

ういった。

それから静かに、その幹から体を離してこっちを見ると言った。

「私は全部欲しいから、全部手に入れる。」

その目は私の奥に沈みこんでいたものをゆっくりと引き抜いた。

「欲しいものは、いつだって1つと絞れるはずがないの。どちらが欲しいか悩むんじゃないで、どちらも手に入れられる方法に悩むわ。」

昔に見ていたその目に私はすごく憧れていた。

大切なものがたくさんあった彼女は、いつだってその全てを守る方法を探して進んでいた。

諦める事も、どちらが大切か選ぶ事も無く、いつだって全力を出していた。

そんな母の眼に私はいつも憧れていたけど、ほんの少し、彼女の眼の奥にある哀しみも知っていた。

「トレス？」

一歩、ゆっくりとコアとヒストンの木に近づく私にコアが声をかける。

その声に立ち止まることなく、横たわった木に近づくと、目の中が潤った。

「私はこの木が本当に・・・大切だった。」

一瞬空中で躊躇った手を、ゆっくりとその木に伸ばして恐る恐る触れた。

その冷たくなつた古い木に触れた瞬間だった。

強い風が遠くから駆け抜けて私とコアの髪をバツと掻き乱し、葉を

揺らして森に吹いたのだ。

そのとき、その風にかき消されそうになるほどの小さな声が、私に優しく響いた。

『ありがとう。』

しわがれたような声は、小さくとも堂々と威厳を持つ声だった。

私は誰の声かと周りを見ると見る事もなく、真っ直ぐに古い大木を見た。

「風だね。トレス？」

「うん。ここ、まだ息してるな。まだ生きてる。」

「そうだね。」

守る方法はひとつじゃない。王を見つけて、この森を守る事だってできる。

そうすればいつか母の眼に抱かれていた哀しみを見つけ出せるのかもしれない。

「おーい、トレス〜！」

遠くからブレイズの声といくつかの足音がした。

その足音に振り返ると、優しく微笑む仲間達がゆっくりと歩いてくる。

森の木々は息を吹き返し、私と共に呼吸をしている。もう私は一人ではなく、たくさんの息と共にしている。

私の全ての物語は、この森から始まっているんだ。

第90話　：トレス

『お母さんが欲しかったのは、何？』
いつか、私は母にそう問いたかった。

あの日はまだ、母の奥に隠されたものに恐れて聞くことなんて出来なかった私はいつか、聞きたかった。
母が本当に欲しかったのは何なのか。私が生まれてしまうことによつて失ったものは何なのか。

「ここが私の村だ。」
「静かだね。」

息を吹き返した森をゆっくりと皆を連れて歩く。私の言葉にコアが短く返す。

その言葉一つに安らぎを覚えてならない。彼女が傍にいるだけで何故だか私はとても強くなれるような気がした。

今なら、皆がいる今なら、彼女が傍にいる今なら、母にあの事を聞けるだろう。

しかし、母はもう私の質問に答える事なんて出来ないから。

その代わりのように紫の花が小さく首を揺らして私を迎えてくれた。
いた。

「ほら、アレが紫苑の花だ。」

「あの紫の小さいやつ？」

「ああ。」

私が指差す先に咲く、紫苑の花を見つけてコアは私の隣の場所から花へとかけていく。

その姿を見たセルスの目はどこか愛おしそうな目をして、コアの背
を見ている。

その目はどこか母に似ていた。

「綺麗」

コアの言葉が真っ直ぐに私に届いた。母もコアと同じような目をそ
の花に葉向けていた。

その目は決して私に向けられる事のなかった目。それが羨ましくて
仕方なかった。

私には向けられる事のない目を向けられる花はいつだって、何も言
葉を返す事もなく母を見つめて揺れていた。

あの花になりたくて、なりたくて仕方なかった。

「王座の色をした、花。」

私には愛おしい目を一度たりとも向けてくれたことの無い母だった。
だけど、私はそれでも大好きだった。母を愛していた。

ただ、本当に欲しいものを捨てても私を生んでくれたのではない
かと浮かれていたから。

しかし、母が死んでから私は後悔の日々を歩み続けていた。

私は仕方なく生まれてきたのではないかと。母に選ぶ権利は無く、
仕方なく私を生んだのではないかと。

「この花、トレスに似てるね。」

コアの言葉が心をゆっくりと悲しみから溶かしていくのが分かった。
欲しい言葉をいつだって与えてくれる。不安で不安で仕方ないのは
今だった同じ事。

大好きだった母がもしも私を生むかどうか選ぶ事ができたなら、私

はここにいなかったのかもしれない。
そして母は、幸せを両手に抱えて笑っていたのかもしれない。

「ど・・・こが・・・？」

その花に私は似る事ができたのかな。少しでも近づけたのかな。
母が愛したその花に、なれたらいいと願い続けた私の願いは叶うの
だろうか。

「んーつと。なんか、一途に誰かを思う感じかな。どんなに辛くても誰かを思い続けてる感じ。」

「なんだ・・・それ。」

「何となく分かるような気がするな。」

セルスがそれにあわせるように口元を緩ませて言った。
それからブレイズとルアーが軽く頷いてみせ、その隣でジェラスが
立っていた。

紫苑の花にだけ母は笑いかけて、それはそれは幸せそうだった。母
が死んだとき、それを思い出して思った。

私を生み彼女はきつと後悔し続けて生きてきたんじゃないかと。

そして私は母が欲したものを探すために魔術師になり世界を回ろう
と決めた。

「お前が心配する事は何も無いんじゃないか？」

風が吹くように、隣でそう言ったのは私と背の変わらないブレイズ。
心配なんかしていない、そう言いかけて私の顔は俯いた。

私が求める物もまた、母が欲しがった物のように手に入れることは
できないのだろうか。

それを手に入れることが出来ないのは、今の私では無理だからじゃ

ないだろうか。

ふわりと揺れる紫苑の花が私にそう語りかけた気がした。どうしても憎めない。

母が唯一笑顔を向ける花を、私は憎む事なんてできなかった。

「王を探そう。」

その花の言葉がどこか心の奥のほうへと響いて、私は落としていた顔をスツと前へ向けた。

物語は動いている。森が呼吸をし始めて、私はまたこの地を踏んで。今の私に母が欲しかった物は見つけられないなら、進めばいい。今の私から進んで、次の私になろう。だってそうだろうか？

「トレス？」

「私達にすべき事はたくさんあるんだ。立ち止まってる時間なんて今は必要ないだろ？」

人は進まなければならぬ時だけを持って生きているわけじゃない。時には歩かなければ進めない時もある。

そして立ち止まり振り返らなければならぬときも。休むべき時間さえあると思うんだ。

そんな私達が歩くべきか走るべきかは分からない。ただ、今すべき事は休み立ち止まる事ではないはずなんだ。

「そうだね！」

今の私から進んで、次の私になる、なれるんだ。

あの日の私には聞くことの出来なかったことを、確かに今なら聞けるよ。

『お母さんが欲しかったのは、何？』
答えは返ってこないから、私は探すと決めた。あの日の答えとなるものを、見つけたい。
それだけなのか？とそう聞かれたら、はっきりと頷く自信はない。ただ、せめて探していたい。

「トレスの知り合いなんだよね。」

あまりにも真っ直ぐなコアは、いつだって私の背中をピンと伸ばしてくる。

その目にはもう何の曇りも無いようだった。屈託の無い瞳に、諦めを知らない言葉。

その右手にはまた痛々しい包帯をするコアは、私達の眼を疑わせるほどに元気に笑いはしゃいでいる。

「ああ。」

「男か？」

セルスはその隣で聞いてくる。きっとコアの眼を晴らしたのは彼だろうと思った。

コアの眼は母に似ていた。母もまた、目の奥を曇らせて。しかしその曇りを掃う人は誰もいなかった。

傍にいる私がその人になれたらよかったのにと、後悔は襲うが今はただ進むしかない。

「ツイン・クール」

「ツイン？」

「ああ。ツインの母は王族に仕える者だった。あいつ父を見た事はない。

何よりあいつの髪は、絹のように美しい金の髪だった。」

夕方の太陽が傾くと森の木々が赤く光を放つように森を照らしていた。
昔ツインを母に会わせたとき、その髪の色をみて驚いていたのを覚えてる。

それから母はツインの事を気に入っているように見えた。笑顔を向ける事はなかったが、私は何となくそう思った。

「私も金の髪をしていたなら・・・」

「ん？何か言ったか？」

夕日を見るとどうしてこんなにも切なくなるのだろうか。

その切なさに押し潰されて出てきた私の言葉を聞いたブレイズが首をかしげている。

「いや、何でもない。」

「そうか？」

「ああ。ほら、もうすぐホワイトホープが見えるぞ！」

ゆっくりとでも着実に傾く太陽が空から消えたとき、パンと一瞬弾けるように白い光がこの地上を照らした。

その光に私は目を閉じて、両手を握る。白い光は願いを叶える幸せの光。

その言葉は、1つの言い伝えから来ていると聞いた事がある。ホワイトホープの光に私は運命を感じていた。

母の欲したものを捜す私の目の前に舞い降りたのは、白い光のようなドラゴンを操る伝説の少女コアだった。

「トレス？お前本気であんなの信じてんのかよ？」

「ブレイズは信じてないのか？」

「あんな子供騙しみたいな話、信じてるわけないだろ！」

そんな馬鹿にしたような声に私は思った。今はもう、信じずにはいられないんだ。

「私は信じてるよ！」

コアの声にブレイズがまた笑う。コアと出会って、信じずにはいられなくなっただ。

ホワイトホープは、白い光が願いを照らすという意味でつけられた。人々は何故白い光が願いを照らすと思ったのか。その根源には白竜の伝説があるのだと母から聞いた事がある。

「お前は思わないか？」

急にジェラスがブレイズに向けてあざ笑うかのように言った。

私はその言葉に続けて言う。

「あの白い光はまるで……」

白竜が空を飛ぶ時、人々の下に幸せが舞い降りる。

太陽が放つあの光はまるで、白竜が空を翔けた後の道のように見えるため人々は

「白竜が通った光の道だと。」

白い光が幸せのドラゴンが通った後の光、つまりあの光は人を幸せにする、願いを照らす光なのだとして信じて名づけた。

セルスがそういうと、私達はブレイズの顔を伺いながら笑った。

そしてそのホワイトホープの根源がここにいる、コアが契約したド

ラゴンなんだ。

「ああ・・・そうか、それなら信じられる気がする。」

ホワイトホープが世界を照らすように、コアが私達の願いを照らし、この国の幸せを照らしてくれた。

探し続けた答えへの道が、彼女が照らす光によって姿を見せ始めたから。

あの時私の元に舞い降りた彼女が、私を諦めさせずにここまで連れてきた。

本当はここに来る勇氣さえない私を、諦めた森を生き返らせたように歩ませて、進ませた。

「そんなマスターになれたらいいなあ。」

コアの微笑みに私は頷いた。願いを叶えられるのは、願う者だけ。

しかしただ願うだけではだめなのだ。進もうとしなければ、掴もうとしなければ、願う事に意味はない。

私の矛盾した願いも、叶うのだろうか。母の欲しかったものを見つけたとき、私の願った物は消える。

私はその恐怖に踏み出す事を出来ずにいた。その恐怖は今だって消えたりしない。

「きつとなれる。」

しかしそれは私だけのことじゃない。

コアやセルス、ブレイズたちもその恐怖を知りながら進んでいるんだろう。今なら分かるんだ。

コアがどうしてドラゴンを嫌うシュランの村に、自ら足を踏み入れようとしたのか、できたのか。

怖くないわけ無いのに。彼女はそれでも笑って進んだ。その理由が今なら分かるんだ。

人は何かを願うとき、恐怖を抱えているんだ。

けれどその恐怖に立ち向かおうとした者だけが、その願いへ近づく事ができる。

お母さん、貴女は何に恐怖を覚えながら、何を願ったのですか。

私はその答えを探すと決めた。たとえ私にとって哀しい事実が待っていて。私の願いが途絶えてしまっても。

貴女が私を生んでくれたという事に、私は賭けるんだ。

もしもお母さんの願った物が、私が奪った物だったとしても。

伝説のマスターの隣で、私は成長した。だから進むんだ、答えへと。

第91話　：コア

白竜が通った光の道筋と呼ばれるホワイトホープ。その名を与えた者たちに、恥じないようなマスターになれたらいい。

そう思う私にトレスは言ってくれた。“きつとなれる”と。私は願うの。

そんなトレスの心の中にある冷たいものが、いつか暖かくなりますようにって。

「あれがツインの家だ。」

「意外に小さいんだな。」

トレスが指差す先にある小さな家にブレイズが言葉を返す。それに頷きながらゆつくりと家への小道を歩く。

トレスの背は少しだけ大きくなったようなそんな気がした。村と言っても家が点々と立っているだけの集落で

ここでトレスは何を思って、何を見て、成長したのか。そんなことをふと考えていた。

私がそんな事を考えている間にも、トレスはズンズンと進み、家の入り口まで来ると立ち止まってノックをした。

「こんにちは。ミルサーン！」

トレスの大声がそのあたりに響く。その音に帰ってきた声は、木々と風の話し声だけだった。

私達は扉を唯一点に見つめて、集中していた。しかし、いくら呼んでも扉を叩いても、誰も出てきはしなかった。

「留守か。」

心の中での確信をトレスは呟いた。しかしそのトレスの言葉に、辺りを見回していたルアーが言った。

「いや、もしかするともういないかもしれないぜ。」

「どういうこと?」

確かに考えられない事は無いが、かなり自信気なその言葉に、私は首をかしげる。

すると目の前にいたルアーではなく、後ろに立っていたセルスの声がした。

「この道、あまり人は通ってない。それに、そこにある水道管は途中で割れている。」

人が生活している気配はないからな。」

そう言われて足元を見ると、わずかに石の間から雑草がびっしりと生えていた。

人が歩いている道ならば、草は柔らかく倒れているであろうが、その草はどんとと生長しそうなほどに真っ直ぐだ。

それにセルスの眼が見たほうを見ると、湧き水から引かれた管が途中で完全に途切れて、そこから水が溢れている。

「そんなぁ・・・。」

目を落とした先には小さな紫の花が咲いている。紫苑の花だ。

その紫苑の花が一瞬揺れたとき、紫苑の花を揺らした風にドラゴンの匂いがして私は顔を空へと上げた。

するとそこから薄紫のドラゴンが舞い降りてくると同時に、大きい声が響いてきた。

「そこで何してるんだよ!!」

私の立つ位置から見える景色に映るドラゴンは、堂々と羽を広げて舞い降りる立派なドラゴンだった。

そしてその背からチラチラと覗いていたマスターがある程度の高さまでドラゴンが降りると、急に立ち上がり飛び降りた。

「お前等、こんな所で何をしている!!」

地面に足をついたマスターの眼が、いるように私達を睨み付けた。

その目に少し怯みながらも、必死で食い付くが相手の男はかなりの怒りを見せている。

その男は鋭い目に白い顔で、それには似合わない茶色の短髪だった。

「お前・・・ツインか!!」

そんな冷たい視線の間をくぐりぬけてそう言ったのは、私の後ろに立っていたトレスだった。

そのトレスの言葉に驚いて私はトレスの方を振り返った。

その男もまたトレスの言葉に、睨み付けていた目を緩めて、緊張を解いた。

「・・・まさか、トレスなのか!？」

その声はさっきと打って変わって、明るく華やかな喜びを見せる声だった。

その言葉にトレスは大きく首を上下に動かして笑った。

「トレス!!」

「ツイン！」

まさかの感動の再会に、私やセルス、ルアーもジェラスもブレイズも驚きを隠せずに、口を開いて眺めていた。

二人はそれはそれは嬉しそうに握手をし、肩を抱き合い、笑いあっている。

まるでこの場所が不釣り間ということも忘れ、私達の存在でさえ消し去るほどに笑いあっていた。

「ツイン！お前、ドラゴンマスターになったのか！」

「ああ。お前は、魔術師だな。なんとなく分かるよ！」

「ああ！国家魔術師をしているんだ。」

国家魔術師とは、公務の魔術師である。

つまりルアーやジェラス、ジェラスと同郷のブレイズと違って、他の国から来た者ではなく、元々この国で働く魔術師の事だ。

今は政治を導くものがあやふやになっているため、国家魔術師も色々な場所で働いている。

「あの……。」

「あ、ああ！こいつがツインだ。……て、ツイン！！」

「なんだよ。」

「お前のお母さんに会いに来たんだ！」

チラリと二人を覗いてみせると、トレスは急いで本題に戻った。

しかしツインにはそのいきなりの質問の意図が全く分からないように、は？と言葉を零した。

「私達、王を探しているの。それでそのことについて知っているかもしれない、貴方のお母さんを探しているの。」

「俺の母さんを？」

「ああ、そうなんだ。おばさんはどこにいるんだ？」

「母さんは・・・死んだよ。」

ポツリと途切れるように、その言葉が響いた。

私達はその言葉に輝かせていた目を、一瞬にして暗闇に閉ざされ、足が一気に重たくなった。

「それ・・・本当か？」

「ああ。それで・・・俺もお前を探してたんだ。」

確実なはずだった未来が、一瞬にして消えてしまった気分だった。しかしツインは目を輝かせて、そういった。

「私をか？」

「ああ、よかった・・・。母さんがお前に伝えてくれと言ったことだ。」

答えはすぐ傍で、待っていたのかもしれない。

「その指輪を外してほしい。」

探し求めた答えは、すぐ傍で私達を待ち望んでいたのかもしれない。

「え？」

「お前が指輪を外す時、待っている未来が来る」とか言ってたんだ。

母さんはお前の母さんから何か聞いていたのかもしれない。それできつとそんなことを言ったんだ。」

未来が来る、足音が聞えた気がした。

トレスは驚いて自分の付けている指輪を見ていた。そんなトレスにツインは続ける。

「それしか聞いていない。けど、きつとお前の求める答えもあるんじゃないかって言っていた。

それを伝えるために、お前を探していたんだ。」

ツインがそういい終わったように言うと、トレスはゆっくりと顔を上げた。

トレスが求めている答えに、トレス自身が恐れている。私にはそんなふうには思えた。

トレスの中にある冷たいものが、きつとその不安なのだろうか。彼女は酷く恐れているように思えてならなかった。

それでも探すと決断し、進むと決めた。その強さに私はとても尊敬していた。

「指輪は外してはいけないと母に言われている。」

トレスは指輪を触りながらそういった。その背中はとても哀しげで、苦しそうだった。

答えが何かなんて分からない。分からないから探す。分からないから逃げる。

人はいつもそうやって進み続けてきた。前進なのか、後進なのかは分からない。

それでも動かなくてはならないと感じて、動くのは求めるか、逃げるか。

求めることを選んだ人が、必ずよいことを得られるとは限らない。

その気持ち最后在らなくなって立ち止まる理由になることもある。

進んできたのだから、戻る事はしたくない。しかし、いざとなつて

進む事も出来なくなる。

もしかしたら今のトレスはそうなのかもしれない。

「指輪を外せば、お前が探すものが見つかるかもしれないぞ？
お前はそれを探すために、あの日からこの森を出て探し続けたんだ
ろう？？」

それを誰がいいなだめてみたところで、自分が決めなければ一歩も
動けなくなる。

そんな時、周りの人にできる事は見守る事だけなのだろうか。

「ああ。．．．けど、この指輪を外すなって言われてるから．．．。」

分かっている。誰が何を言ったところで、本人が決めて行動するこ
とくらい。

だから反対はしないけど、立ち止まる事は良くないと思うから。

「トレスが怖いなら、外す必要なんてないと思う。」

私の口からようやく出たのは、その緊張した空気を一瞬にして砕い
た。

皆が私を見て、驚いている。

「だけでもしもトレスが外すと、自分で答えを求めるなら、私は頑
張って支えるよ。」

トレスが不安に思っている答えがあっても、私頑張って支えるから、
ね？？」

私にできる事はそれくらいだ。

でも嫌ではない。悔しいけど、仕方ないと分かっているから。今までだってそうだった。白竜のマスターだからといって、できることなんて人よりも劣っているし、力もない。それでも自分にできる事をしたら、それは力となって帰ってくる。そうわかってるから。

「コア……。」

振り向いたトレスの眼が、ほんの少し不安を消して微笑んでいた。

「トレスが信じたいものを信じて、進みたい方へ進めばいい。」

答えはすぐ傍で待っている。でもそれがいついかなる時も、幸せだとは限らない。

それでも人は求め続けるの。願いとその答えを。

不安と希望は矛盾して成り立っている。その中で決断し、進む。

平気だなんて笑いながら、心の中で悩み続けて、後悔しながら、進んでいく。

私もそうだったから、分かるの。

ルキアとの契約さえ後悔してしまう時がある。それでも進むと決めた。

たった一つの願いを、答えを、求め続けると決めたの。

「外す。」

傍に支えてくれる人がいる。そう思うと進める、どんな決断でもできてしまう。

だからトレスにもそう思って欲しい。支える私という存在を頼って欲しい。

だから大丈夫。答えはすぐ傍で、微笑んでいるから。

第92話　：トレス

怖いんだ。

その未来に何があるのか。

『ママ、これなに？』

『これはお守り。絶対に外さないで。分かった？』

幼い私にくれた、母からの最初で最後の贈り物。

分かった？と聞くお母さんの目は、真剣そのもので、その喜びも押さえつけられた。

だから外したくなかったのもある。だけど、そうじゃない理由もある。

私が恐れている。この指輪を外す事で、私が拒んだ未来があるんじゃないかと。

『トレスが怖いなら、外す必要なんてないと思う。』

そんな私にコアは平然とした顔でそういった。

『トレスが信じたいものを信じて、進みたい方へ進めばいい。』

その言葉がどれほど私を安心させて、力をくれたか。

コアの微笑みに私はゆっくりと指輪に力を加えて、薬指から引き抜いた。

その瞬間、眩いほどの光が辺りを覆った。その光に私は目を閉じて指輪を握った。

バサツと私の髪が降りた。顔を下に向けた私の横目に入った髪の毛

の色に、私は自分の髪を握った。

「・・・き・・・ん？」

茶色のはずの私の髪は、金色に染まっていた。

「・・・王族・・・」

ボソリ、そう呟いたのはツインだった。

その言葉に振り返ろうとした瞬間に私の手は急に熱を持ち、その熱さに私が手を開くと、私の手から指輪が浮き上がった。空中に浮いた指輪は、ぼんやりと何かをかたどった光を放った。

「・・・か・・・あさん？」

その姿は何故だが、ずっと昔に死んだお母さんに見えた。

『指輪を外さないでと言ったのに、外したのね。』
「うん。」

これは魔法で刻まれたメッセージ、そう分かっている私でも私は返事を
してしまっ。

涙がたまっ、その光はぼやける。

『貴女には、あんな場所にはいてほしくない。』

お母さんの言葉は全く意味が分からなかった。

『私の愛した人は・・・貴女の父はアカンサスの王様。』

私さえ気づく事の無い魔法を、お母さんは指輪にかけて私につけさせた。

その魔法はきつと、私の金の髪を隠すための魔法と、この過去のメッセージを刻み込む魔法。

『貴女は・・・王女なの。』

私を見る母の眼が忘れられなかった。

どこか冷たくて、寂しくて、哀しみを映して。私を通して誰かを見ているようだった。

その母の眼が今・・・私を見ている。

『金の髪なんてアカンサスには王族のみ。貴女を・・・守りたくて、その髪の色を隠す魔法を指輪にかけていたの。』

貴女には王族になってほしくない。あんな場所には立たせたくなかったのに。』

ごめんと謝っても、そこに立つ光の母には届かない。

それでも私は涙を流して、心の中で謝った。どうか、許してと。

『貴女はいくつになったのかしら。私に似たの？それともクオンズ？』

お母さんが私を通してみていたのは、父であるクオンズ王だったんだ。

ならお母さんが欲しかったのは、大好きなお父さんとの生活だったのかも知れない。

そして私はずっと思っていた。

それを邪魔したのは私という存在なんじゃないだろうか。

「お母さんは・・・私を生んだから・・・愛した人と一緒にいられなくなつたのか・・・？」

私が恐れていた答えが、心を駆ける。

私が生まれることによつて、大切な人との未来を失つたから、母は私を哀しそうな目で見ていたのか。

『貴女を守るために・・・仕方なかったの。許されるなんて思つてないわ。』

貴女を父親から引き離れた事で、クオンズを恨んだりしないで欲しいの。』

母は私を産むことを選んだ。その選択は、間違つていたのかもかもしれないのに。

私が生まれなければ、お母さんは愛する人の傍にずっといられたかもしれないのに。

それなのに・・・許してなんて、私がずっと言いたかつた事を簡単に言ってしまうの？

生まれてきてごめんと言えないまま、貴女は私の前からいなくなつて。

ずっとずっと謝りたかつたの。愛する人との未来を奪つてしまつてごめんなさいと。

「お母さん・・・。」

『貴女がお腹にいると知つたとき、私は何があつても産むと決めていたの。』

けど、私の立場で貴女を産めば、貴女は必ず辛い思いをすると分かつていた。

だからクオンズにもそう説得して、彼の存在しない小さな村で暮らす事を選んだ。

ただ貴女を見るたびに、申し訳なくて、辛かった。私の所為で貴女は父を知らないまま育つのだから。

ごめんね、許して欲しいとは言わないから、どうか分かって。

私がどれほど貴女を愛していて、貴女以外はどうなってもいいから、あなたを守りたかったと。』

母が欲していたのは、愛する人との未来ではなく、私の幸せな未来。そして母が紫苑の花が好きだったのは、あの花の色が王座の色をしていたから。

王様のことも愛していたけど、それでも貴女は私を産むことを選んでくれたの？

「私っ・・・そんな・・・」

ずっとずっと、苦しかった。

愛されるはずなんて無いと思っていたから。恨まれて当然だと思っていたから。

お母さんから愛する人を奪った私が、愛されるはずなんて無かったのじ。

『金の髪を恥じたりしないで。彼も私も貴女を愛しているという証なの。』

もしももっと早くに気づいていれば、私はお母さんに抱きつく事ができたのかもしれない。

母は私に謝りたくて、私は母に謝りたくて。

ただすれ違っていただけで、母は私を愛してくれていた。私も母を愛していたのに。

母が欲したのは、愛する人との未来ではなく、私の幸せな未来。

私が探し続けていた答えは、想像していた答えよりもっともっと幸

せなものだった。

「トレスは王様の娘だったんだ。」

コアは驚いたようにそういった。

「知らなかった……。」

「トレスのお母さんは、トレスが傷つかないように自ら選んでここに来たんだね。」

ここに追いやられて、その理由となる私を恨んでいたのではなく、母は私を守るために自らここを選んだんだ。

『王座に座るべき権利、貴女はそれを持つてるから。それをどう使うかは貴女が決めて。』

私はもう止めない。』

たった一つの指輪が未来への扉を開いた。

指輪を外す時、私達は未来を動かす場所へと立つ。

求めた答えはもう、私の手の中に。

だからもう立ち止まっているわけにはいかない。

もう守られるだけの存在じゃない。

未来を動かすために、進むよ。

お母さんが私を守ってくれたように、私も誰かを守れるように。

第93話　：セルス

未来は訪れた。

動き出すその瞬間を待っている。

「・・・トレスが王女」

静寂の中でツインが呟いた。そして急に左足を折りトレスに頭を下
げ跪く。

ツインのその行動にゆっくりとルアーやジェラス、ブレイズも続け
て跪いた。

「何のまねだっ！」

跪いた4人を見てトレスが怒鳴りつけるように言った。しかし誰も
顔を上げる事は無い。

目の前で怒りを見せているのが、この国の王。俺が跪けないのは、
まだ実感が無いからだろうか。

それとも、隣にいるコアがトレスの眼をじっと見つめたままだから
だろうか。

トレスは一向に頭を上げようとしない4人から顔を反らしてこっち
を見て言った。

「コア。お前は王を探して王座につかせるのだと言った。」

「うん。」

トレス以外の声が返事をする。

「セルス。お前はコアを助けるために来たんだよな。」

トレスはコアを見ていた目を俺に向けて聞いた。

「ああ。」

「コア、私が王女なら…….お前は どうするつもりなんだ。」

『私が王女なら』なんて、もうはつきりと決まっていることなのに、トレスが王女だと知っても、コアは跪くことはないのだ。

「……トレスがしたいようにすればいい。」

光の中でトレスの母は言ったのだ。

『貴女には王族になってほしくない。あんな場所には立たせたくなかったのに。』と。

その言葉を聞いたトレスが、王座につくとは思えない。

「え？」

コアの言葉にトレスがマヌケな声を上げた。

コアだってそれくらいは分かっているはずだ。母の想いを無駄にするとは思えない。

しかしここでトレスが王座につくといわなければ、コアのこれまでは全て無駄になる。

この国も…….あと何十年と争いを止める事などできないだろう。それを考えても、コアはトレスに決定権を与えた。

「ていうかね、私決めてたの。」

俺の隣に立つ、白いワンピース一枚の幼い少女が笑う。

俺の眼に焼きつくその笑顔は、俺の一番好きな顔だ。

「その人に・・・王座につくか決めてもらおうって。」

強く何かを信じて笑える、彼女の笑顔が一番好きだ。俺と出会った時だって、彼女はそうだった。

今も変わらずに誰かにその笑顔を向けられる、そんな彼女だから俺はここにいます。

コアはきつと初めから王を見つけても、その人を無理に王座につかせる気なんてなかったんだ。

『世界の大きさ、知ってる？』コアの言葉はいつだって、人に未来へ進む力を与える。

「お母さんは怒るだろうな。私がコアと一緒に、王座を取りに行くなんて言ったら。」

だからコアの笑顔に笑いかえす者がいる。

「トレス！」

「お母さんが避けた場所を私が奪いに行くなんて、おかしな話だな。」

未来が始まる場所に、君はいつだって存在している。

それは未来へ動かす力を与えているのが、君だから。

「お母さんが避けた場所を変えたらいいの。素敵な椅子にすればいい。」

トレスのお父さんが座った椅子に、トレスが座るのは当然だよ。」

「そうだな。・・・ツイン、ルアー、ジェラス、ブレイズ、顔を上げてくれないか。」

一人ひとりの名を呼ぶトレスが、とても立派に思えた。まるで王が忠臣を呼ぶような、そんな空気があたりに伝う。

「王」

ツインが呟く。

その言葉にトレスはツインの前まで行き、しゃがみこんで言った。

「私の名前はトレスだ。そして私は王と呼ばれるほどの何かをしたわけじゃない。

……王と呼ばれるまで傍にいてくれないか？な？」

トレスはそう言うとツインの手を引いて立ち上がり、俺達に笑いかけた。

「王座を目指そう。」

コアはトレスにそう言って笑いかけた。

「ああ！」

トレスの傍らに、小さな紫の花が揺れる。

風の吹くこの森の奥の小さな家の前で、未来への道を一步踏み出した俺達に笑いかけているように。

一瞬暖かな風が紫苑の花の隣に座ったように見えた。

そのことに誰も気づきはしなかったが、まるでその風はトレスを包むような温かな眼差しで見守っているようだった。

「母親も望んでいるようだ。」

賑わいを見せるその中で、ボソリと俺が呟くと隣に立っていたコアが首をかしげた。

それから俺のしている方向を眺めて、小さく『あ』と声を漏らす。それからこつちを見て、満面の笑みで言った。

「トレスのお母さんも、トレスが王座につく日を楽しみにしてるんだね！」

「ああ。」

神風が作り出す魂の姿は、肉親に感じる事も見る事もできない。しかしすぐ傍にいるのだという。なら、もしかしたらコアの傍を覆っている温かな風は

コアの母のものなのだろうか。

「コアのお父さん、生きてたんだろ？」

「え？うん！」

「どんな人だった？」

俺の質問にコアは少し考え込んで、また笑って答えた。

「おじいちゃんの子なんだあ、って感じの人！」

何の感動もないようなその言葉に俺は思わず笑ってしまった。そして頭の中に転がっていた一つの名前を拾い上げた。

「フェウス・サーノット？」

俺の質問に今度は驚きの眼を見せて大きく頷く。やっぱりか。そんな気持ちがある中で呟かれた。

「何で知ってるの!？」

「・・・いや、なんでもない。なんとなくだ。」

コアの祖父は伝説のドラゴンマスターで、その息子は世界のトップに立ち、その座を自ら捨てた者。

そしてその血のしたにあるものが、俺の隣に立っているのだ。

「つくづく運命の神の存在を思い知らされるよ。」

「え？」

「なんでもない。」

未来へと踏み出した俺達は、これから誰と出会い、何を見る？

運命の神は俺達に、何を与え、何を奪う？

たとえこの道の先に待っているのが、出会いではなく別れであっても、美しい景色でなくても。

運命の神が俺達に与える物はなく、奪われてしまつとしても。

それでも俺達は進むんだろう。

今日と言う始まりの日の光を、その先に思い描いて。

第94話　：コア

ドラゴンが3頭、白と黒のドラゴンを先頭に、七人のマスターと魔術師が空を横切る。

世界を包み込むように広がる空を、ただ真つ直ぐに。

ツインはあの村に残り、新王のことを村人や遠く離れた場所にいる民達に知らせるために私達と別れた。

そしてマティスさんもヒストラスの村に行く前に、シユランで分かれた。彼は残つて軍から村を守るらしい。

セルスが一人で任せてしまえるほど、彼はかなりのマスターらしい。

「コア。」

「なあに？」

この時間を失いたくない。今まで失いたくないものをたくさん、置いてきた。

きつとこうして空を飛ぶ時間だつて、これから失くすに違いない。だからこそ、尊い。

「アカンサスにリラと・・・ロイも来ているんだ。」

「・・・え！？ここに！？どうしてっ！！」

「あいつらが俺を迎えにコントゼフィールまで来たんだ。けどあいつらはきつと東のバンセルでお前を待っている。

どうする？王宮は東にあるんだろ？どうせなら・・・。」

命が尊い理由だつて同じ。永遠に存在するものなんて、この世界にはない。

そんなものはきつと、この世に必要ないから。

私達から見れば永遠だと思えるほど長く生きるドラゴンだって、いつかは眠る。

「そんなっ……。」

だからこそ、この一秒が尊くて愛しい。

セルスの口から、リラとロイの名を聞いて、薄っすらと頭のなかに笑顔がよぎる。

アカンサスにきて、私はとても強く感じたことがある。

それは、誰かに出会うことと誰かの傍にすることはとても凄い事なんだということ。

もしも私が死んでいたら、これからさき誰も私と出会う人はいない。私だって誰とも出会うことは無い。

そして私が死んだら、こうしてセルスの傍にすることなんてもちろんできないのだ。

「会いたい……。」

そう考えると、会いたくて会いたくて……たまらなかった。

そんな私の元に彼が現れた。それはもう、夢のよう。だから、その大切さにも気づけた。

「けど」

けど私の中にある会いたいという強い思いを、かき消すものがある。

「え!？」

「会いたいの……、でもっ……。」

振り向くとそこには、金の髪を風に揺らすトレスと、トレスを守る

ように空を飛ぶブレイズとジェラスがいる。
そしてその後ろをルアーが飛んでいる。

「会いたい……のに……」

「まさか、こんなに成長しているとは思ってなかった。」

会いたいとしか呟かない私に、隣を飛ぶセルスが哀しく優しくそうに微笑んだ。

リラとロイの声を聞きたい。顔がみたい。抱きしめたい。

けど、その感情を押さえ込む気持ちがある。

「お前はいつのまに……そんなに高い場所を飛んでたのかな。」

「え？」

「いや、こつちの話だ。ルキア、お前も苦労したんじゃないか。」

隣を飛んでいる私に、そんなに高くを飛んでいたのかとセルスが問う。

全く理解できずにいる私に、セルスは軽く笑ってルキアに目を移した。

ルキアはしばらく何も言わずに羽を上下に動かした。それからいつもとは少し違った声で言った。

「ええ、とても。」

その言葉に私は思わず笑ってしまった。

その笑いに続くようにセルスとアルが笑い声を上げた。

「会いたいけど、会えない。会うより先に、この国の王様を王座に着かせたい。……だろ？」

私の心の中にあつた、会いたい気持ちを遮る言葉にならない気持ちを、セルスが言葉にした。
空の雲はゆっくりと動いて、風に流され進んでいる。

『その通りです、って感じだな。』

アルは私の顔を見ながら面白そうに言った。

「この国の専属ドラゴンマスターになれそうな気がする。」

セルスがそう言った事が、私には少し哀しく思えた。

今の私にはそんな仕事はできない。それに、わたしがなりたいのは、そんなものじゃない。

国のためだけに尽くすマスターでは終われない。おじいちゃんの見ていた世界を見たい。

おじいちゃんが見るはずだった景色を、私が見たい。

「そんなのに、なれるわけないよ！！それに、なりたいとも思えないし。」

そんな想いから、思わず怒ったように大声をあげてしまう。

変に怒ってしまった私にセルスは優しく説明するように言った。

「昔のお前なら、リラとロイがこの地にいると知ったらすぐに何を捨てても会いに行く。そう思ったただけ。」

「え……、そう……かな。」

『ええ。』

ルキアの優しい声が賛同した。

それは捨てられるほどの物しか、抱えてなかったからではないだろ

うか。

そして今は確かに違う。私の感情一つで捨ててしまえるほど、簡単なものじゃない。

『会いたい、どこにいるの？・・・そう聞き返すかと思ってました。』

「ふふっ、そうかもしれないね。」

ルキアの言葉に、私は思わずそう言っている自分を想像できずしてしまった。

きっとアカンサスに来る前の私なら、そういうかもしれない。けど、今は違う。

「ここに来る前の私なら・・・、絶対に投げ出して会いにいった。」

私が出会った幼い少女は、私よりずっと小さいのにその背に命を背負い、裸足で地を歩き、その命を支えていた。

それから私のドラゴンを好きとってくれたバンセルのお婆さんは、足を怪我して、戦争に苦しんでいるのに私の事を元氣付けて、笑顔にさせてくれた。

シユランの村の長老さんは、ドラゴンマスターに大事な人を奪われたのに、私に笑いかけて靴をくれた。

『今も、そうするんじゃないかと思った。』

アルの言葉はとても暖かく聞えた。だけど、そんなこと、私に出来るはずない。

もしもそう出来ない理由があるとするなら、出会ったたくさんの方が教えてくれた事だろう。

命を支えるという事の重さと苦しさを。
苦しくても、誰かを思う気持ちを忘れないという思いやりを。
憎しみを包むほどの優しさを持つことの素晴らしさを。

「この世界には、一つとして失っていい命なんかない。
私が今背負っているものは、果たそうとしていることは、すごく重
くて難しいものだから。」

私の感情一つで、人の命は幾つもなくなくなってしまふ。」

この地にいるたくさんの人を守りたい。

おじいちゃんやお父さんにできた事、私も絶対に成し遂げてみせる
という思いもある。

だけど、それよりも・・・私は私に出来ることをしたいから。

どれほど苦しい事なのか、分かっていて王を探すために空を飛んだ。

「命はちよつとのこととで、すぐに消えてしまえるほど弱いものなの。」

ドラゴンの炎の混じる息ひとつで、腕よりもずっと細くもろい一つ
の矢で。

私やセルスのような子供の手から生まれる魔法一つだって、人を殺
せてしまえる力を持つほど。

命は弱くて脆い。

「私達にはその命を奪えてしまうほどの力を持つ者として、その命
を守るという責任がある。」

この国で出会った人、一人も失いたくなんてない。

「俺の眼の届く場所には、いないくらい・・・高い場所にいるんだ

な。」

「・・・え？」

「この国にきて、そんなにたくさん事を学んだのか。俺がのんびりとコントゼフィールで勉強しているあいだに・・・。」
「セルス?・・・セルスが何を言ってるのか分からないけど、確かにこの国に来て学んだ事はたくさんあるよ。」

そしてそれは、とてもかけがえの無い大切なものばかり。そんな事を教えてくれた人達を放り出して、私の感情だけでは動けない。

『良いことを学んだようだな。』

「うん。・・・いつかセルスとアルにも聞かせてあげる。」

「ああ。」

『楽しみだ。』

全てが終わったら、リラとロイに会いに行こう。

それからお父さんと一緒に、お母さんにも。

それも終わって、この国が平和になったら・・・もう一度ルキアと一緒にこの国を回りたい。

「トレスを王座まで送り届けて、この国が平和になったら・・・、皆にありがとうを言いに行きたい。」

生きることがこんなにも、大変で、苦しくて・・・でも素晴らしい事なのだと教えてくれた人達に。

ありがとうと、この気持ちを伝えたい。

私と関わってくれた全ての人に、ありがとうと笑って。

ねえ、セルス。

貴方がその一人目になってくれる？
遠く離れていたぶん、感じていた想いを貴方に。

第95話　：セルス

世界の景色が変わり始めた。
しかしそれを気にする余裕なんてものは無かった。

『私達にはその命を奪えてしまうほどの力を持つ者として、その命を守るという責任がある。』

コアの言葉はあまりにも、重くて大きなものだった。

今の俺に、理解しようとして理解できるものだとは思えないほど。

「なあ、そろそろドラゴン休ませるか？」

地面に広がる景色が木々の緑になり始めると、後ろからトレスが声を上げた。

コアはその声に大声で返事をして、傷跡のある右手で優しくルキアを撫でた。

いつの間に、彼女はこんなに高い場所を飛んでいたのだろう。

俺がただ座って授業を受けている間に、白い足を小麦色に焦がし、幾つも傷をつけて歩いたのだろうか。

「あんなに遠くに行ってるなんてな。・・・追いつける気がしない。」

降下を始めたアルに呟く。

アルはゆっくりと森へ近づきながらかすかに返事をした。

「・・・お前なら・・・だい・・・だ。」

「え？」

しかし、風に遮られるようにアルの言葉が途切れた。けれどそれはほんの一瞬の事で、もう一度アルがはっきりと言った。

「お前なら大丈夫だろ。」

自身ありげにそう言うアルに、俺は思わず笑ってしまった。けど、本当に大丈夫な気さえた。アルと一緒になら、どこへだっていけそうな気がする。そう思っていると、深い気味の悪そうな森が近づいてくる。

「川の音がする。近くに滝とかあつたらいいね。」

「滝……？」

無邪気に笑うコアに、トレスが不思議そうに聞き返した。

「竜は滝の水を浴びると、とても元気になるの！これは、講義で知ったこと！！」

「……基本だな。」

元々竜とは、千竜滝を昇った竜だけを差す。

つまり滝を上げない竜はドラゴンとしてではなく、水の中で水竜となって生きていく。

「で、補足説明をしてやろう。ドラゴンは唯の滝を浴びただけでは無理なんだなあ、それが。」

「え?! そうなの!？」

全く講義を聞いてない、その証拠がこの驚きようだ。

「世界のなかで竜が元気になる滝は、仙の山にある千竜滝だけ。」
「え！？そうだったんだ……。そっか、ごめんね、ルキア。滝じや無理なんだね。」

白い羽をバサバサと揺らしながら、風を舞い起こすルキアはコアの声に全く耳を向けていない。
羽を飛ばたかせる音が、コアの声を消してしまったのかもしれないが、それにしても何かがおかしかった。

「……おい、コア。」

そんな疑問を感じながらルキアを眺めていると、真っ黒の服を着たジェラスがコアの肩を叩く。

その方向へ振り向いたコアに、ジェラスが手をかざした。

「おい……。っ！！」

その行動に俺と、コアの傍にいたトレスがジェラスを押さえにかかろうとした。

しかし、その瞬間……

「え？」

緊迫した空気にはまるで似合わない、マヌケな声が響いて俺は足を止めた。

そのマヌケな声を出したのは、ジェラスに呪縛の魔術をかけようとしていたトレスだった。

「……お前もか。」

その行動を見てジェラスは静かに手を下ろしてコアの頭を撫でた。魔法をかけられそうになっていたコア本人は至って普通に微笑み返している。

「お前！今、何をしようとした！」

トレスは何も言わずにただ驚いたまま、自分の手の内を見ている。俺はとりあえずコアの守るように、背の後ろへと庇う。

「何が。お前は気づかないのか・・・、この森の異変に。」

ジェラスが深刻そうな顔をして、俺にそういった。その言葉に俺は肩の緊張を下ろして見つめ返す。

するとトレスとジェラス、それにブレイズとルアー4人が急に自分の両手を合わせた。

「・・・？」

それから何かを呟いて、バツと一斉に放したが光も何も起こらない。

「そんな・・・まさか！」

トレスが何度も手を合わせては、離してそう呟いた。

ルアーもトレスと同じような顔をして、両手を合わせては離している。

「ふう・・・。そのまさか、らしい。」

そんな二人を見ながら、ブレイズは自分の手を見て空を見上げ、一息つくとそう言った。

その言葉に俺は全く理解できず、コアと目を合わせてハテナマークを頭の上にちらつかせた。

「ここ・・・っ。ブレイズ!？」

「ああ、ここがあなの・・・『ロブフォレスト』。」

ブレイズの言葉に4人は手を下ろした。

「フォレストって、それがこの森の名前か？」

俺が質問を投げかけると、ブレイズとトレスが同時に頷いてこつちを見た。

それからブレイズが、そつと白い木の幹に左手で触れると俯きながら話した。

「説明するよ。・・・この森は『ロブフォレスト』と呼ばれる、魔力を奪う森だ。」

ブレイズがそう言った時、ブレイズの後ろのほうでルアーが足を崩して座り込んだ。

その目からは失望したような感情が、感じ取れて不安になった。

コアはそんなルアーに駆け寄り話しかけている。

「魔力を奪う・・・森？」

「アカンサスを常に移動する、呪いの森とも呼ばれている。」

ああ、どこかで聞いたことがあると思ったら。

ずいぶん昔の講義で聞いたことがある。アカンサスについて学んだときだ。

アカンサスには、魔力を吸い取る木と地を持ち、常に移動する森が

あると聞いた。
それがこの『ロブフォレスト』。

「でも、どうしてそんなに落胆する事がある？」

「どうしてかって！？お前、頭でもおかしくなっただんじやないか？」

それまで黙り込んでいたトレスが怒りと言うよりも不安をぶつけるようにそういった。

その声はあまりにも大きく、森中に響き渡るようにこだました。

しかし、森はかなり広いが、生き物は一匹としていないようで、生き物の鳴き声などは一つも聞えてこない。

「落ち着け、トレス。俺はこの森が、魔力を奪うとしか知らない。

しかもその奪われた魔力だって、この森を出さえすれば、だんだんと戻ってくるんだろ？」

「ああ。」

トレスは小さく謝り、また頭をもたげた。

俺の言葉を聞いているのは、ジェラスとブレイズだけのようだった。そして俺よりも無知なジェラスは、じっとブレイズの説明に聞き入っていた。

「出られたら、だからな。」

「……出られないかもしれないのか。」

あわてる事も無く、ジェラスは核心を突いた。

「どうして出られない？森くらい……」

「空から何を見ていたんだ！」

トレスはジツと俺を睨み付けてきた。

「いや……。」

「シユランくらいの村、5つ分はあるぞ、この森は。」

トレスをなだめるようにブレイズが言った。

そういえば、空を飛んでいるとき、やたら長い時間飛んでいたはずなのに地面にはずっと緑が茂っていた。

そしてその先は、かなり先にあった。

「なら、この森が移動するのを待つのはどうだ？」

「そんなの待ってたら、骨になるのがおちだ。」

まるでどうにもならないような、そんな風にトレスが言った。

確かに、森の移動なんかを待っているのは間違いだろう。

しかし、森が移動する方向と逆に進めば、歩いて抜けるよりずっと早く抜けられる。

「ちなみに、森の移動する方向はわからないから、森と反対に進む事なんて不可能だぞ。」

「え……ああ……。」

心の中を突き刺さる言葉。

確かにこれは結構危ない状況かもしれない。

「じゃあ、ドラゴンに乗って空から指示するのは!？」

すっかり気がめいつているルアーの傍にいるコアが、嬉しそうな声を上げて立ち上がった。

その言葉に誰もが心の中に希望を灯した。

「ナイスアイディアだ！」

「でしょ！」

そういいながら、コアがルキアの元へと走る。

その背中を見て、俺もアルの元へと走る。

「ルキア。空を飛んで、森を出たいの。」
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ガサガサとルキアの尾が揺れるたび、枯れ草が乾いた音を鳴らす。その音に俺は足をゆっくりとどめながらあるに近づいた。

「アル？」
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

そっと触れようと手を伸ばす。

するとアルはまるで急に触られたかのように驚いて、一瞬身を引いた。

「アル？」

「ルキア？どうしたの？何か言って？」

誰の話し声もしない時間が流れた。

俺はアルの赤い眼を見つめて、心の中で問いかけた。しかし、答えなど返ってこない。

「どういつことだ!？」

トレスが驚いたような声を上げた。

そんなもの、俺達だって驚いている。まるで、契約が切れたような
・

「そうか。」

俺の頭の中にあるノートが急にめくら音を立てて、さかのぼり始めた。

思い出せ、思いだせ・・・そんな焦りが一層早くページをめくる。そして、たった一文にノートはめくれるのを止めた。

「そうだ・・・、ドラゴン契約は魔力を持つ者により発生するもので、魔力を持たない者とは契約できない。」

魔力がないと、ドラゴンとの会話は不可能となる。それだけではない。

魔力がなくなつた今、俺達マスターとドラゴンの契約は消えそうになっっているのだ。

ドラゴンは自分を持つに相応しい主を選ぶのに、魔力を見ている。もちろんそれだけではないが、弱い魔力の主につくと、契約が途絶える可能性が高くなる。

契約を保持している魔力が途絶えれば・・・自然と命は死へと向かう。

それを避けるために、ドラゴンは自分にあつた主かどうかを判断し、契約する。

「・・・ドラゴン契約が、切れかけてるってこと・・・？」

コアの言葉と共に、森が風に小さく揺れた。

「・・・つまり・・・どういうことだ？」

「ドラゴン契約が切れかけているという事は、……空を飛ぶ事もできない。」

「……え?!」

ドラゴン契約には、ドラゴンの背にマスターを乗せるといった契約が記されている。

マスターの命令以外にこの契約が破られることはなく、マスターと認識した者以外を乗せることはない。

そして特に……ドラゴンマスターは、他のドラゴンの背に乗ることとは出来ない。

つまり、ドラゴン契約が切れかけている今は、ドラゴンマスターではあるが、主だと認識されていない。

それが意味する事は、ドラゴンの背に乗り、空を飛ぶ事はできないという事だ。

「そんなのっ……、じゃあ……どうして話せないの!?!」

「魔力が途絶えて、会話法を使えなくなってしまったんだろ。」

「会話……ほー?」

なんともマヌケな質問だ。

「ドラゴンと会話するには、そのドラゴンにあった魔力で会話法を用いて会話する。」

たいていの魔力を持つ者なら、気づかないうちにしてしまえるほどの下級魔法だ。

あまりに低レベルな魔法使いはマスターにはなれない。」

「へえ……」

そう考えると、クラスDだったコアがルキアと話せたのはとてもすごいことだ。

もともとはSの素質を持ち合わせるマスターだったからかもしれないが。

「というか、お前は講義・・・何も聞いていないのが丸分かりだな。」

「・・・。」

しかし、こんな呑気なことを言っている場合ではない。

アルに乗れないなら、森を歩いて出るしかない。そしてここは移動の森・・・。

吸い取った魔力で育つ木々は、水を必要としない・・・つまりは。

この森には水なんてものは無い。水の無い所に、栄養を与える食べ物など存在しない。

「やばいな・・・。」

王宮まで、あと少し。

しかし・・・少々問題が大きいうだった。

第96話　：コア

セルスは言った。『ドラゴン契約が切れかけている』と。その言葉からすぐ、私の心の中はポツカリとしか感覚が覆い始めた。

「ドラゴンと話せるのは、絆があるからだと思ってた。」

そうなら、とても素敵な事なのに。

どうやらドラゴンとの会話も、無意識に行う会話法によって出来ていたらしい。

講義は睡魔が襲ってくるため、ほとんど聞けてないが、こんな話は聞きたくなかった。

「馬鹿だな。」

ブレイズが笑いながらそう言って、優しく私の頭に手を乗せた。

私と身長の変わらないブレイズの目は、どこか心配そうな目をしていた。

「『絆』とか、関係ないだろう。」

その後ろから低い声がする。その声はやはりジェラス。

時間が経つほど、心の中がポツカリと空いているような感覚が大きくなっていく。

しばらく羽を動かしていたルキアも、その以上に辛そうな目を向けて、うな垂れている。

「そうかもしれないけど……。」

私はジェラスへの言葉を濁らせた。
そんな私の隣には、ずっと黙り込んだままセルスが立っていた。

「今が昼かどうか分からないな。」

トレスは陽気に笑って言った。

「そだね。」

「元気出せ！大丈夫だ！！出られると思えば出られるから、なっ？」

平気だと笑ってみせるべきなのに、引きつるようにしか頬の肉は動かなかった。

喉も渴く。魔力が無くなり、体もかなりの疲労を訴えているのがわかった。

どうすればいいの？そんな事、とてもじゃないが口に出る空気ではない。

私を元気付けてくれるトレスやブレイズ、平静を装うルアーとジェラスだって魔力を失っているのだ。

「コア、ちょっと。」

耳元で静かに響いたセルスの声は、どこか悲しみを思わせた。

「何？」

ゆっくりと腕を引かれて、疲れきっている4人から少し離れると、セルスの腕は細く白い幹に触れた。

「セルス？」

「・・・あわてるなよ。」

「何が？」

「・・・魔力が消えて、契約がだんだんと途切れる。それは分かるよな？」

ゆっくりと確かめるようにセルスは言った。

私を見る事なく、目を白い幹の足元に落として彼は続けた。

「じゃあ・・・契約が途切れたら、どうなると思う？」

あわせてくれない目に、私は不安を感じて握りこぶしを作った。

もう魔力を放つ事はできないこの手を、ぎゅっと自分で握り締める。

「空が飛べなくなる。」

「ああ、そうだ。けどそれだけじゃない。・・・ドラゴンはどうなると思う？」

お願いだから目を合わせて聞いて？私の手を握って、平気だと囁いて。

ポツカリと空き始めた心を、これ以上不安にさせないで。

そんな気持ちでセルスを射るように見た。しかしセルスの目が私を見返すことはなかった。

「ドラゴン契約が途切れる時・・・ドラゴンの心臓はゆっくりと止まり始める。」

ようやく私を見たセルスの眼には、あふれ出しそうなほどの不安が映っていた。

声が聞えない。言葉が交わせない。触れられない。空を飛べない。ルキアと目をあわすことが出来ない。

それだけでも、不安で不安で仕方なかったのに・・・。

「う．．．そ．．．」

心が空っぽになっていく度に感じた、何かが切れていく音。ゆっくりと、けど、確実に．．．ルキアは私から離れていく。

「考えていたんだ。主が死ぬとき、魔力が途絶え、ドラゴン契約が途切れる。

そのときドラゴンは死ぬ。

それなら、今ここで俺達の魔力が途絶えたら、アルは．．．アルやルキアは．．．」

「そんなの嘘っ！」

細い糸がゆっくりと切れていく。その度に心は寂しさをまとい、空いた穴を不安が埋める。

ただルキアの声が聞けたら、それだけで私はきつと元気になれる。

だから、ルキアの声が聞きたい。いつだって私を優しく支えてくれた、彼女の声を。

「ルキアッ！」

私は無意識のうちに疲れきっているルキアの元へと大声を上げて走っていた。

地面に積もる落ち葉がガサガサと音を立てて、私の足を捕らえる。

それでも私の足は、唯当然のようにルキアの元へと向かった。

「ルキアっ。」

返事をして。

「ルキアっ……」

ルキアを失うなんて、絶対に嫌だ。

「お願いだから……返……事……」

こんなにも大好きなのに、もう私の声は届かないの？

「ルキア……」

私の与えた名前、貴女にはもう聞えないの？

ねえ、神様。

貴女がドラゴン契約を定めたなら、貴女に聞きたいことがある。

どうしてドラゴンが死んでも、私達マスターは死なないのに……私達の魔力が途絶えるだけで、ドラゴンは死んでしまうの。

「私はっ……」

私がドラゴンで、ルキアがマスターならよかつたのに。

ルキアの前で私の膝が折れ、地面に崩れた。そんな私の後ろからセルスが追いかけてくる。

「約束したのっ……、ルキアに……自由と……真の絆を与えるって……」

「コア！落ち着けよ！ルキアには届かないんだ！」

届かないなんて、認めたくない。

「私……まだ……何も与えてないのにつ……」

《コア》

深い森の中から、澄んだ声が一つだけ、私の元に響いた。

あの声を辿って、森に入り、歩き続けた。あの声だけを頼りに。

「私を・・・呼んでよっ！・・・ねえっ。」

涙が零れて落ち葉を濡らす。

「ルキアっ・・・、」

あの日、貴女が私を呼んだのか。それとも私が、貴女を呼んだのか。それがどちらであっても、私は神様に言い尽くせないほどお礼を言いたかった。

初めて空を知ったあの日、私はルキアの背で、世界を広げて見せると決めた。

ルキアに、私の時間全てを使って、自由と真の絆を与えると。

「私・・・まだ、何も与えてないのにつ。・・・ねえ・・・ルキア。」

貴女は私に言ってくれた。《マスターになるんでしょう？》と。

そう、私はマスターになりたかった。

やっぱりマスターじゃ与えられないものだったのかも知れない。

貴女が欲したものは、マスターがドラゴンから奪うものだったのかもしれない。

「どうして・・・」

それでも貴女は、私を支え続けてくれた。守り続けてくれた。

「ルキア」

パツと顔を上げると、涙の所為で潤いすぎた世界の中に、白く浮かび上がるものが動いた。

『 『

傍にいたい。

どんな形でも、貴女の傍にいられるならそれでいいとさえ思えた。

あの日から、この気持ちは大きくなり続けている。

「ルキア・・・？」

声は魔力によって繋がれたものなのだろうか。

『 『 『

涙が優しく、ルキアの羽から届いた風に拭われる。

「ルキア」

あの日、あの時、私を呼んだ貴女の声から全てが始まった。だからお願い、信じさせて？

あの声は魔法ではなく、絆が繋いだ・・・声だったと。

『 『 『 『 『 『 『 『 『 『

コア

自由なんて願うものじゃない、と私は言った。
絆なんて気づけばすぐそこにあるものなんだ。と。

「ルキア。声が・聞えたよ？」

『私もですよ、コア。』

ゆっくりと確実に、心の中がいつぱいに満たされていく。

不安が埋めていた穴から、不安が追い出され、ゆっくりと優しさが埋めてくれる。

「嘘だ・る」

セルスが驚いた風に言った。

「会話法は、いらないみたいだよ。」

私がそう言って優しく微笑むと、セルスはにっこり笑い返してアルの元へと走っていった。

『声、届きましたよ。』

「私も聞えるよ？」

『《まだ何も与えてない》と言いましたが、そんなことない。
自由も真の絆も、強さも優しさも、空を飛ぶ喜びも、全てコアが教えてくれた事。』

ルキアの声が優しく森に響く。

「私が与えてないと思うから、まだ与えてないよ。」

私、ルキアからいつぱいの幸せ貰ったから。それ以上に何かを与えてあげたい。」

『コアの時間全てを使って。なんて、私は望んでないわ。』

「うん、分かってる。だけどね……。私の時間、全部ルキアに遣って欲しいの。」

一秒でも離れていたくないと思った。

ずっと傍にいて、ずっと繋がっていたいと思った。もう、二度とこんな気持ちになりたくない。

「不安で、不安で……」

『コアのいない世界を生きるということが、こんなにも無意味だと思ひ知らされた。』

「私だつて……。神様を恨みそうになった。」

ドラゴン契約は、この世界で最も強い契約魔法。

だから、その契約が森の所為で失われる事なんてあるはずない。理屈的に考えるとそうかもしれないけど。

私達の声は重なった。

それは決して、理屈的なことじゃないと思うんだ。

私達の声を繋いだのは、確かにあの日、私達を出会わせた……。『絆』だと思うんだ。

「貴女が私を呼んだの？」

『コアが私を呼んで、私がコアを呼んだのよ。』

私がルキアを呼ぶ限り、ルキアは返事をして。ルキアが私を呼ぶ限り、私は返事をする。

それだけで、私達は繋がっていられる。

『真の絆』なんて、気づけばすぐそこに、あるものだから。

第97話　：セルス

いつだって、彼女達が生み出すものは奇跡以外のなにものでもなかった。

「約束したのっ・・・ルキアに・・・自由と・・・真の絆を与えるって！」

地面に崩れたコアはそう叫んだ。静かな森で少女が涙を零す。彼女の震える背に、俺は思った。

俺達はいつだって、ドラゴンとは比べられないほど小さいはずの背中に、ドラゴンの時間を背負っていると。

アルと出会ったあの日から、俺の背中にはアルの命が背負わされている。

そして、アルとの約束も。

「コア！落ち着けよ！ルキアには届かないんだ！」

コアにそう言う自分の言葉に、悲しみをぶり返す。

「私・・・まだ・・・何も与えてないのにつ！」

俺だってそう。まだ、何も与えてない。

《お前の傍だけが、俺の目指すものに近づける可能性がある、唯一の場所なんだ。》

アルは俺にそう言った。だから俺は、せめて彼の目指すものへほんの少しでも近づこうと思った。

何千年と生きる彼から、俺は時間を奪い、契約に縛りつけてしまった。

きっとドラゴンマスターは皆、そうなのだろう。

コアの背が、言葉が、涙が、そう思わせてならないんだ。契約に縛りつけ、時間を奪ったマスターは、ドラゴンのためにできる事をするべきだと。

「私を・・・呼んでよっ！・・・ねえっ。ルキアっ・・・、」

白いドラゴンの羽が小さく動く風が優しく吹いた。

もしも、この世界に『奇跡』など存在しないと云ったら、今俺が見ている光景はなんなのだろう。

その優しい風がそっとコアを包み込み、白竜の青い透き通った目が、ジッとコアに注がれている。

届くわけの無い彼女の声に、まるで耳を傾けているようにルキアは見ている。

私・・・まだ、何も与えてないのにつ。・・・ねえ・・・ルキア。どうして・・・ルキア」

確かにドラゴン契約は途切れかけているんだ。

こんなことが起こるはずが無かった。しかしその景色は美しく、そこにあった。

顔を上げたコアは、目からたくさんの涙を零していた。

「ルキア・・・？」

優しい風が白い羽から生まれ、コアを包む。

その風の中に、微かな音がした気がした。

風が一瞬強く吹いて、コアの涙を晴らした。

「ルキア」

「もしも、この世界に『奇跡』がないというなら、俺が今日の当たり
にしているこの景色はなんなのだろう。」

信じる心が、目に見えるようにはっきりと、あるべき姿を映し出す。

『コア』

そして優しく澄んだ声が、コアの名を呼んで。

「ルキア。声が・・聞えたよ？」

そう。それはもう、奇跡以外の何でもない。

『私もですよ、コア。』

ゆっくりと二人を見ると、二人の間にはしっかりとドラゴン契約が
結ばれていた。

「嘘だ・・る」

途切れた糸がまるで、魔法のように繋がれている。

「会話法は、いらなみみたいだよ。」

ああ、君達にはそんなもの必要なかったのだろう。

『絆』が、確かに存在して、途切れかけた契約さえ結びなおしてし

まった。

そう思うと、にっこりと微笑むコアに微笑み返して、俺の足はアルのもとに駆けていた。

「アル！」

魔力を奪うこの森で、魔力を奪われたコアとルキアのドラゴン契約が切れる事はなかった。

それはドラゴン契約が、この世界で最も強大な契約だったからかもしれない。

けど、そうじゃないと俺は思っただ。

「アルっ！」

答えて欲しい。

俺はお前のマスターとして、お前の目指す場所までまだ・・・たどり着いてはないだろ？

「アル。・・・もしも、俺とお前の間に絆があると思っなら・・・どうか答えてくれ。」

こんな場所で、後悔したくないんだ。

アルと契約を結んだ事を、後悔したくないから。

「俺の・・・ドラゴンになる気はないか？」

そう、あの日も。俺はこいつに聞いた。

《俺のドラゴンになる気はないか？》と。

そんな俺をジッと見る赤い眼は、マスターを欲する目だった。

そう、あの日も。俺はこいつに聞いて、こいつは答えたんだ。

『・・・なつて欲しいなら、なつてやつてもいい。』

黒い翼に、赤い眼が、まるで悪魔を思わせる。

それなのにその中には、優しい心を抱いているドラゴンだった。

「アル」

『声が届かないことくらいで焦る必要なんかないだろ。』

それもそうかもしれない。けど、アルの声一つでこんなにも安らぎを感じている自分が居る。

「そんな事はない。・・・声が届いて・・・よかった。」

お前のいない時間を生きるなんて、俺には考えられないことだから。あの日、俺の全ての力を使ってでも契約を結びたかった。

こんなふうに、『絆』というもので繋がる事ができるのは、きっとアルとだけだったんだ。

『大げさだな。』

「そうかもな。でも・・・怖かった。」

『お前がか？』

アルは可笑しそうに言った。俺が恐れることは、たくさんあるんだ。どれほどの魔力を持っていても、できる事なんて本の少ししかない。大切なものが多いほど、たくさんのことを恐れてしまう。そしてその度に自分の無力さに気づかされる。

「俺は案外怖がりなんだ。」

アルがいなくなることも、コアがいなくなることも、俺にとっては一番恐ろしい事だ。

大切なものがこの手の中から消えてしまうことが、どれほど怖いのか、コアが一番知っていること。

コアはたくさんの事を恐れている。だけどそれは、強くなる者には仕方の無い事だと思うんだ。

『守るべき者を持ち、失う事への恐れを持つ者が真の強者となる。』

アルはそういうと、優しく笑って空を見上げた。

「何だ？」

『古人の思想だ。守るべき者と、それを失う事への恐れを持たなければ、真に強くはなれない。』

「だから・・・コアはあんなにも強いのか。」

守りたい者を守るために、失う事への恐れを抱き、前へ進む。

『だから、お前も強いんだ。』

アルの言葉に俺は小さく横に首を振った。

俺は強くない。弱くはないだろう、でも、強いはずがないんだ。

『お前は強い。』

もし、本当にアルがそう思うならそれは、アルが傍にいるからだろう。

俺は無力で、一人では何も出来ない人間だから。

アルが傍にすることで、ほんの少し、無力な自分を抱えながらも戦える気がするんだ。

だからもし、アルが俺を強いと思うなら、それはアルがいるから。

「アルがいなければ、何もできない唯の人間だ。」

俺にできる事なんて、ほんの少しのことだけ。

それなのに守りたい者がたくさんいて、失う事を恐れてしまう。

『それは弱いんじゃない。』

人間だけじゃない。俺やルキアだって同じだ。1人で生きられる者なんていないんだ。』

アルはそういうと黒い羽を大きく広げ揺らした。その羽が起こす風に、髪の毛が微かに動く。

『誰かを必要として生きることが、弱いだなんてありえない。』

赤い眼が優しい理由を俺は知っている。

その眼は大切な者を失った悲しみを知っている、コアと同じ眼。

「そうか。」

『俺が選んだ奴が弱いわけねーだろ。』

こつちを見る赤い眼は、自信に満ち溢れていた。

アルはもっと良いマスターと誓っていたかも知れない、と後悔したくない。

アルにとって最高のマスターでありたい。

「ああ」

それは小さな願いで、大きな未来だった。それでも俺は願い、進も

うとし続けるだろう。

アルと契約を結んだあの日から、この気持ちは変わることなどない。その想いは強く、声を繋ぐほど大きなもので。

その想いだけが、『奇跡』を起こせるのだと信じている。

強い想いに運命の神が訪れて、そこには確かに『奇跡』が存在するのだと。

第98話　：トレス

夜の闇風が冷たく地を這うように森を包み始めた頃、森の奥からそんな闇を掃うように明るい声が走ってきた。

直ぐそばで話していたはずのコアとセルスはどこかへ消えて、私達は魔力を失い地面に座り込んでいた。

そしてその声は、そんな私達に希望を与えるものだった。

「トレスー!!」

「・・・コア？」

明るく華やかな声が駆けてくると共に、夏の日に焼けた匂いを漂わせる風がブワツと吹いた。

その風に、低頭していたブレイズやジェラスやルアーも顔をあげた。薄気味悪い森の中を、夏の風と共に大きな白い鳥が舞い降りた。

「コア・・・?!」

その白い鳥に見えたものは、立派な翼を持ち、鋭い爪を持つ、白竜ルキアだった。

その背からは、汚れた白いワンピースを着た少女がゆっくりと地面へ降りたつ姿はまるで救いの神のように美しかった。

「コア・・・ルキアに乗れたの？」

その後ろからは、闇の色をしたもう一頭のドラゴンがルキアの隣に舞い降りて、羽を広げた。

「うん！」

コアはとても嬉しそうに答えた。そんなコアの後ろから、淡々とセルスが歩いてくる。

「契約が、途切れたんじゃ？」

座った私のもとまで来たコアが、その小さく弱弱しい傷だらけの手で私の腕を引き上げた。
魔力のない手が、ゆっくりと私を立ち上がらせる。

「契約はまた結ばれた。・最高契約だからな。」

セルスが後ろから言葉を挟んだ。私はその言葉に、足がすくみそうになった。

魔力を持たない私達魔術師は、この森では無力な人間でしかない。自分では何も出来ずに、ただ救いの手をこうして待っていることしか出来ない。

「この森から出られるよ！」

コアの眼が輝きに満ちて、私の心の中の不安がその言葉一つでいとも簡単に埋められた。

コアに出会うまでは、ドラゴンマスターなんて魔術師の足元にも及ばない者だと思っていた。
ドラゴンがいなければ、何もできない唯のドラゴン遣い。そうしか思えなかった。

「コア・私・。。。」

「もう、大丈夫だから。」

私があの日出会った白竜遣いは私よりもずっと、幼い少女だったのに。
小さな体でドラゴンを守り、大人によって作られた憎しみに立ち向かい、彼女はいつも強くそこにあった。

魔術師にはない、ドラゴンを守り通すという気持ちを彼女は溢れるほどに抱えて空を飛ぶ。

私を知っているマスター達は、契約でドラゴンを縛りつけ、ドラゴンがいなければ何も出来ない者たちだった。

「ルアー、平気？」

「あ、ああ。」

疲れきっているルアーの腕に手を絡め、彼女は勢いよく引つ張った。あの小さな体のどこに、そんな力があるのか、そんな勇氣があるのか。

コアの行動や言葉には、いつも驚きを与えられていた。私を知っているドラゴンマスターとは、全く違うマスター。

「ジェラスも、大丈夫？」

「俺は平気だ。それより、森を出るにはどうするんだ。」

ドラゴンがいなければ何も出来ない、ドラゴンを従わせ、奴隷とする者達を、マスターと呼ぶのだと思っていた。

ジェラスの質問にぼーっとしているコアの代わりに、セルスが答えた。

「ドラゴンに乗せることは出来ないから、空から森の出口を指示する。」

魔術学校でたくさんの魔術を学び、高等魔術も取得して、自分の限

界を目指して頑張ってきた私は今、唯無力にも座り込み、こんなに幼い少女の腕によって立ち上がらされた。

マスターとは何なのだろうか。どうしてこんなにも強いのだろうか。

「俺は平気だが・・・おい、ルアー、お前大丈夫か。」

「・・・ああ、歩くくらいなら。」

魔術師はこんなにも弱い生き物で、マスターはあんなにも強い生き物なんだ。

その違いはどこにあるのだろうか。魔力のない魔術師は唯の人間で、魔力を失ったマスター達は、マスターのまま。

「トレスはルキアと一緒に乗ってもらおう。」

そんな事を考えていた私に、目の前の少女は笑いかけて言った。

その言葉に私は驚いて回りの反応を見た。しかし誰も驚きはせず、頷くばかり。

「私だけ歩かないなど、そんな事できるか！」

皆魔力がなくなり、疲れきっていた。

魔法を叩き込んだこの体ではもう、森を出られるまで歩けるかどうかも不安である。

それなのに、そんな中私だけがドラゴンに乗れるはずがないとコアを睨み付けると、セルスがコアの隣で口を開いた。

「お前は王になる人間だ。この国の未来を創る人間なんだ。」

あまりに鋭く向けられたその目に私の心は一瞬揺らぎ、口をつぐん

だ。

そんな私の背中をポンと軽く押すように、ブレイズの右手が触れる。私はその手にサツとブレイズのほうへ振り返り、ブレイズの言葉を待つ私にブレイズが言った。

「乗っていけって。」

コアもブレイズの言葉にブンブンと大きく頷く。

「王じゃなくても、女ではあるだろ？」

ブレイズが笑いを必死に隠そうとしながら言うのが分かって、私は睨み付けた。

コアもそれを楽しそうに笑っている。

「・・・分かった。」

王となるにはまだ、私はあまりにも幼く弱いから。

マスターだったら、こんなに弱くはなかったのだろうか。魔力に頼って生きる私達は、マスターに敵う術がない。

マスターの中でも、コアは特に・・・白竜が選んだだけあると思わせるマスターだ。

実際に見た事はないが、伝説として聞いたことはある、白竜と伝説のマスターの話。

「ありがとう！」

ぎゅっと抱きつくコアの体が温かく、私は一瞬脆くも涙を零しそうになった。

お礼なんていわれる理由が見当たらないのに、むしろ私が礼を言う

べきなのに。

「森を抜けたら直ぐに王宮に着くよ。」

そんな想いが言葉にはならず、溢れそうになる。白竜と伝説のマスターの話なんて、嘘だとしか思えなかった。

御伽話の中で作り上げられた、夢の話。そう思っていたのに。

「ああ。」

「ルキア。私とトレス、乗せて飛べる？」

どうして君はそんなにも、真っ直ぐで優しくて、強いんだ。

ルキアに命令を下すことなく、こんな若い少女がドラゴンと共に空を飛ぶマスターだなんて。

いつだって空を飛ぶマスターは、ドラゴンと共に飛んでいるのではなく、私が木で作られた筈で空を飛ぶのと同じとしか思えなかった。

『もちろん。早く森を出しましょう？』

ドラゴンは優しく頷いて、高く鳴いた。魔力のない私にはドラゴンの言葉を理解することなどできない。

そしてそれはコアだって同じはずなのに。

「ありがとう。森から出たら、休もうね。」

コアの耳に聞えたのは、ルキアの鳴き声ではなく、優しい言葉のようであった。

コアはそういうとそっとルキアに手を伸ばし、顔をすり寄せるルキアを優しく撫でた。

おとぎの国の中で作り上げられた『伝説のマスター』は、もしかしたら本当にいたのかもしれない。

今は、そう思えてならない。

誰かがひっそりと伝えた『白竜が誓う時、真のマスターが現れる。』という言葉は、言い伝えとなった。

そしてその言い伝えは、確かに予言となりつつある。いや、もう予言となっているのだ。

「トレス？どうかした？？」

「・・・いや、見れば見るほど・・・綺麗な生き物だよな。」

汚れを知らないドラゴンが目の前で嬉しそうな顔をしている。

「ルキアのマスターが、コアでよかった。」

なんとなく、ふと心の中で浮かんだ言葉が零れ落ちた。

「・・・ト・・・レス？」

「いや、悪い。ふとそう思ったただけだ。」

白竜のマスターがもし、コア以外だったなら、ルキアのこの綺麗な翼は汚れきっていたかもしれない。

その可能性はあっても、コア以外がマスターで、今よりもずっと綺麗な翼だったという可能性はない、きつと。

白竜が誓ったから、真のマスターなのか。真のマスターだから、白竜が誓うのか。

あの予言の言葉には、深く考えさせられる。

「ううん・・・、嬉しい。ありがとうー！」

「え？あ、ああ。」

コアなら何と答えるだろうか。コアには答えがあるのだろうか。とびっきりの笑顔が、この森に似合わないほど華やかで。コアは何を考え、何を見て、ここに立ってこの笑顔を向けているのだろうか。

「セルスモアルと空に行つたし、ルアー達も皆出発したみたい。」

「ああ、静かだ。」

「そうだね。ルキアが早く森を出ようって言ってるから、乗って？」

コアに促され、湿った落ち葉が覆う地面からゆっくり足を離した。初めて触れるルキアの肌はしっかりとっていて、でも柔らかく、以外にも暖かかった。

その翼は地上から見上げるのとは全く違い、目の前ですごい迫力で上下に動く。

私とコアが乗ってもビクともしないルキアの体からは、ほんのりと暖かさが伝わってくる。

「ドラゴンは暖かい生き物なんだな。」

知らなかった、と呟く私にコアはにっこり微笑んで言った。

「そうだよ。人間なんかよりもずっと優しくて、とても気高いの。」

彼女は誇らしげにそういった。まるでその言葉が合図であったかのようルキアは羽を広げた。

そしてその翼を上下に揺らし、地上からどんどんと離れていく。

「聞いても良いか、コア。」

「何？」

「……お前は どうしてそんなに強いんだ。」

マスターと魔術師の違いは、どこにあるのだろう。コアと私に、どんな違いがあるのだろうか。そう思った直球そのままの質問にコアは驚いた顔をして、それからまた笑って言った。

「もしもトレスがそう思うなら、それはきっとルキアがいるからだよ。」

今まで出会ってきたマスターに、こんなにも惹かれたことはない。強いと感じた事だって。

けど、私よりもずっと幼い少女の強さに今、私はこんなにも惹かれている。

そしてコアの口から出たその答えは、あまりにも簡単で、あまりにも素敵な言葉だった。

「マスターはドラゴンを守るために強くなろうと頑張ってるね。」

それからたくさんの人に出会って、その力がどれほど小さくどれほど大きなものか分かるの。

それで、もっと強くなりたいって思うの。・・・誰かを守れるように。誰も傷つけないでいいように。」

コアの眼は揺ぎ無く唯真つ直ぐに、私を見るでもなく、前だけを見ていた

そんなコアに私は、魔術師はマスターに勝てるはずがないのだと思いき知らされた気がした。

ドラゴンを守り抜こうとするマスターの強さに、敵うはずがないのだから。

そう、それは魔術師だけでなく、ドラゴンを算とするマスターも、絶対に敵いはしない。

「空だ。」

鬱葱と重たい草が覆う森から抜け出た先に、壮大に広がる夕焼けと夜の境を描く空があった。

遠くの地平線へ太陽が身を沈める。

その一瞬の光に人々が惹かれたように、コアはきつと伝説のマスターとなり、数え切れないほどの人々を魅了する。

言い伝えが彼女の手によって、確かに予言となるように。

第99話　：ブレイズ

あの森を抜けてから、3日がたった。

このアカンサスの地は、考えていたよりもずっと広く大きなものだったのだ。

しかしロブフォレストにいる時より、体は軽いし、頭も回っていた。ただ、足は棒のように疲れている。

「砂漠みたいに・・・何もないね。」

「ああ。」

前ではコアとトレスが会話をしている。そしてその後ろではセルスがコアをジツと見つめていた。

その視線に全く気づかないコアに尊敬してしまう。

そしてもう一つ、俺が最近気になっていることがあった。

「コア。」

セルスがコアに声を掛けた。コアはセルスに何？と笑顔を見せて聞いていた。

セルスはそのようなコアをジツと見つめて話している。

俺が最近気になっていること、それはトレスがセルスに向けている目だった。

コアと話しているセルスを、トレスは無意識のうちにか哀しそうな眼で見ているのだ。

コアもセルスもそのことには全く気づいていない。それどころかトレスさえも、きっと無意識なのだ。

「じゃあ、そろそろ休むか。」

もうすぐ城下にたどり着く、そんな気持ちで重たい足を誰一人として文句も言わず動かしていた。

もう限界。と声を漏らしそうになる瞬間、セルスがこっちを見ながら足を止めてそういった。

その言葉に俺の後ろのルアーや、ジェラスがため息を漏らした。

そしてルアーはその場にドカツと座り込んで、「あゝー」と叫んだ。

「もうすぐだよ。」

そんなルアーの元に駆け寄ってそう言ったのはコアだった。

彼女の足にはシュランの村長に貰った靴が、うれしそうに履かれていた。

あの戦いの後、シュランはルキアを見て、救いの神だと崇めていた。それはきつと、伝説のドラゴンマスターが以前もコアのように身を削り助けたからだろう。

あんな小さな体のどこに、

あんなに大きな勇氣や行動力を秘めているのだろうか、不意に強く感じさせる時がある。

「お前も休め。」

「ありがとう、ジェラス。」

ジェラスはコアの腕を引いてそう言うと、バツと自分の黒いマントをかぶせた。

コアはその言葉に笑って頷くだけで、ジェラスのマントを羽織ったまま、

トレスの傍で警戒の糸を張り巡らせるセルスの元へと駆けていく。

ジェラスにそれを引き止めることはできず、彼女の背中を見ているだけだ。

「どうして・・・」

どうしてお前達はそんなに悲しい恋をするのだろうか。

初めて会った時から、コアにはセルスという特別な感情を向ける相手がいたし、

セルスの目は最初からコアにしか向けられていない事くらい、誰が見ても分かる事だったじゃないか。

あの戦いの中、コアの名を呼び舞い降りた彼は、最初から他の何も眼に入っていない。

「どうしてあいつら、あんなムボーなんだろうな。」

俺の呟きをすぐ傍で聞いていたらしいルアーが、俺の言葉の続きを言った。

そう。どうしてあいつらは、望みのない恋心を抱けてしまうのか、全く分からない。

「トレスなんか自分の気持ちに気づいてさえない。」

「だな。」

「お前、恋したことあるか？」

ルアーの相槌に俺は質問を投げてみた。

確かにトレスやジェラスの抱く感情に理解を寄せる事はできないが、悪い感情ではないと思う。

しかしルアーの言葉はどこか、恋を馬鹿にしたように聞えた。

「あるけど？」

まるで恋なんて無意味だと訴えるような事をいうルアーの返事は、

あまりに簡単に返ってきた。
驚く俺に、ルアーは「俺を何だと思ってるわけ？」と浅く笑いながら言った。

「俺だつて惚れた事があるぜ。」

「そう・・・だよな。」

なら、どうして。どうしてそんなふうになつてジェラス達を見る？

「恋を馬鹿にしてるつもりはねーよ。」

「え？」

「違うのか？お前、俺が恋を馬鹿にしたような言い方するから気になつて聞いたんじゃない？」

「あ、ああ。」

馬鹿にしているような言葉だった。無謀だと言った。そりゃ確かに無謀だろう。

コアはあんなにセルスが好きで、セルスの眼はコアしか映されていない。

それでもトレスはコアを見るセルスを見て、ジェラスはセルスに笑いかけるコアを見る。

「まあ、恋つてのは・・・人間を大きく変える物だよな。良くも、悪くも。」

「え？」

ジツと二人を見つめていた俺に、ルアーはあまりに冷たくその言葉を吐いた。

「お前・・・」

その言葉に俺が聞き返そうとした時、コアとセルスが同時空を見上げて手を振り上げた。
それから急に和やかな空気は緊張へと変わり、キリッとしたコアの顔がこつちを向くとコアが言った。

「何か来る!!」

すると空から何かの影が地上をなぞってコアの真上にたどり着く。その後ろを同じ影が追ってきた。

その影に俺とジェラスはバツと空を見上げたが、そこにいたのはコアのドラゴンとセルスのドラゴンであった。

コアとセルスはドラゴンに飛び乗ると、空へと上がる。

そのあまりの速さに俺達は地上にわけも分からず取り残された。

「コア!?!」

「セルス!?!」

名前を呼んでも二人は空へと上がっていく。

するとその地上の先から、今度は2つではなくたくさんの影が駆けて来た。

それを見るとようやく体が動き始め、俺達は筭にまたがった。

「あれはハデス家か?」

遠くから来る軍頭には二つの何かが風に煽られながら掲げられている。

誰もがその旗の模様を目を細めて見極めていた。しかし、近づくとびに分からなくなる。

緑でも赤でもない、白地の旗に金で獅子が描かれ、

そしてもう一つは、黒地の旗に銀で反対に向く獅子が描かれている。

「ベール……でもない。あれはどこの貴族の旗だ？」

その軍は綺麗に線を描き、こっちに着実に近づいてくる。

その距離が縮まるたびに、前の二人から放たれる緊張が強くなり、俺達を引き締めていた。

だんだんとその姿が明らかになり、箒に乗る男達は白と黒のマントをこぞって風に揺らしていた。

その白黒のマントを見たとき、俺はふと昔に聞いたことを思い出した。

「あれは……もしかして……」

「……純白の騎士が……空を舞い、漆黒の騎士が闇を駆ける……」

トレスが思い出したかのように小さく呟いた。

「金軍。」

そう、俺でも耳にした事がある『純白の騎士団・金軍』『漆黒の騎士団・銀軍』。

アカンサスの国王にのみ仕える、表の軍と裏の軍だ。

「金軍？」

「何の軍だ？」

コアとセルスが背中ごしにそう聞いてきた。

「王にのみ動かせる軍。王国2軍だ！」

トレスが驚きを隠せないままに二人に声を投げる。

俺だってトレスと同じで、今のこの状況が全く理解できなかった。

何故、彼らがここに居るのか。誰の指示で空を飛んでいるのか。

王のいない今、彼らは動く事などできないはずなのに。

そんな疑問が頭の中を駆け巡るばかりで、答えは何も見つからない。

そんな事を考えているうちに、白と黒の両騎士団は俺達の目の前で
ゆっくりと止まった。

第100話　：ブレイズ

金軍と銀軍が共に空を飛ぶ事はなく、唯でさえ表に出ない銀軍の旗が日の元に揺れている。

その驚きはトレスでも隠しきれないほどのことだ。

そんな俺達に、金軍の先頭にいる白のマントを着た凜々しい男が言った。

「その少女。そなた、白竜の主とお見受けする。」

印象よりも明るい声がコアに眼を向けてそういった。コアはただ何も言わずに頷いた。

「真か。噂には聞いていたがまさか、本当に子供だったとは。」

静かに風が旗を揺らして通っていく。

相手の男は笑う事も驚く事もせず、淡々とそっくり、続けた。

「我々はアカンサス国王2軍、金軍銀軍である。
遠き地の果てより噂を聞きつけ、白竜遣いであるそなたとその一行を探していた。」

揺ぎない眼はコアを逃さぬように見つめている。

「何のためにですか。」

コアは短く初めて言葉を返した。

「白竜遣いの手によって、王宮に次期王がお送りされていらっしや

ると聞いた。それは真か。」

次期王、それはトレスのことだった。

トレスは確かに、白竜遣いのコアによって王宮へと送られている途中。

しかし、コアはその正しい問いに答えず黙り込んでいる。

「我が眼まなこに狂いがなければそこにおられるお方が、次期王ではないかと。」

その男の問いに、コアは何を考えているのか全く答えない。

風だけが流れ、響く音はルキアとアルの羽が上下に揺れる音だけ。

そんな空間を破ってセルスが声を上げて言った。

「人違いだ。」

「人違い、とな。」

誰にでも分かる嘘だった。

しかし、俺には何故セルスがそんな嘘をつき、コアがそれを黙認しているのか理解できなかつた。

その男は確かめるようにそう聞くと、後ろで何かを構えた者に手を上げて止めた。

「手荒な事は避けたい。」

「そんな事をされる覚えがないです。」

コアは厳しく言葉を放った。

その背中はあまりに凜々しく強く、俺の眼に映えた。

「ほう、あくまで『人違い』だと?」

「はい。」

「その金の髪、王家の証拠ではなかるうか。」

「さあ。」

何故嘘をつく必要がある。

王国2軍なのだから、ここからはもうトレスを預けるほうが賢いのではないだろうか。

「何故そのような戯言を……」

凜々しい男の後ろから、違う声が遮った。

「こんな所で途絶えちゃ困るからです。」

コアは唯答えた。

「我々がそなたらに劣ると。」

「いえ、そんな事を言っているではありません。力も人数も私共では敵わない事は分かっています。」

「ならば。」

「ただ、貴方が……確かに国王2軍であるという確実な証拠がありますか。」

俺にもわからなかった。

セルスとコアが何故、あんな見え透いた嘘をつくのか。

金軍のトップの男は眉をひそめ、答えを渋りながら言った。

「この旗が何よりの証拠であろう。」

「馬鹿を言わないで下さい。それで私共が納得するとでも？」

俺はコアの背を見た。

本当に、いつもいつもこいつには驚かされてばかりだった。小さくて幼くて、一見ただ偶然にも白竜に選ばれここまで来た少女かと思えば、

そんな事を全く思わせないほどに、強く逞しく、理解を簡単に超えてしまうほどに大きな存在。

「ははっ。さすがは白竜遣いだ。」

そこに漂っていた深刻な空気を笑い飛ばした陽気な声は、ずっと黙り込み面倒そうな顔をしていた銀軍のトップにいる男だった。

「シード！」

「お前の負けだろ、ヴァン。悪かったな、女。」

シードと呼ばれたその男は、白のトップの男にさういうと簡単に黙らせてしまった。

それからトレスを見てゆつくりとお辞儀をすると、深い青の眼を向けて言った。

「どうすれば信じてもらえるか、言ってくれ。」

「・・・何故、王もないこの国で国王軍が旗を掲げているんですか。」

確かにそれは不思議な事だった。

王以外の誰が、両国王軍を動かせるのだろうか。今やこの国は政治のトップもないのに。

そう考えると、もしかするとこの軍は貴族2家のどちらかが送り込んできた者かもしれないと思えた。

だからだ。だから、コアとセルスはあんな見え透いた嘘をついたのだ。

「鋭い所をつく女だな。将来が楽しみになる。」

「シード……お前は！」

「そうかつかするな。説明する。ここは一度、地上へ降りないか。」

俺よりも若いあの二人は、どこでそんな事を覚えてきたのだろうか。もしもホイホイとトレスを渡して、後にどちらかの軍の差し金だったなら、

今度こそこの国はハデス家とベーレ家の争いが尽きるまで、平和は訪れない事になる。

そして何より、今まで俺達を助け、俺達に願いをこめた人々を裏切る事になる。

「分かりました。」

本当に理解を超えた人間と、俺は関わっていたんだと、今更ながらに気づかされた。

ジェラスがコアを想う気持ちを、とどめる事なんてできるはずがなく。

トレスがセルスに惹かれる理由でさえ、分かってしまう。

コアの言葉に俺や両軍が地上へと下っていく。

「それで。」

コアが地上についてそう言うと、男は黒のマントを風になびかせて言った。

「まずは王女に挨拶をさせてくれ。」

もしも本当の金銀軍なら、思いもしない平和への鍵であるトレスに出会えて、心は高ぶっているに違いない。

それを必死に抑えているのは見て取れることだった。

『まさか本当に王族の生き残りがいたなんて』まさにそんな感じだ。それなら挨拶をしておきたい気持ちも、分からないでもなかった。しかしコアは依然として、厳しい言葉を返す。

「先に・・説明してください。何故王国軍が王の指示なく動くのか。」

「・・・挨拶くらい、させてくれよ。」

「答えて。何故王国軍が、王のいないこのアカンサスで旗を掲げているのか。」

何故、そこまでしてこだわるのか分からない。

「小さな覚悟で、ここまで来たわけじゃないんです！」

初めてコアが大声を上げてそういった。

「私達は王を立てさせるまで、命を懸けて守るという覚悟でここまで来たんです。」

貴方方にどんな事情があれど、その覚悟は揺るぎません。」

コアはいつだって真っ直ぐだった。

俺は凄い人間と関わってしまったかもしれない。

誰かを守り、誰かを笑顔にするために、自分の右手なんて当たり前のように差し出してしまう。

その身を盾にして大切な者を守る勇気を持つ、ドラゴンマスター。

「知っていますか。小さな女の子が、その背中にどれほど重たい命を抱えているか。」

痩せ細ったお婆さんが、こんな戦いの中でも人を元気にさせるか。傷つけられた人がその痛みを、優しさに変えて微笑んでくれるか。私達にどれほどの希望と願いが託されて、ここまで来る事ができたのか！

私はその希望や願いを、こんな所で裏切ることにはしたくない。・・・できないんです！」

コアの言葉に男は目を見開いて聞いていた。

誰も何も言わずに、彼女の言葉をじっと聞き入っていた。

「私達は・・・王を絶やさせるわけにはいかないんです。」

「・・・本当に子供かどうか、お前の方がよほど疑わしく思えるな。」

驚いた顔を軽く笑顔に変えて、男は冗談交じりでさういうと、一歩引いて掌を上に向けると静かに話し始めた。

何故王がないこの国で、国王軍が動き、王女であるトレスを迎えに来たのかを。

その掌には、小さな映像が映し出され、風に揺らぎながら何かをぼんやりと映し出された。

時折くつきりと映し出されるその映像は、白い紙に何か文字が書かれているようだった。

コアの言葉に誰もが口をつぐみ、驚きを見せた。

幼く脆そうな少女は、誰かのためとなると誰よりも強くなる。

俺はそんな人間と関わってしまったのだ。

彼女の覚悟と想いによって世界は歩み始める。平和への道をゆっくりと。

第101話　：トレス

「あれは14年以上前のことだ。」

彼の光の水晶が映し出すのは、真実か・・・嘘か。

「王が軍のトップの俺とヴァン、他の忠臣が集められて、こう告げられた。『王女トレスが死んだ』と。」

それから4年たち、王が亡くなって・・・貴族2家がこの争いを始めた。」

その水晶の中には、誰か深い青のマントを羽織った男の人が椅子に座っている景色があった。

その時小さく吹いた風に、私はふと母の言葉を思い出した。

『金の髪を恥じたりしないで。彼も私も貴女を愛しているという証なの』

あの中心で1人椅子に座っている、その人こそが私の父、クオンズ王。

顔も声も笑顔も好きなものも、私は彼の事を何も知らない。それでも私は確かに、彼の娘なのだ。

だからだろうか。ぼんやりと映る初めて見る彼の顔がどこか、私に似ている気がするの。

紫の椅子に座る、しっかりとした眉に綺麗な金の髪、それに・・・どこか優しい眼。

「その日から7年がたったころ、俺は空になった王座を見に行った。そこに居るはずもない、王を求めて。」

地方の兵と成り下がった俺に何ができるのか聞きたくて。」

「地方？」

コアが短く聞き返す。すると水晶から眼を上げて彼は言った。

「ああ。王のいない王国軍は存在する意味はない。何もしなければ食べていく事はできない。

それで・・・その王座に触れたとき、弱かったが微かに漂っていた魔力を感じた。

その魔力の根源を調べ始めて半年たった時だ。壁に隠す魔法がかけられ、何かが隠されていた。

何だと思う？」

彼は私に聞いてきた。壁の間に隠されたものが何かだなんて、何の興味もなかった。

だけど、私は知るんだ。

「貴女の写真です。」

白のマントを着た男が言った。

その言葉に私は知らされてしまったんだ。

どれほど二人に愛され、この世界に生まれることができたのか。

「え？」

「王によく見せられていた写真から、見たこともない写真まで。だが一番驚いたことがあった。

王から王女が死んだと聞かされた以降の写真があったんだ。」

私の写真を撮って、お母さんはお父さんに送っていたのだろうか。それを見て、王が忠臣に見せていたのだ。

「最後に見せられたときの写真より、はるかに成長している貴女がいたんです。」

白の騎士はそういった。

「それで嘘だと分かった。アンタの母親・・なんて言ったか・・」
「ヘレン殿下だ。ヘレン殿と共に王が、貴女が王座につかないですむよう嘘をついたのだと気づきました。」

私はいつもそうやって守られて愛されていたんだね。
そう気づくのはいつだって、守られなくなったときだ。守ってくれる人がいなくなったとき。

「その事を広めて、金銀軍を再結成した。それで・・・王女、あなたを探す旅に出たのが2年前。」

ずっと怖かったんだ。

お父さんがいないのは、母が私を身ごもってしまったからだと思っていたから。

母はその人を愛しているのに、私の所為で離れてしまったんじゃないかと。

私を見る眼はいつも、どこか哀しげだったから。

お母さんが生きているときに、そう聞きたかったのに。私はあまりにも弱くて、聞くことはできなかった。

そうだと肯定されるのが怖くて、ずっと逃げていたんだ。

「貴女様を探すのはとても大変でした。

何せ私共の手にある写真はどれも、今の貴女を探すには幼すぎるので。」

「あれからもう8年以上たっていたからな。」

「すっかり大きくなられて、その姿を眼にしたときは今までの苦勞を一瞬で忘れてしまいました。」

でも、もう怖くない。

お母さんのあの目は、私が王座に座らされるのではないかと、不安に思ってくれていた眼なんだ。

私はどれだけ守られて、どれだけ想われて、今まで生きてきたか。遅かったかもしれないけど、気づけてよかった。

「どうか信じてほしい。この2年間ただこの国をあの頃に戻すために、進み続けた事を。」

黒の男の目は真っ直ぐに向けられていた。その横で白の男も頭を下げる。

お父さんはこんな人の上に立てるほど、凄い人で、私は……そうじゃない。

父のように立派でもなければ、母のように強くもない。

真実を恐れて逃げてしまう弱く愚かな唯の人間でしかないのだ。

そんな私が、彼らが2年と言う時間を費やしてまで探すに値するほどの人間なのだろうか。

ただ父の血が入っているだけの、私なんかが。

「なあ、白竜遣い。お前が王を立ててこの国を平和にしたいと思う気持ちと、俺達の気持ちは同じだ。」

「……それは違う。」

コアと同じくらいに、いや、もしくはそれ以上に彼らはこの国を想っている。私はそう思えた。

しかしコアは小さく首を振った。

その言葉に彼らは驚いた顔をしてコアを見ていた。

コアは真剣にこの国に平和をもたらしたいと思っている。それは彼らも同じではないのか。

そう私の中にも疑問が生まれたとき、コアは私を一瞬見るとまた彼らに眼を向けて言った。

「私はこの国を平和にしたい。それはあなた達と同じくらい思っている。

だけど私は・・・トレスの友達だから、トレスが王になりたくないというなら。

どうしても駄目だというなら、強制はできない。

私はトレスにも幸せになってほしいの。だから、あなた達と同じではない。」

コアは私なんかとは違うんだ。私は唯の人間で、たまたま父が王であっただけ。

けど、彼女は違う。ここまでずっと自分の足で歩いてきたのだ。

信じたいものだけを信じて、真実だけを探して。

苦しみ、悔いて、悲しみ、涙して。彼女はそんなふうに分自分の足で伝説を作り上げるマスター。

『私の名前はコア。貴女の名前はトレス。まずはそこから始めましょうっ！』

白竜を選んだ、伝説を作るマスター。

あの言い伝えは確かに予言となりつつある、幼い彼女の手によって。

「コア、私は決めているんだ。」

私は唯の人間。そんなの充分分かってる。だけどね。

唯の人間が精一杯努力したら、誰か1人くらい助けを求める手に力を貸してあげられるかもしれない。

私にできることがまだあるなら、私は迷わないよ。

もう怖くない。

「私は王になる。こんな私にも救えるものがあるなら。父が築いたものを支えてみる。」

「ただ私、まだ・・・弱く愚かな人間でしかないから。」

こんな私じゃ座れない、あの紫苑の花の色をした椅子には。

「弱くとも愚かではない。弱いなら私共ができる限りを尽くして補うと誓いましょう。」

「それじゃずっと・・・ずっと弱いままだ。」

変わらない。

ここまで来たのもコアに頼って。母と父に守られて。それじゃ駄目だと思っただ。このままずっと誰かの助けを借りて進むなんて。

「愚かだな。だが、俺も昔はそう思っていた。今はその違いが痛いほどに分かる。」

黒の男はそういうと、私をそっと見下ろして続けた。

「頼る事は弱い事ではない。頼る事は助けられるよりずっといい。頼る事と助けられる事もまた、同じではない。その違いに気づくのは難しい。」

けれど気づいてしまえば、全く違うものにしか思えない。

俺は助けられるのは嫌いだが、頼る事はそこまで嫌いじゃない。」

その横で白の男の口元が軽く緩んでいる。

「自分にできること、できないことを自ら気づき、助けを求める。それが頼る事。

自分にできることと、できないことを気づけない者が、助けられる。

「

白いマントを揺らして男は頭を下げた。黒いマントも続いて揺れるとゆっくりと頭を下げた。

最高の敬意を表して、頭を下けている2人を私はただジッと見つめていた。

今の私にできることと、できないことがあるなら。私は何をして、何をしてもらうべきなのか。

「貴方達は・・・この戦いで傷つくかもしれないのに・・・ついてくるのか。」

私は頼りたい。信じたい。父が信じた彼らを。

「もちろんです。」

「だいたい、お前1人が王だと名乗り出た所で誰も信じはしないだろう。」

その傍らにつき、お前が王であることを忠誠を誓って示してやろう。」

純白の騎士団の先頭に立つ男と、漆黒の騎士団を率いる男は性格は真逆だが同じ心を抱いていた。

二人の目は同じものを一点に見つめ、恐れなど感じない・・・強い目

をしている。

「私はまだ王じゃない。王に相応しいかどうか分からない。それでも、頑張ろうと思う。その気持ちは揺るがない。この国を救いたいのは同じだから。」

私1人でできることなんて、ほんの些細な事で。

私はコアやセルス達のように強い力も立ち向かう強さも何もない。でもそんな私にも誰かの力を借りて、誰かに力を貸せば、とんでもないことができるのかもしれない。

「では行きましょう、女王陛下。」

「全忠誠を貴女に。」

お父さん、お母さん、私はあの椅子に座るよ。

私を守るために、2人が大切な人に嘘をついてまで遠ざけたあの椅子に。

私にできることが、あそこにはあるみたいだから。

第102話　：コア

『私はまだ王じゃない。王に相應しいかどうかも分からない。それでも、頑張ろうと思う。その気持ちは揺るがない。この国を救いたいのは同じだから。』

ルキアの背中に乗って、誰もいない夜空で巡る風に私はトレスのあの言葉を思い出していた。

とても綺麗な金色の髪が、あの鋭く優しい目が、王になるものの眼だとは分かっている。

だけど私にとって彼女は友達。あの日であった優しい友達。

「ねえ、ルキア。」

『はい』

ルキアと同じくらいに大切な友達。

「この国は、こんなに痩せ細ってる。」

『ええ。』

「痩せ細ったこの国の王になったら、絶対大変だよ。」

揺ぎ無い気持ちはあつたはずなのに、彼女といればいるほどに王であることを忘れたかった。

きつとこの国の王になる人は、ポロポロになるに違いない。

自分に都合の良い国にするのは簡単で、民のために作る国は想像もできないほどに困難だろうから。

「私……最低だね。」

『コア……。』

「私が王を探すと決めて、こんな所までトレスを連れ出したのに。今になって、そのことを後悔しているなんて。分かってるんだよ？ この国の民が今、すごく苦しんでるの。だから王座について欲しいの。だけど……。」

夜の空を飾っている星たちが、私をそつと見つめていた。けどその輝きは、今の私にはあまりにも眩しすぎる。

『苦しいから頑張るのではないわ、コア。』

そうだね、と簡単に頷けるほど私は賢くはなかった。

今のこの状況から逃れることと、未来に待つ平和を求める事、何が違う？

私はきつと愚かなのだろう。そんなことは分かってる。

でも、私はどれほど愚かでもトレスを苦しめる事はしたくないと思ってしまう。

「星が……眩しい。」

『綺麗な星空ね。……ねえ、コア。貴女は優しすぎるだけよ。』

優しいのではなく、愚かなのよ、ルキア。

私は心でそう返事を返した。心を通じるドラゴンといえど、その言葉の全てを聞けるわけではない。

だから私のこの言葉が、ルキアに届いたかどうかは分からない。

でも私は愚かなマスターで、ルキアの言うとおり、逃げているだけなのかもしれない。

『苦しみから逃れるために頑張るのではなく、きつと幸せのために進むの。分かり難いけれど、大きく違う。』

「そうかもしれない。だけど……私は。」

『苦しみから逃れるために頑張ると思えば、それはただの苦しみです。けれど、幸せのために頑張るのだと思えば、それは希望を抱く代償です。』

トレスさんがもし、その身を削ると思うのならそれは代償ではないかしら。』

ルキアはそう言って、白い羽を2、3度羽ばたかせて空に近づいた。トレスが傷つくのは眼に見えている。それから逃れるのか、それとも立ち向かうのか。

私はルキアが言っていることを、ほんの少しだけ理解した。

「なら、私にできることはないのかな。」

王国軍が現れた今、私にできることは何もないんだ。

ルキアは彼らの眼を見て言った。

『私はまだ王じゃない。王に相応しいかどうかも分からない。』

それでも、頑張ろうと思う。その気持ちは揺るがない。この国を救いたいのは同じだから。』と。

彼女のその言葉を聞いたとき、私は彼女との間に距離を感じた。

王たるものの心を持つ、とても立派な王女だった。

『明日の朝まで、まだ時間はありますよ。』

空に響くルキアの声に、私はまた自分の弱さを思い知る。

こうやってルキアの言葉に支えられ、今にも零れそうな涙をとどめて顔を上げる。

明日の朝、王国軍と共にトレスがここを発つ。私はそれまでにどうすべきかを決めなければならない。

「ねえ、ルキア。・・・あの日の空みたいだね。」

見上げた空には、私の涙で揺らぐ中でも、光を途絶えることなく輝いている星があった。

『あの日?』

「忘れちゃった?」

『あなたと過ごした日々が長いもので。いつの日の空かと。』

ルキアは軽く笑いながらそう言うと、バサツと大きく羽ばたいてまた空に近づいた。

思い出せばそうだ。あの日といえど、ルキアと共に見上げた空は幾つもある。

綺麗な星空を遮る木々の間から眺めた空、からりと晴れた雲ひとつない空、雨が降ってくる暗い空。

その全てが大切な思い出で、忘れる事はできない宝物だといえよう。

「ルキアと出会った日の夜、星の話をした夜だよ。覚えてる?」

『ああ、あの日ですか。ええ、忘れてませんよ。』

初めてルキアと空を見たのはあの日だ。

星について話したんだよ。とても綺麗な星々を遮る木々に、悲しみを感じながら。

「『ドラゴンは、星がすきなんだよ。平和を願う者達だから。』」

優しくそうつ心の中で響くのは、私の大好きなおじいさんの声。

忘れようにも忘れられないほど、私の心を締め付けてやまない人の1人。

私の永遠の目標で、もしくはライバルで、そして大好きな人。

彼が言ったあの言葉は、彼の暮れた言葉の中でも常に私の心に響く言葉だ。

『私も大好きですよ。』

あの日もこんなふうにルキアと話をした。

だけど私はルキアの優しい声に思ったんだ。彼女はきっと、星になりたいわけじゃないんだと。

星はあんなにも輝いているのに、彼女は星になりたいとは思っていないって。

その理由は、とても簡単だった。

「星になれなくても、ルキアにできることをできたらいい、そう思っただよな？」

知ってたよ、貴女がとても優しい事。

だからこそ、どうしても貴女と空を飛びたいと思った。

『分かっていたの。』

「なんとなく、そんな気がしたただだよ。」

『コアには、驚かされてばかりです。世界がまるで異世界になったようにね。』

ルキアは楽しげにそういった。

誰かと出会うといつだって、私は異世界に投げ出されたような気がする。

その出会いに想像もつかない可能性があり、私が生きて誰かと関わりあう限り、その可能性は広がり続ける。

『私は私に出来ることがあるから、星になれなくてもいいんです。』

ルキアと出会ってから、私はたくさんの事を知り、たくさんの世界を見て、

自分の弱さと愚かさと小ささを知った。

私にできることなんて、ほんの小さな事しかなくて。

たくさんの人に助けられて、支えられて、私は今ここに立っているのだと。

「私にできることなんてあるのかな……。」

『ええ、それがどんなに小さな事でも。星にはできないことが。』

星の輝きほどつよくはない。だけど私にしかできないこと。朝が来る前に、決める事ができた。ルキアに教えられた。

「私、決めたよ。」

『そうですか。』

「ルキアは……ルキアはどうしたい？」

『私の心は初めから、貴女についていくと決まっていますから。』

優しい言葉は、強く私を射るように風に流れてきた。

これからもきくと、私はこうして迷い、悩むことがあると思う。

その時、ルキアが傍にいてくれるなら。私は自分の決断を、揺ぎ無く抱いて見せよう。

「ありがとう。」

さあ、進もう。自分の出来る事をできる、決断した道を。

第103話　：セルス

夜の星に君はなにを思っているのだろう。

俺は幾度となくそう考え、深く更けているその夜を眺めてきたか。

「おかえり。」

空に舞い上がって言った時のコアは、迷っているのが見て取れるほどだった。

戻って村を守るのか、ついて行ってトレスを守るのか。

どちらもきつと間違いいではない。だからこそ、コアは決められずに悩んでいた。

「ただいま。」

しかし、やはり俺の思ったとおり。

白竜ルキアの背から降りたその主、コアは凜々しい笑顔を見せて言った。

この星空に君なら何を思って、どう決断を下すのか。それを知るのは共に空を飛んでいるルキアだけ。

それはとても羨ましい事で、時に嫉妬してしまいそうになる。

「決まったようだな。」

それでも俺にできることがあるから、俺はこの地上で星空を眺めるのだ。

「ついて来てくれるんだよね、セルスは。」

「もちろん。」

せめて君の決断する勇気となれますように、そう心のどこかで願いながら。

君の決断を妨げる要素になったあの日、俺はとても後悔したから。

『結局、お前にとって俺なんかどうでもいい存在でしかないんだろ！？』

あの言葉は、あの時一番言ってはならないことだった。今ならその言葉がどれほど愚かでコアを傷つけたか分かる。

だからこそ、もう二度とコアの妨げになるようなことはしたくない。

「私、セルスが大好き。」

「・・・知ってる。」

何度も何度も、君はいつだって何度だって伝え続けてくれたのに。逃げ続けていた俺を、追いつけてくれたのに。

「俺は・・・こんなに弱いのにいいのか。」

未だに返す事もできず、ただ受け取るだけで満足している。

「弱いの意味は分からないけど。良いと思う。そんなセルスがこんなにも好きなんだもん。」

そう言って目の前の少女はいつもと同じ笑顔で、俺を見上げるようにして微笑んだ。

俺は今、この世界の中で最も贅沢を許されている気がした。

コアの、大好きな人の好きという言葉が聞こえる気がするという、この上ない贅沢を許されている気がするんだ。

「知っている。」

君を想う者がいるのに、こんなにも安らげるのは君のおかげだろう。コアは気づいていない。きつと、これから先も気づく事はない。ジエラスの抱くコアへの気持ちに。不安で不安でたまらないんだ。もしもコアがジエラスを愛したら、と。

それが絶対にありえない事だとは言い切れない。そんな不安を作り出すのは簡単で、埋めるのは大変。

しかし君はたった一言で、その全ての不安を持ち去り、安らぎを埋め込んでいく。

「知っててね、知ってるだけでいいから。」

夜の澄み切った空気が、髪の毛の吐息のように優しく揺れ動く。

その吐息にコアの短い髪は、フワリと揺れて、そのコアの切なげな顔を浮かび上がらせた。

「どつという意味だ。」

「い、意味なんかないよ。」

地上へ戻ってきたコアの凜々しい顔は、あまりにも悲しそうにそこにあった。

そうしたのは誰だ。その答えは簡単だった。

「コア？」

俺以外の誰でもない。

「セ、セルスは鈍いから。鈍感さんだから。」

「俺が鈍感？」

お前には言われたくない、と言いつづになるのを喉の奥に押し込んだ。
薄っすらとコアの眼に浮かぶ涙を、夜の月明かりが優しく映し出す。君が泣きそうになっている理由が分からない俺は、もしかしたら本当に鈍感なのかもしれない。

「知っててもらえるだけで、幸せなのかもしれないね。」
「コア・・・？」

どうして泣いているんだ、なんて聞くことはできなかった。ついに流れ出してしまった涙にそっと手を伸ばし、せめて優しく拭うだけ。

「私はセルスが好きだけど。
好きだ・・・けど、セルスは私がセルスを好きだからって、自分の気持ちを否定することないからね。」

彼女が泣いてそういう理由が、全く分からないなんて。
俺はその無力さに座り込みたくなった。彼女が泣く理由さえ、理解できないなんて。
好きな女が目の前で泣いているのに、その涙を拭う事しかできないなんて。

「俺も、お前が好きだ。」
「セルス・・・。」
「知ってるだろ。」

知らないはずがない。こんなにも真っ直ぐにコアだけを想い続けているのだから。

それでも君が不安になるような事があるから、君は泣いているのだろっけど。

「中々・・・うまくいかない、ね。世界が丸く・・・収まればいいのに。」

涙声がそういうと、俺の心はぎゅっと締め付けられたように苦しくなった。

俺がコアを好きで、コアも俺が好きで。それだけで幸せなはずなのに。

俺が好きになるような女を、誰も好きにならないはずがないのだ。ジェラスがコアを好きだというだけで、世界はこつも簡単に幸せを逃してしまっ。

「俺も、そう思う。」

想い合うことは幸せなのに。誰かの気持ちを知りながら、押し潰してまでして手に入れる『想い合い』は、幸せを崩すもので。どうすればこの世界が丸く収まるのか、そんな方法はあるのか。

この星空に、俺は願いたくなる。全てが幸せに終わる方法を。

コアが星空を見て決断を下せたなら、俺にも下せるだろうか。誰かが悲しむことを分かっているながら、コアを手に入れるという決断を。

コアを想い続けるために、その幸せを手に入れるために、誰かの幸せを奪う決断を。

第104話　：ブレイズ

赤く燃えた太陽が、その光で世界を照らしていた。

王国二軍を傍に待機させ、金軍のトップと銀軍のトップがトレスの脇に立っていた。

「それじゃあ、行くな。」

トレスは朝の爽やかさの中に生きているようだった。

「待って。」

ああ、などと相槌を打っていたルアーやジェラスがピタリと止まった。

短くその別れの空気に言葉を投げたのは、いつだって予想もできないことをやらかしてきたコアだった。

俺は確かにその行動に驚かされたが、内心そこまで驚く事もなかった。もつと言え、心のどこかで納得さえしていた。

「待って、トレス。私は、お別れするなんて言っていないよ。」

赤く燃えに燃えている太陽は、朝早くからこんがりと地を焦がしていた。

その熱を冷ますように流れてくるのは、まるで現実を表わしたかのように冷たい風。

「えっ？コ、コア!？」

「私も一緒に行く。」

驚くトレスの声に続けて、ハア！？、とルアーが大声を上げた。さすがのジェラスも眼を大きく見開いている。

「ははっ、やっぱり予想を裏切らないな、コアは。」

俺は思わず笑い声を上げた。すると意外にも、トレスも笑い声に参加したのだ。

トレスが笑うのはとても貴重な事で、それだけでなくこの場合ならトレスはコアを叱り付けるのではないかと思っていた。しかし、彼女はただ笑いながらコアを見ている。

「トレス？」

コアが不安そうに首をかしげた。

「いや、すまない。つい。・・・どこかで、気づいていた気がする。

お前はそのまま終わるような女じゃないから。」

「な、何それっ。」

誉め言葉だ、とトレスは無理を通して笑った。いや、もしかしたらトレスにとっては誉め言葉なのかもしれない。

確かにコアは、人を想像もつかない世界へ落とし込むのに長けているからだ。

「まあまあ。で？セルスもついていく気なんだろう？」

ぼーっと立ち尽くしてそれを見ていたセルスに眼を移すと、まだ眠気が彷徨っているような顔をして首を縦に振った。

セルスの答えに、トレスとジェラスの眼が変わった。

「セルスもっ？」

「そうなの。一緒に・・・来てくれるって。」

「そうか。」

途切れ途切れに説明するコアの眼が一瞬、悲しげに見えたのは俺だけだろうか。

コアを見つめるジェラスも目を細め、いつもにまして暗い顔をしていた。

この世界は何事においても上手くいくわけではない。いや、それはこの世界に限った事ではないが。

それは技術がどれほど発展しても、人がどれほど完璧に近づこうとも、決して変わることの無い事実だ。

人が人である限り、人の感情を抱き続ける限り、何にも補う事のできない歪みなのだ。

「ジェラスは？」

俺は思わず口に出して聞いた。

するとジェラスが驚いた顔をしてこっちを見てきた。

「お前はわからないのか？」

トレスも、ジェラスも、まさに歪みの中に生きている。

きつといくら鈍いコアもトレスのソレに気づいていて、もちろんセルスだってジェラスの気持ちに気づいているのだろう。

しかし人を思う心をどれほど持っていて、どうしても譲れないものというのは人にはあるわけで。

きっとコアにとってそれはセルスで、セルスにとってもコアでしかないのだろう。

そう、そんな事くらいジェラスもトレスも分かっているに違いない。

「どうして俺が……。」
「どうしてって。」

ジェラスは言葉を濁らせた。そんなの、決まっている。

ジェラスがコアを好きだからだ。

セルスがそうであるように、ジェラスも好きな奴の傍にいたいと思うのに違いは無いはずだ。

しかしジェラスは俺の言葉に無言で否と答えた。

「俺のすべき事があるのは、こいつらについていく方じゃない。」

「え?」

「俺は俺のすべき事がある場所で、精一杯力を尽くして、この国を俺なりに救う。」

真っ直ぐに黒い眼がこっちを見た。

「そうか。」

もったいない、そう感じた。こんなにも強く信念を持つ眼をしているのに。そんなふうにした。

コアがセルスに惹かれるのも分かるが、ジェラスでは駄目なのかと聞きたくなる。

俺にはその辺がいまいちよく分からなかった。

どちらとも優れていて、どちらともコアをこれほどまでに想っているのに。

どこにどんな差が生まれているのか、俺にはさっぱり分からない。

「そろそろ出発いたしましょう。」

白いマントの男が空気を一気に整えた。

「ああ。……じゃあ、な。」

トレスは悲しみに溢れる眼を見せてそういった。

「ああ、またどこかで会えたらいいな。」

トレスと同じ場所に配属されて、よかったと思っている。

考えると王女とともに村を守っていたなんて、俺はかなりの幸運を持ち合わせていたのかもしれない。

それだけじゃない。幻の白竜のマスターとも出会うことができたのだ。もう、強運としか言いようが無い。

「コアも。」

「会えるよ。ううん、会おう。また、皆で会おうよ、ね？」

「ああ。」

希望に満ちた君に、たくさんの事を教わった。

俺よりもいくつも若い、同じくらいの身長の子に、数え切れないほどの大切な事を学んだ。

「じゃあね、ジェラス、ルアー。」

「ああ。」

「元気でな。」

最後じゃないよ、とコアは笑った。その瞬間に、地上に影を描いて白竜が舞い降りた。

熱い朝日を存分に浴びて、白く美しい竜が羽を広げて冷たい風を感じている。

ああ、太陽はまるで希望の光だと思った。そして、風はまるで現実の弓矢だと。

「諦めるなよ、何があっても。」

ふと、そう思った。

俺はずっと風を浴びて生きてきたような人間だった。

俺だけじゃなく、もちろんトレスもジェラスもルアーも、きっとセルスだってそうだ。

しかし、コアは違う。

太陽だけを見据えて、確かに体を突き刺すような風の冷たさを感じながら、それでも太陽を見続けてきた人間なんだ。

「あたりまえだよ。」

コアはそう言うのと同時に笑って見せて、白いルキアの背に飛び乗った。

コアの笑顔がこんなにも温かいのはきっと、その所為だ。

希望だけを信じて、冷たい風に翻弄されることもなく、真っ直ぐに太陽だけを見てきた人間なのだ。

そんな人間だけが、周りを変えてゆく力を持ち、人を惹きつけてやまない魅力を持っている。

「ああ。」

そんな彼女に俺やジェラスやルアー、トレスにセルスまでもが変えられたのだろう。

本人が思っている以上に、周りは彼女の存在の大きさを感じている。たった一人の幼い少女が、この世界を白竜の背に乗り変えてゆくのだ。

それは遠い未来ではない、そんな気がした。

バサツ　、重たく、しかし堂々と白い羽が空へと向かって羽ばたいた。

その風に俺の髪は揺れ、じっと下からその姿を眼に焼き付けた。王国二軍も後に続くように空を連ねて飛んでいく。

別れとは、意外にも簡単に訪れて、簡単に終わってしまえるものなのだと思った。

「いいのが、ジェラス。」

その空から眼を反らすことなく、隣にたつジェラスを眼の端に映して聞いた。

「・・・お前もしつこいな。」

呆れたような彼の言葉に、思わず笑いそうになる。するとルアーが不思議そうな声を上げた。

「何の話だよ？」

「なんでもない。」

ジェラスはそんなルアーに黒のマントを翻して、短く返事を切った。

「俺には、どうしてお前がついて行かなかったのか分からない。」

「分からなくて構わない。」

「教える。どうしてついて行かなかったのか。」

ルアーは面倒くさくなったのか、ジェラスの後ろを黙ってついてい

くだけになった。

しかし俺はどうしても不思議でたまらなかった。俺ならきっと、意地でもついて行っただろう。

あれほどまでに想っている相手から、自らはなれる道を選ぶ理由がどうしても分からなかった。

「・・・この感情を、誰かを傷つけるものにはしたくない。」

「え？」

「俺のコアへの感情は、誰かを困らせて成り立つためにあるものじゃない。」

きっとジェラスがコアにつけてしまえば、コアは困るだろう。

そしてセルスは苦しむに違いない。ジェラスは遠まわしにそう思った。

「トレスがああの感情をどうしようが、俺には関係ないが。」

「・・・知っていたんだな。」

「ああ。」

「まさか、トレスはセルスが好き・・・なのか？」

ルアーがトンと会話に混ざってきた。

「さあな。」

「お、教えるよ！」

ジェラスは浅くはぐらかした。自分の気持ちを隠すかのよう。

世界は常に丸いわけではない。そう思えてならない。

大切に想う人にも、大切に想う人がいて。そしてどこかが繋がる限り、どこかが途切れて。

丸いのは表面だけで、世界はちっとも丸くなんてないんだ。

それでも人はその感情を捨てようとはしない。いや、もしかしたらできないのかもしれないが。

しかしそうやって、世界は確かに形作られているのだ。

第104話　：ブレイズ（後書き）

ここ最近多忙により、更新が大変遅れました。ごめんなさい。
それでもここへ毎日のように訪れてくださる方がいて、とても嬉し
く思います。本当にありがとうございます。
まだ少し更新のペースは遅れてしまつと思ひますが、どうかこれか
らもよろしく願ひします。

第105話　：コア

青く、空がどこまでも続くように
私はセルスを思い続けら
れるだろうか。

『コア？』

白く優しい声が私にかかる。

私達はブレイズ達と別れて、王国二軍に囲まれながら、トレスの隣を飛んでいた。

「何？ルキア。」

『・・・いいえ、なんでもないの。』

ゆっくりと上下する白い羽が、まるで雲の上にいるような気分にな
せた。

優しく包み込む雲のようなルキアの背で、私はいつも空の最果てば
かり見つめていた。

どこまで続くのか、どんな景色がその向こうには広がっているのか。
世界は途切れることなく、私が見ている景色の向こうにもまた、新
しい世界が広がっている。

「コア、セルスが呼んでるぞ。」

ふいに、隣のトレスが私に近づくと、トレスの右隣にいるセルスを
指差しながらそういった。

トレスを通り越して覗かせる彼の顔が一瞬、夢げに揺らいだ。

「ルキア、セルスのところをお願い。」

『ええ。』

ルキアは相槌を打つとフワリと上に舞い上がり、ゆっくりとトレスをまたいでその向こうにいるセルスの隣へと舞い降りた。セルスはルキアが降りてくるのを眩しそうに見あげている。隣まで並ぶと、セルスは優しく微笑んだ。

「疲れたのか？」

その一瞬、凛々しい横顔の隙間に見せた笑顔に私の心はギュッと締め付けられる。

これ以上苦しくしないで、と心の中で叫ぶが、私は彼への返事に首を横に振るので精一杯だった。

いつも傍ににいるのに、たった一瞬の笑顔が、たった一言が、私をドキドキさせる。

小さい頃から見てきたはずの彼の笑顔、幼い頃からともに育ち、いつも助けてくれた言葉。

それなのに、今までとは全く違う輝きで、私を魅せてやまない、彼の全て。

「本当か？」

「ルキアが疲れたら、休憩、もらっていい？」

もう長い時間空を飛んでいるルキアを、休ませてあげられるだけの休憩時間は中々無い。

それが分かっているから、喉が渴いても我慢し続けている。

『私はまだ平気ですよ。アルは平気？』

太陽の光がさんと降り注がれる真昼だ。白いルキアより、きつ

と黒いアルのほうが大変に違いない。
ルキアはそれを気遣っていた。

『疲れたら勝手に休む。』

ボソツと面倒くさそうに呟かれた言葉に、私とセルスとルキアが笑った。

「勝手に休まれると困るだろ。」

セルスは笑いながらアルの背を撫でた。

その仕草でさえ、私は胸が焦げ付くくらいに熱を持つのを感じた。

「ご、ごめん。戻るね！行こう、ルキア。」

『ええ。』

逃げ出すようにセルスの傍を離れたことに、セルスは気づいてしまっただろうか。

最近、特にセルスがこっちに来た当たりから、どうしようもないくらい苦しい感情に気づき始めていた。

ただセルスが好きだと、大好きなのだと思っていた気持ちより、はるかに大きな感情が私の中に揺れる。

「コア、平気か？」

トレスが心配そうに私を見ている。

「全然平気だよ！ありがとう。」

私がそう笑って見せると、トレスも安心したようにため息をもらし

て、そうか、と笑ってくれる。

優しく強くて、まるで私とは正反対の彼女が私は大好き。

厳しい言葉の裏には、いつだってその人を思う彼女なりの思いやりがあることも知っている。

だからこそ、セルスへの気持ちがこんなにも揺らぐのだ。

『コア。』

空がどこまでも続いているように、私もセルスを思い続けることができるのだろうか。

そんな風に思ったときだ。ルキアが右についている金軍を抜けて、外へと私を連れ出した。

しかし誰も気づく事は無く、さっきと同じように突き進んでいる。

「ルキア！・・・どうかした？休みたくなっただ？」

私はルキアの急な行動に焦っていた。

しかし当のルキアは至って平然としていて、どちらかという私のそんな言葉も予想していたようだった。

『いいえ、そうじゃないの。』

ルキアが短くそう言って黙り込んだとき、私は目を閉じて口元を緩ませながら言った。

「隠せるわけ・・・ないよね。」

私を感じている感情を、こんなにも傍にいるルキアが気づかないはずが無い。

ルキアは返事をする事も無く、静かにバサッと羽を揺らした。

「不安だよ……。」

世界がどこまでも続くほど、彼を愛し続けられるか。そう問われる時、私は迷い無く頷くことはできるのだろうか。そう考え始めると、私はどうしようもない不安に押し潰される。

『誰かを愛する事は、この世界で何よりも素晴らしく、何よりも大変な事。……昔母が言ってたわ。』

ルキアの澄んだ声にほんの少し、体に押し掛かっていたものが溶けていくような気がした。

ルキアのお母さんの言葉は、私の心の中に焼きつくように響いた。

「私……。」

大好きなのに。

私は気づいてしまったから。

『コア、平気ですよ。誰も貴女を咎めたりはしません。』

「……私っ。」

気づいてしまったの。

トレスのセルスに向ける目が、私と同じ感情を持ったものだ。

「私っ……トレスも、セルスも……大好きだからっ……。」

苦しくてしかたなかった。

『コア……。』

大好きなトレスの気持ちを、私が傷つけるのではないかと。
セルスが好きだと言ってくれるたびに、笑いかけてくれるたびに、
私はトレスを傷つけているんじゃないかって。

「・・・誰かを傷つけるために・・・っ・・・セルスを好きになっただんじやない・・・。」

この感情がトレスを傷つけてしまうのだと、気づいてしまった。

“俺も、お前が好きだ。”

セルスのあの言葉は、私には重たすぎた。

「こんなにも好きなのに・・・っ。」

離れないで、傍にいて、笑いかけて。そう願っていた気持ちは
嘘なんかじゃない。

だけど、そう願ったのは・・・誰かを傷つけるためじゃない。

『コア・・・。』

零れる涙がルキアの白い背を濡らして、ゆっくりと風に飛んでいく。
空に捧げられた私の涙は、いつかルキアみたいに白い、あの雲にな
るのだろうか。

「こんなことなら・・・。」

セルスには全部伝えた。ただ知っていてくれるだけでよかったと言
えば嘘だけだ。

それが私にできる唯一の事だと思ったから。

「こんなことなら、好きになんてならなければよかった・・・っ。」
トレスが大好きで、友達になってほしいと言った私が、トレスを傷つけるくらいなら、
私はセルスの隣に立ち続ける事を、諦める。

風が濡れた私の頬を優しく拭っていくのに、私の頬は濡れたままだった。

今は誰にも優しくして欲しくはなかった。こんな私は優しくされる権利なんてない。

『なら、セルスにそういいなさい。』

「・・・っ・・・」

『貴方のことは好きじゃないと、セルスに言いなさい。』

ルキアの言葉が、私に強く響いた。

『もともと好きなんかじゃなかったのだと、トレスの前で言いなさい。』

ルキアの強い言葉は、とても優しく流れ込む。

どんな優しい言葉より、ずっとずっと優しい言葉だった。

「・・・優しく・・・しないで。」

ルキアは私の気持ちがあるままに伝わるから、そう言ったのだ。
今の私に一番優しく、背中を撫でるような言葉だった。
心の奥の苦しみをそっと抱いて、まるで連れ去ってしまいそうなほどに暖かく。

『貴女には優しい言葉に聞えてしまっんですね。』

精一杯キツク言っただつもりなのに、とルキアが微笑んで言った。私が優しくされたくないから、わざと冷たく言っただことくらい分からないわけがない。

私の言葉を否定することなく、私に訴える。

逃げてはいけないと。

本当は分かっていたから。

好きになるんじゃないやなかったと言っただけ、好きじゃなかったのだと言っただけ、確かに楽になれる。

ただそれは違っただけ、本当は分かっていた。それはただの逃げでしかない。

『貴女はセルスにそんな事、言えないでしょう？そんな事を言える程度の感情じゃないのだから。』

「ルキア……。」

好きじゃないなんて、自分に嘘をつくことはできない、してはいけない。

好きにならなければよかったなんて、そんなの嘘だ。

「私ねっ……セルスが大好き。セルスに会えてよかった。セルスを好きになってよかった。

もしこんなことになるって分かっている……きつとセルスと出たいと思ったと思う。」

何度でも……何度でもセルスを好きになったと思う。」

『ええ、知ってるわ。』

誰を傷つけてでも、決して消す事なんてできない私の初恋。
ただ、誰かを傷つけてでも結ばれたい、そんな恋じゃない。

「だけど・・・っ・・・じゃあどうすればいいの？・・・私、トレスを傷つけてまで・・・セルスの隣にはいたくない。」

『コア・・・貴女は優しいすぎるのよ。』

「・・・そんなことない。セルスに知っていて欲しいって気持ちがある。トレスを傷つけようとしてる。」

セルスの答えはわからない。だけど・・・知っていて欲しいなんて、一番我が儘だもん。」

そうだと知っていても、伝えてしまいたかった。

トレスがどれほどセルスを好きでも、私は諦める事なんてできないくらいにセルスが大好きなのだ。

『世界は決して丸くない・・・。』

「・・・丸くなんてならない。誰かが誰かを好きな限り、その気持ちが大きければ大きいほど、丸くなんてなれない。」

どこかが繋がって、どこかが途切れて・・・どうすれば皆が幸せに大好きな人の隣に・・・いられるのかなあ。」

そつと遠くにいるトレスとセルスを見た。

大好きな2人が、一番幸せになる方法は、きつととても難しい。

もしもトレスがセルスに気持ちを伝えたとき、私はセルスの傍にいたいといえるだろうか。

「トレスが傷つくことを・・・分かっていても・・・。」「

私はとても酷い人間だから、トレスが伝えても・・・セルスの笑顔を忘れる事なんか私にはできない。

セルスと過ごした日々や、セルスを思い続けた時間を否定する事はできない。

「この気持ちは、捨てられそうに無いよ……。」

苦しくて苦しくて、それほどまでに貴方が好き。

そんな気持ちをトレスだって抱えていて。

この世界は残酷にも、皆が幸せに笑って大好きな人の隣にいられるようにはできていない。

その中で人はこんなにも苦しんで恋する気持ちを抱くのだろう。

だからこそ、誰かを愛する事は、この世界で何よりも素晴らしく、何よりも大変な事なんだから。

第106話　：セルス

雲の中を掠める如く白いドラゴンとマスターが空を飛ぶ。
その姿を遠くから眺めると、俺は幸せに等しい気持ちになる。

「コア・・・」

永遠とこのときが続けば。そう願った事は数え切れないほどある。
敵うはずも無い事を、願わずにはられないのはきつとそれほどま
でに彼女が好きだから。

そんな事を考えながら、俺よりも上空を飛ぶルキアを見ていると、
ルキアは急に俺の傍に下降してきた。
穏やかな空を切り裂くように、一直線に。

「ベール家が向こうで待ち構えてる！！」

コアの声が俺や俺の隣のトレス、トレスを取り巻く王国2軍に響き
渡る。

緊迫した空気が一瞬にして軍全体を覆いつくす。

「どれくらいいるんだ！？」

軍の中から声が飛び交う。コアは一瞬前を見て、直ぐに返事を返し
た。

「・・・私達の・・・3倍・・・うっん、5倍！！」

「5倍！？」

俺は驚いてそう聞き返し、自分の眼で確かめるためにアルに指示を

出してコアの隣まで舞い上がる。

空とコアが近づいたたび、遠くにうごめく黒い物体がくっきりと見え
てくる。

その数、俺達の5倍以上の人数だった。

「嘘、だろ。」

「・・・こんなところで・・・。」

もう城はすぐそこ。ようやくここまで来たというのに、こんな所で
この数を相手に戦うのか。

「私、金銀軍隊長の所に行ってくる!!！」

コアの声が俺の耳に届いたとき、ルキアがシュッと羽を動かした。
白い光の筋は迷うことなく、戸惑う俺の横を飛んで行く。いつもと
同じように。

『おい、セルス!!』

「あ、ああ・・・。トレスを守る、それが仕事だ。トレスの元に戻
つてくれ。」

青い青い空の下で、俺は一瞬恐怖に駆られていた。

感じた事も無い恐怖に、俺は抜け殻のようにアルの背で揺れる。

「コアは?!！」

トレスの声に返事を考えて答える。

「・・・ああ、隊長達の所に行った。」

「本当に5倍も?！」

「いや・・・5倍以上だ。」

いくら王国軍といえど、あの数を相手にするのは危うい、そんな気さえした。

もしかしたら最後のこの戦いが一番、厄介なことになるかもしれない。

そんな風に顔を黒い背に落としていた時、低く唸泣くような声が聞えた。

『お前が目指すものは何だ。』

「アル」

『お前が目指しているものは何なんだ。』

また、アルに助けられるそんな気がした。

「ごめん。平気だから・・・。」

俺は急いで明るい声を上げる。アルだって不安なはずなのに、いつも不安になる俺を助ける。

俺はいつも助けられて、心配させて、そんな事を考えると自然と強がった言葉が零れた。

コアが傷つくかもしれない、涙するかもしれない、いなくなるかもしれない。

そんな不安を強がって隠そうとした俺に、アルは強い声で言った。

『お前が目指すものは何なんだと聞いてるんだ！』

「アル。・・・世界一のマスターだ。」

『強がるなよ。世界一のマスターが、弱いのを隠して強くなったと思っつか？』

馬鹿らしい、そんな声だった。

「・・・アル。」

『世界一のマスターだって、ちっぽけな人間だろ？大切な奴が苦しみ悲しみいなくなることを不安に思う、そんな人間だ。』

そんな人間を支えられるドラゴンが、世界一のマスターのドラゴンなんだ。

その二つ無くして、世界一はありえない。お前は世界一を目指すマスターなんだ。

一つ一つの戦いを恐れ、大切な奴がいなくなることを不安に思え。それで、その不安を隠すんじゃなく、かき消すほど強くなれ。』

アルの言葉がギュッと俺を掴んだ。

その時、向こうの空からコアとルキアが飛んできた。

「私は隊長達と戦うから、その間にトレスを城に連れて行って。」

「何言ってるんだ、コア！それじゃ・・・」

『お前等がおとりになるってことか？』

「そうだよ、アル。セルス、トレスを頼んだよ？」

幼く可愛い少女は、にこりと微笑むとまたすぐに向こうの空へと帰って行った。

その小さな背中に、俺はあまりにも強すぎる勇気を感じた。

『異常な女だな、コアは。』

「・・・どうして、分からない。俺が・・・どれほど・・・」

『いや、分かっているだろ。あいつだって、お前の事を心配しているはずだ。』

分かっている、あいつは決めた。あいつは強いよ、不安を抱えて立ち向かえるほどな。』

だから惹かれるんだ。大切で、愛おしくて仕方ない。
たった一人の存在なんだ。

「私は・・・平気だ。コアのところに行つて来い。」

そう言ったのは、俺の隣ですつと話を聞いていたトレスだった。

「トレス？」

「コアのことが好きなんだろ？大切で仕方ないんだろ？・・・私は平気だから・・・」

俺はあいつの頼みをいつもいつも破ってきた。

アカンサスに來たのだから、あいつは望んでいなかった。俺は帰ってくるのを待っていて欲しいと頼まれていたのに。

その約束をいつも破って、俺はコアを思い続けてきた。けど、もうそんな事はできない。

「駄目だ。」

コアが好きだから、大切だから、コアの元に行くんじゃない。

コアの隣から離れて、ただあの笑顔を信じて、遠くで俺のできることを俺に託された事をする。

「俺はコアが好きだから、大切だから、トレスの傍を離れるわけにはいかない。」

「・・・私とコアとで、私をとるのか。」
「ああ。」

トレスの声が切なそうに響いた。

そのときの俺に、その理由が分かるわけもなく、俺は頷くだけだった。
ゆっくりと2軍がバラバラに分かれて、前の方で五月蠅く音がしはじめる。

「トレスを城に届けたら、すぐに戻る。それまでの辛抱だ。」
「・・・分かった。」

不安を抱えて空を飛び、その不安を埋めてくれるドラゴンと、世界を目指す。

コアの中にほんの少しの苦しみが見えても、俺はコアが涙を見せるまで待てるように。

同じ空の下、君を思う気持ちは何も変わらないから。

第107話　：コア

近づいてくるベーレ家の旗を見据えて、ルキアと空を飛んでいた。本当なら隣に黒竜アルとセルスがいてくれるはずなのに、私はまたルキアと2人きり。

「白竜のマスター殿。」

礼儀正しくそういったのは白いマントを風に揺らす、金軍隊長ウァンさん。

「はい。」

「私共には王女様を守るという使命があります。命を懸けて、成し遂げねばならぬ事です。」

「はい。」

「そのためには、もちろん自分の命も・・・貴方の命を守る事もできません。」

厳しくそう放たれた言葉に、事の大きさを感じる。しかし私は、端はなからそんなことを望んではいなかった。

「助けて貰わなければならない程度の力なら、こんな所にじゃばりません。」

「君はまだ・・・子供だ。」

16歳になりかけている、まだ幼い子供。

世界ではそうなのかもしれない。けれど、子供であっても私にできることはある。

そして、しなくてはならないことも。

「子供の私が、マスターをしているんです。戦った事もあります。私はまだまだ幼くて、愚かだけど・・・ルキアが傍にいてくれる限り、私はマスターです。」

もしも私が大人でも、きっと何も変わらない。

私にできることをしなければならぬ。そう教えてくれた人がたくさんいる。

「今までに、立派なマスターだと言われ続けてきたでしょう。」

「・・・立派って・・・なんででしょうか。」

軍の後ろのほうざわつきを見せる。

ゆっくりとトレスたちが離れ始めたようだ。

「そろそろ来ますよ。」

「はい。」

トレスのことはセルスに任せてきた。その判断は決して間違いじゃない。

セルスが大好きで、だけどトレスのことも大切だから、セルスにお願いしたんだ。

大好きなトレスのことを任せられるのは、大好きなセルスだけだと思っただけから。

「来た・・・！」

青い魔法の光が3つ、キラリと瞬いて私達目掛けて降ってくる。

空の色よりずっと深く暗く、輝く光の弾は人を傷つけるために輝いて。

「光を遮り我等を守るように、マジックウォール！」

バンツ、と鈍い音が響く。その音を始まりの音として、軍全体が構えを作る。

数は向こうの方が圧倒的に多いのだから、私達は効率性を武器に戦わなければならない。

そんなふうにした瞬間、隣にいた白いマントが戦闘きつて飛び出した。

「ヴァンさん！」

「1等魔術師、私の援護を頼む。2等以下は彼女の指示にしたがうように！」

ヴァンさんの言葉に先頭の直ぐ後ろについていた白の騎士団がヴァンさんを追う。

その姿を眼に映して、私はすぐに振り返った。

ぐずぐずしている暇は無い。私達がすべき事をしなければ、私はその指示を出さなければ。

「どう・・・しよ、えっと・・・」

そう分かってはいるけれど、誰かに指示を出す事なんて今までなかった。

この戦いでは1秒が命取りだ。迷ってる暇なんてないのに。

『コア。』

私の指示を待つ騎士達から眼をそらして、静かにルキアの声だけを聞いた。

「……攻撃軍と防御軍に別れ、攻撃する軍を防御軍が援護してください！」

右に移動して、せめて銀軍の人達が移動しているのをカモフラージュしましょう。

なおかつ、相手を確実に制圧していきます。」

「了解！」

どよつと一瞬の声の波が終ると、構成を整えるようにドラゴンとマスター達が私の前に現れた。

それから目配せをして、急いで右へとそれていく。

「行くよ、ルキア！」

「ええ。」

鋭く矢が何かを射止めようとするように、ルキアは空を飛んだ。

「彼等の体を拘束するように、リング。」

手をかざすと輪が空を舞って、こっちへ向かってくる敵をすぐに捕らえた。

4人の魔術師を捕らえて、身動きを取れなくする。

「炎により、箒が煙を上げるように、ファイアーボール！」

「水により、箒が湿り落ちるように、ウォーターボール！」

しかし、私達の援護をしている軍に炎と水の弾が次々に襲い掛かった。

その影響により、私達の周りに作られていた防御魔法が解かれた。

「構えて！」

その隙を突くように、次から次へと矢や、黒いネット、炎の弾が飛んでくる。

「樹木の助けによつて、我等を傷つけしものを捉えるように！」

「水の大きい力によつて、炎を打ち消すように！」

1人2人が私に続いて唱えるが、伸びてきた剣は矢の全てを防ぐ事はできず、炎の弾も水の合間を縫って、私達の元にすごいスピードで落ちてくる。

「バリア！」

とつさの魔法はあまりにも乱雑すぎたのか、欠陥ばかりの防御となり、矢が幾つも体を掠めた。

「いつ・・・」

焼けるような痛み到低い声を上げると、軍の後ろの防御軍から煙があがる。

それを助けるように、箒に水をかけると湿って重くなる箒を魔術師は必死で操っている。

薄っすら、向こうの方からトレスを囲う銀軍が見えてきて、ゆっくりと近づいてくるのが見えた。

「せめて・・・っ・・・通り抜ける間だけでも、頑張ろう・・・！」

私の声にルキアが答える。

その牙が鋭く生えた口内から、冷たく冷え切った冷気が遠く敵まで飛ばされた。

「ありがとう。」

『いいえ。もうすぐだから、頑張つて。』

傷がついた羽を上下に動かして、相手に近づいていく。

その後ろをかるうじて形成を整えながら魔術師とマスター達がついてくる。

その他の、水により動きが鈍くなった魔術師たちは遠くから援護に回り、

絶えず飛んでくる矢を、弱弱しく震える結界により防いでいる。

「魔法弾、用意して！」

ほぼ一列に並んだ今の状態からなら無駄に攻撃をするより、一斉に固めて攻撃した方が賢いだろう。

辺りを見回して言葉が行き届き準備ができると、私は静かに片手を上げて振り下ろした。

その瞬間に、少しでも威力を残したまま飛ばすために防御壁が外された。

「・・・行つたつ！」

遠くに見える軍がグラツと揺らいだ。

突き刺さる魔法弾に、乱されている軍を見て、直ぐに振り返り、トレスや銀軍との距離を測っていた。

私達の軍の直ぐ横を通ったトレスたちの顔がはっきり見えるほど隣り合った。

たった一瞬の、その瞬間だった。

「トレッツ・・・!?!」

急に銀軍の中心のトレス目掛けて投げられた魔法弾に、トレスが揺れた。

しかし、それだけではなかった。

『・・・っ!?!?』

バンツと鈍い音がした。

トレスの名を呼びかけていた私の声が途中で遮られ、私の体はルキアの体とともに傾いた。

「ルキアツ!?!」

急いでルキアの右の翼に眼をやると、そこには魔法弾をもろに喰らった痛々しい焼け痕と小さな煙、紅い血が見えた。

『コ・・・アツ!?!』

バランスを取ろうとしたルキアは、羽を動かして体を安定させる。

しかし私はその一瞬に気を取られて、体を白いルキアの背から落としてしまった。

自分から飛び込んだ空とは違い、構える余裕もなく地上だけが私を待ち受けるように空を飛んでいた。

「ルキアツ!」

「コアっ!」

ルキアを名を呼んだ私の名を呼び返したのは、ルキアの声ではな

った。

地上に背を向けて、風の抵抗を感じながら離れていく空を見る私の
眼には

大怪我を負った白いルキアが必死にバランスを取っているのと、そ
の横から何かが飛び込んでくるのが映されていた。

第108話　：コア

「コアーっ！」

瞬きをすると、ゆっくり、ゆっくりと近づいてくるその物体からの声に気づいた。

「セルスっ！！」

その声の主の名前を呼び返したとき、グイツと力強い彼の腕に拾い上げられるように、私は箒に乗るセルスの後ろに乗った。

もうほんの少いで地上に付きそうだという所で、セルスは箒を空へと戻した。

「セ・・ルス・・？」

「お前は無茶ばかりだ・・！」

私に向かって怒鳴りつけたセルスに、私はごめんと謝って空に浮かぶルキアを見た。

私が落ちる前、ルキアの右の羽には大きな傷がついていた。

焼けて傷つき、紅の血が流れ、あんな状態で長く空を飛ばすわけにはいかない。私は必死で考えていた。

「我の手に空を飛ぶ箒を、イリユージョン。」

セルスの背中で声を上げると、セルスは驚いた顔をしてこっちに振り返った。

「私・・ルキアと一緒にには戦えない。セルスと一緒に戦う事も・・」

「ただど私は戦わなくちゃならないから。もう・・行くね。助けに来てくれてありがとう。トレスをお願い。」

「箒に乗ったことなんて無かった。私はセルスの後ろの場所から足を放して、ボロボロの箒に飛び乗った。」

「無理だ！訓練もしてないのに！！！」

振り回されるように箒が暴れて、私はただ必死にしがみついているだけだった。

箒は暴れながらも地上へと下がっていく。上がれ上がれと念じても、一向に言う事を聞いてはくれない。

「止める！」

「・・・っ。止めない！！無理なんて私は思わない！」

たとえ無理でも、飛ばなきゃいけない。

ルキアが今一人で苦しんでいるんだ。私が傍にいないくて、誰が傍にいてあげるの？

「ルキアのところ・・・に・・・お願いだから連れて行って。」

ぐっと細い箒の柄を握り、私は呟いた。

その瞬間、近づいていた地上から急に風が吹き上がったかのように空へと箒が押し上げられていく。

「ルキアッ！」

白い右の羽がもうほとんど真っ赤に染まっていた。

『コ・・・ア・・・？』

「ごめんね、ルキア。ごめん・・・っ。」

こんなにも傷ついて、こんなにも痛い思いをさせて、苦しんで。

私は貴女にそんな感情を持たせるために、空を飛ばつと言ったんじやなかったのに。

「ごめんっ・・・。」

私は勝手なマスターで、いつもいつもルキアに頼ってばかり。

それでもルキアは優しく笑って、いつも隣にいて、励まし、叱り、応援し、ともに頑張ろうといってくれた。

『コア・・・貴女、箒・・・？』

「ルキアに治療魔法をかけるから、そしたらルキアはもう地上に降りて？私は箒に乗って戦うから。」

これ以上ルキアを苦しめたくない。私はルキアの左の真っ白な羽をそつと撫でた。

すると、ルキアは私の手をパシッと弾いて、青い眼をこっちに向けて言った。

『私が怪我をして使えなくなったら・・・そうやって捨てるのですか？』

悲しみと苦しみが入り混じる、そんな顔を見せられて、私の喉に言葉が詰まった。

『お願いよ、コア・・・これくらい、なんでもないわ。お願いだ』

から・・・一緒に戦おうって言って・・・？」

「・・・・・・・・・・言・・・えない。」

『コア。』

「駄目だよ・・・そんなの言えない。」

『使えなくなったら・・・捨ててしまおうようなマスターだったの？』

ルキアの眼は、まだ空を飛びたいと願っている。

だけど、これ以上彼女を苦しめるわけには行かない。そんな思いをしてまで空を飛ぶのは間違ってる。

「ルキアには、そんな苦しい思いをして空を飛んで欲しくないの。」

ルキアの眼がジツとこつちを睨み付ける。

それでも彼女の眼はいつもと同じで優しく温かなもので、私は今が戦いの真っ最中であることを忘れそうになった。

そんな私を現実世界に引き戻す、軍の先頭の方で鳴り響く爆発音や悲痛な叫び。

『私が欲しいのは・・・綺麗な空じゃない。』

ポツリ、ルキアがそう言った。

「え？」

『誰も傷つかなくても苦しまなくても綺麗で平和でも、貴女がいない空なんていらぬい。』

前にもそういつたでしょ・・・私はどんなに汚れて危険な空でも、貴女がそこにいるならその空を飛びたいんです。』

真っ青な空を、ルキアの青い眼はどんな風に映しているのだろう。

私はマスターとして、最悪なことをしようとしていた。

『傷つくことを恐れた事はないわ。・・・コア、貴女は私から空を奪う気なのですか。』

ドラゴンがどれほど勇敢で気高く、そして何よりも空が好きな者達だと知っていたはずなのに。

そんなルキアから、私は空を奪おうとしていた。

「ごめん・・・ルキア。」

『コア、一緒に空を飛びましょう?』

「・・・はい。」

箒から力を抜いて、パツと空中に体を浮かせるとルキアは直ぐに私をその背に拾い上げた。

無機質だった箒とは違う温かな温度が、私の掌からゆっくりと伝わってくる。

「我の大切な者の傷が癒され、また共に空を飛び戦えるように、ヒールライト。」

バァンツ、と大きな音に地上へ何人かの人が落ちたのが目に入った。きつと自己防衛魔法で地上に降りられるのだから、空には大きな空きができて始めていた。

私の手から放たれた光が、まるでシャワーのようにルキアの紅い血を流れ落とし、そつと傷口を閉じていく。

「・・・もう平気?」

翳していた手を下ろして、私はルキアの背中を撫でながら聞いた。

ルキアはそれに答えるように、羽を上下に大きく動かすと、軍の空

きを目掛けて飛んだ。

『戦いましょう。貴女とならどんな空も飛んでいたい。』

きつとまだ痛むはずの右の羽を、ルキアは嬉しそうに羽ばたかせていた。

ルキアがいるから、私は空を飛べるのに。私はそんな大切な事を、忘れそうになっていた。

箒に乗れても、きつと私は何もできなかったに違いない。

“ルキアが傍にいてくれる限り、私はマスターです。” そう言ったのは、自分じゃないか。

ルキアが傍にいなくなったら、私はドラゴンマスターでもなんでもない、ただの幼く愚かな人間でしかないんだ。

「ルキアがいるから私はマスターなのに……。私と一緒に空を飛んでくれますか。」

『ええ、もちろん。』

何度傷ついても、苦しんでも、それでも私達は空を飛ぶだろう。共に空を飛ぶ喜びや楽しみ、その幸せを忘れない限り。

第109話　：トレス

小さな光が私を目掛けて飛んできた。

遠くでコアが私の名を呼ぶ声が聞え、その声が途絶えた事にも気づかずにはいた。

ほんの小さな灯かりを防ぐ事もできず、私の筈は力なく傾いた。

「セルツ」

すぐ傍で私を守っていた彼の名を呼ぶ。その時私は知ってしまった。彼の中には他の誰が踏み入れる事もできないほど、たった一人の少女によって埋め尽くされているのだと。

「アル！トレスを頼んだ！！」

コアから聞いていた彼の話では、とても優秀できっと世界一になるマスターで、

何でも簡単にこなしてしまうほどの器用な人。そんな彼は黒いドラゴンの背から飛び降りて、筈にまたがる。

筈に乗るのだから、かなりの技術が必要なはずなのに、ドラゴンマスターである彼は筈に乗っていた。

そんな事を考えている暇もなく地面へと流れていく私に、セルスの声が切なく響いた。

彼に私の声が一瞬でも聞えただろうか。

私に背を向け、彼が向かうのは彼の心を締め付けてやまない、たった一人の少女。

そんなこと分かっていたのに。私は落ちていく中、そんな事を思っ

た。

心のどこかで、彼はきつと自分を助ける事を優先するのではないか。そんな愚かな気持ちだ。

『つたく。。。』

私の傍に飛んできて、私を救い上げたのは黒いドラゴン。面倒くさそうにそう呟いて、もといた空まで戻っていく。しかし、そこに彼の姿はない。

その瞬間に私の眼に入ったのは、私と同じように地上へと向かう、幼い少女。

「コア・・・！」

しかし彼女を救ったのは、黒いドラゴンでも、白いドラゴンでもなく、一人の人間。

彼の耳に聞えたのは、隣にいた私の彼を呼ぶ声ではなく、遠くにいた彼女の小さなドラゴンの名を呼ぶ声。

「コアっ！」

ドラゴンの名を呼ぶコアに、そう呼びかけるセルス。

どれだけ私が隣で叫んでもきつと、彼はコアを助けに行ったに違いない。

天秤はどれほど私に重りをのせていても、コアの一声にいと簡単に傾きなおしてしまった。

『・・・私とコアとで、私をとるのか。』

『ああ。』

コアと約束したと言っていたセルスが、その約束さえ守りながら、なお彼女を優先する。

「・・・優秀すぎるだろ・・・」

もしも彼がそこまで優秀な人間ではなかったら、私の元へ来てくれたのだろうか。

コアを助ける余裕がなければ、私を助けに来てくれたのだろうか。そんな感情は間違っていると知っていながらも、心の中で濁るように生まれてくる。

「いや・・・」

しかし、その答えは簡単に私の中に湧き出てきた。濁る気持ちをまるで押し流すように、簡単に。

もしも彼にコアを助ける余裕がなければ、・・・捨てられたのはきつと私だった。

どんなに深く約束をしていても、約束した本人より大切なものなんてないのだから。

『悪く思わないでほしい。』

そんなふうに私がコアとセルスから目を離すと、黒い翼を羽ばたかせアルが言った。

『あいつの中に決してお前を見捨てる気持ちはなかった。けれど、コアを見捨てる事もできない奴なんだ。』

「そんな・・・。私はそんな事思っていない。」

『あいつの世界を創った奴なんだ、コアは・・・だからあいつにとっては俺よりもずっとコアの方が大切なんだ。』

「・・・世界を創った？」

アルの言葉に私が聞き返すと、アルは言葉を続けた。

『あいつは貴族の生まれでな。もしコアに出会わなければ、与えられた椅子に唯座る事しかしていなかった。』

そんなあいつにコアが教えたんだと、その椅子が持つ世界は決して自分の世界ではないってな。』

眼に見えて浮かび上がる、2人の幼い頃。

コアは今と何も変わらず真っ直ぐに、セルスに向き合ったのだろう。

「・・・はは・・・、そんなの・・・敵うわけないだろう。」

出会った時すでに、彼の心には一生をかけて愛する人がいた。

私はそれを知っているながら、彼のその真っ直ぐな瞳に恋をした。その瞳が映しているのは、私の大好きな初めての友達であるコア。

私が彼女を大好きなように、彼もまた私以上に彼女が大好きなのだろう。

世界を教えた人に、私が敵うはずなんてないのだ。

「コアは・・・すごいな。なあ、アル。お前の主はいい奴を選んだな。」

『当たり前だ。・・・ありがとうな。』

彼を嫌うことができたなら、どれほど楽だろうか。

彼への気持ち捨てることができたなら、全てを忘れられたなら、全てがなかったことになったら。

初めての恋はあまりにも儚かった。可能性なんて初めから1%もなかったのだ。

伝説を目指して空を飛ぶ少女を追いかける彼の眼に、私は恋していたのだから。

嫌う事も捨てることも忘れる事も出来ない私の気持ち。

けれど、全てをなかつたことにしてしまふ事ほど愚かな事はないだろう。

たとえこうなると分かっているとしても、私は彼等に出会い、コアと友達になり、セルスを好きになる。

あまりにも得たことが多すぎたんだ。

誰かを大切にすること、思う事も、真っ直ぐな強さも、確かに人が抱く弱さも、全て。

私は彼等に出会って、得た事だから。それを失う事はきつと、とても愚かな事だ。

だから私は彼等に出会ってよかったと思えてしまふ。

こんなにも苦しく辛く哀しいのに、それを捨てることを嫌だと思えてしまふほど。

「コアは私に、何て言うだろう。」

きつと彼女は気づいているんだ。私の抱く感情に。

どうか怠惰だとは言わないで。今だけは甘えさせて。コアが私を助けてくれる、そう思わせて。

きつと彼女は苦しむ私を助ける言葉を言うだろう。

今度こそ、ようやく諦められる言葉をくれるだろう。

幼く愚かな私を、真っ直ぐにセルスを思う気持ちによって、助けてくれるだろうから。

「悪かった、トレス。」

バツが悪そうな顔をして、セルスが一人で戻ってきた。

「気にするな。・・・コアはお前の大切な人なんだから。」

「・・・ああ・・・。」

「コアは？」

彼はきつと心の中でとても反省しているだろう。

そうなることを覚悟で、彼は彼女の元へと向かったんだ。

「コアは・・・自分を待つ空に飛んで行った。ルキアと。」

白い竜に選ばれし者は、真のマスターであり、伝説のマスターとなる。

あの言い伝えはきつと、コアのことを言っていたんだ。

彼女以外に、彼女ほどドラゴンを思い、自分を強め、空を飛ぶ者はいないから。

「そうか。」

彼女らしい。

だからこそ、白竜は彼女を選び契約したのだ。

世界を変えていく、たった一人の少女、コアを。

第110話 : コア

この国に始めてきたあの日を思い出す。

まだ一年も経っていないのに、まるで遠い日のように。

学校から与えられたアカンサスへの一年間の実施訓練という課題。悩んで、セルスと喧嘩して、リラやロイに黙って出てきたあの日。

「一年なんて、長すぎだよ。」

数ヶ月前に始めてみたアカンサスの地は、あまりにも膨大で寂しげだった。

十年続いている争いを私が止める気はなかった。

私はただそこで自分にできる精一杯をしようと思っただけここにきたから。

そして私は今自分にできる自分のすべき事を、しようとしている。

「来るぞッ！」

低い誰かの掛け声に体は自然と構え、現実に戻される。

平和であるという素晴らしさと、当たり前前にある幸せを、思い出す。

「大地の精霊よ力をかしたまえ、アースウォール！」

ザザアと唸るような音をたてて、地上からのつそりと伸び上がってくる土の壁。

その壁にいくつももの炎を帯びた矢や弾が道を閉ざされ、地上へと落ちていく。

それでも水と氷により合成された弾は楽々と砂を破り、体を斬りつ

ける。

「・・・ちっ・・・大いなる風の力と大いなる地の力により、彼等の視界が閉ざされるように！」

「炎と光の力により、その風に熱が加わるように！・・・ッ！」

魔術師たちの言葉が響く。

その後を追うようにして手をかざして続ける。

「・・・ッ、追跡の炎、フレイムチェイス！」

私の放った炎の光が小さな竜を描いて飛んでいく。その炎にルキアがより一層強く炎を吹きかける。

それからその眼の向こうに竜巻によって視界をふさがれたドラゴンマスターがドラゴンごと空から抜けてきたのが見えた。

そんな事をすればきっと、ドラゴンの体は砂によって傷だらけになるだろう。

そしてドラゴンは主を庇うために、自ら熱を持つその砂に羽を覆わせるのだ。

「・・・信じられない！」

そう、命令されたのは上から抜けるということだけ。

それでも優しいドラゴンは、主のために自らを盾にして従う。

「今いるドラゴンマスターは、上に昇りましょう。」

「・・・あいつらっ！」

「分かった！！！」

傍にいた緑と青のドラゴンのマスターが空へと急上昇していく。

ルキアもそれに続いて昇っていき、辺りに冷気を振りまいた。それからすぐに一頭のオレンジ色をしたドラゴンが炎を吐いた。

「シールド！」

荒々しい魔法ではあるが、とつさの事でルキアと私を守る薄い壁を作る。

そのシールドにかろうじて防がれていた炎が、勢いを増し防御壁を壊しに掛かる。

するとルキアが大口を空けて、一気に水をその炎の勢いに負けないように飛ばす。

「水の鎮魂曲、フルードレクイエム！」

ルキアの放つ水に力を糧に、私の手から放たれた水の旋律が炎の根源を追う。

徐々に押し返される炎の力が、一気にはじけるようにして消えた。

しかしその先に待ち構えていたのは、ルキアの何倍もある龍をかたどられた風と炎。

「・・・なに、アレ・・・っ!？」

『コア、魔法を!』

立ち向かいようなない絶望が、目の前に形となって現れた気がした。ただルキアと空を飛び浴びている風が、まるで鋭く研ぎ澄まされた刃物のように感じる。

「光の精霊・・・よ、」

『光では無理よ・・・っ!』

「そんなっ!・・・」

水の精霊はさつき使い切ってしまつて、すぐ傍には少しもない。炎に打ち勝つ力が光では不可能な事くらい、知っている。けれど、地の力でさえ風の前には及ばない。水の力を使いすぎた。

「たりない・・・っ。」

あれこれ考えているうちに目の前の龍はどんどん大きくなってく。

『平気よ、コア。・・・私がいるわ。』

「・・・ルキア。」

『私の撒いた水には精霊が宿るから、できる限り魔力を上げて・・・貴女ならできるわ。』

それはとても高度な技術だった。

もともとドラゴンが出すものは全て源魔げんまと言われ、丸裸の状態にある。

空気中に分散した水蒸気や澄んだ川の水と同じように、時間を掛けてその源魔に水の精霊が宿る。

普通の水、飲み水や私達が魔法によって出した水には、絶対に精霊が宿る事のない。

精霊が宿ること自体、かなり時間がかかることだ。

それを高度な魔法によって補う事ができないわけではなかった。

マスターズスクールのクラスSにいた頃、ほんの少しだけ触った事があつた。

それは見ただけでも分かるほど、高度な技術と研ぎ澄まされた精神を要するもの。

「そんなの・・・」

できるはずがない。きっとセルスでも、難しいくらいだろう。私にできるような簡単なものじゃない。一瞬の迷いが、大きな危険を呼ぶ。

『私がここにいるわ。』

目の前に溢れるばかりに巨大化した炎の龍。私のすぐ傍で優しく囁く声。

私が信じるべきものは、決まっているじゃないか。

いつだって目の前に突きつけられた厳しい現実を、傍にいて助けてくれたルキアの声。

その声に突き動かされて、私は今ここにいる。何を信じ、何のために戦い、そして何に立ち向かうのか。

「やろう。」

私はルキアを信じて、大切な者を守るためにそこにある厳しい現実
に立ち向かう。

できない。そんなこと、誰が決めたのだろう。私の限界はいつだっ
て私しか決められない。

自分が不可能だと思ったとき、全てが不可能に変わるだけで
可能だと思ったとき、全てが可能に変わるのだから。

私は信じている。自分の限界がここじゃないということをし、そして、
ルキアを。

第111話　：コア

「やるよ。」

『コア。．．．行きますよ。』

「うん。」

スウと静かにルキアの息を吸う声が聞え、次の瞬間にはルキアから伝わる振動と共に回りに撒かれた水が映った。

水は重力を受け、地面へと落下していく。それを留める事ができない。宿らせる事はできない。

「風の精霊よ、我に力を．．風力により重力に逆らい水を浮遊させて。ウィンドウ！」

ブワツと私の元まで戻ってくる水たちには、少しの霊気を感じ、私は目を閉じて全てを捨てた。

心の中にある雑念や、神経を邪魔する周りの悲鳴や爆発音、私は静かに心を無にした。

「．．宿れ、生命の源よ。我の魔力を源に時を逆らい、時の中に生けるものに、暖かな手を差し伸べよ。

．．宿れ、生命の源、水の精霊よ！」

ルキアの上に乗る空を飛んでいる私に、重く重力が何倍もの力となって押し掛かってきたように感じた。

魔力の全てが奪われていくような喪失感と共に、大きな疲労を感じる。

それでも両腕をしっかりと伸ばし、揺らぐことなくジッと周りの空気に魔力を調和させる。

「宿れ。」

パチツと小さく音が響いて、その疲労と重力が肩に押し掛かる感覚からほんの少し抜け出すと、私の周りにはたくさん水の精霊が充満していた。

「いける！」

『流石コアだわ。信じてた。』

きつと偶然に成功しただけ。もしもここで静かに応援してくれていたルキアがいなければ、成功しなかった。

私はホツと肩の荷を下ろして、直ぐに今にも飛びついてきそうな炎に眼をやる。

「水の精霊よ、私に最大の力を．．．どうか、私に水を操る力をかして下さい。」

炎の龍に打ち勝つだけの力を．．．水の円舞曲えんぶぎきよく、フルードワルツ！」

力を溜め続けていた龍が尾を振って大きく放たれた。

「水の精霊、お願い．．．私に最大の力を」

『彼女に最大の力を』

向かってくる炎の塊を見て、誰もが大声を上げた。

よける、それじゃ防げない、無茶だ、もう無理だ、誰もがそう口々に言った。

そのざわつきの中で、ひどく澄んだ、そうまるでこの世界の者ではないほど美しい声がする。

《なんて荒療治なマスターなの。白竜が連れてくるマスターはいつもね。》

たった一瞬でそれが精霊の声だという事がわかった。

「・・・嘘・・・」

『聞えましたか、精霊の声を。』

「私なんかが聞けるなんて、思ってたなかった。」

依然手の中で水が膨れ上がり、ワルツのように円を描いて踊っている。

その水が自然に大きな渦を描き始め、しっかりとした柱が出来上がる。

「水の精霊、力をかして・・・私に全てを守る術を。」

どうか応えて。私の中での声がとどいたのだろうか。

水は一気に質量を上げて、そこら中にある全ての精霊が集まってくる。

《いいわ。私達の全ての力を汝に捧げ、汝大切な者全てを守りますように。》

まるでルキアと契約を結んだときのように、私の体に風が走っていく。

精霊話術は専門の魔法を学び、力あるものだけができ、その中でも洗練された精霊取得者が契約を結ぶ。

これが精霊契約。

「私の全ての力を貴女に委ねます。精霊契約の名の元に。」

最大という所まで水が力をつけた瞬間。

「パン」と大きな音を立てて、水の精霊達は私の手を離れ、向かってくる炎龍えんりゆうに向かつてく。

まるで海面上に現れた、天空へ伸びる水竜のように。

「炎を打ち消す要となり、世界を守る力として、踊れ水の精霊よ。
水の円舞曲、フルードワルツ！」

全てを力に変えて、守ってみせる。そう思って空を飛び続けていたおじいちゃんとエルクーナの未来を奪った私にできることが、そこにはあるから。

「精霊・・・」

「契・・・約？」

「まさか・・・」

「あんな、子供に・・・？」

呟き囁かれた言葉たちに、私は捕らわれることなんてない。

精霊の宿らない炎に、精霊が作り出した水が負けるわけがなかった。炎の龍は簡単に打ち砕かれ、その炎の断片を空中に降らせている。

「ベーレ家の頭首を出しなさい！」

一瞬静まり返った戦場で、私の声が高く遠くまで響き渡った。

その時、目の前に羽を生やした豹が降りてきた。

その優雅な姿はルキアにも劣らずほど美しく、その眼は何も映していないように澄んでいる。

「貴女が幻の白竜の主、コアか。」

そんな豹に乗り私の前に訪れたのは、毛皮を羽織った貴族らしい女だった。

「貴女がベーレ家の、頭首。」

「いかにも。」

この争いを続けてきた、張本人。

「貴女のような子供が、まさか精霊契約まで結ぶとは。その実力は、本物のようだ。」

私をジッと見る眼は、まるで射るように鋭かった。緊張と静けさがあたりに張り詰めている。

「貴女が王国二軍を動かしたのかい。」

「・・・違います。」

「ならば何故、王も立たぬこの国の金銀軍が旗を掲げる。」

ルキアが翼を上下に動かすと、豹もまた上下に揺らした。

王国二軍の旗が掲げられている、その理由なんて考えればただ一つだ。

「新王がおつきになられるからです。」

この国は平和へと一歩踏み出そうとしている。その証が金銀に輝く思い軍旗。

何千もの命を背負い戦う意味がある、最後の争いの後に揺れる二つ

の軍旗と一つの国旗。

「新王・・・だと？」

もう何の音もしない、静まり返った戦場。

そこに響く驚きに満ちた、綺麗な女の声の一つ。

「王家はもう途絶えただろう・・・」

「いいえ。王家の血は途絶えてはいません。たった一人、王と直血の関係におられる王女がいます。」

私が彼女に出会った時、その眼は初めてであった時のルキアの眼に似ていると思った。

全てを諦めたような目の奥には、凜々しいほどの威厳と品格、そして貫き通すほどの願いを抱く。

「王・・・女!？」

「この国の椅子はハデス家の者でもなく、決してベーレ家の者でもない、座るべき者が座るためにそこにある。」

「・・・いや、あの椅子は確かに私が座るべき椅子だ。」

野心にまみれた人間が座れるような椅子ではない。

人の傷を分かち、その命の重さと大切さを知り、一瞬と言うこの時にあるべき幸せを与えられる者こそが、王となる。

乾いた風が辺りを走るように抜けて行った。その遠くには揺らぐほど小さく黒い龍の上に乗るセルスとトレスが見えた。

「あの椅子が真に望むものは、決して貴女ではない。だから私はここへ来たのです。あの椅子が望むものをお連れするために。」

一秒でも早くこの争いを終らせるために。
小さく重い命を細い足で支え抱える幼い少女に、その命と手を繋ぐ
場所を与えるために。
戦争で怪我をした私を元気付けてくれたお婆さんに、元気になって
もらえるように。
赤竜の願いを叶えるために。シユランのお婆さんの哀しみが少しで
も早くなくなるように。

「何を・・・！」

「ただあの紫苑の椅子一つのために、失ったものは多く、取り戻す
事などできないものばかりを手放して・・・。
あんな椅子のためだけに、小さな足が傷を負い、傷つきながらも笑
顔を絶やす事もしない、ただ平和を願い、哀しみを抱いて。

それが意味することに気づかない愚かな者が、あ
の椅子に座る事なんてできない。」

この数ヶ月で私はたくさんものを見てきた。

優しさも醜さも、そこにある幸せも、悲しみも。

そんな全てを忘れることなく、この国を皆が笑顔でいられる国にし
たいと思う王こそ、座るべき場所。

「だから譲らない。」

たとえ、この争いでどれほど大きな傷を負う事になっても。

絶対に引けない。私に笑顔を向けてくれた人たちの、たった一つの
願いのために。

「あの椅子には、王女トレス以外は座らせない。」

今ここに来て私はようやく、彼等のために役に立てているのかもし

れないと思った。

『力ある者は、力無き者のために存在せよ』おじいちゃんの優しい声が、風の中に響く。

何のために努力してきたのか、何のためにここまで飛んできたのか。

全ては大切な人を守り、笑顔にするため。

「私は絶対譲らない。」

どうか、私に力を。大切な人を守り、彼等の切なる願いを叶えるために。

第112話　：コア

最後の戦い、そう謳われる戦いでありたい。

「戯言を・・・、貴女はまだ分かっていないのよ。この世界がどうやって創られているか。」

女の声の終わりは、周りの音に消え混ざるようになくなった。

その女が手を振り上げた瞬間に、まだ傷も負っていない魔術師が何十人とこつちへ向かってきた。

今ようやく一人のドラゴンマスターズを退けたばかりなのに、次へ次へと湧き出てくる。

私はまだ15年しか生きていない。その中で見てきた世界は全てじゃない。

「でも・・・」

『来るわ!』

一斉に放たれた光の旋律が、私とルキアを縛ろうとする。

そんな旋律から必死に逃れるように空を速く鋭く、飛び続けているルキア。

「風の力によつて、我を捕らえるその手を払え　　ストーム力
ツト」

ブチブチと音を立てて宙に漂うその旋律の断片がキラキラと輝いて見えた。

旋律の切れ端がゆつくと重力にしたがつて、地面へと漂いながら落ちていく。

「水の精霊よ、我に応えよ。」

《我の力を汝の手の中に》

「水の力が樹木によって作られし彼等の幕を濡らし、その力を奪うように　フルードレイン！」

新しく構え直す魔術師たちに豪雨のように雨が降り注いだ。

箒や自分にかけてあった防御魔法は、水の精霊の足元にも及ぶはずがなく、簡単に壊れてしまう。

その結果魔術師たちは箒のバランス感覚を失って、次々に地上へと下降していく。

地面にまで染み渡った水が、地上でそれを待ち構えているのが見えた。

「地よ水の精霊と我に力を！地に降りし彼等を捕らえよ　ソイル
イヌデーションキャプチャー！」

地上は揺れて、降りてきた魔術師を捕らえると固く逃がさぬよう固まった。

しかし水と大地の力を借りたために、私の魔力は大きく浪費してしまっていた。

「・・・はあ・・・はあ・・・」

『コア、平気？』

唯でさえ精霊契約を交わし、魔力を失ったというのに、追い討ちのように大地から魔力を奪われる。

どうにも体力が限界を見せ始めていた。

「平気じゃ・・・なくて、も・・・飛ぶの。」

それでも地上へと降りることは、頭の端にもなかった。きつともうすぐセルスがトレスを城へと連れて行ってくれる。あと少しだけ飛び続ければ、この国は平和への一步を確実に踏み出せる。

「そのためなら・・・無茶くらい、しなくちゃ。」

『コア・・・!?!?』

平和への道がそこにある、そう信じてやまない人がいる。そしてその道を歩ませる事ができる、王女トレスがいる。その道を塞ぐ者が現れたなら、私はその者達を防ぐ大きく厚い壁となる。

この身を盾にして、この国が平和へと歩めるように。幸せになろうとしている人の、邪魔だけは絶対にさせない。

「この国の・・・平和を守れる、壁になってみせる。もう、邪魔はさせない。」

たった十五年、この世界を見てきた時間はそれだけ。だから、なんなのだ。

「あの人は、間違ってる。」

この世界がどうやって創られているのか、そんなことはどうだっていいことだから。

ただ今この国の人々が求めているのは、平和とほんの些細な幸せだけ。そんな人達からこれ以上、何を奪うというの？

「貴女は間違っているわ。」

上から降ってきた声、目の前から押し寄せる音。
ルキアは紅く燃え上がる炎によって、目の前から押し寄せる者達を
追い払う。

「世界は常に争いの中にこそ、その幸せを見出す。そうやって、創
られてきたのよ。」

国民から大切な者の命を奪い、幸せを奪って、争い得たあの王座が、
幸せ。

誰かから何かを奪い争って、見つけ出したものが・・・幸せ？

「それは・・・違う。」

世界がどう創られていようと、誰かが傷つき悲しみ苦しんで得られ
るものが幸せなはずがない。

大切な者を奪われ憎しみを増して、何かを守るために傷ついて、苦
しんで。

あの椅子に座るといふ幸せのために、誰かが傷つくなら、あの椅子
は不幸を呼ぶ物ではない。

「争わなければ得られないものなんて・・・幸せだとは呼ばない。」

争いによって幸せ得ていくことが、世界が創られる方法ならば、そ
んな世界なんて捨ててしまえばいい。

誰かを傷つけることでしか、幸せになれない世界なんて、必要ない
んだ。

「貴女は間違ってます!!!・・・あの椅子は幸せの証じゃなく、不
幸の証ではない。」

もしも世界が争いの中で幸せを見つけることで、形作られているというなら……。」

風が大きく巻き起こり、魔術師たちは一瞬のその風にバランスを崩して揺れた。

ルキアがその風に舞い上がるように空高くへと羽ばたいた。

女の人の飛ぶ位置まで舞い上がると、豹は怯むように少しずつ下がった。

傷つく者がいて初めて、誰かが幸せになる。

それがこの世界の幸せの定義なら、そんな世界なんて捨ててしまえばいいんだ。

「私はそんな世界はいらない！！誰かを傷つけて得たものを幸せと呼ぶ世界なんて、必要ない！」

誰かを傷つけることでしか、幸せと言う意味を見出せないなんて、それは不幸だよ。

誰も守る事ができない弱いものが、傷つくのを恐れて傷つけて、守ったフリをするのと同じ。

赤竜のマスターがそうであったように。人を傷つけることが、人を守ることじゃない。

誰かを傷つけなくては守れない時なんて、この世界にはないのだ。

「何を……！」

「貴女の言う幸せは、ただの不幸です。」

誰かを傷つけることでしか得られない幸せなんて、幸せとは呼ばない！！」

大切な人を想い、支え、笑い合うあの人たちの幸せへの一步を、こんな汚れた『幸せ』に奪わせやしない。

誰かを傷つけるためじゃなく、誰かを守るために強くなりたいと思っただ。

誰かの平和への思いを、私ができるかぎりで叶えたいと思っただから。

「2つの音が大いなる神の旋律を奏で、この地を囲い込むように

」

コア！！と私の下で驚いた声で私の名を呼ぶルキアの声でした。

この魔法をかけてしまえば、私の魔力はきつと底をつく。今までで一番、大きな魔法。

けれど恐れはなかった。確かに私の中にあるものを信じていたから。

「 水と風の夜想曲^{やそうきょく}、フルードストームノクターン。

炎と大地の鎮魂曲^{ちんこんきょく}、フレイムソイルレクイエム。

」

私は知ってる。

この世界は、そんな哀しいもので創られているわけじゃない。

もっと暖かなもので創られていると、確かに信じている人がいるのだから。

だからこそ誰にも壊されてはいけない、世界という存在なのだ。

第112話　：コア（後書き）

*鎮魂曲：レクイエム

死者の鎮魂を願うミサ曲。

*夜想曲：ノクターン

特定の形式はなく、表情豊かで静かな

哀愁（寂しくもの悲しい気持ち）を帯びたピアノ曲。

第113話　：セルス

地上が揺れた。

その揺れに俺は微かに、彼女の力を感じた。

「コ……ア……？」

白い宮殿が迫って、太陽の光に眩く輝く。

次々に黒の軍が降り立ち、その後にとつとアルが地面に触れる。

「大丈夫ですか、王女。」

軍の中から一人の兵が手を差し伸べそつとトレスをアルから下ろした。

その瞬間にガタガタと周りの石が崩れ、地上の揺れに軍は揺れた。

俺はその揺れに、小さな小さな少女の力を感じていた。

「コア……」

『どうかしたのか。』

アルは心配そうにこつちを見てくる。紫苑の王座まであともう少しだった。

前王の娘であるトレスなら、この国の精霊達に王であるという儀式を行うだけで王座につける。

だから一刻も早く王座にたどり着き、儀式を行いたかった。

「いや……」

「行こう。早くコアのところへ戻らなければ。」

『おい、セルス。』

俺に声をかけてくるトレスの声が一瞬全く耳に入ってこなかった。ただ俺は空を見上げて遠くに感じる、今にも途切れてしまいそうなコアの魔力を捕まえようとしていた。さっきの揺れといい、波動といい、きつと限りなく高レベルな魔術を使ったんだ。

俺がそんな事ばかり考えているとアルが低い声で呼び戻す。

「あ、ああ。」

長い長い古びた階段が目の前にそびえる。

この階段を上り、王座につけば、この世界は平和への扉を開く。

「急ごう。」

トレスがもう一度こっちを見て言った。

「ああ・・・。」

しかし俺の耳にそんな言葉が真っ直ぐに響くわけがなく、俺は曖昧な返事を返すだけだった。

痛いほどに感じていた魔力が、急に途絶えたのだ。

しかし今、トレスの傍から離れることは決して懸命な事じゃない。

たとえコアがどれほど大切でも、心配でも、離れることができる空気がない。

「この階段を上げれば直ぐだ。」

軍長が俺の肩を軽く叩いた。

分かっている。そんなことくらい、分かっているのに。

コアの傍にすることが今俺のすべき事ではない事くらい。

「はい。」

空を飛んで世界は確かに変わった。

コア一色に染まっていた世界が、ほんのりと大きく広がって、俺は選ぶ場所まで来た。

自分の幾つにも別れた道の中で、どれが今一番適切な道なのか。昔ならコアに関係する道だけを進んできていたというのに。

「アル！」

俺の肩から手を放した軍長に続き、軍の兵士はトレスを囲むようにして階段を駆け上がり始めた。

しかし俺の脚はそこに座って待っているアルのほうへと向かう。

『お前は行かないのか。』

「行くさ。」

俺は選ぶようになってしまった。コア以外の道を。

トレスを選び、空を飛んで、コアの傍を離れてしまった。

何かを選ぶという事は、とても難しい。

選ぶという時点で、比べるという時点で、そのモノはとても大切なのだ。

それでも人はいつも選びそして進んでいる。

『なら早く・・・』

追いかける、そう口にしようとしたアルを俺の言葉が遮った。

「空へ戻る。」

コアの傍を離れることで、俺は成長したのだと思っていた。

『何を!?!』

コア以外の道を選ぶ事が俺にとっての成長なのだと思い込んでいた。コアを選ぶ事は簡単にできた。だから簡単にできないことを選ぼうとした。

けれど、それが本当に正しい事なのか。

「コアが好きだ。けど俺が戻る場所は、・・・空だ。」

それは違う気がした。

『空・・・?』

「そう、空。」

『コアの場所だろうか?』

「違う。あいつのいる場所じゃない。」

簡単にできないことを選ぶのが、いつも正しいとは限らない。

難しい事を選ぶより簡単な事を選ぶ事で、俺にできることが増えるなら。

難しい事をあえて選ぶ必要なんかない気がするんだ。

「俺は空に戻る。」

心配だから、彼女が。

不安だから、彼女の事が。

すぎだから、コアのことが。

簡単な事を選ぶ事は、時に間違いだという事はできない。

「それが今の俺の正しい選択だ。」

何かを選ぶというのは、とても難しい事。

何かと比べる時点で、それはとても大切なモノだから。

『乗れ』

軍のついているトレスよりも、何も無い彼女が心配だから。

心配で何が悪い。不安で何がいけない。好きだからってそう思うのは何かおかしいことなのだろうか。

たとえ逃げだと言われても、それでも俺には俺の進むべき道を選ぶ。

難しく、そしてときに簡単にそこに幾つも並べられた、俺の道を。

第114話 : コア

この世界に生きていたいと思う理由は簡単。
いつだって、大好きな人が私の名を呼ぶから。
死ぬという事を恐れるのも、生きていたいと願うのも、ここに大切な人がいるから。

『コアっ！コアっ！！』

全ての魔力が体から抜けきった、そんな気分だった。
軽くまるで羽が生えたように体が軽く空を飛ぶルキアの背に横たわるだけ。

私の目に映るのは晴れ渡った空で、私の耳に聞えるのはルキアの澄んだ声があの日と同じように私を呼ぶ声。

「ルキ・・・ア？」

自由の利かない体で、私は精一杯声を振り絞りルキアの声を呼んだ。

『コアっ！しっかりして！』

《主、気をしっかり。》

水の精霊が水滴となり、ルキアの周りを優しく覆っていた。

綺麗な水のシャボン玉には、真っ青な空の色が染まっている。

トレスは、王座について儀式とやらをしただろうか。

アルはちゃんとセルスとトレスを王宮に届けてくれただろうか。

セルスは・・・。

「私・・・」

私は誰にも傷ついて欲しくなかった。
だから、大好きなセルスにトレスを任せた。

「私・・・ね。」

最後じゃない。私が見上げている空は決して、最後なんかじゃない。
そう心のどこかで声を上げている何かがある。

ただどその心と反対に、セルスの顔を思い浮かべて零れていく涙がある。

ゆっくりと離れていく空に、私の涙が水の精霊の水滴のように浮かんでいく。

「ルキアが、大好き。・・・セルスが、・・・大好き。」

ちゃんとトレスの前で言いたかった。

本当の私は弱くて、卑怯で、愚かで、泣き虫だから。

セルスのためなんて綺麗事を盾に、私は自信がなかったから言えなかった。

セルスの傍にずっといる自信が、セルスに想い続けられる自信が、セルスだけを想う自信が。

「私は・・・セルスが大好・・・きななの。」

『知っています。お願いよ、コア・・・しっかりして。貴女はこんな所で死んでしまっていていい人じゃない!!』

ドラゴンはどこまでも優しいから、その分だけ傷ついて、その傷を隠して笑う。ルキアは出会った時からそうだった。

ほんの一瞬その影に見せたのは、マスターを恨む気持ちと、マスタ

ーにつくドラゴンを羨む気持ち。

「違う、よ？それは、違う。皆、死んでもいい人なんて、どこにも・いない。」

主を思うドラゴン。でも、ルキアは違う。

主だからじゃなくて、私だから想ってくれるんだよね。私、知っているよ？

いつだって、青く赤く染まっていく空の端で感じていた。

「ね・・・え、ルキア。」

『もう・・・黙って、下さい!』

バサツとルキアの白い翼が揺れたのが眼の端に映った。

「ルキアは・・・自分を犠牲にして、私を助ける、けどね。」

いつだって、いつだって。

私が弱いから仕方ない事だけど、でも命に関わるときじゃなくてもそうだった。

いつか私に向けられた矢だって、私に突き刺さってもきつと死ななかつた。

魔法弾だって、炎だって、ルキアは白い翼を盾に私を庇ってばかり。

「守らなくて、いい。」

ルキアの優しさはいつも私を傷つける。

そのことに、ルキアはいつも気づいていない。

「もう、守らなくていい。傷ついてまで守るつもりしないで・・・?」

『・・・守ります。大切だから、何があっても。』
「何があっても・・・なんて、駄目、だよ？ルキア。貴女は気づいてない。」

体から抜けきった魔力の所為で、眩暈がし始めた。

空に浮かぶ白い雲が全て、美しく空を飛ぶルキアと・・・エルクーナに見えた。

「貴女が傷ついたら・・・悲しむ人がいること。貴女が傷ついたら、私が傷つくこと。」

だから、結局同じ。同じじゃなく、それ以上。

自分の体に矢が刺さるより、ずっと、ずっと痛く突き刺さる。

『そんなの・・・貴女だって分かっている。貴女のほうが、分かっているわ！』

そうかもしれないね。そう笑いたかったのに、何を言うこともできなかった。

エルクーナが空の上を飛んでいる。そういえば、エルクーナも白竜だったんだ。

ルキアはきつと、エルクーナの子供なんだね。

私の憧れたあのマスターのドラゴンに育てられた、白きツバサを持つ子。

エルクーナが私の元を去るとき、一瞬その眼に映った白く幼き龍。

「ルキ、ア。」

全ては運命のままに動いている。

私がルキアと出会ったことも、セルスと出会った事も。

出会いは運命。必然の元に出会った。

けど思うの。契約を結んだのは決して運命じゃない。セルスを好きになったのは運命じゃない。

決まっていた事じゃない。私が、決めた事なんだって。

「平気だよ、私は・・死な、ないよ。」

死なないよ、私はルキアの命を背負っているんだから。ルキアが死にたくないと思うなら、絶対に死なない。

少しでも私と空を飛びたいと思ってくれるなら、絶対に私は死なない。

『当たり前ですよ・・っ！』

そうだね、私は静かにそれだけ言った。
空に流れる言葉。

「セルス・・、セルスの匂いがする。」

魔力がないマスターの終わりなんて、眼に見えている。だけど私は何故だか、死ぬ気がしなかった。

ルキアがいる限り、きっと私は死なない。死ねない。

「セルス・・の、匂い。」

大好きな人が涙を流す事ほど、悲しいことはない。
大好きな人が傷つくことほど、苦しいことはない。
だから私は死なない、絶対に、死んだりしない。

「

コア

「!」

大好きな人が私の名を呼ぶ声がする。

この世界はとても優しく暖かく幸せな場所、だから人は死を恐れるのね。

きつと死の向こうに大切な人がいるなら、怖くないもの。

だから、この世界に生きていたいと思うの。大切な人が私の名を呼ぶから。

第115話　：セルス

俺の眼に映ったのは、魔力を持たない少女を乗せた白竜。その少女の体からはほんの少しの魔力さえ感じなかった。

「コアッ!!」

空に戻る決断は決して、間違っていたとは思わない。

けれど空に戻っても、俺にすることは何もなかったようだった。

強大な魔法によって地上に捕らえられたベール家の軍は、その場に眠るように横たわっている。

豹の横に横たわる気品溢れる女が、きつとベール家の当主。

「私は・・・平気、大丈夫。」

マスターや魔術師は魔力を全て使いきると、精力を使いはじめようになんてできている。

それがどういうことか。コアは分かっているのにこんなに強大な魔法を放ったのだろうか。

「お前!!」

白いルキアにアルが近づいて、俺の眼にだんだんとくつきり映る弱ったふうに笑うコアの顔。

精力を変わりに使うということは、その分だけ寿命を削るといこと。

「説教、なら・・・後で聞くから。」

微かに微笑む彼女は、俺の気持ちをどこまで分かっているのだろうか。説教じゃない。心配なんだ。大事なんだ。それくらい、分かっているだろうか。

「トレスの・・・所に行こう。」

精力を削って、微笑む。俺の目の前にある、小さな小さな命。

「ルキア、トレスのいる城まで運んで？」

『そんな体で・・・何ができるといふんです。』

真っ白でボロボロのワンピースが、空の風にヒラヒラと揺れる。

まるで雲と同じ色をした、そのワンピースが風の中に溶け出しているように見える。

コアはルキアの問いに優しく笑って、答えた。

「何もできない。だけど、私のやるべきことは全部したから・・・。見守りたいの。すぐ傍で、この国が平和になるその瞬間を・・・見届けたい。」

「お前は・・・死なないんだろ!？」

『見届けたいなんて、やめて・・・!』

「2人とも、私を勝手に・・・殺さないでよ。」

ね?なんて笑うコアが、とても弱く脆く感じた。

「お願い、ルキア。私を・・・平和へ一歩近づくその瞬間が訪れる場所に。」

『紫苑の王座へ行けばいいんですね。』

白いワンピースを揺らす少女と白き竜は、いつだって寄り添うよう

に互いに支えあつて空を飛んでいた。

アルは何も言わずに、城へと岐路を変えたルキアの後を飛んでいた。世界一なんてものより、もっと高くを望む少女の眼は決してこんな所であらばなるものじゃない。

それでも、大切で仕方ないから、心配するんだ。それくらい分かつて欲しいのに。

『この地上一帯に魔法の輪を張るなんて・・・すげえのな・・・』
「考えなしで、馬鹿なだけだ。」

魔力を使い切ってしまうことくらい、少し考えれば分かる事なのに。俺の前を飛ぶ、まるで白い雲が象かたどつたような白竜を見ながら言った。

白い竜と黒い竜がどんと今にも崩れそうな城に近づいた。

砲弾によって開けられたであろう壁の穴から、長い階段がチラリと覗いた。

その階段を通り越し、ドラゴンは静かに羽を羽ばたかせ、フワリと最上階のデッキらしき場所に舞い降りた。

白い石によつて作られた城は、もはや城には見えないほどに朽ち果てていた。

近くで見て、触れると、すぐに崩れそうなほどに脆く。

「コア、降りられるか。」

アルの背中から降りて、城の最上階までの廊下をチラリとみて、それからコアを見た。

ルキアの背からゆっくりと降りている。

「平気・・・」

タン、と白い城の上にコアのポロポロになった足がついた。

「ありがとう、ルキア。」

『もし、向こうで魔法が切れたら・・・私が繫ぎます。だから・・・』
「だめ。ちゃんと、迎えに来て?・・・2人で、飛ぶから・・・空は空なんだよ。」

寒い台詞をコアはあっさりと言い退けた。

空が空である理由なんか、俺とアルには必要なのだろうか。

そもそも2人で飛ぶから空は空だという意味さえ理解できない。

「行こう・・・、セルス。」

「あ、ああ。」

コアがルキアに背を向けた瞬間、碧い眼を空に向けて白い大鳥が舞った。

その後を続いて、赤い眼をした黒い大鳥が空へと舞い上がっていく。先をゆつくりと歩くコアに目を向けると、魔力を持たない体で精一杯その先にある紫苑の王座へと向かっていた。揺らぐことなく、ふらつく足をしっかりと前へ進めて。

渡り廊下を抜け、大きなホールに入った瞬間。

底に広がる、朽ち果てた赤い絨毯の先に、もう椅子かどうかも分からない王座がコアと俺の眼に映った。

そしてその椅子にそっと触れる王女トレスと、そのトレスにひざまずく跪く王国軍兵。

「・・・王座、だ・・・。」

コアの小さな声に俺は何も返事を返す事ができなかった。

「 我の名はトレス

前主である父の血を持って、汝に契約を結ばん。

答えよ、紫苑の色に染められたアカンサスの王座よ。我をこの国の王として、欲するか。」

この世界の国々は、王座につくとき、その王座と共に儀式を行う。意志を持った王座は、その国の王を選ぶ権利をもつという。

その儀式を受けることができるのは、前王の直血である子孫のみ。それ以外の者が王座に受け入れられるためには、前王の血を持つ最後の生き残りの血を王座に注ぐ事。

そして新たな王座を作るだけの魔力や権力を持つ者。

「 答えよ 紫苑の座よ。汝は我を王として欲するか。」

その椅子に問うトレスが、あまりにも立派に見えて、俺とコアはそこへ跪いた。

「 パアッ」一瞬眩い光が放たれ、そこにいる誰もが目を閉じた。

そして目の前で起こる、奇跡に瞬きをする事さえ忘れる。

王座が光の粒と共に、朽ち果てた部分を修復し、元の立派な王座へと戻っていくのだ。

金に縁取られた気品溢れる椅子。金の縁は王座のてっぺんで美しい模様を描いて動くのをやめた。

色あせていた紫がしだいに濃く鮮やかに、紫苑の花を思わせるほどに色づいた。

「・・・綺麗な・・・王座。」

《 汝の椅子だ。》

ホールに響き渡る、低い声。

王座から響き渡る、新王を求める椅子の声。

「私が・座つてもいい、の？」

《汝のためにあるのだ。紫苑の花に愛される子よ。この国の王となれ。そして全てを幸せへと導け。》

「・・・はい！」

紫苑の王座にトレスがゆつくりと腰を駆けた。

その瞬間、朽ち果て、輝きを失った城が光を放ち始めたのだ。

「何だこれ・・・！」 「城が・・・」 「蘇っている・・・？」

足元から白く輝く美しいタイルが現れ、輝きを失っていた城の全てが時を戻している。

傷ついたコアの体をその光が優しく覆うと、フワリとワンピースが真っ白になり、

コアから感じる事ができなくなっていた魔力が、満ち溢れるほどに伝わってくるほどに回復していた。

「ど・・・ゆこと？」

「・・・まさか、城が・・・、城がコアを救ったのか。」

意志を持つ城が、コアに光を分け与えたのだろうか。

そう呟いたとき、まるで神を思わせるほど透き通った声が響いた。

『 この国を救ってくださって、ありがとうございます。 勇気ある幼き少女。 』

色鮮やかな真つ赤な絨毯、軍の傷も癒え、輝きを取り戻す全て。

「死なない、そう言ったでしょ？」

「・・・コ、ア・・・」

全てが終わり、この国がようやく争いを終え、平和への道を歩みはじめたのだ。

そんなアカンサスの空には、自由を得たドラゴンや契約獣が嬉しそうに舞っていた。

争いに巻き込まれ、縛り続けられたドラゴンや、魔獣が、自由を喜び。

地上では、風を操る者によりその知らせが届けられ、生きとし生きるもの全てが喜びの声を上げた。

全ての者に平等に当然のように与えられる平和を築くため、一歩踏み出した瞬間だった。

第115話 : セルス（後書き）

こんにちは。いつもお越しいただきありがとうございます。
読者の皆様にはいつもいつも、感謝しつくせない限りです。

このたび、著者である私の私情により、8月いっぱい更新を控えることになりました。

せっかく来ていただいているのに、残念で仕方ありません。

ですが、9月にはちゃんと更新しようと思っていますので、どうかご理解よろしく願います。

今まで小説を読んでくださった方々、応援してくださった方、本当にありがとうございます。

どうかこれからもよろしく願います。

第116話　：コア

形ばかりの城と傷だらけの王、それからただ荒れた土地だけが残されて戦いは終わった。

私は静かに星空を見上げながら一人考えていた。

私は王を王座へと導くことができた。なら、次に私がすべきことはなんだろう。

どうか人々を幸せにしてください。そう星に願ったことだつてある。私が叶えなければならぬことが願いとなった今、もう星は願いを叶えてくれない。

どちらが先だったのだろうか。

星が願いを叶えなくなったから、私は星にはできないことをするために立ち上がったのか。

私が自分で叶えなければならぬことを願ったから、星は叶えられなくなったのか。

「コア。」

低く、セルスの声が私に届く。

「まだ起きてたの？」

セルスはそつとデッキに出ると私に近づく。

彼は私の問いに少し笑うだけで何も言わなかった。

静かな闇がそこを包み込んでいるのに、ひどく穏やかで本当に全てが終わったのだ不思議な気持ちになる。

全ては終わり、また全てが始まる。

「明日からまた忙しくなる。」

そう。夜が明けると同時に隣国に支援を求めにいくという。そして今までアカンサスに支援していた国にその見返りとして土地を譲るといふ。

ヴァンはそれを止めたがトレスは声をしっかり響かせるように言った。

“今この国を救うのに必要なのは、乾いた土だとは思えない。”
その言葉にもうだれも逆らうことなどできなかった。私もそれが一番正しい選択だと思った。

「そうだね。」

トレスは王になった。

彼女に流れる血がそうさせ、彼女を愛した二人はそれを恐れた。

「力になりたい。」

こんなにも痩せた土地の王になるためにここまで来たトレスの力になりたい。

私ができることはきっと地方との連絡をとることや、配給をするにとくらいだろう。

私はまた無力なままに、大切な人を救えない。

「ここへ来ることも、王を王座へ導くことも、全てお前が決めてきた。」

「うん。」

「今何ができるのかは俺にも分からない。コアは戻る気が、国に。」

こんな状態のアカンサスを置いて、戻る場所なんてない。

「せめてトレスがちゃんと寝具で寝るまでは、この国を支えたい。」
王が床に座り柱に体をもたげて眠るこの国をおいて、どこへ行けと
いうのだろう。

ヴァンもシーザもそれを傍らで嘆いている。

星と月が青く染める地上を見ていると、ちゃんとそこに未来が待つ
ている喜びが生まれる。

けれどその未来を築いていく者がどれほど大変か、そう思うと悲し
みが生まれる。

「この国専属のマスターになってほしいと言われたら、コアはどう
する？」

無力な私を信じて期待してくれるなら、その手を振り払うことなど
できない。

けれど私が目指す場所はそこじゃない。

「揺るがない夢があるんだよ、セルス。私は伝説のマスターになり
たいの。」

「ああ。」

「ルキアは私と契約するのに何千年という時を捨てた。なら私はそ
の分までルキアに幸せを与えていたい。」

この国の専属マスターになるってことは、この国に生きる時全てを
捧げるってことになる。

分かってるんだ。助けたいと口では言うけれど、生きる時間全てを
捧げてまで助ける自信はないってこと。

私、とても中途半端だったこと。」

そしてそれは何より誰の力にもなれないということ。

「でも、私はわがままだから。できる限り助けたい。それがただの偽善でもなんでも。」

ルキアとの約束だけは破れないし、私には目指す場所があるから、偽善にしなければならないのかもしれない。

「だけどやっぱり、……私は学校から連絡が来るまではここに残る。」

戻れば自分の持ち場を離れたことを責められるだろう。

責任不足といわれればそれを否定することはできない。

けれどあの時私は自分にできる精一杯をしていたと思った。

そしてそれは今でも後悔していない決断だと胸を張って言えるのだ。

「だと思った。」

セルスは笑って「俺も残る。」と付け足した。

人はいつだって無力だけれど、誰かを守りたいも助けたいも偽善と なってしまっけれど。

それでも誰も救えないよりはと手を伸ばす。

「もう眠ろう、セルス。明日は忙しくなるよ。」

「ああ。」

私はこれからもそんなふうに生きていたい。

不器用でも不格好でも、それでも欲深く、夢も幸せも力も全てを手に入れるために。

第116話　：コア（後書き）

一年と約八カ月ぶりの更新となりました。

待つてくださっていた方々に深く深くお礼を申し上げるとともに、お知らせしなければならぬことがあります。

私情というのは受験を翌年に控えていたためでした。

そして受験を終えて更新しますと伝えていました。

けれど、もう一年、更新できないことになってしまいました。

できるだけはやく、そう言っていたのに努力が足らず、結果を残すことができませんでした。

そのためもう一年更新を控えさせていただくこととなり、そのけじめとして今回一話だけの更新をさせていただきます。

ずっと待つていて下さった皆様、本当に申し訳ありません。

けれど来年は必ず、感謝をもう一度しっかりと伝えるために戻ってきます。

どうかそれまで、待つていただけたら本当にうれしく思います。

ありがとうございました。

第117話　：コア

「　　コア？」

それはずっと昔に聞いた、低く存在感のある声だった。

「……………ハ、ハイドン省長官!？」

群青色の分厚く重たげなマントに、黒い革の鞆と群青色の帽子を持ち、四、五人の前に立つ男は、あの鬼とも呼ばれたプーシャ帝国総予省省長官だった。

その身に纏う張りつめた空気が明るい真昼間のテラスでふわりと溶けたのが分かった。

私を見る目が信じられない、という風に驚きを映し、ハイドン省長官は私のもとへ大きな一歩で駆けて来た。

「お前、何してるんだ!？」

「え、今ですか?？」

「今というか、ここでというか。」

私自身、何故ハイドン省長官がここにいるのか不思議でたまらず、正直なところ夢心地であった。
何の現実身もない。

今はちょうど午前部の配給が終わり、他国から来た技術者達にアカンサスを案内することになっていた。午後部の配給に昼食も織り交ぜ、そのうえついといった形で案内する。

国の復興支援者は私が受け持つだけでも五十人はいると聞いた。

「もしかして、省長官も」

その支援者の一人か、と思い尋ねようとした瞬間だった。大きな手が私の左腕をぎゅ、と掴むとそのままぐい、と広い腕の中に引きこんだ。

一瞬何が起こったのかわからなかった。強い日差しをさえぎったマントの中は木陰のようで、石鹸とほんの少し故郷プーシヤの匂いのするハイドン省長官の制服に目を閉じた。がっしりとした太い両腕に抱きしめられると、心地良い息苦しさを感じる。

「よくやった。」

震えるような声が聞こえ、私はそれが今ようやく、ハイドン省長官の声だとすっかり理解した。

それと同時に、ずっと張っていた気がふっと切れた。

一気に体を襲ったのは全ての恐怖と、全てが終わったという安堵、それから平和があるときへと帰ってきたのだという喜びだった。

もう、終わったのだ。

そう思うと背負っていた何もかもを一気にそこに落としたような気がした。

「お前が戦いを終わらせたマスターだろう？・・・まさか、コアがそのマスターだとは思っていなかったが、お前なら確かにやりかねないな。こんなところへ一人できて、大事を成し遂げる。」

大きな口を開けて、ハイドン省長官はそこら一带に笑い声を響かせた。

「違いま、す。私じゃないです。平和を願うこの国の人が勝ち取ったんです。マスターなら大勢空を飛びました。マスター達だけじゃ

ありません。魔術師だつてたくさん。皆で得た平和です。」

誰か一人が導いたというのなら、それはきつとトレスなのだ。何よりも恐怖や不安を抱えて、それでもトレスは自分の信じる道として、この国に生きる者すべての命を背負う道を選んだ。それが平和への大きな一歩だろうと思う。

そしてトレスだけでここまで来るのは困難だつたであろうこの道を、平和を望む大勢の人が支えて来た。

「私はまた、無力でした。」

気付けば私の目からは涙が溢れていた。

「けれど守らなければならぬものがあるということが、どれほど強さになるかを知りました。」

省長官がカルティエさんとの約束と、プーシャの病人達を守ろうと心に決めてそこまで這い上がったように、私も確かに大きな力を感じた。

無力だと嘆いてばかりではいられないことを、嘆くその一瞬さえ、より高みまで登れるように努力しなければならぬことを、私はここで学んだ。

「そうか。・・・お前が生きていてよかった。その強さが、お前を殺すことがなくてよかった。」

「私、死にません。」

「人は死ぬ。お前が思っているよりも簡単に。」

それはそうかもしれない。おじいちゃんも、赤竜のマスターも、確かに命とは脆いものだから簡単に死んでしまえるのかもしれない。

けれど。

「大切なものがあるから、死にません。その弱さも知りました。身を投げることは私にはできないんです。いくら守りたいと思っても、私はルキアの命を背負い、セルス達と約束をして、いつぱいの人に頼られて、支えられて、生きているから。自分の命をかけてまで、誰かを守ることはできない弱さを知りました。それは、最低です。中途半端なこんな感情は偽善です。何よりも足手まといです。」

死ぬわけにはいかないという弱さを抱えた私に、ハイドン省長官は腕の力を緩めて、私を見下ろすと、あの鬼が唸るような低い声で言った。

「はき違えるな。」

その声にすつと背筋が伸びる気がした。

「それは強さだ。人が何があっても自分の命だけは守ろうとするのは、弱さでも脆さでもない。」

私は最期を迎えるときに何度も立ち会ったことがある。三百人より多く看取ってきた。

そこで私が見たのは強さだ。死にたくない、まだ死ぬわけにはいかないのだと喚くそれは、人が人として、いや、命として与えられた義務を全うする強さだ。」

厳つい目が私を睨み付け、その奥にある哀しみを隠しきれずに訴えた。

お母さんもきつと強かったのだと思った。

「強くなったな、コア。伝説の白竜のマスターに相応しくなった。」
ふっ、とそれが和らぎ優しい目が私を見つめる。
その瞳に、私はあの鋼鉄のマントを纏ったような男を思い浮かべた。
空中を舞う鉄球をたった一人で止めてしまえる、私の父を。

「お父さんに、会いました。」

私の胸の金のネックレスに通された指輪を私にくれたのは、ハイドン省長官だった。

「そうか。お前の母親の名は、グレーナだろう。」

「省長官は、知ってたんですか？」

「いや。情けないが、グレーナに子供がいることさえ聞かされていなかった。けど、グレーナの墓にお前を連れて行ったとき、一瞬グレーナを見た気がしたんだ。ただそれだけのことだ。お前はどこか、あいつに似ている。」

ハイドン省長官は切なげに目を細めて、そっと私を腕の中から解放した。

熱い太陽が照りつける中、あの楽園テパングリユスに吹く風が吹いた気がした。

「強い目と、綺麗な髪がですか？」

お父さんが私にそう言った、その眼によく似ていた。

「ああ、そうだな。その強い目は絶対にグレーナ譲りだな。」

「お父さんも、そういつていました。」

「お前の父親をつれてこい。一度は殴らないと気が済まない。」

「それ本気に聞こえますよ。」
「ははっ、本気だ。俺は嘘をつかない。」

もしもハイドン省長官が指輪を私にくれなければ。もしもフェウスさんに、お父さんに会っていないければ。もしもあの時、ハイドン省長官が私にグレーナさんの、お母さんの話をしてきていなければ。もしも実施訓練で総予省に行かなければ。もしもそこで必死に認めてもらえる努力をしなければ。

もしも私がルキアと出会っていないければ。もしもマスターズスクールに入っていないければ。

おじいちゃんとエルクーナがあんなにも素敵ならドラゴンマスターズでなければ。

今も私は優しく強い父がいることも、美しく靱^{つよ}い母がいることも、知らないままだっただろう。

「運命の神がきつと、省長官とお父さんを引き合わせてくれますよ。」

お母さんを愛したお父さんと、お母さんを大切に想ってくれたハイドン省長官を、神様がきつといつか引き合わせるような気がした。

「
「ア！」

強く、強く、運命の神が吹かす風がそこを駆け抜けていった。

「お父さん。」

お母さんがきつと会わせたいと願っているのだろう。そんなふうに思いながら私はそつと私の名を呼ぶお父さんに駆け寄った。

殴られちゃうのになあ、と思わず笑ってしまっ。

決して命を投げ出さずに来たことを、私は今こんなにも誇りに思える。

お父さんとお母さんを結ぶ命として、今も、運命の神をこんなにも感じられる。

そしてそれはきつと、これからも。

だから私は生きていく。

醜くとも、みつともなくとも、懸命に。

第117話　：コア（後書き）

お久しぶりです。

一年前、頑張ると言っていたいながら結果を出せずにいた私に、待っていますとたくさんの方が応援の言葉をくださいました。

その言葉に支えられたというのはあまりにも簡単な文章であり、感謝になってしまつのですが、本当に本当に私の支えとなつてくださったことを、一度でもこの小説に目を向けてくださった方、触れてくださった方、メールを下さつた方、ずっと寄り添っていてくださった方に、伝えきれないほどの感謝を。ありがとうございます。ようやく今年、努力が実を結びました。本当に本当にありがとうございます。ございました。

小さなこの小説がたくさんの人と私を出会わせてくれたことに、心から感謝し、皆様にも心より感謝を申し上げます。私も細やかながら恩返しにもなりません。この小説を続けていくつもりでありますので、これからもどうか末永くお付き合いよろしくお願いします。

第118話　：トレス

広く広くそこにあるアカンサスの大地が少しずつ緑を纏いはじめ、本当に少しずつではあるけれど建物も建っていた。この戦いが起こる前、アカンサスの光の街と呼ばれた城下トリミアも、元の姿をほんの少し感じさせるまでに復興していた。

「またここに光が舞い降りる日は来るだろうか。」

トリミアは平和の証であるとされる光の粒が年に一度舞い降りる街として栄えていた。

しかし私の父である前王クオンズが亡くなったその年、光は訪れなくなり、それからというものの一度も舞い降りていなかった。

トリミアに戻ってきた人々はみな、光降る日を何よりも待ち望んでいた。

やせ細ってしまった大地を他国へ譲渡し、多くの支援を得て何とか持ちこたえる現状。

それを維持するだけで精一杯のこんな私に、皆が期待をしてくれる。

「私、ハイドン省長官に言われたの。お前がこの国の戦いを終わらせたマスターだなんて。」

確かに私は終わらせようとしたけど、私だけじゃないんだよね。それにその時思ったの。

もしもこの戦いを終わらせて、平和へ導いたものの名をあげるとするならそれは、トレスしかないって。」

強く風の吹く中、日が暮れていくアカンサスを眺めながらコアはそう言った。

テラスがひんやりと冷たくなって、肌に触れるのが気持ちいい。

「……私？」

「そうだよ。だってこの国を背負う覚悟をしたのはトレスだからね。」

その覚悟をさせてくれたのは、背中を押ししてくれたのはコアだといふのに、彼女は心から私にトレスだからといった。誰もがコアがこのアカンサスを救ったと語ったとしても、コアはそれを認めないような声だった。

「こんなに貧しくなった国を豊かにするのはこの国に生きる全ての生き物だけだね。誰よりも人に頭を下げて、この国の全てを他の何よりも優先して守る道をトレスは選んだ。だから。」

すっ、と幼い少女は私にその澄んだ瞳を見せて言った。

「もう大丈夫。光は降ってるよ。皆にとって、トレスは何よりの光なんだから。」

私にとってコアがホワイトホープであるように、私を支えてくれる者にとって私が光の粒となれている。

コアのその言葉にじわりと胸の内が熱くなった。

「学園から通知が来ていると……聞いた。」

それはコアに一通の手紙が届いた時からずっと胸の中、物凄い速度で大きくなっていく不安だった。

コアが私のそばからいなくなってしまうと思った瞬間、突然恐怖を感じた。

「知ってたの？」

「セルスが教えてくれたんだ。コアは、この国の専属マスターではないから仕方ない。」

セルスはコアが専属マスターになる気がないことも教えてくれた。心のどこかできつと私はコアに甘えていたのだ。コアならこの国が本当に平和な国になるまで、ずっと私のそばにいて助けてくれるのではないかと、期待していた。

けれどそれと同じくらいに、こんなところに納まっているほど小さな存在ではないことも分かっていた。

「私はコアが思っているほど、強くはない。それに・・・そんな覚悟だつて本当はあるのかどうか、分からない。怖くてたまらないんだ。未だに一人では何も決断できない愚かな私が、本当にこの国を平和へ導くことなどできるのか。踏み外してしまいそうで怖い。期待に応えられない愚王と呼ばれる王になってしまふ。」

コアがいなければ、私は何もできやしないのだとよく分かっているから。

正しい決断をするために、コアにそばにいてほしい。私が道を違えたとき、あの力強い瞳で私を引き戻してほしい。何にも揺るがぬその強さが、私には欠けているから、コアが必要なのだ。

そう私はずっとコアが帰る日を怯えていた。

「強くないのかもしれない。けれどトレスはトレスが思っているよりもずっと、弱くない。

それに私だつてトレスが思っているほど強くない。私もいつも怖いんだ。

その一瞬の判断がどれほどの後悔を生むのかつて考えて、本当にこれでもいいのかつて。」

コアがそつと空を仰いだ。紺色の空を、白いドラゴンが気持ちよさそうに泳いでいる。

コアにも怖いことがあるのか、と私は私の中にいるコアに問いかけた。

ドラゴンに投げられる石の前に飛び出していくコアにも恐怖があるのか。

あのドラゴンを嫌う村のなかにたった一人で入っていくコアにも、不安があるのか。

私の中のコアはいつだって自分の信じる道をただひたすらに突き進む、果敢な少女なのに。

「だけど私が迷うたびに、ルキアがそつと寄り添ってくれる。セルスやリラが、省長官やお父さんが、私の中で生きるおじいちゃんが、私のそばで導くんじゃなくて、ただ寄り添ってくれる。

ああでもない、こうでもないってちゃんと私が結論を出せるようにどこにいても、不安になっても。

だからって間違えないわけじゃないけど。迷った時はいつも心の中で思うの。

それは皆に胸を張って考え抜いた答えだと、思い返してもやっぱりその時一番だと思った理由があると、言えるかなって。」

「その時一番だと思った理由……。」

「ここにきて、ルキアはたくさん傷ついた。私、すごく後悔してるよ。契約さえしなければって思うくらい、ルキアを傷つけてしまったこと後悔してる。だけど今思い返しても、私はやっぱりアカンサスへ来たと思う。大切な人がいるからルキアがいるからたくさん悩んだけど、大切な人がいるからルキアがいるからここへ来ることを決めたんだ。」

争いの真つただ中、両親も友人もない私は感じなかった怖さをコ

アは感じてなおここへ来た。

「いつか誰かを守りたいけど、守らなきゃならない時は待つてくれないことを私は知ってたから。

無力であることの怖さをいつかじゃなくて、今ちゃんと受け止めなくちゃならないと思った。

今でもそれは変わらないんだよ。ルキアがいて、セルスがいて、私の背中を無理にでも押ししてくれる人もいた。だから今がその時なんだと思ったの。今行かなきゃ、きつといつまでも私はその恐怖から逃げ続けてしまっと思って思った。」

コアは強い。

恐れることを弱さにせず、逃げることを弱さにする。

彼女は恐れてもなお立ち向かう強さを知っている。

「トレスが怖いのだって当たり前なんだよ。何万人何千人の命を背負うんだから、怖くて当たり前。

けどどちゃんと選んだじゃない。トレスは逃げないことを選んだんだよ?」

「それは・・・コアがいたから。」

「あの時はそうだったかもしれないけど、今は金銀軍のヴァンさんやシーザさんがいるじゃない。それにこれから先トレスはたくさんの人に出会うよ。その人たちはきつとトレスの支えになって寄り添ってくれる。それでいいんだよ。怖いなかを歩いていくときに、トレスに出会った人がきつと小さな灯りになってくれる。」

ばさっ、と大きく羽ばたく音がして、夜の訪れた空からルキアが舞い降りた。

そこに風が生まれ、コアと私の金の髪を揺らしてかけていく。

「怖いのは当たり前って言うてくれたの、そういえばルキアだったよね。」

『何の話ですか？』

「アカンサスへ来るのを迷ってたときの話。」

ああ、とルキアが青い目を細めて相槌を打つ。ふわりと笑いあう二人がとても綺麗で私は言葉を失くして見惚れていた。いいなあ、と思ってしまうのだ。

絶対という存在のそばにいられることが、羨ましくて仕方ない。

私はもうすぐコアと離れ離れになってしまう。けれどルキアは、決してコアから離れることなどないのだから。

「ルキアは千年の時をかけて、契約したのよね。」

『はい。どうかしましたか？』

「その気持ちがよくわかる。」

千年という時よりも、きつとコアと過ごす一秒がずっと幸せでたまらない。そんな表情をするルキアにコアも優しく笑い返し、そっと抱きしめる。

もしも私がドラゴンだったなら、私はきつとコアを求めるだろう。

彼女が私を呼ばずそばに飛んでいくだろう。そう思うこの心はもしかすると、嫉妬かもしれないと思わず笑ってしまった。

『私のマスターですから。』

それに気づいたのかルキアが私に笑いかける。

「ああ。私もいつか、そう思える人と出会っただろうか。」

「トレス、ドラゴンマスターになるの？」

コアは自分のことだとも知らずに、目を輝かせてそう言った。

「いや、けれど。時をかけて誓える人が、できるといふ未来を描いてもいいかもしれない。」

ヴァンもシーザも、他の高官たちも、私に誓ってくれたのだ。

その誓いに相応しい王になる。そうずっと思いつめていたけれど、もしかするとそこへ連れて行ってくれるのは私に誓ってくれた彼らかもしれない。

恐れの中を歩む力を、彼らは私に与えてくれる。コアだけではなく、この国の本当の幸福を願うものが私を王たる王へ向かう力をきつと。

「そうか。」

コアはこの時を待っていたのだろう。

「もう、いい。」

コアばかりに助けを求める私が、私の両手をしっかりと握っていてくれる多くの者がいることに気づくその時を。誓ってくれた者のために強くならねばと思いつながら不安になり、コアに寄りかかるばかりの私を、誓ってくれた者たちが私を王へと歩ませてくれる。

「え？」

「私はもう大丈夫だ。光が降らずとも、私にはたくさん光がある。だからきつと、私は歩けるよ。」

夜が訪れた城下にぽつりぽつりと小さな灯りがとまり始めた。

トリミアに光が降らなくとも、人はそれを嘆くのではなく、光降る街を取り戻そうと励んでいる。

優しい灯りたちが傍にいるならばそれだけで、恐れの中を歩いて行ける。

そう、城下のトリミアが光を放つように。

「私は光になる。私に光がある限り。」

私がそういうと私の隣で、伝説のマスターズが顔を見合わせ、二人はそっと私を見つめると小さくうなずいた。白い羽を揺らす夜風に別れの匂いがした。

けれどももう、大丈夫。

そう思う私に、遠くのほうからシーザとヴァンの声がそっと聞こえていた。

第118話 トレス(後書き)

長いですね…

第119話　：コア

女王直筆の文をそつと握りしめ、私はアカンサスのずっと遠くまで見渡せる小高い丘の上に立っていた。

緑のうつすらと見え始めた土地に雨の季節がくるまであと少しを残して、私は今日この地を去る。

恵みの雨が川を生み、緑をはぐくむその姿を見てみたかった。雨の季節の向こうにある、豊作の宴を私も祝いたかった。

けれどももう、私はこの地から足を放して空を舞うことができる。

“私は光になる。私に光がある限り。”

そういったトレスの目にはもう、迷いも不安もなかった。

そこに映るのは小さいけれどしっかりと輝く光たち。

その光が彼女をきつと支えて、この国を元通りに、いや、それ以上に導くだろう。

『名残惜しいですか。』

バサツと翼を揺らしてルキアが言った。

「少し。」

ふふっ、と笑うとルキアも目を細めて微笑み返す。

「生きている、そんな気持ちを噛みしめてるの。」

ふっと風が過ぎてゆくその感覚も、鼻先に香る少し湿った雨の匂いも、始まりを描く緑の音も、すべてを今この体に焼き付けておこう

と思った。

忘れたくない思いがある。

忘れてはならないことがある。

「一つの椅子のために多くの命が奪われたこと。多くの心が傷つけられたこと。私は絶対に、ううん。私だけじゃない。この世界の誰ひとりだって、忘れてはいけない。けれどきつとそれは無理なことだから。私だけは忘れずにいたい。

息を吸って、息を吐いて、ルキアに笑いかけるその一瞬さえ私は大切にしなければいけない。

生きてたくて生きてたくて仕方なかったはずの奪われた命たちの代わりに、私は精一杯で生きなければならぬ。

決して忘れてはならないそのことを、私はふと忘れそうになる。

辛いことがあると、この世界にいられる喜びを忘れてしまう。

哀しいことがあると、生きていることを悔やんでしまう。

「この目に、この体に、焼き付けておかなくちや。」

ここでたくさんの人が死んだということ。

ここでこれからたくさんの命が生きていくということ。

『きつと忘れてしまうことのほうが楽なのに、貴女はそれをしないのですね、コア。』

「私だけじゃないよ。皆忘れたいけれど忘れられないし、それに忘れようとしているのじゃなく、乗り越えようとしているじゃない。

痛みを抱えて生きることが、痛みを捨てて生きるよりずっと苦しいと分かっている誰も、誰一人としてそれを捨てようとはしない。私はそんな彼らにたくさんのことを教わった。」

トレスが王座についた時、人々の内から溢れるのはただ生きるということだった。

これからも、ただ、生きていこうとする命がそこにはあった。

「私はいつも教えてもらってばかりだなあ。」

『私もです。』

「おじいちゃんには程遠いや。」

『伝説はそんなに簡単ではありませんよ、コア。』

「それもそうだね。」

おじいちゃんならもっとたくさんの命を救えていたと思う。

おじいちゃんならもっとトレスの力になって支えてあげられたと思う。

それでもおじいちゃんはもう、この世界にはいない。

けれど私はこの世界で生きている。

「目指すべき場所がぶれないのは、そこがあまりにも遠いからなのかなあ。」

ほど遠くにちらりと揺れるばかりのそれは、私の中で決して見失うことのない光だ。

伝説のマスターになるという夢は、どこへいっても、何を感じても、揺れることがない。

『たとえそうだとして、コアのなすべきことが変わるわけではないでしょう?』

「ルキア。」

『貴女はただいつも通り、一歩ずつ歩いてゆけばいいのだから。』

「そうだね。」

そうだったね。

誰かがただ懸命に生きるように、私はただ懸命に生きて歩けばいい。

『また忙しい日々の始まりです。』

「そうだね。っていうか、私たちに忙しくない日々なんて今まで一度もなかったけどね！」

『それもそうですね。』

ルキアがおかしそうに笑って空を見上げた。

「また、戻って来よう。ここに。」

私たちにたくさんのことを教えてくれた人々が懸命に生きるこの国に。

『ええ。』

希望を捨てることのないこの国に、私はまた戻ってくる。

私を抱きしめてくれたたくさんの方を今度は私が抱きしめられるようになつて。

第119話　：コア（後書き）

東日本大震災で被災された方々に、そしてお亡くなりになられた方々に深い哀悼の意を表します。

一日でも早く被災された方々に心から笑える日が訪れますように。地震が起こる以前に投稿させていたいただいた118話で書きましたトリミアのように、今の日本にも光が降らずとも自ら光を灯していく命の力があると思います。それを絶やすことのないよう、世界中の命が一丸となって乗り越えられると信じています。

第120話　：リラ

ただいま。

そればかりだった。

夕焼けぞらにぽつんと浮かぶ白い粒が次第に大きくなっていくのが見えた時、私は呼吸をするのも忘れてしまうほどその光に似た白く清いドラゴンを目に焼き付けた。

舞い降りるその姿はあまりにも堂々としていて、ドラゴンの王ではないかとさえ思った。

そして地に着けた竜の青い眼が私をじつとのぞきこみ、そっと逸らされると一つ声が響いた。

青い目の先に先からこぼれるその声は、私がかいたくて会いたくて会いたくてならない彼女、コアの声だった。

「ただいま。」

生きていた。

その声を聞いた瞬間、涙がこぼれた。

そしてその笑顔がのぞき、私へ向かってなげられると同時に私の足はそこへと駆けだしていた。

「コア…っ、コアっ、コア！…！」

会いたくて、抱きしめたくて、こんなところまでやって来た。

彼女が今戦っている場所がどんな場所か知りたくて、彼女の立っている場所から見えるものを見たくて、そして何より、生きているという確信を得たくて私はここへ来た。

そっとな手をのばせば消えてしまうのではないかと思った。

何度も夢に見たこの瞬間、いつも手を伸ばして触れたと思ったたんとコアはさっさと空気の中に溶けて消える。あの夢をまた見ているのではないかと手を引っこめて、足を止める。

「リラ。」

ふわり、と真っ白のマントが風に揺れた。

小さな腕にぎゅうと抱きしめられる。

懐かしい匂いと優しい温度に私はゆっくりと抱きしめ返した。

どうかこれが夢でありませんように。

嘘でありませんように。

「ただいま、リラ。」

そう願って開いた眼の中にコアの笑顔がぱつと映り込んだ。

「……っ……おかえり。」

きつくもう一度抱きしめなおす。

もう二度と離したくない。そう思いながら小さな少女を腕の中に閉じ込めようとしているみたいに腕がコアを締め付ける。

それでもコアはそれよりもきつく私を抱きしめた。

小さな腕いっぱい私を抱きしめて、息を吐いた。

「ただいま。」

そっと夕暮れの涼しい風がその声をどこかへ乗せて流れた。

知っているわ、ずっと一緒にいたのだから。

諦めるように受け入れるように、私は心の中でつぶやいた。

コアはまたすぐに私の腕を飛び立つ。

おとなしくなんてしてくれない。

目指す場所へと真っ直ぐに何度も何度も羽ばたいて。

それがコアなのだ。だから私はいつだって思う。

「貴女の帰る場所でいられてよかった。」

きつとすぐにいつてらっしやいを言わなくちゃならないのしょうっ？
けれど必ずまた、ただいまと言って帰ってきてくれるのでしょうか？

なら、私はずっとあなたを待っているわ。

「リラ。ただいまを言わせてくれてありがとう。」

貴女がたくさんの想いと恐怖を抱いて出かけるのだから、私は不安と戦いながら待ちつづける。

「私、もっと強くなるわ。コアをいつだって待っていていられるくらい強く。」

貴女が伝説のドラゴンマスターを目指すなら、その伝説のマスターズを待っていていられるだけの強き心と力を持てるドラゴンマスターになってみせる。

セルスが目指すのは大切な人を守る者。

ロンが目指すのは誰にも負けぬ者。

私が目指すのは待ち続けられる者。

それぞれの道が今開け、また新たな旅立ちの風が吹く。

「私、アルファアルベータに行くよ。」

コアのまっすぐな声がその風に乗って空へ飛び立った。

迷いのない、力強い眼が私に向けられる。

待っていてくれる？そう問っているようにもみえた。

「いつてらっしゃい、コア。待っているわ。」

ずっと。

今までそうであったように、これからも。

貴女が空を飛び続ける限り、私は貴女の大切な場所を守り続けて待っているから。

第121話 : コア

学力試験合格者は推薦書を持つ受験者の五分の一にも満たなかった。その試験を通り、二次試験の技能ではそこからさらに三分の一にまで減らされた。

そして三次試験は、その試験に残ったもの同士が五人ずつのグループを作り、与えられた課題をこなすという内容だった。

マスターズスクールから推薦書を書いて貰うために必要だった実施訓練を終え、学力試験の勉強に半年をかけ、技能試験の高度な魔法使用とルキアとの共同課題をこなすために半年をかけて、ようやく三次試験にたどり着いたのは、アカンサスを旅立ってから一年を少し過ぎたころだった。

「一時はどうなることかと思った。」

「何？」

「アカンサスから帰ったばかりのころはあの学力の低さに俺は……」

明日、ついにアルファルベータへ発つ私と最後のお別れをするためだろうか。セルスはプーシャ国の国家竜騎士となり忙しいのに、わざわざ私に会いに来てくれた。

そして夜風が心地よく吹くなか、私にそんなことを言って笑いかける。

「無事合格したよ。」

「ああ。」

「とつても勉強したんだから。きっと今はセルスより頭いいんじゃないかな？」

半年、私には時間がなかった。半年でセルスよりも多くのことを学ばなければならぬ。

それは私にとって危機としうるものだった。

「かもな。」

「けどセルスはどんどん遠くに行っちゃうね。」

私は足踏みをしているような気がして、毎日必死に勉強した。

先へ先へと歩いていくセルスの背に、寂しさと同時悔しさを感じる自分もいた。

けれどその寂しさや悔しさよりも、私の中にある弱さへの恐怖が私を必死にさせた。

命を奪うことのできる力を、命を守るために使いたいと思ったから。

傷つけることなく誰かを守れるだけ、強くなりたいと思ったから。

ならなくちゃいけないから。

「遠くか……。お前はいつも俺の背中を見ているようで、本当は。」

「本当は？」

「……その向こうのもっと先を見ている気がする。そしてすぐにそこへ飛んで行ってしまおう。」

セルスはそう言って、そっと私から目をそらした。

彼の目の先には夜の中にぼつぼつと光る街の灯りがあった。

アカンサスにも灯る小さな光が、当たり前のようにプーシャの中の小さな街にも灯っていた。

アカンサスへ行く前の私なら、その光が当然のようにそこにあることがいかに大切なことかなんてわからなかった。

闇の中に浮かぶその小さな光の粒達がなぜ綺麗なのか、ようやく分かった。

当然のようにそこに光があることがどれほど大事なことなのか、望んで初めて知った。

そしてその光を守ることの難しさと大切さを、守りたいと願って初めて知った。

「アルファルベータってね、おじいちゃんの母校なの。」

「え？」

コントゼフィール学院、アルファルベータ学院、オーガドリス学院。この世界の三大マスターズスクール。

セルスはコントゼフィールに通っていた。お父さんもそこに。けれど私はコントゼフィールでもなく、オーガドリスでもなく、おじいちゃんの通っていたアルファルベータに行きたいと思った。

「セルスが、コントゼフィールに行くってなったときね。私はそこにはいけないと思った。」

「どうして。」

「私が白竜と契約したマスターだからという理由で私を選ぶあの学校には、私の学びたいことはないと思ったの。オーガドリスもそう。あのとき、アルファルベータだけが私に何も言ってこなかった。」

今でもよく覚えている。

セルスが私と学院のどちらをとるか悩んでくれたこと。

私も声をかけられたけれど、迷うことなく道を選べたこと。

「アルファルベータの学院長がね、試験会場で私のことをじっと見てたの。」

青い目だった。

ルキアに似た澄んでいて気高くて、美しい。

「その眼は私に、“自分の足でここまで上がってきなさい。”って
言ってる気がしたんだ。」

一歩ずつでも、転んでも、足踏みしても。

自分の力でしっかり、自分の居場所を見つけてそこへ向かいなさい。
そう、言われた気がした。

「おじいちゃんはきつと、あの学院で大切なことをたくさん学んだ
と思う。私は…おじいちゃんの伝説を継ぐのじゃなくて超えたいか
ら。おじいちゃんが何を学んだのか知って、私も学びたい。」

私はセルスの背中を追いかけてる。

だけどセルスの言った通り、その向こうにある背中もずっと追いか
ける。

「お前はいつも結局、何にも迷うことなく真っ直ぐだな。」

「そう、かな。」

「ああ。その眼の強さが、フェウスさんによく似ている。」

セルスは少し悲しそうに笑った。

お父さんは世界へ戻り、また世界一のマスターズの椅子に座った。
けれどまだ、誰とも闘っていないのだと聞いている。

「手合わせをお願いしても、いつも断られる。」

「手合わせも？」

「ああ。“すまないが、闘えない。私を待ち続けていたやつがいる

んだ。あいつとの勝負を終えたら必ず受けるから、もう少し待つてくれないか。”って。」

お父さんを待ち続けていた人。

「フェウスさんがトップの座にいたとき、ずっと敵視し闘いを挑んでは負けていたやつがいるらしい。そいつはフェウスさんが姿を消した後、ずっとトップの座を守り続けていたんだと。他のやつが座ることのないように、その座を狙うものをかたっぱしから負かしてだから、待つてほしいって。」

それで。

それでセルスはこんなにも悲しそうなのか。

「焦らなくてもいいんだよ。」

「え？」

「例え私がセルスの向こうを見ていたとしても、そこへ飛んで行つたとしても。お父さんがセルスより別の何かを優先しても。セルスは今できることをすればいいだけなんだよ。それは何も変わらないはずだから。」

私だつて迷うし、私だつて足踏みする。

それはきつと、私やセルスだけじゃなくて。

おじいちゃんやお父さんだつてそうだったと思う。

「今できること。……、そうだな。お前の名がまたアルファルベータの中で響き渡る日まで、俺はお前の友として相応しい男になつていようか。」

ため息のように笑い声のように、そつと優しく低いセルスの声が夜

風にのって響いた。

「真っ直ぐな分だけ、間違えることだってあるんだよ。だけど間違えそうになったとき、セルスや皆が私を正しい道へと戻してくれる。」

セルスの声がいつだって、私を先へ進ませ、私に多くを気付かせる。

「だからセルスは私にとっても必要な人。」

違えないでほしい。

誰もが自分を必要としていないんじゃないか、なんて。違えないでほしい。

「いつだって、人は人を必要としている。私にとって、セルスが必要なように。」

きっとセルスにとって私が必要なように。

「ああ。…ありがとう。」

セルスが笑った。

「行って来い。俺の手に届かないくらいはるか遠くまで。」

「うん。」

そしてきつと帰ってくる。

大好きな貴方のもとへ。

第122話　ルキア

コアはアカンサスから帰ってきて、より迷いなくただ闇をぬぐうためではなく光をつかむためにまつすぐ望む高みへと向かっていった。おじいさんへの罪悪感ではない彼女の意思が強く、彼女の中にあつた。

「どうしても、入りたい。あそこで、おじいちゃんが学んできた場所でも学びたい。」

毎日のように強い瞳で空の向こうを見つめていたコアはようやく、三次試験まで残った。

私はそのコアの瞳が好きで、惹きつけられて止まなかった。しかしそれと同時に、何ともわからない不安があるのを感じていた。

努力の分だけ、人は結果を求める。
それは当然のことだと私にもわかる。
努力が報われなかったときの恐ろしさを抱えながら、人は努力する。
その姿はあまりにも輝かしく、目を奪われる。

「たった一か月だよ。」

コアの声が真つ直ぐに私に届く。

『ええ。たった、そう。分かってはいるのです。』

コアに与えられた課題は一月ドラゴンと離れて、グループの中で生活すること。

その間別の学科試験なども行われる。

そして勝ち残ったグループの中から3名のみ、最終選考へと進めるのだ。

それは想像以上に厳しい道なのかもしれない。

狭き門をくぐった先にあるのは、挑戦権ではない。

試されて試されて試されて、彼女はあの場所へと向かう。

その一步を違えることのないように、私は信じて待つしかできない。

「次会う時は最終選考だよ。」

嬉しそうにコアが笑った。

『ええ、きつと。』

彼女がうれしいことは私もうれしい。いつだって、そうなのだ。それはなんら変わらないことなのだ。それでも。

「ね、ルキア。」

『はい、コア。』

シン、と静まる空気が一瞬ひどく揺れた気がした。

「遠くに行くってというのは、声が届かなくなるってことだよね。」

『ええ。』

「泣いても聞こえないってことだよね。」

『そうね。』

「一緒に楽しいことも、悲しいことも感じられない。」

いつだって一番近くにいたのは私だ。

コアのそばにいる権利を、時と引き換えに手に入れた。彼女を愛し、彼女に愛され、ともに生きることが契約によって許された。

コアの笑顔が消えて、その目には大粒の涙が浮かび上がる。

「なんのための、試験なのかな。」

試されて、試されて、試されて。

彼女は望んだ場所へ向かう。

「ルキアと離れることで、得られるものって何か・・・わからなくなる。」

『コア。』

同じことを、そう。私も考えていたとはいえなかった。

こういうときの彼女は脆い。誰もが強いと、私でさえそう思う彼女の脆さを私は大切に守って生きたい。

そういう道を望んで、彼女を背に乗せた。

コアが望む道を迷うことなく歩けるなら、私は虚空の強さを広げたい。

『きつと見つかるわ。』

コアと離れていることで得られるものなどあるとは思えないけれど、それでもコアが望むあの場所へ向かうことを、私は心から望んでいる。

だからそのための嘘なら平気でつくことができる。

「ルキアの声が聞こえないなんて。」

コアの声は震えているのに、決して何にも妨げられることなく私に届いた。

「ルキアが泣いているときにそばにいられるのは、私だけなのに。」

コアが呼んでも、それが聞こえても、飛んでゆけないこと。

コアが泣いているとき、飛んでゆけないこと。

コアとともに生きられないこと。

私のなかですっと抱かれ隠された悲しみが、コアの声にそっと溶け出した気がした。

『・・・そう、ね。コア。』

私は彼女の脆さを守って、強くある覚悟をしてきたのに。

「ルキアが泣いたとき、誰がそばにいてあげられるの・・・？」

いつだってそうだ。

『コア。』

あなたは強く、優しい。

その脆ささえも、人を包み込むほどに。

努力が報われないかもしれない不安からではない。

自分の涙が私に届かないことを嘆くのではない。

自分の喜びと悲しみを伝えるためではない。

自分の涙はきつと自分でぬぐってしまう貴女は、私の涙をぬぐえないことを嘆いてくれるのね。

私のすべてを感じようと、私の見ているものをちゃんとみようと貴女はいつもそうだったのに。

『きつと、大丈夫。』

嘘なんてつかせてくれない。

『私のマスター。時を捧げて、選んだ主。コア、貴女は私のマスターだから。』

きつと、大丈夫。

声が聞こえないくらい遠くにいても、涙がぬぐえなくても、コアとなら。

心がつながる。契約に縛ることをしない彼女と、そつと優しく強く。

「ルキア。」

名を呼んで、また笑ってくれる日がすぐに来るから。

『コア。』

その日を待っているくらい、きつと大丈夫。

第123話　：コア

五人グループの中の一人に真つ黒な服を着た女性、ユークがいた。綺麗な人だがその目はどこか冷たさを感じさせた。

「コアさん。」

「え？」

「またぼうとしていらしたわ。私と一緒にはそんなにつまらない？」

学科試験の後、私と同じグループのフォルンが私をお昼に誘ってくれた。

彼女は貴族のお嬢様だ。一つ一つの仕草がしなやかでそれはどこか、幼いころのセルスを思わせた。

そのフォルンは起こるときもやわらかい。

「ごめん！ちょっと考え事してて・・・。」

私が申し訳なさそうに言うと、膨らましていた頬をそつと元に戻して優しく笑った。

「ドラゴンのこと？」

「うん。」

黒のユークはそう、ルキアに似ていた。

昔の、出会ったころのルキアの目と同じ。

「そういえばさっき耳にしたのだけど、今年は伝説のマスターも受けているそうよ、この試験。」

びくん、と心臓がはねた。

伝説のマスターときくと、思い浮かべるのは、あの優しいおじいちゃんの中で。

彼がこの試験を受けているはずはない、と一瞬で否定し、そしてその言葉の違いに気づく。

「伝説のマスターは死んだよ。」

私のせいで。

「え？ああ・・・、初代のマスターのことですわね。違うのよ、コア。二代目をつぐ伝説のマスターのこと。一度でいいから会ってみたいわね。きつと凛々しいお方なのよ。」

フォルンは目を輝かせ、ね？と私に微笑んだ。

その目に私が白竜のマスターですとは、とてもじゃないけどいえないかった。

「おーい、フォルン！コア！」

返事をし損ねた私の耳に響いたのは、のんびりとしたジャンの声だった。

ぽつちやりと丸いジャンは手をふってこっちへ歩いてきた。

「もうお昼はおわったかい？」

「ええ、今。ジャンさんはこれから？」

「いや、僕ももう満腹さ。」

ほら、とお茶目に膨らんだおなかを見せる。

私より少し年上のフォルンよりも一回りほど年上のジャンは今年で

七度目の受験だそうで、今年だめならもうあきらめると漏らしたことがあった。

「コアは細いなあ！ちゃんと食べているのかい？」

おおらかで優しいげなジャンはやわらかい手で私の腕をつかんだ。

「食べてるよ。ね、フォルン！！」

「ええ。今日もスープ、二桁はおかわりなさっていたもの。」

フォルンが笑いながらさういって、ジャンはにっこりと笑顔を見せ、よし！といった。

「最近の若い子はみんな食べないからなあ。フォルンもユークももっと食べなきゃ。」

「そつえばユークさんはきちんとお食事をとっていらっしやるのかしら。」

「え？」

「あー。ユークはいつも食堂に来たがらないからなあ。誘っても首を振るだけだし。」

「ユークさんって不思議な方よね。」

私は彼女について何も知らない。

今度ご飯に誘ってみようと考えながら、ふと思った。

「まだお声をおききしたことはありませんもの。」

フォルンの言葉に私とジャンは顔を見合わせたのだった。

第124話　：ユーク

よるなバケモノ

その夜、私は昔の夢を見た。

声が聞こえる、私を呼ぶ声がある。

そういうと母と父は私に怯えた目を向けた。そして村の者は皆、私をバケモノだと言った。

村のどこへ行っても誰も私と口をきく者はいなかった。

そこに、彼が来た。

「一人ぼっちか、おじょうちゃん。」

傍らに白く大きな鳥のような獣をつれて、私に話しかけてきたのは、もう顔もよく覚えていないが優しい声の老人だった。

私がこくと頷くと、そつと歯を見せて私の隣に腰を掛けると彼は言った。

「一人ぼっちはいかん。」

彼の大きなガサガサの手が私の頬を撫でる。

ひんやりと冷たいのに、優しい手だと思った。

「一人ぼっちでいると、心が乾いてしまう。」

心などとうに乾いていた。私を生んで育てる父母でさえ、私を恐れるのだ。

生きていることがまるでいけないような気さえした。

「私と話すとおかしくなるよ。皆そう言ってる。」
「ほう？皆が、か。」

ただ、声が聞こえるからそう言ったただけなのに。

人はたったそれだけのことで、自分とは違うというだけで、簡単に人を遠ざけてしまえる。

だったらいっそ、もう誰とも関わらずに生きていけばいい。

「あいにくわしは昔から人と同じに生きるのが好かんのでな。」

面倒臭そうな声だった。

「え？」

「人とは皆、おかしな生き物じゃの。」

老父は優しい目をそっと大きな鳥に向けていった。

「……けど、私…声が聞こえるんだよ。皆は聞こえないのに、私だけ。」

毎日、ずっと私を呼んでる声がある。

「ほう。それがおかしい理由か？」

「おかしいよ、そんなの！」

違うの？

貴方には違うと否定できるだけの理由があるの？

私はきつとそう訴えていたのだらう。彼はそれを読み切って、答えた。

「面白くもなんともないの、そんなこと。」

「なっ！」

「その声を大切に待っているといい。いつか出会っじやろう。」

お嬢ちゃんの心を埋めてくれる、大切な友であり、パートナーとなるドラゴンに。」

ドラゴン。

老父は傍らに寄せるその白く大きな鳥をドラゴンと呼ぶことを教えてくれた。

ドラゴンは契約により時を奪われ、マスターと共に空を飛ぶことを選ぶ生き物だということも。

そしてドラゴンは時に、心から名を呼ぶことがあるのだと。

それから数年後、私は一頭のドラゴンに出会った。

「サン。」

ドラゴンとは皆白色をしているのだと思っていたが、彼女は萌える若葉のような色をしていて、私は私の前に舞い降りた彼女に一瞬で心を奪われた。

触れると冷たく固いガサガサの皮膚が、なぜだか優しく感じられ、そこにあの老父の手を思い出した。

彼女と契約を交わし、私は空を知った。

サンは常に私に寄り添い、支え、励ましてくれた。

会いたい。

サンに、会いたい。

たった一月だと自分に言い聞かせ、この試験に臨んだ。
しかしその心は早くも崩れそうになっていた。
サンのいない私を試して、何になる。

毎日そう思えばかりで、日が経つにつれ食欲もうせ、ただ一日をぼんやりと過ごすだけになっていた。

そんな私をいつしか周りは避けはじめ、自然と私は一人だった。
同じグループの人間は何度か声をかけてくれたが、やはり私は一人を選んだ。

「あいつ、アカンサスの出らしいぞ。」

その決断が正しかったと思ったのは、その言葉を聞いた時だった。
結局どこへ行っても人はいくつでも理由を見つけて、人を隔てようとする。

それなら最初から一人でいるほうが、ずっと気楽だ。

そんなふうに一月、指折り数えてサンに会える日を待つばかり。
その時、彼女に出会うまでは、そう思っていた。

第125話　：コア

「あいつ、アカンサスの出らしいぞ。」

食堂前で話している私とフォルンとジャンから少し離れたところで誰かが言った。

アカンサスは今、国土を譲る代わりに他国に復興支援の協力を頼んでいる頼りない国だと言われていた。

それだけではなく、女も子供も関係なく殺す血の混じる国だと。他国からの評価は低く、並びに王座についた女王はまだ若く、武器はあらずというものも多い。

「あいつって四班のユークのことか？」

三人で話す男子の声が私の耳に響いてくる。

「ああ。あの黒くて気味の悪い女。」

「いかにもアカンサスのドラゴンマスターって感じだよな。」

甲高く響く笑い声が、穏やかな昼下がりの風を蹴散らしていく。

「ユークは悪い子じゃないよ、きっと。」

思わず私がそう小さく呟くと、隣にいたフォルンが少し困った顔で言った。

「え、でも……今のがもし本当なら、彼女はアカンサスの人ですよ?」

「フォルン？」

アカンサスのドラゴンマスターは、その多くが争いを好み、殺人鬼だと思われている。

その原因は先の王座を奪い合う戦いにより、アカンサスのドラゴンマスターは多くの命を奪ったからだ。

己の身と大切な人を守るためにとった行為だとも言えたが、それはあまりにも傲慢な理由にすぎなかった。

それでも彼ら全てを裁く技量が女王トレスにはあらず、多くがその罪から逃れた。

ユークがアカンサスのドラゴンマスターであるということは、彼女もまたその争いの中にいたかもしれないということなのだ。

「ユークさんと同じグループは私……。ねえ、コア。極力関わらない方法を考えましょう？」

それが彼女を恐れる理由にはなりえると思った。

「フォルン。」

それは何もフォルンや男達が悪いわけではない。

人とはそういうものなのだ。

私だって、赤竜のマスターに出会ったときは恐ろしさを感じずにはいられなかった。

自分と違う、それは自分にとって時に脅威になりえるのだ。

「私、人を殺したことがあるよ。」

おじいちゃんの命。

そして、赤竜とそのマスターの命。

「え……!?!?」

フォルンが驚きながら私を見た。

その横をフォルンの声にちらりとこちらに目をやって、すつと男達は通って行った。

その背中をそつと見つめながら、口を開いた。

「フォルンが怯えるべきは、アカンサスのマスターじゃなくて、命を奪うマスターじゃない?」

「そんな……コアさんが……そんなはず。」

「私は命を奪ったマスターだよ。」

フォルンはさらに困惑し、その隣でじつと聞いていたジャンも目を丸くして私を見た。

「アカンサスでは確かにたくさんさんの命が奪われていたし、たくさんの方が命を奪っていたけれど。」

私がアカンサスで出会ったのは、その多くの命を守るために自ら苦しい道を選べる人や、誰かのために痛みを耐える人や、哀しみを抱えながら人を許せる人だったから。」

どれほど他に批判されようとも、何より大切にすべき民を守り抜く女王。

傷だらけの裸足で地に立ち、小さな命を必死に守る幼い少女。

ドラゴンに大切な人を奪われた哀しみを抱え、なおドラゴンを美しいと言えるお婆さん。

「私はそんな理由でユークを避けることが、正しいことだとは思え

ないよ。」

フォルンやジャンがもしかしたら、私を避けるかもしれない。そんな恐れを私は確かに感じていた。

人に避けられることが平気なほど私は強くない。

ずっと仲良く笑っていたいという願いだって、もちろんあった。

それでも。

私が命を奪ったことを隠して生きていくことは、きっと許されないことだと思った。

「けれどコア……。」

そんな私をフォルンは心配そうな瞳でじっと見つめ、名を優しく呼んでくれる。

ジャンは何も言わずにただ、私とフォルンを優しく見つめてくれている。

「フォルンは優しい。ちゃんと私を見てくれる。私自身を見て、名を呼んでくれる。」

だからフォルンはきつとユーク自身を見てあげることができるよ。」
「でも……。」

人とは脆い生き物だから、己と異なるものを拒んでしまう。

「怖いと思うことを否定してるわけじゃないの。」

ただ外から見ているだけで決断していると、絶対にちがえてはならないことを違えてしまう。

たった一瞬の決断が、一生分の過ちを生むことだってあるの。」

神様は人間に眼と耳と手を与えてくださった。

己の目で見て、己の耳で聞いて、己の手で触れられるように。

「だから私はどれだけ難しくても、その人自身を見ていたい。いつか私がそうしてもらったように。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5271d/>

ドラゴンマスター

2011年12月11日20時47分発行